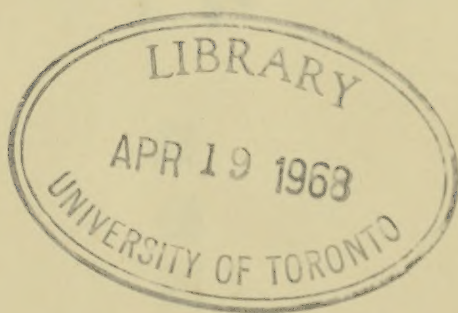




加賀藩史料

第拾四編

自天保元年
至天保九年



加賀藩史料第十四編

天保元年

正月朔日。前田齊泰在江戸なるを以て金澤城に於いて出仕の諸士年寄中に謁す。

〔諸事覺書〕

正月元日

一、出仕之面々大廣間に列居、年寄中等謁、年頭之御祝詞申上、四時退出之事。

一、年寄中等退出より御廣式〻罷出、御祝詞申上候事。

一、中將樣初方々樣御一門樣方へ年頭之御祝詞狀、四日出に江戸表〻差出候事。

正月十一日。幕府、前田齊泰がその夫人の分娩したる後歸國せんとの請を許す。

〔諸事留牒〕

正月廿三日

一、去十四日出十五日に延江戸狀到來、左之通石野雅樂助を以被仰出候由申來る。

姫君樣御懷姙に付、御初產之御事に候間、此儘御滯府、御安產之上無程御暇被仰出、御禮も被仰上御歸國被成度旨御願書、昨十一日御用番青山下野守殿江、御先手青山主稅之助殿を以御指出之處、同日夕聞番御呼立、可爲御願之通旨被仰渡、此段被仰聞候間、金澤表年寄中江も可被申遣被仰出候。

正月

正月十八日。皇女降誕するを以て前田齊泰奉祝の爲の使者を命ず。

この使者は金澤より發遣せられしなるべし

〔見聞袋群斗記〕

正月十八日、皇女御降誕に付、寺西藏人武功京都に御祝儀之御使被仰付、献上物有之。

正月廿七日。前田齊泰夫人水痘に罹る。

〔覺　書〕

二月八日

一、姫君樣去廿日夜より御熱氣被爲在候。廿七日朝御發物被爲見得候處、御醫者中追々相診、御水痘御治定御座候旨、廿八日青山四郎左衞門申聞付、拙者儀御住居へ罷越、土田勇左衞門殿

を以御機嫌相伺、御容躰御尋申候處、至而御順症に被爲在、上り方御平生与御替り茂不被遊旨等申聞御座候。此段爲御承知申進候。各にも以御紙面御機嫌御伺可被成候、以上。

〔諸事覺書〕

二月八日

一、姫君樣前月廿六日より御發熱被爲在候處、御醫師中診之上御水痘に御治定之由。至而御順症に被成御座候段江戶表より申來。依之伺御機嫌之儀等廻狀を以申來事。

二月廿五日

一、姫君樣御水痘段々御肥立、御酒湯被爲濟。依之御祝詞申上候。中將樣へも同事に御祝詞可申上旨、月番より演述有之事。

正月廿九日。大聖寺侯前田利之より銀子助成を申込みたるに付き議す。

〔覺書〕

一、鍛太郎樣御乘出に付て、從備後守樣御助成御願之趣等申進候處、御算奉等被遂御詮議候得者、御國ゟ御返納分共四百兩計之儀に候はゞ差繰出來可致哉。御郡代金御分借利足之分は是非御取立御座候樣及御達候に付、御僉議之趣去年十一月廿九日播磨守殿より御返書之趣致承知候。然處舊臘七日佐分儀兵衛罷出、御助成高等御在所往反之上重而御願之趣委曲申聞候

鍛太郎は備後守利之の子
御算奉は御算用場奉行

に付、達御聽、金澤ゟ可申遣段申達置、則委細申進置候事故、其御返書到來迄相扣置可申与御返書御覽にいれ、右之趣申上置候。御郡代金利足之儀舊臘之所は御願中之儀、迚阿方より御差出は出來不致御樣子に付、先御振替にて御上納相濟居候。然處前段重而御願之趣申進候に付て、舊臘廿四日之御返書春に至り到來、先達而御申越之通にて、外に御僉議之品も無御座旨御申越有之候。其表御僉議通にて者、御國之御返納金三百兩計故、御助成高は二百兩計に相當り候。御郡代金利足は二百九十一兩餘之處、先づ御振替に相成居候故、差引いたし候得者百兩計備後守樣より御指出可有御座趣に候得共、迚左樣之儀は出來難致躰に候。先達而之御返書に茂是非相濟不申儀に候はゞ、少分之增方之儀は於此表宜敷取計可申旨御申越候事故、御郡代金利足御振替之儘に而、今般百兩計御助成不進候而は治り申間敷哉と僉議中、儀兵衞罷越大炊ゟ逢、御助成金之儀如何之御樣子に候哉、備後守樣にも甚御心配被成候。先達ても申達候通、御調達金も全出來不致、其上追々御客向等御存外之御入用多相懸り候處、舊臘之處は此方樣へ御願之分を御引方に而漸に先づ御辨合に御座候故、只今之所に而何分御願通御許容不被成進ては、於備後守樣如何とも被成方無之候。此方樣御逼迫之內甚以御迷惑被成候得共、外に被成方も無御座故、無是非御願被成候。御願方通は何分難被爲成候はゞ、四百兩は是非々々御許容被進候樣仕度旨等、繰返段々申聞に付、此方樣御勝手振且差懸り過分

淡路守は富山侯前田利幹

之御物入等之儀も申入懸合候所、決句之所は先此度〻二百兩御助成被進、跡二百兩者御拜借成共御願被成度樣に申聞罷歸申候。御郡代金之儀は、去々年御手傳御用被蒙仰候節、御助成高御不足由に而御差支之趣、去春其表において儀兵衞等より大炊江申聞候趣も有之、舊臘之利足も是亦此方樣より御引取不進而者難相成事に心得罷在候躰にて、其外に前段金方御助成之儀申聞候儀に御座候。段々申聞候所にては、先二百兩計不被進ては相濟申間敷躰に付、會所奉行江御手繰方遂詮議候所、差支無之由申聞候得共、其表御詮議振と者餘程之增にも相成申儀。且此表に而取計方出來安き樣に儀兵衞等心得候而は、以後の障にも相成可申に付、御急ぎ之御樣子には候得共、重而儀兵衞相招、其表御詮議之趣等も委細申入、無御據御樣子故、御當用之內無理に引缺候はゞ出來不致と申に而も有間敷候得共、跡之御仕埋方も有之儀、金澤表引合不申ては相成兼候。併申遣候而も、外に詮議方も有之間敷候得共、猶更今一往示談におよび可申間、暫は御猶豫可有之旨等申入候處、得其意、備後守樣江も可申上旨申聞候。右等之趣に御座候間、今一往被遂御詮議、早速被仰越候樣に与存候。御郡代金之儀、當春も去春之通御借返は出來可申候得共、從備後守樣又利足金御差出無御座候樣に相成候而は御面倒之儀。且淡路守樣御分借金にも相響可申哉。旁其表御詮議之通、舊臘之處御取立有御座度趣に候得共、委細前段之譯にて、先御振替に相成候上之儀に候間、此儘に被成置、外に今般

二百兩御助成被進、以後之御郡代金は無間違御納御座候樣に与兼而申達置候方にも可然哉、

尚可被遂御詮議、右等之趣相達御聽申候、以上。

正月廿九日　　　　大炊等兩人　判

甲州等十一人樣

大炊は前田孝敬にて在江戸、甲州は長連愛にて在金澤

正月。從來年二回舊令を恪守すべしとの觸出を爲しゝを一回に改むべきことを定む。

〔江戸狀留書拔〕

正　月

一、前々被仰出候御定之趣無違失可相心得旨、每年二月・七月兩度宛相觸來候得共、萬端簡易被仰付候間、以後二月まで觸出、七月は指留候而も可然儀候得ば、當二月觸出候節、以來七月は觸出申間敷候間無違失樣申渡可然与遂示談候旨、達御聽置候事。

二月八日。本鄉邸に天滿宮を勸請して鎭守とす。

〔江戸每日書立書拔〕

二月八日

一、左之通以石野雅樂助被仰出。

此度地藏堂江天滿宮御勸請有之に付、是以後御鎭守与相稱可申旨被仰出候事。

二月

二月十一日。德川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。

〔諸事覺書〕

二月廿五日

一、當月十一日御使番山田佐渡守殿を以、御鷹之鶴御拜領被遊候段、同日出江戸表よりの狀今日到着、月番より廻狀有之事。

〔續德川實紀〕

二月十一日、使番山田佐渡守上使として、松平加賀守に御鷹の鶴をおくらせらる。

二月十一日。金銀貨の公定相場を廢し、銀子上納に金子を混ずることを禁ず。

〔觸留〕

先達而爲融通、金相場六十八匁之極直段を以、金銀入交當分諸上納を初通用之儀一統申渡置

文政十二年十二月十九日の條參照

候得共、當月十六日より右極直段指止、時相場を以可致通用候、尤銀上納之方江ハ、金子入交申儀茂指止可申候。

右之趣得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上、

二月十一日　　本多播磨守

二月十八日。前田齊泰夫人着帶の祝儀を行ふ。

〔江戸毎日書立〕

二月十六日

一、左之覺書御横目江渡、御近習之面々江も可申談旨申渡候事、

御横目江

姫君樣御懷妊に付、當十八日御着帶之御祝被爲在候。依之頭分以上江御祝之御吸物・御酒被下候條、前々之趣を以夫々可被申談候。

一、右御當日頭分以上熨斗目・布上下、平士以下服紗小袖・布上下着用之筈候條、是又可被申談候事。

二　月

二月。組頭に令し配下の加恩に關し出願催促すること勿らしむ。

〔御觸留〕

組頭江内々御達に而申聞候趣

諸士風俗等之儀に付、文化七年金龍院様より段々被仰出之趣有之、其節御褒美等願方之儀に付、被仰渡候趣も有之候處、當座暫者格別之願方も無之候所、近年諸向より組・支配等之人々御加恩等之願次第に人多に相成、中には先例之年限等を申立、强而相願候向も有之候得共、御賞美方之儀は仝年限等に拘り候儀にも無之、其者之勤方働き之様子に茂寄可申儀に候。今般猶又御詮議之趣も有之故、以後都而御加恩等も被仰付方、品に寄是迄之振合与は相違之儀も可有之候。且如當時願方度々催促之儀、御用多之時節抔別而互に繁雑成儀に候條、是等之趣兼而可有心得候。

右之趣相達御内聽に茂、内々申達候條、被得其意、諸頭等江茂無急度寄々可有演述候事。

寅　二　月

二月。實子を廢嫡し得べき年齢の制限を定む。

〔官私隨筆〕

天保元年左之通申渡有之也。

定番頭江

實子幼少虛弱等に而成立之程難計に付、弟等へ名跡被仰付候樣仕度旨末期內存相願置候人々、右實子十歳迄之者は願之通被聞召屆候儀近例も有之候。十一歳以上之者は例も無之儀に候間以來右願方心得も可有之儀に候。依之此段內證申聞候事。

寅　二　月

三月六日。前田利常の生母壽福院の二百回忌法會を金澤經王寺に營む。

〔官私隨筆〕

二月廿九日

一、壽福院樣二百回御忌御法事、來月六日於經王寺御執行有之候條、御當日一日諸殺生遠慮可仕候事。

但、同寺近邊に罷在候者は、御法事御執行之內、鳴物等自分に指扣可申候事。

右之趣一統可被申談候事。

二　月

三月十一日。更に向ふ五ケ年間增借知を命ず。

〔官私隨筆〕

一、今般增御借知等就被仰付候、別紙覺書等三通一結相越之候。且又與力へは其寄親より申

文政九年五月十七日の條參照、増借知の實施は十年よりなり

渡候筈に候、以上。

三月十一日

御勝手振御難澁至極に被爲在候處、其以來不時御物入打續、如何共被成方無之に付、文政九年御家中增御借知等、町・在へは御用銀被仰付、其外種々御仕法を以、指當御急迫之所は漸相辨來候へども、一昨年に至候而は、江戶・大坂御借財莫大至極におよび、取計方無之に付、兩所御借財御仕法も被仰付候。然處元來之御不足高多く、其上不時御物入打續候故、右御仕法之上にも一ヶ年出入、惣御圖り方之所に而年々過分之御不足に相成候に付、猶又萬事格別御省略被仰付候へども、夫而已にては中々行屆不申、此上御行詰りに而は最早一圓被成方無之、必定御公務も御指支、御政事も難相立、不輕御場合に至可申儀に候。依之拙者ども重々僉議之趣相達御聽、當寅年より末五ヶ年之間、改而別紙之通御借知被仰付候。且又右之通格別之御時節に付、頭分八百石以上之人々役料之內も御借上被成候。文政九年增御借知等被仰付候節、段々被仰渡置候御主意も有之候所、無間茂此度重而如此被仰付候儀、御意味合も如何に而、甚御心痛被思召候へども、前段之御勝手振に而、外御手段無之に付、不被得止事被仰付候儀に候條、前段之御主意一統會得いたし、何分心服を以御急迫之所御用立可申候。右之趣被得其意、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

付札、御横目江

今日頭分以上申談候趣、在江戸等之人々江者、同役又者筆頭代判人より可致傳達候。

一、御借知被仰付候趣、與力之人々江は寄親より申渡筈に候。

右之趣夫々可被申談候事。

御用之儀御座候條、今日四時過越後屋敷江可罷出旨、昨日御用番内膳殿依御紙面、則罷出候處、一役一人宛御呼立、別紙之通右御同人御渡被成候付、御横目所披見物共寫都合四通相廻申候。廻狀致二通候、以上。

三月十一日　　中村宗兵衛

同役中

三月廿八日。領内町・在に對し用銀の上納を命ず。

〔郡方御觸〕

御勝手向御難澁至極之處、近年不時御物入打續、御遣之手段茂無之候得共、種々御調達等を以漸御取續有之候處、段々御借詰莫大至極におよび、最早御手達茂難出來、無御據御借銀向都而御仕法有之候。依而者以來御調達茂出來兼候に付、猶又萬事格別御省略被仰付候得共、年々之御不足、幾重御詮議有之候而茂、御省略而已に而者御遣之道難相立、御公務御指支にも

可至、不輕御場合に付、不被得止事今般御家中增御借知被仰付候。然處元來之御不足高多故、右御借知迄に而者迚茂行屆不申候。依之町・在等に而一ヶ年千貫目宛、當年より五ヶ年之間御用立候樣有之度候。近年過分御用銀被仰付、下々一統難澁之時節に候得共、前段之御勝手振に而、外一圓被成方無之、此所何れ茂厚存込、精誠を盡し御急迫之處御用立可申候。御返濟之儀は、御勝手御運之道茂相立候はゞ、其節可遂詮議候。右御調達銀町・在等割符之儀者、御算用場奉行可被示合候事。

寅　三　月

一、五千貫目　　天保元年御領國御用銀惣高。但、五ヶ年に取立之事。

內

五十七貫八百七十七匁	能美郡
五百四十七貫四百八十六匁	石川郡
四百五十二貫八百四十九匁	河北郡
二百五十四貫百九十目	口郡
三百二十貫六百七十目	奥郡
四百七十三貫三百八十目	礪波郡

三百三十六貫百七十四匁　射水郡
二百九十二貫四百五十八匁　新川郡
〆二千七百三十五貫八十四匁
外千二百貫目　金澤　六十四貫九百十六匁　松任
八十三貫二百目　宮腰　百十五貫四百目　本吉
五十四貫九百目　湊　百四十二貫八百目　小松
百三十一貫八百目　石動等三ヶ所　五十六貫目　所口
六十六貫目　魚津　三百貫目　高岡
四十九貫九百目　遠所奉行

庚寅三月廿八日被仰渡。

〔ふぐ汁の咄〕

文政九年六月九日の條參照

文政十三年三月廿八日、纔三年を隔て又三州へ五千貫目之御用銀申渡、五ヶ年に上納致せと也。萬民只惡口のゝしる事難盡筆紙。爰において三民の心を深く損じたる事顯然たり。奸を行ふ事頻りとなる。商は日々の賣物に上げ銀を割り懸て、高利を貪る事甚し。御用金出さゞる商・工も、是が爲に諸色を上げ倍利を貪る。されば此度の御用金は、幾諸萬人之手より出る

御用金也と嘲る事街に區々也。去る藥種商賣之もの、日々之買物に五文・十文と高く賣て、此度の御用金をつぐのひ申旨。是等の事は商・工世を渡るの秘密事とて予に語りし事有り。惣躰御家中御借知もまし、昔よりなき御用金しばしば被命、御上御難澁は人皆知る所なれども、かく迄も御金入るまじ。是は一計略にて、此擧に乘じて當時なくても宜敷かねを御取上、御貯用被成置たるか。さすれば忩殘忍私の被成方とて、衆人嘲り惡口せり。人氣是より私をかまへたる事顯然也。御領國快く御用銀指上、御用辨其功大なりとて、御喜悅之命を千羽彥太夫が蒙りたりと云噂を人々聞傳て肝をつぶしぬ。

三月。前田齊泰歸國の際供奉する者の心得を告ぐ。

〔御參勤御供一件〕

當御歸國御道中御供人相雇候通人馬請方、別紙案文之通小札相調可被指出候。拙者共添印を以可有御請取候。

一、前々相觸候通、乘懸馬等貫目、御定より不重樣御心得可有之候。

一、通日用宿人足一人五貫目宛持之御定に候處、近年貫目重く、別而日用頭共より願之趣有之候條、御定より不重樣御心得可有之候。

一、御中休於御旅舘、末々之者共不作法之儀無之樣每歲相觸候通候條、猶更猥成儀無之樣嚴

重に御申渡可有之候。

一、越後山之下親不知廻り道等有之節、荷物多相集候節、末々之者共人足共に割し無理成仕方も有之躰に付、毎年相觸候通に候條、込合不申樣急度御申渡可有之候。

一、宿々において拂方等麁略無之樣、家來末々迄嚴重御申渡可有之候事。

寅　三　月

閏三月十一日。家中の人々祝儀に際し盲人ならざる婦女を雇ひて三絃を奏せしむるを禁ず。

〔毎日帳書拔〕

閏三月十一日

一、御家中之人々祝事之節、座頭・盲女相招候儀は、先達而御觸も有之、藝人之外は堅無用之段被仰渡置候處、近來目明之女三絃を以所々被雇候者流行之躰に付、堅不相成段等町奉行へ申渡。

閏三月十一日。華麗の衣服を纒ふ婦女を見咎むべきことを改方に命ず。

〔毎日帳書拔〕

閏三月十一日

一、女共花麗之衣服等を用ひ候躰に付見咎之儀改方へ申渡候事。

閏三月。言上紙面等の調方を簡易にすべきことを命ず。

〔雜事日記〕

付札、御横目ゟ

當時御住居向等御用多之上、追々方々樣御引移茂被爲在候に付、彌增諸向御用多端可爲繁雜候。依而言上紙面等初、惣而先振不拘、調方に至迄成丈簡易仕、御用辨專要に相心得、差略等之儀向々において詮議之趣、石野雅樂助等可相達旨被仰出候。

右之趣諸役人ゟ夫々可被申談候事。

閏　三　月

四月四日。金澤の僧觀了異法を勸むるを以て捕縛を議す。

〔本多政和覺書〕

四月四日

一、寺社奉行より以與力申聞候は、瑞泉寺等觸下礪波郡苗加村萬福寺等旦那之内、異成法義安心筋を授候者有之。則承糺候處、金澤備中町觀了と申僧彼邊へ參り授候由に付、異法之趣

相糺、追々及教導候處、何も致同心候、以來右等之習俗制不仕樣取締致候樣仕度旨、夫々書付差出候由にて、瑞泉寺等看坊添書附を以先刻及達候付、異法之樣承糺候處、宗意に無之ヶ條は、人に隠人に不申趣誓言を致、内佛は一本花、且頼む手を組せ助給へと爲申候儀等にて、邪法之樣相聞え申候、右之法小立野黒田喜左衛門寺中者之方にて親了より授申由、爲組寺等書付之内に有之候間、此者早速取〆置可然、若樣子を聞逃去候而は、御僉義之手懸りも無之候間、寺社奉行より盜賊改方へ申談、早速手當可仕哉、依て此段不取敢相達候由、猶指圖有之度旨申聞。

四月七日。野火を警むべき幕府の令を領内に傳ふ。

〔觸　留〕

諸國在々において、近年猥に野火附候者多有之候儀に付、從公儀相渡候御書附寫一通相越之候條、被得其意、組・支配幷與力且又家來末々迄可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

庚寅四月七日　　　　長　甲　斐　守

諸國在々において、近年猥に野火附候者多、諸人難儀之趣相聞候間、向後堅く野火附申間敷

候。若相背もの於有之者、早速召捕、吟味之上急度可申付候條、御料は御代官、私領は領主・地頭にて嚴敷遂穿鑿、野火附候もの見掛候はゞ、他領・他支配之無差別、踏込召捕、其最寄之奉行所又者共筋ゟ可差出候。

右之趣御料・私領・寺社領共不洩樣可被相觸候。

閏三月

四月十七日。加賀の惣年寄、冥加米・用銀の上納方に就き能登の惣年寄に協議す。

〔御用銀一件留書〕

一筆啓上仕候。薄暑相加申候處、先以各樣御安康御勤達被成奉珍重候。然者先達而得御意候御互身當り冥加指上米之儀、越中三郡とも段々示談之上、惣年寄之分は二十五石を以て五ヶ年に指上、一ヶ年五石宛之圖り、並中は一ヶ年三石宛に而五ヶ年十五石之圖りに御座候。其內能美郡に而は釜淸水、石川に而は鶴來、河北に而は杉瀨、此三人は誠に極難澁無祿に而、指上候族無之候得共、一圓難指上と申も心惡敷と申事に而、此人々は諸郡無類に而、五ヶ年に一人五石指上度之趣。且林喜兵衞之儀は、御承知之通累年の難澁、其上不慮之入用等押重り、御役所向御難題之筋も有之族、幷田井之事者近く之火災に而難事有之。此兩人は五ヶ年に一

人十石指上度趣に治定仕候。右惣躰指上米之儀、誠に少分名目迄之事にいたし候而は、上下之聞えも有之、却而如何に可有之と申示談に而、先づ御家中御借知之御米高を目當にいたし、惣年寄並之指上米取圖り申儀に御座候。此委曲書面にも難書解、猶其内貴面可申上候間、何れ右之趣御内々得御意申候。尤指上米高御取極之上は、諸郡引続、私共より御達申候様越中三郡より申來候。此儀も左様御承知、其御郡御用意御座候はゞ、御取極之上被仰越次第相心得可申候。

一、新田裁許・山廻り中之儀は、私共兩郡に而三人程指上候者御座候而、五ケ年に一人五石程指上度と申儀、其外は極難澁に而難指上人々に御座候。越中三郡は、右難澁之人々とても、一圓難指上と申も不宜躰に而、不殘指上候事に治定。其内身元可也之人々は五ケ年に一人五石程、難澁人者五ケ年に一人二石五斗宛指上候儀に御座候間、猶更其御郡御相談御治定候様御尤に奉存候。

一、手附之儀、先達而御用銀之内を以指上候様得御意候得共、是は別立にいたし可然と、越中三郡申來候に付、別上に仕候圖御座候。尤私共兩御郡に而七・八人計、一人百五十目程五ケ年に上候圖り御座候。越中三郡は棟取迄に而、外に上候手附は無之候。其内新川平右衛門儀、長右衛門一件過分損料懸り、是は上不申候。射水・となみ兩人は一人二百目計上候圖りに、右

御郡惣年寄中被申談候趣に御座候。私共御郡七・八人之者は、五ヶ年に一人百五十目宛指上度趣に御座候。右衆評之趣、重而得御意申度如斯に御座候、以上。

四月十七日

廣瀬又八郎

林　喜兵衞

高橋由五郎樣

北村覺右衞門樣

岡部七左衞門樣

追而御用銀之儀も御取極御治定に御座候哉。越中三郡は人別銀高取極、御奉行所へ御内達相濟、當廿日後より指上候人々へ被申談候旨に御座候。私共御郡も夫々取極御内達申上候間、追々可申談圖りに御座候。此儀も爲御心得申上候、以上。

四月。鳳至郡長順寺の門徒等法義相續に關する請書を觸頭に提出す。

〔御請書〕

今般於大坂表邪宗門之輩御仕置有之、夫々宿坊并組合寺迄嚴重に御咎被仰付候に付、公儀寺社御奉行所より別紙御書付に御奉書を御指添被爲在之、嚴重に被爲仰渡候趣奉得其意候。然ば御宗門請合之一札、御寺役第一之儀に而不輕御事に候得ば、乞請候節御精密御糺に預り、

其上頂戴可仕。將又公儀御嚴制之邪宗門に而は無之候得共、於御一宗に心得違候法義筋茂有之由粗被爲聞召、言語道斷に思召候御事。都而御手次之疎遠に打過候儀は、全御宗意御掟等心得違仕候心底より事發り候儀に候得ば、已後急度相改、御手次之御教導に隨、師且睦敷法義相續仕、萬端正路におもむき、公儀御苦勞筋に不相成樣、則治世之御國恩を奉報、能々勘辨仕候而、家內一統示合、佛法世法之趣具に相守可申旨被仰渡、奉畏候。依之此度人別御呼出有之、意得仕候趣奉申上候。已後宗旨請之御證文相願候節は不及申、時々御法義心得方御教育に預り、小事たり共御宗義に相背き候樣之儀急度相改可申。且又每月兩度之御講は不及申、御定有之佛參其外年忌・月忌等御大切に相勤、御寺御國法之御掟違失不仕樣相守可申候。此上萬一心得違御座候はゞ、御見聞次第幾重に茂可奉蒙御擲當候。依而御請上之申候、以上。

寅四月

鑓川村　兵衞
內保村　太郎兵衞
堀腰村　次郎兵衞
百成村　虎之助
地原村　新左衞門
二叉川村　七左衞門

本市村　孫三郎
高根尾村　長助
栃ノ木村　半兵衛
田村　佐門五郎
和田村　三郎右衛門
等連名

右之通遂吟味候處、相違無御座候。組合相見之上印形見屆、依而加奥書上之申候、以上。

長順寺

本誓寺

五月四日。前田慶寧江戸本郷邸に生まる。

〔諸事覺書〕

一、左之廻狀到來。

姬君樣當四日御安產、若子樣御誕生、益御機嫌能被遊御座候に付、當日發出早飛脚只今到來、別紙之通大炊等より申來候。且又四日出相延翌五日發出早飛脚着來。御母子樣益御機嫌能御肥立被遊候旨、是又別紙之通申來、先以恐悅御同意御座候。依之明十三日御廣式江罷出、方

別紙の記載を缺けり

々様江御祝詞御申上可被成候。且又右に付御示談之儀有之候條、明日不時御出席可被成候、以上。

五月十二日　　内膳

横山藏人等六人様

〔見聞袋群斗記〕

五月四日午之刻、於本鄕御邸溶姬君樣御平產、若子樣御誕生、御墓目御用は奧村丹後守爲實出府相勤。同日夕より御庭御幟相建、同日夕方從公邊御甲四頭・吹貫等見事なる御品御拜領有之なり。

〔恭敏公記史料〕

五月四日生于江戶本鄕邸。卽日將軍遣使賜菖蒲兜二頭吹貫一本。內大臣將軍夫人內府夫人各賜兜一添鮮魚。

五月四日。是日以降本鄕邸に幟を建て定府の士の家族等に觀覽することを許す。

〔文慶雜錄〕

五月四日

若子様御誕生に付同日より十一日迄御幟建、三御屋敷定府之面々家内幷御手役者家内・御用聞町人家内拜見被仰付。本郷筋は神田御祭禮よりは今一遍賑ひ候由。

公方様より一、御兜四頭・吹貫一本。但丸さ指渡し七尺、十二幅、長け一反下り、地合綾、大幅也。

淡路守様より　一、御兜二頭。

備後守様より　一、同　同斷。

大和守殿より　一、同　一頭。

此方様御分　一、同　二十八頭。

御旗六本大小。だし鶴片羽二間。軍配團扇幅九尺長け三間。砂金包九尺二間。

一、御兜一頭宛。丹後守・大炊より献上。

以　上

〔加藤順助書簡〕

五月二十日

一、當四日には御出產被爲遊、誠に若子様御誕生至而御輕く被爲在候旨、恐悅至極奉存候。

文政十一年十月十五日の條參照

直樣御本宅御廣式ゟ被爲移候旨に而、當十一日青山四郎左衞門殿御同頭被仰付候。御轎ゝ堂而御用意被仰付置、四日夕方より相建、六日迄三御屋敷定府家內之者共ゟ拜見被仰付、五日は雨天に而、六日は晴上り拜見人群集仕候に付、十一日迄日延被仰渡、御手役者并御用聞町人之內重立候者家內も拜見相願候由に而、御聞屆有之候處、七日より十日迄は晴間もなき位に降續き、十日夕方暫相建、十一日は曇り居候へ共晴候故群集仕、十二日にも拜見相成候と御作事方御門前迄夥敷參候へ共只歸り仕候由。扨又御幟だし鶴（兩羽懸て四間）・砂金包（幅二間）・軍配（長さ二間柄黒けし三間）御兜三十七、內四つ御本丸より、三つ御隣御兩家樣より、二つ御年寄衆より獻上之由、外に吹貫一つ御本丸より被遣候由。其外旗御紋附七八本御座候。御名も犬千代丸樣と被稱候段被仰渡候。

五月七日。風俗に關して文政十一年の令を恪守すべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

風俗之儀に付、御馬廻頭心付之趣申聞候儀共有之候所、是迄每度被仰出之趣申渡置、文政十一年には諸頭組・支配指引方心得之儀、別而申渡候趣も有之候處、中には其心懸薄き人々も有之哉に付、御馬廻頭へ遂詮議候趣有之、別紙寫之通御馬廻頭より定番頭等申介、諸頭へ申談候儀に致治定候。右寫爲御心得指進申候、以上。

五月七日　長甲斐守

奥村内膳様

風俗等之儀前々より毎度被仰出有之上、文政三年從金龍院様御ヶ條書を以段々被仰出、其後追々御教諭被爲在、且御當代に成候而も、文政七年以來委細被仰出有之候處、少程經候へば早相緩み可申躰に付、去々年十月段々被仰出之趣被仰渡、其節頭々等へ、組指引方無油斷相互に申談、御趣意通相整候樣可心懸旨、別紙寫之通分而被仰渡置候。右之趣意は一通り御觸渡迄に而は全く行屆兼候故、頭・支配人手前にて、心得違等致見聞候へば時々嚴重申示、其上にも不會得等之者は品に寄御年寄中へも御達可申、且他之組・支配之儀に而も、善惡之品及見聞候はゞ相互に心付、無油斷致指引候へば可行屆道理、頭・支配人相互に申談、見聞次第右之通取扱候はゞ、外々こらしめにも相成、追々可行屆儀故に候。いか程度々被仰渡候而も、頭・支配人に而も示し方薄く候はゞ無程立戾り候樣可成行、既に近頃又々相緩、去々年被仰出置候御趣意に違申儀共も有之躰相聞得候。其中盲人渡世之爲心祝等之節相招候儀被仰出置候處、近く目明に而三絃等を以致渡世候者を相招申向も有之躰に付、右目明に而三絃等を以世間致徘徊候儀爲致申間敷旨、町奉行中へ被仰渡、衣服花美等之者も有之に付、見咎方之儀澤田義門へ被仰渡候。前條被仰出之品間もなく相緩み申儀、畢竟頭・支配人示諭方不行屆故にも可

有之候間、猶又去々年被仰出置候趣を以、時々無油斷嚴重申合候樣相心得可申候、組・支配有之人々之儀は、別に萬端心得も可有之事に候、右之趣組・支配有之御面々江私共より及演述、彌油斷なく相互に申合遂指引可然旨、前月御用番播磨守殿被仰聞候事。

寅　五　月

五月十一日。前田慶寧の幼名を犬千代丸と稱す。

〔諸事覺書〕

五月十八日

姫君樣・若子樣御機嫌能御肥立、當十一日御七夜御祝儀首尾能御整、若子樣御名犬千代丸樣与被稱、右之趣頭分以上へ申聞候旨被仰出候段同日出申來。且御七夜の御祝儀上使を以御拜領物被得、別紙之通申來候段月番より廻狀有之。且又御弘之趣十九日被申聞、朝五時過登城、各御廣式へも罷出御祝詞申上候事。

御七夜之上使松平周防守殿御住居被勤。夫より御表へ内府樣・大納言樣御兼合牧野備前守殿被勤事。

中將樣江公方樣より卷物二十・二種一荷、内府樣より卷物十・二種、大納言樣より一種。

犬千代様𛀁公方様より御刀・御脇刺・御産着三重・白銀五十枚・二種。内府様より御脇指・御産着二重・二種。大納言様より綿十把・一種。
眞龍院様𛀁公方様より二種・一荷。內府様より一種・一荷。大納言様より一種。
〔恭敏公記史料〕
五月十一日賀誕辰後七日。將軍使老中松平周防守康任。賜裝刀備前康光金三十枚脇指越中國房金十五枚產衣三重白銀五十枚二種一荷。內大臣使老中牧野備前守忠精賜小脇指備後正家金十五枚產衣二襲二種一荷。大納言使忠精贈綿十把一種。將軍夫人使老女花町贈產衣二重二種一荷。內府夫人使園山贈產衣一重二種一荷。
〔續德川實紀〕
五月十一日、溶姬君平產七夜の御祝として、けさ松平周防守御使して、姬君に銀五十枚・綿五十把・三種二荷、出生に備前康光の御刀、越中國房の御さしぞへ、產衣三重・銀五十枚・二種一荷、松平加賀守に卷物二十・二種一荷、眞龍院殿に二種一荷をおくらせらる。加賀守おなじく使して、金馬代・綿二十把・二種一荷をたてまつる。また三家のかた〴〵、おなじく致仕、および北の方、おの〳〵使して鮮鯛をまゐらせらる。
五月十五日。前田齊泰登營して曩に德川家齊等の祝儀を贈れるを謝す。

一、十五日御禮御登城之處、御盃等御頂戴、委曲左之通以御書被仰下、二十三日到來、翌二十四日各御書拜戴不時出席、二十五日御弘。

猶以左之趣前田初丸・長又三郎江も可被申聞候、以上。

爲七夜御祝儀、去十一日上使松平周防守殿、從內府樣・大納言樣上使牧野備前守殿を以、手前幷犬千代丸等江品々拜領之。從御臺樣・御簾中樣、以女使同樣拜受物いたし、眞龍院殿江も拜領物被爲有之、且又奧村丹後守・前田大炊・青山將監拜領物被仰付。今日右爲御禮登城候處、於御黑書院御懇之蒙上意、御盃頂戴、從內府樣も御懇之蒙御諚、御手自御熨斗鮑致頂戴、重疊忝次第候。此等之趣爲可申聞如此候。頭分以上江も可被申聞候、謹言。

五月十五日　　中將御字御判

長甲斐守殿
横山山城守殿
本多播磨守殿
奧村內膳殿
横山藏人殿

前田織江殿
前田圖書殿
前田修理殿
成瀨掃部殿
前田內記殿
玉井勘解由殿

〔見聞袋群斗記〕
五月十五日御登城、御黑書院に於て御七夜の御嘉儀上使を以て御祝物を賜る御禮被仰上候處、御懇之上意ありて御盃を下され、御返盃せらる。御手自御肴を賜る。內府様よりも御諚ありて御手自熨斗蚫を下さる。

〔加藤順助書狀〕
十五日には御登城被爲在候由にて、同日御步並以上江御吸物・御酒・御赤飯・さき鯣被下候旨。御殿在合之足輕江は御酒・さき鯣・御赤飯被下候段被仰渡候。

〔續德川實紀〕
五月十五日、松平加賀守、溶姬君平產七夜御祝として賜物ありしを謝してまうのぼる。また

えたてまつり、御盃下され、内府御手つから熨斗鮑をつかはさる。

五月十六日。大聖寺侯前田利之就封の途金澤に宿す。

〔諸事覺書〕

五月十五日

一、備後守様當五日江戸表御發出、今晩今石動御泊、明日此表御止宿に付、前々通伺御機嫌罷出候筈之旨、同役中より廻狀有之、御供大野才記・田中周藏。

五月十九日。藩侯の不在中二之丸御殿にて一般に願屆書類を受附けさる前令を守るべきことを告ぐ。

〔諸事留牒〕

五月十九日

一、御留守中佳節・朔望其外不時登城有之節、於二御丸出仕斷等指懸り候品之外、書附等指出不申筈之旨、一統觸出有之候處、近頃は毎度二御丸に而願紙面等相達、表方にも被請取候様子に付、前月主付圖書より執筆を以、表方執筆迄爲相尋置候處、月番江も相達候旨に而、今日月番内膳より演述有之候は、御留守中二御丸に而達紙面等請取不申儀は是迄之通に候。乍

併同役寄合等、或は指急罷歸不申而は難相成譯有之人々は、其趣相達候付、無據譯有之候分は請取候。其外前々も觸れ候儀は無之候。且又越後屋敷𛀁も達紙面等、指懸り候分之外は四半時迄に可指出處、近頃遲刻に相成分も有之候付、右之趣今日御横目𛀁申渡、寄々諸役人𛀁申談候樣申渡候。此段も爲承知演述有之候事。右に付御家老方之分も、二御丸において以來は請取不申、無據譯有之候分は格別に候。且越後屋敷に而も、指懸り候御用之外は、四半時迄に請取候筈に遂示談候事。

五月廿八日。前田齊泰就封の暇を受く。

〔溫敬公記史料〕

五月二十八日。將軍遣松平伊豆守賜休暇。世子亦遣牧野備前守。

六月朔日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔續德川實紀〕

六月朔日、月次の賀例のごとし。松平加賀守就封のいとま下され、御鷹・馬をたまふ。

六月朔日。前田慶寧の生誕を祝し城下に盆正月を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

六月朔日・二日御城下町中爲恐悅盆正月、町々作り物・引山・やどり・狂言・にはか・祇園はやし、其繁昌は前代未聞、宮ノ腰を初遠所にも追々御祝申上候なり。

〔年々珍敷事留帳〕

一、五月姫君様に犬千代丸様御誕生被爲遊候に付、六月朔日・二日兩日町中盆正月被仰付候一町々々作物無之所は無く、色々様々盡善盡美、珍敷事致工夫、裏小路迄も相應之思ひ付にて作物等拵、誠前代未聞成事、昔より是程の事は極老之人も不聞傳段何も申、一兩日も過候所、作物番附品々賣に出る事。

〔謠曲萬壽抄〕

盆正月

ワキ次第 實に治れる北の國〳〵、作れる品ぞ目出度き。ワキ詞 抑是は當君に仕へ奉る臣下也。扨も此度賢君御誕生まし〳〵、今明日は盆正月なれば、町々の賑ひ大方ならず、急ぎ見て參れとの御諚を蒙り、只今かなたへと急候。道行 有難き御代にあふぎの末廣く、〳〵、七福神の船遊び、是を始めの旅心、喜見城下を打過ぎて、蓬萊山に着きにけり、〳〵。一セイ二人 曳山の芝居も著き船烏帽子、踊も千代の、はやしかな。ツレ 御幸にたてる牛車、冠ぞ加茂の競馬なる。シテサシ 面白や頃は五月の節會過、氷室のみつぎ殊に今、目出度きためしを鳥盡し、

十二ヶ月もまのあたり、一町の內に粧ひたり。下歌いざ〳〵氷賣らうよ、〳〵。上歌萬代と祝ふや今日の作り物、〳〵の、中にも御寶を納むる藏の鍵なれば、升々豐の御仕組、巣籠の鶴も今ぞ羽を熨斗三寶の氣色かな、〳〵。ワキ詞ふしぎや是なる夫婦を見れば、藁苞に青葉をおほひ、しかも群集の中に座して、往來の人に物を賣る。そも御身は如何なる者ぞ。シテさん候かゝる目出度御代ぞと仰ぎ參りたり。今日は水無月初の日、氷室の御調と思召せ。ツレ殊更けふは我が君の、御賀を拜する人々の、暑さをしばし忘れ水。シテ詞又は我等が壽命のため。二人彼是ともに時にあふ、藥と思召され候へ。ワキ實々是は理りなり。扨々向ひに群集するは、いか成事にて有るやらん。シテ詞あれこそ神功皇后の、三韓を治めし軍配の、其歸朝にてましますらめ。ワキ扨其の先に見えたるは。シテ詞是こそ御先三品也。ワキ能々聞けば有難や。今こそ君の御威光。シテ顯れけるか黑き男の。ワキ寶珠を引いて。シテワキ清正の太刀風に虎もなびくや錦帶の、〳〵、橋辨慶を見渡せば、實も治る時津風枝を鳴らさぬ鉢の木の、亂るゝ獅子も石橋に、千代を重ぬる姿かな〳〵。ワキ詞猶々御祝の謂れ委しく申候へ。クリ地夫盃正月といつぱ、文政の御代に當りて寅の年、水無月朔日・二日なり。シテサシ町家には皆その營みを忘れ、日々夜々の參會もひとへに君の御德なり。シテ洒飯を振舞ふ家もあり。是攝待の始とかや。クセ然るに此度の御祝異國にも、その沙汰ありや樂天も船を浮べて來り

たり。其の外梢に棲む鼯鼠、又は地をかける蟷螂まで來りて御賀をなすとかや。シテ ましてや北國は、和歌三神の國なれば、水にすむ白眼鯛、出世の鰤や大海老も、二見ヶ浦に歌をよむ、ためしは多く菊慈童の、不老ふしぎの我が大國ぞ目出度き。ロンギ地 實面白き物語り、扨や蟻のその内に、わきて目出度き有様はいかなることにあるやらん。二人 中々なれや其儀の、あるが中にも金時の畫こそ最上吉日、萬歳樂の大文字、シテ、ツレ 是等を初めかず／＼の、繪はよめども盡きぬ代の、唐織錦猩々緋、羅紗縮緬に至るなり。暫く待たせ給ふべし夜もすがら、提灯行燈を見せ申さんと養老は、王母を作ひかくれけり引船のかげにかくれけり。ワキ いざさらば此藤棚に假寢して、／＼、竹に虎臥す初夢に、祇園囃子ぞ有難き、／＼。後シテ 抑是は、不二の麓にすんで山を守る、氷室の神の、分身なり。同 あるひは深山の落葉をはこび、シテ 又は諸人に氷を與へ。同 汗をさめ、足を早めて廻れや、／＼、かずも數萬の作り物、遙に見ゆるは膳所の城、先づよせ來るは福助か、寶船松竹梅や尉と姥を、乘せてよせくる浦島に、打上げしもろ／＼の貝細工、法螺の貝まで皆祝言の聲をあげ、こなたは名にあふ四孝が孝心、竹に虎伏す野も住吉の、是までなりと牛天神は、鳥居に入らせ給ひければ、翁も三番叟も皆よろづ代と、諷ひかなでゝ歸りければ、夜はほの／＼と明方の空の、夜はほの／＼と日の出の鶴の、よはひをあふぐ扇かな。

六月三日。老臣等江戸に往來する際馳走人を出す諸藩に對し藩侯より禮狀を送る件を議す。

〔於江府每日書立并日記之內書拔〕

六月三日

御供之外年寄中等、此表往來之節、信州上田を初、城下等御馳走役人罷出候儀、前々より有之。其時々罷出候者江贈物は仕候へ共、其御領主等江分而御禮之沙汰無御座、着之上席江届候儀も無御座候。今般丹後守罷越候節も、所々において御馳走方役人罷出候付、贈物は仕候へ共、御領主江及御挨拶不申儀、失禮なるものに候間、何とか僉議可有之哉之旨申聞候付、御用人・聞番江も僉議仕候處、御馳走方は御上江被對候而之儀に可有御座候間、通行之者より御禮等には及間敷候旨申聞候。御上より御挨拶方之儀、去年甲斐守東海道通行罷歸候節、御領主方より御馳走有之に付、甲斐守より申越候趣有之、御用人より僉議仕候處、前々御上より左樣之御挨拶有之儀は無御座旨申聞、其御沙汰無御座候へ共、是迄左樣之儀、其時々御用處江も相知不申儀に候へば、僉議も有之間敷候。以後は御挨拶可被仰遣哉。其儀は御僉議次第之旨、御用人等申聞候。前々より御挨拶無御座濟來候儀に者候へ共、いづれよりも御挨拶之御沙汰無御座与申儀も、餘り如何成ものに御座候。若又其所之役人切之取計方に而、御領

主等より被仰付候樣之儀に而も無之哉、其程も難計に付、聞番より内々御先に承合候處、やはり上より被仰付候御馳走方之由に御座候。御家中之者他國において御世話に相成候儀等御座候節、其御領主ゟ御挨拶之儀は前々御座候間、無急度御挨拶御座候方可然旨申合、尚又松平豐後守殿等ゟ、左樣之儀も無御座哉与聞番より爲承合候處、別紙之通に而、御家老通行之節御馳走方は無之由に御座候。右之趣に御座候間、是迄濟來候儀には御座候へ共、以後無急度聞番奉札抔に而、御挨拶之趣申遣可然哉。左候へば着之上御馳走方之樣子席ゟ相達、時々御用人ゟ申渡相窺候樣仕、今般丹後守通行之節之儀者、歸着之上御馳走方之樣子爲書出、往來之分一集に御挨拶方之儀相伺候樣、御用人ゟ可申渡候。然時は前々分而被及御挨拶候儀も無御座候へ共、餘り御失禮成儀に付、今般被及御挨拶候趣も、無急度御用人迄申通可然奉存候。御家老中通行之節も、御馳走方有之候間、是又同樣相心得可申候。右之通僉議仕奉伺候。尚更被仰出次第奉心得候、以上。

六月三日　　　前田大炊

青山將監

別紙は略之。

右將監持參上之候處、翌日被返下、窺之通与被仰出。

六月十九日。金澤に於いて前田齊泰江戸出發の期を延べたることを通牒す。

〔官私隨筆〕

一、夜九時過左之廻狀來る。

姬君樣御安產之上無程御發駕可被遊處、御誕生に付御用向も有之、暫御發駕御延引被成候付、御用番へ御屆相濟候。依而來月廿八日御發駕、八月十一日此表御着可被遊旨御內定に候。此段被仰聞候由、池田保左衞門を以被仰出。御日限御內定と被仰出儀は、御發駕御延引御屆三十日程相立候へば、又重而何と歟被仰立御延引之儀御屆可有御座筈に候所、未重而御屆之所へ至不申故、只今之所は御內定と申趣に被仰出候儀に候旨、保左衞門致演述候段、大炊殿等より當十二日不時立早飛脚歩に傳附申來候付、爲御承知申進候、以上。

六月十九日　　　　横山山城守

七月三日。金子を銀子と共に通用することを許し、次いで之を止む。

〔本多政和覺書〕

一、此節世上銀支之躰に候。依之金相場兩に付六十七匁六分之極直段を以、當分諸上納等都

て金子入交無滯取遣可致候、且兩替商賣人金子賣買之節は、極直段之外定之口錢計請申筈候、
右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

七月三日　長甲斐守

〔本多政和覺書〕

一、左之通爲承知月番より來。

先達て爲融通、金相場六十七匁六分之極直段を以、金銀入交通用之儀一統申渡置候へ共、來月朔日より極直段指止、時相場を以可致通用候。尤銀上納方江金子入交候儀も指止可申候。且又此以後盆暮等銀支之節者、金相場極直段を以金銀入交通用方申渡候共、其時々一統相觸申間敷候。尤其節は御算用場・町會所之内承合、時々極直段圖りを以金銀入交上納之儀も不指支候。勿論其外通用無滯相心得可申候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

七月二十八日　長甲斐守

七月十二日。昨今兩日前田齊廣の七回忌法會を天德院に營む。

〔官私隨筆〕

六月十八日

一、金龍院様御七回忌御法事、來月十二日於天德院就御執行、御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、十日より十二日迄相止可申事。

一、鷹野其外諸殺生、且又鳴物之儀、十日より十二日迄三日可有遠慮候事。

一、普請作事之儀、十日より十二日迄指止可申候事。

但、指急候普請等之儀は不及遠慮候。

右之通被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

六月十八日　本多播磨守

七月十二日

一、六半時罷出候筈、少早く提灯なしに天德院へ罷越。但半上下也。

一、差定如左。

今月十一日金龍院殿御遷座御供養差定。

辰刻　献粥諷經

巳刻　水陸勝會　普門品經

午刻　拈香法語　本尊上供　献供諷經

今月十二日金龍院殿七回御忌御法事法用差定。

卯刻　轉讀般若
辰刻　献粥諷經　兩剎諷經
巳刻　鷹拔上堂
午刻　本尊上供　献供諷經　立塔佛事　救濟大赦
大施行會

〔見聞袋群斗記〕
七月十一日・十二日御法會於天德院御執行有之、金龍院樣御七回忌なり、同日御赦幷御施行米等御例の通なり。
〔溫敬公記史料〕
七月十二日。大赦。
〔溫敬公記史料〕

七月廿八日。前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。

〔溫敬公記史料〕
七月二十八日駕發江戸。八月十三日到金澤。前田大炊青山將監扈從。
〔官私隨筆〕
八月五日

一、中將樣益御機嫌能、前月廿八日午之上刻御發駕被遊候段藏人等より只今申來候由、今朝御用番より以廻狀申來る。

八月九日

一、右之後前月廿八日大宮驛、同廿九日熊谷驛、同晦日倉ヶ野驛、當朔日坂本驛、同二日碓氷峠無御滯御越、同日小諸驛、同三日矢代驛御止宿被遊候段、同驛より申來候旨、同八日に紙面到來。當四日筑摩・犀川無滯御越、同日野尻驛、同五日高田御止宿被遊候段申來候由、是又八日夜半後紙面到來。

一昨七日姫川幷山之下難所々々無御滯御越、七時過泊驛へ御着御止宿被遊、明後十一日朝六時之御供揃に而、津幡御發駕可被遊旨被仰出候段、和田權五郎より之早飛脚に傳附、大炊殿等より申來候段、今日御用番より紙面到來。

是月は大盡なり

七月晦日。俗人の法話を爲す爲集合することを禁ず。

〔御郡典〕

付札、御算用場奉行江

近年町・在之者、講等与名付、俗人等寄合、宗意法話に似寄候儀增長之躰に候。向後右樣之儀致間敷候。若心得違之者有之候はゞ、役人見咎可申事。

右之趣急度申渡候様、御郡奉行江被申渡、遠所町奉行等へも可申談候事

寅　七　月

右之通御算用場より被申渡候間、御承知被成、御郡々御申渡可被成候、尤先々御觸留より御返可被成候、以上

寅七月卅日

山森雄次郎

安田新兵衛

高木主税様

八月十一日。前田齊泰金澤城に着す。

〔宮私随筆〕

八月十一日

一、森下御發駕之附人四時過歟に來候由、津幡御發駕之附人は尤夫以前來候由、

一、大樋御發駕之附人四半時前頃來候付、甲斐守・丹後守・播磨守・初丸・又兵衛・又三郎橋爪迄罷出。但、山城守・伊勢守及御家老中等は御玄關へ被出。

一、四半時過益御機嫌能御着城、甲斐守等罷出居候所に而御馬留る。何も進み出候處御意有之、甲斐守御請被申上、重而御意有之、被爲入。

〔中川氏日記〕

八月十一日

一、前月廿八日午の上刻江戸御發駕、夜前津幡驛御止宿、今朝六時之御供揃に而右驛御發駕、森下御小休、四時前同所御發駕之御附人來、同刻過大樋ゟ御出之御附人來候に付、年寄中三ノ御丸ゟ被罷出。御城代山城守幷伊勢守・御家老中・若年寄中御式臺へ罷出、延之助殿同所御疊敷有之所ゟ御出懸被爲在、御機嫌能御着城。雁來坂ゟ被爲入候時分、外記儀板端ゟ進出罷在、山城守御表之方鏡板之端ゟ罷出有之、延之助殿階下ゟ御着座。山城守ゟ御意有之、次に延之助殿ゟ御挨拶有之。右之節外記致中座、御裏式臺之方へ伊勢守・圖書等罷出有之所に而御意有之、夫々御請申上。夫より階上御廣縁通り、芙蓉之間、御小書院横御廊下より御奥書院御緣頰通、蔦之間御廊下に眞龍院様・姬君様より之御附使者罷出候處に而御意有之。夫より御居間書院三之間迄致御先立、其所より山口清太夫致御先立候事。

八月十八日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

八月十八日。臨學校。

八月廿三日。猪・鹿・大犬徘徊の諸村に鐵炮筒藥の支給を命ず。

［諸事］

御算用場奉行江

拾斤　　鐵炮筒藥

但、石川郡西市瀬村等猪致徘徊候旨。

拾斤　　右同斷

但、河北郡朝ヶ屋村等鹿多致徘徊候旨。

三拾斤　　右同斷

但、同郡葝谷村等大犬致徘徊候旨。

右村々作物喰荒候に付、鐵炮に而爲追拂候間、筒藥相渡候樣御郡奉行等願之趣、各添紙面を以被指出候。依而願高之通承屆候條、御異風裁許中談請取候樣、右奉行へ可被申渡事。

八月廿三日掃部山崎頼母へ渡之。

八月。鷹司政通その女を前田慶寧に婚約せんことを求む。

天保二年正月十七日の條參照

［御親翰帳之書拔］

八　月

一、鷹司樣御內高橋兵部權大輔等より紙面を以、溶姬君樣御儀御男子御出生被爲在候に付、

関白は鷹司政通

右大將は鷹司輔凞

關白樣姬君樣昨年御出生之御方も被爲在候。往々御年頃にも被爲成候はゞ、何卒御緣組之儀被仰合度思召候。御重緣之御事、深御懇望思召候旨等申來候故、先入御覽、僉議之趣は追而可相伺旨申上候事。

右之趣眞龍院樣・姬君樣へ御相談被遊候所、何之思召も不被爲在、御一段之儀思召候旨等仰出之趣、同年十月廿三日に有之候事。

本文御內約御治定之趣高橋兵庫頭迄申遣候所、關白樣御始御大慶之趣申來候儀、十二月八日之所に有之候事。

右之以後彌右大將樣姬君樣御內約被遊度趣、天保二年正月被仰進候儀有之候事。

右之通之所、右大將樣之姬君樣御煩に付、同年二月兵庫頭等より申來候趣有之、同月十九日御答方申遣候儀有之候事。

右之姬君樣は御逝去に付、關白樣姬君樣を御內約被爲極候趣之御答方は、天保二年三月にあり。

九月朔日。前田齊泰、德川家齊より拜領したる物を老臣等に頒つ。

〔官私隨筆〕

八月晦日

一、明日御拜領之品御取分被下御樣子之旨、御用番より廻狀來る。

九月朔日

一、御居間書院へ被召候間、寄居候樣にと之事に付、甲斐守初何も、幷御家老中・若年寄中も寄居候處、追付御出、甲斐守・山城守・播磨守被罷出、其次丹後守罷出御禮仕、御敷居之内へ入、御左之方へ寄候而六尺計之所に座付候所へ、御表小將御廣蓋持參、御暇之節拜領之品をと御意、平伏仕、御廣蓋兩手を添頂戴、少直り候而、御拜領之品御取分拜領被仰付難有仕合奉存旨申上候。御廣蓋御小將引候上退去。其次初丸・又三郎一集に被罷出、其次伊勢守、其次御家老中・若年寄中一集被罷出、畢而被爲入。

九月三日。大坂より江戸に送附する仕送銀は自今金子を以てすべきことを告ぐ。

〔諸事留牒〕

九月三日

一、左之通會所奉行江申渡之事。

但、六日に申渡有之。

會所奉行江

此表は江戸

大坂より此表ゟ御仕送銀、是迄銀子を以御仕送いたし候付、爲替打銀多相懸りながら、請人御扶持方代之外金遣ひに付、金子御買上に而年々之御不益不少、請人とても右銀子に而金買上候付、迷惑之筋に可有之候。依而是以後右御扶持方代渡り之分、其時々三ヶ月平均相場を以金に直し可被相渡候。大坂より御仕送り之分、以來仝金子を以御仕送有之筈に候條、可被得其意候事。

寅　九　月

九月六日。前田齊泰郊外千日町口に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

九月六日

一、今日九時之御供揃に而千日町口御鷹野御出被遊、暮前御戻り被遊候。御拳に而鷺一つ御獲物有之事。

十五日は九月なり
御使は横山藏人

九月十五日。前田慶寧色直しの祝儀の爲徳川家齊等に物を献ず。

〔諸事留牒〕

一、明十五日犬千代丸様御色直に付、公方様・内府様・大納言様・御臺様・御簾中様ゟ御献上物有之、右御使相勤候様、以青山四郎左衛門犬千代丸様より被仰出、且右御献品々從御用人請

取、指副之聞番青地藏人江引渡、御目六は例之通祐筆より御城使御歩被相渡候事。

十五日

一、今日兩御丸江、犬千代丸様より御献上之御使相勤に付、六半時頃御小屋を出、のしめ・長上下に而、先御本丸江罷出、御献上物首尾能御奏者番江相渡候處、御家老中大久保加賀守殿可被遂披露之旨被仰聞。次に御留守居御年寄江、御臺様・御簾中様江之御目六相達、引取。夫より西御丸江罷出、内府様・大納言様江之御太刀・馬御献上、首尾能相達。猶委曲は別に相記す。

一、九半時過罷歸、直に於席以青山四郎左衞門犬千代丸様江、今日於兩御丸御献上物御使首尾能相勤候。御使書は追而可指上、先此段被仰上候様申談事。

一、今日左之通御使書、以青山四郎左衞門犬千代丸様江入御覽。

公方様

御太刀馬代	金一枚
綸紗	五卷
干鯛	一箱
御樽	一荷

御目錄

御臺樣

縐紗　五卷

干鯛　一箱

御樽　一荷

御目六

御簾中樣

縐紗　三卷

干鯛　一箱

御樽　一荷

御目六

右今般聞番青地藏人同道仕、御本丸江罷出、御品御步指添、中ノ口より指上、坊主衆江相渡、檜之御間江被上置、御目付衆江被相達候由被申聞候。私儀御大廣間溜に扣罷在候處、檜之御間江御用番大久保加賀守殿御出、御目付牧野中務殿御指引に而罷出、御太刀等御目錄御奏者番石川主殿殿江御渡申候處、加賀守殿江御達に付、今般犬千代丸樣御色直爲御祝儀、獻上仕候

段申達候處、可被遂披露旨加賀守殿被仰聞候。大御目付衆御列座被成候。御奉様ゟ御献上物、御簾中様ゟ御献上物御目六、同御間において、重而御留守居年寄曲淵甲斐守殿ゟ御請申達處、可申上旨御申聞被成候。御目付大澤主馬殿御出被成候。且御簾中様ゟ之御品物は、西御丸ゟ御歩指添相廻申候。

内府様

御太刀馬代	金一枚
綿紗	三卷
干鯛	一箱
御樽	一荷
御目六	

大納言様

御太刀馬代	金一枚
干鯛	一箱
御目六	

右今朝藏人同道仕、西御丸へ罷出、御品御歩指添、中ノ口より指上、坊主衆ゟ相渡、檜之御間

江被上置、御目付衆江相達候由被申聞候。私儀蘇鐵之御間に扣罷在候處、檜之御間江水野越前守殿御出、御目付竹内五郎左衞門殿御指引に而、御太刀等御目六、御奏者番水野壹岐守殿江御渡申候處、越前守殿江御達に付、退而重而罷出、大納言樣江御献上之御太刀御目六、壹岐守殿江御渡申候處、是又越前守殿江御達に付、今般犬千代丸樣御色直爲御祝儀献上仕候段申述候處、可被遂披露旨越前守殿被仰聞候。

御取持坊主衆等之儀は、藏人より言上可仕候、以上。

九月十五日　　　　　　　　　　　　横山藏人

九月十五日。德川家齊等、前田慶寧の色直を祝して物を贈る。

〔恭敏公記史料〕

九月十五日擧箸初及色直式。將軍遣女使。賜卷物十・一種一荷。內大臣一種一荷。將軍夫人卷物五・一種。內府夫人一種。

九月廿一日。前田齊泰夫人、產後初めて江戸城の廣式に登る。

〔諸事留牒〕

九月廿一日

一、今日御本丸江姬君樣御登城御供に付、六半時頃出席、五時前御供揃に付、御住居御式臺

御供は橫山藏人

前揃處𛀁能出有之候處、追付御輿に而御出に付、御先𛀁聞番青地藏人參り候直次𛀁引續罷出御供いたし候處、御門前に而五打御供いたし、平川御門より御本丸御廣式御式臺前に而御供聞番之次𛀁落し、御色代脇之口より上り候事。

一、御廣式二階𛀁誘引着座之上、添番荒井小源太挨拶被出。暫有之、御奥より可被下候由に而、御赤飯・御燒物・御にしめ・御香物頂戴。晝前に從公方樣御料理頂戴、二汁五菜外香之物に而、一向頂戴出來不申御料理也。次に御口取・御菓子、御同所樣より頂戴、暫有之、姬君樣御上り下之由に而御料理頂戴、御にしめ・御汁・御燒物等。次に御菓子御奥より頂戴、次に新御殿より被下候由に而、御吸物・向・鎌倉海老幷鮭の切魚・御酒頂戴。夕景御廣間より被下候由に而、又御膳出、御煮物・御汁等有之、其間に御廣式番之頭坂井十之助殿被出、挨拶も有之候事。

一、公方樣より紗綾三卷拜領。今般姬君樣御產後初而御登城に付、從御同所樣同三卷拜領被仰付、從御臺樣より同斷二卷拜領。御產後初而に付別段二卷拜領いたし、右御禮山本庄三郎殿迄申述置候事。

一、六半時之御いろめき、五半時頃御廣式御出、四時歸御。以土田勇左衞門殿恐悅申上、御機嫌も相伺候處、銀二枚拜領被仰付。卽席御同人𛀁御禮申述候事。

九月廿二日。見合札を有せずして犀川に漁撈を營むことを禁ず。

〔御家老方諸事留〕

別紙之通相觸候旨御横目申聞候條、可被得其意候、以上。

九月廿二日　　山崎庄兵衛

山崎小右衛門殿

付札、御横目江

犀川魚殺生請負人中村屋作兵衛与申者去年より相勤、川役銀致上納候付、前々之通投網・小目網・流網仕候者は、川師より見合札取請罷越候樣申渡、無札之者は右等之殺生不相成譯に候處、近くは無札之者多入込、請負人致迷惑候に付、見合札相渡度旨申達候得共聞揚不申者も有之躰に相聞え、右に付前々嚴敷相觸置候趣も有之候所、等閑之至に候。尤心得違之者於有之は、夫々相咎名前等承屆候樣、文政三年改方役人共江も申渡置候得共、猶又今般嚴敷見咎候樣改而申渡候條、向後右樣之族有之間敷候事。

九月

右之趣一統可被申談候事。

九月廿五日。前田齊泰、その子慶寧の誕生を祝して能を張行す。

〔官私隨筆〕

九月廿五日

一、今日犬千代丸樣御誕生・御色直等之御祝御能被仰付候付、拜見可被仰付旨被仰出候由、昨日御用番より以廻狀申來、可罷出處痛邪に而不參。依之御色直之御祝詞幷御禮共以紙面申上。

九月廿六日。賃馬を使用するものに錢を以て支拂ふべきことを命ず

〔諸事留〕

別紙之通諸頭中江申談候間、御支配幷御家來中江茂被仰渡候樣仕度奉存候事。

九月廿六日　　　　小堀八十太夫

當町賃馬持共は、近來手形通用、錢相場高直に相成、小指拂に而者引合兼、甚致難儀候に付、以來一場代錢五拾文宛之圖りを以請取度旨相願、其段御用番江相達候處、御聞屆に付、賃馬持共江申渡、馬代請取候時分以相對委曲申達、代錢に而請取候樣申渡、則當七月馬代請取候時分、右之趣申達候處、其通聞屆候人々も有之候得共、中には以相對申聞候而者難取揚旨にて、矢張小指にて相拂候分も有之、不同に相成候に付、以來一統同樣錢拂に引直候樣、一統江被仰渡候樣仕度旨、重而及御達候處、御聞屆候條、御一統江拙者共より右之趣及演述候樣、

小指は手形の小額なるものなるべし

被仰聞候間、御承知被成、御同役・御同席御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々、曁又家中等都而馬術稽古等いたし候人々江、不相洩相達候樣御申談可被成候。先々御廻達落着より御返可被成候、以上。

寅　九　月

十月二日。竹澤御殿を毀ちたる古材の利用に就いて議す。

〔御親翰帳之書拔〕

十月二日

一、竹澤御取疊之材木、御拂に相成候儀に伺相濟居候處、江戶表御居宅之御地面に、眞龍院樣御座所御普請可被仰付趣御內々被仰出有之。右に付右御取疊之材木之內船廻に而被遣、且又金谷御建物御修覆、延之助殿御移無之候而は被爲成間敷に付、江戶御廻之外は右御修覆之御手當に被成置可然旨等、僉議之趣有之候事。

十月五日。與力にして人持以上の家來給人との間に婚姻し又は養子を行はんとするものに諭す。

〔諸事留〕

與力人々、人持以上家來給人与縁組養子取遣候儀、不指支譯に候得共、給人之內に而も新に召抱候者抔、素性等に寄縁組等爲指扣申分も可有之候。尤寄親付等與力之儀は、其寄親に而穿鑿可有御座候得共、猶又私共手前に而も可致入念与遂僉義候に付、兼而御遣置候事。

十月五日　　前田式部

十月八日。前田齊泰瀧之間の講書を聽聞す。

〔諸事要用雜記〕

十月八日

一、瀧之間において講書に付御聽聞御出被遊候事。

十月十四日。三條西實動の使者來りて合力を求む。

〔御家老方諸事留〕

三條樣より御內々御賴之趣に付、御使者河村肥後守出府いたし、當十四日御用番宅江罷越御使相勤。其節從中納言樣之御書持參、御口上も有之、且御送り物有之に付、御目錄も持參いたし、御書幷御口上手控別紙寫之通に御座候。御品物は人々御使者之旅宿江請取人可指出、且御目錄は月番より可相渡旨に付、御留守御家來へ執筆共より申談、則御受取相濟申候。右に付各以紙面御禮申上、各樣には追而御禮可被申上旨申遣置候。將又此表より御書之御請茂

文政元年十月七日の條參照
文政八年三月九日及び九月十六日の條參照

申上候筈に御座候間、左樣御心得、御禮等御紙面被遣候樣にと存候。則御紙面下書兩通指進申候、以上。

十月廿日　　前田圖書

横山藏人樣

玉井勘解由樣

〔國事雜抄〕

文政十三年十月三條樣御內用御使者河村肥後守罷越候節指出候別紙寫。

御合力知並御扶助金之事

一、壽君御方　　御逝去

享保四年三月其砌三條大納言公福卿より、御合力知並御扶助金御斷被申入候事。

一、松雲院樣　　御上洛

享保五年四月十五日三條家へ被爲入候砌、尙更御合力知並御扶助金之儀永々可被進旨、故日向守江被仰渡、仍而同年より以前之通御贈進之事。

一、延享二年無據御事被爲在、其砌京都御間柄故、御一統へ御合力之儀御斷之事。

右之通御座候へ共、御扶助金之儀は、不被爲相替御贈進被遊候處、寶曆九年卯四月無御據御

儀被爲在候付、同年九月廿一日之御日附に而、奥村主水殿より御斷被仰出候旨、當書翰到來、其節御儉約被爲在御儀も五・七年と申儀、京都御詰人衆中より之御書面に御座候、右之通に候へば、三條家代々被相願度御時節を相待被居候內、今度三條家誠に無據次第に付、被相願候段御賢察可被下候、以上。

十一月六日。領外の者の漆掻として入國するを禁ず。

〔御郡典〕

御領國出來之漆、他國者江不爲掻取樣、前々申渡置候處、近年猥に相成、他國者入込、別而能美郡山々江は、流例之樣に而多分他國より漆掻候旨に而、御締方指障り候間、以來他國者一圓不入込樣嚴重可被申渡候、以上。

十一月六日　御算用場

御郡奉行中

十一月十一日。年寄中以下の夜間不明門を通行することを許す。

文政十二年十月十六日の條參照

〔中川氏日記〕

十一月十一日

一、年寄中・御家老中・若年寄、是迄不明之御門夜中往來無之候に付、今般詮議之上往來不指

支旨、割場奉行へ御城方より申渡候旨、不急度御城方執筆より席執筆迄申聞候に付承置候事。

十一月廿三日。前田齊泰夫人江戸城西ノ丸に登る。

〔覺書〕

十二月四日

一、姫君樣今廿三日五時早め之御供揃にて同刻過出御、西丸へ御登城、勘解由御供。天氣も宜、御途中何の御障無之、夜五半時歸御之旨等、藏人等紙面。

十一月廿三日。前田齊泰、瀧之間に於いて下村宗兵衞に書を講ぜしむ。

〔諸事要用雜記〕

十一月廿三日

一、今日瀧之御間講書に付、四時過芙蓉之御間ゟ御出御聽聞被遊候。講師下村宗兵衞。

十二月朔日。寺方當用銀の利子を低下すべきことを告ぐ。

〔御觸抜書〕

定番頭ゟ

別紙寫之通被得其意、組・支配不相洩樣一統可被申談候事。

十二月八日　　本多播磨守

寺社所當用銀之儀者、御寺方を初寺庵より、寺爲相續等之指出候付、一歩三之利足を以御家中等江貸付來候得共、前條之通祠堂銀同樣之銀子に付、今般段々詮議之上、寺庵江格別に申諭、當十二月より一歩立之利足に貸付、是迄貸付置候分者、來卯正月より一歩之利足取立候事に遂詮議候條、御達申候。右之趣夫々御觸渡御座候樣仕度奉存候、以上。

この利足は月利なり

十二月朔日　　品川左門

篠原監物

前田式部

本多播磨守樣

十二月三日。金澤の町民多數十間町千代屋久平の家に就き救恤を求む。

〔覺書〕

十二月四日

一、遠藤數馬以執筆申聞候は、昨日宵之内十間町千代屋久平方へ、男女大勢能越救吳候樣申聞候由、大勢の事ゆゑ騷敷、町肝煎へ相達制し候得共不聞入に付、町奉行江申聞、足輕等を

出し御しめしの處、漸く九時頃に退申候。其内名前知候者も有之候間、相糺可申哉、受指圖度旨申聞、其通に申渡。

一、地子町之者及難澁候付、其内身元宜者、寺町寺に於て粥施し申度申聞、志之儀候間雜々敷無之樣仕候樣申渡候。且町中小前之者至極及難澁候者は、昨日於町會所鳥目少々爲取候。此儀は外より聞受候事も可有之候間、申達置候旨申聞。前段之久平方ゟ罷越候者、誠に及飢命候樣之儀に而罷越候に而も無之旨申聞。

十二月五日

一、遠藤數馬以執筆申聞候は、一昨日千代屋久平方へ集候者、名前知候者夫々町預に申付候。右之外改方に而名前知候者、夫々町預に申渡候。右之者ども未糺は不仕候へ共、足輕共を以内々樣子承候處、誠に今日不過得者には無之由候。久平方へ罷越候ても、初之程は救吳可申与之事に付罷越候旨申聞、町役人等制候節は只救吳候樣申居候由も申聞。

〔覺　書〕

十二月九日

一、左之通御勝手方より演述。

一、堀孫左衞門申聞候は、米價高貴に付先達而より所々に張文致置候儀は、輕者難澁致に付

而之仕業与も相聞え不申。然處此間千代屋久平方江大勢相詰候儀も、全く小前之者ども困窮に及取救之儀相歎候儀迄に而者有之間敷与、内々私共並千羽彦太夫等樣子承り合候處、兼而相察居候通、米商方に拘り有之者兩三人棟取に而、小前之者共を進め込、虚説を巧み候仕業之樣に相聞え申候。尤町奉行中手前に者、夫々名前も相知れ、其內組預け等に申付置候者有之樣子に御座候。夫に付何も申合は、右樣之儀棟取不屆之者は、ゆるかせに成置候而者、此後又々如何樣之儀巧出、騷々敷儀仕出可申哉も難計。右棟取之者之內に者、是迄も每度禁牢等致候者も有之由候間、猶更町奉行中手前御聞糺之上、速に公事場へ御渡御吟味被仰付、不屆之儀相分り候上は、夫々嚴科に被處候はゞ、以後之懲めに相成可宜与內評仕候付、此段及御達候旨申聞候事。

一、御勝手方より演述之趣に付、町奉行江守要人呼出、余別席に而逢、久平方に集候樣子相尋候處、右集り候儀大体先日申聞候通り、右集り候者誠に小前之者今日過不得にて罷出候者は無之、石黒屋助作・岡屋彌兵衛兩人之者所爲にて、彼表米高成、商方にも損も立、其上輕き者難澁之躰に付、右之通致候由。岡田九郎兵衛与申者は、右兩人申聞候故面白き事之由申而已に而、自分より申候事にては無之由改方に而申顯候故、右改方に而は咎も不申付候。助作等兩人未直々不承候得ども、以役人承候處右之通之由申聞。右樣之者に付、締方爲にも永久

入牢も可申付被存候旨申聞。其外段々申聞候趣有之。但し兩人手前早速相糺、申聞候樣以執筆申渡す。

十二月五日。越中埴生八幡社の神祭に付き勸化の件を議す。

〔覺　書〕

十二月五日

一、埴生八幡千百歳御神祭に付、御家中等勸化之儀願置候得共、聞届無之處、重而取拔仕法講之儀願出候付、打返僉議之上、御郡之外相對勸化可聞届之旨、御算用場奉行へ遂詮議候處、今日右紙面指出、御郡方へ不立入儀に候得者指支候譯者無之候得共、御郡地之內にも町立候箇所有之候間、町分たり共御郡奉行支配へは一圓不立入樣仕度、別紙之通申聞候。再往僉議之上之儀候間、御郡奉行支配地之外相對勸化之儀聞届有之候而も可然奉存候旨紙面、郡奉行紙面も出す。

十二月六日。前田齊泰、先に金澤分間繪圖成るを以て遠藤數馬等に賞詞を傳へしむ。

〔溫敬公御日記〕

有澤才右衞門諱は師貞

十二月六日

一、遠藤數馬・有澤才右衞門儀、先頃金澤圖出來に付、御意可申述哉之旨、善右衞門申聞、其通与申出候。

十二月七日。幕府より前田齊泰に與へたる寒氣見舞の奉書金澤に着す。

〔官私隨筆〕

十二月七日

一、寒氣御尋之宿繼御奉書今朝六半時頃到來之旨、御用番より廻狀來る。

〔覺　書〕

十二月七日

一、宿繼御奉書を以寒氣御尋、忝御仕合思召候。御奉書は後刻拜見可被仰付旨以善右衞門被仰出、先以恐悅奉存候。拜見可被仰付旨難有仕合奉存候旨應申上。

一、御奉書以清太夫被渡下、何茂拜見可仕旨演述に付、各・御家老中・又三郞・八郞右衞門於席一同に拜見、畢而若年寄中相招拜見申談、恐悅被申聞、濟各於席一列以保左衞門、宿繼御奉書を以寒氣御尋恐悅之至奉存候。私共拜見被仰付難有仕合奉存候旨、座上甲斐守より申上、御奉書自分より返上。

この文は豫選なるべし

十二月八日。金澤城瀧之間に於ける月並講釋に新井周藏孟子を講ず。

〔覺　書〕

十二月八日

一、月並講釋。於瀧之間新井周藏講孟子公孫丑上篇。組頭物頭聽聞。

十二月八日。三州地理志稿成るを以て前田齊泰に呈す。

〔溫敬公御日記〕

十二月八日

一、先達而より取懸居候三州地理志稿与申寫本、全出來指出候事。

十二月廿四日

一、先達而一先見せ候三州地理志稿与申寫本、表題等夫々出來、今日指出、箱申付、重而可指上旨保左衛門申聞。

〔溫敬公記史料〕

十二月七日。加越能三州地理志稿成。

〔上加能越三州地理志表〕

夫惟。辨地理正封疆者。國家之大典也。故書有禹貢。史有河渠書。倶論天下之地理水路矣。

今公は前田齊廣なるべし

謹按本朝之古昔。二神自創立八洲以往。屢經沿革。至天平年間風土記成矣。然厄於兵燹殘缺僅存焉。所以爲憾也。近世河永之徒。選五畿内輿地通志。然不及其他。近來尾張常陸志等相次而出焉。我藩自古未有此擧。臣居常歎之。嚮奉太梁公之命。撰三州之地圖稿成。再奉今公之命。地圖繕寫功畢。名曰三州細密繪圖。然至如古今之沿革及山川邑里神廟佛刹橋梁名産古蹟池塘之興廢。非地志不能詳其所由來。故恭蒙命撰地理志。乃閲六國史及群籍。數經年序既已卒業。仰備高覽。不任戰慄之至。謹以聞。

十二月十日。金澤分間繪圖製作を助けたる人々の賞與に就いて議す。

〔覺　書〕

十二月十日

山口清太夫等以執筆申聞候は、金澤御繪圖先達而より遠藤數馬等へ被仰付置候處、去々年夫々出來指上、各樣へも拜見被仰付、御承知之通御座候。其後書繼等被仰付候處、此間夫々出來指上候。乍併屋敷など人々名前も調無之故、御覽被遊候而も御分り不被遊、夫々屋敷等相調候樣數馬へ被仰出候。夫に付先達而より右御用方ね相勤候者、御用相濟候間何茂品能被仰付候樣、數馬等より相願申候間、及御示談候旨にて、右紙面五通。猶口上にも申聞候は、此内西村太冲事は、去々年御加恩之儀御達申候處、不殘相濟候上被仰付可然御演述に付、其通

相心得居申候。今般品能御沙汰御座候樣仕度候旨。村田良助、此者は書繪共に宜相調、書入等御用も宜出來候間、組替被仰付候樣仕度由。三角風藏、此者足輕に而御座候間、小頭に被仰付候樣仕度由。

右に付十八日に申入候趣有之。

甲州家來河野久太郎、又兵衞家來日下理兵衞、藤田平兵衞家來清水宇八郎、何茂陪臣に御座候。格別子孫にも殘り候程御沙汰御座候樣仕度御座候旨、數馬等申聞候。左候ば御紋付にても可被下候得共、是も如何敷もの。被召出候儀も結構過可申候旨。玉井勘解由家來早川權兵衞、是は當時御用は相勤不申候へ共、當夏迄入情相勤候間、同樣御詮議御座候樣仕度段。清水宇八郎之儀、先達而才右衞門より申聞、御內用方に被召出候儀及御示談候處、不可然旨仰に付相扣申候。其節は定番御步に被召抱候樣相願候へ共、今般者御細工者に被召出候樣仕度候。遠藤數馬家來手塚七郎、此者も久太郎同樣御用相勤居申候間、身分相應品能被仰付候樣仕度旨。

〔御在國覺書〕

十二月廿四日

一、先達而治太夫等より示談有之候御繪圖方之人々之內、西村太冲等は追而皆相濟候上、被

及御沙汰可然、久太郎等は今度左之通可然と奉存候旨。

白銀二十枚　河野久太郎
染物　二端　日下理兵衛
染物　二反　早川理兵衛
小判十五兩　清水宇八郎
小判　三兩　手塚七郎

右廿五日に、久太郎等被下方過分に相見候間、十五枚被下可然。早川理兵衛は先達而御斷申上候節、被下方相濟候間、此度は及申間敷。宇八郎は十兩可然候。宇八郎被召出候儀、追而与申儀無之方宜敷被存候。追而は追而之詮議にて可有之、只今之處は御雇にて可然段等以勘六申入。

十二月十一日。徳川家齊の前田齊泰に贈れる鷹金澤に着す。

〔中川氏日記〕

十二月十五日

一、當十一日到着之御拜領之御鷹二居共据出候に付、九時御入之節、御居間書院へ御着座。此時御鷹匠小頭依田十郎左衛門・內藤林右衛門布上下着用据出、御頂戴被遊御意有之。其節

伺公之若年寄平兵衞、御鷹御頂戴被遊恐悦奉存旨御請申上、被爲入候事。

但、御表江御出被遊候頃、御鷹二据共蔦之間入口之邊江寄置、[割注]据人より御鷹匠小頭請取、据罷在候事。

十二月十一日。金子を銀子と共に通用することを許す。

〔覺　書〕

十二月十一日

一、此節世上金子は相應に有之候へ共、銀丈に而融通方指支の体相聞え申候。依而金相場兩に付六十八匁之極直段を以、當分金銀入交致通用候樣申渡候。且又兩替之商賣人金子賣買之節は、極直段之外定之口錢爲請取可申候。

右之通御達申置候事。

寅十二月　　　　御算用場奉行

十二月十六日。幕府の閣老加賀藩の聞番を召して改元の行はれたることを告ぐ。

〔諸事留牒〕

改元のことは十二月十日に行はる。

十二月十六日
一、今日惣出仕有之、年號天保と改元有之候段被仰渡に付、御用番松平周防守殿江御番長瀬七郎左衛門御呼立に而、役人右年號書御渡候旨、同人御小屋江罷越相達候事。
一、右之趣今日より天保と改元有之段、姫君樣等御附々江申上候樣以紙面申達、且今日より改元之段一統相觸候樣御横目江以紙面申渡。

十二月十七日
一、昨日より改元に付、右之趣御國江申上候儀先例相しらべ候處、多く御在府に而、延享・文政改元之節而已御在國、延享之度は此表御家老詰無之、御留居詰之節に而、右兩度とも出日に中飛脚を以申上候へども、此般は最早歳晩之事に而も有之、若々延着杯に相成候而は、二年に相成御承知被遊候御儀も如何敷、依而今日足輕不時立早飛脚申渡、改元之趣申上可然と遂僉議、右之趣に相極、今日不時立に而申上候事。

十二月十六日。前田齊廣夫人の爲に別殿を營造するを以て主任の役人を命ず。

〔覺　書〕
十二月十六日

中村五兵衞
飯尾吉太夫

右此度眞龍院樣思召通り御別殿被成進候付、來春御參府之上御居宅御普請被仰付候。依之右御用主付可相勤候。御時節柄之儀候間御手輕く被仰付候思召候條、其心得を以致詮議候樣可被申渡候旨被仰出候。

十二月

十二月十九日。百姓躰の者多數千代屋久平等の家に就いて救恤を求む。

〔覺書〕

十二月廿三日

一、高田善右衞門別席に而申聞候は、外之儀に而も無之、一昨日・昨日御横目より言上之趣有之候。右は一昨日之言上に、昨日千代屋久平・別口屋何某方へ百姓躰之者人多に罷出物を乞候由。一昨日も尾張町鶴見屋方へ罷出、此時は一人鳥目一銅宛被取候由。最初久平方へ罷越候時は、亭主も留守にて、手代より取計百十銅計爲取由。後日には五十銅も爲取候由。別口屋には酒のかすを爲取候由。何茂挨拶申入罷歸候。外に替儀も無之、昨日も新町之何某方へ罷越候由。樣子御横目足輕より承候處、湯涌邊之者之由。不作にも有之甚難澁仕候故、すく

ひにもらひ出候由。夜中は近村に泊り候由申聞候由。此段申達候様御意之由申聞候に付、奉畏候、詮議之筋有之候はゞ追而可申上与申入。

〔覺　書〕

十二月廿二日

一、江守要人以執筆申聞候は、此二・三日頃より、在方之者と相見え、五十人餘り物をもらひあるき申候。さしてろうぜき之様之儀は無之由。此趣御達申置候旨申聞。

一、澤田義門同斷申聞候。手先之者相廻見候處、在方之者所々にて集り申儀も有之、左様之處には役人共心得にて、あまり人多出候儀不可然段申入候儀も有之候。右之者共申合を承候處、御貸米之儀に付年寄等𛀁押願等仕候へば、こつじき仕候様申聞候などと申合あるき候由等申聞。

十二月廿二日。前田齊泰能を演ず。

〔覺　書〕

十二月廿二日

一、今日何茂御能拜見被仰付、難有仕合奉存候旨申聞候。

一、四半時御能初りに付、拜見所へ各被罷越、余御用有之跡より參る。御番附左之通。

九世戸御　春榮宮門　吉野靜延之助殿

卷絹御　鞍馬天狗甚吉　祝言志賀御

鶯万藏　鈍太郎喜齋　節分次六郎

十二月廿四日。叙爵の者の着服の制を改む。

〔官私隨筆〕

十二月廿四日

一、左之紙面被越之。

叙爵之者着服、下着は白無垢に限り候事に相成來候處、於江戸表御老中方抔左樣にも無之、嶋類入交御着用有之、白無垢無之色替り之無垢等御着用之儀も有之旨等、平井善朴承合之趣に付、以來は佳節・朔望之外は於江戸表右御振合之通入交着用可仕候哉、左候へば於此表も同樣に可仕哉之旨示談之趣申上相伺候處、伺之通入交着用之儀勝手次第と被仰出候條、左樣御心得可被成候、以上。

十二月廿四日　長甲斐守

奥村丹後守樣

本文は幕令なり

十二月廿五日。造酒石數を例年の三分の一とすべき幕令を傳ふ。

〔御觸書典〕

大目付江

當寅年諸國違作之國柄多、米穀拂底に付、酒造人共之儀、銘々造米高之儀三分一相減し、三分二酒造可致候。若隱造等いたすにおいては、其者は勿論、其所之役人迄吟味之上、急度可申付候條、心得違無之様、御料は奉行・代官、幷御預所・私領は領主・地頭より早々可相觸候、

右之趣可被相觸候。

十一月

酒造之儀に付、大目付織田信濃守殿より到來之御書付寫一通相越候條、被得其意、前々之趣を以夫々可被申觸候、以上。

庚寅十二月廿五日

長　甲斐守

奥村丹後守

成瀬　主　稅殿

原五郎左衛門殿

堀　孫左衛門殿

山崎頼母殿

酒造三分一減石之儀に付、從公儀相渡候御書付寫等別紙兩通、年寄中被相渡候。依之御領國一統酒造米三分一減石申渡候條、各支配江も右之趣可被申渡候。萬一當時造高餘計造込候者有之候はゞ、此後追造指止候樣可被申渡候。尤右三分一に相當り候酒造道具、役人立會縮り可被申付候。右等之趣急度夫々可被申渡候、以上。

寅十二月廿八日　　御算用場

淺加伊織殿

稻葉助五郎殿

十二月廿七日。改元の報金澤に達す。

〔溫敬公御日記〕

十二月廿七日

一、當十六日江戶表に而惣出仕有之候處、年號改元被仰出候よし。則不時立の早飛脚今夜到來之事。但、此分前々中飛脚に候得共、月迫之儀、且雪途にも有之候間、延着之程も難計に付、早便に申渡候旨追啓に有之候事。

十二月廿八日

一、昨夜到來の改元に付御渡之年號小紙、月番へ入披見。

〔御觸抜書〕

年號天保与改元之旨、當月十六日被仰渡候由、從江戸表申來候條、可相觸旨被仰出候間、被得其意、御組中等江可有御觸候。且又御組等之內裁許有之面々者、夫々相達候樣可有御申聞候、以上。

庚寅十二月廿九日　長　甲斐守

奥村丹後守

横山山城守殿

本多播磨守殿

前田大炊殿

村井又兵衞殿

奥村內膳殿

十二月廿八日。加賀藩、幕府より御文庫金一萬兩の借用を許さる。

〔諸事留牒〕

十月晦日

藏人は横山氏

一、御文庫金五萬兩御拜借御願書、一昨二十七日靑地藏人儀水野出羽守殿ゟ持參いたし候處、出羽守殿御請取、追而可被及御挨拶旨取次之者申聞候由、藏人相達候事。

十二月五日

一、御次より御願之一件、難及御僉議旨御付札を以被仰渡有之付、押返し御願之儀御指出之事に相成候に付、舘野殿・田中殿ゟも段々示談之處、舘野殿等被申聞には、舘野殿如何樣張込に而も、水野殿に而埓明不申而は出來不申候間、「何れ水野殿ゟ申込候樣申聞に付、此節出羽殿暨土方縫殿助ゟも御贈方有之可然旨、靑地藏人申聞。猶又申聞は、御願之趣水野殿ゟ御書面致持參候處、是に而は參り不申由に而、水野殿段々文面御好みも有之、甚御張込被成候由。成不成は御請合難被成候へども、何分出來候樣御取持可被成由御申聞に付、彌以此節御贈方有之可然由に付、猶更致思慮候處、右之通出羽殿被張込居候へば、縱令出來いたし不申とも、御贈方有之候ても御意味合は相立候譯に候間、此節御贈方有之可然与及指圖候處、藏人申聞候は、昨日御願書水野殿ゟ持參仕候處、此御願書に而宜、是に而水野殿に而は御願之趣出來之處ゟ至り可申、何れ是に而成就いたさせ可申与存被居候。しかし一存に而も無之、同役も有之候間、必出來と申儀は請合難申候。しかし此方に而何分出來之處ゟ至り候樣取計可申、去共此趣重役之方ゟは咄し申間敷、重役に而若あしめに致し、其上に而出來不申時は、於此

方如何敷候間、其方迄申聞置候段、以土方縫殿助青地藏人迄被仰聞候由。右に付候ても、尤此節御贈方有之可然与奉存候。尙御品物逐僉議可申上旨藏人申聞候事。

十二月九日

一、今般御次より御願一件之儀、水野殿御はり込に付御贈方に探幽三幅對價七拾五兩、御同人御家來土方縫殿助ゟ古法眼筆一幅價三十五兩被遣候而可然与聞番申聞、品物爲見候に付、御祐筆申談箱上書いたさせ候。右品は水野殿用聞町人綿貫半平といふ者ゟ相尋、示談いたし極候由、青地藏人申聞候事。

十二月廿八日

一、御勝手御逼迫に付、御文庫金五萬兩御願立之處、今日一萬兩御借渡之趣被仰渡有之、御名代淡路守樣御登城に付、夫々諸大夫御願之節之振に申談候事。

一、今日淡路守樣御出、御小書院ゟ御通之上罷出候處、御老中御列座、周防守殿左之通被仰候よし、則御書取御渡。

御　名

領分損毛、其上品々物入多、可爲難儀与被思召候。依之金一萬兩拜借被仰付候。上納之儀者御勘定奉行可被談候。

借渡ハ貸渡

右之上御料理等出、夫々相濟、中口御式臺より御戻り之事。

但、老・若御廻勤無之、西丸江御禮被仰上候上、直に御出被成候事。

一、右御金御直判御繼文に而候へども、當時御在國中に付、御家老假證文に而明日御指出、明後二十九日御金相渡候趣に相成候。尤御承知之上、御直御證文と引替に相成候筈之事。

十二月晦日

一、聞番助古屋武左衞門儀、今日蓮池御金藏江罷出、御金請取罷歸候而、會所奉行江相渡候段及屆候事。

一、右請取候節假證文左之通。

請取申金子之事

金一萬兩

右は領分損毛、其上品々物入多、可爲難儀与被思召候。依之書面之通拜借被仰付候に付、請取申候。返納之儀は、來卯年より來る子之年迄、拾ヶ年賦上納可申候。尤追而加賀守直判手形に引替可申處、仍如件。

御名内

天保元寅年十二月　　　　横山藏人

西　新　太　郎殿
馬　場　藤　五　郎殿
西村九郎右衛門殿
吉　見　山　三　郎殿

裏書如此。
表書之金一萬兩相渡、來卯より來る子迄拾ヶ年賦返納之樣、追而加賀守直判手形に引替可被申候。斷は本文に有之候、以上。

寅十二月

中　忠　五　郎　印
御用に付無印形
柑　兵　五　郎
中　長　十　郎　印
飯　忠　四　郎　印
御用に付無印形
明　八郎右衛門
公事方無印形

内　隼人正
土　出雲守　印
公事方無印形
曾　豊後守
村　淡路守　印

御金奉行衆

十二月廿九日。城内腰懸に於いて供待する者の作法に就き令す。

〔御觸拔書〕

付札、御横目ゟ

御城中於腰懸等、主人迎等に罷越居候者共之内、不作法成儀有之、腰懸縮足輕等より相制候處不致承引、却而嘲候者共茂有之様子に候。是迄度々申渡置候處、先以不心得之至に候。以後右族之者有之候はゞ、急度見咎候様改而申渡候條、家來末々迄嚴重可申渡候事。

右之趣一統可被申談候事。

寅十二月廿九日　　前田大炊

十二月晦日。藩の非人小屋に收容せらるゝ者の人數を上申す。

是月は大盡なり

覺

一、八百三拾四人　寅十一月晦日書上申人高
一、貳拾壹人　寅十二月朔日より同晦日まで御郡方迯り入人
一、七人　右同斷町方迯り入人
一、百壹人　右同斷町・在之者奉公幷五十日雇歸り入人
一、壹人　右同斷於御小屋出生人
〆九百六拾四人
内
百八人　寅十二月朔日より同晦日まで町・在之者奉公幷五十日雇出人
拾　人　右同斷死去人
殘而
八百四拾六人　寅十二月晦日在人高
右之通御座候、以上。
寅十二月晦日　非人小屋裁許四人

十二月。郡方のものにして金澤に移るが爲轉籍を請ふもの及び難澁者の助小屋入は容易に之を許可せざるべきを告ぐ。

〔郡方御觸〕

諸郡百姓幷頭振共兄弟姉妹等之内、病身者抔与申立、金澤町等江養子に罷越、或者爲稼町方に同居抔いたし度に付、御郡方人別切願近年人多に相成候内、中に者實に病身之者茂可有之躰に付、詮議之上無據承屆候分茂有之候處、近年別而右願方多に相成、中に者先内に而奉公人之養子等に約談いたし置、願出候族も有之躰に相聞候。元來御郡方之者他支配江人別切遣候儀者、從前に定茂有之に付、實耕作等致兼候者之儀者格別、其餘者一圓不承屆趣、從前々毎度申渡置候得共、猥に相心得候儀者、村役人者勿論、組主附年寄等においても詮議方不行屆儀に候間、以來者盲人等生質不具之者、幷實に病身者に而致改作がたき者は、其時々重々詮議之上承屆可申、御家人幷御家中小者等之養子に相屆申者、別而容易に難遂詮議候條、此段一統嚴重可有申渡候。將又近年難澁者、御助小屋入願多に相成候。御助小屋之儀者、御仁惠を以、實に渇命に茂および候程之者御救之ために候得共、容易に相願候譯に而無之筈に候條、何分難澁者共之儀、成限於村方に介抱いたし可遣候。尤此以後御助小屋入願之儀茂、前文同樣容易に不承屆候。

改作こゝにては耕作と同義に用ひらる

助小屋は非人小屋に同じ

御家老中・若年寄御盃被下、返上無之。前田多宮を初段々御流頂戴之人々、御肴役丹後守・播磨守相勤。猩々之舞相済、大夫へ被下物目錄外記相渡。頂戴之上、諸橋權進御目錄頂戴仕り難有仕合奉存候旨外記申上。畢而御意有之、年寄中座上之者御取合申上。六半時餘程過相済被爲入、御先立同前之事。

但、年寄中御盃被下候節、自然御盃取落等に而故障有之間敷事に而も無之候。其時は御土器御控も無之に付指支候間、圖書・外記儀御盃御取次相勤候に付、爲心得御土器一個充懷中いたし居可然与示談いたし、則御土器は御臺所奉行より致借用懷中、相済候上御土器奉行へ相返。

御番組左之通。

四海波　權進

松高き　宮門

猩々　權進

但、權進舞候事。

一、御謠初に付役儀無之不罷出人々江も被下方左之通。

一、白銀一枚充　諸橋權進

一、銀五匁充　　　　　　　　波吉宮門
　　　　　　　　　　　　　　諸橋甚吉
　　　　　　　　　　　　　　竹中甚助

一、波吉宮門等拜領物被仰付難有仕合奉存候。且又御役者共御用茂無御座候はゞ相返可申哉之旨、町奉行江守要人・遠藤數馬罷出外記ゟ申聞候に付、其段以大村肴次郎申上候所、追付以同人御用無之段被仰出候に付、其段以執筆右奉行ゟ申聞候事。

〔溫敬公記史料〕

正月二日夜謠初式。一昨年以降改松囃稱謠初。

正月三日。前田齊泰、寶圓寺及び天德院に參詣す。

〔宮私隨筆〕

正月三日

一、五つ七分御出兩御寺ゟ御參詣。

一、四半時過御歸殿之上無程御出、御大廣間柳之間御禮夫々如御作法書畢る。

一、柳之間伺公大炊殿。

正月十七日。前田慶寧の鷹司政通養女完君と婚すべきことを決定す。

一、鳶共及深更候迄も居小屋に不在合者共有之に付、小頭より誰々は居小屋に罷在候哉之旨相尋候處、同心之者共申談罷在候哉、誰茂罷在候旨及答候得ば、不見當に付重而相尋候處、雜言等申聞、其上強而相糺候得ば如何躰之儀申聞候哉茂難計程に而、何分甚許方行届兼候旨小頭共申聞候由之事。

正月十九日。具足の鏡餅直しを行ふ。

〔諸事要用雜記〕

正月十九日

一、今日御鏡直に付御囃子有之事。

正月二十日。江戸邸に於ける疱瘡・痲疹等の者の遠慮に就いて金澤の士に告ぐ。

〔御家老方諸事留〕

犬千代丸樣御疱瘡等未被相濟候に付、御家中江戸定府之面々并詰人居小屋之内疱瘡病人有之候者、三番湯懸り候迄者御殿ゑ罷出候儀遠慮可仕候。且又御番人は御目通ゑ罷出候儀相控可申候。

一、疱瘡病人は相見候より三十五日過候はゞ、肥立次第罷出相勤可申候。
一、痲疹・水痘病人有之候者、湯三度相濟候迄御廣式ゟ罷出候儀遠慮可仕候。御殿ゟ罷出候儀は不及遠慮候得共、犬千代丸樣御表ゟ御出之節は御目通ゟ罷出候儀相控可申事。
一、痲疹・水痘病人は湯三度相濟候者肥立次第罷出相勤可申事。
右之通被仰出、去年於江戶表一統申渡候。依以來江戶表ゟ交代に而罷越候人々、右之通無違失可相心得候。
右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

正月廿日　長甲斐守

正月廿三日。金澤淺野川下なる隱坊町火を失す。

金澤にては穢多を凡べて俗に隱坊と稱す

〔年々珍敷事留〕

一、正月廿三日暮六つ時前より、淺野川下おんぼ町出火に而九軒殘、其外皆燒失也。

〔諸事要用雜記〕

正月廿三日

一、今晚淺野町先穢多町不殘燒失之事。

〔官私隨筆〕

勤候に付、如此御加增被仰付。

御加增

一、百五十石　　山崎賴母

先知都合八百五十石

賴母儀御算用場奉行被仰付置候處、數十年來御勝手向御逼迫至極之上、打續莫大御物入之儀等有之、御運方御危迫に付彼是心力を盡候段拔群に被思召候。其外御先代樣御近習御用等、數十年品々役儀も相勤候付、如斯御加增被仰付。

御加增

一、百　石　　千羽彥太夫

先知都合三百五十石

彥太夫儀御勝手方御用被仰付置候處、數年來御勝手御逼迫至極之上、打續莫大御物入之儀等有之、御運方御危迫に付彼是心力を盡相勤、御財用向取扱方等衆に越相働、骨折拔群に被思召候付、如斯御加增被仰付。

正月廿八日。玉藥奉行・藥合奉行等が鹽硝受拂の際その斤量を檢すべきことを議す。

決而は必ずの意

〔御家老方諸事留〕

二月十四日

一、左之紙面出候に付尙又遂詮議候處、詮議之趣尤に相聞え候付、各示談之上附札いたし、二月十四日御異風裁許高田源五左衞門ゟ相渡候。且又諸向ゟ塩硝幷筒藥相渡候節茂、貫目不相改而は末々迷惑之筋茂有之躰に付、得と遂詮議申聞候樣申渡書追而相達候筈に候事。

毎年五ヶ山より御買上に相成候塩硝、玉藥奉行・藥合奉行立合見分之上貫目相改、玉藥奉行請取、於土清水右奉行支配之御藏入に仕置候而、毎年御鐵炮筒藥御調合高藥合奉行より御達申上、御聞屆之上、右御藥御調合之分玉藥奉行より請取候節貫目不相改、年々御買上時分之目形を以箱之儘請渡仕候成來りに御座候得ども、中には水氣有之分、或は年月を經候得ば不寄多少目減相立候分茂可有御座。左候得ば右塩硝數箱請取候内には、決而減相立候分も可有之哉に奉存候。藥店等ゟ御拂塩硝は、尤水氣之分に御座候得ども、何迚も目減相立申候。依而藥合奉行於手前御調合之節、折々は彼是心配仕候躰に御座候。右入拂之時分目形不相改儀、是迄之仕來り与は申ながら、不相當不分明之趣に御座候得共、塩硝之儀は目形を以夫々御算用方も相立申品に御座候得ば、如何にも明白に取捺仕候はゞ可宜与奉存候付、此度私共於手前詮議仕、已來は右兩奉行請取渡之節も、目形相改請取渡仕候事に相改申度御座候。さすれ

ば玉薬奉行拂方之時分、寄時に少々宛目減相立候節も可有御座候得共、此儀は御算用之時々私共承届可申事に仕度奉存候。右之趣御聞届之上は、大組・御持方等諸向江御貸渡之分も、右同様時々目形相改相渡候様可申談。無左而は於先々に折々は目減相立、迷惑仕候筋も可有之躰に相聞え申候。右私共詮議之趣御達申上候間、御聞届御座候様仕度奉存候、已上。

正月廿八日

高田源五左衛門

岡田十郎兵衛

横山藏人等八人様

本文之趣承届候條、紙面之通可被相心得候、已上。

卯　正　月

二月十一日。本年中に停止すべき銀仲預手形の通用規限を更に五ケ年間延期せしむ。

〔觸　留〕

御勝手向爲融通、文政十年より出來之銀仲預り百目宛之銀手形幷小割札とも當年中限正銀与引替可相渡筈之處、詮議之趣有之に付、今般手形印形等相改候而、今五ヶ年通用被仰付候條、是迄之通正銀同樣、諸上納を初無滯可致通用候。尤他國差引方無據正銀入用之節、引替

方之儀者、最前申渡置候通に候。

一、右百目手形、當三月十日より同五月中迄之內、偶日每御算用場〻指出、相改候手形与引替可申候。

一、小割手形之分は、當五月朔日より同九月中迄之內、右同樣御算用場において引替可申候。

一、右兩樣共引替限月迄者、是迄之手形共入交可致通用候。

一、右手形上納等之節、裏に名印いたし候處、中には名前調方、印章共大き成分有之候間、以來隨分名書を寄せ、細かに調、小印用ひ可申候。

二月十一日　　奥村內膳

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

二月十七日。能登惣持寺開山忌執行の際集來する僧侶の爲道途の夫馬を支障なからしむべきことを稟請す。

〔御郡典〕

能州惣持寺、當八月開山忌に付、御領國之諸寺院幷他國よりも集來之寺院有之候間、其節人馬等不指支樣仕度旨、同寺役局芳春院より、別紙先例書相添出候に付、兩通共御達之申候。御聞屆之上夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

二月十七日　奥村內膳樣

人馬觸先例書

一、享保九辰年八月惣持寺開山國師四百年忌

一、正德四午年九月惣持寺二代和尚三百五十年忌

一、元文五申年惣持寺五院之內妙高庵開基和尚三百五十年忌

一、明和元申年九月惣持寺二代和尚四百年忌

一、安永三午年八月惣持寺開山國師四百五十年忌

右遠忌之節、自・他國より集來之寺院多有之に付、人馬指支不申樣願上候處、御聞屆之上宿々江御觸渡御座候、以上。

卯正月

惣持寺開山國師五百年忌法事、當八月執行仕候に付、御領國一宗之諸寺院、且亦他國よりも集來之寺院有之候間、其節人馬等不指支樣、先例之通兼而夫々江御申渡被下度奉願候、以上。

天保二年二月　能州　芳春院道雲

前田式部殿

篠原監物殿
品川左門殿

二月十八日。河北郡より越中今石動に賣捌き得べき魚の種類を規定す。

〔御郡典〕

一、川海老　一、鰯　一、川ぎす
一、あまさぎ　一、索麪ごり　一、ごまめ
一、蜆貝　一、さべり口　但、蛤に似寄候品
一、小鮒　但、至而之小鮒ぞうごと唱申分

〆九品

河北郡等より越中筋江越魚之儀は不相成儀に候之處、今石動より此度願出候趣有之候に付、詮議之上、雜魚之內別紙九品之分指解候。尤上魚を始右九品之外は、是迄之通堅く越魚不相成儀に候條、此段嚴重被申渡、雜魚之分も全く金澤表拂底之節は指遣不申樣、夫々可被申渡候、以上。

卯二月十八日　御算用場

御郡奉行中

二月廿二日。家中諸士の居屋敷所付及び圍間數の届出を命ず。

〔官私隨筆〕

二月廿二日

一、御家中之人々居屋敷所付幷圍間數、御用之儀に候條、別紙繪圖面之通相調、御次へ差出候樣、高田善右衞門申聞候間、御自分樣幷御組之分共夫々御取立、揃次第席へ御差出可被成旨、御用番より紙面來。

二月廿四日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

二月廿四日。臨學校。

二月。領內に產する木綿の丈尺を檢し村役人の捺印を施すべきことを命ず。

〔御郡典〕

御領國に而出來之木綿、幅・丈不足之儀に付、御詮議之趣有之、役所詮議之上取極左之通。

一、都而一疋一反与申丈尺は、一統之御定に候得ば、以後御定丈尺通織出可申候。

但、自然少し宛不足尺も可有之に付、村役人手前に而反別相改、御定丈尺有之分に印押可申候。別紙印章之雛形寫相渡候條、於組々早速爲拵、紛敷儀無之樣可相心得候。印出來之上は、印鑑一枚宛役所江可指出事。

一、右之通御定丈尺に少しに而も不足之分、以後一圓賣買指留候而は一反一疋に不足之かな等所持小前之者等、必至与行詰可申候間、以來は二丈三尺迄与四丈九尺迄は、切れ端物与申名目に而賣買勝手次第に候。右より餘計寸尺有之、御定尺にも不滿間之寸尺之分は、一圓賣買致間敷候。若織立候上、間之寸尺分出來候はゞ、二丈三尺・四丈九尺に切すべ候歟、又は二つ三つに切候而成共賣捌可申候。當時木綿多江戸表江指遣し爲賣捌候處、不足尺入交り有之、格別直段劣り、御定も有之處右樣之趣有之候而は、御外聞にも拘り申儀に而、今般譯而遂詮議候條、此所末々迄致會得急度可相守。右之通木綿多引方有之、追々直段も進候得ば、畢竟織出申者共身爲にも相成事に候條、是等之所村役人より譯而可申聞置候。斯申渡上にも、自然後闇き致方於有之は、本人は不及申、村役人急度相咎可申事。

一、幅之儀は不致麁略、紛敷致方無之樣可相心得候。

右之通夫々無違失樣、末々之者迄も嚴重可申渡、尤中買之者手前に而も綿密取調理、萬一仕法に相背候分有之候はゞ、速に及斷候樣申渡置候條、此段も可申渡置者也。

諸郡村々役人

三月二日。前田齊泰能を演ず。

〔官私隨筆〕

三月二日

一、五時過常服に而登城。

一、五半時頃御能初る。御番組左之通七半過相濟。何も列座、以大村脊次郎御禮申上候。

輪藏　御　知章　延之助殿　半蔀　權之進

正尊　宮門　歌占　御　檀風　左平次

祝言伏見　甚吉

ひくず　石神

三月七日。前田齊廣の女郁姫の祥月命日を改む。

〔官私隨筆〕

三月七日

五月三日は發喪の日なり

天保元年十二月十六日の條參照

一、椿樹院様御祥月五月三日之處四月晦日に御改。

但小月は廿九日。

右之通思召有之、御振替被成候。右御忌日は是迄御日柄に付、御家中之人々諸殺生相控來候事故、今般改而不申渡候條、此段寄々一統可被申渡旨、御横目觸之寫御用番より到來。

三月九日。前田齊廣夫人の居所營造に就き山口清太夫にその主任加入を命ず。

〔本多政和覺書〕

三月九日

一、左之覺書雅樂助持參、卽日清太夫呼立申渡。

山口清太夫

右此度眞龍院様御別殿御普請就被仰付候、中村五兵衞・飯尾吉太夫右御用主附被仰付候條、清太夫儀も見廻り御用可相勤候。御時節柄之儀に付、御手輕被仰付思召候條、其心得を以致僉議候様可被申渡旨被仰出候事。

三月

中村五兵衞

飯尾吉太夫

右眞龍院樣御別殿御普請御用山口淸太夫へ見廻御用相勤候樣被仰出候付、申談相勤候樣可被申渡旨被仰出候。

三月十日。前田齊泰老臣中に銀子を貸附すべきことを告げしむ。

〔宮私隨筆〕

三月十日

一、左之廻狀封印に而到來。

御勝手向御逼迫に付、追々御省略等種々御仕法被仰付候へども、未御地盤之御不足御符合不仕。依而御家中を初一統省略仕、御難題に不相成樣心得、相應に勝手持堪候場へ至り候へば、御上ゟも御手助と相成可申儀に付、於御算用場段々僉議之趣相達御聽、先拙者共等へ當年より追々利足立年賦を以御貸銀被仰付候段被仰出候。委曲之儀は御算用場奉行より可申達、御貸付名順之儀は追而相極り候上可申進候、以上。

三月十日　本多播磨守

奧村丹後守樣

前田初丸樣

村井又兵衞樣

追而本文之趣に付分而御禮は不申上候、以上。

〔官私隨筆〕

三月十二日

一、此間御用番より被差越候御貸銀之儀に付、申談候紙面之趣不詳候付、今日自分と又兵衛殿と一所に奥之間へ參候樣にと之事に而、參候處右別紙被爲見之、如左。

別紙申進候御貸付銀之儀、御逼迫至極之内拙者共等へ過分之御貸附被仰付候儀如何敷に付、御算用場奉行等へ相達及僉議候處、御勝手御逼迫至極に付而は、御家中增御借知、町・在へ御用銀等被仰付、此上は一通り御省略之御僉議迄に而は中々御勝手御取直御符合之所へは至り不申、此末不時御入用多之儀有之節は、如何共御辨方無之由。然處御家中重立候人々、公役に付而無據失費有之候へば、不得止事高利之調達、他國迄も引合借入、其雜費不少、町人共之潤澤に相成、他國調達は過分之利金等他國へ出、御國之弱に相成候譯。夫に付重職之面々勝手御取扱諸銀主等へ引取候利足銀等を、申さば御上へ御取入、年を積一廉之御貯用にも相成候樣有之度僉議之旨等段々申聞候所、御運方之御爲に可相成儀に而、追々御家中一統へ及候御仕法に付、何も示談之旨被仰出候通奉心得候儀に御座候事。

〔官私隨筆〕

三月廿五日

一、左之廻狀到來。

今般御仕法御貸附銀、同席中へは一人百貫目充之圖に而、當年は三人へ御貸附、來年よりは一人充御貸附之筈に御座候。御貸附名順之儀は、銘々手繰方等にも寄申儀候間、御拜借被成度時節之儀御申聞可有之、其上に而御示談之上相極可申候。御貸附高右之通には候へども、相減候儀は勝手次第に御座候。時節相極候上は何程拜借仕度趣、以紙面御勝手方席へ相達候筈に御座候事。

三月廿五日　本多播磨守

奥村丹後守様

前田初丸様

村井又兵衛様

三月十一日。藤内の火災に町夫が消防に從はざる件に就き調査す。

〔本多政和覺書〕

三月十一日

一、江守要人以執筆申聞候者、藤內等火事之節町夫手懸不申哉御尋之趣詮議仕候處、町同心

本年正月廿三日の火災に關す

罷出指圖仕候得者隨分手懸申候得共、火消中纒も參り不申故進相薄御座候。以來は火消纒も參候樣仕度旨申聞候由に付、執筆心得を以相尋候者、町中に而無之時は何茂火消町端迄出、火は防不申候。左候ば筋違候故共不相見段申入候處、何にしても火消中一返御尋有之樣仕度等申聞。此儀十五日今枝內記へ尋候處、前々より筋違不申、乍去御横目より指圖有之候へば、當番迄罷越申候。御郡地之儀、所に寄防候箇所有之旨等申聞、御横目へ尋置。

三月十三日。前田齊泰金澤を發して參覲の途に上る。

〔本多政和覺書〕

三月十三日

一、四時追付御居間書院ゟ御出之旨、大村肴次郎申聞候付、甲州初罷越。追付御出、甲州等五人罷出候處、今日は天氣相も靜、御留守御政事向無油斷、播磨守・大炊御城方之儀無油斷と御意。奉畏旨余御請申上。今日は天氣相も宜、益御機嫌能御旅行被遊恐悅奉存候、御留守中御政事向之儀奉畏候旨甲州御請。何も無事と御意。蒙御意難有仕合奉存旨同人申上。其外昨日御次第書之通夫々相濟。

一、御横目より御式臺へ廻候樣申聞候付、各表御式臺ゟ罷出る。此時城州に挨拶す。矢天井之間・實檢之間御番人幷御見立之諸役人にも一禮して罷越。各は又三郎迄七人內より左之鏡板に壇を上にして列座、御家老若年寄は內より右へ被

出。四時半前御出、各在之所に而御睦被爲突、御意有之、益御機嫌能御旅行被遊恐悦奉存候由甲州御請。

〔諸事留牒〕

三月二十二日

一、中將樣當十三日益御機嫌克御發駕被遊、十三日石動御泊、十四日高岡、十五日東岩瀨、千原崎川指支富山御廻り東岩瀨御泊、十六日直に泊ゟ御出被遊候筈之旨、東岩瀨より山城守紙面到來事。

紙面到來は江戸へなり

三月二十五日

一、今日飛脚到着、高田より野尻驛ゟ御出被遊候處、犀川指支候由に候へども、不指支旨注進のうへに而は、御旅行御滯に相成に付、御道中奉行僉議之上、善光寺迄御出被遊候處、二十日夜暖雨に而、又々犀川水增御越難被遊に付、二十一日も御逗留、二十三日御越被遊。依而明後二十七日之御着に相成候旨委曲申越。且御例之通二十八日上使有之候樣被成度旨、聞番取はからひ候樣被仰出之旨も申越候事。

〔溫敬公記史料〕

三月十三日駕發金澤。二十七日到于江戶。横山山城守扈從。從人數千九百七十四人。公馬二

十三疋。乘馬三十一疋。

天保元年十一月六日條參照

三月二十日。三ヶ年を限り領外の者に漆を掻くことを許す。

〔郡方御觸〕

御領國出來之漆他國者に不爲掻取樣、前々申渡置候處、近年猥に相成候に付、改而去年十一月縮方之儀申渡候。然處寬政九年以來他國者入込候儀に相成居候に付、縮方者村役人手前においで嚴重相立置候間、是迄之通他國漆掻爲入込候樣致度旨、御郡年寄共紙面に奥書を以被指出、遂詮議候處、寬政年中他國者爲入込候儀、當場より指解候儀者無之、其上他國者入込候而者縮方茂行屆兼候得共、此上指留候而者下々可及迷惑躰、且各手前において嚴重縮方可被申渡置旨に付、爲試先今年より三ヶ年他國漆掻入込候儀指解候條、被得其意、猶又御縮方等心得違無之樣、急度可被申渡置候。此上致心得違、他國江相洩候儀茂有之候得者、見咎其品取揚候事に改方江も申談置候間、此段も可被申渡置候。三ヶ年後之儀は、右年限中之樣子次第追而可遂詮議候、以上。

三月廿日　　　　　　　　御算用場

御郡奉行中

御領國出來之漆他國者に不掻取樣、前々被仰渡候所、近年猥に相成、他國者入込、別而能美

郡山々江者流例之樣に而、多分他國より漆搔入込候旨に而、御締方に指障候間、以來他國者一圓不入込樣嚴重被仰渡、奉得其意候。就夫先達而茂申上候通、諸郡村々出來之漆、前々越前・若狹幷能州之者等入込漆搔取來候處、天明年中都而他國者爲入込申儀不相成旨被仰渡、其砌者漆搔茂他國者は不相成旨に而、暫入込不申候得共、能州者迄に而は不行屆、彼是村々甚迷惑之筋御座候に付、其後御歎申上、寛政年中より他國漆搔入込申儀に相成、旣に越前幷婦負郡等之者漆搔に罷越候者、御郡所江御達可申上、御郡所より改方御役所江可被仰遣旨、寛政九年に被仰渡、今以他國漆搔入込逗留仕候砌者御達申上來候儀、諸郡同樣之趣に御座候。元來前々より他國者に漆爲搔取候儀者、假令者二つかみ程有之漆木一本、他國者に而者代銀五匁程に買請搔取候處、能州者は漸に三匁程ならで買請不申。右より小木之分は猶以直段格別之高下御座候。右之仕合故村々に而者、多く之木數に御座候得者、過分至極に直段違申儀。尤地面或は木柄に寄候得共、凡前文之首尾に御座候。右躰他國者に而者漆搔取方上手に而、多く宜敷御座候に付、直段高價に買請候而茂潤色有之旨に御座候。就中搔取候漆木切廻し搔取候跡江者、搔口より悉漆流だり居申候。是等之處に茂上手下手に而漆之多く方少御賢察可被下候。前段之通に付、他國者は直段宜鋪買請申而已ならず、翌年搔取候漆木柄見圖り、中勘銀相渡置候儀に而、村々小前之者共甚勝手宜敷、御收納方手當一助にも相成申儀に御座候

多く方少本のまゝ

間、能州者迄に爲掻取候而者、村方一統迷惑仕、畢竟漆苗仕立方も不情に相成、次第に衰微仕候樣に相成可申哉与、乍少分漆御役銀相立罷在村々等相歎申候。依而以來者掻取候漆之儀、尤問屋仕法之通急度相心得、他國漆掻村々に逗留仕漆掻取候分、村々肝煎手前に而吟味仕、掻取候漆員數改預り置、賣捌申節者肝煎指紙を以村方之者に漆問屋等江爲持屆、直段取引之儀者漆掻之者同道仕、問屋等相對賣捌代銀請取相渡遣申儀に仕候はゞ、漆他國江洩申儀無御座、御縮方も相立申儀与奉存候。前條之通於村々者、格別に直段等違申譯に御座候間、幾重に茂是迄之通、他國漆掻爲入込候樣被仰付被下候儀に仕度、重而小紙を以奉願上候、以上。

卯三月

石黒源丞

廣瀨又八郎

林喜兵衛

石崎彥三郎

笠間七右衞門

金山十次郎

御郡御奉行所

三月廿三日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤に着す。

〔御家老方御用諸事留帳〕

三月廿三日

一、備後守様今日此表御着、博勞町金屋九郎兵衛方御旅宿に而四つ時頃御着、九つ時前御機嫌伺罷越、御近習頭逢、備後守様益御機嫌能御旅行被成恐悦之至奉存候。尚更御容躰奉伺候段申述候處、可申上旨に而追付罷出、申上候處御入來御喜悦思召候。尤御逢も可被成處、今日は少々御不例に而、御寺御參詣も延引に付、其儀無御座段申聞候に付、御懇之御意忝仕合、宜御取計賴入候段申入退出。御近習頭入口迄相送、御式臺番も尤入口端まで出候事。

三月廿七日。前田齊泰江戸に着す。

〔諸事要用雜記〕

三月廿七日

一、今曉七時御供揃に而大宮御發駕、御下屋敷ゟ御立寄、九つ三歩五厘益御機嫌能御着府被遊候。前々之通奥之口御式臺より御入被遊候。

〔諸事留牒〕

三月廿七日

一、今日曉天七時不遲御供揃に而、從大宮驛より御着府に付、御殿一統五時揃、各は五半時服紗小袖に而致出席候事。

一、九時頃御中屋敷前御出之御附人來り、中之口御式臺前ゟ罷出候處、同刻過御馬上に而御出御意有之、應而御請申上候事。

三月廿八日。德川家齊使を遣はして前田齊泰の參覲を勞す。

〔諸事留牒〕

三月二十六日

一、御着府翌日上使之儀、寶曆八年迄は度々有之、寶曆十年以後無之。依而今般右例書相認、青地藏人田中龍之助殿ゟ持參及御內談候由。御先例も有之儀、以前之通相成候へば別而可然事。

一、右之通靑地田中殿及示談候處、無御據御儀に候間其趣に取計可申、大宮より御着之御儀に御座候間、御老中晝後之御勤に相成事故、老中より翌日之申上りに相成、卽日上使と申ものに候間、六ヶ敷御儀に候得共、其通りに相計ひ可申候間、二十八日上使有之候樣相心得候樣、田中殿被申聞候段靑地申聞候事。

〔諸事要用雜記〕

三月廿八日

一、今日御参府之上使、九半時頃御城下り御附人に而、無程御老中松平周防守殿御出、夫々御例之通御都合相濟候事。

但、昨日御着今日之上使六ヶ敷由に而、如何可有之と申儀に候處、御格別之儀に付翌日上使に相成候由。

一、御退出後御廻勤御出被遊候事。

〔諸事留牒〕

三月廿八日

一、今日上使之御様子に付、御殿一統五時揃、各五半過服紗小袖・上下に而出席之事。

一、九つ時過御小人目付罷越、追付上使松平周防守殿御越被成候段申聞候由に付、各服いし目・上下に相改、主付より右之趣組頭御横目ゟ申渡有之候事。

一、九半時前上使御城下り附人來り、直に御門前ゟ各罷出、上使御越之方上列にいたし罷出有之候處、追付松平周防守殿御越、御前御門外ゟ御出、御先立に而御大書院ゟ御誘引、御茶・たばこ盆出之、其上に而上意之趣御拜聽、直に御小書院ゟ御誘引、御前御相伴に而御料理出、夫々御例之通御首尾能相濟、最前之通御門迄御前御送り被遊、各御門前ゟ罷出、上使之方上

拙者は横山
藏人

にいたし、御門内之方上列に罷出候事。

一、上使八時前御戻り之事。

四月朔日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。

〔諸事留牒〕

四月朔日

一、今日御參府御禮御供被仰付に付、六時過のし目・長上下に而登城、山城守・拙者同道、聞番助加須屋七郎右衞門罷出候事。

一、御白書院において公方樣ゟ御目見、御太刀目錄御奏者番松平伊豆守殿御披露、首尾能御目見申上、大御廊下ゟ罷越候處、御前部屋之前に被爲在、蒙御意、夫より退出、直に西御丸ゟ罷出、水野越前守殿御出座、間部下總守殿御披露、謁仕候事。

但、内府樣今日出御無之事。

一、夫より所多四郎方へ立寄、服半上下に相改、老・若不殘廻勤、御太刀目錄家來生熊米右衞門持參、玄關敷付に而請取持上り、夫々相贈候事。

〔諸事要用雜記〕

四月朔日

今般御參府に付前月廿八日上使松平周防守殿を以被蒙上意、且又今日御參勤之御禮被仰上候樣、昨日御老中方より御奉書到來に付、御登城被遊候處、於御黒書院御參勤之御禮被仰上、御懇之上意、其上山城守・藏人御目見被仰付、重疊難有思召候、此段可申聞旨御意に候。

〔續德川實紀〕

四月朔日、月次の賀例のごとし。松平加賀守はじめ參覲のもの二人。加賀守家人横山山城守・横山藏人また謁見す。

四月七日。幕府、前田慶寧の鷹司政通養女完君と婚約を請ひたることを許す。

本年正月十七日の條參照

〔諸事留牒〕

四月七日

一、犬千代丸樣御緣組之儀、鷹司關白樣姬君樣完サダ君樣と御內談之處、御許容被仰進候事。

四月十二日。富山城災に罹る。

〔官私隨筆〕

四月十四日

一、當十二日富山大火御城も御燒失之由、此間風評有之處相違無之旨今日承之。依而江戸へ
御機嫌伺之紙面も上候也。
［本多政和覺書］
四月廿六日
一、月番より廻箱之うち、富山御燒失御本丸等場所巨細書付、其之外御家中等之員數帳左之
通。

三升形御門不殘內番所　赤藏境御門
白壁御門　助作御門
御本丸御小將番所　同御射手番所
鐵御門　搦手御門一
吳服御土藏　馬具御土藏
御書物御土藏　御茶所御土藏
鐵炮御土藏　御小納戸御土藏
御臺所鹽物藏　二之丸諸役所
御馬廻番所　櫓御門

桐御門
御金土藏
御時鐘矢倉
中之御屋敷御住居向御建物不殘
兵庫殿御住居
槻御門
御細工所
御裏役所
三之丸明御住居跡御建物不殘
學校並諸稽古所
御作事所
御厩
御鹽藏
御普請所藏
御郡役所藏

御勘定會所入口御門
御勘定會所御土藏一棟
御舊記藏
奥向御土藏二つ
於鐙樣御住居
御鷹所
御藥所
御鷹部屋
同御土藏
三之丸下馬
同藏
御家中給人米入御土藏三棟
總曲輪諸役所不殘
町吟味所藏

御家中寺社等

二百五軒御家中居屋敷　三十箇寺寺院

三　軒　神　社　三　軒　社　人

二十二御家中土藏　四つ御家中納家

二つ寺院土藏　町數百六十四町

御家中寺社町家々數合七千二百七十一軒

御家中寺社町家土藏納家合八百五十九

二十五人燒失人

內十一人男、十四人女

牛馬異變無之旨。

〔御家老方御用諸事留〕

右に付而は所々口々、彼方樣において御縮方御堅めも有之、此方よりも手合役人等被遣、御縮方嚴重爲致候事。

四月十三日。前田慶寧の爲江戸邸に幟を立つるを以て定府の男女に觀覽を許可することを令す。

〔諸事留牒〕

四月十三日

御横目ゟ

犬千代丸様御幟、來月朔日より五日迄御庭內に相建候付、定府之男女拜見被仰付候。男子は十五歳以下丸額迄之事。

一、御幟拜見人御廣式御土藏際二枚開より入、坂下御門ゟ出可申事。

一、御庭內之儀に候間、拜見人供之者は御門外に相殘し、坂下御門ゟ相廻し可申候。定府之家內・下女迄召連候事勝手次第に候。尤拜見之女かぶり物幷日傘指候儀無用之事。

右之通被得其意、定府之人々ゟ可被申談候事。

本年六月二日の條參照

四　月

四月十四日。金澤淺野川下隱坊町等災に罹る。

〔年々珍敷事留〕

一、四月十四日夜淺野川下をんぼ町出火にて、正月之燒殘り等も今度は皆燒、一軒も殘不申、夫よりえた町も皆燒る。

本年正月廿三日の條參照

一、十四日夜より十五日朝迄火盛ん也。

山口清太夫は側用人

淡路守は富山侯前田利幹

四月十七日。富山城火災の報江戸に達す。

〔溫敬公御日記〕

四月十七日

一、九半時頃淸太夫罷出申聞候は、富山表當十二日より出火、同所城內へ火移り、當時三之丸假住居、且二之丸諸役所、曁諸藏・籾藏等も過半類燒。尤城下も八分計燒失いたし候よし、早打使に而申來候由、只今淡路守殿家來罷出申聞候よし同人申聞、猶書取も致披見候。先取合へず答遣。

〔溫敬公記史料〕

四月十二日。富山城火。公遣使弔災。輸送錢穀。

四月十七日　土淸水煙硝藏盜賊の侵入する所となる。

〔御親翰內帳拔書〕

一、左之通今便及言上候事。

土淸水二十間御土藏上〻之戶前鎖之封印無之、觀音開きを開き有之候間、當十八日朝御土藏番人より及斷候に付、玉藥奉行幷藥合奉行御藏內見分致候處、賊入御品物取出候躰に相見え候。御品物員數之儀は追而相達旨等、右兩奉行紙面御異風裁許高田彌左衞門加輿書差出、御

縮方之儀嚴重相心得候樣申渡置候段も彌左衛門口達を以申聞候。右に付御藏番之者を初、在住之足輕・小者一統口書取立可差出、且御藏見廻方等之樣子、盜賊入候躰に付而は何等心當之儀も無之哉、委曲之儀書面に調差出候樣右彌左衛門迄申渡候處、口書等追々指出、御品物員數筒藥八貫目入四十箱見當不申旨等委細紙面之通に御座候。將亦當十七日當番之御藏番足輕荻村久藏身分之儀、其儘に指置候儀に而は無之に付、締方之儀申渡置候樣御異風裁許ゟ申渡候處、割場奉行ゟ申談、御用之外外出差留相愼罷在候樣割場において申渡候旨、右裁許申聞候。右一件此上之儀は表方之取捌に付、夫々札迄り僉議有之樣月番ゟ相達申候。右紙面等都合八通之寫一緘。

一、右一件に付先達而盜賊改奉行ゟ疑敷躰之者も無之哉承糺候樣申渡置候處、藥合所附小遣小者安兵衛儀疑敷趣有之、召出相糺候處、五六年以前より度々御藏封印を解き鎖を明、二十間御藏より都合筒藥二十箱計、十五間御藏より生塩硝三十箱計・筒藥四箱計盜出、密々賣拂候段申顯旨等別紙之通澤田義門申聞。右安兵衛口書取立、委曲之儀月番へ可相達旨も申聞候に付、右之趣御異風裁許申聞、筒藥員數も先達而相屆候通に而も無之、塩硝も盜出候譯に候間、尚更玉藥奉行幷藥合奉行手前遂詮議、御品物員數之儀入念相しらべ申聞候樣申渡候。委細之趣紙面を以相達候樣申渡置候。右義門紙面一通進之候條、以御序被入御覽、右之趣可被達御

聽候、以上。

四月廿九日　　前田圖書

横山藏人樣

四月十八日。藩の財政逼迫するを以て諸向經費の節減を講ぜしむ。

〔諸事要用雜記〕

四月十八日

一、御席へ御用有之旨に而罷出候處、御勝手御逼迫之上不時御物入有之等段々御書立に而、猶又諸向減方之儀無油斷遂詮議、心付之儀無泥可申聞旨被仰渡候事。

四月十八日。岡屋彌兵衞その女の代牢を請ひたる孝心により假に出牢を許さる。

天保元年十二月三日の條參照

〔本多政和覺書〕

四月十八日

一、岡屋婿ますす父彌兵衞と申者、千代屋久平方へ集候一件に付禁牢之處、頃日大病相滯、生死も難知程之由ますす承、代牢被仰付候か、無左時は相牢願候由、今朝公事場江罷出申聞候由、右奉行吟味處江引寄糺候處、誠に父之病氣を相なげき候由實に相見候に付、代牢被仰付候に

付、右樣奇特之者は御赦免一件落着迄御預之儀も有之由、右奉行罷出申聞候に付、出席之人々評議候處、代牢被仰付と御赦免被仰付と共處違も有之儀に候哉。夫は子の孝に寄可申儀先例如何程之者は代牢、如何程之者は御赦免と申儀も可有之、今一片右奉行へ尋可然旨に而、右呼出被尋候處、先例加樣之者御赦免とは有之候へ共、孝心之樣子等は書記無之故分兼申候。今日之者抔誠に父之儀を懷候樣子に而、吟味處を立去不申、色々被申諭候へ共、只今御聞届無之時は、身分之儀如何躰に被仰付候而も難退旨申居候に付、無理に共處爲退申候へ共、誠に見るに不忍樣子之由。依而は右奉行に而は御赦免被仰付候而も可然程に被存候由。先例慥に難引當故兩樣に致し相達候由等申聞候付、重而示談、左候はゞ御赦免、一件落着迄御預之趣に卽刻被申渡。

但、右之通指懸候儀故、示談等候內相果候而は何之詮も無之事故、出席切示談也。

四月廿二日。前田齊泰、齊廣夫人を招請す。

〔諸事要用雜記〕

四月廿二日

一、眞龍院樣御初今日御表ゟ御招請有之、御囃子被遊候。金春大夫召す。

四月廿五日　前田齊廣の女鈐姬逝去す。

〔官私隨筆〕

五月三日

一、鈴姬樣御儀、前月初より御外邪に而、餘程御熱被爲在候へども、段々御宜、大抵御平生躰に被成御座候處、同廿四日夕御動悸俄に御强く成、御氣息にも御懸り、不一通御容躰に付、早速丸山了悅・池田玄章診被仰付候處、御外邪全く御發無之内、又時合に御縮り被遊、俄に水氣御衝逆等之御樣子に申上、御藥差上候所、不御宜、御醫者何も診被仰付、同夜御出入町醫者津田玄庵、山城守手醫者津田隨分齋へも診被仰付、御詮議之上御藥差上候へども、御藥効相見え不申、夜半頃迄に三四度御吐食被遊、少御安く被爲在候樣相見え候へども、又々御指引有之御樣子に付、山城守殿同廿五日御廣式へ罷出、被相窺御容躰候處、次第に不御宜御樣子之旨、同廿四日出町飛脚差留置、廿五日發足早飛脚に傳附、山城守殿等より申來候旨に而、御樣子書相渡、御用番より被越之、中將樣・眞龍院樣・鈴姬樣へ以紙面相伺御機嫌可申旨、今夕八半時頃被申越候處、其後七時過重而以紙面、右之通之御樣子之處、段々御指重り、前月廿六日朝被及御大切、同日午之中刻御卒去被成候段、同日不時立早飛脚步を以、只今山城守殿等より申來候由。依之追付御廣式へ可罷出旨被申越候付、七半時頃御廣式ゟ參上、以渡邊多宮御機嫌相窺候處、御指障も不被爲在、益御機嫌之旨演述なり。但右に付江戶表方々樣へも、

可相窺御機嫌旨被申越之。

一、右に付普請は今日より明後五日迄三日、鳴物等は當九日迄、諸殺生は同十六日迄、御忌中日數遠慮可仕旨。且又右に付、頭分以上之面々、明四日爲伺御機嫌、御用番宅へ可有參出、幼少病氣等之人々は、以使者可申越旨、一統觸之寫追而被越之。

［諸事要用雜記］

四月廿六日

一、鈴姫樣當廿四日夕俄に御氣色御障被爲在、昨廿五日朝五時前御指引、實は御卒去。今廿六日卯中刻御指重り、御大切午之中刻御卒去被遊候事。

付札、御横目江

鈴姫樣御卒去に付、御屋敷中普請は御中陰御法事相濟候迄、鳴物は來月十六日迄御忌中遠慮可仕事。

但、御忌明に而も鳴物之儀四五日自分に相扣可申事。

右之通夫々可被申談候事。

四　月

五月十二日

一、鈔姬樣御法號洪福院樣与被稱、今十二日辰刻下谷廣德寺へ御葬送相濟候事。

〔前田家譜〕

鈔。文政元年九月廿八日江戸に生る。母は貞正院。九年十二月久留米侯有馬賴德嫡男賴永に婚約、未だ入輿せずして天保二年四月廿五日歿、廿六日發喪す、享年十四。法號洪福院、江戸下谷廣德寺に葬る。

四月廿九日。德川家齊使を遣はして前田齊泰の朦中を慰問せしむ。

〔諸事要用雜記〕

四月廿九日

一、今日御朦中御尋之上使有之事。

右御名代備後守樣御受、御廻勤も御同所樣之事。

〔官私隨筆〕

五月九日

一、中將樣御朦中爲御尋、上使御奏者番本多豐後守殿前月廿九日御出、御前不被遊御勝候付、上意之趣備後守樣御拜聽之旨等申來候由、御用番廻狀來る。

五月十日。百姓町人の葬儀墓碑等の費用を緊縮すべき幕令を傳ふ。

五月十日

一、近年百姓・町人共身分不相應大造之葬式致し、又は墓所へ壯大之石碑を建、院號・居士號等附候趣も相聞、如何之事に候。自今以後町人共葬式者、假令富有或は由緒有之者に而も、集僧十僧より厚執行者いたす間敷、施物等も分限に應寄附致し、墓碑之儀も高さ臺石とも四尺を限り、戒名へ院・號居士號等決而附申間敷候。尤是迄有來候石碑は其儘差置、追而修復等之節院號・居士號相除、石碑取縮候樣可致候と之趣公儀觸之寫簞笥番より越之、寺社奉行・御算用場奉行・町奉行へ申渡之下物も越之。下書文面不審之品有之に付其由申遣候。

五月廿二日。芝居役者の園外に出で兩茶屋町に至ることを許す。

〔川上芝居一件〕

芝居役者共園外致徘徊候儀は、末々風俗に指障候に付、徘徊御指留之者に候所、途中等縮方之樣子により、兩茶屋町へ罷越候儀は、拙者共切不急度可承置之旨、右主付肝煎へ迄申渡候處、別紙縮方覺書指出申候。依之以來縮方如此嚴重に相心得、役者折々兩茶屋町へ罷越候儀、不急度可承置候條、尙更役者共へも心得違無之樣申渡指遣候樣、右主付肝煎へ可被申渡、且兩茶屋町之者共へも、縮方嚴重に相心得候樣、茶屋方主付肝煎より申渡候樣被申渡、

別紙縮方覺書も可有御渡候、以上。

五月廿二日

江守要人

遠藤數馬

山本元吉殿

六月二日。前田慶寧の爲本鄕邸內に幟を建つ。

〔諸事要用雜記〕

五月十二日

付札、御横目江

犬千代丸樣御幟、來月二日より六日迄御庭內に相建候。御步並已上之人々等幷定府之男女拜見被仰付候儀等、都而先達而申渡置候通可相心得候事。

右之趣被得其意夫々可被申談候事。

五月

〔恭敏公記史料〕

六月二日建幟。因喪延期將軍賜兜一鮮鯛一折。內大臣及將軍夫人內府夫人亦同。

六月二十日。前田齊廣の女寬姬逝去す。

六月十六日

一、下谷御前樣當月六日より御水氣も被爲入候處、御懷胎之御事、左樣之御儀も可有之由に而、一兩日少時氣に御感被爲在候內、今朝より御催生之御兆之處、昔頃迄に次第に御疲勞被爲在、八半時頃御出產被爲在候處、無程御胞衣御下り、續て御衰弱御虛脫被成、御療養之御手段も無之御樣子追々申上る。

一、御出生之御男子樣御胎死に候事。

一、右に付今晚より下谷御廣式ゟ同席詰被仰付。

六月十九日

一、今日右御出生樣御屆之上、申刻御卒去之御屆有之。且右に付一日御遠慮之御屆有之。

一、下谷御前樣御病氣御指重、御大切に被及候段早乘御使參り、同席一統奥御取次を以奉伺御機嫌候事。

六月廿日

一、下谷御前樣御病氣之處不被爲叶御療養、今未刻御卒去被成候段申來。

右に付御席へ罷出御機嫌伺有之旨、御横目披見物有之、追付一統罷出、山城守殿御座ゟ罷出

實はこの日逝去なり

申上候事。

〔官私隨筆〕

六月廿三日

一、下谷御前樣當月初頃より御腰廻少々御浮腫之御氣味等有之候へども、爲指御儀に而も無御座御樣子之處、同十六日朝四時前より少々充御催生之御兆に而、同刻過より餘程御やめ御難儀被遊、御正氣御衰弱被遊候故、十全大福湯等指上、尤同朝以來御醫者中御詮議御座候處、外御別症之儀不被爲在、御衰弱一方之御樣子何も申聞、御藥指上候處、重而御やめ御催八半時過御出產、續而御胞衣下り候節一時に御虛脫被遊、御藥汁通兼、御重病之旨別紙中野通庵等御容躰書寫之通、御附頭御用多に付御用達横地佐兵衞罷出申聞。且御出生樣御胎死に而、御產後御氣絕被遊、次第に御疲勞被爲見候旨申聞候段、去十六日夜不時立早飛脚歩を以山城守殿等より只今申來候。先以右之御樣子恐入申儀御座候。依之明便御同所樣相伺御機嫌候筈に御座候。各へも御伺可被成旨御用番より廻狀來り、致承知、先以恐入申儀御座候旨下書いたし遣す。

〔官私隨筆〕

一、下谷御前樣御出產後、當十八日之御樣子次第に御衰弱被成、保元之御藥指上候へども、

御虛脫之御樣子に而、不輕御容躰之旨、御用達木村茂兵衞申聞候。然處翌十九日次第に御虛脫、最早御指重り、御大切被爲及候段、御醫者中申上候由に而、別紙御容躰書之通、山口淸太夫等申聞、田邊安左衞門等よりも同樣申聞候。右に付山城守殿等、中將樣御機嫌相伺候處、何之御指障も不被爲在候段被仰出候。且又御出生之御男子樣大膳大夫樣より、同十七日申刻御死去之御屆に相成候付、右御次第に御隨ひ、同日一日御遠慮之御屆御座候旨、當十九日出町飛脚早飛脚歩に傳附、山城守殿等より只今申來候。依之追付御廣式江御出、勇姬樣初方々樣へ、御伺御機嫌可被成候、以上。

六月廿六日　　　　長　甲斐守

奥　村　樣

大膳大夫は小笠原忠徵

〔前田家譜〕

寬。文化十二年六月十二日金澤に生る。母は榮操院。文政十年十一月四日小倉侯小笠原忠徵に嫁し、下谷御前と稱せられ、天保二年六月二十日歿す。享年十七。法號寬順院、江戸淺草海禪寺に葬る。

〔諸事要用雜記〕

八月廿五日

一、下谷御廣式追々御用相濟、廿一二日女中も發足有之由。明廿六日千田五太夫發足、全く御廣式引拂に相成候由之事。

六月二十日。宿々の人馬賃錢を從來の如く四割增に受くべきことを許す。

〔郡方御觸〕

御領國往還筋宿々難澁之躰に付、文政九年公邊御達之上、同年より當卯十月晦日迄、中五ヶ年之間宿々人馬賃錢四割增被仰付置候處、當年に而年限相濟候に付、重而公邊御達之上、當卯十一月朔日より來る戌十月晦日迄、中七ヶ年之間是迄之通四割增共被仰付旨、御用番年寄中被申聞候條、被得其意、夫々可被申渡候。段々結構之御取扱に候條、猶更下々會得いたし相稼候樣被申渡、御請各引請可被指出候。

一、加州湊通、越中入善通、圓下村通、本文年限中往還同樣四割增、能州一國曁加越兩州脇道往還、年限中三割增取請候樣可申渡旨、是又御用番年寄中被申聞候條、夫々被申渡、御請本文に調込可被指出候。

一、巡見上使通行之節、駄賃取受方之儀、去る戌年相觸置候通可相心得候。

一、建札之儀文段等是迄之通に而、年限迄調替之儀可被申渡候。

右之趣夫々被得其意、兼而申渡置候通、旅人江對し貪ヶ間敷儀無之樣、尙又可被申渡候、以

上。

六月廿日

馬場右近殿

松平識人殿

六月廿三日。徳川家齊使者を遣はして前田齊泰の朦中を問はしむ。

〔諸事要用雜記〕

六月廿三日

一、今日御朦中御尋之上使御奏者番井上河内守殿御出被成候事。

六月廿四日。非人小屋に收容せられて九十歳に達したる者に増米を給す。

〔每日帳書拔〕

六月廿四日

一、非人小屋御救人之内九十歳に相成候者有之、二合五勺増米被下候段申渡、江戶へ申上。

六月。富山藩の災後に處するが爲石野雅樂助を江戶より派す。

〔御親翰帳之書拔〕

一、富山表大變に付御縮方等之様子見聞之ため、且御内用之筋承合旁千羽彦太夫被遣候之處、罷歸候上、彼方様諸役人了簡一致無之、彼是与御省略之筋相立兼候趣等申聞、従御本家様何とか右様之處被仰遣方も御座候はゞ、惣様御縮に相成、御政事も被爲行屆、御省略方も相整可申哉之様子、彦太夫見聞之趣罷歸御内々御達申。其後かなた御勘定奉行山本五兵衛金澤ゟ出府、御算用場奉行へ及對談候節、右之趣具に申聞候由に而、右奉行より及御内達候に付、僉議之趣江戸表へ申上候處、石野雅樂助被遣候而被仰入方相極り、則雅樂助被遣候儀有之候事。

七月二日。前田齊泰、茶屋町を禁止せんとする意見を老臣に告ぐ。

〔御親翰帳〕

一、於江戸表七月二日山城守御前ゟ被召出、茶屋町之儀御先代様被仰付候儀に候へ共、今度寺西勘六郎せがれ等右場所へ罷越候儀に付御心付被遊候處、年若之者抔不斗心得違に而罷越、及露顯候へば無是非御法之通被仰付儀に而、御不便にも被思召候。右場所之儀に付組頭より申上候趣も有之、いづれ當時に而は被指止可然与思召候間、猶更遂僉議可申上旨被仰出候よし、同月四日出に申來、僉議之趣有之候事。

右之趣に付江戸表ゟ返書に申遣候趣も有之、重而右存寄無之上は、速に相止候樣被仰出之儀返書に申來、早速町奉行へ申渡候處、爲相止候に付、御家中之人々子弟等心得違無之樣、頭・支配人ゟも申渡候事。

〔本多政和覺書〕

八月八日

一、茶屋町可被指止旨被仰出候段先便申來候に付、御算用場奉行・町奉行へ遂詮議不申而者被指止可然と申儀難申旨等申遣候に付、御算用場奉行了簡一樣に無之候間、遂詮議候者彼是面倒之儀も可有之哉。被指止候儀御治定に而、跡取扱之儀を前廉僉議申儀に候得ば、紙面之通相心得樣可申遣哉之旨伺之通、茶屋町之儀思召被爲在被指止候儀被仰出、各存寄無之上は速に相止候樣に申渡候樣可申遣、跡取扱方之儀者其節模樣に寄僉議可有之儀に思召候旨被仰出候旨等。

七月四日。金澤高儀町に火あり。

〔歲々略曆〕

七月四日暮六つ時より七つ時迄燒失、凡家數百三十軒。公儀町北村屋火元。

〔官私隨筆〕

七月四日

一、今晩六時頃公儀町北村や某より出火、急に鎮り不申躰に付、差圖次第可罷出旨御用番へ之使者越後屋敷へ差出候處、いまだ鎮火に相成不申間可罷出旨被申付、四時頃越後やしきへ罷出。

一、奉書火消津田乙三郎・前田將監・前田監物・伊藤多宮へ追々被申渡候。

一、八時過大方鎮火之躰之處、いまだ御横目より其由相達不申候へども、御用番之外退出可有之哉と示談之內、八半時迄に相成、火事所より使を以同役より申越、最早鎮火に相成候由申越候段御横目より達之、七時頃退出歸宅。

七月十八日。前田齊廣夫人の入國に就いて議す。

［本多政和覺書］

七月十八日

一、御勝手方式日に付出座之處、左之城州より之狀披見す。

飯尾吉太夫、山口清太夫ゟ申聞候者、眞龍院様最初は御國ゟ被爲入度思召に候所、御姫様方御緣組も追々御整候事故、御振捨被遊候儀も爲成兼、御別殿之儀被仰出候處、洪福院様・寬順院様も御卒去に而、當時和田倉御前様は御婚禮後餘程相立、且者御睦敷被爲在候故、御案事被遊候儀無之、追付勇姫様御出府に候得共、御內輪御同事故、御案事無御座儀。依而只今に而は、

何卒御國江被爲入度思召候。此儀清太夫迄御内々被仰付候旨に付、御國江被爲入候儀、公邊向如何可有之哉、年寄共は兼而其儀可然樣に申聞候儀も候間、御忘明之上被仰出候者、僉議可有御座旨申上候處、每度彼是被仰出候儀、御泥被遊候旨等被仰出有之。御國江被爲入候はゞ、金谷に被成御座候樣に思召候。公邊之儀は、被仰込樣に寄相調可申哉に付、早速示談之趣承度旨申聞候。御道中之御入用は可有之候へ共、往々之處は却而御益に可有之旨。早速申越候樣城州等紙面、七月九日早飛脚。

但し右之趣整候はゞ、來秋にも其表江被爲入候樣被遊度被仰出候由も申來。

〔本多政和覺書〕

七月廿三日

一、昨日之趣段々遂示談候處、公邊御首尾等に拘り候而者大切之儀。公邊之御樣子・御住居之樣子得と考有之、被仰立方重々詮議有之、公邊之御首尾等に拘り不申儀に候者、御國江被爲入候而可然旨。被仰立方は先御湯治等之趣に而、御代々之御隱居樣之御振に成り可然哉。金谷御住居之儀は、跡より遂詮議可申遣旨等詮議治定。明日出に可申遣旨相極る。

七月二十日。守隨彦太郎の名代金澤に來り衡器の檢査を開始す。

〔觸留〕

今般從公儀諸國秤御改爲御用、守隨彥太郎名代之者相廻り、御領國之儀は、向寄宜場所に而、二三里之間秤取集相改候條、文政四年御申渡之通心得違無之、御改請候樣被仰渡候樣仕度旨、彥太郎より御屆書、於江戶表吉野善八郎等江指出候由、夫々被仰渡之趣奉得其意候。則右彥太郎名代役後藤助七儀、此表江到着仕候付、當月廿日より來辰年中、秤爲相改可申候間、諸役所幷御家中・寺社方・町方、且從城下二・三里之內御郡方之分者、來月朔日より南町秤座に於て爲改受、秤夫々指出候樣一統江可被仰渡候。右之外遠所秤改之儀は、秤座三郎右衛門・庄藏之內出役仕、於先々爲相改候間、是又不指支樣夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

七月十三日　　江守要人

奥村內膳樣

七月廿一日。前田慶寧の側小將たるべき者を募る。

〔諸事要用雜記〕

犬千代樣御側小將御用候條、平士三ノ一被下置候者六歲より十一二歲迄、且頭分嫡子右年齡之者早速可被書出候。今般は江戶勤之儀、相泥候人々も有之候はゞ其段も可被申聞候事。

七月廿一日　　前田圖書

笹島久左衛門殿

八月九日。德川家齊、前田齊泰に雲雀を贈る。

〔諸事要用雜記〕

八月九日

一、今日雲雀御拜領上使有之。御退出八時後に成、御登城は不被遊段御出前被仰出、七時前御廻勤御出被遊候事。

八月十五日。前田齊泰能を催す。

〔諸事要用雜記〕

八月十五日

一、今日御能有之、先達而寶生大夫段々願之趣に付、已前之通格別御出入に被仰付、併御嘉儀は不被仰付候。

右に付已後被召候而茂不指支。依而今日召し候筈之處、西丸御囃子に而御斷申候。已後は寶生に不限、又其次は金春も被爲召候樣相心得可然旨、高田被申聞候事。

八月十八日。金澤に於ける茶屋町を廢止し且つ出合宿を禁ずべきことを告ぐ。

〔本多政和覺書〕

町奉行へ

兩所茶屋町之儀、御先代樣被聞召屆候儀に候得共、今般思召被爲在候に付、被指止候段被仰出候條、被得其意、夫々可被申渡候事。

天保二年八月

〔兩茶屋町一件〕

今般兩所茶屋町被指止候旨被仰出候段、御用番播磨守殿被仰渡、則申渡候に付、爲御承知申進候、以上。

天保二年八月十八日　　遠藤數馬

〔兩茶屋町一件〕

今度兩茶屋町被指止候旨被仰渡、其段申渡候。尤以來於何方も、男女出合宿堅く致間敷候。

右之趣町中へ可被申渡候事。

八月

兩茶屋町被指止候に付、別紙御觸一通相達之候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

八月二十一日

〔兩茶屋一件〕

町奉行江

女出合宿之儀は御停止に付、前々より嚴重申渡置候處、今般兩所茶屋町被指止候に付而は、自然心得違いたし、潜に女を抱置人集、或は出合宿いたし候樣之族於有之は、急度相糺曲事に可被仰付候條、以來右體之儀かたく無之樣、町方之者共へ嚴重可被申渡候事。

天保二年八月廿四日

〔觸　留〕

兩所茶屋町之儀、御先代樣被聞召届候得共、今般思召被爲在被指止候段被仰出、町奉行へ申渡候。右に付自然心得違いたし、潜に女を抱置人集、或は出合宿いたし候樣之族於有之は、急度相糺曲事に可被仰付旨、町方へ嚴重に申渡候。御家中之人々子弟等、尙更心得違無之樣無油斷可有差引候。

右之趣被得其意、組・支配有之面々は各より可有演述候事。

八　月

八月廿一日。金澤町奉行兩茶屋町廢止に就きその救濟方法を稟議す。

〔本多政和覺書〕

八月廿一日

今般兩所茶屋町御指止に付、是迄右商賣仕罷在候者共、此末産業之儀早速遂詮議御達可申上旨被仰渡、夫々詮議仕候處、兩所惣家數百六十軒計、遊女二百人餘り罷在候に付、先遊女之儀、親元等有之者は夫々相返、都而不筋之取扱無之樣急度申渡度儀に御座候處、一通り申渡候而已に而者、元來是迄永々之商賣方与相心得、遊女連越入用も一二貫目計差出候者共も有之、店により五七人抱置候者も御座候。尤多少高下茂御座候得共、何れ此度俄に商賣被指止候上、右樣女其儘に而親元へ相返候樣申渡に而者、最初過分之銀子等差出置候事故、彌増損亡之儀に付、他領へ賣遣候儀も難計、左樣御座候而者、親類等歎之程難忍、此度御口達を以被仰渡候御趣意にも相背申儀に御座候間、此所何とか御救方無御座而者、前條難申渡儀に奉存候。依而右御救方之儀、精誠遂詮議候處、四十貫目計御救銀御渡御座候へ者、右抱女有付方、及商賣本手配當可也相辨可申与奉存候。少々過分之儀に御座候へ共、此上相減候而者、必密に不仕抹之取扱方抔仕出候儀も無覺束御座候間、何分格別御詮議御座候而、早速被仰渡御座候樣仕度、其上に而夫々仕抹方可申渡与奉存候事。

右紙面、町奉行遠藤數馬出之。委曲紙面之通候間、何分早速御詮議御座候樣仕度旨申聞、精誠相減御達申候間、無御減少御聞届有之候樣仕度旨申聞。

此紙面廿二日御勝手方へ遣、詮義有之候樣申遣。

八月廿八日。兩茶屋町を廢したるを以て當業者を救濟する爲銀子四拾貫目を與ふ。

〔成瀨氏藏文書〕

八月廿八日

一、茶屋町御取扱之僉議、御算奉よりは三十貫目と申聞候得ども、段々詮義之上四十貫目町奉行願之通承屆、且右に付外願之筋無之樣、分而口達に而申渡、覺書江守要人江相渡。外願之筋とは、最初茶屋町出來之砌、當町身元宜者より銀子指出置、年々運上銀に而遂指引來候處、今般御指止に付、右出方無之、願之筋も有之樣子に付、分而此段申渡。右は身元宜者故指而難儀も有之間敷、且是迄多分利合も取候事故、押而右之趣申渡。

御算奉は御算用場奉行

〔兩茶屋町一件〕

町奉行江

今般兩所茶屋町被指止候に付、是迄右致商賣居候者共、此末產業取續方之儀、差當り何と歟御取扱無之而は難辨旨、各紙面被指出、無據相聞え候。依之格別之趣を以、銀子四十貫目爲御救相渡候條、右を以如何樣共取扱仕抹可被申付候。且此後茶屋町之儀に付、願筋間敷儀無

之様可被相心得候事。

八　月

八月廿八日御勝手方ゟ御呼立、要人被出候處、右之御書付御渡。

〔兩茶屋町一件〕

今度兩所茶屋町被指止候に付、何も俄に商賣取付方等無之、彼是可爲難儀。依之御救之儀、段々相願置候處、格別之趣を以御聞屆之上、銀子四十貫目爲御救被下之候條、以來産業之儀無油斷可相心得候。且又抱女有付方之儀も、迷惑之筋無之樣取計可申候。

右之趣夫々申渡候樣可被申渡候、以上。

天保二年八月　　遠藤數馬

藤田吉左衞門殿

〔兩茶屋町一件〕

今般兩茶屋町御指止に付、何も俄に商賣取付方等無之、彼是難儀可仕。依之御救之儀段々御願被爲成下候處、格別之趣を以御聞屆之上、兩所茶屋町之者共へ銀四十貫目爲御救被下之、御以來産業之儀無油斷相心得可申旨、且又抱女有付方之儀も、迷惑之筋無之樣取計可申旨、御書立を以被仰渡、奉得其意、夫々申渡候處、一統冥加至極難有仕合奉存候段申聞候。仍而私

共より御受上之申候、以上。

天保二年八月二十八日　主附肝煎　伊右衛門

同　忠藏

同　庄助

町御奉行所

〔兩茶屋町一件〕

今般兩所茶屋町御指止に付、是迄右致商賣罷在候者共、此末產業取續方爲御救銀子四十貫目拜領被仰付、則夫々申渡候處、難有仕合冥加至極に奉存候旨申聞候。爲御禮町役人ども私共宅へ罷出申候、以上。

天保二年八月晦日　遠藤數馬

江守要人

成瀨掃部殿

〔兩茶屋町一件〕

覺

一、三十三貫三百目　家持　百十一軒

但、一人三百目宛
一、九貫百八十目　店借　五十一軒
但、一人百八十目宛
一、四百八十目　闔內に而稼罷在候者　八軒
但、一人六十目宛
〆四十二貫九百六十目
此方ゟ
四十貫目　今般御上より被爲下候御救銀
殘而
二貫九百六十目
此分茶屋方御勘定餘り銀、御場へ預け置候分之內より御足御渡之樣仕度奉願候。
天保二年九月

八月晦日。前田治脩夫人の第十三回忌法會を江戶廣德寺に行ふ。

是月は大盡なり

法梁院の忌日九月晦を繰上げ執行せるなり

〔諸事要用雜記〕
八月十五日

覺

一、當月晦日於廣德寺法梁院樣十三回御忌御法事御執行之節、不作法無之、異論不仕樣、人々家來末々迄堅申付、尤供之人馬指置候所々、警固足輕相廻可申候間、違背不仕樣是又急度可申付候事。

一、御法事役懸幷請人往來裏門より致出入、門內召連候從者之儀、前々より不多樣相心得、尤減少召連候儀勝手次第に候事。但、依役儀從者雖省人々は格別之事。

一、御法事卯中刻に候。請人揃刻限之儀は、朝六時打次第御屋敷出、不遲御寺へ相揃可申候事。

一、御法事に付當廿八日より晦日迄鳴物遠慮之事。

一、御作事方御當日相止可申候。前日も不急儀は差延可申候事。

右之趣夫々可被相觸候事。

八　月

付札、御橫目江

今般法梁院樣御法事之節、格別御省略之御時節に付、御寺請人御步並已上江御賄被指止候。足輕已下は御賄御寺に而引受被下候條、夫々可被申談候事。

〔諸事要用雜記〕
八月三十日
一、今日御廟雨天に付御延引被仰出。拙者御先詰可罷出處、点先水原に付、御廟上下御供之分御先詰に直り、拙者は不罷出候事。
一、九つ八分廣德寺江御參詣被遊、八つ八分御歸殿被遊候。讀經中に付暫く御見合被遊候由之事。

九月四日。前田齊泰平尾邸に赴く。

〔諸事要用雜記〕
九月四日
一、今日御下屋敷江御出被遊、拙者并水原御供に罷出る。五時過御出、六時前御戻り被遊候。御居間之御土藏脇小口より御出候也。巣鴨通り指支、駒込より王子道より被爲入、松平甲斐守殿下屋敷過御鐙等御跡江落す。其處より御馬沓拂御早乘被遊、拙者御先乘相勤る。上野鹿毛、御時宜役山森氷室鴾毛、御左に上坂浦風、御出前被仰出候節伺置。外に山崎小右衛門騎馬御供、御先拙者迄に付同人御先可然与之示談伺、則御供廻り之時分罷越、右場所に待合居申候

而、御先乘拙者之次を乘候。配膳役坂井・荒木・高田善右衛門騎被仰付、是は御行列指續罷越、御早乘之時分御側ゟ進み候。王子稻荷前迄被爲入、同所社御馬上に而御覽。御行戻り飛鳥山に而御下馬、同所山ゟ御上り暫御遊覽。無程御行列追々相揃宜候に付、其段申上、御下り御馬上に而瀧の川村被爲入、道細き所御歩行も被遊候。天氣合宜、御慰に相成候事。

一、先月被仰出候通、輕く御膳所相立候。御小重詰・御くわし等。御膳所に而御認御もたせ。眞龍院様より御提重御鈴通被進、夕景御亭に而被召上。右之御くわしは御船に而被召上、御餕御側へ頂戴被仰付。御亭に而也。御供之御表小將も、御亭二之間御先詰之人々に指續列居頂戴する。御庭之内始終御表御小將被召連、御庭拜見御禮承受申上る。

一、夕方御供廻り被仰付、御横目より夫々申談る。御戻り御道僉議之處、御早乘に而無之候はゞ御支なき由に而、毎も之御道より被爲入、御上屋敷寄に而御提灯立。當時所々道造也。

九月六日。前田齊泰夫人江戸城西丸に上る。

〔諸事要用雜記〕

九月六日

一、今日年頭初而西丸ゟ姫君様御登城被遊候事。

九月六日。金澤に於いて阿武松緑之助に相撲興行を許す。

〔毎日帳書拔〕

九月六日

一、能州出生相撲取阿武松と申者、他國において仕上、弟子同道生國へ罷越候。幸此表に而角力興行之儀、町方より相願承屆候。右弟子之內他國者も有之樣子に候得共、是迄度々振も有之に付、興行中爲差置候由町奉行申聞候事。

〔年々珍敷事留〕

一、當秋輕き者共取續之爲之由にて、本締仕る者有之、淺野川河原に而角力興行あり。日本大關阿武松、次に緋縅力彌等參り、大角力有之也。

九月十一日。前田齊泰、慶寧の將に宮參を行はんとするを以て馬及び鎧を贈る。

〔諸事要用雜記〕

九月十一日

一、近々犬千代丸樣御宮參に付、今日庄兵衞殿御使者に而鹿毛斑御馬被進。御拵奥之口敷付

に牽上、其處に御出宜段申上、追付被爲入御覽被遊候。御召替喜例澤鹿毛は御暇建に而被進候。

御馬具附

御鞍鐙　御傳之御宮參御分之由南天模様御定紋

御三緘　猩々緋

泥障紐立聞　紅

御泥障　熊毛

御鞍覆　黑びろうと白羅紗御紋

御太覆　猩々緋

御手綱　紫縮緬

御鞦　御傳之御分之由鏡に御定紋すかし

一、御鑣御用部屋山口氏御使者に而被進候。

御對　けしがら

御持柄　わらび手

御薙刀

右御馬之御使者江は大分御作法有之、御奥於御書院御直答之由、御時服二つ拜領之由。

九月十二日。前田齊泰能を催す。

〔諸事要用雜記〕

九月十二日

一、今日御能有之、備後守樣・出雲守樣・大和守殿被仰遣候へ共、備後守樣御父子は御斷、大和守殿にも御斷、出雲守樣迄御出也。御見物所に而御菓子出る。

一、今日觀世方弟子被爲召、實盛・海人被仰付候。實盛は日吉市十郎、海人は福王甚五郎此の甚五郎若手上手也。野村万藏當時暫此表に相詰居、狂言之内二番被仰付候。

九月十三日。前田齊廣の女勇姬金澤を發して江戸に赴く。

〔官私隨筆〕

九月十二日

一、明十三日勇姬樣御發輿に付、今日御機嫌相伺候樣にと昨日御用番より被申越候付、今朝四時過御廣式へ參上、以土肥權五郎相伺候。

但、益御機嫌能被成御座旨也。

〔見聞袋群斗記〕

九月十三日勇姫様金澤表御發輿、同十月四日江戸表江御着、御本宅に御住居なり、

九月十五日。野田山なる藩侯の墓地附近にて茸狩をなすことを禁ず。

〔坂井舊記〕

野田山へ茸狩等に罷越候儀は、遠慮可仕儀に候處、近頃御廟邊に遊山人有之躰相聞、不敬之至に候條、彼邊へ茸狩等に罷越候儀は可有遠慮候。折々足輕も相廻し、爲致見分候筈に候間、可有其心得候事。

九月十五日　長又三郎

長瀨善左衞門殿
小堀八十太夫殿
久世守衞殿

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

九月十五日。金澤に於ける茶屋町を廢したるを以てその木戸を撤す。

〔兩茶屋町一件〕

今般兩所茶屋町御指留に付、今日木戸爲取拂候條、爲御承知申進候、以上。

天保二年九月十五日　江守要人

澤田義門樣

御橫目衆中

御普請奉行衆中

〔兩茶屋町一件〕

一、兩茶屋町木戸今日取拂申候段、口達に而堀覺之丞を以及御達候事。

但、抱女共追々退かせ、今少々相殘居申者も有之候得共、先づ此等は下女分にいたし、此後追々退かせ申譯に御座候。且茶屋町と申儀、町名改可申哉之旨、先達而鈴木五兵衞より心付御座候。此儀は遂詮議候處、先年則茶屋町と申候事故、其通りいたし置候。石坂新地は先年石坂町と申候間、先年之通り石坂町にいたし置候筈に御座候段、若し御尋も有之候はゞ御達候樣にと申入置候事。

天保二年九月十五日

九月十六日。兩茶屋町を廢せられたるを以て抱女の處分に就き上申す。

〔兩茶屋町一件〕

乍恐申上候。

一、私共儀茶屋商賣仕罷在申候處、今般茶屋商賣御指止被爲仰渡、俄に商賣取付方無御座、

難儀至極仕候旨段々御願被下、格別之趣を以從御上御救銀一統へ拜領被爲仰付、誠に冥加至極難有奉頂戴候。且抱女之儀、迷惑之筋無御座樣可取計旨被仰渡、難有奉得其意候。就夫先達而より抱女多分親元等へ指遣候得共、兎角人多之儀故、未示談中に而在付兼申、此分在付方御座候迄、無是非當分私共引受、下女分に仕置、有附方無油斷穿鑿仕、示談整次第追々親元等江指遣可申候得共、極々有付方六箇敷分在之候はゞ、其節在付方等之分御願可奉申上候筋も可有御座候間、宜敷奉願上候。左候得ば最早木戸御取拂被仰付被下候樣奉願上候。曁私共一統產業之儀、追々存方何商賣に而も御願可奉申上候。其節は宜敷御詮議被爲成下候樣、一統奉願上候。此段被爲聞召上、願之通り被仰付被下候はゞ、難有奉存候、以上。

茶屋町越中屋孀はつより土屋彦六まで

天保二年九月十六日　九拾八人判

石坂町新地改瀨屋與兵衞より越中屋又右衞門まで

五拾壹人判

町御奉行所

右越中屋孀はつ等書付出申に付上之申候、以上。

肝煎忠藏

同　庄　助
主付肝煎　伊右衛門

九月廿二日。前田慶寧宮參を江戸富士社に行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月廿二日

一、今日犬千代丸樣御宮參に付、六半時御供揃に而、五時過御出、富士社江御社參。御前に茂同刻御供揃に而、犬千代丸樣御出後御出、御中屋敷へ被爲入。無程犬千代丸樣富士より御屋敷江被爲入、御書院において御祝方御三獻御祝、御兩殿樣御一集に被召上、相濟、御吸物是又御一集に御祝有之。無程御供廻り、御先御歸殿被遊候。犬千代丸樣御出前に御庭江も被爲入候。御先詰、御用部屋高田善右衛門、御近習頭方に而河村彌右衛門、奥小將方に而拙者、配膳役四人罷越候。御三獻御給仕、服長袴之事。

〔官私隨筆〕

十月五日

一、前月廿二日犬千代丸樣御宮參に付、朝六半時之御供揃に而、五時過御廣式御門より中御門御通大御門へ御出、富士社へ御參詣相濟、御中屋敷へ御立寄被遊候。中將樣に者右御出後

追付御供廻に而、御中屋敷へ被爲入御待請に而、於御奥御書院御三献等御祝方御座候而、天氣相も宜敷御都合能被爲濟、中將樣に者御先へ御歸殿被遊、犬千代丸樣に者御跡より御戻り御座候。備後守樣・出雲守樣早朝御出、表御式臺へ御見立御出、御出入衆も御越御見立有之、坊主衆も同樣。何れも御待受、夫々御料理差出　備後守樣初は一先御退出に而、晝後重而御出、其節は鍛太郎樣も御出に而御料理出申候。且又大奥へ女中御使を以御献上物被差上、御住居へ女使御出に而、中將樣・眞龍院樣・犬千代丸樣へ公方樣御初より御拜領物別紙寫之通有之。右爲御禮中將樣八半時過御出、兩御丸御用番之御老中方御勤被遊、萬端御都合能被爲濟候段、同廿四日江戸町飛脚同廿五日發足、早飛脚歩を以、山城守殿等より只今申來候由。且又右に付江戸表方々樣へ、今日之日付に而九日出御祝詞可申上、此表方々樣へは、明日は御日柄に付明後六日御廣式へ罷出御祝詞申上候筈之旨等、御用番紙面十月四日附也。今朝又兵衞殿より到來、名之下承知書いたし遣之、右別紙左之通。

中將樣へ御表向公方樣・內府樣・大納言樣・御臺樣・御簾中樣より

干鯛一箱充。

眞龍院樣へ御五御所樣より

同斷一箱充。

思召品公方様より中將様へ御文臺・御硯・御小肴一臺。
内府様より御花生・御花臺・御小肴一臺
御臺様より御袴地・御小肴一臺。
御簾中様より御さげを・御小肴一臺。
公方様より眞龍院様へ御たばこ盆・御小肴一臺。
内府様より御鼻紙臺・御小肴一臺。
御臺様より御文庫之内紋縮緬二反・御小肴一臺。
御簾中様より同斷。
犬千代丸様へ御表向公方様より縮緬十卷・鯛一折。
内府様より鯛一折。
大納言様より鯛一折。
御臺様より縮緬五卷・鯛一折。
御簾中様より鯛一折。
御内々に而公方様より御置物・御卓・御交肴。
内府様より御刀掛・御交肴。

御臺樣より御文庫之內縮緬三反・御交肴。
御簾中樣より御文庫之內八丈嶋二反・御交肴。
御献上物中將樣・眞龍院樣より公方樣・內府樣・大納言樣・御臺樣・御簾中樣へ
一種充。
犬千代丸樣より公方樣へ卷物五・鮮御肴一折。
內府樣・大納言樣へ鮮御肴一折充。
御臺樣へ卷物三・鮮御肴一折。
御簾中樣へ鮮御肴一折。

〔恭敏公記史料〕

九月二十二日。詣富士祉。過中邸。將軍使女使花園。賜縮紗十卷鮮鯛一折。內大臣大納言亦使清岡。貽鮮鯛一折。將軍夫人內府夫人使阿類、貽縐紗三卷鮮鯛一折。大納言夫人使袖川貽鮮鯛一折。公献物亦准之。

九月。金澤城奧御納戶御土藏の金子賊の爲に奪はる。

〔諸事要用雜記〕

九月十七日

一、金澤奥御納戸御藏へ賊入、當八日に三十人小頭御土藏破れ有之儀見付、夫より御城代御見分等、同席詰も有之由。紛失高金二百九十兩餘之由。同席より紙面に申來る。

〔江戶狀留書拔〕

九　月

一、奥御納戶御土藏破り有之、賊入込候躰に而、金貳百九拾兩餘紛失之由。右に付御近習頭一人泊番、御橫目足輕爲致張番置候處、御修復出來に付張番相止、致泊番繁々爲見廻候旨、時々石野雅樂助申聞候段言上。

十月四日。前田齊廣の女勇姬江戶に着す。

〔諸事要用雜記〕

十月四日

一、今日九半時過勇姬樣御着輿被遊候。

一、右に付御着之上御席江出恐悅申上る。

〔官私隨筆〕

十月十一日

一、勇姬樣益御機嫌能御旅行、當四日未之上刻御着府被成候段、山城守殿等より申來候旨、

今日夜に入御用番より紙面到來。

十月四日。金澤の途上にて女を傷つくる者あるを以て逮捕せしむ。

［御家老方諸事］

十月四日

一、左之通表方より演述に付、内記方へも寫遣し候事。

御横目江

於途中刄物に而往來之女を突候者毎度有之、人命にも障候程之儀も有之躰相聞え、不届至極に付、御家中を始家來末々迄幷町方に而茂、右樣之者見懸候はゞ無泥召捕、夫々及斷可申。尤右所業疑敷者心付候はゞ斷出可申旨、文政九年一統相觸候處、其後相止居候。然處近頃又々刄物に而往來之女を突、中には深疵も有之、且女之帶を切候儀も度々有之躰相聞え、不届至極に候條、文政九年申渡候通、嚴重相心得可申候。召捕候者有之候はゞ、其者に寄御褒美茂可被下、若隱置脇より相知候はゞ可爲曲事候。

一、右躰之儀におよび候而も、屆方等面倒に存候哉、斷出不申者も有之躰相聞え候。左候而は彌以知兼候儀條、以後は少之事たり共、急速先盜賊改方江直に內達可致候。

一、月無之に無提灯に而往來之者多有之躰に候。提灯燈不申其躰紛敷者は、月夜たりとも役

人見合次第改方役所へ引揚可申候。

右之趣一統可被申談候事。

十　月

十月五日。江戸邸に藩侯一門の來れる時給事人の用ふる上下を龍紋裏付と定む。

〔諸事要用雜記〕

十月五日

御給事服之事に付申談候趣

御一門樣方御出、御裝束直り、御給事人服相改候節等、裏付上下之事文政五年之談には左之通に相成。

裏付上下着用之處、以後は奥島裏付上下に而も可宜候。但繼肩衣入交候而も品により不苦由。

御給事袴之儀、是は多分不押立御給事之服に候間、本ひだ・取捨入交候而も不苦。且是迄龍紋裏は茶宇之下品之處、又は郡內に而も宜候。

右之通に候處、近年先御在府にも繼肩衣に相成居、尤右之通に而不苦候得共、一統繼肩衣与心得候而者前々振とも品違、御作法書にも裏付上下与有之事。是迄之心得方久之助迄相尋候

當りは當然の義
御兩樣は富山大聖寺二侯

處、尤右心得に候得共、入交候も見分如何に付、先御在府小谷迄達、一統繼肩衣之事に致、只今も其心得之由に付、左樣に而は前々之形も忘失之事、其上品により繼肩衣と有之候へば、先當りは龍紋又は奧島上下、品に寄と申は朔望など御兩樣に而も御出、常服之給事之節之儀に而可有之。御一門樣方御出御作法も有之節は、やはり已前之通龍紋又は裏付にいたし度もの。併先御在府に茂繼肩衣用ひ候事に候間、繼肩衣不相成と申に而はなく候へ共、右兩樣之内絶候而は行々手廻し宜き品に流れ候樣に相成可申。見分之處迄拘り候儀に候はゞ、右龍紋等之兩品之内に極候が宜、繼肩衣など用ひ候樣に成候而も如何成もの。併是迄もヶ樣に近例成居候事、拙者儀は龍紋等之古例失候儀は不望と存候由。猶中間中少与示合候樣申入置候處、此間委曲示合候處、前々形流候樣之儀は拙者心付候通に候間、當時龍紋所持之者も有之事、裏付之奧島と拙者申聞候得共、同くならば龍紋にいたし候へば前々之振に候間、何茂右小紋裏付に改可申候。併奧嶋・繼肩衣省き、一統小紋に揃候儀も御主意に外れ候儀も可有之哉与被申聞候に付、其儀は聊有間敷、文政五年之談は廣く相成、尤其時節は見分などに拘り候樣之心得は無之節に而、只今とは又時節も違候事。拙者には申入候は奧嶋上下と繼肩衣とはさのみ見立も不致儀、一時に小紋裏付上下に改め候も煩敷儀に付、右樣申入候旨申入候處、何れ近年加樣に相成居候事改め候節は、いつとも加樣成ものに而、過半所持のものもす

見立は目立なるべし

くなき事。只今裏付奥嶋に仕候へば、先々裏付小紋上下やはり失候儀。依而龍紋裏付に心得可申候。入交候は何れ見分如何敷候間、何茂相揃候上は繼肩衣之心得に而、何も裏付小紋上下用ひ可申候由被申聞候に付、文化八年頃も龍紋と奥島上下は入交候由承傳居候間、此後とても右兩品入交之儀は一向不苦敷由に申入置候間、當時所持之もの之內小紋幷裏なども已前用ひ來候分とは違候分も有之、是等も如何と被申聞候に付、ひだも本幷取捨入交之事、當時に而者小紋之遠幷裏黑に而も不苦敷、尤見立小紋は遠慮可有之儀に候得共、當時上下御供抔に用ひ候樣之不見立小紋は入交候而も宜由申入置候。金龍院樣被仰出にも、是迄之姿失不申樣之思召も有之、御給事上下など已前之七へんのり之通り之見分に相成居候事に候へば、御給事袴不押立と申而も、一統繼肩衣に成候而は、文政五年之文段とも致相違事に付、段々相考候處、當時龍紋所持之分人々も一兩人有之而も、着用いたしがたき樣に成、後には御給事に龍紋又は奥島之上下など申事は氣も付不申樣に成可申候。旁人々手前も少煩敷事には候得共、畢竟格之流候事と存候に付、右之通申談候。曁御大小將抔は文政之初初而御出府之時分、金龍公より段々被仰出相改候得共、其通にも御公界不相成とて改り候哉、當時朔望には御給仕役龍紋裏付上下着用之事に相成候。前文之通に候へば、御表小將方も追々前々之振に相成、必龍紋に相揃可申候。

彌五郎は寶生

十月六日。前田齊泰能を演ず。

〔諸事要用雜記〕

十月六日

一、今日御慰御能有之。御舞臺かた衣也。今度御宮參被爲濟候御祝儀之筈之處、右は御當日御料理も被進候譯に付、常御能に成る。彌五郎如元御出入後初而罷出る。御前野々宮被遊候。

十月二十日。前に茶屋町に在りたる者の新營業に對する租稅は今年限り之を免除すべきことを告ぐ。

〔兩茶屋町一件〕

今般兩所茶屋町之者共之內、後商賣願出承屆候。仍而役銀當年之處半年分取立可申筈に候得共格別令用捨、來辰年より一統並之通可指出。且小料理之儀は料理商賣之半役可指出候。右之趣商賣肝煎共へ可被申渡候事。

天保二年十月二十日

十月廿六日。前田齊泰、盛岡侯南部利濟を訪ふ。

〔諸事要用雜記〕

十月廿六日

一、今日信濃守樣江緩々御出被遊、御能も被仰付候筈。御先詰先御在府之通同勤より一人罷越候樣別席より談。配膳役も一人、是は比良氏被伺談。且御進物有之、拙者御使者僉罷越候。御品物昨日同席迄夫々被引渡、御長持持參人等夫々例之通申遣候。五時御供揃に付三つ鐘に出、坂井要人御先詰に付同道罷越。御進物之御長持先に遣、御門に而御使者之段爲斷、刀渡上り候處、直に御先詰之溜へ誘引有之に付通り、御近習頭江逢申度旨申述候處、手札乞候に付相渡、追付御近習頭□田權太夫罷出候に付、被進物御品付調持參、今日御出に付御内々被進候。宜時分御披露御座候樣申述、姓名申入候處、御直に御對顏可被仰入、分而御返答は有御座間敷旨申聞退き候。無程御出、御盃事等相濟。御召替御用之旨利倉等申聞候に付、御廣蓋借用、御召替のせ持參御休息へ上候處、其處へ御出に付御定服に御直し被遊候。夫より信濃守樣御目見被仰付候段あなた御家來申聞、拙者并田邊左兵衞・神戸甚兵衞三人罷出。御意有之、御禮御取合之方へ申入退き候。御料理等頂戴被仰付、御能御供頭等三人迄拜見被仰付候。備後守樣・出雲守樣・鍛太郎樣にも御出被成候。今度御囃子等不被遊候。夜四半鐘御戻り被遊候。御戻り之上、段々之御禮あなた頭役江申述候。御飾付并御白洲へ出候人々名書坊主衆より指越候。罷歸り直に御殿江出、頂戴ものゝ御禮并御飾付書共指上候。御進物引渡候旨も申

上候。

被進候品々

御鍔　一箱　御文臺　同

右信濃守様ゟ

御末廣　一箱　御菓子　同

右鋌(カナ)丸様ゟ

一、鋌丸様今日初而御對顔、御盃事被遊候。信濃守様御盃事は、平井示合之上御斷に相成候、且鋌丸様より御鐙・御鞍被進候事。御番組左之通。

鷺　鋌丸様　通盛　壽八　花筐　信濃守様

安宅　彌五郎　當麻　平兵衛

延年之舞

松脂　花子　空腕

十月廿九日。本郷邸に大神樂を観る。

〔諸事要用雜記〕

十月廿九日

一、今日於御馬場大神樂參り、御奥御馬見所下に而有之。同席望次第見物之儀、御用部屋談有之。何も見物仕、御禮奥御取次を以申上候。御廣式ゟ之御禮は御用部屋ゟ申述。彼方より引受御禮申上る。

一、右御側廻り見物被仰付候事。

十一月四日。前田齊泰及び齊廣夫人等駒込邸に赴く。

〔諸事要用雜記〕

十一月三日

一、御中屋敷ゟ明日御出被仰出、御出口坂下御門より被爲入候趣、御番頭・御横目同じ伺被仰出。

一、右御出之節御馬氈懸可申哉御中屋敷には無之由。御召替もなし。御中間小頭伺。其通被仰出申渡。

十一月四日

一、今日眞龍院様・勇姫様王子稻荷ゟ御參詣、夫より植木屋御通抜御中屋敷ゟ被爲入。御前に茂九時之御供揃に而王子被爲入候。御程近に而御居間先御土藏脇小口より御出九半時也。御庭通御馬に而被爲入候。夜六時過御戻り之事。

十一月十四日。勇姫入輿以後の經費に就いて議す。

本文は幕令なり

大目付ゟ

古金銀・二朱判引替相殘候分餘程有之眞字貳步判は引替之儀相觸候後間も無之候得ば猶更殘高茂多候に付、引替所之儀當卯十月迄被差置候段先達而相觸候處、いまだ眞字貳步判共外古金銀・二朱判茂引替殘有之候に付、引替所之儀猶更來辰十月までは是迄之通被差置候。然る處先達而より追々相觸候通、是迄遠國之分引替方捗取候ため、古金銀・貳朱判內差出候ものゝ住所より、金銀座幷其最寄引替所ゟ道法五里餘相隔、一度に金は五百兩以上、銀は拾貫目以上、貳朱判は貳百兩以上差出候ものゟは、里數幷差出高に應じ道中諸入用被下候處、當時に至り候而は古金銀・貳朱判共國々殘り高相減、一度に道中諸入用被下候程之高差出兼、其以下銘々自分入用を以差出候もの多く有之候に付、以來は古金銀・貳朱判とも如何程の差出高に而も、道法五里相餘隔候ものゟは、是迄割合を以里數幷差出高に應じ道中諸入用被下候筈。其外眞字貳步判は是迄道中諸入用不被下候處、以來は古金銀同樣眞字貳步判差出候ものゝ住所より、金座幷其最寄引替所ゟ道法五里餘相隔候ものゟは、是又差出高之多少にかゝはらず、一里往返分百兩に付銀五分宛之割合を以、里數幷差出高に應じ道中諸入用被下候筈に候間、古金銀・貳朱判・眞字貳步判共所持之ものは、少分之高に而も早々最寄引替所ゟ指出候樣、御料は御代官、私領は領主・地頭に而猶更厚世話いたし、來辰十月迄に不殘爲引替候樣可致候。若此上

にも貯置不引替もの於有之は、吟味之上急度可申付候。

右之趣可被相觸候。

十　月

十一月十六日。諸士に努めて文武學校に出席すべきことを諭す。

〔坂井留記〕

武藝出情方等之儀に付、別紙兩通之通被仰出候條、右御趣意得与致會得、組・支配之人々へ嚴重可被申談候。若此上にも立戻り候樣相成候而者、各申談方不行屆樣にも相當り候條、無油斷承糺、若心得違之族も候者、其時々申諭、以後稽古人怠り處へ至り不申樣有之度儀与被思召候。若幾重に被申諭候而も、無謂怠り候人々有之候者、無泥可被申聞候事。

十一月

武藝出情方之儀被仰出之趣、別紙之通に候。文學校之儀、講日之外者近頃相應に出座も有之候付、分而被仰出者無之候へ共、諸組共組當り講日出座人次第に相減候躰聞召候。併中に者數年不怠出座仕人々も有之候由、此儀者奇特に被思召候。前段之通出座相減候而者、講日被建置候御詮も無之候儀に候條、頭・支配人得与相心得、以後不絕出座有之候樣に可被申談候。

此段可申渡旨被仰出候事。

十一月

武藝出情之儀先年以來每度被仰出等有之候所、其砌暫者武學校幷師範人宅々も出座人も相增候得共、無程出座も薄く、別而近頃は相減候躰に被聞召候。乍去中に者隨分心懸宜人々も有之躰に候得共、又怠り勝に相成候人々も有之哉に相聞え候。右之通成行候而者、武學校被建置、稽古方自由に被成置候御詮も無之候。武藝之儀は、年若成人々は別而心懸可有之事に候得者、無息之人々抔は、其父兄等より無油斷申諭候者可行届儀に候。是迄度々被仰出等有之候へども、誠に一旦之出情に而、程經候得者立戻り候者、畢竟其父兄等申談方等閑成故与被思召候。近年御家中之人々、風俗等之儀に付格別被仰出之趣有之候故、人々油斷者有之間敷候へども、今般被仰出之趣も有之候條、先年より被仰出置候御趣意急度相立候樣、組・支配之人々江被申諭、以來各於手前情不情之樣子時々遂穿鑿、永久右御趣意相通候樣綿密に可被相心得候。此段得と可申談旨被仰出候事。

十一月

武藝出情方等之儀に付、今般被仰出之趣、別紙之通御覺書を以、學校御主附播磨守殿御渡に付、寫之通相達之候條可被得其意候。武藝等出情方之儀は度々被仰出等有之、其時々申談置各御承知之通に候。然處近頃又候武學校等稽古人出座相減、文學校茂講日出座人追々相減候

に付、今般格別に被仰出、永久相弛み不申樣に与之御趣意に候條、此所得と被致會得、子弟之面々ゟ茂念頃に可被申諭候。右御覺書之內、以後拙者共於手前情不情之樣子時々遂穿鑿、右御趣意永久相通候之樣綿密可被相心得旨被仰渡、且別段被仰聞候趣も有之、自然此後又候立戾り、怠りに至り候而者奉恐入儀に候。元來子弟之面々稽古方情不情之儀者、父兄之覺悟に寄申儀に候へば、御趣意之程得と被申諭、無油斷出情有之樣可被相心得、尤各儀も御用透被心懸候儀申迄も無之候得共、纔一月一度之儀に候間、當日御番等に指支難被罷出候節は、次之講日不時に出座有之、何分已後者例月懈怠無之樣可有御心得候。且武藝之儀情不情時々穿鑿方、何分行屆兼申儀に候條、已後は折々諸稽古出座之樣子相尋可申候條、其時々各幷子弟方茂、武學校曁諸稽古所へ出座方委細可被書出候。夫を以情不情之樣子承糺可申候。銘々志に寄一藝に偏り執行之方も可有之、又老輩之方は折々爲見學被罷出候方も可有之儀勿論に候。夫等之趣其時々具に可被書出候。

一、山河殺生之時節は、武學校等出座格別相減候之樣子に承及候。殺生之儀、折々透を計り罷越候儀は格別、萬事打欠被罷越候樣之儀者有之間敷儀に候。若已後不心懸之人々有之、自然御揆當有之候而者、誠に不容易儀に候之條、今般被仰出之趣急度被相守、子弟之面々ゟ茂嚴重被申諭、已後無油斷可有御心得候事。

十一月

學校方御主附、播磨守殿より被仰談儀有之候條、今日越後屋敷へ可罷出旨昨日御紙面に付罷出候處、寺社奉行初一役一人充御呼立、於對談之間、播磨守殿別紙之通御渡、是迄武藝稽古出情方之儀被仰出候へ共、其刻暫は武學校等出座も相增躰に候得共、程經候へ者立戻り怠り勝之躰、御心外に被思召候旨被仰出、又候今般段々被仰出候儀に候間、以後之儀頭・支配御趣意得与申諭、無油斷可致指引旨譯而被仰聞候に付、爲御承知別紙寫相廻申候。依而組中へ申渡之儀、一統呼立申談、御書立等寫筆頭ニ相渡、廻達候樣申談可然哉と存候。御書取之內、各申談方不行屆樣にも相當り候与有之所を趣意にいたし、何与歟書添を以申談可然にも存候へども、迚一旦申談候而已に而行屆申儀に而も無之候間、前文之通一統申談置、以後折々及心付候方深切に可有之哉与存候付、廿五日寄合に而御熟談とも存候へども、諸組共同役之方を目當にいたし、申談方被見合候樣子に今日も承候故、餘り延引も如何歟先づ致廻狀候。併何卒取締能申談方も可有之哉、猶各樣思召被仰聞候樣致度、御下書早く致承知度候間、其御心得に而御廻達可被返下候、以上。

十一月十六日　坂井小左衞門

同役中

〔官私隨筆〕

十一月廿二日

一、此度學校御奉行迄被仰出之趣有之、諸頭へ別紙寫之通申渡有之由に而、拙者共へも爲心得就到來寫相達候條、相組中可有御傳達候。

文武出情方之儀、前々被仰出も有之候へども、程經候へばとかく怠慢勝相成候付、頭・支配人等相心得、組・支配へ申談、其身暨子弟之儀も無油斷申談候樣にと之御趣意に候。各御子弟も、年若之御面々は無油斷出情可有之事に候間、其御心得尤に候。各之儀は、强而學校へ御出情なくて不叶と申儀に而は有之間敷候へども、今般被仰出も有之上は、御子弟勵み之爲にも可相成事候間、御心懸次第御出座尤に候。御子弟之儀は、何分にも無油斷御心得可有之、且又文學校講日之儀は各御組當定日も被建置候事に候間、御心得も可有之事に候。是等之趣も相組中へ御傳達候樣にと存候事。

十二月朔日。前田齊泰參議に任ぜらる。

〔穩樂齋隨意集〕

十二月朔日

御座之間御上段、公方樣・內府樣御着座。

右御出席。尾張樣。御老中御披露、上意有之。御敷居之内御左之方御着座、當日之御祝儀被仰上、上意有之。少々上之方へ被爲寄候時、被任中納言候旨、上意有之。御禮被仰上、御老中御取合申上、御退去。

御　名

同斷上意有之。被任宰相候旨上意有之。御禮御老中御取合被申上候。

〔諸事要用雜記〕

十二月朔日

一、今朝六つ六分御出、兩御丸御登城、御城に而被仰出、老若御廻勤被遊、右御廻前和田倉御奥ゟ御立寄被遊、八半時過御歸殿之事。

和田倉御奥は前田齊廣の女、南部利用の夫人

一、今日宰相御拜任被仰出候段、久之助御左右承り、四半時過罷歸り候事。

〔諸事要用雜記〕

十二月朔日

一、御弘之趣有之旨に而御横目中申聞、則罷出候處、左之通御弘有之候事。

昨日御老中方御連名之依御奉書、御登城被遊候處、於御座之間御懇之上意、其上宰相御拜任被仰出、重疊難有被思召候。此段何茂ゟ可申聞旨御意に候事。

〔見聞袋群斗記〕

十二月朔日宰相に被任、御坐之間に於て御直に被仰出。此の時表向御歳御廿三歳なり。

〔續德川實紀〕

十二月朔日、月次の賀例のごとし。尾張宰相齊溫卿中納言に、松平加賀守宰相に任ず。

十二月朔日。前田齊泰參議に任ぜられたるを以て廣德寺の廟に之を奉告せしむ。

〔於江府每日書立幷日記之內書拔〕

十二月朔日

一、四半時過御城より御表小將早乘に而罷越、今日宰相御拜任被仰出候段告來候旨、善右衛門演述候事。

一、宰相御拜任に付、廣德寺江御名代山城守等內可相勤、尤追而御參詣可被遊候へ共、先御代香被仰付候段、以才右衛門被仰出、御香一炷被渡下、右之御樣子方丈江も可申述旨被仰出、左之御口上書等も以同人被渡下候付、山城守八時過退出、直に罷越御名代相勤候事。

但、のしめ・長上下着用、且手扣朱書之通調持參候事。

廣德寺江御名代之拜禮相勤候以後、方丈江可申入趣。

今日被致登城候處、御座之間江被爲召、御懇之上意之上、宰相拜任被仰出、難有被奉存候、依之牌前江名代之使者被差越候付、右之趣申達候樣被申付候由可被申入候、

十二月朔日

横山山城守
前田圖書內
山崎庄兵衛

右之通申述候處、宰相御拜任に付御名代御指越、先以恐悅奉存旨被申聞候に付、七時前罷歸、其段以才右衛門申上候事。

一、御三家樣方等江御使山城守等內可相勤与、以才右衛門被仰出。

十二月二日。前田齊泰を呼ぶに相公と稱せしむ。

〔江戸每日〕

十二月二日

一、今般御拜任に付、相公樣与相唱候儀、寛政四年之節之儀相しらべ候處、被仰出等も見當り不申、諸向も遂詮議候處、是亦申渡等も無之旨。左候得者、松雲院樣御時分等之御振を以、寛政之節右之通相調候儀与見え候付、今般も寛政之節之通相公樣与相唱候事に遂示談候事。

十二月十日。前田齊泰參議に任ぜられたるも緩怠の擧動なかるべきこと

を諸士に告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

今般宰相御拜任に付、公邊より御會釋方品に寄是迄と違重き御取扱も有之候間、萬一御供先又は御使相勤候節等、御威光を含緩怠之族無之樣可相心得候。猶更御城を初御外邊において、只今之通時宜に應じ作法正敷樣心懸專要之儀に候。若々心得違之人々有之候而者御爲不可然、御心外之至に候條、此等之趣諸頭・支配有之面々ゟ、各より寄々可申聞旨被仰出候事。

卯十二月

別紙之通被仰出候趣、山口淸太夫相渡候に付、寫爲御承知相廻申候、以上。

十二月十日　岡田太郎右衞門

石黑宇兵衞

十二月十日。前田齊泰參議に任ぜられたる報金澤に達す。

〔諸事留牒〕

十二月十日

一、去朔日立早飛脚今日到着、左之通申來る。

猶以左之趣丹後守殿等幷若年寄等ゟ茂御傳達可被成候、以上。

今朝御登城被成候樣、昨日御老中方御連名之御奉書到來、則御登城被成候處、於御座之間御懇之上意、其上宰相御拜任被仰出、重疊難有被思召候。此段被仰聞候。頭分以上之人々江も可申聞旨、拙者共も御前江被召出御意に付、則頭分以上江申聞候。先以重疊結構成御儀、恐悅御同意に御座候。委細之樣子は追付御使者被仰遣候由に御座候、恐惶謹言、

十二月朔日　　山城守

圖書

庄兵衛

播磨守　大炊　内膳　又三郎

藏人　修理　掃部　將監

勘解由　八郎右衞門　各樣

十二月十四日。與力堀伊太郎先に石坂新地に遊興し士道を失ふを以て流刑を命ぜらる。

〔御家老方諸事〕

横山齋宮與力

堀　伊太郎

右伊太郎儀、寺西勘六郎嫡子東三郎幷寺西新八嫡子左次馬申談、石坂新地茶屋〵罷越及遊興、拂方東三郎引受手形を渡置、右手形引替方之儀に付、左次馬方用事承候吳服商賣人より、反物を代料延拂に而伊太郎買受候趣に申談、質物に入、右代料を以三人申談手形取替に罷越候節茂、伊太郎儀者跡〵殘及遊興、右罷越候時々刀・脇刺を外〵預、無刀に成立入、士道を取失不屆至極に付、能州嶋之內〵流刑被仰付。

右伊太郎手前於公事場遂御吟味候趣、委曲言上之處、落着如斯就被仰出候、其段申渡配所出來迄最前之通牢揚屋〵入置候段、公事場奉行有賀甚六郎より申來候に付、爲御承知如斯御座候、以上。

十二月十四日　前田式部

横山藏人様

前田圖書様

十二月十五日。前田齊泰登營して參議陞任を謝す。

〔諸事要用雜記〕

十二月十五日

一、今日御任官之御禮、昨日依御奉書、今日六時御供揃同半時御出被遊候。御直に御老中御

黒書院とするもの次掲の文と異なり

廻勤、夫より廣德寺江御參詣被遊候。

〔見聞袋群斗記〕

十二月十五日、於御黒書院宰相之御禮被仰上、上意を蒙り給ふ。作御太刀黃金一枚・綸紗十卷・裸脊馬一疋進上し給ふ。內府樣江作御太刀黃金一枚・裸脊馬一疋、御臺樣江白銀十枚、御簾中樣江同五枚、大納言樣江は進上に不及旨、御老中より指圖に付進上物無之候。

〔御年表〕

十二月十五日御任官之御禮於御白書院被仰上。御先例之通。

十二月十五日。金澤に於いて諸士に前田齊泰の參議陞任を告ぐ。

〔御家老方諸事〕

十二月十五日

一、四半時過出仕之面々年寄中等謁相濟、重而頭分以上御大廣間江列居、年寄中・御家老中列座左之通御弘之趣月番申述、相濟各席引取候事。

但、頭分以上惣廻勤之事。

中將樣御儀、當月朔日御登城被成候樣、前日御老中方御連名之依御奉書、御登城被成候處、於御座之間御懇之上意之上、參議御拜任被仰出、難有御仕合思召候由、拙者共迄以御使者被

仰下候。右之趣何茂ゟ可申聞旨御意候事。

十二月十六日。前田齊泰登營して家臣一人を敍爵せしむべき命を受く。

〔官私隨筆〕

十二月廿五日

一、相公樣當十六日御登城可被成候旨、先日御老中方御連名之依御奉書、御登城被遊候處、兼而御願置候通御家來之內一人諸大夫被仰付候旨、於御白書院御老中方御列座、大久保加賀守殿被仰述候。先以御願之通被仰出難有思召候段、同十四日江戸町飛脚指留置、同十六日發足早飛脚步に傳附、山城守殿より只今申來候。此段爲御承知申進候。先以恐悅御同意御座候旨御用番より廻狀來る。

〔官私隨筆〕

十二月廿六日

御書如左。

昨十五日御老中方連名之奉書到來付而、今日四時令登城候處、於御白書院御老中列座、願之通家來諸大夫被仰付候旨、御用番大久保加賀守殿被仰渡、寔以難有仕合候。因茲前田大炊儀美作守与相改申度旨、加賀守殿へ申達候所、勝手次第之由被仰聞候。右之趣爲可申聞如此候。

委曲申含使者口上候、謹言。

十二月十六日　　　　宰　相

御名御判

奥村丹後守殿

十二月十七日。前田齊泰、上野東照宮等に參詣しその陞任を謝す。

〔諸事要用雜記〕

十二月十七日

一、御任官に付今日上野御宮幷御靈屋御參詣被遊候事。

十二月十八日。今明兩日前田齊泰の陞任を賀して盆正月を行ふ。

〔歲々略曆〕

御殿樣宰相之御位に付給ひ、十二月十八日・十九日盆正月町中被仰渡御座候。

十二月廿四日。前田齊泰、參覲往來の際携ふる三品及び供人の武器數を省略以前の舊に復せしむ。

〔御親翰留〕

近年格別省略に付、參勤往來三品、暨供人等武器爲持方令省略候得共、存寄有之候間、來春

より者省略以前之通爲持候樣に有之度候。省略方に者ゆるみ候樣にも可相當哉に候へ共、武器之儀者餘事与者違申儀、いづれにも以前之通爲持候儀可然候。各存寄も無之候はゞ、一往金澤江も被示合、申渡方等取しらべ可被申越候事。

右御親翰卯十二月二十四日山城守被爲召、御直に御渡被遊候事。

十二月廿六日。博奕類似の勝負を行ふことを戒む。

〔御家老方諸事〕

かけの諸勝負は御制禁に候處、心得違之者も有之。且正月は勝手向等に而小兒抔之遊事与名付、博奕に似寄候慰事不苦儀之樣に存候族も有之躰相聞候に付、寬政元年委細被仰渡置候通、かけもの仕勝負を以慰与いたし候儀は御停止之事に候條、猶更無違失樣急度可申渡旨被仰出候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、已上。

十二月廿六日　　本多播磨守

十二月。前田齊泰陞任せしを以て大赦を行ふ。

〔溫敬公記史料〕

十二月。是月大赦。

限り云々本の儘

正月朔日。前田齊泰登營して年頭を祝す。

〔諸事要用雜記〕

正月朔日

一、九時前表御式臺より御歸殿。今朝御出は六つ九分也。昌平橋内に而御提灯引き候由。御櫛中御膳相濟、御祝方也。御戻り之節何茂御式臺江罷出る。奥之口之御付人は本郷二丁目に付用立不申、依而昌平邊迄進み候樣申渡候。御城下り御付人御表より案内有之、何茂出る。敷付江比良氏・小谷氏・配膳役之外は階上板之間也。御入之節御通懸り御目見有之候。御居間江御入之上、御のし三方配膳役指上。夫より御用部屋被爲召、御裝束之儘御奥江御入、重而御出御召替。夫より山城守等御禮。是に限り寄せ候儀御用部屋を以被仰出。相濟、一番座御禮。拙者儀今日一番座に而御禮申上候事。

一、鶴之御吸物御饌頂戴。前々之通於席頂戴、御禮御膳奉行江申述る。

正月十二日。前田齊泰下谷廣德寺に參詣す。

〔諸事要用雜記〕

正月十二日

一、今日廣徳寺御參詣被遊候。御先詰拙者相勤候。戻り上野山内見物。御小將森・和田同道之事。

正月廿二日。大聖寺侯世嗣前田利極、前田齊廣の女勇姫に結納を贈る。

〔諸事要用雜記〕

正月廿二日

一、今日駿河守様より御結納御祝儀物被進、御作法之通夫々御都合能被爲濟、御席ニ恐悦有之旨御横目申聞、則何茂罷出恐悦申上候事。

勇姫様御入輿之上、池之端御前様与稱候様被仰出候事。

正　月

〔官私隨筆〕

二月三日

一、前月廿二日、駿河守様より勇姫様へ御結納御祝儀、御使者御家老佐分儀兵衞を以被遣、御規式相濟、御使者へ御吸物・御酒等被下之、御目見被仰付、御盃幷御刀代・緞紗七卷被下候。御省略に付御客は無御座、御取持等衆迄御出に御座候。御使者披候以後、備後守様へ爲御挨

拶、庄兵衛被遣候。天氣相も宜敷、萬端御首尾相濟候旨、同廿四日出、廿五日發足中來候旨、

二月朔日。前田齊廣の女勇姫、大聖寺侯世嗣前田利極に婚す。

〔諸事要用雜記〕

二月朔日

一、今日勇姫樣御引移、御婚禮御整被成候事。四時御供揃に而、九時過出輿之事。

一、右相濟御客有之、於御小書院出雲守樣等御出也。同席一統服、今日嘉珍のしめ・同無地上下之事。

〔見聞袋群斗記〕

一、今日御酒・御吸物頂戴有之。

一、今日御祝御囃子有之。御舞臺上下。

二月朔日

勇姫樣駿河守樣御引移付、池ノ端御前樣と相唱候樣被仰出なり。

〔溫敬公記史料〕

二月朔。勇姫嫁備後守利之君世子鍛太郎君。

出雲守は富山侯世嗣前田利保

二月四日。前田慶寧髮置の儀を行ふ。

〔犬千代様御用留〕

二月四日、犬千代丸様御髪置御作法。

一、御白髪山口清太夫差上候に付、のしめ・長袴着用、御祝儀之御品々御廣式〻致持參、御白髪入箱、山崎勘左衛門等內〻相渡、勘左衛門等より年寄女中〻相渡、御書院御出前飾付置可申候。

一、御書院〻御飾可被仰付候。

一、御書院〻犬千代様御出被遊、追付相公様御出御同座之上、山城守・圖書御前〻罷出、御下段に伺公。但、池田保左衛門等內・山崎勘左衛門等內、御緣頰に伺公可仕候。

一、山崎勘左衛門等內御廣蓋持出、御祝之品箱より被出、御廣蓋に居、御側御左之方〻指上候上、山口清太夫會釋仕、清太夫罷出、御白髪上候様御意有之、同人御側〻罷出、犬千代丸様御吉方〻御向、御櫛上之、御白髪差上、被爲掛、山崎勘左衛門等內御後〻長ヶ延候而、清太夫復座。犬千代丸様御前之方〻御向被遊候上、御熨斗三方御抱守持出上之。直に御側に置之。御白髪年寄女中取納之。其以後清太夫〻、犬千代丸様御手自御のし被下之。御指引池田保左衛門等內。退、重而清太夫罷出候様被仰出、山城守誘引罷出候處、犬千代丸様御手自御脇指被下之、御指引同斷。頂戴、退候而、於御次右脇指帶罷出、御禮申上。山城守御取合申上、退去。相濟被爲入。

一、於御次、清太夫妻江御祝儀被下物、山城守・圖書列座、御目錄山城守より清太夫江渡之、

一、於御奥相公樣奉始、鰭之御吸物等上之、御盃事可有御座候。且又御祝之御料理指上可申候。

一、御殿向・御廣式向一統、服紗小袖・布上下着用之事。但、伺公幷御供人はいしめ・布上下之事。

一、御作法携候人々、揃刻限五時之事。

以上

〔恭敏公記史料〕

二月四日。修髮置式、山口清太夫信逸（定番頭御用部屋）上白髮。將軍使女使飛鳥井。賜綿三十把二種一荷。內大臣使飯島。賜一種一荷。大納言鮮鯛一折。夫人使梅溪。縮緬五卷鮮鯛一折。內府夫人使園岡貽鮮鯛一折。公使前田圖書貞事。獻物于將軍內大臣大納言及各夫人准之。

二月五日。德川家齊、前田齊泰に放鷹によりて獲たる鶴を贈る。

〔諸事要用雜記〕

二月五日

一、今日鶴御拜領之上使有之。御使番大嶋雲四郎殿之事。八半時御越之事。

〔續德川實記〕

二月五日

松平加賀守に使番大嶋雲四郎御使して御鷹の鶴をおくらせらる。

〔官私隨筆〕

二月十三日

一、同五日上使番大嶋雲四郎殿を以、相公樣御鷹之鶴御拜領被成候旨、同日發足飛脚早飛脚步に傳附、山城守殿等より昨夜申來候由。

二月六日。前田齊廣夫人當分駒込邸に居住することを幕府に屆出づ。

〔諸事要用雜記〕

二月六日

一、左之通御屆有之由之事。

御上屋敷御手狹に付、當分眞龍院樣駒込御中屋敷ゟ御住居被遊候段御屆之事。

二月九日。御異風飯沼閑四郎の弟金六郎町人を殺害す。

本年五月十八日の條參照

〔年々珍敷事留〕

一、二月九日宵袋町越前やと申町家に而、井沼勘四郎弟某与申人、右越前屋を切殺、其座に堤町八田や某を切懸候處、切もらし、拔刀に而右八田屋を追懸候所見失ひ、受彼所と追行、見苦敷次第も少々有之に付、此邊之町人彼是と手向ひ申者有之。其内に町附足輕參り、右井沼に繩懸町會所へ連行候所、兄井沼勘四郎聞付早速取戻し、夫より段々僉議相成、召取候足輕六人御扶持被召放、手向町人組預けに成、相手八田屋は先禁牢被仰付。且勘四郎相手之町人共拜領願、手討仕与申沙汰に付、越前屋兄淸水重次郎与申者自害仕る。其儀に付右者之母も相果申由。右御僉議之上、町奉行江守要人役儀御指除指扣被仰付。右相手八田屋は死罪に被仰付候。此發者卯辰八幡之社内に淨るり有之、此所に而居合、右町人共過言より發る。

二月十九日。前田齊泰當春定例の通り就封の暇を賜はるべきの報金澤に達す。

〔江戸狀留書拔〕

天保三年二月十九日御留守。

一、姬君樣御懷妊、當六月御臨月に被爲在、御初產之節者御歸國御順年に候處、御願御滯府、御安產之上御暇被仰出御歸國被遊候得共、今般者暫之御在國、打續御政事も御行屆被兼候付、當春御定例之通御暇被仰出、御歸國被遊度旨、御老中方にまで書面被指出候處、御聞置之旨

御挨拶有之候段申來候事。

二月廿一日。前田齊泰初めて德川家齊直判の內書を受く。

〔諸事要用雜記〕

二月廿一日

一、舊臘宰相御拜任に付、今日御直判之御內書初而御頂戴被爲在。依而今日九時御供揃に而、御老中御廻勤被仰出、則御出被遊候事。

一、御弘之趣有之候條、御席江罷出候樣、御横目中申聞、上下着用罷出候處、左之通御弘有之、重而罷出恐悅申上候。且今日詰合無之人々者、明日罷出候樣被仰渡。

舊臘歲暮御祝儀被指上候付而、今日御直判之御內書初而御頂戴被遊忝思召候。此段何茂江可申聞旨御意に候。

二月廿三日。金澤上堤町より出火す。

〔每日帳書拔〕

二月二十三日

一、今曉八時過堤町出火、及大火奉書火消申渡候事。

〔御家老方諸事〕

二月廿三日

一、今曉八時前上堤町金津屋九兵衛家より出火、類燒同町兩側に而五十一軒、內一軒潰家。御門前松原町中程殘り左右十三軒外に二軒、武士屋敷二軒類燒、朝五時過鎭火之事。

〔御家老方御用諸事留帳〕

二月廿四日

一、昨曉上堤町金津屋久兵衛方より出火、類燒六十軒餘、五時前火相鎭。町奉行より家數等書出之留。

六十四軒　燒失家數

內二軒　武士家

外に

一つ　潰家

八軒　損家

內一軒　支配違

四ヶ所　木戸

二ヶ所　上堤町番人小屋

〔故紙雑鈔〕

一、天保三年二月二十二日夜九半時頃より、上堤町西がは中ほどより出火、夫より下の方は一つ水溜迄焼ぬけ、上は不明門下小路に而焼止る。向がは類焼、是も下の方西町口まで焼抜け、上は不明門下に而焼止る。御門前町ゟは焼ぬけず。併下の方神保屋与申麥屋之邊、拾軒あまり焼ぬけ候。屋敷は江間元淋・藤井幸作二軒類焼いたす。家數都合七拾餘焼候由。翌朝五つ時前しめり候事。

二月廿五日。前田慶寧の教養方法に關して御附頭に告ぐ。

〔御附方御用御親翰帳之内寫〕

二月廿五日

一、御本宅御廣式向之儀、諸事結構に成行候様子に而、就而は御入用も相増申躰に候。此度眞龍院様御中屋敷ゟ御移之事故、ヶ様之境に相改候様有之度儀与示談いたし、左之下書之通申渡可然哉与、則下書以清太夫入御覽、此通可申渡哉之旨申上候處、翌日以同人被返下、伺之通与被仰出。

御附頭ゟ可申聞趣

犬千代丸様、是迄眞龍院様御一所に被成御座候故、自然与御廣式之御振に御移之事も可有之

哉に候。眞龍院樣御中屋敷江御移徙之上は、萬端前々御部屋中之御振に相成候樣可被心懸候。御廣式向之儀御表と違、諸事品能移易き御模樣も可有之哉に候へ共、御男子樣御成立方之儀は、諸事御質素に而、追々御表之御風儀に被爲在候樣仕度儀に候。且又御成立方御養生方之儀、大切之段は申迄も無之事に候へ共、其他之事は當時御逼迫に付而、格外御省略中に候間、其心得可爲専要候。右之趣被得其意、御抱守中江も得与被申談、年寄女中江も可被申談置候。此段相達御聽候而申渡候事。

右之趣御附頭三人共別席江相招、山城守・圖書列座申渡。委細諸事留に記。

眞龍院樣御中屋敷江御引移以前、私共被爲召品々被仰出之趣御座候。其節犬千代丸樣御養生方之儀第一に可相心得、御生質御聰明に被爲在候間、御守立申上候儀御大事に候。假令御遊事たり共、後々之御障に可相成儀、且亂舞抔被遊候儀も、御幼少樣之内より御進め申樣成儀は心得も可有之。若右等に御染込被遊候而は、後々之御爲に不御宜儀与被思召候。兎角御當座之御間を合候樣之儀無之、畢竟之御爲御宜樣に与之心得方専要に被思召候。尤御奥向御縮方之儀、無油斷可相心得候。是等之趣山崎勘左衞門等江能申聞置候樣御意被遊候に付、勘左衞門等江夫々申談置候事。

右之通從眞龍院樣被仰渡も有之事故、猶又御附頭別席江相招、心得方委細申含置候事。

二月廿五日。前田齊泰、勇姬の婚禮終れるを幕府に謝す。

〔御年表〕

二月廿五日、池之端御前樣御婚禮相濟候付而之御禮被仰上。

二月廿八日。前田齊廣夫人本鄉邸より駒込邸に移る。

本年二月六日の條參照

〔溫敬公御日記〕

二月廿八日

一、眞龍院殿、今申刻頃此屋敷益御機嫌能御出輿、夕景彼屋敷江益御機嫌能御引移被遊候事。

〔官私隨筆〕

三月八日

一、御中屋敷御普請出來に付、前月廿八日眞龍院樣本御行列に而南御門より御出、益御機嫌能右御屋敷へ御引移被成候旨、山城守殿等より申來候。

二月。遠所町方及び御郡方に於いて私に錢札を發行することを禁止す。

〔郡方御觸〕

付札、御郡奉行江

近頃遠所町方幷御郡方において、追々錢札を拵、正錢同樣相用候由。右樣世上通用方に拘り候品々者、指圖を不請取扱仕間敷儀。指當り金銀相場に相響き、且下々纔之鳥目を以日用相辨候小前之者共、迷惑之筋茂有之躰に候。當時銀手形通用被仰付置候得共、右者一統融通之爲被仰付候儀に而、御上之御辨用に而は無之候。然處一旦之辨利等を以、猥に錢札出來候而は、上下融通之爲被仰付置候銀手形之障に茂相成、畢竟者一統之難儀に茂可至、不輕事に候間、右之主意奉行々々より得与申諭、錢札通用堅く停止可被申渡候。尤當時所々江出有之錢札は、急速正錢与引替候樣、是又可被申渡候事。

辰　二　月

三月朔日。頃日行はるゝ放火に就いて詮議す。

〔本多政和覺書〕

三月朔日

一、頃日所々に放火躰之品有之樣子に付、澤田義門へ別席に而逢、如何樣之樣子に候哉と尋候處、此間塩屋町・千日町にも有之、永井舍人物見之邊にも有之候。其外所々に有之候。何れも深き巧にも相見不申、土塀或は納屋等に置候由に御座候。廻り方等も格別に申渡候へ共、未相知不申。何れ本家を燒候躰には相見え不申、騷ぎ之紛に盗に而も可仕哉之樣に被相考申

候。當春御赦に而、餘程出牢被仰付候者も有之候。左樣之內に而可有之と被存候旨申聞候。且相尋候者、去年御居間御土藏破候賊未相知不申、如何之趣に哉と尋候處、先達而より何分尋出度存寄に而、尤無油斷致詮議候へ共相知不申候。御領國迄に而も無之、上方等も承合候處、今に一向相知不申。去年は北國に餘程左樣之儀有之、大聖寺にも改方土藏并備後守樣御土藏をも破候樣に承候。其外若州酒井殿土藏へも入、金子三千兩盜候由、京へ遣候者より申越候。何れ他國之者に而可有之哉と被存候旨等申聞。

三月六日。前田齊泰夫人着帶の祝儀を行ふ。

〔官私隨筆〕

三月十四日

一、當六日姬君樣御着帶之御祝御首尾能被爲濟候之旨、山城守殿等より申來候由。右に付明十五日出仕以上之面々へ御弘之儀申聞候付、右相濟候上御廣式へ罷出方々樣へ御祝詞申上候。江戶表相公樣初方々樣へ者、十五日之日付に而十九日出以紙面御祝詞申上候間、此段爲御承知申進候旨之趣當番より廻狀到來。

三月六日。當春藩侯の歸國に供奉する者に貸銀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

三月六日

付札、組頭江

當春御歸國御供之人々、御在府中不時御用烈敷、失脚多相懸り難澁之躰。其上御供道中之儀者、何廉入用も相增候儀に付、御勝手向御逼迫之内に候得共、格別之趣を以御供人一人扶持に銀三十目充御貸渡、足輕已下江は一人扶持に四十五匁充御貸渡被成候。御上打續不時御物入等莫大之儀、御運方御急迫之内如斯御貸渡之儀に候條、其處相心得、精誠致勘辨御供可仕事肝要に候。返上方之儀は追而可申渡候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。諸頭中江演述、組等之面々江も申聞候様可被申渡候事。

三　　月

本文銀子之儀は、一統仕切御扶持方代相渡候節、一集に相渡筈之旨追而被仰渡候事。

三月十一日。金澤に降霰あり。

〔年々珍敷事留〕

一、二月下旬より氣候不順に成、寒さ强く、九月頃之様成氣色、雨降り、三月九日朝五半頃雷鳴。若宮村之内はりのきにこうづる巢有之。其上雷落、木碎、鶴裂て落る也。同十日夜五

半時頃地震、十一日頃霰降、甚寒し。

三月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔諸事要用雜記〕

去十三日上使松平和泉守殿を以、御國江之御暇被進、白銀・御卷物御拜領、從內府樣松平伯耆守殿を以御卷物御拜領、御臺樣よりも長谷川能登守殿を以御卷物御拜受被成候、十四日依御奉書今日御登城被遊候處、於御座之間御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗蚫御頂戴、御鷹・御馬御拜領、次に山城守・庄兵衞御目見、拜領物茂被仰付、重疊難有被思召候。此段何茂へ可申聞旨御意に候。

三月十五日

〔續德川實紀〕

三月十五日、月次の賀例のごとし。紀伊大納言・松平加賀守就封のいとま下され、御鷹・馬をたまふ。

四月朔日。前田齊泰、慶寧の敎養方法に就いて御附頭に告ぐ。

〔御附方御用御親翰帳之內寫〕

四月朔日

一、左之通以彌左衛門被仰出。

犬千代丸樣追々御成長之處ゟ被爲至候間、萬端御側向之人々作法正敷相心得、御成立之儀心懸肝要に被思召候。召上物も御大事に候。御附之人々無油斷心付可申候。御成育方御大事過候而は、却而御爲に不被爲成候。快晴之節抔は、御庭等折角御歩行御座候而可御宜候。猶更心得方之儀、御附頭初被申渡候樣被仰出候。

四月朔日

四月二日。前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。

〔諸事要用雜記〕

四月二日

一、今日益御機嫌能御發駕被遊候。四半時頃之事。

〔溫敬公記史料〕

四月二日。扈前田美作守山崎庄兵衛。駕發江戸。

四月四日。御算用場奉行金相場高貴なるを以て輸出米を增額して金貨を誘致せんことを稟申す。

御算奉は御算用場奉行

〔諸事留帳〕

四月四日

一、御算奉申聞は、例歳御廻米拾萬五千六百石に、追御廻米壹萬石大坂表江のぼせ米御座候様仕度、江戸表において不時御入用も莫大御座候付、右を以御凬御座候はゞ、隨分御聞濟に成可申と奉存候。右實は此表追々金相場高貴に相成候に付、右之方江手當として根に仕候仕法に御座候。左候へば此節舟用意不申付候而は指支申候。若御聞濟無之節、指押候儀は隨分出來候へども、御聞濟之上申付候儀は、手後れに相成出來不仕候。且金相場之儀も段々遂僉議、此節決着仕候間、近日に御達可申と奉存候段申聞候事。

四月十五日。前田齊泰金澤城に着す。

〔諸事要用雜記〕

四月十五日

一、今朝七半時之御供揃に而津幡驛御發駕被遊、五つ六分御着城被遊候。御居間江被爲召、罷出恐悦申上る、蒙御意候事。

〔諸事留牒〕

四月十五日

一、今日御着城に付各六半時登城。但六半宅に而承出席之圖之事。
一、五時過津幡御立之御附人罷歸候事。
一、五半時前大樋御附人來り、御城代播磨守・藏人・掃部・將監・勘解由・八郎右衛門・平兵衛、御先立外記、各御式臺階下江罷出有之。延之助殿にも御出。同半時過御着、御城代江御意有之。次に藏人等江御意有之。應じ而御請申上、被爲入候事。

四月十八日。小川群吾郎鳳至郡輪島に火矢筒を運搬の爲發足す。

［御家老方諸事］

四月十六日

今般能州輪嶋迄火矢御筒被遣候に付、同役小川群吾郎當十八日發足仕候に付、定役小遣一人召連申候。然處當時役所御用多に付、留守中人少に相成、御用指支申候間、小遣小者加人一人請取申度御座候間、當十八日より懸渡候樣仕度存候。尤罷歸跡御用相濟次第、割場江相返可申候間、此段御家老衆へ被仰達、早速御入御座候樣仕度奉存候、以上。

四月十五日　　小川七郎左衛門

江守要人樣

遠藤數馬樣

四月廿二日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

四月廿二日。臨學校。

四月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて陸原大次郎をして書を講ぜしむ。

〔諸事要用雜記〕

四月廿三日

一、今朝瀧之御間講釋に付御聽聞御出可被遊旨被仰出、夫々申談、則御出御聽聞有之事。講師陸原大次郎之事。

四月廿九日　金澤下堤町より出火す。

〔故紙雜鈔〕

一、同四月廿九日夜六時より下堤町金屋与申御用宿の隣檜物屋より出火、安江町入口高田小一郎方ゟ入小路に而燒留る。夜九つ時過しめり候事。家數十一軒餘与申事。

〔每日帳書拔〕

四月廿九日

一、堤町小倉屋と申藏宿より出火、及大火奉書火消申渡。

〔御家老方御用諸事留帳〕

四月廿九日

一、今晩六半時前堤町大工荒木屋八郎兵衛方より出火、十軒計燒失、九時反鎭火。

〔官私隨筆〕

四月廿九日

一、今夜六時過下堤町出火に付、御用番へ使者指出候處、御城近之儀にも候間可罷出旨被申越、五時打登城。

一、九時過鎭火之躰に付御用番之外退出。

一、右に付風筋最初は宜候處、中頃より御殿之方へ吹、御居間先へ火之粉參り候由。依而防之儀被仰付候由承之。御城方與力も御宮邊等被廻候由。但播磨守殿は廻り不被申也。美作守殿は近火故登城無之旨。

五月二日。前田齊泰石川郡粟ヶ崎に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

五月朔日

一、左之通被仰出。

明二日天氣次第、四半時之御供揃に而粟ヶ崎邊江御行歩御出、御旅屋江御立寄可被遊旨被仰出。

五月朔日

御行歩御出道書

奥之口より松坂通七拾門御門、不明御門、堤町通、圖書橋青木新兵衞屋敷前通、英町、折違橋、宮腰口町端宮腰往還より同所町之內、夫より大野町之內同所橋御渡、夫より御旅屋。御戻り右同様橋御渡、夫より濱へ御出、宮腰町之內より御戻り。

右に付御小將中も夫々申談、御早乘も被遊候筈に付、左之通不時に可被召連旨被仰出、御用部屋初夫々申談候。

御用部屋　兩人　御近習頭　一人

奥御取次　一人　配膳役　三人

御近習詰之內一人、闕屋・曾田之內

御馬役　一人

右之外に御早乘之時分御供之御番頭等三人、都合十二騎可被召連旨被仰出。

一、御行歩御出には御使馬一疋に付、右騎馬數被仰出候儀に付、今一疋御使馬爲御牽之儀に伺、被仰出候事。

一、燒飯籠御供人之分相建候儀に、御表御横目示合候上、持參人等夫々申談、詰土は無之。

〔諸事要用雜記〕

五月二日

一、今日四つ八分五厘過御出、御行歩昨日被仰出候通御廻り被遊、六時御歸殿被遊候。宮腰寄より御早乘被遊候。御供拙者罷出、御早乘之時分御先乘相勤候。於御旅屋御表小將御間拜見有之、御禮引請申上る。御早乘之時分御供騎馬左之通。

明石數右衛門　小谷兵右衛門　前田準次郎 古屋喜市郎　大野織人　御馬　御用部屋・御供之御小將・御近習頭等。

御旅屋は粟ケ崎

一、御旅屋より御戻り御歩行之節、拙者幷水原代り〳〵御先立相勤候。御先之御歩御供處繰延し、新番・御先角御大小將見計御跡へ繰下ゲ候儀兼而伺置申談候。都而御供中相替儀も無之、御旅屋より御戻り之節同所御先詰之坂井氏・配膳役荒木、野間御供被仰付候事。

〔御家老方諸事〕

五月六日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。

五月五日

一、備後守様前月廿三日江戸表御發駕、今日此表御止宿、明六日御登城之筈に候。右に付各五時上下着用致登城候筈、且御旅宿〈江〉爲伺御容躰罷出候筈之旨月番演述。出席無之人々〈江〉は主付より可申達旨に付左之通申遣候事。

但、諸役人は六半時不遅揃に候。且又主付之外各退出に付一統へ申遣事。

〔諸事要用雜記〕

五月六日

一、今日備後守様御登城に付、御給事方等夫々申談る。御表小將御引人共五人、配膳役より一人申談候。右は御料理等御斷に付、右之通に候。御殿揃六半時不遅之事。

一、五つ七分五厘御登城被成、芙蓉之御間へ御通被成、御口上庄兵衛承り申上、年寄中等御逢被成、畢而石野被爲召御口上被仰上、御居間書院〈江〉御通之儀被仰進、則御通、御たばこ盆等出、追付御對顏宜段佐藤申上、御前御出御對顏被遊候。御のし三方上之、無程御挨拶、農人御杉戸際迄御送被遊候。五つ九分五厘御退出之事。

一、右相濟、重而御立戻、御對顏之御禮被仰上、御退出被成候事。

五月十二日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

五月十二日。復臨學校。

五月十二日。前田重教の側室青操院歿す。

〔見聞袋群斗記〕

是の年二月觀樹院樣御生母青操院殿も、眞龍院樣与御一集に巢鴨御中屋敷江引移之處、同年五月十二日死去年七十三歲なり。下谷廣德寺へ葬らるなり。宿元は青山大膳亮殿の家臣金井與兵衞某女なり。法號は青操院殿花屋妙安禪定尼と申なり。

巢鴨邸は駒込邸に同じ

五月十四日。前田齊泰人持組の士の乘馬を觀る。

〔諸事要用雜記〕

五月十四日

一、今日人持廿人乘馬御覽に付指引之儀、奥御横目大村・水原江別席より談有之。則昨日乘馬之人々溜所等見分にも被罷越、則今日同人より摘等申上候上、八ツ二分過御出、七ツ二分御戻り被遊候事。乘馬之人々左之通。

今枝內記　津田乙三郎　前田織江　前田左京　前田將監

前田式部　前田內藏助　前田監物　伴八矢　多賀數馬

不破彦三　西尾隼人　松平監物　竹田播磨　篠原主水

菊池大學　生駒勘右衛門　本多主人　篠原監物　品川左門

各持馬之事、其内生駒者御貸馬南部青、畢而今枝等之持馬に、高桑・明石・細川・齋藤・有田二

之鞍被仰付候由之事。

本年二月九日の條参照

五月十八日。町奉行江守要人酒狂の士の取扱を誤りたるを以て役儀を除かる。

［政隣覺書］

一、五月十八日於越後屋敷、御用番播磨守殿・美作守殿立會、御横目永原次左衛門・今村織人

罷出被仰渡。

江守要人

御手前儀、當二月九日夜田島屋長藏方に、帯刀之者酒狂之躰に而入込、迷惑におよひ候段及

斷候付、手先足輕津井重藏与申者、縮方之儀申渡指遣候所、御異風飯沼関四郎弟金六郎与申

聞、酒狂之躰に而手におよび兼候故、身柄之者に候得共致方も無之に付、縄に而留候由に而

致同道候付、連越候上は早速面談可致儀にも可有之哉、彼方よりも面談之儀申聞候へ共、逢

候而は品に寄表立候様之儀も可有之哉、且名前申立罷在候哉も難計、旁差付遂可申与申趣を

以延し置、閑四郎江申遣、罷越候上爲引合渡遣。其節手を繩に而留有之候得ども、此儀は議內分之事に候間、其心得有之樣にと申入置候旨等、委曲先達而被申聞、相違御聽候處、先以及面談候とて表向に相成候与申儀は有之間敷儀。且身柄之者を繩に而留候儀を、內分之取扱与申儀は不相聞。いづれにも連越候上者、早速逢候而彌酒狂之躰に候哉、其樣子見屆可申儀。其上金六郎も及面談度与申聞候儀を逢不申、始終繩に而留候儘に指置候段、致方不行屆不覺悟之至被思召候。依之役儀被指除、指扣被仰付候。此段可申渡旨被仰出。

一、右一件に付町足輕落着公事場奉行紙面左之通。

覺

町附足輕　岸　井　重　藏

右之者先達而於公事場相糺候節之口書等、御用番年寄衆へ相達置候所、飯沼金六郎酒狂之躰に而、何分取扱方無之に付、不得止事繩に而手を留候旨に候へ共、金六郎申分与は致相違候。併此上御糺は不被仰付、重藏儀假令口書之通相違無之共、金六郎に繩を懸候程之儀は無之候。名前も名乘、身柄之儀承候上者、取扱方可有之候處、繩を以取扱之儀不屆之至に候。依之御扶持被召放候旨、御用番年寄衆覺書を以被申渡候に付、今日於公事場重藏へ共段申渡、外出留置候儀相宥返候條、可有御心得候、以上。

辰五月十八日　　　　　　　　　　公事場奉行　連印

江守要人殿

遠藤數馬殿

一、御異風江沼閑四郎弟金六郎儀は、同日兄へ御預之旨被仰渡候由。

付札、御異風裁許江

飯沼閑四郎弟　飯沼金六郎

右金六郎儀、當二月九日卯辰八幡社內淨瑠璃有之聞居候處、地子肝煎越前屋次郎左衞門・八田屋彌左衞門右場所へ罷越居、見知合之者に而も無之候得共、酒抔進候に付給合居候處、次郎左衞門儀は先へ罷歸、彌左衞門は殘り居、暮頃致同道次郎左衞門宅へ立寄候得者、酒指出候へども斷候處、兩人共口上申募り及過言、次郎左衞門手向候に付及殺害、彌左衞門逃去候に付、可尋ため近邊町番人等へ相尋候內、町附足輕躰之者罷越候に付、名前相名乘候へども不法之趣有之、彼是仕內大勢罷越、江守要人方へ强而連越、其節役人躰之者繩に而留候に付、御僉議を相願候趣閑四郎紙面指出候。依之金六郎手前再往相尋口上書差出、一件之者共は夫々於公事場相糺候處、金六郎申分与は致相違候へ共、此上御糺は不被仰付候。金六郎儀兩人及過言、次郎左衞門手向及殺害候儀は、左樣にも可有之候へども、彌左衞門行衞尋候節、役

人躰之者縄に而留候儀、存念申出候程之儀に候得ば、其節心得も可有之處、其首尾不行届、其上八幡社內淨瑠璃有之場所𛀁罷越、不見知町人共𛀁酒等給合候より事起り候儀に而、右族は畢竟心得方不宜故之事に候。依之兄閑四郎へ被預置候條、此段可被申渡候事。

付紙、御異風裁許𛀁

飯沼閑四郎

右閑四郎弟金六郎儀、當二月九日卯辰八幡社內淨瑠璃有之候に付、聞に罷越、不見知町人共𛀁酒等給合、夫より事起り、越前屋次郎左衛門を及殺害候儀等有之候。御家中之人々風俗等之儀、毎度被仰出有之候所、右樣之場所𛀁罷越候儀は、閑四郎儀常々教諭等閑之故に候條、以後之儀嚴重相心得候樣可申渡旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

辰　五　月

五月十九日。前田齊泰生母榮操院を招請す。

〔諸事要用雜記〕

五月十九日

一、今日御居間書院御飾付等夫々宜に付、九時御縮引受候樣仰出、則御用部屋中立會御縮引渡、立田御杉戸より御縮付候。御料理物等四時迄夫々相廻し候。此度夕景御囃子有之筈に付、

御料理も御居間に而出候筈に成候。八半時頃御囃子相始り、其節御縮御用之間前御杉戸に而御縮に成候。暮前相濟、重而如元御縮被仰付候。併是は御囃子濟候に付、御招請向は相濟候に付、御縮引受茂引取候事。

一、御囃子十三番・狂言四番有之事。

一、御次廻り一統、御廣式御歩並已上一統拜見有之事。

一、御招請相濟、御都合能相濟恐悦申上候事。

五月廿一日。德川家齊、幕醫小島安順を遣はして前田慶寧の病を診せしむべきを告ぐ。

〔成瀨覺〕

五月廿一日水野出羽守殿江、聞番御呼出、於内玄關御渡之御書付寫。

犬千代丸儀病氣之旨入御聽、御心配被思召候。尤追々肥立之趣には有之候得共、思召を以小島安順可被差遣候間、手醫師共無腹藏可及相談候。安順儀是迄も相越候旨に候得共、猶改而被遣候。乍併藥用之儀は安順に相限り候儀に無之、手醫師は勿論、其他之醫師共に而も功者成者共相招令診察、何れにも療治無油斷可仕旨之御事に候。右小嶋安順老は、大納言樣附奧御醫師也。

〔官私隨筆〕

六月朔日

一、犬千代丸樣先達而より御風氣之處、其後御快方に被爲入候處、前月七日・十四日頃に御再感之御氣味に而御咳嗽も度々御發し被遊、御食不被召上、御乳も御少く、御小水御不利、御疲れ之氣味も被爲見候由、前月廿日立飛脚廿七日に到着之由。然處同廿三日之不時立に、廿二日より御惣躰御快被爲入、御乳も御進み、御咳嗽御間遠に、御小水御通じも宜敷被爲成御氣先も宜敷、御手遊抔被遊候由。此御樣子に候へば段々御快可被爲在旨、いづれも申上候由申來。昨日飛脚到着之旨今日承之、江戶より藏人殿方へ來候紙面も披見。

但、從公方樣小嶋安順老と歟申御醫師被遣候間、御手醫師と無泥示合御療養可申談旨等、水野出羽守殿へ聞番御呼立被仰渡候由。御格別之御樣子也。

〔溫敬公御日記〕

五月廿九日

一、犬千代丸氣滯次第快有之旨、當廿三日不時立早飛脚、今未之刻到來。

五月廿二日。前の茶屋業者の借用せる町會所銀を二十ケ年賦に返納せんとする出願を郤く。

〔兩茶屋町一件〕

茶屋町・石坂町之者共、町會所過料銀等、貳拾箇年賦無利足を以上納仕度旨等書付出之候得共、難取揚可相返候。元來去秋思召被爲在、茶屋町被指止候付、右商賣仕來候者共産業成立之ため、格別を以御救銀も被仰付、以來之儀願方無之樣被仰渡も有之、且俄に商賣指止候事に付、株商賣之儀願之通承届、上納銀取立方も格別令用捨、夫々申渡置候處、于今願方不絶、難澁之由にて上納繰延之儀等重而申出候儀は、去年以來前段之通格別之御取扱等有之候儀、未會得致兼候哉。難澁之儀は右兩茶屋町之者には限間敷、端々之者共抔貧窮人不少事に候得共、上納及遲滯候者は前々申渡候格合も有之事に候得者、右兩町之者共も外町之者共同樣可申渡事に候。此等之趣入念可申渡候。

右之通居町肝煎より夫々申渡候樣可被申渡候、以上。

天保三年辰五月二十二日　　　　遠藤數馬

藤田吉左衛門殿

六月朔日。百姓・町人の着服に就いて監視を嚴にせしむ。

〔每月帳書拔〕

六月朔日

一、下々着服等之儀毎度被仰出も有之、其節には廻役人見咎方厳敷候處、其内には見咎も不致様に立戻候。近下々には又々見立候装束いたし、頭に飾候品も御制禁之品を用候者も有之様に被聞召候付、連々見咎候様に心得之、町奉行幷改方へ於御次被仰渡候旨等山口清太夫申聞候事。

六月四日。前田齊泰再び人持組の士の乘馬を觀る。

〔諸事要用雜記〕

六月四日

一、今日人持乘馬御覽之儀一昨日被仰出置、則八時御供揃に而同刻御出、七時過御歸殿被遊候。乘馬相濟、御馬役へ二の鞍被仰付候事。

人持乘馬之人々左之通。

栗毛	二之鞍村田辰五郎	前田才記	黒毛	同 中山半之助	大音帶刀
栗毛	同 櫻井甚太夫	三田村虎次郎	黒毛		小幡主膳
黒毛		永原求馬	鹿毛		多賀典膳
黒毛		津田兵庫	鴾毛	同 高桑五郎兵衛	成瀬主税
鹿毛	同 佐野専三郎	富田織部	御貸馬		岡嶋帶刀

黒鹿毛　奥野主馬佐　栗毛　佐々木兵庫
鹿毛　青木新兵衛　鹿毛　津田昇持馬借用　小幡九兵衛
瓦毛　同　齋藤猪太郎　葛卷十右衛門　栗毛　松平數馬
鹿毛　横山齋宮　黒毛　前田監物持馬借用 二の鞍　保田幸藏　永井舍人
鹿毛　奥村又十郎　御貸馬　大野木彈正

〔御家老方御用等諸事留〕

六月五日

一、中居鐵炮張鑄候筒二百目玉に而、筒重百三十貫目、長六尺餘、檜垣之御間に而今日見分、御居間書院に而御覽被遊候事。

六月八日。前田齊泰石川郡松任に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

六月八日

一、今日鷹野之振に御行歩御出被遊、四半時御出、香林坊通り野町松門より御早乘被遊、松任迄被爲入、同所に御休被遊、御戻り鏑木之城跡御覽被遊候。御駕・御馬に而御戻り七半時過之事。

六月十日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

六月十日。臨學校。

六月十八日。藩の財政窮乏するを以て省略を怠るべからざるを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

六月十八日

一、左之通別席より談有之。

御勝手御運方御逼迫至極に付、其已來格外御省略等、種々御仕法を以漸々御取續有之候處、江戸表御物入指湊、就中今度御在府中も御慶事等打續、不時御物入莫大之儀に候處、御公務等誠無御據趣ども故、色々御手繰を以先可也に御辨は有之候得共、地盤之御運方彌六ヶ敷相成候。乍併誠莫大之不時御入用も夫々相辨候に付而者、自然向々に而左迄無御指支御勝手振之樣に存込、おのづから人氣相ゆるみ、且者御慶事打續一統競候調子、何となく御平生に押移、萬事御省略之僉議不行屆樣にも成行可申哉。左候而は彌增御指支に相成、不容易御場合へも可至候條、地・他國とも御省略之筋少しも相ゆるみ不申樣、猶又定・不時御入用精誠を盡、

成限り相減候樣厚心懸可遂僉議候事。

辰　六　月

〔每日帳書拔〕

六月十八日

一、地・他國共御省略之筋少も相ゆるみ不申樣、尙又定・不時御入用精誠を盡成限相減樣、厚心懸可遂僉議旨、御勝手方より觸出有之。

六月廿四日。藩侯在府中御次向の費用節減に關して通牒す。

〔諸事要用雜記〕

六月廿四日

一、今度御勝手方之儀段々被仰渡之趣、別席より申談有之。右に付御表向之儀者、段々御省略も有之候へ共、御在府中等御次向之御入用過分に付、猶更御用部屋中迄段々被仰渡有之由、左之通御渡之由に而、同人より被申渡、猶更御省略之筋相心得候樣、同席御省略方坂井・小谷江申談有之由。依而猶一統可申入旨申答候由に而、則坂井等より演述有之。左之通。

御勝手御運方御指支に付、猶又御省略之儀一統申渡候通に候。表向諸場・諸役所之儀者、先達而於御符合所段々詮議之上、精誠御入用指詰有之上に候得共、尙又打碎詮議方も有之候。元

作略は策略なるべし

來御省略成安き儀迄相省候儀者、左迄六ヶ敷儀も無之候。一通に而は御省略難成相聞候而も、其仕法詮議方により出來申品も可有之、左樣之所いかにも人々心懸精誠を盡くし候樣有之度候。御次向之儀は、其向より手指申儀出來兼候得者、各無油斷詮議を加へ不被申而は行屆兼可申候。表向而已嚴重に御省略遂詮議候而も、御次向等其釣合に參り不申時者、先以不心服に可相成哉に候。近年江戶表御入用段々相增、去年以來大坂幷此表より之御仕送高過分至極、天明・寛政之時分之御圖り高と引競候而者、頓而倍增之御入用高に候。尤右者御吉凶之不時御入用も相籠り居候得共、御平生向も何となう御手延に相成候に而者無之哉。御公界向等誠に無御據儀者、是迄之御振御作略も可六ヶ敷哉に候得共、御內輪之處惣躰御調子高に相成候樣之儀茂無之哉。前段にも申達候通、御次向之儀は、各幷御近習改申合、是迄之御振格を改候而も不指支儀者、無泥詮議有之可然候。將又眞龍院樣不時御入用銀、去年中之分相調理候處、千七百兩餘、其內五百五十兩は御住居向江被進方、不時御入用に相成候。頓而御定金に近き不時御入用高に候。御住居江之御進物御入用相省き候而も、千二百兩計之不時金、當春より御發駕迄にも七百兩餘不時渡り有之候。御住居向江御進物ども、餘り御手重に相成、結句御住居向に而御迷惑被成候儀無之哉。公邊とても御省略無之儀者ある間敷、段々御調子高に成候而は、際限も無之儀に候。其外御內輪向御進物御取遣之儀も、隨分御手輕に其驗さへ有之

候得者、御意味合は相立申事に候。當時御手繰方甚六ヶ敷、就中手形通用之儀、金相場幷正銀与手形与之間、過分高直に相成、一統難澁之躰。右に付先達而より御算用場奉行等詮議之上、色々取扱見候得共、一旦之扱に而者無程立戻り、其詮無之。就而者何分根元に付取扱方之仕法茂無之哉と、右奉行遂詮議候處、いづれ手形消込申外、全仕法は有之間敷旨等申聞。然處右を補候手段は、御省略を以御地盤之御入用を相減不申而は、手筈も出來不申、手形通用之儀は、一端之處甚御國用を辨候へ共、畢竟金相場等高貴に相成候も、手形通用ゆゑに而、當時之處彼是煩敷儀も不少候得ば、此後人氣模様により、萬一手形通用方六ヶ敷筋に成候而は、不容易混雜に至り可申候。然時者必至与被成方も無之儀、不輕御場合に可至、其期に臨、何程御上御辛勞被爲在候而も無詮御儀。何分只今之處に而、各初一和を以精誠を盡、御省略之儀取仕切可被遂詮議候事。

六月

天明八年江戸御在府一ヶ年惣御入用中勘圖り高四千四百二十貫目計。但不時御入用者圖り無之。御借財年賦御返濟之分者、圖り之內に有之候。

寛政六年右同斷四千五百二十貫目計。但右同斷。佐渡守樣御出府御入用は立込有之候。

文化十四年之頃之御圖り高五千貫目計。但不時は圖り無之、御借財年賦御返濟等之圖り、內

外之處爾与相分り不申候。

天保二年江戸御入用御國幷大坂より仕送り高凡圖り八千六百八十貫目計、但不時御入用立込有之候。

六月廿四日。前田齊泰組頭の乘馬を觀る。

〔諸事要用雜記〕

六月廿四日

一、今日御馬場ゟ御出、人持等乘馬御覽被遊候。六半時之御供揃に而、五時前御出被遊候。同半時過御歸殿之事。乘馬之人々左之通。

黒毛 井上要人持馬 永原權太夫　黒毛八歳 伊藤主馬

御貸馬南部青 庄田兵庫　鹿毛五歳 松平久兵衛

黒鹿毛 六歳奥野主馬佐持馬 原五郎左衛門　黒鹿毛七歳 横濱右門

栗毛 八歳大野織人持馬 闕屋新兵衛　鹿毛十五歳 本多欣太郎

鹿毛 六歳 前田万之助　御貸馬黒鹿毛 津田權五郎

栗毛 前田美作守持馬 長瀬善左衛門　鹿毛四歳 堀孫左衛門

栗毛 九歳山崎小右衛門持馬 山崎頼母　黒鹿毛五歳 岡田太郎右衛門

御貸馬栗毛　坂井小左衛門　鹿毛四歳　宮崎藏人
黑六歳　志村平之丞　黑鹿毛十歳　有賀甚六郎
黑瓦毛七歳　山口左次馬　御貸馬鴾毛　前田淸八
黑毛五歳　高田勘右衞門　栗毛十歳　小堀八十太夫

六月廿九日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

六月廿九日。臨學校。

七月二日。前田齊泰の子鈞次郎江戸に生まる。

〔官私隨筆〕

七月六日

當月二日曉姬君樣御安產、御男子樣御出生に候。此段被仰聞候旨善右衞門演述。且右之御樣子山城守殿等より申來候付、爲御承知申進候。先以恐悅御同意御座候。依之追付登城御祝詞御申上、且御廣式へも御出、壽々姬樣初へ御申上可被成候。眞龍院樣初へは今日之日付に而當九日出町飛脚傳附、以紙面御祝詞申上候筈に御座候間、夫々御申上可被成候、以上。

七月六日

〔續德川實紀〕

七月二日、溶姫君平産により、高家・詰衆・奏者番・布衣以上いともがら祝したてまつる、

七月二日。前田慶寧の病癒えたるを以て床拂を行ふ。

〔官私隨筆〕

七月十日

一、當二日犬千代丸樣御氣滯段々御快方、御床拂被爲在候段、山城守殿等より申來候。先以恐悅御同意御座候。依之相公樣・壽々姫樣初榮操院樣へ明日御祝詞申上候。江戸表眞龍院樣初ゟは、明日之日付に而十四日出以紙面申上候由等、御用番紙面到來。

七月五日。前田齊泰頭分の乘馬を觀る。

〔諸事要用雜記〕

七月五日

一、今日六半時之御供揃に而堂形御馬場へ御出、昨日被仰出頭分乘馬御覽被遊、相濟大島三郎左衞門持馬二ノ鞍佐野專三郎ゟ被仰付、黑毛御馬高桑に被仰付、御覽被遊相濟、五半時頃御歸殿被遊候事。

七月十一日。前田齊泰の子鈞次郎出生に付七夜の祝儀を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

七月十一日、御七夜御祝御名鈞次郎殿と被進る。御日柄差合十一日迄相延る。同日爲御嘉儀、上使老中大久保加賀守殿を以て卷物十・一種一荷を賜ふ。內府樣より御附老中松平伯耆守殿を以て卷物五・一種一荷、大納言樣より同人を以て一種、御臺樣より女使瀧山殿を以て卷物三・一種一荷、御簾中樣よりおやち殿を以て一種・五百疋を賜る。此外御內證にて品々賜るなり。公より御使橫山山城守隆章を以て綿十把・二種一荷進上し給ふ。內府樣へ綿十把・一種一荷、御臺樣江同斷、御簾中樣江一種一荷同人を以て進上。此外御內證にて品々献ぜらる。

〔諸事留牒〕

七月十七日

一、姬君樣御七夜御祝儀、當十一日被爲濟、御出生樣御名鈞次郎殿と被稱候由、十二日不時立早飛脚今日到來。依而御祝詞は明日出席之上、服相改申上筈之事。

〔續德川實紀〕

七月十一日、溶姬君安産七夜の御祝として、大久保加賀守御使して、姬君に綿三十把・三種一荷・出生のかたへ産衣二襲・二種一荷、松平加賀守へ二種一荷、松平犬千代丸・眞龍院殿へ一種・五百疋をつかはさる。三家のかた〴〵、同じく致仕、同じく北の方より鮮鯛をたてまつら

る。

七月十三日。御次向の足輕以下にその支配頭より被下方を出願するを禁ず。

〔諸事要用雜記〕

七月十三日

御次向相勤久々足輕・坊主・小者に至迄、是迄不指定御用相勤候得者、爲指勤勞茂無之をも、其支配頭等より被下方相願候得者、是迄は時々被下方有之候得共、當時御勝手向御急迫至極之御時節、御次內御省略之儀、是迄も段々被仰出候得共、御表向之御省略と引比候得者未行屆樣子、年寄中等より今般段々譯而被申上候趣も有之に付、今一篇嚴敷御省略被仰付候。附而は已來右樣被下方之儀は被指止候條、可被得其意候。不時御用誠に烈敷、格別骨折相勤申樣之儀有之候得ば、不相願とも御僉議も可有之候條、以來願方共心得有之樣夫々可被申談候事。

七　月

七月廿二日。石川郡大野村に火災あり。

〔諸事要用雜記〕

七月廿二日

一、今曉七時大野村出火、過半燒失之事。

〔御家老方御用諸事留帳〕

七月廿二日

一、今曉八時頃より大野火事、六時頃及鎮火候様子。多分燒失之様子也。

七月廿八日

一、大野火事家數之儀、昨日披見物之内、家數三百八十餘軒之處三百十餘軒外納屋も數多燒失之旨、御郡奉行より達之内也。

〔毎日帳書拔〕

七月廿三日

一、大野村出火、三百十八軒燒失之事。

七月廿三日。前田齊泰瀧之間の講書を聽聞す。

〔諸事要用雜記〕

七月廿三日

一、今日瀧之間講釋御聽聞御出被遊候事。

七月廿七日。金澤に於いて前田齊泰の子鈞次郎出生七夜の祝儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

七月廿七日

一、今日御七夜之御祝有之。八半時御囃子幷狂言相始り候。延之助殿にも御表通御出被成候、且御囃子、御次廻り一統・御表御廣式向・御住居向之人々拜見有之。

八月朔日。銀仲預り銀手形の發行高三分の一を正金銀と交換し、殘額を向ふ五ケ年間通用すべきを命ず。

〔觸留之抄〕

御領國中通用之銀仲手形、來未年迄に正銀与引替之御手當を以、大坂より金銀追々御引寄置之處、いまだ年限にも不相至事ゆゑ、銀高不相揃候。然處此節世上金銀拂底、隨而錢相場も高貴に相成、融通煩敷趣に相聞え候。依之右手形先づ三の一正金銀に引替被仰付、右引替相濟候札は消合、相殘候札は增印いたし、未の年迄通用被仰付候條、手形所持之ものは當月十六日より、隔日每に御算用場ゑ指出引替可申候。

但、引替割合入混候條、少銀之分は人々申談、一貫五百目以上に引集可指出候。則割方左之通り。

札一貫五百目指出候ものは、

内五百目正金銀を以引替。

但、一兩に付六十八匁之極相場を以引替。尤右より金相場下直に成候はゞ、其時相場を以見計引替可申事。

殘一貫目

但此分遂増印可相渡置、尤未の年迄に者追々引替之事。

一、増印札通用中、都而上納は札を以可致上納に、札入用之ものは、正銀御算用場江指出、引替候儀不指支候事。

一、金上納之分も、當分一兩に付六十八匁之圖りに而、手形を以上納可仕事。

一、小割札當分通用方是迄之通可相心得、尤未の年に至り候はゞ正銀に引替可申事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

八月朔日　　長又三郎

〔年々珍敷事留〕

一、七月朔日米高直錢百目札に七貫四・五百文、同廿九日・晦日之頃は、遠所なと百目札に四・五貫より三貫文迄相成、札不通之樣に見え、依之正銀に三の一引替、殘る分者加印居り、夫より少々錢下り、十月頃は八貫五百文計に相成、諸色高直なり。

八月八日。前田齊泰學校に臨む。

〔温敬公記史料〕

八月八日臨學校。是日近侍請曰。今日爲某組講日。某組講日則君臨未有之也。公曰。若某組講日君不臨之言一出。是不與其組勸學也。遂命駕出云。

八月十日。殺生人等の石川・河北兩郡の田地用水川緣を荒廢せしむることを禁ず。

〔御觸留〕

石川・河北兩御郡田地用水川緣江、御家中幷町方より鮒釣等殺生人多入込、御田地踏荒、中には堰所相拂、水落致殺生候者茂有之、百姓共及迷惑候旨、御算用場奉行等申聞候。既に文政元年嚴重相觸候趣茂有之候處、右躰之族甚以等閑成儀に候。依之以來右族之者於有之は、御郡奉行手先足輕相廻、嚴重爲見咎、品に寄名前等相尋候之儀も可有之候條、先達而相觸候通

無違失急度相心得可申事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣被申渡、尤家來等ゟも急度申渡候樣可被申渡候、以上。

八月十日　長又三郎

八月十四日。銀仲預り銀手形消却に關し金銀の比率を改む。

〔觸留〕

今般銀仲預り百目手形三の一引替に付、金渡り之分は、一兩に付六十八匁之極に而引替之儀、一統申渡置候處、重而僉議之上六十四匁之極を以、金銀入合引替可遣候。尤金上納之分茂、六十四匁之圖を以上納可仕候。

一、引替方少銀之分者申談、一貫五百目以上に引集可指出旨申渡置候得ども、申談方指支候分は、三百目以上より引替に可指出候。金銀割合之儀は、御算用場承合可申候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配へ不相洩樣可被申渡候、以上。

八月十四日　長又三郎

八月十九日。兩替商預りの銀手形も亦三分の一を正金銀と引替へんとするの豫定なるを告ぐ。

〔本多政和覺〕

八月十九日

一、兩替預り手形、元來御運方之爲先達而被仰付候品に付、今般銀仲手形引替濟候上、右手形も三の一以正金銀引替被仰付候御手圖り之旨等、月番より被觸出之。

〔御觸留〕

當町兩替升屋次右衛門・酒屋惣左衛門名前之銀預り手形之分、次右衛門等自分に差出置候品之様に相心得候族も有之哉に相聞え候。元來右預り手形之儀は、御上御勝手御運方のため先達而被仰付置候之品に付、今般銀仲預り手形三之一引替相濟候之上、指續右兩替手形之分も三之一正金銀を以引替可被仰付御圖りに候之條、一統心得違有之間敷候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

八月十九日　　長　又三郎

太田小又助殿

惣左衛門は宗左衛門なるべし

〔諸事要用雜記〕

八月廿一日

八月廿一日。石川郡土清水の塩硝藏出火す。

一、今日土清水焔硝藏搗藏之内より出火、御屋根燒失之由。尤石など加り候樣之儀も無之候へ共、嚴敷響いたし、無程右樣之由。天氣打續候節は加樣之儀有之由之事。

八月廿四日。前田齊泰堂形馬場に於いて頭分の士の乘馬を觀る。

〔諸事要用雜記〕

八月廿四日

一、今日八時之御供揃に而堂形御馬場江御出、頭分乘馬御覽可被遊旨昨日拙者江被仰出。右御覽之儀御用部屋中江申談、御出之儀當處同席へ演述。則今日八時頃御横目より御案内申上御出被遊、七時御戻り被遊候。

八月廿六日。前田齊泰石川郡粟ヶ崎に行歩を行ふ。

御旅屋は粟ヶ崎

〔諸事要用雜記〕

八月廿六日

一、今日御行歩五つ七分御出、宮腰口町端迄御馬上、同所より御歩行被遊。昨日伺之通左内御先立、折々御近習頭御召連候人々と代り合。夫より御船小屋より御船に被爲召、獵師五人投網、御引舟一統御船手之者歌唄、御旅屋江被爲入御休、御膳被召上、重而御船に被爲召、大川先迄御通船被遊、洲崎より御上り、七つ屋橋より御馬上被遊候事。

一、延之助殿町端迄御先ゟ被爲入、同所より御同道被遊候。

八月。羽咋郡塵濱村清兵衞先に外國に漂流したるを以て口書を徴す。

〔塵濱村清兵衞バタンへ漂着の次第口書〕

能州羽咋郡塵濱村

清　兵　衞

當辰二十七才

私儀、去る寅八月備前岡山の船へ被雇、江戸廻仕候處、海上難風に逢、異國へ漂流仕、去卯十二月唐船に被送渡候に付、今度御呼返被下、今日御召出、難船の始末、且彼地の様子委細可申上様被仰渡、奉畏左に申上候。

一、去寅七月大坂上り船の水手に被雇、在所立出罷登り、大坂へ川入仕候の處、備前國岡山多賀屋金十郎所持の千八百石積神力丸と申船、致川入作事仕居、其節右船に被雇、直に備前岡山迄罷越、於同所御米千七百石計並御家中御荷物雜荷等積受、上乘御役人御船方宇治甚助殿・下役片山榮藏殿・沖船頭同國邑久郡しるめ村五左衞門・水手同村彌右衞門・同人悴山松・同村彌吉・同人弟彌市・同村榮吉・同村名兵衞・同村千代松・同村久吉・同村仁三郎・同村乙吉・同國小嶋郡村名不知才次郎・同國郡名不知福島村理八・讃州郡名不知津田北山村勝之助・藝州廣島木

工ノ浦伊勢次郎・長州郡名不知田ノ首村宗吉並私共船中乗組都合十九人、寅八月十二日岡山出帆、沖船頭五左衞門在所しるめ浦に十九日迄澗懸り仕、廿日しるめ浦出帆仕候處、播州高砂浦より風合あしく相成、同國さくしう浦に三日澗懸り仕、廿三日同所出帆、廿六日由良內へ澗懸仕、廿八日同所出帆、同日同國大嶋沖へ乘懸り候所、迎汐に相成候に付、大嶋へ澗入仕度色々と仕候へ共何分汐荒不宜、無是非船頭示談の上、沖の方へ船指出申候。然所廿九日夕七つ時頃より氣色替り大北風に相成、彼是仕候內、次第に沖の方へ船出、同夜丑の刻頃猛風強く相成、所詮難事と存上、荷打捨度段船頭へ示談仕候處、不相成段申聞候へ共、脊々船危相成候に付、上乘御役人へ相願、上荷御家中御荷物共並御米四五百石計打捨、帆卷下し申度奉存候處、風强くしたひ居、中々卷下し申樣の儀仕兼候に付、有合候品投付、帆打破、風相通、帆卷下し申候。右樣仕候へ共、何分風吹增波高、櫓の上に居候者共の腰迄も波打懸、乘組一統人心地も無之、夜も明候へ共、少も風靜不申に付、又々御荷物御米打捨、船脚輕く仕、相休申度兩三人も櫓より下り候處、晦日晝四時頃にも候哉、艫の方甚敷鳴り申に付、打驚き見受候の處、楫打折一時に六尺計淦入に相成、船既に覆り可申躰に付、碇四挺・大綱二筋一度に打込候處、漸船居直り候へ共、浪風少も減不申候。楫なくなり候上は、帆柱却て邪魔に相成候に付、打寄斧等を以切懸り候へ共、風波甚敷自由に働得不申、彼是仕候內、刄物も散々

に相成、水手共夜前よりの騷に疲果候へ共、其儘にも難指置に付、上乘御役人より御褒物御貸被下、夫を以二三ヶ所切込候內、切口鳴出、横樣に倒れ候の處、船の垣に引懸り垣二三間計押潰申に付、はづな切拂候處、帆柱流行申候。依て垣等取繕り乘行、同夜八つ時頃迄に淦汲出申候。翌日も同樣風波烈敷、荷米又々打捨、損所を繕ひ漂流仕候。

一、九月十一日、西北風嚴敷吹募、相殘荷等追々打捨、其後は日々少宛捨行申候。當日誠に甚敷風にて櫓の上も登兼申程の事にて、大波船を打越甚危く、畢竟可助樣子も無之、一統打寄必死と覺悟仕、何れも決心仕申候。其二三日前より、其躰白く嘴長き小鳥、波風の中空より舞下り、船の上にて三遍宛舞候て立去候を見付、何れも怪しみ、後一統信仰仕候守護神にて可有之と、此日丁半の神鬮を拵、丁鬮下り候はゞ神物、半鬮に候へば常の小鳥と、鬮を以神鬮を引候處、丁の鬮下り候に付何れも相悦、彌々守護神に候はゞ今一羽連參候樣にと相願候處、翌日二羽參り每のごとく舞下り候に付、何も櫓へ上り船へとまり候樣申候處、則桁の上へとまり三聲宛啼、其後バタン國へ漂着仕候迄、每日此鳥來り申候。九月十六日迄風波少も止み不申、風に任せ流行申候。

一、十七日少浮に相成、當日沖船頭五左衞門在所しるめ村祭禮日に付、何も休息仕候處、日暮頃西の方に黑雲起、暫時に雷大風すさまじく、船中騷動仕、碇四挺一度に打込、是迄下し

置候二丁共六挺に相成、小間に張置候小帆卷下し候へ共、船飛がごとく其内には垣共追々浪に被打取、難澁申計無御座候。去共翌日より浮に相成候に付、取繕流行申候。廿日頃歟又々大しけに相成、おも楫・外艫も打取候に付、指置候水汲溜桶取入、相働居申候。其節水打こぼし、且貯置候水も追々飮遣申て、漸少に相成候を日にそゝり、食事仕居申候へ共、最早飮切らし致方盡果候に付、櫓より樋仕懸雨相待候へ共降不申、五日計も相立候に、漸雨降出候處、防方も無之大荒にて、雨水抔取入申樣のゆとりも無御座、日々斯樣の爲躰にて風に隨ひ流行申候。

一、十月廿三日は又々大荒、此頃に覺不申波風に相成、船今度は引裂可申樣子にて、逆波幾度か船を打越、艫へ逃げ、表へ走り、防ぎ申力も無御座、人々當惑仕泣叫居申候。初帆切候砌より、イソベサマと相唱候鰐二つ船に付居候躰に御座候へ共、何も心付不申、沖にて汐上げ候時、イソベサマと心付、右は伊勢大神宮の御使神と申候て、江戸渡海仕候者は甚だ信仰仕、難船仕候節は毎もイソベサマを相賴、無事を祈申儀に御座候。イソベサマ斯樣に船御守乍被下、波風も强く日々大荒仕、且船邊へ近付不被下儀、何れ船中不淨の品積受居申にて可有之と段々相しらべ候へ共、左樣の物も無御座內、長持六指右は御家中御荷物にて、內には夜具着物の類入有之樣子、頃日追々取出し、宜分は帆に繕り或は繩に仕、又は碇の綱揩切れ申に付、間に入抔仕用來候故、相殘候分今更打捨候ては跡の指支に相成可申、乍去外に不

淨の品とては何等も無之候に付、長持の内重々穿鑿仕、不殘打明相しらべ候處、一指の内馬具少々有之、必此品にて可有之と存、取出し打捨申候。都て江戸海にては馬と申事甚嫌ひ申儀にて、右馬具有之故、斯樣に打續大荒等仕候儀と其節何れも存居申候。其後はイソベサマ日々船邊に付居、高波に相成候へば表と艫とを圍ひ、波を除け、其長さ十四五尋にも相成居、風波も無之時は、一尺四五寸の小鰐に相成、船端に常に付居被申候。其内私共魚共給候はゞや扨と咄合候所、其日イソベサマ沖より多くの魚共追廻し來、船の邊しいら・こざり鯛・ちん鯛・鰹其外見馴不申小魚共追廻被申候故、捕申度候へ共釣針とても無御座、いかにも多く集り居候に付、帆縫上候六寸計の針人々所持仕候を曲げ、其儘投込候處、未だ魚にも屆不申内より飛付々々、暫時の間に魚多く捕申候。何も打寄料理仕、生の儘食申候。其後日々小魚四つ頃より夕七つ頃迄船の邊江追寄候に付、少泙候日は打寄此頃の疲を休め居申候。捕上候しいらの頭等イソベサマへ上候へば、心能く受被申候。此後金の御幣下り候頃、イソベサマ付被居申候へ共、其後何方へ參候哉相見不申候。

一、頃日風もなぎ波もかぶり申程の事も無御座に付、碇引上げ損所を繕ひ居候處、十月廿八九日頃に候哉、夕七つ頃より北風大に吹募候に付、碇六丁一度に打込候處、忽一挺摺切れ、翌日又一挺切れ落候。其儘にて漂流、始終北風强吹申、十一月六日に相成候處、雨降出少泙

候に付夜飯給、櫓へ上り候處山一つ見付出し申候。何れも相悦、寄申度彼是仕候内日も暮れ申候。今宵此山へ寄候て可然哉否哉の神鬮を上げ候の處、則上陸仕候て宜敷神鬮下り候に付、艀を下し乘移り可申と仕候處、又雨風一時に吹下り相殘候碇四つ共何に歟引懸り候處、風强船矢の如く颿候故、一時に四つ共打切船舞歩行、山近に相成候へ共寄付得不申內、嶋山の處自然と澗の樣に相成候所へ來懸り候に付、澗へ入申度色々仕候內、船は風汐に迎ひて其嶋山を一巡仕、元の澗形の處へ右の方の出嶋より來懸候所、岩高にて澗入兼、風に任候へば岩に當り打碎かれ可申躰に付何も打驚、一心に金毘羅大權現へ奉祈念候の處、金色の御幣下り候樣に相見え、相喜び拜み候處、覺えず船其澗の樣に相成居候所へ入り居、碇に付居候綱二筋自然と左右へ引分れ、艀を以態々繫留候樣に相成、岩からみ付樣子にて動不申。是偏に金毘羅大權現の御利生と難有存、明朝早々山へ上り可申と存居、夜明候處彼からみ付居候碇の綱解、船ゆるぎ出、風に逆ひ汐に迎候て上り行候に付、其行に隨ひ候所、汐の指引甚敷所へ出、大波相起、二三枚の波にて船中九尺計淦入に相成、色々相働居申內、船は矢張風表へ上り行申候。翌日山も相見え候へ共寄付得不申、次第に沖の方へ船出申所又嶋一つ相見え、其方へ船向行候に付相喜居候處、汐道甚敷所へ行合、風と汐とにて船彼島へ打付、急に裂碎け散々に相成候に付、十九人共海中へ落候內、私共十四人は游付嶋へ上り候へ共、沖船頭五左衞門・

水主彌市・乙吉・宗吉・與四松の五人は其節溺死仕申候。

一、是迄は食事とても日々給不申、晝夜働居候故、眠申間も無御座、適々疲臥候ても、高波に被動起、數日如此難澁にて何れも身體疲果、人家を相尋ね山中へ分入候へ共人家も無之、途方に暮、且人々空腹に相成候に付、私も始より用意仕候米二升計持居候を分給へ申候へ共、老人等は打倒動不被申、其内二人三人宛離々に相成、私儀は備前の才次郎・讃岐の勝之助と三人一集に嶋の内を尋巡候處、此嶋人家無御座、廻り日本の道七里計にて、山中所々牛・鹿様の足跡並鳶、外に見馴不申鳥見受、木は皆小木にて且見馴不申木のみに御座候。つほいと申草・とんぼ草・見知草共を以食に代、此所二三日罷在、所々人家尋歩行申候。着岸仕候は十一月七日にて、寒き時節に御座候へ共、其地甚暖氣にて單物一つにて著さ凌兼候程に御座候。船方にて子の一つ星と相唱候北極星、此地にては至て低く相見え申候。三日目着岸仕候邊の少し小高き所より向を見候處、大なる嶋有之、其方より牛の如き物游來候に付、私共三人共空腹に罷在候事故、打殺食用仕度濱の方へ廻り下り候處、丸木を彫抜候様の長九尺・幅四尺計の船、杓子様なる櫂共磯際に有之、高より見受候牛と相見え候は、此船にて可有之様子に付、必人來候にて可有之と、又々山の方へ十四五町計も尋入候處、打懸小屋有之異体の男七人在合、私共を見付打驚、海賊にても可有之と存候哉、鎗取出し突懸候に付、詫言申入候へ共言語通

し不申に付、先竹鎗取揚、其上にて私共手を合せ候處、彼者も同斂手を合申候。其風躰惣身色黒く長高く髪縮、裸にて木綿樣の物にて下帶を仕、芭蕉にて組立候簑一つ着仕居申候。彼者共何等の用事有之參居候哉と仕形を以相尋候所、魚指出し此品取に參候趣手眞似を以申聞候に付、漂流の始末を手眞似を以申候處、木根樣の物二つ三つ・つくね芋呉申候。且其邊に御座候木の實ちぎり來呉候へ共、此間中給不申品故、其由相斷候所、其人皮を去り給見せ候に付、三人共食申候。形松笠の末ひらき不申樣の長き物にて、外色赤く、皮を去候へば青色にて、熟柹の如く味至て甘く、是迄見受不申物にて、一山其木多く葉は柳の樣成物にて御座候。酒も給候へ共、米は無御座所故、砂糖黍にて製候物の由、味甚だあしく、日本の酒とは格別の違に御座候。又持參仕候躰にてだい〳〵取來り呉給申候。且又殘十一人の者山中に疲臥居候間連來候樣、是又手眞似を以申入候處、私共も參不申候ては其者共見知不申者故、參申間敷とか申躰仕、形にて申聞候へ共何分私共も誠に疲居候間、彼者共呼來呉候樣達て相賴候處、承知の躰にて山奥の方へ尋行申候。何やらん唱言いたし走行候處、早足にて暫の內六人連來申候。跡五人も連來呉候樣相賴候處、又三人連來、私共十二人打寄、名兵衞・仁三郞兩人共相見え不申候へ共、日暮に及び候故、先其儘にて其夜は其所に夜を明し申候。同夜向に相見え候嶋にて火を焚候處、此方にても火を焚合致相圖候樣子に御座候。夜半頃狼啼出、名兵衞等

兩人を案じ一夜寢も不仕、火を增し夜を明し申候。

一、翌朝向の嶋より四間に六尺計の船三艘、人數三四十人計乘組、私共を連に參り候樣子にて、役人躰に相見え候色小白き男、股引をはき繻袢を着し、多勢を指圖仕參候に付、其者共を賴み、名兵衞・仁三郎を尋貰候處、十人宛に別れ尋入、則兩人共連來、不殘揃申に付、溺死仕候者共相尋度存、參候人々へも手傳相賴候處、承知仕呉、共々海中相尋、五人共に死骸を引上、其場にて假葬仕申候。同日私共の內先十一人連を渡し、翌日殘三人を相渡申候。海上一里計可有御座奉存候。其所は所の者申聞候辭の內、私共色々相考仕形等にて被察候は、國名バタンと申長三十里・幅二三里計有之樣子。此所村名サブタンと申候て、初て漂着仕候無人嶋はバタンに付居申由に御座候。此サブタンと申所家數百軒計有之、濱邊にて、家建都ていさ葺指懸小屋に御座候。男は前段獵師同樣、女は髮長く垂れ、裸にて一幅の木綿樣の物を腰に纏ひ居申迄に御座候。此所にて馬見受候處、耳長く形大に御座候。豕・野牛・羊・雀・芋等を食し、米は一向無御座候。私共は他の品は給付不申事故、芋を申請給申候。其品三通、つくね芋・里芋・琉球芋に御座候。食事仕居候內、下に置候へば、直に犬・猫等參り食行申候。處の者は犬・猫の給候殘をも無嫌給居申候。

一、翌日に相成候處、可送遣段申聞、老人等四人殘置、私共十人の者處の人に被誘濱邊一里

計參候處、急なる山へ連上り、サブタン人は唱言いたし駈上り候へ共、私共等は木根岩角に取付漸登候處、少し平ら成處へ出で、其處にて中飯仕候樣申聞、芋並蒸魚と申魚呉、晝飯相調罷越候處、至て急成坂へ行懸、サブタン人より唱言いたし、早く下候樣にと申躰に候へ共、何分私共存不申事故、唱得不申趣仕形にて申諭、靜に下り、七つ過濱邊へ出申候。向に白壁作の家十軒計相見、其內サブタン御役頭の御屋敷有之由、其地より少し手前の在所へ着、暫此所に相待候樣サブタン人申聞、相見合候內、サブタンに殘居候四人もサブタン人に被連罷越、十四人共相揃候に付、其所の者へ引渡、サブタン人は歸村仕申候。此所迄サブタンより大躰三里計も可有御座と被存候。家建矢張打懸小屋にて、家數百軒計御座候。國名及村名共承不申候。此所より同夜四時頃白壁の在所肝煎躰の所迄被迯參り止宿仕申候。翌日起出で四つ頃にも相成候へ共、食物も呉不申に付、芋を乞候へ共、御役所より御指圖無之ては難爲給躰に被察、相待候內、女一人髮は一所に束ね下髮に仕、足の踵迄屆候程に仕、鐵炮袖の脇切有之物を着、其樣サブタンの女と同樣の躰にて、芋を持來り呉申候。暫く相立、右の頭役名イソバナと申人相見え候。羅紗の鐵炮袖の着物を前の方臍切に仕立、後の方裾踵迄屆、胸の間牡丹〆に仕候を着し、羅紗のぱつちをはき、家來の樣の者十八人、各鐵炮を持、腰に火藥を入候胴藍を提、羅紗鐵炮袖の着物を着し、何れも羅紗の帽子を冠り、床几樣の物に腰懸、

下役の者より名前相尋候に付、各名乗候處、鳥の羽にて紙に書留申候、見受申候處横文字に御座候。夫より御役所へ被召連、人毎に芭蕉の圓座を設、其上に座し候樣被申聞候に付、座候處、豕四疋牽來り目前にて刺殺し、血を人々へ勸め申候。心悪敷被存候へ共、格別馳走の躰に付少々啜申候處、又野牛を牽來同樣に血を取喫候へ共、給候眞似仕置申候。兩樣共料理仕、煮又は燒喫候に付、少宛食申候。然内牛一疋牽參、四足を縛り庖丁を以眼中へ指込、狂廻を多勢にて押置、血を取り皮を剝切取、是をも煮炙り喫申候。都て生獸を殺候儀は此上もなき馳走と相見え申候。一躰此地産業と申も無御座、食事に相用候事のみに晝夜取懸り居申躰に御座候。

一、此所に三日計逗留仕候處、夫よりサルトリメンゴと申所へ被送申候。陸地にては山坂多く、私共は足疲候故難參に付、船にて送届候樣子に御座候。海上三里計にて着岸仕候處、先達て通じ置候哉、見物の男女群集仕居、役人叱立漸退候に付上陸仕、白壁作石垣有之屋敷の所へ入置、門を鎖置申候。是は見物人にても參、怪我にても爲致可申哉と斯樣に仕置候哉と、番の者の仕形等にて被察候。家建はサブタン同樣打懸小屋にて家數五百計、濱邊にて風俗サブタンの通、其人男女共口赤く、是は其地に有之木實桃程の大さの物、名ブッと申物の皮を去り、切割り石灰を付、見馴不申木葉に包み、口へ入れ嚙碎き汁共吐出申候。斯樣に仕候へ

ば、口中透と仕、心地宜御座候故、於其地は人參り候へば、初めに必ブッを出し、次にたばこを出申候。ブッ給候へば口中が赤く相成申儀に御座候。たばこは何方にてもたばこと相唱申候。在留中私共には料理人兩人宛付居、豕・牛等獸の肉調吳候へ共、給得不申に付、私共の爲には堅殺生無之樣相斷、魚有之候はゞ食用仕度趣申入候處、魚拂底にて平生澤山には無之旨にて、適々貯置候分被出少宛吳申候。是等皆々仕形を以申聞、此方よりも同樣仕形を以答申候。同所に於て私共馳走の爲祭禮の樣の事を致し爲見申候。其日役人等頭立候分は羅紗の股引に羅紗の鐵炮袖の着物腰切の物を着、新敷下帶をしめ、女も新き湯卷を仕、佛像樣の物を持、大勢町中を狂步行申候。

一、此所にて越年仕、翌春則正月七日サルトリメンゴ出帆仕候。其船四百石計積、役人四人・船頭一人・船方三十五人・私共十四人乘組、都合五十四人御座候。同廿一日迄海上乘申間、嶋々山々相見候へ共名承り不申候。同廿二日大川口へ入申候處、兩川緣嚴重に相構、石火矢臺何程となく飾置申候。都て異國の船澗入仕候へば、爲相圖石火矢放し申格の樣子にて、則サルトリメンゴの船入候刻も、双方より石火矢放し澗入仕申候。此所呂宋と中國の山に御座候。正月廿三日役人上陸仕、引合の上私共も上陸仕、城の樣成所へ入られ候。此地大湊にて御座候て、諸國の商船澗懸仕居、人家數萬軒を並べ、賑々敷事に御座候。土地著さ甚敷單物一つ

にて堪兼申程に御座候。男女共膚白く眞鍮色の眼にて、男は髮縮居、少延候へば挾切、常に頭巾を冠り、羅紗のぱつちをはき居、羅紗の鐵炮袖の服を着仕、女は縮居候髮を五所程につまみ結上、琥珀抔の櫛を指、鐵炮袖の服を着、更紗木綿の袴樣の物を着仕候。此地に百廿日逗留候内、所々見物に出候處、役人連立、遠方抔へ來候節は箱樣の物に入、馬二疋に是を爲曳、馬指引仕候者一人共馬に乘居申候。容腹に相成候へば、其邊の大家に立寄、役人共指圖を以食事相求申候。家建惣躰瓦葺、柱は悉皆石にて、十間に腰懸を掘ゑ、二階又は三階抔を拵、硝子障子を入、其結構目に餘り申候。町幅七八間より小路は四五間計、家並奇麗に御座候。町中等橋有之候處、悉く石にて疊上、丈夫に仕立有之候。土地宜敷、産物も澤山有之候。藥種類・珊瑚珠・羅紗・毛氈類・其外白タイトウ米・醤油・砂糖・黍にて製し候燒酎等御座候。魚類も多く、色々珍敷細工物仕出し申躰御座候。在留中昔八人夜十六人宛番付居、日夜更柝仕、百廿日の間無怠相詰、夜中寢靜り候へば、一人毎に寢姿を見受に罷越、毎夜同樣に御座候。漂流中數日風雨に吹さらされ、雨濕を受、且水も惡敷故歟、皆々浮腫相滯、才次郎儀は浮腫は左程にても無御座候へ共、不食にて難儀仕候に付、呂宋御役所より醫者被下、毎日兩度宛被相見廻脈を見、何角被申候へ共、一向に相分り不申候。才次郎の療治は臂の上下を手拭にてしかと〆、其間へからし粉の如き物を塗り置、次に其所より血夥敷取申候。如此仕候事七

日計にて、食も相進み全快仕申候。尤も煎薬も一日に小猪口に二抔宛被下服用仕候。浮腫の人にも煎薬被下服用仕候。醫師は上には黑き衣樣の物、下には更紗の衣樣の物を着、帽子は羅紗にて長き毛の付候異風の物を冠居申候。

一、百廿日目に、明日は送遣可申、御定を以送屆候時は先七年計も可相懸唐土へ送出候へば、二三年にて歸國仕得可申旨申聞候に付、左候はゞ唐土へ送出呉候樣相賴、翌日呂宋出帆仕候。其船千石餘積申船にて赤色の皮にて外廻を包、水に付候所を悉銅にて包、帆柱は三段に繼合其繼目每に棚をはり、二棚共常に上に一人宛乘居申候。海上每日七十里計、七日程飄參候。海中國々も嶋々も相見候へ共、名も承不申候。七日目マカヲと申所へ着仕、其段案內御座候處、役人相見え見合の上にて上陸仕候。町建にて人家の樣子大躰呂宋と同樣に御座候。此所には唐人多集居申候。所の者は眞鍮目、髮縮居申者も御座候。私共着仕候刻、通辭の爲唐人連候へ共、何分通じ不申に付、私共漂流仕來候趣具に相認め、甚助殿より相渡候處、唐人よりも久々難儀に可有之、最早本國へ近付候間、相喜可申旨書出し申候。私共力を得、唐人留置候も不益と歟申躰にて、唐人を追返申候。此所に四十日逗留仕、其內役人同道仕り町見物に度々罷出申候。在留中呂宋の通晝夜番付、寢息を考へ折々ゆり起し候事も御座候。食用は牛・家　魚・菜・蓮根抔何れも豕の油にて揚呉申候。

一、四十日目夜此所出船、日の内は船懸り仕、夜に入り船飄、三日目に唐土カントンと申所へ着仕候。此間夜のみ船飄候儀相尋候處、他國の人々へは爲見がたき所の由申聞候。カントンの川口には唐船多、此所大地にて大湊と相見申候。四日目上陸仕、カントンの役所へ連行申候。難船の樣子書物を以相尋候に付、甚助殿より始末被書上候樣子に御座候。此所にても一向言語通じ不申、仕形を以始終應答仕申候。唐土よりは日本渡海春秋兩度有之、春船は遲候間秋船に送届可申旨申聞候。此地人物頭の廻りを剃、眞中丸く髮を殘し、三つ緣に結後の方へ垂、服は鐵炮袖のながき物を着居、女は紅粉・白粉を以面を粧居申も間々有之、眉は剃不申齒も染不申候。足の甲の至て小きを宜事と仕候樣子、依て女子生立より足にはめ物を仕置、自然太り不申樣仕置申候。年長候ても足小く歩行不自由に御座候故、大家の分は下女に手を被引歩行仕申候。下賤の女程足太に御座候。都て唐土一統當時のならはしと相見申候、在留七十日の間晝夜番人付居、夜中寢姿見に罷越、寢息を考申所呂宋・マカヲの通に御座候。此所にて初て暦を見受申候。食事は呂宋・マカヲ・バタン共三度宛給申候。廣東に限日に二度にて、朝四つ・夕七時頃食仕申候。米はタイトウ米に御座候。此所にても豕・牛等喫候へ共、堅相斷候故、其後は鯉・白魚・見馴不申魚共並蓮根・蕗・ゆうご・豆腐抔喫申候。油揚は木實油にて揚候分に御座候。其内盆頃とか被存候に町中一統硝子の提灯・琉璃灯夥敷燈し、甚賑々敷家々酒宴

仕候。惣て土地繁花にて、川口へ船幾千艘ともなく凋懸仕居申候。町も至て廣く家建も奇麗に御座候。在留中同所に御座候芝居見物に被連候事御座候。芝居迄カントン御役所より二里計有之候へ共、未だ町中に御座候。芝居見物仕候處、日本芝居の仕形にて淨琉璃の者も御座候。三絃・琴・笛・太皷等鳴物多囃子立、怪しからぬ笑敷事を仕候。初小屋へ何れも入候處、役者・見物一統私共を打詠、芝居も不仕氣の毒に御座候。且見物仕候ても言語相分不申故、退屈仕り暫有之罷出申候。八月十九日に相成申旨にて、蒲團・鐵炮袖の綿入人々へ被下着用仕申候。廿日同所川船にて二日下り、夫より俣川へ上り申候。船二艘、一艘は上役人一人・下役人一人、外船頭・水手、又一艘は私共十四人並船頭・水手等九人乘組、兩船共屋形船硝子障子にて、役人の船には紫の幕を張、廣東の旗を立、私共の船には日本人の乘居申儀相認候旗を立、夜は日本の通にて油引不申丸提灯を燈し、二日程宛參候ては役人上陸仕、錢四五貫文宛取來、所々にて小遣に仕居申候。川岸所々村立御座候。

一、廣東を出候てより十七日目に上陸仕、羅紗にて圍候輿に乘せ、重きは四人、輕きは二人にて舁行、山路凡八里計參り、ツネヤマと申所に止宿仕候。翌日又川へ出、ツネヤマの船に乘、所々にて廣東の役人上陸仕候。十四日目に上陸仕、一日陸路歩行仕り、城下へ着仕候。此所ジッコンと申由に御座候。私共寺へ連行申候。寺號承不申候へ共、禪宗の寺にて、僧日

本禪宗の通に御座候。其夜は精進料理にて豆腐・芋等爲給申候。翌日此所にて川船へ乗候處、役人船一艘相增私共乗居申船を挾み行、凡九日程川船にて下り候處、コンサイと申城下へ着仕候。此所も大地に御座候。夫より一日陸地通行仕、又川へ出申候。廣東より川船に乗出、陸地三日歩行仕候外、六十日川船にて、都合六十三日目にサフと申所へ着仕候。廣東よりサフ迄一川の由に候へ共、川通參候ては却て遲く成申に付、折々少宛陸地爲通候由申聞候。陸路通行中宿驛に休息仕候節、馳走仕申候。ジツコン・ツネヤマ・コンサイ共人物廣東の通に御座候。サフと申所は日本渡海の湊にて、通辭も有之日本語能通じ申候。在留中始終名トウケンと申通辭用達仕候。着仕候節廣東の役人・サフの役人引合ひて私共を引渡、サフの役人より無異變受取候儀書物差出、廣東の役人は被致歸國申候。唐土の內へ漂流仕候樣子にて、先達より薩摩の御役人上下十人此所へ被參、互に日本の事共咄合無事を喜申候。此地人物廣東抔と同樣に御座候へ共、適々袂有之着物を着仕候者も御座候。此地の錢は丸形にて大さ四文錢程の穴なき至て薄き物に御座候。在留中見受候處、日本の小判取扱、一兩四貫文計の由に御座候。錢は拂底の樣子にて、サフは八歩通日本の寛永通寶に御座候。土地寒く九月頃氷はり、九月頃の樣子は無御座候。サフにて日本人の事をウヽツと申候哉、薩摩の流人をコウヽツ、私共をシンウヽツと申居候。廣東にても同樣ウヽツと申候。在留中次第に寒相增候に付、

私共不殘蒲團・綿入・帽子被下着用仕居申候。

一、霜月十四五日の頃薩摩の人々被致出帆、其節私共一集に渡り度、且薩州人よりも同船仕度旨被相願候へ共、難相成段被申聞、無據跡へ殘り申候。霜月廿五日私共の內宇治甚助殿・片山榮藏殿・名兵衞・仁三郞・勝之助・伊勢次郞・理八〆七人出帆被申付、殘彌右衞門・彌吉・文吉・榮吉・千代松・才次郞・私儀は、同月廿八日サフ出帆被申付候。其前晚サフの御奉行所御前に於て御酒被下、品々饗應御座候上にて、菓子種々澤山被下頂戴仕申候。初甚助殿等七人出帆の節も一集に私共預御馳走候へ共、改て斯樣取扱有之、出帆の節も通辭より申遣候樣子にて、大蜜柑一荷私共へ被下候。サフの船凡四百石積計の船にて、赤黑を以彩色御座候。船中商人六十人計、船方六十人計、私共等都合百三四十人計の乘組に御座候。都て唐近の海は泥水に御座候所、出帆後次第に色白き海に相成申候處、船頭最早朝鮮へ近付候旨申聞、今四五日の內に日本へ着可仕旨申聞候內、日本近と相見え海邊靑く相成申に付、何れも喜居候處俄に風替り、船方色々相働居候へ共、船次第に吹戾し、白海を越えて泥海の處へ參候に付、私共共々色々働居候へ共、全躰船大成迄にて、日本船とは辨利無之、如何可相成哉と惘居候內、向より船一艘參候に付、唐人より言葉を懸候處、何角相答、船行過申候。船方の者抔每度日本渡海仕、日本語能覺居申候故、只今の船と申談候樣子、船方の者へ相尋候所、ホクチウの船に

て難風に付サフへ付申由申聞、迚も風工合不宜候間、私共乗組候船も一先サフへ歸り不申ては不相成旨申聞、打驚候へ共詮方無御座、依て船中一統船神を念じ、私共にも無難を祈誓仕候樣申聞候に付、金毘羅大權現を念じ居申候。然る内風替り追手に相成候に付、何れも相悦帆を張颺申候。爲此悦鷄及豕四五十料理仕、船神を祭申候。追々泥海を離、朝鮮近に相成申候樣子にて、白水海の處へ參、朝鮮の山を見付申候。翌十六日夜五嶋の山を見付出し、何れも勇立申候。相圖と相見え、船中頻に鉦を打出し、止候後鷄五十羽計・豕十疋計料理仕、船神へ備申候。水手の内一人裝束を仕替、船中にて六尺計の棒を振、船頭を拜し退申候。其跡にて船頭船神を拜し、備物を不殘海へ打捨申候。同夜は船中に火を焚、提灯を燈し、無事に日本へ着仕候悦を仕申候。十七日夜長崎浦へ着仕候處、十八日朝通辭並御役人唐船へ相見え、引合候上にて、私共相伴上陸仕候。甚助殿等十人は十五日夜着岸仕、薩州の人々は三十餘日私共より相後れ着岸仕候。私共の船はサフにて五番に出帆仕候處、着岸三番に相成、船頭等相悦居申候。上陸仕候て長崎御役所へ御召連、身躰悉御改候て、揚屋へ被爲入置、其後每度御引出し、彼地の樣子御尋に御座候。揚屋に罷在候内は、每月三度宛湯風呂・月代被仰付、且日々紙代として九文宛被下、明六つ時より夕七つ時迄揚屋中步行御免に御座候。將又在留中四度宮參被仰付候。

一、右難船の始末、巡國中風出の様子、見聞仕候有形、就御尋奉申上候。國所並産物の名、サフにて通辭相咄承糺候處、右申上候通の旨通辭申聞候。都て日本道の圖を以奉申上候段申上候處、於異國切支丹等怪敷宗門抔被勸候様の儀無之哉と御糺に御座候。聊左様の儀無御座、長崎御役所においても嚴重御糺にて、踏繪被仰付、則何れも彼宗門佛像踏申候。私宗旨一向宗羽咋郡一ノ宮寺家村長榮寺旦那に御座候旨申上候處、異國へ漂流仕ながら無難に歸鄉仕候儀は、偏に御上の御恩澤に候間、忝奉存候様被仰渡、誠以難有冥加至極の仕合、御仁惠の程奉恐入候段申上候處、異國漂流仕候上は、向後船稼御指留、且陸地たりとも他國へ罷出候儀堅不相成段被仰渡、委細奉畏候。段々御難題の御儀可奉申上様も無御座難有仕合奉存候。

天保三年壬辰八月

坂井與右衛門

九月朔日。前田齊泰の子延之助將に金谷御屋敷に移らんとするを以て普請の主任を命ず。

〔諸事要用雜記〕

九月朔日

一、左之通御用番內膳殿被仰渡候事。

御手前儀、此度金谷御屋敷延之助殿御住居に相成、當月より御普請被仰付候に付、右御用主付被仰付候。御逼迫之御時節に候間、御入用精誠遂僉議、御手輕に被仰付候條、其心得を以可有僉議候。土肥權六郎儀も右御用主付被仰付候條、申談可被相勤候事。

九月

九月五日。幕府の飼養する綿羊を交附せらるべきことを告ぐ。

〔觸留〕

綿羊望之者候はゞ可被下、尤御領分百姓等に而も、望之候もの有之候はゞ被下候間、望之もの有之候はゞ、巣鴨綿羊小屋ゟ御家來被指出、澁江長伯ゟ相談、爲請取候樣可被致候。

右之趣水野出羽守殿被仰渡候間申達候。公儀御闇置之綿羊望之者有之候はゞ可被下儀に付、別紙寫之通、御勘定奉行明樂飛驒守殿被仰渡候條、望之者有之候者、可申聞候事。

右之趣被得其意、同役中達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

九月五日　　奥村内膳

九月六日。前田齊泰河北郡津幡に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月六日

一、今日拙者儀御召連に付、五時過罷出。夫より四時御供廻りに而、御用部屋中初同道御先江罷越、大樋に而御待合申上、四つ二歩御出被遊、大樋町端に而御馬御留御沓拂。此節御先乘之人々馬御先順之通往還江建置、其內御先乘同役も御馬繰出、何茂御先之人々乘上り、夫々場宜所々御早乘被遊候。騎馬之人々九時過津幡江御着被遊、御休被遊、八半時頃同所御立被遊、御步行に而被爲入、於御途中森下御小休之儀被仰出、御近習頭加藤、配膳役森・入江、御步橫目幷御供押御供之內より御先江遣候儀、隼人より伺申談。無程同所御休、暫有之御立、重而御步行、大樋端より御馬上被遊、不時御召連之人々同所に而殘り、暮六時前御提灯入御歸殿被遊候事。

拙者は大野織人

九月十六日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

九月十六日

一、今日兩學校御出之儀昨日被仰出、八つ過御出、七つ過御戾り被遊候事。

一、文學校人持子弟會讀、武學校矢野久左衞門門弟劍術、夫より射場江被爲入、吉田三家的五手充相濟、御射手何茂是又五手充御覽被遊、相濟御戾りに候。的御覽之儀昨日被仰出る由。

九月十七日。前田齊泰河北郡春日山に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月十七日

一、今日御鷹野之振に而九半時御出、尾坂口より尾張町通春日鳥居ゟ御入、同所神主家邊に而御下馬被遊、夫より御歩行。惣御供同所に相殘り、御上り口ゟ相廻る。野間入之分一刀に相成、御先き例之通三十人小頭弁頭御先立、御供頭・御用部屋等不時被召連候人々御下馬より御供、春日社中より山ゟ御上り、庚申塚邊御歩行被遊、鈴見ゟ御かゝり同所に御陣取、御幕二双・緣取・御氈に而御休所に相成、暫御休被遊候内雨降出、無程同所御立被遊、七つ三歩御歸殿被遊候事。

九月廿六日。前田齊泰郊外千日町口に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月廿五日

一、明日御鷹野左之通被仰出。

奥之口より松坂通・金谷御門・石浦町・香林坊橋・片町・千日町々端より、犀川々緣土手通入江村領等御通り、間明村四郎兵衛方に而御小休。夫より東力村領・御供田村等御廻り、千日町々

端より右同様御戻り。
右之通石野等を以被仰出候事。
九月廿六日
一、今日御鷹野御出九つ半鎌、御待受七時過之事。
一、右御戻り暮頃之事。
一、御餌柄御拳鷺一つ翕上る。同一つ、小鳥五つ指上る旨。夫々上り候事。

十月朔日。學校に於ける年寄中聽講の席次に就いて告ぐ。

〔官私隨筆〕
十月朔日
一、左之覺書學校方より被出之候由に而、御用番被爲見之。
各初學校へ會讀等聽聞に御出座之節、是迄は御前御出之時分之詰所に而御聽聞有之候へども、間遠に而辯解之様子等難聞取候付、以來は席々へ相廻り御見聞有之候はゞ可然と遂示談相伺候所、伺之通被仰出候。併後々區々に相成候而は、人々了簡次第之様に相見え、出座人々氣向も如何に候間、一様に相成候様有之度候。依而及御演述候間、各初御家老中等へも寄々御申談有之候様致度候事。

十月四日。老牛馬を領外に賣出すことを禁ず。

〔郡方御觸〕

御領國老牛馬之儀、他國等ゟ賣遣候儀不相成、御締方之趣、前々より毎度嚴重申渡置候處、江州邊之博勞抔与御領國之内博勞共与申談、牛馬牽賣遣候儀有之躰相聞え、博勞商賣もいたし候者は、御縮方之儀嚴重誓詞茂申付置候處、不埒に相聞沙汰之限に候。近年皮拂底に而、役皮上納茂指支候程之儀に而、不容易趣に候間、以來右様不心得之儀無之様、急度博勞共へ可申渡候。若此上少しに而茂心得違之者於有之者、嚴重咎可申付候條、右等之趣得其意、夫々嚴重に可申談者也。

辰十月十四日　　御郡奉行

能美・石川・河北三御郡村々役人

十月八日。前田齊泰また頭分の乘馬を觀る。

〔諸事要用雜記〕

十月八日

一、今日八時御供揃に而堂形御馬場ゟ御出、頭分乘馬御覽可被遊旨昨日被仰出、則今日八時

過御出御覽被遊、七時過御歸殿被遊候事。

十月二十日。前田齊泰武學校に於いて陪臣の乘馬を觀る。

〔諸事要用雜記〕

十月廿日

一、今日學校江御出、陪臣馬役馬術御覽之儀昨日被仰出、則九つ八分過御出、於武學校保田仙次郎等門弟定日之稽古御覽被遊。畢而陪臣馬役馬術二組に而御覽相濟、御馬八疋學校江御ひかせ、右陪臣之內八人乘馬被仰付。畢而前田內藏助持馬高桑五郎兵衞、前田才記持馬竹村九郎太夫江被仰付御覽被遊、相濟七つ三分五りん御歸殿被遊候事。

十月廿六日。前田齊泰郊外大豆田口に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

十月廿六日

一、今日九時過御出、大豆田口より御鷹野暮合御戾り被遊候。御供拙者共。御供所奥番比良、御横目大村、御小將入江・杉浦・和田之事。

一、度々御放鷹有之候へ共、折惡敷由に而御餌柄無之、雉子一つ御餌物之事。

十月廿八日。河原山關所足輕鈴木宅左衞門孝行を以て賞せらる。

〔毎日帳書抜〕

十月廿八日

一、河原山御關所附足輕鈴木宅左衛門儀、養父へ孝心等之様子被聞召、奇特成者に付爲御褒美五俵御增米被下之。

十月廿九日。二朱金を發行通用せしむるの幕令を傳ふ。

〔諸事要用雜記〕

大目付ゟ

此度世上通用之ため、貳朱之步判金吹立被仰付候間、右步判金八つを以金一両之積、尤銀・錢共兩替、小判二步判・一步判・一朱判同様之割合に相心得、是迄之二朱銀に取交無滯可致通用候。

右之趣國々ゟ茂可觸知者也。

十　月

右之趣可被相觸候。

此度世上通用之ため、二朱之步判金吹立被仰付候儀に付、從公儀相渡候御書付寫一通相越之候條、被得其意、組・支配幷與力且又家來末々迄可被申渡候。組等之內裁許有之面々者其支配

ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

壬辰十月廿九日　　　　奥村丹後守

十月。三里四方の內にて天の網を用ひ小鳥を捕ふることを禁ずる前令を嚴守せしむ。

〔坂井舊記〕

三里四方天之網張小鳥捉候儀御停止之所、御家中之人々、百姓地相對を以所々請地之趣に而園垣等拵、右園之內に而網張候儀は不苦樣に相心得候人々も有之由、甚以心得違候。三里四方之內に而網張候儀、曁春秋張切与唱候網を以嶺々越張にいたし、鶫等捉候儀多有之由。右等之儀は前々御停止に候處、猥成躰に付、文化十三年にも御家中一統申渡有之通に候。然處近年猶又增長いたし候に付、嚴重見咎之儀夫々申渡候條、此旨御家中之面々家來末々迄堅心得違無之樣、一統御申觸可被成候事。

辰十月

十一月二日。前田齊泰郊外廣岡口に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

十一月二日

一、九つ二歩五厘過御出、廣岡村より御鷹野御出、所々御放鷹被遊、大友御供田村に而御小休。夫より七つ屋口より御上り被遊候事。

一、御供拙者、御横目大村、御小將森・山森。

一、御餌物無之、雉子突三人罷出居、三つ突上候事。

一、若年寄中御用捨に而今日御供不被召連、御用部屋池田保左衛門也。御上り之時分御用無之段申述る。

一、今日延之助殿御同道に付、御供廻り前御出、廣岡村に而御待合、夫より御同道被遊候。御上り之時分御用部屋を以、御禮御出に不及旨被仰進候事。

十一月九日。幕府、前田慶寧がその母に對する唱方を指令す。

〔諸事留牒〕

十一月十日

一、犬千代丸樣より姫君樣御唱方之儀、先達御伺置候處、昨日松平殿江問番御呼立、左之通御付札に而相渡候事。

溶姫君樣御事、犬千代丸よりは如何可稱哉、且公儀江指上候紙面幷口上に而申上候節、且又他所江之書面、幷使者口上等は如何可稱哉、此段奉伺候、以上。

御名內

七月　　　　　不破紋左衞門

付札

犬千代丸直に申候時は、公儀幷他所共に母堂与唱、書面にも同樣相認、使者口上等は溶姫君樣と唱候樣可仕候。

十一月十三日。琉球人來着の際江戶邸の詰人等が觀覽の爲外出し得べきことを告ぐ。

〔於江府每日書立幷日記之內書拔〕

十一月十三日

一、琉球人來る十六日來着之由申來候旨、聞番申聞候に付、左之通申渡。

中川四郞左衞門江

琉球人見物之儀望之者は、勝手次第見物に罷越可申候。尤作法能、目立不申樣相心得可申候。歸國之節は遠方之儀にも候間、夜中より罷越候儀も勝手次第に候。且又諸組等より一時に人

多に罷出候而は、御近火等の御手當甚指支候間、諸組等暨諸役所之人々、御近火等之御手當不指支樣致手配、緩々に罷出候樣可申渡候。

右之趣各より順達可有之候事。

十一月

一、右覺書寫御横目江渡、御門方之儀前々之通相心得候樣申渡候事。

一、左之通一統觸出候旨に而御横目出之。

覺

一、琉球人見物に罷出候人々、御作事方御門明け六時より勝手次第罷出、夜に入罷歸候而も不及證文候事。

一、見物人名書、前日九時迄之內、御横目所江御指出可被成候。且又御組・御支配之分も、御聞屆之上、是又御指出可被成候。

一、又者之分、主人承屆、別紙案文印之切手致持參、御門江割場方より役人指置候間相渡、罷歸候節も相斷可申候事。

但、夜に入罷歸候而も不及證文候。是又右切手に而、常之小札不及持參候事。

一、琉球人來着之節者、曉七時より罷出、歸國之節者曉八時より罷出候儀、勝手次第に候事。

十一月十四日。古金銀二朱判及び眞字二歩判の引換と新鑄の二朱金通用期限に關する幕令を傳ふ。

〔諸事要用雜記〕

大目付ぇ

古金銀貳朱判・眞字貳歩判共引替所之儀、當辰十月迄被差置候段去卯年相觸候處、今以引替殘り有之、眞字貳歩判は猶又來巳十月迄者是迄之通被差置候。且又西國・中國筋は別而古金銀引替殘り有之趣相聞候。領分場廣之土地など、おのづから引替方手後れ候場所も可有之哉に付、領主々々に而彌遂穿鑿、最寄引替所ぇ差出爲引替候樣可致候。

一、眞字二歩判之儀、頓而通用停止可被仰出候間、此節精誠引替可申儀。古金銀二朱判共所持之ものは早々引替所ぇ差出、來巳十月を限り急度引替可申旨、遠國末々之もの迄相心得候樣、國々在々、御料は御代官、私領は領主・地頭より入念可被申付候。

右之趣可被相觸候。

十　月

大目付ぇ

此度世上通用之ため吹立被仰付候貳朱金之儀、廿四日より可致通用候。尤先達而相觸候通、

小判・二歩判・二朱銀・一朱金銀等取交、無差別取引可致候條、通用差滯申間敷候事。

一、二朱金兩替に付切賃之儀、二歩判・一歩判・二朱銀・一朱金銀同樣相心得取遣可致候事。

右之趣可被相觸候。

十　月

古金銀二朱判・眞字二歩判共引替之儀、幷此年吹立被仰付候二朱金通用方に付、從公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、被得其意、組・支配幷與力且又家來末々迄可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

壬辰十一月十四日　　　奥村丹後守

十一月十五日。御留場に於いて大鳥を殺生する者の逮捕を盜賊改奉行に命ず。

〔若年寄方御用留〕

十一月十五日

御留場之內に而大鳥殺生致候者有之候哉、每度網・懸もち捕揚指出候間、何とか御縮方之儀申渡有之樣御鷹匠小頭申聞、御橫目よりも右捕揚物之儀相達候。依而遂詮議候處、是迄時々御

縮方之儀茂申渡候へ共、暫は其詮茂有之様に而無程立戻り候。併不申而は彌致增長候に付、今般盜賊改奉行江申渡、嚴重見咎方之儀申渡候樣申渡候はゞ可然与遂示談。且此度一統申渡候嶺々越張之儀も、春秋は大勢に而、御餌指など之手に合兼候由に付、是又右へ申渡嚴敷爲見咎候はゞ可然与、右兩樣共今日長瀨七左衛門於別席申渡、御縮方相立候樣申含候。

本年十二月十九日の條參照

十一月十五日。尾張侯献納の茶壺に行逢ひたる際の作法に就いて議す。

〔每日帳書拔〕

十一月十五日

一、割場附足輕小頭樺木友左衛門等、尾張樣御茶壺に行逢候節相扣不申旨等、尾張樣御城附より申來、公邊御問合之所、公儀御茶壺江行逢候節之通与御附札有之。文化八年阿波守樣より品々御問合之ヶ條之御附札に、雜人等下に居候与申所へ相當り可申候得共、尾張樣御茶壺に行逢候節之儀は兼而被仰渡も無之、此度御問合。依而初而御承知之儀候間、右等之趣を以品能御城付へ申遣候樣藏人等へ可申遣哉之旨、伺之通被仰出、其段申遣候。猶又打返遂僉議候處、御問合之御付札には、御三家方御茶壺へ家中之者行逢候節、公儀御茶壺へ行逢候節之通相心得、下馬致し下乘には不及、——今一往御家中之人々下々に至迄、公儀御茶壺に行逢候節之儀御問合可有御座哉と存候。左候得ば尾張樣御茶壺も右に從ひ相分り申儀に候間、御

差圖次第何とか尾張樣へ重而可申遣方も可有御座哉と奉存旨等窺、窺之通被仰出。

十一月十六日。本日以降兩替商預り銀手形を正金銀と交換す。

〔觸留〕

當地兩替枡屋次右衞門・酒屋宗左衞門預り銀百目手形引替方之儀、先達而一統申渡置候通に候處、銀仲預り手形いまだ全引替不相濟候得共、右兩替手形所持之者、正金銀相望候者有之候はゞ、當月十六日より、偶日每御算用場江指出引替可申候。割合幷金相場等都而銀仲預手形同樣に候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申談候、以上。

十一月十三日　前田美作守

十一月廿三日。前田齊泰の子釣次郎の色直を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

十一月廿三日、釣次郎殿御色直御箸初御祝。同日爲御嘉儀女使を以て一種一荷を賜ふ。內府樣御初め一種宛賜る。此外御內證にて品々賜る。公よりも女使を以て將軍家初江鮮鯛一折宛獻ぜらるゝ。此外御內證にて品々進上せらるゝなり。

〔官私隨筆〕

閏十一月二日

一、釣次郎殿御色直・御箸初御祝儀、前月廿三日御首尾能被爲濟候段、只今藏人等より申來候付、爲御承知申進候。先以恐悅御同意御座候。依之追付御登城、相公樣へ御祝詞御申上可被成候。姫君樣・釣次郎殿へは、今日之日附紙面を以當四日出町飛脚に傳附、御祝詞申上候間、夫々申上可被成候と之趣、御用番より紙面被越之。

十一月。道路の高低及び溝蓋の損所等はその町に於いて修繕すべきことを命ず。

〔諸事要用雜記〕

付札、御横目江

御家中之人々居屋敷廻り曁町方等往來高低石高之所有之、且橋々溝蓋等損居候所も有之內、別而小町之分損所多、火事等之時分馬上之人々指障申躰に候條、町並申談、右樣之儀無之樣相心得修覆可申付候。

右之趣前々より申渡置候處、近年猥に相成候條、急度相心得不絕修覆可申付候。

右之通一統可被申談候。

十一月

閏十一月朔日。江戸詰の人々より遣はしたる年頭賀狀に對する返書に就いて告ぐ。

〔每日帳書拔〕

閏十一月朔日

一、文政三年格別御省略等之儀被仰出候砌、年寄中・支配頭分等年禮勤等之儀申達置候通に候。其内に江戸詰等之人々より年頭等書狀差越候而も、親類・緣者・豎組・支配等之外は不及返書等段申渡候得共、今以書狀差越候人々も有之候間、以來は書狀不差越樣寄々可申談旨御横目へ申渡候事。

閏十一月三日。兩學校諸師範にその門弟の身分の異動に關する屆出を命ず。

〔諸事要用雜記〕

兩學校諸師範人門弟之內名替等學校へ相達候樣、師範人江申渡置候處、門弟之內師範人江案內不仕者茂有之候哉、師範人より學校へ屆洩有之、調理方差支候間、已來有祿人組替幷名替・病死之節、無息人名替・相續・病死・養子に罷越候節、人々入門致居申候師範人江致案內、諸師

範人より學校御横目所江相達候樣、且又陪臣も有祿・無息共右同樣相達可申候事。

右之通御一統江私共より可申談之旨、學校惣御奉行播磨守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役・御同席方御傳達、御組・支配御申談可被成候。且御組等之內裁許有之面々は、共支配江も不相洩相達候樣是又御申談可被成候、以上。

閏十一月三日　　遠藤數馬

閏十一月六日。金澤に於いて前田齊泰の子鈞次郎の色直の祝儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

閏十一月六日

一、今日鈞次郎殿御色直御上り初御祝儀御能有之。御前田村・石橋被遊候。且押立候御祝御能には、御前は不被遊筈に候へ共、今度は格別不押立儀に付被遊候事に相成る。

閏十一月七日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

閏十一月七日

一、今日九半時之御供揃に而、八つ三分御出、兩學校被爲入稽古御覽被遊、七つ一分御歸殿被遊候事。御供和田源左衞門・佐藤・庄田牛之助。

閏十一月廿二日。前田齊泰老臣等に阿蘭陀鏡・管絃時規及びエレキテルを觀覽せしむ。

〔溫敬公御日記〕

閏十一月廿二日

一、八半時頃より山城守等五人居間江呼、先年より之拜領物爲見、且又阿羅陀鏡も爲見、管絃時規且エレキテル爲見候。將又うどん吸物・酒等遣候。

閏十一月廿二日。石川郡松任の孝子彌兵衞に賞賜す。

〔毎日帳書拔〕

閏十一月廿二日

一、石川郡松任町相河屋彌兵衞孝心者に付鳥目五貫文被下候儀窺之通被仰出。

〔溫敬公記史料〕

十一月廿二日。褒旌松任孝子彌兵衞。賜物。

十一月は閏なるべし

彌事父母孝。幼不好遊嬉。傭作烟草店助父之窮。及長以作功芬爲業養父母。父八十八罹疾。彌日夜侍病蓐。旁執其業。父一日求泥鰌羹。彌卽冒風雪捕來供焉。其不顧辛苦以得親父悅爲悅。率類是。父歿後娶婦。婦亦柔順。母性嚴急。以夫妻謹雍睦。終歲不聞叱呵之聲。母當寒

夜頻數如厠。彌每輙起扶之。又必檢地爐火便使安寢。夏則以貧不能奉蚊幬。夫妻交代驅蚊。護母達晨。隣里憐其勞苦。相謀給蚊幬。彌嘗患眼。或曰。不少息肩病不退。彌謝曰。一日休闕母一日養。念之則不覺眼疾在身。鄉里相傳稱其孝云。

閏十一月。驛馬等を牽くに長綱を用ふることを禁ず。

〔御觸留〕

御算用場奉行ゟ

驛馬等金澤を始往來之節、長綱に而牽候儀不相成趣等、先年より每度申渡置候處、近年甚等閑に相聞え、中には往來人之內ゟ相障候儀も有之躰、先以馬士等心得違沙汰之限に候。自今急度定之通相改、元綱を持牽可申候。若心得違之者共於有之は、盜賊改方廻り之者見咎、長綱之分は端綱定之通切捨候樣申渡候條、此段夫々可申渡旨、御郡奉行等ゟ可被申渡候事。

壬辰閏十一月

十二月七日。當暮通用の銀子缺乏するを以て年寄中に當分不用のものを町會所に貸與せんことを交涉す。

〔官私隨筆〕

十二月七日

左之廻狀來る。

此頃世上以之外銀支に付、相成儀に候はゞ若各手前に當暮迄之入用除之、其餘指當り入用に無之銀子有之候はゞ、町會所へ致借用度旨等別紙書立候通澤田義門申聞候。不容易銀支之躰、右申聞之趣無據相聞候付、何も手前々々精誠遂僉議、少に而も相辨度心得に御座候。依而右書立指遣候條、御披見之上替る思召も無之、指當り來春迄御入用無之銀子有之候はゞ、町會所へ御指出御座候樣存候、以上。

十二月七日　　成瀨掃部

奧村丹後守樣

村井又兵衞樣

尙々若彌御指出之儀に候はゞ、御指出方等之儀は御家來より執筆共迄示合有之可然存候、以上。

右別紙之趣、荒增は十二月朔日澤田義門申聞候由。頃日以之外銀支に而、當五日仲買共取引方に六・七百貫目計無之而は、御家中之人々仕迯方にも指支、且年暮加樣に指支候而は不計混雜之儀出來可致も難計。依而銀仲組合頭共預り手形千貫目計出來之儀願出候へども、迚難

取揚、御算用場奉行も同存之由。御算用場に而も六・七百貫目之出來はかゞ敷答も無之由。通用之札高大抵去々年之札數と同樣位之處、去々年之米直段とは當年は石に付十二三匁計も高直故、御家中惣收納拂米代頓而千貫目餘御家中へ多く入候圖り。加樣之趣に而指支候哉之旨。依而押詰迄之所、各も別に當暮迄之入用除之、其餘指當り入用無之銀子有之候はゞ、來正月迄町會所へ借用仕度、借用中給人拂米切手指越置候而も宜有之候。御算用場奉行も此儀別存無之由申候旨。且今七日義門右之催促申聞、且右之通指出候はゞ、其月より返濟迄大抵八九朱計利足相添指越可申旨申聞候由也。

十二月十四日。御用部屋の人々に年内に紋服を賜ふ例を今年に限り廢す。

〔諸事要用雜記〕

十二月十四日

一、近年御勝手方御急迫之内、又々御借財多に相成、御次内被下方等も今一篇御手入も有之御時節。依而恐入候儀に候得共、毎歳々暮には於御前御用部屋之人々江御紋服等被下候へ共、右之御時節に付御斷申上度旨御用部屋中被申聞、取計拙者共より申上哭候樣申聞に付、其段申上置、猶御考可被遊筈に申上置候處、今日比良氏被爲召、右は申聞に付當年一作被指止候間、其段申入置候樣。且右御指止に付、御在合之立聞有之候間、此節可被下御模樣に候へ共、

立聞は龍紋なるべし

是亦相延し、月末に反物に而も御取添、御居間に而被下候思召之由御意御座候由申達有之事。

十二月十九日。諸士の道中に於いて幕府及び三家の茶壺に出逢ひたる場合の心得を令す。

〔毎日帳書抜〕

十二月十九日

一、御家中之人々道中筋に而、公儀御茶壺幷御三家樣御獻上之御茶壺へ行逢候節心得方之儀、今般大御目付衆へ御問合有之候處、公儀御茶壺へ行逢候節、下馬いたし下乘には不及、宿駕籠抔へ乘候者は下り片寄、立成に扣罷在、御茶壺通過候而通行いたし可然、尤召連候供之者は下座可致筈に候。御三家樣御茶壺へ行逢候節も、同樣相心得候樣御挨拶候條、御家中之人々末々迄心得違無之樣、組・支配等不相洩樣一統可申談旨、定番頭へ申渡候事。

十二月廿四日。明年より三ケ年を限り藩侯の御國向御次入用を半減すべきことを定む。

本年十一月十五日の條參照

〔典制彙纂〕

自・他は自他國なるべし

十二月廿四日左之通御勝手方より御渡。

御勝手向御逼迫至極之處、近年莫大之御物入指續、御運方必至御指支に付、御家中增御借知、町・在御用銀、幷自・他御借財御仕法被仰付、曁銀手形出來、右等を以過分之御物入漸御辨有之候處、根元年分御入筒与出方与御符合無之、過分之御不足に相成候故、右御不足之分年々御調達を以相辨。加之江戸表等不時御入用多、前段之通當時之處者、增御借知等御入筒有之候而すら、御借財段々相增、當時御國方幷三都に而、凡拾萬八千貫目計之御借財高に相成、迚も此儘に而者、近年之內御公務を初、必至御行詰り、最早御潰与申場合に可被爲至哉。左候而者大切之事に候。依之段々御詮議之上猶又嚴敷御省略、是迄之仕來等を打欠、來年より三ヶ年之間自・他御入用等、半減を以被辨、先づ差當る御借財等之急迫を補ひ、隨而右年限中に追々御符合之御詮議被仰付候筈に候。

一、近年度々御省略御符合之御詮議も有之候得共、御足りに相成候程之減方も付不申、前段之通次第に御行詰りに相成候儀被聞召、今般之儀者格別に被爲思召立、先づ御國表において御身分之御入用、右年限中は半高を以御用辨之儀に御僉議御治定有之候。江戸表之儀者、猶更來春御參府之上御詮議可被爲在、且御廣式方々樣御入用も右に准じ、御詮議可被仰付旨被仰出候。然上は尙以諸向御入用に拘り候品者勿論、假令御入用に響き不申とも、物事手重

に相成來候儀者、いかにも易簡に不泥、半減を以辨候儀打碎可遂詮議候、今般之儀者是迄与違、格別に御省略之品も可有之候條、諸役人何も誠實を以遂詮議、御省略之筋相立、御爲に相成候様綿密可相心得候事。

辰十二月

右に付表向觸廿五日出之、別に記之。

〔御家老方御用等諸事留〕

十二月廿四日

一、當時御借財拾萬八千貫目計。年々御不足七十貫目餘。

一、御次御入用、毎年三・四百貫目之間、來年より三ヶ年之間、御國向は半減に而被辨候旨也。

〔諸事要用雜記〕

十二月廿五日御用部屋より書立左之通。

御勝手向御難澁之處、近年莫大之御物入指湊、彌增御借財相嵩御手繰も出來兼、當時御融通方指支候に付、此度御次内御省略之儀、段々年寄中より申上、種々御詮議被遂候得共、御内輪向之儀は、是迄御勤向を初、追々萬事事輕に相成居、外指當り被成方も無之、御公界向之

儀は容易に被加御差略候儀も被成兼候得共、御當節之事故、夫々御詮議之筋も有之候。依之來巳年より三箇年之間改而嚴重御省略被仰付、御次御入用是迄之半高を以御仕切に相成、萬事御手詰之事に候間、御入用に預り候事は、少分之儀たりとも精誠を盡し遂詮議、御不益之儀無之樣可相心得候。御仕切銀不足に相成候へば、御手前之處彌被成方も無之候間、此段孰茂致會得、一統御爲に相成候樣心懸專要に候。右之通に付、今般御仕法も被仰付候條、御次内之人々下々にいたるまで、御省略之儀心付之趣は、何れ茂無泥一存を調、封じ候而名を記し、御近習頭迄可差出候。了簡も無之人々者、是又其段認候而早速夫々可相達候。

一、御近習之人々を初、差定候被下方御指止之僉議も有之候得共、左候而者難澁に付、右被下方は近年之振に被下候。依而不時被下方願之儀は、一切難及詮議候條、兼而其心得可有之候。

一、拜借願之儀、次第に人多に相成候。難澁之儀無據事に候得共、中に者身分不相應之願高など致し候人々も有之候。是等は畢竟御上御難澁之處に心付不申故候條、已來過分之願高之分は不遂詮議候間、其旨承知可有之候。

右之趣、御次廻り幷御杉戸内之人々一統承知有之、其手先々ゟ不相洩申渡可有之事。

辰十二月

〔諸事要用雜記〕

御勝手御逼迫至極之內、不時御物入打續候に付、是迄段々御省略等被仰付候得共、元來御取箇与御入用方不致符合、年々不時御入用等過分御不足相嵩、此儘に而は近年之內御公務を初必至与御差支之處ゟ可被爲至哉に付、今般御僉議之上不被得止事猶又嚴敷御省略、來年より三ヶ年之間地・他御入用半減を以辨方之儀諸役人ゟ申渡候。是迄每度御省略等之被仰渡も有之候へ共不行屆、次第に御行詰り之儀被聞召、今般は被爲思召立、先於御國表御身分之御入用、右年限中は半高を以御辨用之儀御僉議御治定有之候。江戶之儀は猶更來春御參府之上御僉議可被爲在候。且御廣式方々樣御入用も右に准じ御僉議可被仰付候。御身分に付候御入用も、是迄御省略有之上、右之通格段御減少之上は、御家中之人々は尙以萬事遂節儉、此後幾重にも御難題不相願樣心懸御奉公可相勤儀肝要に候。尤儉約に事よせ不筋之儀は有之間敷儀に候。此段可申渡旨被仰出候。

十二月廿五日　　　　　　　　　　　奧村內膳

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十二月。金澤附近の百姓城下に出でゝ亂暴す。

〔年々珍敷事留〕

一、當年不作に而、年暮廿日頃、犀川河原町・大橋邊、百姓多く出候而少々之亂暴有之。四・

五人召捕候處相止也。

十二月。御鎭守銀年賦返上の件に關して告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

一、御鎭守銀年賦返上之儀に付、左之趣奥御納戸奉行木村多膳より指越候事。

御鎭守御貸附銀、是迄利足立拾ヶ年賦、當時殘元銀等、御知行は辰八月より同十月迄三ヶ月分利足相立、御切米は辰四月より同十月迄七ヶ月分利足相立、元利打込來巳年より無利足廿ヶ年賦返上被仰付。是迄利足立等廿ヶ年賦之分は、右同樣元利打込來巳年より無利足三拾ヶ年賦返上被仰付候條、別紙之通證文相改、早速御指出可被成候事。

辰十二月

是歲。鵠羽一枚に付き一文を以て買上ぐべきことを告ぐ。

〔御用儀品々留帳〕

一、寶暦九年御城御燒失後、御矢天井御矢御用被仰付、諸鳥落羽拾取指上候樣諸郡江被仰渡、文化五年に茂鵠羽等拂底に付落羽可指上旨被仰渡置候所、新川郡より者年々少々宛指上候得共、其外御郡々より指上不申に付、御用支に相成候。近年鵠羽肉付之儘所々江指出致賣買候躰に相聞候間、相對賣買之儀者不相成、金澤魚問屋方江可指出樣仕度旨、御弓矢奉行より内

談有。御郡奉行に而は鵠羽以來大小無差別、一羽に付鳥目一文宛御渡有之事に被仰付候はゞ、為拾取指上可申旨御相談有之。仍而天保三年以來、鵠羽一枚に付鳥目一錢宛被下候間、鵠羽拾取候はゞ村役人方〻指出可申、村役人手前に而鳥目取替相渡、羽之儀者引集、村役人より御郡所〻指出、取替置候錢御郡所より請取可申旨、天保三年御郡所觸付。

天保四年

正月朔日。前田齊泰金澤城に年頭の禮を受く。

〔御家老方御用諸事留帳〕

正月元日

一、御禮人揃刻限五つ時に付、六半聞候而宅を出候處早め也。

一、御禮先に相濟候上、主附將監〻月番より各御熨斗頂戴被仰付候段被仰出候旨演述有之。

各列座二ノ間に而頂戴、御禮筆頭丹州殿より被申述候。

一、右相濟、鶴之御吸物表向相止居候得共、御内々を以頂戴被仰付、御膳奉行永原傳七郎罷出申述、追付罷出頂戴、一篇御杯・御取肴鰑（卷鰑也）。右御禮一列御膳奉行木村茂兵衛〻申述候事。

右相濟退出、九つ半時過直に御廣式〻罷出、年始御祝詞壽々姫樣御初方々樣〻寺西庄兵衛を

以申上候事。

一、今日延之助殿御禮御長袴に而被仰上、御前御半上下。御太刀等披露若年寄長袴、引役幷御熨斗三方表小將も長袴之事。

〔諸事要用雜記〕

正月元日

一、四つ二歩御表江御出御禮被爲受、御入之節鶴之庖丁御覽被遊。重而九時前御出二番座御禮被爲受、御表小將中御禮も被爲受也。

正月二日。謠初の儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

正月二日

一、今日御謠初八時揃に而七時前相始る。年寄中二・三人目之時七つ打、暮前夫々相濟、歸宅之上未日暮不申候。萬端御都合能相濟候事。

〔官私隨筆〕

正月二日

一、八時鐘聞參り、其儘出宅。

一、各申談御間之様子見置候事。

一、列居御催促有之候由。

一、七時前御出、如御作法書首尾能畢る。

但、延之助殿御見物に御出也。御座之間之御左之方之御後〻之御襖あけて屏風にて圍、御敷居之外へ御越也。

正月十四日。銀仲佐賀野屋平兵衛不正の行爲あるを以てその取調主付を定む。

〔御親翰帳之書抜〕

天保四年正月十四日

一、銀仲佐賀野屋平兵衛儀、不屆之趣有之、町奉行より改方へ申談、改方へ召捕相糺候所、外に懸り合も無之、平兵衛一人之所爲に候。銀仲商柄之儀は、御家中之者等之銀子に而も外へ顯し不申定之所、公事場等之僉議に成候而は、銀主等之名前相知候事共に相成、融通方指障等に相成候。懸り合も無之事に候間、平兵衛儀町奉行へ引受僉議仕度、尤平兵衛不屆至極之者に付、御刑法之儀は追而可奉伺之旨等、御次迄申上候段、以保左衛門被仰出。右申聞之所も尤に被思召候、猶更遂僉議可申上旨に付、何も示談之上町奉行紙面之趣存寄無之段申上

候事。

正月十七日。前田齊泰、老臣等が省略實行中一切の賞賜を廢せんとする稟議を却下す。

〔御親翰帳之內拔書〕

正月十七日

一、四半時御居間書院ゟ御出に付罷出、舊臘指上置候、當年より三ヶ年嚴敷御省略に付、御加恩等可被仰付儀御猶豫可有御座哉之旨、箇條書を以伺置候兩通被渡下。僉議之趣には候へ共、三箇年之間一向に御加恩等不被仰付と申儀は、於御前難被仰出儀に候。遲速之儀は僉議可有之候へ共、可被賞者を右年限御猶豫被成置候儀は、思召に致相違候。則右に付御親翰も被成下候間、猶更僉議可仕旨御意に付、被仰出之趣御尤に奉存候。猶更山城守等へ可申談旨及御請、退去之事。

當年より三箇年之間嚴敷省略中、賞美方之儀に付各僉議之趣帳冊之表十一箇條之分は、右年限中可致猶豫哉之趣委曲令承知候。格別之省略中に候へば、各詮議之趣も相聞候へ共、賞罰は國政之基に而、並び不被行而は政事は可難立候。既に右年限中とても、罰は須臾も可難指延置、然處賞之道塞り候形に相當り、人氣屆候而は、却而省略之筋も御整間敷と存候。如此

省略之時節に候へば、可賞者も遲速之儀は猶更時之詮議可有之事と存候。いづれにも帳冊之通、兼而取極置候儀者不可然候間、其路に而時々可被僉議候事。

正月十七日。定番頭以下の供廻人員を減少すべきことを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

供廻召連方之儀に付、御用番播磨守殿別紙御渡、各樣江は拙者共より可申談旨被仰聞候に付、別紙寫之通指進申候。且押立候節供廻連方之儀は、其時々御用番へ御達申御指圖請可申。右之外年頭茂召連方同樣之旨、右御同人被仰聞候間、御承知被成、御同役・御同席御演述可被成候、以上。

正月十七日

御用番　津田權五郎

同　前田淸八

同　久世守衞

山口淸太夫樣

定番頭以下

二人　若黨　一人　鑓持　一人　挾箱

一人　草履取　一人　笠籠

右人數之內減少召連候儀、且雨天之節長柄爲持候儀勝手次第。

新番頭以下

一人　若　黨　　一人　鑓　持　　一人　挾　箱

一人　草履取

右人數之內減少召連候儀、且雨天之節長柄爲持候儀勝手次第候。

但、大身之人々は若黨兩人召連、笠籠爲持候儀も勝手次第。

一、平士等之儀は頭々より減少之儀可申渡候事。

右之趣山口氏等より演述有之候事。

正月二十日。石川・河北二郡に蓮田の增加する事情に就き調査せしむ。

〔每日帳書拔〕

正月十六日

一、大樋口町端田地之內蓮・慈姑作り候儀多相成候躰、此儀如何に候哉。且百姓地之內所々請地いたし候儀近年多有之躰に付、此儀如何に候哉と御郡奉行へ遂僉議候事。

〔諸郡御用留〕

石川・河北兩郡之內、近年蓮田植付增長いたし罷在候躰、先年御察當之趣も有之候旨。當時何

村々如何之譯合に而蓮植候哉。先年より植來候村者切々歩數相定置候之處も可有之哉。植増如何に候哉。其趣否可申聞旨今日島田殿より御談。依而各樣江私より可申懸旨被仰渡候。御急之趣譯而御談候間、早速御詮議之趣御達可被成候。右爲御承知如此に御座候、以上。

巳正月廿日　　西川源兵衞

石川・河北惣年寄中樣・年寄並中樣

石川・河北兩御郡村々之内、蓮田幷くわい植付増長仕候躰、先年御詮議之趣も有之。就中寛政六年頃御詮議之趣も御座候段御尋に付、村々詮議仕候所、右寛政年中御詮議之書物等見當不申。近頃蓮田等相増候ヶ所も有之、猶更詮議仕候處、近年早稻等作り付候得共、地味に應不申取劣仕候に付、右蓮等植付申儀に御座候。尤百姓分は作不申、金澤町近之村々頭振、幷金澤町續之者町御支配江御引渡以前より請作稼仕候者共、手馴申作物故蓮根等作り申儀に御座候間、此末右蓮根等作方成限相減候樣詮議可仕候間、先是迄之通被仰付置下候樣村々相願申候間、此段御聞届置可被下候樣奉願候。右御尋に付御達申上候、以上。

巳正月廿六日　　廣瀬又八郎

水内六左衞門

田邊次郎吉

林　喜兵衛
西川源兵衛
渡邊兵右衞門

御郡奉行所

正月廿五日。年寄中席に使用する料紙筆墨は私物を以て之に宛てんとすることを議す。

〔官私隨筆〕

正月廿五日

一、御用番より左之廻狀來る。

席御用之料紙・筆墨之儀、先達而御省略被仰出候時分、各申合、自分に相辨可申哉と遂示談候儀も有之候へども、例も無之儀に付先前々之通に相成居候。然處今般猶又嚴敷御省略就被仰付候、當年より三ヶ年中は席御用之分同席中八人申談、自分に相辨可申哉と遂示談申候。思召も有之間敷哉及御示談申候、以上。

正月廿五日　本多播磨守

奥村丹後守樣

前田初丸様

村井又兵衛様

追而思召も無之候へば、一往達御聽候上、右之通に可致と存候、以上。

正月。小松城番の定員を減じて一人とす。

〔御親翰帳之書拔〕

小松御城番之事。

天保四年正月

一、右御城番兩人充在番之所、當年より三ヶ年之間格別御省略に付、先例も有之に付一人詰之儀僉議之趣伺候所、其通与被仰出。當年より當分前田姓之人持一人在番、構番之儀は先例之通に候事。

一、右之通一人詰に相成候所、御本丸之內濕地に而、長く御城に相詰候而煩之者多難儀、僉議之上一人詰之內半年詰に而交代之儀相伺、其通に被仰付候儀、天保四年□月二十九日出江戶表へ相伺候之處、其通与被仰出候事。

一、右御城番一人詰に而半年替に成候所、天保七年春交代前御城番より、一人詰にては御締方不行屆趣相達候へ共、格外御省略に而一人詰に相成居候所、如以前二人詰に被仰付候而

某月原文之を缺く

は、外々之ゆるぎにも可相成哉と御勝手方僉議之趣有之、やはり一人詰に可被仰付置と江戸表へ申上候所、御城御縮方之儀に付、不縮には難被成置思召之旨御意之趣申來候へ共、重而申上候趣有之候所、いづれにも如前々兩人詰に可被仰付段被仰出之趣申來候に付、二人詰に相成候儀七年三月十九日に有之候事。

二月五日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

二月五日

一、今日九半時之御供揃に而兩學校江御出。八時過御出、七つ鎌御歸殿被遊候。御供大村之事。

二月十一日。徳川家齊の前田齊泰に贈れる鶴金澤に着す。

〔諸事要用雜記〕

二月十一日

一、今日宿繼御奉書幷鶴今日到來之事。五つ七分。

一、御拜領之鶴御頂戴相濟、御臺所奉行江相渡候。尤津幡驛迄到來之注進に而、夫々申遣有之事。

二月十五日。諸士の行狀に關する禁令を犯すものあるを以て之を戒む。

〔本多政和覺書〕

正月廿六日

一、無用之參會無之樣前々被仰出候所、近頃者能役者相招諷會、又は碁打相招、或は茶之湯杯に而每度參會仕候人々有之躰に候。組・支配之人々は頭々より時々申渡等有之故、却而左程にも無御座候得共、人持・頭分之內右躰之儀有之樣子。且緣組・養子に遣候節金銀遣候儀も增長之躰に候間、何と歟僉議有之樣仕度旨御馬廻頭より申聞候。每度被仰出等も御座候得共、右之族不心得之儀に御座候之間、心得方之儀別紙下書之通一統相觸可申哉之僉議仕候に付奉伺候、以上。

正月廿六日　　　　本多播磨守

〔坂井舊記〕

前々より無用之參會無之樣被仰出有之所、今以無益之參會等いたし候人々も有之躰、不心得之至に候。以來右樣之儀無之樣急度相心得可申事。

一、諸士娘等爲致嫁娶候節、又は子弟等養子に遣候時分、拵料抔与申趣に而金銀遣候儀に付、前々被仰出も有之所、今以心得違之人々も有之躰、不心得之至に候。別而當年より嚴敷御省

略之儀被仰出、一統承知之上、御身分之御入用すら半高を以御辨之御時節に候へば、拵方等に至迄猶更心得も可有之儀に候條、急度相心得可申事。

右之通被仰出候條、被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

二月十五日　　　前田美作守

〔坂井舊記〕

無用之參會等之儀に付、一統申渡候通に候。近頃中に者能役者相招き謠會、又者碁打相招き、或は茶之湯抔に而每日參會之人々も有之躰に相聞え候。今般品を顯し被仰渡も無之候得ども、右等之儀を始、惣而無益之參會者有之間敷儀に候。此段諸頭へ被申談、組・支配江も分而申聞候樣可被申談候事。

二　月

二月十七日。前田齊泰金谷御屋敷の普請所を巡見す。

〔諸事要用雜記〕

二月十七日

一、今日八時之御供揃に而、金谷御普請所江御巡見可被遊旨被仰出、八時過御出、同半時過御戾り被遊候事。

今夜より奥村榮實が臺目の式を行ひたることに關す

二月十八日。前田齊泰の子利義金澤に生まる。

〔官私隨筆〕

二月十八日

一、二御丸懷孕之女中今朝安產、御男子樣御出生。依之爲御祝詞登城、御廣式へも參上。今夜より別行に入、廿日朝引目式首尾能勤之。委曲別記あり。

〔諸事要用〕

二月十八日

一、左之通石野氏等相渡候事。

懷姙之女中、今朝出產、御男子樣御誕生被成候事。

二月廿二日。石川門外に於ける警固の位置を改む。

〔若年寄方諸狀留〕

石川御門外松の下ゟ警固相立、年寄中等登城之節御作法呼候得共、今般詮議之上右警固指止、紺屋坂之上腰懸御門番人番所に罷在、年寄中等番所前之方ゟ罷越候より御作法呼候事に申渡候。尤番所に而御作法呼候得共、紺屋坂より坂下之方ゟ之往來人之儀は制不申候段、於御城方申渡候に付爲御承知申進候、以上。

二月廿二日　　　前田美作守

二月廿四日。前田齊泰の子利義七夜の祝儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

二月廿四日

一、今日御出生樣、御七夜に付、一統のしめ・上下、平士等服紗之事。

一、今日御鈴前三間四方御間迄、御出生樣御出、奧御取次初、御鈴役に而無之御近習も御目見仕候事。

今般御出生之御男子樣、御名甚五郎殿与被稱候。殿付に唱候樣被仰出候事。

二　月

右覺書、高田被相渡候。且御前江罷出申上候節は、樣付に唱候樣同人被申談、同席幷御側廻り御表小將江、席より申談有之由之事。

二月廿六日。前田齊廣の子延之助金谷御居宅に移る。

〔官私隨筆〕

二月廿一日

一、金谷御屋敷今般御補理に付、延之助殿當廿六日御引移被成候段被仰付候付、同日拙者共

より延之助殿まで御祝詞申上候筈に候。且又御引移之上恐悅事御機嫌窺等も、都而二御丸御廣式に而相濟候事に被仰出候由、高田善右衛門申聞候。依之拙者共も二御丸御廣式へ罷出申上候筈に候。此段爲御承知申進候條、初丸殿にも御紙面を以御申上候樣にと存候旨、御用番より廻狀來る。

〔毎日帳書拔〕

二月廿二日

一、延之助殿金谷御引移之上、金谷御居宅与相唱候段被仰出候事。

〔諸事要用雜記〕

二月廿六日

一、今日九半時御供揃に而、八半時過延之助殿金谷御居宅江御引移被遊候事。

〔本多政和覺書〕

二月廿六日

一、八半之鐘聞來り、布上下に而御廣式江參上、此時未御出無之、御供廻り之由に而御道具等切手御門内番所之前に有之、御乘物御色代へ居可申と致候處、自分罷出候付相控候躰也。御廣式頭二・三人御色代に有之、余退出之上頭渡邊御門打候由也。多宮江逢、延之助殿金谷江御引移首尾能可被爲濟と、恐悅奉存候御祝詞申上候旨申達。

〔官私隨筆〕

二月廿六日

一、今日御廣式へ爲御祝詞出、刻限之儀篁笥番へ聞合せ候處、御引移り九半時御供揃に候へども、八つ半前にも可相成哉と申事之旨。但各退出早く候へば、一先被歸候而被罷出候由。自分へは八つ半過に罷出可然哉と御用番被申候旨申越候付而、其頃可罷出處、今少早かるべき樣に被存候之故七つ打參上、以福田彌平太、延之助殿迄へ御祝詞申上。七つ少前御引移之由也。

二月廿六日。町人越中屋藤藏等醬油糟を以て燈油を製造發賣せんことを請ふ。

〔諸郡御用留〕

乍恐申上候

一、私共儀小間物商賣等仕罷在申候。然所私共之內越中屋藤藏儀は、去秋まで茶屋商賣仕罷在候處、商賣御指留に付、無商賣に而諸方稼に罷越、漸渡世仕來申候處、去春美濃國出生之者當時京都丸太町に居住仕候殿村市三郎与申者に心易相成、藤藏儀は渡世方茂無御座趣相咄、何成とも商賣存付度旨申合候處、於御當地醬油糟を以燈油に製申儀無之哉之旨申聞候に

付、何卒習請申度段賴入候處、悉傳法仕吳申に付、罷歸奉願上、右油製申度旨私共示談仕、尤私共儀も右糟油絞申儀は兼而及承知、得習申儀も御座候に付、猶更得与藤藏より茂承、誠に絞立申候處出來方甚宜敷、光りも種油に衰不申、尤聊毒氣抔無御座、當時は於京都專相用、種油与は直段も下直之品に相成、下々夜仕事抔仕候砌は下直之品相用、甚德用に相成申儀に御座候間、出來方奉願上、御聞屆被下候ば猶更私共示談仕製法仕度奉存候。右醬油之糟は屎物品に候得ば、油絞り取候而は屎物之障りにも可相成哉に相聞候得共、油絞り候上は、塩氣も拔、猶更屎物には宜敷儀に御座候間、指障り申儀も聊無御座候。何卒右之趣御聞屆被成下候ば、取懸り出來仕度、尤御縮方之儀は幾重成共被仰渡之通可奉畏旨、先達而願上候之處、御朱書を以御聞屆難被遊旨被仰渡、奉得其意候得共、元來右醬油糟燈油に相成申儀は御不審之儀も可有御座与奉存候得ば、私共手前において出來方重々試申候處、畢竟御國益に茂可相成、曁私共儀も急度渡世にも相成申儀に御座候間、何分重而奉願上候儀奉恐入候得共、格別之御詮議を以被爲聞召上、此段御算用場ゟ被爲仰遣、願之通被仰下候はゞ難有忝可奉存候、以上。

天保四年二月廿六日

茶屋町　越中屋藤藏

川南町　越中屋吉右衛門

春日町　葛葉屋理右衛門
同町　談議所屋吉郎右衛門
同町　徳光屋傳兵衛
町御奉行所

二月廿七日。前田齊廣の子延之助の金澤城に登る定日を定む。

〔諸事要用雜記〕
二月廿七日
一、是已後左之通御出日別席より談有之。
毎月延之助殿御出日、朔日・六日・十一日・十五日・廿二日・廿六日。
右朔望は御熨斗被進候事。右に付御膳奉行御座敷方ゟ席より申談、配膳役ゟ奥小將御番頭より申談候事。

二月晦日。同姓の中本末嫡庶の關係に就いて解釋を定む。

是月は大盡なり

〔永井不陣覺書〕
一、同姓本末等之譯文化十年於江戸表大御目附井上美濃守殿ゟ御問合有之、其段猶又大目附衆ゟ御問合之儀も有之、段々御僉議之上天保四年二月晦日御馬廻頭ゟ左之通申渡ニ

御馬廻頭江

同姓之内本末等之譯、各心得与外頭・支配人ニ寄、心得方區々之向も有之樣に相聞え候由に而、及指圖候樣致度旨先達而被申聞候。依之被差出候覺書に以付札申渡候條、被得其意、外頭・支配人江も可被申談候。嫡流・庶流之譯者先祖之二・三男被召出候得者、嫡子之家筋嫡流に而、右二・三男之家筋は庶流に而候。二・三男家之二・三男被召出候へば、是又庶流に候。其外時宜に寄嫡流を立候も可有之候。嫡庶を唱候時は右之通に候へ共、嫡庶も本家・末家に候事。

巳　二　月

同姓之内本家・末家・嫡家・庶家之差別等、私共心得罷在候趣左之通。

本家　家之根本、元祖之家相續仕來候家筋与心得罷在候。

但、本家之嫡子は次之三家等江者養子に遣申間敷与心得罷在候。然共嫡流之家筋、本家より大身に相成候家江は、示談により遣し申儀も可有御座、末家・庶家江は譬ひ身上高に相成候共遣し申筋には有間敷。乍然格別大身に相成、組柄も重く、本家は却而衰微に相成候得者、其時宜に寄、示談次第に仕置度奉存候。

付札

本家之譯本文之通に候。

但本家之嫡子は次之三家等𛀁養子に遣申間敷筋に候。乍去時宜に寄、本家示談之上願之筋も有之候はゞ、時々可被申聞候事。

嫡家　本家之嫡子新知に被召出別家相建、本家は次男相續仕候節、本家より別家に相成候嫡流之家筋を差而嫡家与呼び、嫡家より右元祖之家筋はやはり本家と心得申候。

但、本家に子無之候へば、嫡流之家之一子に而も遣し可申。本家之存寄に而、次男等相願申儀者示談次第に心得可申候。且本家之嫡男に候へば必其家相續可仕身分に候處、新知に被召出別家に被仰付候儀者、何歟格別之思召被爲在被仰付候哉難計儀に御座候間、嫡家之儀は代を繼居申者は養子に難成筋与心得罷在候。

付札

本文嫡子新知に被召出候而も末家与唱、二男相續之家者家元与唱候。但家元に子無之候へば右嫡子之家筋より一子又は二男等に而も示談次第相願可申候。代を繼居申者に而茂苦ヶ間敷候。

末家　本家之知行之内次男等𛀁致配知、別家に相成候家筋を、本家よりは末家と呼、末家よりは本家と稱し、右嫡流之家筋は末家よりも嫡家と可申候。

但、本家に子無之候得ば、差付末家より相續可仕に付、嫡子は不及申、若嫡子幼少等に而

候へ者、元來配知之事故、代を繼罷在候者に而も本家之養子に願可申候。是も本家之存寄に而、次男等相續申儀示談之上不差支儀与心得罷在候。且又本家之存寄に而、末家に子無之節、配知之家は其儘建置申度旨及御達、他姓より養子相願申例も御座候間、其時宜に寄右之通相心得可申候。

付札

末家之儀本文之通に候。嫡子別に被召出候家筋与末家之儀は、相互に同姓与唱可申候。

但、末家より養子願方等之儀、本文之通に候。配知之家其儘建置度儀者、本末熟談之上相願可申候。末家之次男等相願申儀も時宜に寄可申候間、其時々可被申聞候。先は嫡子を相願可申候事。

庶家　本家之次男以下新知に被召出、別家に相成候家筋を本家より庶家与呼び、庶家よりは是も本家与稱し、右嫡流之家筋も嫡家与心得申候。

但、本家に子無之時、一子に而も遣申儀に心得罷在候。且又本家之儀に付、同姓に子無之時新知之分指上、本家相續仕候例も御座候間、此儀も示談次第不指支儀与奉存候。

付札

本家之次男以下新知に被召出、別家に相成候筋も末家に候。嫡子新知に被召出候家筋与右末

家とは、相互同姓与唱可申候。
　但養子願方之儀本文之通に候。
右之内嫡家より末家・庶家を差て同姓与呼び、末家・庶家者相互に同姓に而、此外は都而同姓与相心得申候。

付札

前付札之通都而同姓与唱可申候。
一、本家之次男等に不限、弟或はをぢ抔に而も、都而其家に出生之一族を、新知等に被召出別家に相成候者は、庶流与相心得可申候。

付札

前付札之通都而末家に候。
一、嫡家以下之家より、又配知等に而別家に相成候者は、其父之家筋を本家、右末家に相成候家筋を末家或は庶家与心得申儀、前條同様に御座候。右元祖之家筋は、同姓一躰之惣本家与申ものに付、元祖之家筋ニは、同姓何れよりに而も一子を遣し申事不差支儀与心得罷在候。

付札

元祖之家筋ニは、同姓いづれよりに而も、一子を相願候儀不指支候事。

一、他國に兄弟浪人に而罷在、父之家祿も無之者、兄弟一集に被召出、夫々御知行等被下置候者、兄之家を本家或は嫡家などゝ心得居申者も御座候得共、是等は右名目には當り不申候、唯兄之家に而一通り同姓与相心得罷在候。勿論他國たり共元祖より相續仕來候父之家筋有之、其せがれを被召出候者は、前顯之譯に心得申候。

付札

本文之通に候。他國たりとも元祖より相續仕來候父之家筋有之共、せがれを被召出候者之儀は、本末等之譯前條付札之通候事。

一、本家一旦及退轉、追而其人再び被召出候歟、又せがれを祖父之爲名跡被召出候時は、やはり本家之意味離れ不申候間、本家与相心得。若又子孫之內新知に被召出候者は、本家には立申間敷、一通同姓与心得罷在候。

付札

本文之通に候事。

右之通相心得罷在候得共、組中等より內存示談等之節、指當り疑惑仕儀も御座候間、右之譯に而相違仕品も御座候はゞ、御指圖御座候樣仕度奉存候。

一、嫡家之儀は本家に指續候家柄に御座候間、同姓より一子に而も遣申儀、例は覺不申候得

共指支申間敷哉。

付札

嫡子新知に被召出候家筋ゟ、同姓一子を相願申儀は、先は難相成候。併時宜にも寄可申候間、願之筋も有之候はゞ、時々可被申聞候事。

一、他國に有之同姓は、內存等に相願不申例も御座候間、此儀人々存寄次第に仕置申度与奉存候。

付札

可爲本文之通候事。

一、義絶之同姓は內存等に相省き願不申例も御座候間、此儀人々存寄次第に仕置申度奉存候。

付札

可爲本文之通候事。

右三ヶ條は私共心得罷在度御座候間、猶更御差圖御座候様仕度奉存候。右等之趣御差圖御座候上は、區々相成不申様、都而頭・支配人ゟ御指圖之趣を以、私共より夫々申談置度奉存候事。

卯は天保二年
癸巳は天保四年

卯　三　月

〔永井丕陳覚書〕

一、右之通以付札申渡候處、重而左之通申聞候付、付札いたし癸巳六月十一日渡之。
同姓之内本家・末家等之譯、私共心得罷在候趣、先達而覺書に認、相違之儀も御座候はゞ、御指圖御座候樣仕度旨御達申置候處、今般夫々御付札に、猶又御覺書を以被仰渡候趣、奉得其意候。右御覺書二ヶ條目四ヶ條目御付札之趣に而は、嫡子に而も又二男以下に而も、新知に被召出候分は都而無差別末家に而、御覺書之末にも嫡庶も本家・末家に候与有之候得者、配知之差別なく大綱末家与心得、嫡流・庶流などゝ唱候儀先は無之事に心得可申哉。併御覺書に時宜に寄嫡庶を立候も可有之与御座候者、如何樣之節嫡庶を立可申哉。且又嫡流・庶流之譯は先祖之二・三男被召出候得者、嫡子之家筋嫡流に而、二・三男之家筋庶流に候与御座候。右嫡子之家筋は本家与申物に而、別に嫡家与唱を立申仔細は有間敷樣に奉存候得共、何与歟嫡流に相成譯も御座候はゞ、爲御聞御座候樣仕度奉存候。先達而御達申候覺書之本末等之譯も、私共限に極置申儀に而は無御座、先年青木故儀兵衛より岡田故太郎右衛門聞番相勤候時分、林大學頭殿ゟ承合貰候趣別紙之通に而、能筋合相譯り居申儀に付、右之趣に是迄相心得罷在申儀に御座候得共、今般御付札等之趣に以後相心得可申候。しかし御付札等之御文面貫、

通不仕故、私共合點參兼候ヶ條、猶更一往相伺申候間、委細御諭被仰聞候樣仕度奉存候事。

別　紙

本家　末家　嫡流　庶流

右之分を當所に而不分明に付、江戸表之樣子林大學頭殿江聞合有之樣、岡田故太郎右衞門江賴置候所、大學頭殿付札左之通。

本家　家之根本、元祖之家相續致來候家筋を申候。

末家　本家之二男以下分知之家筋を申候。

嫡流　本家之嫡子別段に被召出、二男本家相續致候節、別家に相成候嫡子之家筋を嫡流と申候。

庶流　本家次男以下別段被召出、別家に相成候家筋を申候。末家は意味違申候。

右之通安永之頃青木故儀兵衞より聞番岡田故太郎右衞門江賴遣聞合之由留御座候而、私共是迄右之通相心得罷在候事。

三　月　　　　　　　　　　御馬廻頭

本文時宜に寄嫡庶を立候も可有之与申儀は、只今其品相極り候儀に而は無之故右之通に候。何れ本末与は難唱、嫡庶之名目に無之而は難叶儀も可致出來哉に候間、先達而及差圖候。惣

様之ヶ條に不相當分有之時は、其節可被申聞候。且又先祖之二・三男被召出候得ば、嫡子之家筋は本家に而、別に嫡家と唱を立申仔細は有之間敷樣に被申聞候。右は尤本家に而候得者、嫡庶を立候与唱候時は、右嫡子之家筋を嫡流与唱、二・三男之家筋を庶流与唱候儀に而、本末之内にても嫡庶与唱候而不苦家筋有之事故、申渡候通に候。將又同姓本末之譯、先年林家承合候趣は、拙者共にも承居候得共、公儀御掟も右之通に候哉難計候付、文化年中御大目付衆江御問合有之候處、林家承候趣与は致相違候付、猶更其趣を以重而御問合も有之上、達御聽、先達而及差圖候通に候條、其通可被相心得候事。

別紙小紙、二ヶ條目下げ札

本文嫡子新知に被召出候而も末家与唱、二男相續之家は家元与唱候。此家元と申は、やはり本家与相心得可申候事。

本文嫡子之家より二男相續之家は家元与唱候得共、其外末家より右二男相續之家を唱候時は本家に候事。

〔官私隨筆〕

二月晦日

三月朔日。先に德川家齊より贈られたる鶴を披露す。

引目相勤は奥村榮實なり

一、先達而御拜領之鶴、明日御內々御披に付御下頂戴之儀、明朝可申述候へども、服之儀も有之に付爲心得執筆迄申聞候段、木村茂兵衞申聞候。右服はのしめ之旨簞笥番山田貞次郎より以紙面申越候。

三月朔日

一、如例登城、今度引目相勤候付於御前卷物御拜領。且鶴之御吸物御下被下。委曲引目方覺書に記之。

三月五日。陪臣にして講書聽聞の爲學校に出席する者の手續を簡易にす。

〔官私隨筆〕

三月五日

一、陪臣學校講書聽聞に罷出候者共、是迄は助敎等へ共段相達、助敎等より學校頭へ相達罷出候事に成來候へども、左候而は不辨之儀も有之故、出座仕者も無之哉に付、以來は聽聞に罷出度者共は、主人々々へ相達、主人より名書を以學校頭へ相達候樣致度旨申聞、承屆候付爲御承知申上候條、御組人持中へも御申渡可被成旨、內膳殿より組頭之人々迄連名之廻狀來、承知之旨下書いたし遣す。

三月十日。領內川除又は波除工事に關する御普請會所及び定檢地方の管

轄を改定す。

〔每日帳書拔〕

三月十日

一、御領國川除波除方之儀、人家圍等之分は御普請會所手合、御田地圍等之分は郡而定檢地方手合に而出來之事に相成居候處、今般僉議之趣有之、以後遠所川除等之分は郡而定檢地方一手合、犀川等兩川之分は御普請會所手合に而可被仰付旨夫々申渡候事。

三月十四日。前田齊泰金澤を發して參覲の途に上る。

〔諸事要用雜記〕

三月十四日

一、今日御發駕御供揃五時、四時前御供廻り被仰出、同半時頃益御機嫌能御發駕被遊候。御玄關敷付ゟ御近習頭に而比良、奥御取次に而拙者罷出候。其外何茂階上迄御見送仕候事。

一、夜前御奥御休に而五時前御出、御湯・御楠相濟、御上下に而御入、御膳被召上、無程御出、御用之間ゟ被爲入、將監殿等被爲召、夫より御旅裝束に御改。此節御供揃申上、御供廻り被仰出、御居間書院ゟ御出、眞龍院樣御使者飯尾吉太夫被爲召御直答有之。續而年寄中・御家老・若年寄・前田睡鷗迄五切に被爲召御意有之。御入、御居間御上段に御着座、將監・清太

夫・保左衛門被爲召、相濟與右衛門等被爲召無事にと御意有之、御請申上退去。夫より適坦齋・誠山被爲召御意有之。相濟御奥江御入被遊、四つ時過御供宜段御鈴江申上る。無程御出、此節延之助殿御居間江御通申置、御出之上菊之御間江御通り、御のし配膳役上る。御退去、御居間二之間に暫御着座、御前御直々御上段に御着座、御のし配膳役上る。直に御發駕。其節延之助殿御同道。蔦之間御廊下に眞龍院様御附使者・姫君様御附使者御意有之。矢天井御廣緣に御供之山城守御意有之。御玄關階下江年寄中・御家老御意。延之助殿同所に而御挨拶被遊候。益御機嫌能、雨降候へ共暫之內御馬上可被遊旨に而、御馬浦風に被爲召候事。

〔諸事要用雜記〕

三月十九日

一、今晚泊り驛より之御用狀到來。益御機嫌能御旅行、十七日魚津御發駕之處、片貝川假舟橋出水に而損所出來。依而魚津江御立戾り御逗留之儀被仰出候處、橋出來、夕八時頃に被爲在御發駕、泊り江夜四時前御着被遊候由申來候。且小川も橋切、懸直し有之由之事。

一、右泊江御着之處、姫川出水に而十八日御通行難成、御逗留被仰出候段申來る。

同二十日

一、十八日立之御飛脚江傳付、同席より紙面に而、同日夕姫川川明き、御發駕被仰出候段申

來候事。

同廿四日

一、當月廿日荒井驛より之御飛脚之傳附同席連名狀到來。十九日姫川〻明きに付泊御發駕、山之下等無御滯御通り之由申來り候事。

三月十五日。大聖寺侯前田利之參觀の途金澤に宿す。

〔官私隨筆〕

三月十五日

一、備後守樣昨日大聖寺御發途、夜前松任御泊に而今日金澤へ御着に付、如例見番附置候處、御寺御參詣無之御樣子に付、四半時過出宅御旅宿へ罷越、山本太郎左衞門殿等內へ掛御目度旨取次申達候處、大野才記罷出候付、相伺御機嫌御樣子尋候處、御機嫌能被成御座候。併昨日より少〻御風氣に而、御咳御發し御難儀被成候。夫故今日御寺御參詣も無御座候。されどもさしたる御事に而も無御座旨。いづれ追付可申上由に而、重而罷越則申上候處、御容躰御伺御入念之儀思召候。尤御逢可被成候處、少〻御風氣に而御保養被成御座候間其儀無之候。宜申述候樣被仰付候由演述に付、段〻御懇之仰之趣忝仕合奉存候。宜御申上候樣致度旨申述候。

文政四年六月廿八日の條及び天保十年正月十七日の條參照

三月廿四日。文政四年の法を改めて御郡奉行專務と改作方專務とに分離せしむ。

〔郡方御觸〕

文政四年御郡方御仕法被仰付候、御郡奉行・改作奉行打込に被仰付候處、勤向多端に付、改作方御法何となく混雜之躰に茂被聞召、畢竟微妙院樣御草創以來之御法失行候而者不容易儀に付、此度御修補被仰付、役名等都而近年之通に而、御郡奉行專務与改作奉行專務与振分け相勤候樣被仰出候。依而左之通被仰付候。且御仕法之節棟取之名目被仰出候得共、今般者右名目不被仰出候。

改作方專務

大村友右衞門

山森雄次郎

吉田兵馬

林久太夫

中村岡三郎

井上井之助

高田幸助
稻葉助五郎
島田權五郎
石黒鉄八郎

御郡奉行專務
內藤十兵衞
淺加伊織
高木主馬
林源多郎
馬場右近
渡瀨七郎太夫
駒井丹之丞

只今之通當分加人
神尾主殿

右之通被仰出候條、被得其意、大村友右衞門等江可被申談候。右に付出役ヶ所茂相減、右人

高を以、詰方之儀遂詮議可被申聞候事。

癸巳三月十六日　　御算用場

御郡奉行中

右之通今般被仰出候に付、改作方は以前之於役所取捌候。尤御郡所者是迄之通に候。今般如斯被仰付候御趣意者、御郡方御仕法後、人多混雑に付格別之御詮議に而、何分改作方御用綿密遂詮議、御法違亂に不至様に与之御趣意に而、御仕法等に何も相替申儀尤無之候。乍去暫兩役打込有之事故、右之通振分り候上者、御郡所・改作所者以前之通之姿に而、諸書物指出方等可有之儀に候。乍去猶又其品に寄、書取一通りに而兩役所相辨申品抔も可有之候間、其品其事に應じ、猶又易簡辨理相成候樣可相心得候。勿論下方煩敷筋抔者、追々詮議之上指省候樣取極可申候。

一、惣而近年其元中初、手付等罷出方遲刻に相成、随而御用方茂手後れに相成候。別而地廻之內に者、出席方遲刻に相成、惣而相後れ申躰に候。是等者自ら其品により、下方之憂に相成申事ども可有之候條、刻限不遲罷出、惣而御用方成丈けわり立申聞候樣可相心得候。先此段急度申談可有之事。

三月二十四日　　御郡奉行

三月廿七日。前田齊泰江戸に着す。

〔溫敬公記史料〕

三月十四日駕發金澤。廿七日抵江戸。扈從横山山城守・青山將監。

〔諸事要用雜記〕

四月六日

一、今曉御用狀到來、盆御機嫌能廿七日御着府被遊候段、同日立御飛脚ゟ傳附申來候事。

三月廿八日。德川家齊使を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。

〔溫敬公記史料〕

三月廿八日。將軍遣老中松平周防守來勞。

三月。他國御使人たるべき諸士に對する貸渡金額を改定す。

〔御觸留〕

定番頭ゟ

他國御使人ゟ御貸渡金、文政三年相改候分茂有之候處、今年より三ヶ年格別御省略被仰出候

に付、右年限中は左之通御貸渡被仰付候。

人持	五千石以上	三百五拾兩
	三千石以上	三百兩
	貳千石以上	貳百三拾兩
	千石以上	百六拾兩
組頭	知行高無構	八拾兩
物頭	知行高無構	六拾兩
諸番頭	知行高無構	五拾五兩
平士	八百石以上	五拾五兩
平士	八百石以下	四拾五兩

右之通被仰付候條、旅行中行粧等是迄之仕來を打欠、萬事格別に遂省略可相勤候。此外文政三年中渡候通に候事。

右之趣被得其意、夫々可被申談候事。

巳三月

三月。猪を捕獲したるものに對する賞與を半減す。

猪狩之事

一、近年猪多徘徊、田畑喰荒候に付、狩捕候得者一疋に付米一斗宛爲御褒美被下候、仍而猪之尾を添奉行所へ可斷出旨、初而極り申觸有之は安永五年十一月也。右尾出候得共、向後は耳一疋分宛可出之旨、同五年正月二十八日申渡有之。

一、右狩捕候分耳兩役所へ出候得共、寛政六年正月申渡以來者御郡所へ迄耳を出、改作所へは耳出に不及候、案內にも不及旨申渡。同八年三月耳は改作所へ出に不及候へ共、何方に何日に捕申儀は可及案內旨申渡。文政四年御仕法後、亦改作所へは別に不致案內候事。

一、狩捕候得者、御郡奉行・改作奉行連名之書付に而、御褒美米高調及場達候へ者、場印切手を以米相渡る。則御郡奉行取之、下方へ相渡す也。尤定入に相成居候故、御郡奉行・改作奉行より書付出し次第相渡る也。

但、本文初發は、都而一作々之願に、御勝手方御席より御入有之候上、引集一組切場印切手相渡り候へ共、寛政元年兩役所より相願、以來定入に御聞屆有之。

一、右改作所に初發より加り居候は、根元田畑に指障るを以、狩捕候御褒美も相願候譯也。仍而御褒美願も兩奉行連名也。仍而御郡所に而、時々耳を以及斷分、引續書付も仕出し候分、

改作所へ引迯りに相成候に付、改作奉行連名印章に而、御郡奉行より場達致す也。併共御郡奉行引越候分抔出府不致時、改作所より場達す。

一、右狩捕候御褒美は、四季共狩捕候へば被下來候へ共、寛政三年より毎歲十月より翌二月迄捕候分迄被下候事に成候へども、狩捕方怠り申に付、同六年最前之通四季共被下候樣、能州奥・口・礪波・射水之分兩役所より相願、御聞届有之。

一、猪狩捕御褒美米は半減に相成、一疋に付五升宛被下候事に、天保四年三月相極り、當時如此に候事。

〔御用儀品々留帳〕

一、御領國村々に而狩捕候猪御褒美米、一疋一斗宛被下候所、天保四年より半減に被仰付、五升宛可被下旨、同年御算用場觸付。

四月朔日。前田齊泰柳營に上りて參覲の禮を行ふ。

〔宮私隨筆〕

四月九日

一、先月廿八日上使松平周防守殿御出被成、御懇之被爲蒙上意、且又廿九日御奉書に依而、當朔日御登城御禮被仰上候旨等、當二日發足町飛脚早飛脚を以申來候由、御用番より廻狀來

る。

〔觸　留〕

去朔日之御札致拜見候。先達而被仰越候通、中將樣益御機嫌克前月二十七日御着府、同二十八日上使松平周防守殿御出被成、御懇之被爲蒙上意、且又御參勤之御禮可被仰上旨、同二十九日御老中方御連名之御奉書到來に付、則去朔日御登城被遊候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、重疊目出度御儀、恐悅同意奉存候。次に各御供被召連候處、於御白書院御目見被仰付、御威光故与難有思召候旨、御尤之儀御座候。委細之御樣子者以御書被仰下候、恐惶謹言。

四月十四日　長　又三郎

中川八郎右衞門

橫山山城守殿

橫　山　藏　人殿

四月九日。金澤に地震あり。

〔每日帳書拔〕

四月九日

一、今晝九半時頃强地震。御用番出席中に付、御廣式へ罷出壽々姫樣始御機嫌相伺候事。

文政二年六月十二日强地震に付、御廣式へ各退出より出、方々樣相伺御機嫌、出席無之人々は以紙面相伺候。且御在國之節强地震有之、出席切御前御機嫌伺候例も有之。御用番之儀は越後屋敷へ出席中に付、退出より御廣式へ出。今日出席無之人々は御在國中出席切相窺候例を以、今日各ゟは分而不申遣候事。

〔年々珍敷事留〕

一、四月九日晝九時地震、餘程强く、何れも御屋敷ゟ御機嫌爲伺罷出る也。

〔諸事留帳〕

四月十二日。能美郡小松に火災あり。

當十二日晝九時頃、小松龍助町金屋武右衛門と申者方より出火仕、類燒家等如斯御座候。火元武右衛門呼出、出火之樣子吟味仕候處、疑敷品無御座、自火之躰に御座候。且火事之節燒死貳人御座候。右之外人馬あやまち無御座候。尤御年寄衆ゟも御達中に付、爲御案內如此御座候、以上。

巳四月十六日　　　　堀平馬

原五郎左衛門樣

堀平馬は小松町奉行
原五郎左衛門は御算用場奉行

天保四年四月十二日小松町出火燒失家數左之通。

一、一軒　火元　龍助町　金屋武右衞門
一、百四十四軒　龍助町　類燒家
一、百二十二軒　八日市町　同
一、百二十七軒　東町　同
一、六十五軒　土居原町　同
一、三十軒　本鍛冶町　同
一、百二十七軒　大文字町　同
一、七軒　同町　毀家
一、四十軒　西町　類燒家
一、二軒　同町　毀家
一、八十三軒　寺町　類燒家
一、六軒　同町　毀家
一、九軒　本大工町　類燒家

一、一軒　同町　毀家
一、四十六軒　八日市地方　類燒家
一、二軒　同町　毀家
一、二軒　地子町　同
〆八百十四軒
内二十軒　毀家
外一ケ所　御修覆所猫橋
百九つ　土藏
七十一　納屋
一つ　潰納屋
二ケ寺　淨土宗寺
同　日蓮宗寺
六ケ寺　一向宗寺
二ケ所　同宗二ケ寺門塀燒失
〆

〔於江府毎日書立并日記之内書抜〕

五月八日

一、左之御屆下書聞番出候付、以善右衞門上之候處、卽日以同人被返下候に付、聞番江渡之候。

加州小松城下燒失之覺

一、八百二十四軒

内　十軒　寺

七百九十四軒　町　家

二十軒　毁　家

一、百　九　土　藏

一、七十一　納　屋

一、一ヶ所　御納屋

一、二ヶ所　寺門塀

一、一ヶ所　橋

一、二　人　　燒死男

右前月十二日午の刻町家より出火、同夜戌の刻及鎭火候燒失家數等書面之通御座候、以上。

巳　五　月　　松平加賀守

出席は横山藏人

四月十八日。前田慶寧初めて登營して德川家齊に謁す。

〔諸事留牒〕

四月十八日

一、今日犬千代丸樣御登城に付、のしめ・上下に而六半時過出席、御廣式𛀁罷越、以富田儀右衞門御機嫌相伺、重而御供廻り之節罷越、例之通御色代鏡板𛀁罷出候處、益御機嫌克五半時前御出被遊候事。

犬千代丸樣御登城之節御供人心得方

犬千代丸樣大奥𛀁御登城之節、御道書幷御供落所等左之通に候事。

一、御本宅御廣式御門より御出、南御門より本鄕通り、同二丁目、壹岐坂牧野備前守殿屋敷前、水道橋、小川町、一橋通り榊原式部大輔殿屋敷脇、一つ橋御門より平川口御門。

一、御道案内足輕二人、御挾箱、御先供御步九人、御鎗、御長刀、平川口御門外に而殘可申候。

但、御挾箱は御駕御跡ゟ付、上梅林坂下邊に而落、扣罷在趣に而直に御玄關迄參り、御箱は同所ゟ上げ、棒は御駕籠与一集に、御廣式御門前腰懸に指置可申候。

附り、御下り以前御玄關に而御挾箱請取候はゞ、最前之通り上梅林坂邊ゟ繰出し扣罷在、御下り奉見請、御先へ一行に繰出し、平川口御門外建ヶ所ゟ相建、御行列之通可相心得候。

一、御傘は晴雨共、御前御同様、御玄關前迄爲御持に候。

一、御蓑箱・御茶辨當、幷指添御歩横目・坊主、平川口御門外に而殘り可申事。

一、御草履取二人、御駕舁六人、御玄關前迄御供仕、其餘平川口御門外に而殘可申候。

一、御供人一統、若雨天之節は、唐油合羽着、笠着用之事。

一、騎馬御供之頭分、雨天之節羅紗合羽着、笠相用可申候事。

一、御醫者若雨天之節は、御城內羅紗合羽、手傘相用可申候。

但、わらんじ・足中之內用可然候。

一、御藥箱は御城內入方六ヶ敷由に付、平川口御門外に殘可申候事。

一、御供人建切之事。

但、若御用有之候砌者、其節之時により可申候。

一、御供人燒飯相用候節、溜所与申而は無之候へども、終日之儀に候間、御歩以上之分は其

唐油は桐油

筋江相願込、御廣式下部屋之内に溜所出來之筈に候。

併表向之事に而は無之由之儀に候間、無禮無之樣可相心得候。尤其餘平川口御門外腰掛之內江入申筈に候間、不作法無之樣可申付候。

一、御鎗・御薙刀・御蓑箱・御茶辨當・御召馬等も、平川口御門外腰掛之內江入申筈に候。

一、若夜に入候得者、押足輕迄御城內出入之節、手提灯相用候儀不指支候。

一、御提灯御城內入方、數之儀は、別紙御行列附に有之候通に候。

以上

一、左之書面從高田善右衞門入披見事。

犬千代丸樣於大奥御目見、御懇之上意被蒙、御手自熨斗鮑御頂戴、御脇刺等品々御拜領、御料理御頂戴。內府樣・大納言樣江も御目見、被蒙御懇之上意、御手自御のし鮑御頂戴、御拜領物被成。御臺樣江も御目見、御拜受被成、御簾中樣よりも御拜受物被成、方々樣よりも被下物有之。御內證に而公方樣・內府樣・大納言樣・御臺樣・御簾中樣より、相公樣・眞龍院樣・鈞次郞殿江も御拜領物被成候。此段爲御承知申遣候、以上。

四月十八日

「犬千代樣御用留」

今日犬千代丸樣、大奥江御登城、御目見被仰上之旨、表方江申進候通に御座候。姫君樣御同樣、朝五時之御供揃に而、姫君樣御出後指續五半時前御出、御登城被遊。右御出前何茂御廣式江罷出、奉伺御機嫌、御玄關江罷出御見立申上、益御機嫌能奉見上。山城守儀、直に御供仕、御途中何之御替も不被爲在。御合輿年寄女中佐山相勤。御玄關敷附に而御下乘、御廣式番之頭衆等御出迎。右番之頭衆御案內に而被爲入、四時過公方樣初御目見、御首尾能被仰上、早々御拜領物被遊。御登城中御寢も被遊、御目覺之上も益御機嫌御宜、度々御目見、別段御拜領物も被遊、段々御都合能被爲濟、暮六時前御戻被遊。其節藏人等、御廣式御玄關江御待請に罷出、猶又何も相伺御機嫌候處、益御健に被爲在候段、神戶淸右衞門申聞候。相公樣には五時過御出、兩御丸江御登城、御禮御首尾能被仰上、御下り和田倉御廣式江被爲入、御見合被遊、大奥之御左右被聞召候上、御老中方御廻勤。八時御歸殿。右御樣子藏人等被召、被爲仰聞。姫君樣には夜四半時頃御戻被遊候。先以段々結構成御樣子、恐悅御同意に御座候。山城守儀、於大奥、從公方樣・內府樣・大納言樣、紗綾三卷宛拜領被仰付、難有仕合奉存候。其外組頭等江拜領物被仰付候。右等之趣、御附方に而爲御承知申進候。別紙書立差進申候、以上。

四月十八日　　　　山城守等三人　判

〔見聞袋群斗記〕

四月十八日、犬千代丸様・姫君様御同伴大奥〻御登城、將軍家〻初而御目見。依て公にも御登城、御座之間にて謁せられ、御懇之上意有て御手自熨斗蚫を賜る。作御太刀・白銀三十枚・綿二十把献ぜらる。內府樣・大納言樣〻作御太刀・白銀三十枚宛、御臺樣・御簾中樣〻縮緬五卷宛進上せらる。此外御內證にて品々進上し給ふ。大奥にて將軍家より犬千代丸樣御名代にて公〻賜る。內府樣・大納言樣・御臺樣・御簾中樣より御同樣一種宛賜る。此外將軍家・御臺樣より御內證にて品々賜る。

〔恭敏公記史料〕

四月十八日始同景德夫人參大奥。將軍有懇命。親賜熨斗。又賜小刀駿河國義助代金十五枚卓置物。內大臣大納言亦同賜熨斗鮑。又內大臣賜織物五卷。大納言襦珍五卷。將軍夫人賜緞子三卷刀架。大納言夫人有君未姬榮姬子三郎照姬等公子女皆貽物。公献裝刀金馬代縮緬五卷于將軍。太刀金馬代縮緬三卷于內大臣大納言。縮緬三卷一種于各夫人。其他多數。

四月廿五日。銀仲預り銀手形及び兩替印紙の引替所を設け、且つ其通用年限を延ぶべきことを告ぐ。

〔郡方御觸〕

近年銀手形通用被仰付候處、正金銀拂底に而一統及迷惑候に付、此度御詮議之上、御領國身元相應之者共江、爲札尻出金被仰付、引替所被建候間、正金入用之者は右引替所江、百日銀手形幷兩替印紙之分共指出引替可申候。

但、引替之儀、佳節朔望之外奇日毎に、四時より九時迄之内可罷出候。引替相初り候日限等之儀者、引替所承合可申候。

一、金一兩當分六十八匁極直段被仰付候。外に引替所爲雜用、金一兩に付五分宛可指出候。

一、銀手形入用之者は、引替所江正銀持參いたし候得者、前段之振を以銀手形相渡筈に候。

但、五分之雜用指出に不及候。

一、上納幷御家中收納拂米代を初、米方取引者都而銀手形を以取遣いたし、一切正金銀取扱致間鋪候。

一、引替所相建候共、兩替商賣店に而兩替いたし候儀、尤是迄之通勝手次第に候。

一、小割札之儀者、當分引替に者不指出、是迄之通可致通用候。

一、當時通用之銀手形、來る未の年迄に正銀引替之圖に而、則其趣印章茂加へ有之處、今般右手形引替所相建候に付、年限も違申儀、其上餘程手馴候間、此度新札に調替、右年限之印

章相省き、代りに引替所之印を加へ、寄々引替申筈候條、當分右新・古手形兩樣共、打込可致通用候。

一、當時金納之分、六十四匁之相場を以銀上納申渡置候得共、今般手形引替所相建候上者、同所之相場同事、六十八匁之圖を以可致上納候。

一、右手形於御算用場三の一正金銀引替之分、未引替に不相向分も有之候得ども、前段之引替所相初候上者、御算用場之引替所者指止可申候。

一、先達而銀手形出來之節、正銀同樣に取扱候樣申渡置候得共、近年手形に而正銀相求候節、専打銀を相立取扱候躰に候。今度引替所相建候上者、右樣之儀有之候而者、引替方仕法に指障候條、堅打銀相立申間敷候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

四月二十五日　　奥村内膳

四月。御大工及び御壁塗の子弟等の御作事所に出づる場合に改めて帯刀することを許す。

〔故紙雜秒〕

天保四年御大工江被仰渡之寫。

御大工等、往古者帯刀不相成候處、段々願之趣有之、享保年中刀刺候樣申渡、彌高ぶり不申樣にと被仰出之趣茂申渡置候。然處寛政年中御大工せがれ共、家業之細工爲鍛錬、御作事所大工小屋へ指加、仕手大工同事被仰出候樣仕度旨、御壁塗せがれも右に准じ願之趣有之、承屆置候處、右せがれ共帯刀に而罷出候由に付、中古御大工等帯刀願之儀有之御聞屆に候得共、せがれ共御作事所ゑ罷出候節帯刀は仕間敷儀、併是迄刺來候分は其通に候。以來せがれ共相願御作事所へ罷出候節者、帯刀爲指止可申、御壁塗せがれも可爲同樣旨被仰出之趣、其節申渡置候通に候。右之通無息之子弟帯刀者不相成候に付、近年御大工人少等に而、遠所御用等指支候節、子弟御雇之儀承屆候時分、御大工代に爲相勤候事故、不致帯刀而者御締方に相成不申旨に而、段々各申聞之趣有之に付、御雇中一作帯刀之儀承屆。文政七年に茂、是以後御大工・御壁塗せがれ御雇之節者、一作帯刀爲致度旨各被申聞候に付、御雇中帯刀爲致候儀承屆申渡置候通に候。左候得者最初御大工等も、子弟帯刀不相成段者會得之事に候。然處去年於學校一刀帯し候者、御歩並子弟同事に罷出候儀不相當儀に付、出座指留候由に候。依而帯刀不相成儀改而申渡、何茂迷惑至極仕。然上今般御作事所仕法もいたし候儀に付、親同樣之取扱に相成候之樣仕度旨、願之趣被申聞候得共、去年改而申渡事改り候儀に而者無之候。前々より之御格も有之、親同樣御取扱之儀は難承屆候。乍併是迄各心得方不行屆に付、御大工等

も心得違いたし、帶刀等仕來候躰に而、段々被申聞之趣故、今般御作事所仕法格別之趣を以、帶刀幷學校江罷出候儀、是迄仕來之通爲致候儀承置候條、可被得其意候。尤致帶刀等候とて、御取扱格別宜く相成候譯に而者無之候間、尚更心得方之儀御大工等江可被申渡候。前々被仰出等茂有之所、各先役以來心得方不行屆に付加樣に成來候。已後之儀可被相心得候。此段相達御聽申渡候事。

四月

四月。前田齊泰の子利義の幟拜見人の心得を示す。

〔御觸留〕

甚五郎殿御幟土橋御門内に相建候。來月朔日より五日迄、御家中幷町方共拜見之儀可被申渡候。尤男子は十五歲以下に候。都而拜見人甚右衞門坂御門より土橋御門江入、手摺垣之内より御堀端江押廻、如元土橋御門江出、夫より御宮坂御門通り西町口御門江出申答候。

一、拜見人供之者、甚右衞門坂御門内江草履取一人召連可申候。

右之通夫々可被申渡候事。

右天保四年四月觸付。

四月。旱魃あり。

〔年々珍敷事留〕

一、四月より五月中旬旱魃強く、川水大切に相成、番水に相成る。百姓ども川筋へ廻り、水大切に仕る。此頃入梅也。

五月十日。前田齊泰の子鈞次郎歿す。

〔諸事留〕

五月六日

一、鈞次郎殿昨日より御癇症御發、昨晩迄に四度御とぢ被遊、今朝も一度御とぢ被遊御様子に付、御廣式江罷出、古屋甚兵衛を以御機嫌相伺候事。

但、右御様子石野雅樂助江相尋、委曲奉承知候上、罷出御機嫌窺候事。

七日

一、鈞次郎殿御容子、昨朝之後御癇症御治り被遊、至極御穩に被爲在、只今に而者最早御宜段、石野申聞候事。

八日

一、鈞次郎殿御容子、續而御快、夜前少々御寢氣に有之、都而御宜由之事。

〔溫敬公御在府中御日記〕

五月十日

一、八時少し前晝食給に掛る時、從鈴只今鈞次郎儀及大切申旨、奥取次まで申出。內實は此時死去也。依而膳一先づ下げ、存寄有之に付、精進之儀に申出、則伺替有之、無程精進物にて重而膳給候事。

前書十日の逝去とするを正しとす

五月十三日。前田齊泰の子鈞次郎の逝去を發表す。

〔諸事要用雜記〕

五月十七日

一、鈞次郎殿當五日御癇症に而御閉塞、其後も切々御閉塞、御開も被爲在候得共、十日昼頃又々御前症に而、十一日之處御指重被成候段、十一日立御飛脚に傳附、同席より之紙面今日到來、河村氏より添書を以廻狀有之。

〔諸事留牒〕

五月十一日

一、鈞次郎殿御儀、昨日御癇症御指起、直に御とぢ被遊、今朝御開無之に付、五時頃より出席御機嫌相伺候處、御驚風之御症に而、御醫師何茂御難症之段申上候由等、古屋甚兵衛申聞候事。

一、九半時過、只今鈞次郎殿御指引被爲在、御大切に被爲及候旨に付、御廣式江罷出、御機嫌相伺、藤井方亭江御容子も相尋候處、最早手段も無之御場合被爲到、足立長秀只今御藥調合いたし居申候へども、いまだ指上も不仕段等申聞候事。

五月十二日

一、鈞次郎殿御逝去御届方之儀、今日御届に相成候而は、公邊江指支有之候間、明日御斷之事に相成候樣御指圖に付、明日九時過御指重御大切之御届有之、夕七時過御逝去之御届有之候筈に相極候事。

五月十三日

一、今日申の中刻鈞次郎殿御卒去之段、以高田善右衞門被仰出候事。右に付夫々御機嫌伺等有之候事。

五月十四日

一、鈞次郎殿御法號左之通。

妙圓院殿淨心宗智童子

七月三日

一、妙圓院樣御忌日十三日に候處、思召有之、十二日に御改被成候段、今日以石野雅樂助被

十一日は十日なり

仰出候事。

〔見聞袋群斗記〕

五月十三日鈞次郎殿申ノ刻御卒去、御內實は十一日なり。

同廿六日御葬式下谷廣德寺江御移り、同寺境內江御收り。御年御二つ。御法號妙圓院殿淨心宗智童子奉申なり。

五月十七日。前田齊泰の子鈞次郎危篤の報金澤に達す。

〔官私隨筆〕

五月十七日

一、鈞次郎殿御儀、當五日より時氣御中り之御樣子に而、折々御癇症御發、御閉被遊、御驚風之御氣味に被爲在、御醫者丸山了悅・池田玄章始診被仰付。御住居診御醫師餘語古庵老等、幷小島安順老等も診之處、御同案に而、御藥千金龍膽湯幷鎭癇之丸藥指上候處、翌六日晝より段々御快方に被爲在、御癇御發も無御座、御乳も被召上候處、同十日晝頃より御再發、御塞り之御氣味度々被爲在、御出入醫師雨森宗眞初、衆醫診も被仰付、御藥種々指上候へども、御藥効不被爲在、御疲勞も御加り、沈香天麻湯差上候へども、其後次第に御疲勞甚敷、御指重り被成候段、山城守殿等より只今申來候。先以急成御樣子奉恐入候。右に付追付御廣式江

御出、壽々姫様・延之助殿・基五郎殿・榮操院様御容躰御伺可被成、初丸殿には以御紙面御伺可被成旨、晝過御用番より廻狀來。

五月十九日。前田齊泰の子鈞次郎歿するを以て金澤に於いて普請殺生鳴物を停止す。

〔御觸留〕

一、鈞次殿御氣色御滯被成候處、次第御指重、不被爲叶御療養、當十三日申之中刻御卒去被成候段申來候。依之普請は今日より明後廿一日まで三日、諸殺生・鳴物等は當廿三日迄遠慮可仕候。

一、右に付頭分以上之面々、明後廿一日爲伺御機嫌――

右之趣被得其意――

五月十九日　　本多播磨守

五月廿七日。前田利家の女豪姫の二百回忌法會を寶圓寺に執行す。

〔官私隨筆〕

五月廿七日

一、樹正院様二百回御忌、當廿三日御相當之處取延、今日一朝於寶圓寺前田萬之助方より執行有之。

五月。米價高直なるを以て藏宿印紙米所持の商人に之を賣出すべきことを命ず。

〔御觸留〕

一、藏宿印紙米は當町用米に付、利潤を得候ため商米に取扱候譯に而は無之に付、先達而切商茂指留置候。然處米價追々高直に而、末々輕きもの共及困窮候躰に付、取扱方種々僉議中に候。隨而商人共印紙米等所持之者共は、末々之難儀を推計、利潤之所存無之、自分々々之飯米手當之外は二・三石たり共屆人有之次第可賣出候。此儀は不申渡とも、人情において憐察可有之事に候。

一、印紙米之儀、僉議之趣有之候條、五斗之分共當時所持之者は加印いたし可相渡候條、當月中に町會所江差出加印請可申候。依而來る朔日より、加印無之印紙には米相渡不申樣、藏宿共江申渡置候。

右之趣町中江申渡候事。

巳　五　月

別紙之通町奉行申聞候條御家中之人々藏宿印紙所持罷在候者有之候はゞ當月中に町會所江差出加印請可申候事。

右之趣被得其意同役中傳達組支配不相洩樣可被申渡候、以上。

五月十八日　　本多播磨守

六月。窮民救濟の爲武士町・本町等に道路修理の工を起すべきことを告ぐ。

〔御觸留〕

御横目江

御家中之人々居屋敷廻幷町方等、道惡敷石高之ヶ所有之候付、町並申談、道修理之儀近年申渡置候付、追々出來之ヶ所も有之候得共、いまだ出來無之ヶ所も有之躰に候。然所當時米價高直、其上稼方薄く、輕き者共甚難澁之躰相聞え候條、武士町共本町等、此節道修理申付候者、輕き者共稼方之一助にも可相成候條、早速道修理申付可然候。

右之趣一統可被申談候事。

六　月

六月。天候不順にして冷氣を感ず。

〔年々珍敷事留〕
一、六月天氣甚惡く、土用中雨降、至而冷く、七月中も雨降り續く。諸國右同斷之由。七月廿日頃之由。羽州鶴岡邊洪水之由。奥州筋別而不順氣之由。

〔文化より弘化まで日記〕
天保四年六月、當春以來諸色高直に而、此節米石に付九拾六・七匁。月末印紙百壹匁迄。批屋米升に付百壹文賣。

六月。小松町災後の家屋建築を入念にすべきことを告ぐ。

〔御國法御制禁被仰渡等之拔書〕
先達而河南之火炎、古來無大變、殊に急火にて家内雜具等取片付候間茂無之、共上過分之土藏、幷諸商賣物等莫大之燒失にて、一統致難澁候儀は申迄茂無之、於御奉行所茂不便至極に被思召候。依而急難爲御救、御米千四百石餘。先達而御貸渡被下候得ども、當座の御救而已に而、家建之爲にも相成不申躰に付、重而增御貸米御願被下、御米高二千三百石御貸渡被下候。兩度之御米過分の御儀、御當節中不容易儀に候得ども、右樣大變不一通後に而、種々折返御願被下候處、無據御聞請、格別之御僉議を以て御聞屆被下候御儀は、御當節類稀成御儀に而、拙者共に於て難有仕合奉存候。就夫小松町之儀者、外遠所と違ひ、御城下同樣にて、

他國之見人茂可有之、以來家建等見苦敷相成候而者、おのづから諸商賣等茂不融通に相成申哉と、末々之處無覺束思召、右等を以て格別之御顧方有之候條、家建之處成限り致入念候樣有之度候事。

癸巳六月　　　　町年寄

七月十日。小判及び歩判金の瑕あるもの丶通用に關する幕令を傳ふ。

本文は幕令なり

〔諸事要用雜記〕

七月十日

一、左之通御觸達到來。

大目付江

小判金之儀、瑕之患無之ため厚めに吹直被仰付候得共、此上年を經候に隨ひ切金若瑕金等有之共、切瑕・へげ瑕無構可致通用候。輕目金之儀は、小判は四厘迄輕き分通用いたし、二歩判・一歩判も右分量を以輕き分・瑕金とも無滯可致通用候。

右之趣向々江不相洩樣、御料は御代官、私領は領主・地頭より可觸知者也。

五月

小判金通用方之儀に付、從公儀相渡候御書付寫一通相越之候條、被得其意、組・支配幷與力且

又家來末々迄可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣申付、尤同役中可有傳達候事。

癸巳七月十日　　奥村丹後守

比良左內殿

大野織人殿

七月。領内製産の木綿に判押人を定め判賃を徵すべきことを告ぐ。

判押人の任命は天保五年正月廿三日の條に見ゆ

〔御郡典〕

天保四年巳七月

覺

一、絹・布・木綿一疋に付五丈四尺、一反二丈七尺、前々御定之通少しも無短尺織出、賣買方之改印請可申事。

一、當年より木綿之分も判押人相立、丈尺相改、短尺に無之分一反々々押判、判賃一反に付買人より五厘宛取立、内一厘役料に被下、四厘上納之事。

八月四日。前田齊泰凶歉に處する爲蓄穀の法を講ずべきことを命ず。

〔御親翰留〕

當年不順氣故、不作之國々も有之樣子相聞え、領國中之儀も甚無心許候。其上金澤當夏用米指支、町奉行手前に而無油斷救方等も申付候由に候へ共、細民甚難澁之躰相聞え心痛之事に候。就而者、ヶ樣之年柄打續候而者、逼迫中救方之手當も行屆間布与、一入心痛之事に候。依之當年より收納米等之內を以、二・三千石計籾納に爲致置可申候。國民救方之儀は大切之儀に候間、勝手方之者共ゟも申合候而、いづれにも申出候通、如何樣ともいたし可取計候。此段申遣候、以上。

八月四日

算用場奉行中

〔作難に付取治方諸事留〕

當年不順氣故、不作之國々茂有之樣子相聞候。御領國中之儀も甚無御心許、其上用米指支、所々奉行手前に而救方等も申付候由に候得共、細民甚難澁之躰被聞召、ヶ樣之年柄打續候ては、御逼迫中御救方も被爲行屆間敷、一入御心痛之御事に候。御國民御救方之儀は大切之儀に候間、當年より御收納米等之內を以五・六千石計籾納爲致置可申候。此儀如何樣共いたし取計可申旨被仰出候條、被得其意、當年より諸郡に而籾一萬俵宛相納候樣、夫々可被申渡候、

以上。

癸巳八月　　　　　　　御算用場

御郡奉行中

追而、本文之趣に而御逼迫中格別之思召を以、御救方御手當を被爲設候事に候間、於下々も夫食手當心得方等、尤惣年寄等油斷も有之間敷儀に候得共、猶更格別に心得可被申渡儀与存候。本文之御主意深く被汲取可被申諭述候、以上。

本文は幕令なり

八月廿四日。一朱銀を發行するを以て一朱金を引換ふべき幕令を傳ふ。

〔諸事要用雜記〕

八月廿四日

一、左之通御觸達到來に付寫取、廿四日越後屋敷ゟ指出、執筆有岡小右衞門受取段申聞候。

大目付ゟ

一朱銀吹立追々出來に付、一朱金相止候間、持合候ものは後藤三右衞門役所幷江戸・京・大坂其外在々に而、當時吹直金銀引替御用勤居候者共之内ゟ差出、段々引替可申候。尤引替相濟候迄は、是迄之通無滯可致通用候。

一、右引替金之儀、小判・二歩判・一歩判・二朱金等を以引替可遣候。燒一朱金に而も、極印相

分り候分は無代に而引替可遣候條、其段可相心得候事。

右之趣可被相觸候。

七　　月

八月。前田齊泰その族人の序次を改定す。

〔官私隨筆〕

八月十五日

一、眞龍院樣奉初御子樣方等御內輪御順之儀、當春御治定有之候處、重而御改之由に而、江戶より申來來狀幷別紙、御用番より以鈴木五兵衞被爲見之。左之ごとし。

御內輪御順之儀當春御治定之處、重而御詮議之趣有之、左之通御改之事。

眞　龍　院樣

犬千代丸樣

基　五　郞殿

和田倉御前樣

池之端御前樣

壽　々　姬樣

延之助殿
榮操院樣
御用人執筆書出候一紙。
表向御順辰年御用番又三郎殿被仰聞候事。
相公樣
犬千代丸樣
眞龍院樣
釣次郎殿
基五郎殿
壽々姬樣
延之助殿

辰は天保三年

八月。米價大に騰貴す。

〔文化より弘化まで日記〕
天保四年七月下旬より米高直に付、批屋米二升宛より賣不申樣、町奉行中より申渡有之。印紙百十一・二匁。

當秋穀等甚高直、批屋米升百二銅。

〔年々珍敷事留〕

一、八月天氣大躰能し。當夏中大不順氣に而、諸國不作之由。此節米直段町賣一升に付百二十文也、錢、百目に付九貫八・九百文也。印紙米石に付百十匁計之由。諸色高直、江戸・大坂一升百五・六十文之由。

九月十五日。前田齊泰の子利義の色直の祝儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月九日

一、左之通御用部屋より談有之。

當十五日基五郎殿御色直御箸初に付、御次廻り頭分のしめ・上下、其外服紗小袖・上下着用之儀今日談有之、御次廻り夫々申談る。

〔官私隨筆〕

九月十五日

一、今日基五郎殿御色直御箸初に付、各退出より直に御廣式へ被罷出、基五郎殿へ迄御祝詞被申上。各服紗上下。

九月十九日。石川郡高尾に於て加持祈禱する僧勇穹、妙圓院の位牌を安置するを以てその處分を議す。

妙圓院は前田齊泰の子釣次郎の法號

〔本多政和覺書〕

九月十九日

一、長瀨七左衞門罷出、五兵衞以執筆申聞候は、立像寺隱居弟子勇穹と申者、石川郡高尾村に去々年より居住仕、加持等仕參詣人夥敷有之、誠奇特之由申ふらし候內、妙圓院殿御位牌を拵、右佛前へ指置、一入群集之樣にも相聞候付、役人指遣候處、勇穹在合不申、弟子道圓と申者罷出候に付、村役人方へ一端引取罷在候內、御郡所より勇穹村方に指置候儀不相成旨等申渡有之、庵室前之鳥居を取毀候樣子相聞え、其內勇穹罷越候付、御位牌之儀尋候處、山田平太夫姉妹之內、當時江戶御廣式年寄女中佐山氣分滯候砌、平太夫より賴之趣有之、則祈禱仕候處、平癒仕候に付施物有之候へ共受納不仕。其因み有之故に候哉、妙圓院殿御卒去之後、梅輪內御紋付御熨斗目を旗に直し二流、裏に御戒名調有之、御召物之由に而御紋付を打敷に仕立、此も裏に御戒名記有之、今一品御召物佐山より寄附之由に而、右平太夫より當月三日指越。右御戒名を位牌へ移し、金溜御厨子之內へ納、佛前に奉移候旨申聞、敢而勇穹より手筋を以願込候儀に而も無之由。乍去諸參詣等有之佛前に、御位牌を拵指置候儀は不敬之

至に付、呼出相尋候迄寺社奉行へ指預、御位牌等者立像寺へ引渡爲置候。右之趣御達申候間、御指圖被下候様仕度。佐山より寄附之儀、御様子も有之哉難相辨、山口清太夫等へ此儀可申達哉と申聞候に付、申聞之趣承候。山口清太夫等へ申達候儀は存寄無之、此一件猶又追而指圖致可申旨以執筆申渡。右に付紙面幷佐山へ之受取之寫、且先年輪嶋之淨明寺に金龍院様御位牌等を捹候に付先例書合三品出之。是は様子は違候得共懸御目候旨申聞。右先例、淨明寺は幼少故指控申渡、右御位牌は捹候靜遊と申僧牢揚屋へ入候旨也。

右勇穹手前相糺申聞候様、廿二日七左衛門へ申渡、執筆信藏取次、廿五日口書紙面添出る。如在も無之躰に付、以後之儀申渡相宥候様、廿六日別席に而七左衛門へ申渡。御位牌は寺社奉行へ申談、不敬無之様始末致候様申談。

九月廿七日。前田齊泰夫人江戸城西の丸に登る。

〔溫敬公記史料〕

九月二十七日。夫人氏如西城。

〔諸事留牒〕

九月廿七日

一、今日西丸江姬君様御登城、御供いたし候處、從内府様縐紗三卷、御簾中様より紗綾二卷、

御供は横山藏人

大納言様より、紗綾三巻頂戴、以荒川土佐守殿拜領仰付、御禮横田小一郎殿𛀁申述。夜五半時過歸御、御住居𛀁罷越、以小一郎殿恐悅、且於西丸拜領物御禮、暨御機嫌も相伺候處、以御同人白銀二枚拜領被仰付、右御禮茂申上候事。

一、御前𛀁も御登城之恐悅、拜領物等御禮申上候處、翌日御意有之候事。

十月九日。不作なるを以て酒造を三分の一に減ずべきことを告ぐ。

〔本多政和覺書〕

九月廿四日

近年諸國違作之國柄多、米穀拂底に付、酒造高之儀大目付より到來之書付被仰下候付、寫指遣候條、夫々可申渡旨城州等紙面。

本文は幕令なり

大目付𛀁

近年諸國違作之國柄多く、米穀拂底に付、酒造人共當巳年之儀は、銘々造來候米高之三分一減、三分二酒造可致候。若隱造等致すに於而者、其者は勿論、其所之役人迄、吟味之上急度可被申付候條、心得違無之樣可致候。

右之趣御料・私領・寺社領共不洩樣早々可觸知者也。

九　月

右之通可被相觸候。

〔御觸留〕

當年不順氣に而、御領國中作毛甚不熟に付、此躰に而は來年新穀迄之用米、必至与指支之場ニも可至、就夫酒造米當年三之一造に相成候得ば、用米之足りに可相成儀付、御領國中酒造商賣之者共ニ、例年之三之一造に申渡候條、一統其心得に可罷在候。尤入酒いたし候者茂、可有其心得候、以上。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十月九日　　前田美作守

十月十日。米・雜穀等食用品を藩外に輸出することを禁ず。

〔觸留〕

當年諸國作躰不宜、御領中茂違作之躰相聞え候條、町・在共一統應分限、食物を初萬事致省略、取續方無油斷可相心得候。右に付米・雜穀・塩・味噌・醬油を初、都而食用に相成品々、當分他國出指留候條、此段末々まで可被申渡候。尤右品々津々浦々等縮方之儀も、嚴重可被申渡候。

一、他國米買入之儀、能州奥郡之外は時々願出、承届候得共、今・來年は御領國一統、勝手次

第買入可申候。尤買入候米高、前々格合之通、其時々當場ゟ可被相達候。
右之趣、年寄中ゟ茂相達申談候條、被得其意、末々不相洩樣可被申渡候、以上。

巳十月　　御算用場

別紙之通御算用場奉行より所々町奉行・御郡奉行等ゟ申渡候旨に而寫差出候に付指越之候條、御家中人々等一統其心得に可罷在候。
右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十月十日　　前田美作守

十月廿三日　前田齊廣の生母貞琳院十三回忌法會を寶圓寺に執行す。

〔諸事要用雜記〕

十月六日

一、當月廿三日貞琳院樣御十三回忌に付、一朝於寶圓寺御法事御執行就被仰付候、御家中諸殺生御當日一日相控可申候。且又普請・鳴物不及遠慮候。乍然御寺近邊に罷在候者は、御法事御執行之內自分に差扣可申候。
右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩可被申渡候、以上。

十月六日　　前田美作守

十月廿六日。鳳至郡輪島海嘯に襲はる。

〔御家老方等諸事留〕

十一月十三日

覺

惣家數七百九軒之内　鳳至郡輪島河井町

一、二十九軒　流失家

一、八十一軒　同所　皆潰家

一、十八軒　同所　半潰家

〆百二十八軒

外

二十九　土藏

內四つ　流失

十八　皆潰

七つ　半潰

〆

二　十　　納屋流失皆潰等

一、十二人　　溺　死　人

內　五人男

七人女　　此分死體有之

一、十一人　　溺死之躰

內　四人男

七人女　　此分死體無之

惣家數五百五軒之內　　同郡輪島鳳至町

一、百　一　軒　　流　失　家

一、十　八　軒　　皆　潰　家

一、二十五軒　　半　潰　家

〆百四十四軒

外に四十四　　土　藏

內二十二　　流　失

十　一　　皆　潰

十一　　　　　　　　　　　　　　　　　　半潰

〆

四十　　　　　　　　　　　　　　　　　　納屋流失皆潰等

一、十一人　　　　　　　　　　　　　　　溺死人

内　二人女

九人男　　　　　　　　　　此分死體有之

一、五人　　　　　　　　　　　　　　　　溺死之躰

内　一人男

四人女　　　　　　　　　　此分死體無之

惣家數百三十軒之内　　　　同郡輪島海士

一、二十四軒　　　　　　　　　　　　　　流失家

一、十一軒　　　　　　　　　　　　　　　半潰家

〆三十五軒

外に五つ　　　　　　　　　　　　　　　　土藏

内三つ　　　　　　　　　　　　　　　　　皆潰

二つ　　半潰
一、一人女　　此分死體有之溺死人
惣家數百十五軒　　同郡輪島崎村
一、五十三軒　　流失家
一、十二軒　　皆潰家
〆六十五軒
外に
同村社家中村出雲
一軒　　流失家
九つ　　皆潰土藏
七つ　　納屋流失皆潰等
一、四人女　　此分しがい有之溺死人
一、二人女　　此分しがい無之溺死之躰
一、一人男　　溺死人
不埒者村方江指預有之者也

流失家等

惣〆三百七十二軒

外に一軒　　　　　　　　社　家

溺死人、又躰之者

惣〆四十七人

右前月二十六日地震後、海汐二百間程引去、無程以之外高波に而、川筋通田地等渚より七町計打揚、川筋無之ヶ所三町計打揚、近き人家等暫時引去。右は三度計も打揚、最初より三度目一番高く、波之高さ五・六間にも相成、打かぶせ候由、改方手合聞合之内にも有之。此分は御郡奉行渡瀬七郎太夫より月番へ相達候分抜書致置候事。

一、右之外船・網・橋餘程之損所、御塩藏之塩九百俵計も水染に相成申候。能州邊餘程强き地震、其後は風高故に哉、波高に而往來差支所も有之様子也。

〔御用儀品々留帳〕

一、天保四年十月二十六日夕七つ時、地震之跡津波打上げ、輪島兩町・輪島崎村幷同所海士、潰家・人損有之、左に記。

一、七十二軒　　皆潰家　　河井町

一、二十九軒　半潰家　同　所
一、百二軒　皆潰家　鳳至町
一、二十軒　半潰家　同　所
一、二十二軒　皆潰家　輪島海士
一、五　軒　半潰家　同　所
一、七十五軒　皆潰家　輪嶋崎村
〆三百二十五軒內　二百七拾一軒　皆潰
　　　　　　　　　五拾四軒　半潰
外八　人　溺死人　輪嶋崎村
十五人　同　鳳至町
二十三人　同　河井町
一　人　同　海　士
〆四十七人
右之通津波損家等出來、天保四年御救方左に記。
三百石　輪嶋兩町・海士幷輪島崎村江御救米
但、此御救米被下切也。

二百五十一石　右貸米

但此御貸米年賦返上也。

〔輪嶋幷近浦津波一件〕

輪嶋幷近浦津波聞合之覺

一、十月廿六日朝より南風にて餘程吹募、九つ時頃ひがし風に吹替申候。同日八つの下刻地震大にして、久しく震動仕申候。然ども半時には過不申。地震の後風止て、海面白く高うねり波而已にて御座候。然處七つ時に至り、何となく俄に滿汐大波のごとく、濱かしら或は家居までもうち上、夫より汐引出し申處、凡五六町ばかりも引汐仕申候。尤汐の干あがり、濱となり候所は三町計にて御座候。扨又汐之引行候事甚はやく、川の瀬のごとく鳴候て引申候。汐引詰候て後、やゝ淀有樣に覺申候。五・六町沖にて波を疊あげ、其高事山の如くに相成申候。それより寄來事是又甚はやく御座候。波外場間ぢかくなり候波の高さ凡四間計うちあげ候。波の際限所々不同有之、川込は凡十町ばかりにて御座候。常の波は頭より折候てしろく、津波は下タ折候て平等に白く只一枚に寄來申候。如此大なる波三枚ばかり御座候。しかれども漸々に引汐少く、波又劣申候。自然夕景までも少々宛滿干有之、夜に入候ても汐の狂ひ御座候。扨波のいろは薄く濁て相見申候。味の儀其節溺候人に承り候へば、泥水を呑心地にて敢

外場本の儘

て汐の味無之と覺候のよし語申候。近浦之儀津波の模様指て異事も無御座、最初波の寄來る如く滿汐有之、夫より貳百間計も引汐仕しかへし、後波寄來申候得共多分は濱頭迄に納り申候。然共都而不一様、所々不同御座候。津波前後の模様、廿二・三日頃より廿五日夜まで氣候不順成溫さにて、海底の鳴候事も御座候。津波の後は氣候定まり申候。右津波の様子有增如此に御座候。誠に稀代の大變に而、人々周章中に御座候得ば、委事は相知不申候事。

〔春藤鳳兮閑時隨筆〕

過る年十月、輪島の津波後四・五日にして、友能君と同道して知るべを見舞ふに、輪島近き海邊に、誰とも知れず死たる人々に菰なんど着せて有りしが、いと哀むに堪へたり。疊・戸障子の潰たるもあまた波に打寄せ、むざんの事也。大船なんど七・八町計の山の手に打上たり。財寶の始末に死たるもあり。又佛の始末とて立戻り、波に引かれたる人あり。哀むべし。津波に引かれたる人々のうちに、一人戸板に乘りて、大川の水筋を橋の上も乘越して、はるかの岸へうかび上りぬ。あやうき命を助らる。

十月。飢民の金澤に出でゝ食を乞ふ者多し。

〔年々珍敷事留〕

一、十月氣色常躰。此節南部様より御合力米爲御願御使者來る。此節加越能より輕き者共乞食に出る事數多也。非人御小屋願之者、三ヶ國より出る者幾千人与有之。新に小屋數間被仰付、六尺四方に六・七人或は八人も居候由。御扶持米も是迄与は一人に付減少被仰付、粥に而被下候由。此頃武士・町共有德成人々は、救米或は錢出、又は神明宮等寺社に而粥を施すもあり。諸方に救方品々有。尤御上よりも、先達より貧家江御救方有之也。

十一月九日。前田治脩の廿五回忌法會を寶圓寺に取越執行す。

〔本多政和覺書〕

九月廿二日

一、左之紙面御法事方より被出。

太梁院様二十五回御忌――流刑・閉門・遠慮等之者共茂御宥免之御沙汰可有御座旨被仰出候事。

右例之通廿四日觸出、十月五日迄に書出候様申渡。

〔諸事要用雜記〕

一、太梁院様二十五回御忌御法事、當十一月九日江御取越於寶圓寺御執行に付、御寺江相詰候面々六半時不遲相揃、奉行人・諸役懸幷御番人者六時過迄に相集、御法事相濟候迄相詰可

申事。

但、御牌前御番人・火之番人は格別之事。

一、御寺〻相詰候頭分已上、前々長袴着用に候へ共、萬端御省略中に付不及長袴着用候事。

一、御寺〻相詰候役懸り之人々者裏門より可罷出、其外は無用之事。

以上

九月

〔諸事要用雑記〕

太梁院様二十五回御忌御法事御取越、來月九日於寶圓寺就御執行、御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、七日より九日迄相止可申事。

一、鷹野其外諸殺生且又鳴物之儀、七日より九日迄三日遠慮之事。

一、普請・作事之儀、七日より九日迄指止可申候事。

但、指急候普請等之儀は不及遠慮候。

右之通被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

十月廿二日　　　　長又三郎

〔官私随筆〕

十一月四日

一、當九日太梁院様廿五回御忌に付、御奉行は又三郎殿也七日惣見分四時過出宅罷越旨、九日一朝御執行に付六半時より半袴に而詰候様にと之趣、又三郎殿より被申越。

十一月九日

一、提灯なしに出宅、寶圓寺へ可罷越と存候處、供不揃暫遅刻、六半途中に而承候歟と存候程に罷越。

一、播磨守・美作守・初丸・圖書・掃部・庄兵衛・勘解由・八郎右衛門・外記追々被罷出、御奉行は又三郎尤被出居。

一、和尚挨拶に被出、座見も出。

一、御法事初りは五つ頃に候哉。初座般若心經大悲神咒也。大悲神咒濟、天德院・瑞龍寺贊勝興寺代僧淨蓮寺諷經あり。

一、二度目御法事四時頃にも候哉初る。上堂也。

一、三度目九つ前にも候哉初る。心經・招香・法語・遶行也。

一、御名代美作守被勤、遶行二段濟伺公所より退被申、裝束有之、伺公所之出口へ被參居。御法事濟各例之通御名代之節之伺公所へ罷越、御香爐宜旨寺社奉行より作州相達、被相勤。

一、夫より又初め之伺公所へ罷越、出家入候而後退座。

一、御名代濟一先退候圖り之由最初被申聞、御奉行初何も退座之處、寺社奉行等に而は直に御代香有之圖りに心得居候由に付、各又伺公所へ參り候處、追々御代香相勤。

一、右濟御施物如例。

眞龍院樣　榮操院樣　姫君樣　犬千代丸樣　碁五郎殿　和田倉御前樣　池之端御前樣　壽々姫樣　延之助殿

〔本多政和覺書〕

十一月七日

一、太梁院樣二十五回忌來正月之處御取越、明後九日御執行有之に付、今日より三日遠慮。昨日惣見分に付四つ打出宅、寶圓寺へ表門通り參上。外追々被出、丹州・又兵衞・勘解由不參、內膳は月番助被勤儀故不參。服紗小袖・上下也。

〔明忘錄〕

十一月十三日

一、今日於公事場御赦有之事。

十一月十三日。一作引免を許したる知行所を有する諸士に藩より償米を

支給する時期等を告ぐ。

〔觸留之抄〕

當年御領國一統作毛甚不熟に而、一作引免就被仰付候御家中知行所之分、引免高前々之振を以御郡奉行より諸給人江直に申談候筈に候。依之引免に當る物成高御償可被下筈に候へ共、當時御逼迫至極之內誠に莫大之御引方に而、當年一時に御渡方出來不申候之條、加州米之分は來年四月堂形藏米等に而相渡、能・越米之分は來年に至り御償方可遂詮議候。依之諸給人手前心得方之儀、別紙之通御算用場奉行申聞候通に候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十一月十三日　　長　又三郎

當年作難に而村々引免就被仰付候、左之通可相心得候。

一、加・越・能收納米相拂置候分者、引免に當る米高不足に可相成處、代り米今年御渡無之に付、代り米御渡有之迄切手買留人手前爲相待置、追而御渡有之候はゞ早速買主江可相渡事。

但、加州米之分は來年四月堂形藏米等に而御渡可有之、能・越米之分は來年に至り可遂詮議事。

一、右に付先達而賣渡置候切手取次中買江取集、給人江可指出旨申渡置候條、指出次第引免

に當る定納・口米引去、殘る渡米高右切手に致付札可相渡事。

但、付札草案左之通。

本文米高之內、何十何石何斗何升何合渡方不指支事。

一、一ヶ所拂切手何通にも相成居申分は、引免に當る米高拂米、切手之表石數に應じ割合無不同樣、切手一通に可致付札事。

一、拂切手數通に相成居候分、右之通割合に無不同樣可致付札處、若是迄之內は藏宿へ相向、米相渡置候分も有之候はゞ、早速其段藏宿より給人江可及斷、殘る切手之方に而引免米不殘引去、渡米高相極可致付札事。

一、地米・遠所米共拂殘有之候者、拂置候切手之分並殘米之分共兩樣に、引免に當る米高割合せ引去、拂切手に可致付札事。

但、若引免無之拂切手之分は、引免無之段是又可致付札事。

一、當時米不相拂置、是以後拂米之分者、尤引免之定納・口米高引去可相調儀に付、切手付札に不及譯に候得共、引免有之切手迄紛敷之間、是又可致付札事。

本文之米高全渡方不指支事。

何之誰 印

一、御借知米に指上置、引方等指引紛敷分は、米高等御算用場役所承合可申事。

一、皆濟狀調方者、別紙草案之通に候事。

一、引免に當る夫銀之儀、近年百姓ゟ直々被返下候事も有之候得共、此度は如先規、來春夫銀之內に而遂指引候樣百姓ゟ申渡、給人手前御償無之事。

但、來年之皆濟狀に其趣書載可申事。

右之通相心得候樣、御家中一統ゟ被仰渡候之樣に与奉存候事。

十一月

十一月十九日。米穀等の食品を藩外に出すべからざることを告ぐ。

〔作難に付取治方諸事留〕

當年諸國作躰不宜、御領國中茂同樣不作に付、町・在共一統應分限、食物を初萬事省略いたし、取續方無油斷可相心得。右に付米穀等都而食用に相成候品々、當分他國出指留候旨等、先達而御算用場申來候趣有之。其節夫々申渡、一統承知可罷在儀に候得共、若心得違之者有之、米穀等密々他國ゟ相洩し候儀出來候而者不輕儀候條、猶更嚴重相守、心得違不致樣改而一統可申談置候。尤潤改人之儀は、船々積入之品出入とも可相改役前第一之儀に候間、御締方嚴重可相心得候。如此申渡候上に茂、萬一不心得之者有之候而は、人々身爲にも不相成儀

に候之條、是等之趣會得いたし、能々可申諭置者也。

巳十一月十九日

御郡奉行

能州四郡村々役人・潤改人

〔御用儀品々留帳〕

一　天保四年諸國共不作に而、御領國中も不作に而米穀・塩・味噌・醬油・酒・油を初、惣而食用之品一切他國出不相成段、天保四年より同五年七月迄他國出御指留被仰付候。別而他國用米支に而、米價格別高直に付、御領國商人共利潤を目懸、御領國より米穀等密々他國江津洩仕候儀難計、御勝手方御席より茂譯而被仰渡之趣も有之候間、津留之儀浦々潤頭人等、出津入津調理方仕來候得共、尙更舟懸り潤所等津洩改方之儀、今般山廻中江被仰渡候。他領隣村之儀は新田裁許江改方被仰渡候間、山廻中等致手分、浦々相廻洩津相改、御領國浦々役人より洩津米等無之趣書物取立、一ヶ月切出役所江可指出旨。新田裁許之儀、他領隣村相廻り候に付、御預所入交り候所者、彼御領江も相廻り可申。又御預所庄屋等之內、御私領江も互に見廻り中筈に候間、洩津相改、尤他領之村方より者洩津米無之趣、書物取立候に者およひ不申旨。

一、奥郡之儀、他國入津米御免之御郡に候得共、口郡・越中・加州筋御郡々、天保四年より五

年迄一作他國入津米御指解に候間、入津米勝手に仕、尤致入津候分有之候はゞ、一ヶ月切に前々之通帳面を以斷および可申旨。

十一月。厩祈禱を特許したる越中守山の七右衛門以外の猿牽徘徊するを以て注意せしむ。

〔郡方御觸〕

射水郡守山猿牽七右衛門儀、往古由緒有之、御領國在々牛馬厩祈禱に相廻候之處、近年紛敷猿牽之者共立入、守山猿牽七右衛門名前を謀り步候之由に而、七右衛門儀致迷惑候旨申立、見合印鑑等之儀別紙之通願出候得共、見合印鑑之儀者詮議之趣も有之、役所しらべ申相見合置候。何れ右躰七右衛門祈禱場所ゟ入込候儀は、不筋之趣に候條、得其意、於在々猿牽之者相廻候之砌、名前得与相尋、右躰紛敷者入込不申樣相心得、此段馬持共等ゟも夫々可申渡置候。尤右躰名前を謀り入込候者有之、謀り者之儀顯候はゞ、召連役所ゟ可指出候。先々早々相廻、落着より可相返者也。

巳十一月　　　　御郡奉行

諸郡村々役人

乍恐書付を以奉願上候。

本文は町奉行に與へたる覺書なり

私儀往古より猿舞師仕、乍恐御先代樣守山御在城之刻より、爲御用御廐御祈禱正・五・九月定日相勤、且又富山樣・大聖寺樣御廐御用茂相勤申候。私先祖之者共は、守山に八町八反之地面拜領被爲仰付、御用相勤居申候。其後地面者指上、爲代り御領國在方牛馬祈禱仕候樣被爲仰渡候段、前々より申傳、歷代相勤居申候處、近年何方之者に候哉、私名前を謀り在方を廻り、其跡江私相廻候得者、祈禱相濟候躰与申立、甚難澁至極仕候。何卒見合札被爲仰付被下候得者、其見合札を以在方祈禱に廻り候得者、謀り者入込不申、於在々紛敷儀も無御座儀与奉存候間、何卒御慈悲之上を以願之通見合札被仰付被下候はゞ、難有忝奉存候。猶御聞屆之上、村々江茂被仰渡被下候樣奉願上候。何卒願之通見合札被爲仰付被下候樣奉願上候、以上。

天保四年十月　射水郡守山猿牽　七右衞門

御郡御奉行所

十一月。米穀缺乏するを以て町人に粥を食ふべきことを令す。

〔觸留〕

當年御領國、夏以來雨降續、不順氣に而、作毛甚不熟至極に付食物を初萬事致省略、取續方無油斷可相心得旨、先達而申渡置候。然處次第に米價も高直成儀近年無之事、輕き者共は別而可爲難澁儀候。右に付、來年新穀出來迄、何分用米不指支樣、夫々遂詮義候事候。勿論人

々心得も可有之候得共、町家之者共一統粥等を給、取續可申候。將又酒造三ヶ一造之儀、先達申渡置候通に付、是又人々心得も可有之儀候得共、尙又遂省略、用方猥之儀有之間敷候。是等之趣可被申渡候事。

十　一　月

〔官私隨筆〕

十一月二十五日

一、當年御領國不順氣に而、作毛甚不熟、價も高貴に付、町家之者共一統粥を可給旨等、別紙之通申渡候。か樣之趣候間、御家中之人々も心得可有之儀候。則町奉行へ申渡候覺書之寫相渡候旨、定番頭へ之覺書寫、御用番より被越之。別紙町奉行所へ之覺書は、當年御領國夏以來雨降續、不順氣に而作毛甚不熟至極云々。

〔年々珍敷事留〕

一、十一月此頃次第に米價も高直に相成、輕き者共難澁至極に付、來年新穀出來迄何分川米不指支樣遂僉議、町家之者共一統粥等を給取續可申。將又酒造三之一造可申之御觸一統被仰出。右樣之御觸度々被仰出有之。諸國夏以來雨降續不順氣に而、作毛甚不熟至極に付、物騷成事也。且此頃能州奧郡抔、山土を製法し、糠を煎磨交ぜ食物に仕る由。右類之團子、能州

江參り候人取來るを見候に、中々食物に難成品を喰由。他國は別而、御領國能登・越中は所により此のごとく也。御城下は輕き者共喰續兼候者も多く有之候得共、御上等より御救有之。且又武士・町共富貴之人々野町神明宮・瓢簞町崇禪寺において、毎朝粥一人に何程与定、組合頭等頭取定り施行有之。其外所々に一二朝之施行あり。

〔文化より弘化まで日記〕

天保四年十一月十日堂形御藏米石百十匁。印紙百十五匁より二十目迄。批屋米升に百八文うり。當年不作に付、町方一統粥給候樣觸付在る。御家中一統引免被仰付、下民江爲救諸方より粥等差出。

十二月七日。鹿島郡能登部下村にて百姓騷擾す。

〔作難に付取治方諸事留〕

當月七日夜五つ時頃、人數二・三拾人計、ばんどり・竹笠着仕候者、鹿嶋郡能登部下村德丸村上村に而、米小賣仕候者共之宅々江罷越、米直段高直に而小前之人々難澁仕旨に而、世上米相場之樣子聞合度旨に而、中には高聲に申立候族も有之、少し騷敷体に承りおよび候に付、尙更內聞仕候處、前段之通に御座候。尤何方之者共に御座候哉相知不申候。且亦小賣米直段之儀も內聞仕候處、當時右村々黑米一升八十四文に賣捌申躰に御座候。爲指騷敷与申程之儀

に而も無御座候得共、時節柄之儀故小紙を以御内達申上候、以上。

巳十二月　　　　　　　　　武部村　彌左衛門

御郡御奉行所

十二月十四日。御郡方に洩米を行ふの疑あるを以て厳に之を戒む

〔諸郡御用留〕

當年無比類違作之年柄に付、先達而諸品津留之儀嚴重申渡置候所、中には心得違之者有之、密々洩米いたし候哉に相聞え、不容易儀に候。若右躰洩米いたし候者相顯においては、嚴重咎申付候條、猶更急度可相心得、自然洩米取扱候者見咎においては、爲褒美見咎米之内半分被下候條、相互に可令吟味、右之趣末々不相洩樣急度可申渡候、以上。

十二月十四日　　　　　　　　内藤十兵衛

　　　　　　　　　　　　　　馬場右近

諸郡惣年寄中・年寄並中

十二月十五日。前田齊泰夫人着帶の祝儀を行ふ。

〔官私隨筆〕

十二月廿九日

一、五時過登城、出仕之面々各謁し候而、其席に而御用番進み出、當十五日姫君樣御着帯相濟候趣被申聞。退出より各御廣式へ罷出、以木村傳右衞門御祝詞申上候。江戸へも今便申上。

十二月十八日。博奕等の諸勝負を禁ずる前令を嚴守せしむ。

〔觸留〕

かけ諸勝負は御制禁に候處、心得違之者も有之、且正月者勝手向等に而小兒等之遊事と名付、博奕に似寄候慰事不苦儀之樣に存候族も有之體相聞候に付、寛政元年委細被仰渡置候通、かけもの仕勝負を以慰といたし候儀者御停止之事候條、尚更無違失急度可申渡旨被仰出候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十二月十八日　　奥村内膳

奥村内膳は月番年寄

十二月十八日。能登口郡の惣年寄等當年收納米の皆濟に付き歎願せんことを謀る。

〔作難に付取治方諸事留〕

飛达り啓上仕候。寒氣甚敷御座候處、御揃御淸安被成御座珍重奉存候。時節柄御取治方御心配奉察候。然者邑知組當年皆濟御注進之儀、兼而御相談通今十八日之日附に御注進書調爲登

申、先づ表向迄之儀、下は何等之譯も相立不申心痛仕申候。

一、御見聞之通、當邊下々專稼來候木綿者、不景氣に而賣買無之故、手間賃追々減少、苧紵は江州より仕送りも相止候体に而、甚直落、買人無御座、小前之者一圓可相稼品無之、食用之品は一躰高直に而、日用必至と指支候躰。乞食次第增長、施人は相減致方無之旨。尤是迄村切介抱も致來候得共、今程介抱之方便も無御座旨に而、飢におよび候段村役人中より歎出、打明不申顯候得共、飢死に相成候者も有之躰相見え、不輕人命不容易趣に付、邑知組頭立候者三十六人呼出、救米爲指出、私よりも加入米仕、一日一人一合宛村方より爲相渡、暫く助命爲仕候樣取計申候。危急之品故不得止事右之仕合に御座候。尤押水組之儀も同樣之趣に付、每度歎出候由此節取計方申談候体に御座候。

右之趣に付此段得御意度如此に御座候、以上。

巳十二月十八日　　岡部七左衛門

笠師宇八郎樣

武部彌左衛門樣

緩目左門樣

十二月廿九日。山本孫三郎銀子指引の件に關し雲田忠太夫を殺害す。

〔本多政和覺書〕

正月二日

太田小又助以執筆申聞候は、坂井小左衛門組山本治太夫弟孫三郎儀、藤田左衛門家來雲田忠太夫方𛀁銀子指引方之儀に付用事有之、舊臘二十九日夜罷越、夫より銀主方𛀁同道罷越候途中に而、孫三郎𛀁法外過言等申聞、其上手向候付不得止及殺害候段及屆候付、檢使之儀公事場へ相達候。晦日夜より昨夜へ懸、檢使無異儀相濟申候。他之家來之儀、其於途中之事故、此段口達を以御達申候旨申聞。

正月二日は天保五年

太田小又助は御馬廻頭

〔渡邊兵太夫手記〕

山木孫三郎儀（御馬廻組山本次太夫弟）十二月廿九日夜堀川笠市邊途中に而、藤田彈正家來中小將組雲田忠太夫与申者及口論、法外之致方有之に付忠太夫を討果申由。檢使晦日夜より元日夜半相濟。三日孫三郎年賀に罷越、右荒增申聞候也。

彈正は左衛門を正しとす

〔温敬公記史料〕

山木孫三郎（坂井小左衛門組山木治太夫弟）与藤田左衛門隷雲田忠太夫。爲金談同行。於途中怒忠暴言失禮斬之。（事係四年十二月二十九日。檢使本年正月三日了。）

十二月晦日。飢民增加したるを以て之を收容する非人小屋の增築を議す。

是月は大盡なり

〔諸事留〕

十二月晦

一、八つ時頃非人小屋裁許菅野彌八郎・二宮源次郎罷越、非人小屋入人千七百八十人計に相成、入方指支候旨等紙面致持參候付、假小屋出來方遂僉議候所、先二間梁に廿間計之小屋五筋計、其内二筋計急に出來、跡は追々致出來候はゞ指支申間敷。中勘御入用銀二・三貫目計も可相懸哉之旨申聞候付、いづれ早速假小屋出來可申付、中勘御入用銀、先今日之所一貫目裁許假證文に自分裏書致印章相渡。右を以添書所主付方へ罷越、及示談候へば、兩替之內より當座御借入に而相渡候事に申談置候旨等、申談遣候事。

十二月。窮民の飢死する者多し。

〔年々珍敷事留〕

一、十二月空腹之者共寒氣に被閉、次第に弱り死する者多し。此節米町賣一升に付百十七文、印紙米抔は百三十目計にも望人多く、江戶・大坂共物騷之由。京邊小賣米一升百五十文計之由。右直段に而も買兼る日有之由。御領國に而も、一兩日も商賣不爲米屋有之由也。

十二月。諸郡本年の籾貯藏に代ふるに米を以てせんことを請ふ。

〔作難に付取治方諸事留〕

本年八月四日の條參照

籾納一萬俵代米二千五百石諸郡割符

籾八百六十俵代米

一、二百十五石　能美郡

同千四百俵代米

一、三百五十石　石川郡

同六百四十俵代米

一、百六十石　河北郡

同千九百八十俵代米

一、四百九十五石　礪波郡

同千三百二十俵代米

一、三百三十石　口郡

同七百五十二俵代米

一、百八拾八石　奥郡

同千三百三十二俵代米

一、三百三十三石　射水郡

同千七百十六俵代米

一、四百二十九石　　新川郡

籾一萬俵代米

〆二千五百石

右諸御郡當御收納米より、非常爲御手當年々就被仰付候、籾納諸郡割符書上申候。當年之所諸郡籾所持不仕候間、代米に而御藏納被仰渡、來春に至り籾納立替被仰付被下候樣仕度奉存候、以上。

天保四年十二月

石黑源丞
廣瀨又八郎
西川源兵衞
高橋由五郎
小村爲次郎
石崎彥三郎
南兵左衞門
金山十次郎

是歲。七木等の伐採に關する取締を組主附の取扱に屬せしむ。

〔御用儀品々留帳〕

一、能州四郡村々百姓稼山・垣根廻七木、并畑畔・宮林・墓印松伐木縮方之儀、文政四年御郡方御仕法以來、右伐木之山廻罷出極印打渡可申旨、其節改而申渡置候得共、今般僉議之上、享和元年山方御仕法取極之振を以、右伐木縮方組主付江被仰付候間、手附指出、伐木極印打渡可申候。右伐木村方願紙面之儀者、文政四年仕法之通り、御郡所宛に相調、組主付江指出、伐木極印相濟候分、年中引集、年切右紙面出役所江可指出旨。

一、村々貯用林之儀、并御帳付之分、都而文政四年仕法之山廻江、伐木方被仰付置候旨。

右之通御算用場江相達被仰渡候旨、天保四年御郡所觸付。

是歲。藩の租稅收入凡べて左の如し。

〔天保四年分御取箇并御物成調理書上申帳之寫〕

草高　　三州合

一、百三十三萬三千九百三十石四斗二勺　　御印高并新開本田直り、手上高共

同

一、四千八百八石七斗七升　　奉行附八ヶ所、新開二ヶ所共

内

十一萬八千四百四十石三斗四升　　檢地引高新開共

千六十五萬八斗七升八合六勺八才　　屋敷等引高、但奉行附之内屋敷引高共

三　石　　能州一ノ宮[社領]捕領

四石五升七合　　能美郡御預人參畑

殘而

百二十一萬九千二百二十五石八斗九升四合五勺二才　村　高

六十四萬四千三百六十九石三斗四合　　定納口米

内

七十一萬九千三十三石一斗一升一合五勺　天保四年分給人知高

此定納口米

三十八萬五千七十石二斗八升三合

内

八萬七千八百八十五石九升三合　作難御用捨免に當る定納口米

内

二萬千五百八石八斗二升一合　御償米高

三千五百二十五石四斗　寺社領高

此定納口米

千九百五十七石一斗一升四合

内

三百七十八石九斗六升四合　作難御用捨免に當る定納口米

内

三百七十一石五斗三升三合　御償米高

七百十九石六斗三合　惣年寄等御扶持高

此定納口米

四百二十一石一斗一升

殘而

草高

四十九萬五千九百四十七石七斗八升二才

一、二十五萬六千九百二十石八斗三升二合　定納口米

内

八石八斗七升一合　松任町稲荷屋敷等地子米引

六千二百七十二石四斗一升六合　定銀納定納口米引

十石三斗一升八合　右同斷十一月堂形値段を以上納之分引

七百二十二石六斗八升二合　一作依願銀納定納口米

千十三石四升九合　御用地銀納定納口米引

二萬三百七十六石八斗八升　引免に當る定納口米引

惣高一萬八千九百四十九石三斗一升八合

一萬四千八百二十六石四斗六升九合　右同斷に付給人知ゟ引足米引

但、惣高之内四千百二十二石八斗四升九合、村々より御藏米納米を以可引足米不足に付、

給人知ゟ百姓斗過之分御藏米切手を以相渡候。

三百十三石五斗四升六合　奉行附ケ所引免に當る定納口米引

百三石　同所銀納に當る定納口米引

五萬七千七百八石六斗一升六合　作難御用捨免に當る定納口米引

惣高三十六石四斗八合

二十四石一斗四升一合　右同斷に付寺社領江引足米引

但、惣高之內十二石二斗六升七合、村々より御藏納米を以可引足米不足に付、寺社領江百姓斗過米之分御藏米切手を以相渡候。

殘而

一、十五萬五千五百四十石八斗四升三合　本田御物成高

一、二百十七石七升四合　高岡等地子米高

一、五石五斗　新川郡高原野之內立林役米

高

一、六千七百七十石三斗六合　定免新開村等二百三ヶ所

內

四十二石七斗　檢地引高

殘而

高六千七百二十七石六斗六合

一、二千四百十六石七斗七升一合　定納口米
内
千三百三十六石一斗九升三合　引免に當る定納口米引
四十七石八斗七升二合　作難御用捨免に當る定納口米引
殘而
一、千三十二石七斗六合　御物成高
高二萬五千三百八十八石六斗八升五合、内五百五石一斗六升二合不納
一、二千九百三十六石七斗七升七合　新開圖免村六百十六ヶ所定納口米
高四千八百八十三石五斗七升四合、内四百五十七石一斗四合不納
一、五百三十二石八升二合　新開請高村三百三十五ヶ所定納口米
高一萬七百三十石六斗一升五合、内四百五十七石一斗四升不納
一、八百四十五石四斗一升九合　文化十二年等仕法新開村八百九十ヶ所定納口米
本高三萬七千二百八十石
一、一萬二千百十六石三斗一升　與力明知定納口米之内御藏返米幷作難御用免暨
代官口米引去申高

八口合
一、十七萬三千二百二十六石七斗一升一合
内
四百三十一石四斗九升一合　米納に當る侍代官口米石に付二升宛引
二石九升八合　同銀納に當る侍代官口米石に付一升宛引
殘而
一、十七萬二千七百九十三石一斗二升二合　御收納米高
内
五千七百三十一石五斗一升　濱方糘納高
一、三百三十六貫四百七十五匁九分七厘　春秋夫銀取立高
一、三百七十六貫二百八十六匁九分二厘　惣銀代、但皆銀納村引免に當る銀引之分引
一、三百七貫七百二十八匁一分七厘　定小物成銀高
一、三百十七貫六百十六匁九分五厘　金澤町等散小物成幷地子銀・魚口錢等
一、三百七十三貫三百十五匁三厘　散小物成銀高
一、十九貫四百九十三匁六分六厘　與力明知春秋夫銀役銀所江上納

一、千九十三石七升六石　今石動・城端・氷見地子米町藏米を以切手に而上納

一、百五十束　石川郡市原村役中折紙翌年三月上納

〆

五ヶ山金納

一　百十五枚一兩一匁三分九厘八毛八絲　惣村數七十ヶ村、此定納高二千六百八十五石九升五合之代金、石に付金目一匁八分八厘六毛餘之替、此金四匁四分金一兩之定、十兩一枚ヶ相立、金一枚に付四百六十五匁之極

一、二十二枚二兩七分三厘二絲　明暦二年手上金幷蠟漆等役金高右同斷

〆百三十七枚三兩二匁一分二厘九毛

内

四枚一兩七分八厘三毛二絲　流刑人小屋々敷幷引免に當る引金高

殘而

百三十三枚二兩一匁三分四厘五毛八絲　御收納

此代

六十一貫九百五十二匁二分二厘　　極値段金一枚に付四百六十五匁之割合を以上
納高

〆

江州御領分

草高二千四百三十二石二斗六升二合　　今津・弘川兩村、海津之內中村
一、千二百四十五石九斗二升九合　　町共三ヶ村分定納口米高
內
七十三石五斗六升二合四勺　　今津御藏に而定拂高
殘而
千百七十二石三斗六升六合六勺
外
五十一石六升七勺
〆千二百二十三石四斗三升三合三勺
內
三百十石一斗　　今津甚右衛門幷今津・弘川兩村江御貸米高

殘而
九百十三石三斗三升三合三勺　　大津御藏入高
一、八百十七匁四分四厘　　今津村等春秋夫銀・中村町山役等、京都御土藏江
上納高
〆
右天保四年分加越能幷江州今津村等三ヶ村御物成高、幷定・散小物成銀共しらべ上之申候、以上。

未四月　　篠原監物
原五郎左衛門
有賀甚六郎
石野宇兵衛

未は天保六年

天保五年

正月廿三日。能登口郡の木綿判押役人を任命しその勤方を示す。
〔御郡典〕

羽咋郡

今濱村　甚藏

飯山村　惣右衛門

羽咋村　彌兵衛

富木地頭町村　源之丞

鹿嶋郡

田鶴濱村　平右衛門

天保四年七月參照

右之者共、木綿判押役人申付候條　此段被申渡、人縮可被申付候。被申渡上、勤方帳幷木綿に押候印判可相渡候間、當場産物方役所ゟ、來月廿日迄之內一ヶ所一人宛可被指出候。且木綿取扱候者共へ、判押役人申付候間、不相洩改を請候樣可被申渡候。

一、木綿判賃一反に付五厘宛可取立段、先達而申達置候處、詮議之趣有之、一反に付三厘宛取立、其內一厘宛判押人ゟ被下候儀、御勝手方年寄中等ゟも相達候上取極候條、此段夫々可被申渡候。

一、布絹判押人ゟも改而勤方帳可相渡候條、是又判押人有之ヶ所より、一人宛罷出候樣可被申渡候。

午正月廿三日

御郡奉行中

追而判押人江相渡候勤方帳寫一冊、幷に木綿に押候印鑑、各爲承知相達之候、以上、

〔御郡典〕

御領國出來之絹・布等、丈尺不足無之樣毎度被仰渡も有之候處、今以不正之族有之躰に爲相聞候間、今般嚴重改方之儀、且木綿は是迄判押不申候得共、調理方不行屆に付、以來は木綿にも判押、短尺相改、判賃可取立旨、御勝手方年寄中等被仰渡候に付、丈尺改方等左之通可相心得候。

一、絹・布一反二丈七尺二寸之儀、公儀御定に候處、近年猥に相成、右丈尺に不滿分織出候者有之躰に候。右品々は他國江も多指遣候品に候處、御定丈尺に不滿分有之候而は、第一御外聞にも拘り候儀に而、織出候者共始甚不爲之儀に候。是迄短尺之品織出候儀不埒之至に候條、以來判押候節丈尺嚴重相改可申候。

一、切れ之分は無判に而取扱可申候。併一反に近き寸尺之分は、切れ取扱に而は紛敷候條、二丈四尺五寸より以上之分無判に而取扱候者及見聞候はゞ、二つに切分け相渡可申候。

一、無判之反物、都而致賣買間敷候。若無判之品取扱候儀見聞に及候はゞ、取揚可及斷候。

一、丈尺相改候儀、他國等ゟ多遣候節、且常々賣買にも數多之節、不殘相改候而は商人等可及迷惑候間、判押候節惣高之內鬮取を以、百疋より六十疋迄は六疋、五十疋より三十疋迄は三疋、三十疋より十五疋迄は二疋、夫以下は一疋宛相改可申候。若其內短尺之分有之候はゞ、惣高不殘相改、丈尺全分は判押渡、短尺之分は切すべ相渡可申候。

一、短尺之分、一反に少分之不足に而も判押不申、切之取扱之ヶ條通可相從申候。

一、幅之儀は御定有之候處、是迄他國に而も幅廣・幅狹兩樣取扱候儀に候得ば、以來不殘御定尺に相成候はゞ、賣買方に指障り可申候間、通例之品は九寸五分以上に織出可申候。夫より以下は幅狹に取扱可申候。共餘幅廣・幅狹与申品は、是迄之振合之通可相心得候。

一、絹・布之儀は前々より判押人有之、出來高調理、判賃取立來候。尤丈尺等可相改處、是迄之所流例之樣に相成居、出來高迄相調理候躰に候。以來は丈尺等嚴重相改候上判押渡、御定之判賃可取立候。

一、木綿は是迄判押之儀無之候得共、今般相改候以來判押候儀申渡候條、一反に付判賃三厘宛取立、判押渡可申候。判押方等之儀、絹・布判押人之外別人に申渡候。右判賃一反に付三厘之內、一厘宛判押人ゟ可被下候條、殘銀可致上納候。

一、木綿判賃、賣買之節買人より可取立候。併品に寄賣人より可取立分も可有之、此儀は絹・

布判賃取立方に准じ可申候。
一、絹・布・木綿共、一ヶ年惣判押高判賃取立高、幷被下銀・上納銀共一ヶ年切勘定帳、毎歳翌年正月中產物方役所へ可指出候。
一、木綿判賃は、前年十二月朔日より其年十一月朔日迄之分取立、毎歳十二月廿日切、產物方役所へ可致上納候。
一、都而判賃之內被下方有之候得共、前條之通改方繁多に相成儀に候間、雜用も懸り申儀に候條、年々判押高相調理候上、遂詮議增雜用可相渡候。
一、嶋木綿之儀も、白木綿同樣相改判押可申候。
右今般改而申渡候條、判押方幷丈尺改方等嚴重可相心得者也。

天保五年正月　　御算用場

絹・布・木綿判押人

正月。米價騰貴す。

〔文化より弘化まで日記〕
天保五年正月中旬より米石に付百十五・六匁。批屋米升に付百十三銅極之處、百十七銅迄に成る。

〔珍事留帳〕
一、當春雪少々降り、去年より諸色高直に付、諸事人氣不穩成、町賣米一升百十文、味噌一升百五十文、豆腐一丁二十八文、大豆・小豆一升百十四五文、酒一升百四十文、糠一升八文買取る也。右に付諸事高直成事。
一、他國格別之米直段故、他國江密賣拂者有之由に付、度々所々江米改役人出る也。

二月朔日。前田慶寧着袴の儀を行ふ。

〔溫敬公記史料〕
二月朔。行犬千代丸君着袴式。

〔諸事留〕
一、四半時御前御都合御宜に付、犬千代丸樣御表江御出被遊候樣、雅樂助等より御廣式江御案内申上候由に付、追付犬千代丸樣御表江御出之旨、御附頭申聞、山城守御居間書院三之間江罷出、將監江も申談、同所江罷出候事。
一、犬千代丸樣御のし目・御上下於御廣式被爲召、先刻相公樣より被遣候御大小御帶被遊、引出橋通り御出、御附頭御先立、御居間書院横御溜り江被爲入候事。
一、追付御居間書院江御着座、御作法之通、犬千代丸樣には御溜より若年寄方に而將監御先

立仕、御居間書院三之間迄被爲入、山城守御太刀目錄持參上之。御間之內一疊目中程に指置、御間之外御左之方ゟ退、犬千代丸樣御出、御閾之際一疊目中程に而御禮被仰上。山城守儀、犬千代丸樣御祝被成、御太刀等被上候段申上、犬千代丸樣直に御閾之內御左之方ゟ御着座、御太刀御表小將古屋喜一郞引之。御のし三方同山森權太郞持出、相公樣ゟ上之候處、御手自御熨斗犬千代丸樣ゟ被進、御頂戴、今日者天氣相もよろしく目出度き御意に付、御着袴御禮御首尾能被仰上、難有御仕合に被思召候旨、山城守御取合申上。相濟、犬千代丸樣には最前之通、將監御先立御溜ゟ被爲入。

〔諸事留牒〕

二月朔日

一、六半時過聞番澤田圭馬同道、御本丸ゟ罷出、從犬千代丸樣御獻上之御太刀・馬目錄、御奏者番阿部伊豫守殿ゟ相渡、袴着に付指上候段申述候處、大久保加賀守殿可遂披露段被仰聞。相濟、御臺樣・御簾中樣ゟ御獻上物御留守居年寄ゟ御達。夫より西丸ゟ罷越、內府樣・大納言樣御獻上物、水野壹岐守殿ゟ相達候處、水野越前守殿可遂披露旨被仰聞、退出之事。

一、公方樣より今日御祝儀に付、紗綾三卷拜領被仰付候に付、右御禮兩丸老中廻勤。

一、今日御着袴に付、年寄中を初、右御用之人々刻限五時に候間、山城守・圖書儀のし目・布

御本丸は江戸城なり

上下、將監儀も同禮服に而御刻限より出席之事。

但、御附幷御廣式向のし目・布上下、御附之御歩並・御廣式御歩並は服紗小袖・上下、御殿向御歩並以下都而服紗小袖・布上下着用、御客向ゟ携候人々のし目着用之事。

二月九日。諸士の先祖由緒一類附帳を年寄中席に提出すべきことを命ず。

〔諸事要用雜記〕

二月九日

一、左之通山口等より演述之事。

定番頭ゟ

年寄中席ゟ、御家中之人々先祖由緒一類附帳先達而差出置候處、年月を經候間、此度增減等相改、當四月中迄に可差出候。帳面口張等に不及候。本組與力且御歩等之內御知行被下候人々之分も、最前之通可差出候。當時御咎被仰付候人々は、代判人より可差出候。舊宅之分は跡目相續被仰付候上早速可差出候。將又已後跡目被仰付候時々無違失可差出候事。

右之趣組・支配有之面々可被申談候事。

二　月

二月十日。老臣本多播磨守領內困窮の狀を在江戶の老臣に告ぐ。

〔本多政和覺書〕

一、此間御勝手方に而示談、此節此表之様子江戸へは委敷相知申間敷、下々困窮米價高貴、幷非人小屋人多之儀荒増申上候而可然と之事に付、其段昨日出今日延申上り候筈也。右に付而此節御能等之儀申上候而可然と之示談有之。左之通紙面昨夜余調筆、封じ候而上書等いたし、今朝御勝手方執筆彌十郎方迄遣之。然處御勝手御免に付、本文之紙面は内膳より被遣候筈。然處内狀文面之内、委曲別紙に申進候抔と之文面も有之故、調替可遣儀に而も可有之哉、又は内膳より被遣可然儀に而も可有之哉と之事、今日何も申合候處、全部勝手方御用と申に而も無之、文面之内少々不都合之趣は有之候得ば、其段は執筆彌十郎等より江戸執筆迄、御免前に調置候品之旨申遣候得ば相分候儀に候間、右之通可然段被申、内膳より彌十郎へ者被申付候由也。

御領國去年作毛不熟、他國は別而凶作に而、米價次第に高貴に至、其以來輕き者ども甚難澁いたし、漸と取續罷在候之處、此節に至り候而は米價彌及高貴候故、彌下々之者今日取續方甚六ヶ敷、中には及餓死候躰之者も有之旨に付、御救方等儀御算用場奉行初へ無油斷遂詮義罷在申候。其表に而は委敷様子相知申間敷、此節何歟御心得等も無之而は不叶事故、委曲別紙御用狀に申進候通に御座候。加様之趣に候間、御上にも御心得も可被爲在御儀、此節御能

被遊候儀御宜は有之間敷哉。其上近頃道成寺を被仰付候由及承候儀も御座候。一通り之御能すら如何と各は存居候處、道成寺抔者別而被仰付間敷儀に而可有之と存候。且近頃其表に立花殊之外流行に而、御前初被遊候御様子、御廣式向等には餘りと申程之事も有之由、此節専風聞承及申候。加様之儀御爲にも御宜ヶ間敷と奉存候。御算用場奉行より內々心付申聞候趣も御座候。各様にも猶又御考、思召も無之候はゞ御能等之儀程能被仰上候様仕度と、何も遂示談申候。吳々も其表に而は御國之儀、左程之事にも無之様に御心得有之候而は甚相違之事故、委曲申進候趣に候間、此處得と御思慮可有之儀と奉存候。御省略向之儀も御油斷は有之間敷候得共、御手繰方甚御危迫至極之上、追々御救方等不時成御出方も打重り候事故、此末御入用方へ入增候而は御仕送も指閊申候間、幾重にも被遂御僉議、御入用方格別相減候様に無之而は難成と存候。此等之趣に付追而可申進儀も可有之候。右之趣御承知被置候様に奉存候、以上。

二月十日　　　　本多播磨守　判

横山山城守様

二月十一日。加賀藩の抱鳶江戶本鄉に於いて町鳶た組と鬪諍す。

〔成瀨覺書〕

天保五年二月十四日出、坂井小左衛門より申越候紙面之内

一、當十一日夕御抱鳶九人、本郷た組之町鳶共与及口論、双方擲合、町鳶之内にも疵負候者有之哉。御抱鳶之者卯之助・茂八与申者兩人深疵、其外三人淺疵、殘りは無難に引取申候。右深疵兩人之内、茂八者卽死、卯之助翌朝相果候付、三十人頭に而承糺候處、御抱熊五郎与申者より事起り候儀に候處、右本人熊五郎口論之場所より何方江罷越候哉行衞相知不申、委曲相分兼申候。仍而御步横目等罷越、町方自身番江引上候死骸見分被歸候上、翌十二日共段御月番江御屆有之。猶更本人熊五郎尋出、委曲相糺候上、重而御屆可被成旨御達申、町方檢使相濟、死骸も相渡申事に相成候由。依而熊五郎尋出召連候樣、改方足輕江被仰渡候。則十二日夜召連來、割場において承糺候得ば、當十一日相生屋新助与申者方江、火事有之とて町鳶打集、新助方を打毀し懸候故、右新助下人熊五郎方へ罷越申聞候は、早速新助方へ罷越、取押呉候樣相賴。熊五郎儀兼て新助与心易仕候故、町鳶之内常五郎与申者も、常に新助与心易仕候故申合、則新助方へ參候得ば、町鳶共引取、新助は不在合候付、樣子下人に相尋居候處、四・五人た組町鳶共罷越、熊五郎江打懸り、不得已擲合、共内相引にいたし、熊五郎宿へ罷歸候處、御抱鳶共參樣子承り難打捨、町鳶頭取之者方へ罷越懸合可申与申聞、九人連に而町鳶頭取長吉とやら申方へ參り、段々懸合候得者、いづれ子方共方へ參りか樣可申聞同道に而出

懸候處、五・七人充待伏いたし居、打懸り、無是非擲合候處、た組町鳶人多く相集、四・五十人も鳶口抔を以打懸、双方擲合候得共、大勢に而難敵、尤熊五郎は引取、其身より事起り及騷動、仲間共江も無申譯、御屋鋪へ奉對、御難題千萬奉恐入、忍罷在申候得共、仲間之内即死人茂御座候旨承り候上者、忍罷在候而者不本意之儀、御屋敷江立戻り委曲訴可申与罷越候途中、南御門前に而役人江出逢、同道仕罷越段申聞候に付、夫々承糺候上、右始末今日御月番江重而御届に相成筈に候。何れ御難題之儀仕出申候鳶之者手前始終、相違無之樣入念穿鑿之上御屆有之可然、自然間違候儀有之候而者、御不都合とも可相成与、聞番中にも心付におよび候處、油斷も無之、此上は分明之御裁判無之而者不相成。鳶之者共におゐて御糺之上、明白之御裁判不被下候而者、一統頭を並死可申与覺悟之躰に相聞候。左も可有之儀。いづれ相手之者共、御刑法にも被仰付候所江至り不申而者不相成儀に奉存候。打合之場所は本鄕四丁目石福邊之樣子。屋根より瓦を投候音甚敷、誠に騷動之樣子に御座候。右申分通に候得者事速に候得共、自然取繕有之候而者糺方等閑に相聞え、御不都合可相成哉、此所を案じ申儀に御座候事。

二月二十日。鳳至郡輪島町に火災あり。

「珍事留書」

一、二月廿日能州輪嶋町内河合町頭振田邊屋佐四郎方より出火、同夜九時までに面持家數七百四軒、此外借り家山方足輕清水甚八郎、住吉宮、日蓮宗妙相寺、淨土眞宗善龍寺・長樂寺・圓龍寺等燒失。松木屋の九郎兵衛も類火之事。

一、重藏宮暨禪宗蓮江寺、小御代官山瀨圓右衛門、一向宗淨願寺・正覺寺、此外面持五軒殘る由也。

〔諸事留〕

三月十八日

一、輪島火事注進、今日御郡より出候付左に記。

覺

火元人鳳至郡輪島町河井町頭振佐四郎

燒失家、惣家數七百九軒之内

一、七百四軒

外に

百十六軒　貸家

百　三　土藏

二百五十一　納屋

一社　　住吉宮

一軒　　山廻足輕　清水甚八郎

一ヶ寺　一向宗　善龍寺

一ヶ寺　同　　長樂寺

一ヶ寺　同　　圓龍寺

一ヶ寺　右圓龍寺下寺

右家等、前月廿日暮六時頃出火燒失仕候事。

午三月十三日　　　　　御郡奉行

二月廿八日。飢民の急に救助を要するもの﹅爲粥を施與すべきことを告ぐ。

〔郡方御觸〕

去作不熟、隨而米價高貴に而、下々難澁におよび候に付、村々極困窮之者共追々御救方相願、曁御助小屋入茂願聞候に付、御當節之儀ながら格別之趣を以相願、夫々御救米等被仰付候儀に候得共、萬一右兩樣之願方に相洩、指懸り申者共出來可申哉に付、右樣危急に迫り有之節之ため、譬ば五・六ヶ村申合せ粥を焚、自然指迫り候者共有之節爲給候手當仕爲置候樣にと、

御年寄中より被仰渡候。先以御難澁之御中より結構に御扱方等有之上、尚又厚き御手當方も可被仰付与之御趣意、誠に以難有御儀、一統難有可奉存候。依而其所々村々道程之遠近等見計、場所相極可申候。右粥爲給候者は、前段兩條願之外に何とか指迫り候者に可爲給、或者乞食等行倒に茂可至程之指迫り候者之類に爲給候与之御趣意に候條、此所得与奉會得、御仁政之冥加を存付、下々成限不奉懸御難題樣に心得、人々稼方格別に致入情候樣、組士附者不及申に、村役人より下々迄得与可申諭候。如斯之上萬一不相當取扱等有之、御難題多に相成候族有之候而は、誠に不輕儀に候條、此末之處急度可相心得候。依而於郡々に粥焚候ヶ所之儀、早速詮議可申聞候。其上に而猶可及指圖候。米・塩之儀は夫々御渡可有之候。薪之儀は郡々爲冥加指出可申候。猶委曲之儀は口達を以申渡候通に候事。

右之趣に候條、是迄身元相應之者共より取救候者共、尚又志を盡し相救候樣可申聞候。右に付心付候品茂有之候はゞ、早速可申聞候事。

午二月廿八日　　御郡奉行

諸郡惣年寄・年寄並中

〔御用儀品々留帳〕

一、天保四年不作に付、翌五年春に至り御郡方村々困窮人御救米相願、被仰付候分も有之、

御助小屋入相願、御小屋入に相成候者も有之候得共、萬一右兩樣願に相洩、飢におよび候者有之節、手當として粥を焚御取救可被仰付旨、御席より被仰渡候間、粥焚場遠近五・六ヶ村与歟見計建置、御救米幷御小屋入兩條願之外、飢に指迫り候者に爲給可申趣意に而、假令乞食等行倒にも可至者見懸候歟、又者御小屋入願中に指迫り候者見懸候節、爲給可申儀に候間、粥焚場致詮議可申旨、天保五年二月御郡所より諸郡惣年寄迄被仰渡候に付、惣年寄致僉議候者、御救米幷御小屋入相願候者共者、實に食用盡果願出申者共に而、右願之外貰ひ喰仕候者、其外葛根等を掘、山海之草根を以食用相辨居候者數多有之候に付、今般粥焚場被仰付候得者、葛根等掘上、右粥場ぇ指向粥を乞候樣に相成候而者、際限茂無之場に至り、御趣意にも致相違。仍而今般粥場被仰付候御趣意を爲呑込、一村切飢に近き者共相撰、尙又其上五ヶ村役人致僉議、一村毎に肝煎宅に而粥を焚相施、萬一乞食之內にも行倒候程之者に者粥を施、幾重にも飢に爲及不申樣手を盡可申。若其內難澁に逹者無之候得共、粥を施し候程之手前に而無之者は、五ヶ村役人相談之上指省可申、委細組圭附承り指圖仕可申。尙更惣年寄・分役之者共、無油斷折々見廻り可申。於村方茂身元可也之者共より者、成限救方爲馳合可申。仍而御米之儀、一村に付平均五斗宛之御圖りを以可被仰付。尤無家之村方者指省、一村之內も輪嶋兩町位のヶ所は二ヶ村に相立、御領國惣村數三千三百八十八ヶ村、此粥米千六百九十四石与相成、

此御米高之内二百石者代銀渡りに候間、稗等雑穀を買入粥に交可申、残千四百六十四石は御米に而被仰付度旨相願候處、願之通銀・米両様に被仰付候。且又右粥米村割之儀、平均一村五斗宛与して組當り御米高極置、家數多き村方者一石与歟、家數少き村方者三斗与歟、一村一軒位之村者五升宛与歟、又困窮村に而家數有之大村者二・三石与歟、組圭付手前に而致村割、追而村當り御米高書上可申段達置候。

一、右粥米粥を焚候に付、薪之分者村方より指出可申候。塩之儀者代銀御上より可被仰付旨被仰渡候得共、塩之儀も村方より指出、代銀申請者不仕候。

一、右粥焚場江指向、米に而申請度旨相願候者有之候而も、行倒れ候程之者江可被仰付御趣意に付、米に而者相渡申間敷旨。

一、粥米之内二百石代銀に而相渡り候分、銀子に而相渡置、稗或者ゆるご等買入、粥に交可申事。

一、粥を為給候者人別書出、決算之儀者組圭付綿密見届可申者。

一、村に寄家數一・二軒ならで家數無之村役人も右之内に而、相勤候村に而困窮人無之共、乞食躰之者行倒候儀も可有之、右手當与して粥米相渡置可申、隣村寄肝煎之村方者、右役人江御米渡置可申旨。

一、村役人之内にも粥を施し可申者は、隣村役人僉議之上粥を爲給可申旨。

右之通諸郡惣年寄より致僉議、御郡所江書上候所、書上候通り被仰付。

是月は大盡なり

二月晦日。非人小屋の收容者三千四百餘人を算す。

〔諸事留帳〕

覺

一、千九百二十八人　午正月晦日書上申入高

一、千八百九十七人　午二月朔日より同晦日まで御郡方の者迻り入人

一、七十三人　右同斷町方之者迻り入人

一、二百六人　右同斷町・在之者奉公幷五十日雇歸り入人

一、一人　右同斷於御小屋出生人

〆四千百五人

内四百七十二人　午二月朔日より同晦日迄町・在之者奉公幷五十日雇出人

十三人　右同斷欠落人

百三十七人　右同斷死去人

殘而三千四百八十三人・午二月晦日在人高

右之通御座候、以上。

午二月晦日　　　非人小屋裁許四人

〔尙志軒雜錄〕

天保五午年二月中頃、御小屋入之者二千人の處、下旬三・四千人と云り。又御小屋出來次第、能美郡の內山中の村方より七百人出ると役所の噂なり。非人御小屋御門は、晝朝六時より暮六つ時まで通行之人有て、六つなりては何ほど願ても賴みても門の戶を開ず。若開事有ても、小兒門外に有ても其夜は入る事をゆるさず。門內に役所有、足輕晝夜詰る。

小屋の前に懸たる燈火有て通行障り無し。

非人の中に小頭といふ者有て、小屋の中の人の取り捌きに預由。小屋のいづれに明、明ぬなど小頭の裁許なり。小屋懸りの奉行役人四人計有由。

御醫者も有。御小屋奉行は一ヶ月は金澤町奉行、一ヶ月は御算用場奉行兼帶と云ふ。

大槻傳右衛門頃までは、男は五合女は三合づつ被下候を、大槻がはからひにて三合と一合八勺に御減少有けりと云。天明三年の大凶作に、天明四年には其數は知らねども、笠舞村の外に大樋口邊に御小屋立たると言傳ふ。天保五年三月は笠舞の外に御小屋立、繩からげにて被成るゝ由なり。此年時疫流行之處、御小屋江時疫入て、夏頃は一日に百人餘も死ぬ日有と評

傳右衛門本のまゝ

判せり。御小屋の非人共逃げ出たる者は遁れたれ共、御小屋に在る者は八・九分之人は死にて、殘り少になる由也。

二月。諸郡惣年寄に命じて本年の耕作を奬勵せしむ。

〔眞館藏書〕

當時御勝手向御指迫之内、去年格別之不作、莫大之御引方茂有之候に付、下々において種々之風評茂有之躰に候條、郡々惣年寄等右等之處に疑惑無之、當出作勢子方等之儀、先達而申渡候通精誠を盡、諸事無泥可相勤候。此段申渡候樣御郡奉行ゟ可申談候事。

二　月

二月。米價高直にして洩米の疑あるを以て之が發見者は出訴すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

他國は別而去年凶作に而、過分之米價之樣子。就而は密々浦方幷間道等より致洩米候者有之躰に候。依之見咎方之儀、夫々嚴重申渡置候得共、自然洩米之儀及見聞候者有之候はゞ、無泥早速可申出候。左候はゞ役人指向相糺、彌洩米に候得ば不殘取揚、其内半高は訴出候者へ

相渡、半高は其所方ゟ可相渡候。

午　二　月

二月。屎物を一切領外に出すべからざることを告ぐ。

〔郡方御觸〕

一、油糟　荏糟　干鰯　焚灰　醬油糟　糠　粉糠　屎物類

右品々前々より他國出御制禁之品に而、相洩候儀者無之筈に候得共、當年屎物拂底之年柄に相聞候條、猶更右心得違無之、嚴重相心得候樣、各支配所ゟ不相洩樣、急度可被申渡候、以上。

午　二　月　　　　御　算　用　場

淺　加　伊　織殿

渡瀨七郎右衞門殿

但、大聖寺御領行屎物之儀、譯而書記無之候得共、他國同樣屎物一圓指遣申間敷旨、能美郡惣年寄ゟ口達を以申談、已上。

二月。乞食をその村限りにて介抱し、浪人・薦僧等を立入らしめざるべきことを令す。

〔御用儀品々留帳〕

天保四年御領國一統不作に付、諸勸進人押乞之族有之に付、村切致介抱、他村等ゟ立入不申樣仕度旨、同五年射水郡より願出候に付、同年御郡所より御領國村々ゟ建札被仰付。右建札左に記。

建札

去年非常之難作に而、村每に乞食等多樣に相聞ゟ候。成限其村々に而養育取扱可致候。右之外浪人・こも僧等物貰之者、在々ゟ堅く立入間敷候。若押乞いたし、理不盡之儀有之候はゞ、召捕手寄之役所ゟ可斷出者也。

午　二　月　　　　　　　　　　　御　郡　奉　行

二月。藤内頭より散乞食等の取捌に關する從來の例を上申す。

〔異部落一卷〕

散乞食或者寺庵等門下に、病氣等に而臥罷在候乞食取捌等、

藤内頭より書出候一卷

覺

一、都而非人乞食之御縮方者、往古私共ゟ被仰渡、私共より非人頭ゟ下縮申渡、非人頭共御

縮方仕罷在候處、元祿四年未二月當御場より、御當地に罷在候乞食共江見合印有之札可相渡置旨被仰渡候に付、木札に藤内頭名前之燒印仕、乞食名前・出生歲・宗旨手印一人々々江相渡、非人頭小屋江入置、尤毎朝乞食に罷出、暮六時迄に不殘罷歸、夜中者出不申候。然處無程加藤十左衞門樣始而盜賊御改方御勤被爲成候に付、右乞食調理方一件等、御改方御役所江可申上旨被仰渡、共以來毎月晦日に、札持乞食等人數增減相調理、御改方江申上候事。

一、橋下・町家軒下に乞食病死仕候砌、私共より非人頭江申渡、非人頭罷出、其所之御役人中死體御見分之上引取、向寄三昧地江埋置、其段私共江及屆に申候。

但、癩病之乞食死骸者、前々より廣岡村領に罷在候癘癩共江申談、爲引取申候事。

一、病氣相煩候散乞食者、非人頭江引取候例是迄無御座候。右者病中食事等入用之出方無御座候故歟、前々より引請不申儀に御座候。前々散乞食、寺庵之門下等に相煩罷在、非人頭御呼出御渡可被成旨御座候儀も有之候得共、受取不申儀も有之。左樣之者は其病人江、何れ出生之者与御尋、生所申聞候得者其生所江御返し、其御支配より非人小屋江御入被遊候樣子御座候。右非人小屋入之儀、御聞屆埒明迄、右寺庵等より御相對に而非人頭手前江引取、養生爲致置呉候樣被御賴。尤養料御渡被下候儀候得者、其段御改方御役所江御達申上、三・四日之儀者引取候儀に而も可有御座哉。未左樣之例者無御座候得共、心得方御尋被遊候に付奉申上

候。

但、札持乞食之病者は、尤非人頭江引取、惣札持乞食共申談養育仕申振に御座候。

一、非人頭共廻先に而、散乞食躰見請次第、出生・名前等相尋、御國何方出生に候得共、當時宿元等無之乞食与申聞候得者、札持に仕候得共、多分何村之者に而袖乞に罷在候抔与申聞候故、强而札持にも難仕、早速居住所江罷歸候樣申談遣、別而毎月二十五日に者、改而相しらべ候所、多分前段之樣申聞。或者又乞食共江、夜中町方より粥等之施方有之、夫を申請度ため宿持之類も散乞食与申成、態与門下・橋下等に毎夜臥居候者も有之候。右等之譯に而、慥に散乞食与申儀相分り兼申候に付、毎月御改方江、散乞食之分見當不申旨、非人頭より書調上申儀に御座候事。

一、散乞食見合次第生所等相尋、若他國出生之者に候得者如何仕候哉と御尋被遊候。右他國出生之乞食罷在候得者、御當地に入込候儀不相成段申入。何れへ罷越候と相尋、上口江參り度申聞候得者、大樋町端江送り出、重而立入候儀不相成段、嚴重申渡遣候儀に御座候。右御尋に付奉申上候、以上。

天保五年午二月　　藤内頭　仁　藏

三右衛門

三月十一日。本日より金澤神護寺にて米を施行す。

〔尙志軒雜錄〕

天保四癸巳年諸國降りがちにて凶作なりと雖、奥羽・東國甚敷凶作なるに、越後の國より越中・能登の國は作少し宜敷、其よりは加州は亦宜敷、加州も大聖寺侯の御領は一段宜敷、亦越前國宜敷、次第近江國の方宜敷き也。其故九州の五穀を運送して、越後より奥羽兩國午年中救たれ共、奥羽兩州には飢たる人多く有たりと云傳ふ。加州金澤は武家衆より施行の米有、飢を救はれたり。神護寺施行米、三月十一日・二日・三日と三日に米二十石施行也。一人に白米五合づゝ、本町二町・門前町一町・地子町十七町都合二十町ゑ、一町へ札二百枚づゝ御渡、四千枚にて米二十石御渡也。

三月十三日。前田齊泰就封の暇を受く。

〔溫敬公記史料〕

三月十三日。將軍遣老中水野越前守賜休暇。世子遣松平伯耆守。將軍夫人遣長谷川能登守。贈物如例。

三月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔本多政和覺書〕

三月廿二日

一、當月十三日以上使御國江之御暇被仰出、御禮も被仰上候御樣子御書到來。各御家老中於席一列拜戴。右之趣は當月十三日上使水野越前守殿を以、御國江之御暇被仰出、白銀・御卷物御拜領、從內府樣以松平伯耆守殿御卷物御拜領、從御臺樣長谷川能登守殿を以御卷物御拜受被遊、同十五日右爲御禮御登城被遊候處、於御座ノ間御目見、御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴、御鷹・御馬御拜領。横山山城守・前田圖書御前江被召出、其上御卷物拜領、重疊難有御次第被思召候旨等也。前田初丸江も可申聞旨御端書有之。但常服之儘拜戴也。右拜戴濟而恐悅之旨各申合、初丸江も月番より被申遣拜戴被申談、若老中へは於座月番拜見被申談。

三月十五日。前田齊泰登營して阿蘭陀人の徳川家齊に謁するを觀る。

〔溫敬公御日記〕

三月十五日

一、今日阿蘭陀人御目見有之に付、御大廣間江出御に付、予部屋前通御に付而は、爲御縮と御役人一人部屋へ入被居候也。

予は前田齊泰

一、部屋前通御之節は、手を付頭を下げ、謹而罷在候。入御之節も同斷也。入御相濟と、右御役人部屋より被出候也。

一、今日阿蘭陀人登城に付、殿上之御間へ出見物いたし候。尤献上物も、大廣間板御緣にかざり有之、是も見物也。此儀先代にも、御見物有之事。且は今日紀伊殿にも見物故、予見物いたし候事。

三月廿三日。前田齊泰の子利順江戸に生まる。

〔諸事留牒〕

三月二十三日.

一、六半時過姫君樣御產御催之段、青山四左衛門より申越、常服に而早速致出席候事。

一、御住居江罷越、西新太郎殿取込に付、四郎左衛門を以御催之御機嫌相伺候事。

但、六時過之御催に而、引續御男子樣御出生被遊候由之事。

〔見聞袋群斗記〕

三月廿三日姫君樣御平產、御三男樣御誕生。御幕目御用奥村丹後守なり。

〔御家老方等諸事留〕

一、姫君樣當廿三日夜御產氣御催、六時過御安產、御男子樣御誕生、御丈夫被爲在、御兩所

樣共益御機嫌能被成御座候旨、同日發足不時立早飛脚只今到着、別紙寫兩通之通山城守より申來候に付、爲御承知相廻し申候。先御恐悅御同意御座候。依之明後日朔日御廣式𛀁御出、方々樣に御祝詞御申上可被成候。相公樣幷眞龍院樣始𛀁は、今日之日附に而來月四日出町飛脚𛀁傳附、御祝詞申上候筈に御座候間、先々御申上可被成候、以上。

三月廿九日　　長　又三郎

三月廿八日。老臣等窮民救濟の法を議し銀子献納を請ふ。

〔本多政和覺書〕

三月廿八日

一、去作不熟米價高貴に付、輕者及難儀候付、御救方之儀先達而已來御勝手方に而僉議有之、其時々何茂示談有之所、御勝手向も格別間候節故、御算用場奉行に而は、何れ所々に救候ヶ所をこしらへ候樣に成候而は、御入用も多かゝり、其上御救無之とも取續出來申者も出て來り可申候間、去作不熟ながらも他國に引競候而は結構成儀、格別餓死申處へも至り不申候間、餓死に至り可申程之者は御小屋入或は御救米等願次第御聞届に而可然。其上若願中等可及餓死程之爲、二・三千石許村々年寄等へ渡置、濟方之手當にいたし候而可然事に申聞、右之通治定也。右之通に而一統可然とも不存候得共、御算奉不會得之儀押而申渡候而は、却而其筋行

れ不申儀。何れ御歸國之上は、御算奉御指替之方可然と之存寄多分に而、此度は先其分と申事也。依而は御逼迫中之儀、年寄中御日用之外指當り入用無之銀子等所持之人々は、右御手當之方江上候而可然と之示談に而、先々江戸城州へも被申遣、御家老中江も被申談、加判無之人々は先見合候而可然と之事也。依而自分も左之通内談紙面直筆に而、今日於奥之間月番江達之。又三郎間柄之儀に候得共、全身分にかゝり候事とも譯違候故、指間有之間敷旨各被申候付右之通也。内膳は銀二十貫被上候事、先達紙面出る。又三郎は十五貫、作州は五貫目被上候事不支由。但是は未紙面等不出。

去作不熟幷米價高貴に付、下々輕者共御救方之儀御僉議有之御樣子承知仕候。依之乍少分米千俵御救御手當之方へ差上申度御座候。苦ヶ間敷哉及御内談申候、以上。

三月廿八日　本多播磨守

長　又三郎様

是月は大盡なり

三月晦日。非人小屋に收容せらるゝ者四千百餘人を算す。

［本多政和覺書］

四月五日

一、非人小屋增減

本年二月晦日の條と員數合はず

三千九百六十五人　二月晦日高
千三百五十二人　御郡送り
二十五人　雇歸り入
五　人　町方入り
〆五千三百四十七人
内八百五十八人　雇　出
四十四人　缺落人
三百十四人　死　者
殘而四千百三十一人　在人高

四月朔日。前田利順出生せしを以て七夜の祝儀を行ふ。

〔諸事留牒〕

四月朔日

一、今日御殿揃七時、のし目・上下に而出席。上使大久保加賀守殿御出宅之御附人來、御住居江藏人罷越、昌平橋御附人に而御門前江罷出、加賀守殿御上り之上直に御門前に罷在、御戻り之節平伏。夫より表御臺所御勤に付、御樂屋通り罷越、御樣子見合、組頭より往來指支不

申段申聞候に付相廻、於大書院拜領物加賀守殿被申述、毘書高木内藏頭殿御渡、御取合之事、
一、右相濟、重而御住居江罷越、內府樣等上使松平伯耆守殿御越に付、夫々御作法之通、右相濟直に從御前姫君樣江之御使相勤候處、拜領物も被仰付、右御禮申上引取候事。
一、今日御弘之趣、頭分以上へ左之通申渡。
今日御七夜御祝儀御首尾能御整被成、御出生樣御名前田龜丸殿と被稱、殿付に唱可申候。此段何茂江可申聞旨被仰出候。

四月十日。河北郡より越中今石動に輸出する魚類の取締方に關して告ぐ。

〔御郡典〕

今石動喰用之魚類甚拂底に而、御家中之人々通行等之節指支候に付、四月より九月迄、河北郡高松邊幷今濱邊より越魚之儀願書付、竹田掃部添紙面を以指出候に付、先達而詮議方之儀右江申達候處、間道より持運候儀は難相成候間、本道より持運候樣致度旨、津幡・竹橋肝煎小紙各奥書を以被指出、且本道より持運候節は見合札相渡候樣致度被申聞候に付、則詮議之上、御勝手方年寄中江も相達候上、四月より九月迄六ヶ月之間、高松邊より二荷、今濱邊より二荷、都合一ヶ月分四荷越魚之儀承屆候。仍而見合札四枚相渡候條、津幡驛肝煎共江取縮方被申渡、同驛之者共之內札相渡し置、右札持之者共高松邊等より魚買集、今石動江持運候之樣

可被申渡候。尤無札之者越魚堅取扱申間敷、右越魚今石動之外ゟは持運不申樣可被申渡候。
右六ヶ月之外は、天保二年申達置候通に候。勿論魚類金澤表拂底之節は指遣申間敷候。
一、河北郡等より越中筋ゟ越魚不相成儀に候處、近年洩魚有之躰粗相聞候に付、今度今石動之者ゟ各近邊洩魚改方申渡候條、福町村・埴生村、其餘今石動近邊之村方ゟ此段被申渡、洩魚買請不申、右躰之者見請候はゞ及斷候樣可被申渡候。猶更越魚御縮方之儀嚴重可被申渡候、以上。

四月十日　　御算用場

御郡奉行中

四月十三日。前田齊泰江戸を發して歸國の途に上る。

〔諸事留牒〕

四月十三日

一、山城守・圖書被爲召、次に藏人被爲召、今日天氣宜無事御供仕候樣御意に付、應而御請申上。九半時御供揃被仰出、無程御發、山城守御式臺敷付二疊目、藏人儀內より一疊目敷付、圖書儀御見立より直に三疊目ゟ罷出、備後守樣・駿河守樣其外御出入衆御出。夫より直に御式臺より罷出御供仕、家來供之者山庄早之助暨草履取一人御式臺前ゟ入置、刀・鞭坊主に爲持御

御供は横山藏人

式臺脇の口より指出、御門前棚外より馬上。且兼而六町目御物見過木戸出候而笠着用之事に被仰出置候得ども、御門前より勝手に着用可仕与被仰出、九半時過御發駕之事。

一、八時頃御中屋敷江御立寄に付、御中屋敷江罷出、以飯尾吉太夫御機嫌相伺候處、御のし頂戴被仰付、御意も有之。御請同人を以申上、御のし頂戴之御禮も申上候處、御つくね飯・御にしめ等頂戴被仰付、以同人御禮申上。八時過御立被遊、七時戸田川御越被遊、蕨に而御小休、六半時過大宮驛御着被遊、五時御詰に罷出、以佐藤隼人、今日益御機嫌克御發駕被遊、當驛御止宿被遊恐悦奉存候、猶更御機嫌も奉伺候段申述。且淡路守様御近習頭秋山志摩介より來狀入御覽、應而可及返書与奉存候段も申上候事。

〔横山氏覺書〕

四月十三日

蕨御小休　岡田嘉兵衛　　大宮御泊　山崎喜左衛門

一、今日四半時不遲之御供揃に而九半時御發駕、御中屋敷江御立寄、眞龍院様御對顏、無程同所御立、御下屋敷江御立寄無之、右之通御休、夜六半時過大宮驛御着被遊。藏人儀一先旅宿江罷越、五時前御夜詰罷出候事。

四月十四日

上尾御小休　林八郎右衞門　　鴻巢御中休　小池山太夫

吹上御小休　勝　龍　寺　　熊　谷　御　泊　竹井僖十郎

一、今朝六半時之御供揃に而、同刻過大宮驛御發駕、右之通御休、八時過熊谷驛江御着、御止宿被遊候。

四月十五日

深　谷　御　小　休　飯島十郎兵衞　　本庄御中休　田村左惣次

落合新町御小休　小林甚左衞門　　倉ヶ野御泊　勅使河原八左衞門

一、今朝五時之御供揃に而、同刻過熊谷驛御發駕、七時過倉ヶ野驛江御着、御止宿被遊候事。

四月十六日

高崎御小休　長　松　寺　　安中御中休　須藤内藏助

松井田御小休　松本駒之丞　　坂本御泊　佐藏甚左衞門

一、今朝五時之御供揃に而、同刻倉ヶ野驛御發駕被遊、右之通御休等有之、八時過坂本驛江御着、御止宿被遊候事。

四月十七日

はね石御小休　小池小左衞門　　輕井澤御小休　佐藤市左衞門

追分御中休　土屋市左衛門　　馬瀬口御小休　長　樂　寺

小　諸　御　泊　上田宇源次

一、今朝五時之御供揃に而、同刻頃坂本驛御發駕、右之所々御休、七半時前小諸江御着被遊候事。

四月十八日

海　野御小休　藤田傳左衛門　　上田御中休　柳　澤　太郎兵衛

鼠宿御小休　室賀八左衛門　　下戸倉御小休　宮本重郎左衛門

矢　代　御　泊　柹崎源左衛門

一、今朝六半時之御供揃に而、同刻頃小諸御發駕、右之通御休、七時過矢代驛江御着、御止宿被遊候。

四月十九日

南原村御小休　伊藤豊五郎　　丹波嶋御小休　柳　島　理　一

善光寺御中休　藤井平五郎　　あら町御小休　吉澤伴右衛門

牟禮御小休　高野九左衛門　　野　尻　御　泊　池　田　清　八

一、今朝六半時之御供揃に而、同刻頃矢代驛御發駕、右之通御休、天氣相も宜、筑摩川・犀川

無御滯御越、七半時野尻驛ゟ御止宿被遊候。

四月二十日

二俣御小休　宮本平右衞門　　關山御中休　霜島赤左衞門

荒井御小休　和田七郎左衞門　高田御泊　加賀屋與七郎

一、今朝五時之御供揃に而、同刻頃野尻驛御發駕、右之所々御休、八半時前高田ゟ御止宿被遊候。

四月廿一日

五智御小休　小林孫市　　有馬川御小休　國元近右衞門

名立御中休　名立寺　　遠崎御小休　齋藤九衞門

能生御泊　大嶋市左衞門

一、今朝七半時不遲之御供揃に而、同刻頃高田御發駕、右之所々御休被遊、八時過能生驛ゟ御着被遊候。

一、有馬川於御小休所御道中奉行申聞候は、昨夜糸魚川出火、七八歩通り右宿内橋より上ミ致燒失候旨、長濱驛迄及注進候。御泊差支候に付、今晩能生驛ゟ御止宿之儀伺之通与被仰出候に付、有馬川驛より御宿割御小將、御旅館取次之內より兩人早乘に而、能生驛ゟ指遣候旨

申聞候事。
越後糸魚川出火与見請候に付、足輕兩人飛脚申渡、出火之様子致見分、御出合次第迄罷出委曲御達可申上旨申付候間、猶口上に而御聞届可被下候、以上。

四月廿日　　伊藤甚左衛門

横山藏人様

右紙面有馬川御發駕後御途中に而相達候に付、猶更右飛脚手前相尋候處、家數六百五六十軒計燒失、尤御本陣不殘類燒仕候に付、御泊は差支候旨。外委敷儀は、通り一篇見聞之所而已に相分兼候得共、其段以雅樂助申上。右紙面も以同人上之候處、同夜能生驛に而以同人被返下。

四月廿二日

鍛冶屋敷御小休　水島彌兵衛　青海御中休　清水十右衛門

歌御小休　伊藤七右衛門　境御小休　伊藤甚左衛門

泊御泊　御宿主伊東次市右衛門忌中に付代り　新田裁許　舟見村久兵衛

一、今朝六時之御供揃に而、同刻頃能生驛御發駕、右之所々御休被遊、七半時泊驛江御着御止宿被遊候。

四月廿三日

船見御小休　山廻　長右衞門　浦山御小休　御旅屋守　榮助
三日市御中休　志摩屋仁右衞門　魚津御小休　大梅寺屋　橘藏
滑川御泊　山廻　九郎兵衞

一、今朝六半時之御供揃に而、同刻泊御發駕、右之所々御休、八半時頃滑川驛江御着被遊候事。

四月廿四日

東岩瀨御小休　御旅屋守　次郎兵衞　下村御中休　源七郎
小杉御小休　長左衞門　高岡御泊　服部傳兵衞

一、今曉七時之御供揃に而、同刻頃滑川御發駕、右之所々御休、九半時頃高岡御着御止宿被遊、追付之御供揃に而瑞龍寺江御參詣被遊、八半時前御戾被遊候。

四月廿五日

福岡御小休　長安寺　今石動御小休　權代屋六郎右衞門
俱利伽羅御小休　長樂寺　津幡御中休　御旅屋守少右衞門
森下御小休　三郎右衞門

一、今曉八時之御供揃に而、同刻頃高岡御發駕、八時御着被遊。藏人儀御供より直に御殿江

罷出、奥書院御縁頰において、旅裝束之儘坂井與右衛門を以御着之恐悅申上、御機嫌も相伺。且又御用茂無御座候はゞ退出仕度之旨、御序に相伺候樣申達候處、追付水原淸五郎を以御意有之、御用茂無御座旨就被仰出候、致退出候事。

四月十四日。盜賊の嫌疑ある者の家宅を搜索する件に關し通牒す。

〔上田舊記〕

賊疑之節家さがし一件

鹿嶋郡四柳村善三郎与申者、賊疑之趣有之、御呼出御糺被成候處、口郡小金森村四郎左衛門より種籾盜出、致所持罷在候段申顯候に付、入牢御申付置候。然處被盜主四郎左衛門に而者、善三郎無心許に付、小金森村役人申談家さがし候旨申出候に付、四郎左衛門等始夫々咎方御申付置。是迄も右樣之儀有之、御聞糺之上咎方御申付置候儀も有之候得共、御郡方において何とか申渡置候茂有之候哉、賊調理方にも指障、御縮方相立兼候間、以來之儀御承知被成度旨、委曲先達而御紙面之趣致承知。右者仕來に而、於役所に申渡置候有無者相知不申候得共、一圓家さがし爲致不申而者指支之趣も有之候間、是迄之通爲致置申度。乍去今度之儀者賊疑も相當り、村役人共不行屆趣に候間、右樣之分者致人縮置、其段相達候樣可申渡置候。依而以來其品に寄、家さがし爲致申儀に御承知置御座候樣致度候、以上。

四月十四日

菊池九右衛門

駒井丹之丞

長瀨七左衛門様

諸御郡村々賊疑之者有之節、家さがしいたし候儀は、前々何とか就被仰渡候儀も有之候哉、諸郡承り調理可申上旨被仰渡、奉得其意候。是迄被仰渡与申儀者無之候得共、賊疑敷者見分之儀有之候得者、其村役人〻相屆、村中家さがし致申儀古來流例に御座候。然處家さがし不相成事に被仰渡候而者、心得違之者共多相成、都而御縮方淀不申候哉与奉存候。別而作物之品者、時日相後候而者知兼候儀に付、右樣之品〻相當り疑敷者は、卽刻家さがし致申儀も御座候。右諸郡共同樣之趣に御座候間、猶更御詮議被成下、前々仕來之通被仰付置被下候樣仕度奉存候事。

午四月　　諸郡

四月二十日。先に雲田忠太夫を殺害したる山本孫三郎の無罪たるべきを議す。

〔本多政和覺書〕

四月七日

天保四年十二月廿九日の條參照

口書箇條等皆原本に之を錄せず

坂井小左衛門は山本次太夫の組頭

一、公事場奉行青木新兵衛於別席申聞候は、山本次太夫弟孫三郎、藤田左衛門家來雲田忠太夫を及殺害候に付、同人妻より願之趣に付、夫々於公事場相糺候處、別紙口書之通之旨に而、口書出之。右に付山本次太夫・孫三郎等手前御尋無御座而は、再往糺方指閊申候間、別紙口書共御披見之上、次太夫・孫三郎手前之儀被遂御僉議候様仕度旨申聞、箇條書も出之。此趣に而頭ゟ御尋、口上書御渡御座候はゞ、夫を以再往相糺可申旨等申聞、委曲紙面も出之。

次太夫等手前尋候覺書等、十九日比坂井小左衛門へ渡す。二十一日口書等出之、廿九日公事場奉行有賀ゟ口書等渡す。

四月二十日

一、坂井小左衛門・太田小又助別席に而、山本次太夫等尋候口上書等三品出之。此趣に而は兩人手前得と相分居候。其内忠太夫より借用銀之儀、檢使所に而は二十貫目と申述候得共、其節之申述方荒目に而、次太夫借用之分は十貫目計に候得共、右孫三郎より調達いたし、前田清八等へ貸遣候分を合候得ば二十貫と成候事に御座候。然處檢使前に而は一通り二十貫と申述、少相違仕候。且孫三郎印形を山本左次馬名下に押有之候は、左次馬印章失念之節、何も承知之上貸遣候譯に而、此處少行屆不申儀に御座候。山本中務と左次馬と印章同樣に相見え候は、次太夫・孫三郎共如何之譯に候哉承知不仕由申聞候。但近頃中務多病に成候付、勝手方

之儀も都而左次馬取扱候様子に御座候。左様之譯に而、同印を用哉とも被相察候。且小又助より申聞候は、右孫三郎等申分に而は、能相分候様に候得共、元來調達一件より出候事故、孫三郎等申分通りには有之間敷様に誰とても被察申事に御座候。小又助も最初共處懸念有之、其砌段々得と孫三郎手前承候處、實に無據時宜、法外雜言等無餘儀及切害候旨に御座候。孫三郎平日至而德實之人品に而、殺生抔も不仕、申さば虫一つも殺不申様之人品に御座候。左候得ば右及切害候は誠に無據儀と被察候。此度忠太夫後家より願書一件も、外より内々承候處に而は、全企事之由に御座候。尤理非明白之儀に而、孫三郎等手前御咎等被仰付候儀は左も可有之候得共、其處不惜して輕御咎方共有之候而は、彼一人に不限、諸士一統泥み可相成候間、今度孫三郎等手前之事何分御寛宥之御取扱御座候様仕度旨等段々申聞。

四月廿四日。前田齊廣の子延之助の病疱瘡と決す。

〔官私隨筆〕

四月廿四日

一、延之助殿當廿二日より御發熱之處、今朝御醫者中診之上御疱瘡御治定、尤御順症に被爲在候旨角尾孫兵衞申聞候。依之金谷御廣式へ罷出、御機嫌相伺候様にと御用番より被申越。夕七時過罷出、以寺西庄兵衞御機嫌相伺退出。

但、最初御熱勢は餘程强く被成御座候處、今朝より御さめ被成、御面部に三十計御見点有之旨。御食も相應に御參り被成、御はなし抔も有之、御順症之由。此樣子に候はゞ御數御發しも有之間敷旨也。

四月廿四日。郡方に疫疾流行するを以て醫師を派遣するの當否を議せしむ。

〔本多政和覺書〕

四月二十四日

一、三州御郡方村々疫病、此節以之外流行之體に付、先年御醫者被遣候儀も有之由に申聞候。舊記等調理見候得共不見當。明和中歟御醫者被遣候御噂有之、御算奉行遂詮議候所、却而迷惑之旨等申聞、人々宅に而藥を調合被遣候事に相成候由見え候。御醫者被遣候儀、席帳面には見得不申候得共、被遣候儀は慥に有之由丹州咄之趣も有之。何れ先例者如何ともあれ、被遣候方可然と各示談之上、今日御算用場奉行堀孫左衛門へ別席に而逢、此節御郡方疫病專致流行候由に候。往古御醫者被遣候儀も有之體に候間、此度も被遣可然と各遂示談候。但明和中歟、右被遣候儀詮議有之候處、却而御郡方迷惑之體も有之由。各先役より申聞有之樣に見得候。夫も致方により迷惑不致樣之事も可有之候間、得と遂詮議被申聞候樣申含。

本年五月九日の條參照

〔本多政和覺書〕

四月廿六日

一、御郡奉行吉田兵馬・淺加伊織罷出、此間御算用場奉行迄被仰渡候、御郡方疫病滯候者多候に付、御醫者被遣候儀御詮議被仰聞候。右に付僉議之趣、御算用場奉行被申談候に付罷出候。御内別席に而逢申度旨以執筆申聞候付、逢候處、右被仰渡之儀私共に而も誠に難有奉存候。御内詮議之儀に候得共、私共切にも何とも六箇敷故、御郡年寄之内へ内々詮議仕候處、迚も人多之儀、一々診察仕候事も出來ざる儀に候間、難有思召之譯に候間、一統へ右思召之趣爲申聞、診察致もらひ度村々ゟは御醫者中被罷越、難澁等に而御醫者被罷越候而も泊り被申候儀等六箇敷村は、藥を調合被渡候と歟、或は村々等之醫者にかゝり藥代御渡と歟に成候樣仕度旨申聞候得共、左候而は御趣意にも違事故、猶又私共詮議之趣は、右之通山入之村々等に而は、御醫者之居處も無樣之儀も可有之、其上一々診察と申は六箇敷儀に候間、乃至申さば私ども御郡廻之如く、一郡に二・三人程被仰渡、是も村々毎に廻り候而は急に廻り盡申間敷に付、大體之處を廻り、村に依而診察いたしもらひ度村へは罷越、左樣之儀も六箇敷村へは、村之内之者二・三里と歟罷出、樣子等申達、藥を合相渡はゞ可然。金澤に而藥を合渡候よりは、大體其邊之病體も知申儀、旁加樣之譯に而可然と奉存候。且御醫者罷越候儀に候はゞ、

何分寺社奉行より格別に申渡有之、申さば行歩に罷越候程之事輕に而、診察等有之候樣被仰渡候樣仕度。無左而は村方迷惑之儀に候旨等、段々口上に而申聞、猶更可遂僉議旨申入。

一、昨日御郡奉行より申聞候趣に付、先御醫者手前之儀遂詮議可然と、何も示談之上、寺社奉行品川左門呼出、別席に而逢、當時御郡方に疫病殊之外流行に付、御醫者可被遣儀、御郡奉行ゟ遂詮議候處、一村々々に相廻候樣に有之候而は、迚も御醫者數人出不申而は成申間敷、其上日合もかゝり候儀等に付、先申さば私ども御郡廻り之如き道筋に而相廻り候はゞ、先一郡三人許有之候はゞ可然旨等申聞候。依而御醫者之內一郡三人許之圖りに而、三州ゟ被遣人高可有之哉、猶更相撰可被申聞。夫に付罷越候御醫者治定之上は、猶更心得方可申入候得共、先申さば至而事輕に心得、行步罷越候同樣に而無之而は、迚も下々に於而も及迷惑候儀に候間、先加樣之かさ高に無之心得之人品に而無之而は成間敷候間、此處得と申合人撰可有之、左樣無之而は、格別之御仁惠を以被仰付候御趣意も立兼、却而下々及迷惑候間、其處得と遂詮議候樣申入。

四月廿五日。前田齊泰金澤城に歸着す。

〔諸事要用雜記〕

四月廿五日

御供は横山藏人

昨夜高岡驛御止宿、今曉八時之御供揃に而、同刻同驛御發駕被遊、所々御休。大樋御付人に而、表御式臺ゟ何茂罷出候。五時益御機嫌能御着城被遊、敷付御左之方ゟ御近習頭大野織人・配膳役荒木津太夫、御右之方へ奥御取次篠島久左衛門罷出。御玄關より若年寄富田外記御先立、鏡板ゟ御城代美作守殿幷御家老等罷出、御意有之。夫より虎之御間横御廊下ゟ武田坦齋等罷出、其外前々之通。蔦之御間御廊下御奥書院之方より四疊ゟ、眞龍院様御附使者大嶋忠太夫・御奏者河村、同二疊目ゟ姫君様御使者神田一平・御奏者有澤、御會釋有之。御居間書院三之間より山口清太夫御先立、御居間ゟ被爲入御着座之上、御のし配膳役荒木上る。夫より御留守に罷在候將監・清太夫・保左衛門被爲召、畢而同御近習頭與右衛門等幷隱居之人々二切、御意有之。夫より御供之同席雅樂助・善右衛門一切、五兵衛等一切。相濟、御旅裝束之儘御奥ゟ御入、無程御出、年寄中等御着之恐悅御近習頭を以申上候上に而、追付被爲召旨被仰出、右御裝束之儘御居間書院ゟ御出、年寄中等四切に被爲召、相濟御入被遊候事。

〔諸事留牒〕

四月二十五日

一、八時御供揃に而高岡御發駕、森下より御馬上、八時御着城。御供に而直に御殿ゟ罷出、以坂井与右衛門恐悅、且御機嫌も相伺、御用も無御座候はゞ退出仕度旨申上候處、以水原清

五郎御意、且御用無之段被仰出。

四月廿九日。非人小屋に收容せらるゝもの三千三百餘人を算す。

〔諸事留帳〕

一、非人小屋在人高等左之通。

覺

一、四千百三十一人　午三月晦日在人高

一、四百二十三人　午四月朔日より同廿九日迄御頭方之者送り入人

一、九　人　右同斷町方之者送り入人

一、二百九十一人　右同斷町・在之者奉公幷五十日雇歸り入人

一、五　人　右同斷於御小屋出生人

〆四千八百五十九人

内六百八十一人　午四月朔日より同廿九日迄町・在之者奉公幷五十日雇出入

百二十六人　右同斷欠落人

七百五十二人　右同斷死去人

殘而三千三百人　午四月廿九日在人高

右之通御座候、以上。

午四月廿九日　　　　非人小屋裁許六人　判

四月。能登口郡の窮民を救助せんことを出願す。

〔眞館覺書〕

覺

一、二萬二千三百二十軒　　口郡惣家數

此人數

十一萬四千百十八人

外

七十二人　　座頭

八十五人　　瞽女

一人　　舞々

〆十一萬四千二百七十五人

内

九萬千四百二十二人　　指除

二萬二千八百五十三人　　極困窮者御救奉願候

此御救米

千七百十三石九斗七升五合

但一人一日一合五勺宛　　日數五十日分

右羽咋・鹿嶋兩御郡近年打續作体不宜、連々難澁に陷、小前之者共葛根を初草之根等是迄掘盡日用相送候處、去年之不順氣作難に而、畠物迄も無類取劣に相成、重々御取扱も被下候得共、去暮御收納透米過分相立、手に懸候程之品者賣爲拂、色々方便等を以漸表向之筋相立、冬越仕候族に而、高貴至極之米穀買續候處、何分致方無之、中に者飢に及び候爲躰之者茂御座候に付、去暮已來組切に可也之者共に粥を爲焚、且施米等も仕、村役人中も重々相働、私共手前に而も種々取扱を以、此頃迄取續せ候族に御座候。乞食幷座頭・瞽女等在々物貰に歩行候得共、施候者も無御座及飢候段歎出、不便至極に奉存候。就夫先達而御詮議之上、粥米被仰付候得共、一時に爲給候儀も難相成、御米何分貯置、行倒候程之者有之節、詮議之上爲給申儀に談置候。依而御當節重々恐入奉り候得共、追々御助小屋入奉願候者指除、其餘極困窮之者共撰立、重々詮議仕詰、先夏に取付候迄之凡日數五十日分相圖、前段之通御救米奉願上候間、御慈悲之上格別之御詮議を以被仰付候樣、連名小紙を以奉願上候、以上。

午四月　　　　　　　　　　　　　　高橋由五郎等八人

御郡御奉行所

五月二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

五月二日

一、今日九半時御供揃に而兩學校ゟ御出被仰出、八時過御出、同半時御戻り、御供水原・渡邊又作・庄田牛之助。

五月四日。越前府中の本多内藏助將に領内を通過せんとするを以てその待遇に關し通牒す。

〔國事雜抄〕

松平越前守殿家來本多内藏助、當春爲御目見江戸表ゟ罷越。歸路之節、北陸道通り通行に付、御領分罷通候旨に而、別紙寫之通り御用番年寄中被相渡候條、被得其意、先規之通可被相心得候、以上。

五月四日　　　　　　　　　　　　　　御算用場

遠所奉行連名殿

以手紙致啓上候。暖和に相成候處、彌御安全被成御勤珍重奉存候。然者越前守家來本多内藏助、當春爲御目見出府仕、歸路之節北陸道通行仕候に付、先規之通境川御關所駕籠に而罷通候間、其節指支無之樣共御向江御達置被下候樣奉願候。且又右之節御城下道筋掃除等幷御馳走被仰付候に付、爲御禮内藏助より御町奉行中迄使者指出候先格に御座候間、是又宜御達置被下、猶延享・寛政之度之例別紙に認指上申候間、宜御取計可被下候。右爲可得御意御座候、以上。

三月八日

大道寺七左衞門

山田藤兵衞

不破文左衞門樣

澤田主馬樣

富永左膳樣

覺

一、延享三寅五月北陸道歸邑、金澤表通行之節、人馬掃除等御馳走之爲御禮、其節之御町奉行稻垣與三右衞門殿迄、先格之通使者指出申候。

一、寛政十二申五月北陸道歸邑同斷之節、格別之御馳走被仰付候に付、先格之通、其節之御

形合本の儘

伊藤甚左衞門は境關所の奉行

右等御様子

町奉行迄爲御禮使者可指出段、問屋方迄懸合申候處、其御許様御舊記燒失故、御取扱振不相分候間、先規之通使者指出候趣に御記錄にも御記可被成候、以後之形合に指支無之旨御斷に而相濟申候。

右別紙之寫也。

松平越前守様御家老本多內藏助上下三百七十人、當十六日境御關所ゟ相向、駕籠戸開乘輿之儘に而、從者者下馬下乘かぶり物取、作法能通行相濟申候に付、此段御屆申上候、以上。

午六月十七日　　伊藤甚左衞門

長又三郎様

五月五日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤に宿す。

〔官私隨筆〕

五月六日

一、備後守様御歸邑、一昨夜高岡御泊、昨日此表へ御着、今日御登城之筈に候間、五時頃登城可仕旨昨日於御城御用番より申談に付、五つ打出宅登城。各よりは早き方也。一兩輩ならでいまだ不被出也。御役人揃は六半之由。

〔官私隨筆〕

右等御様子に付、今の備後守様御登城之儀御斷被仰進候也。

は延之助病態の事に係る

〔諸事要用雜記〕

五月六日

一、備後守様御登城、何茂相揃五時過、御先詰大野才記儀も參り候處、御前少々御勝れ不被爲在、御對顏も不被爲成に付、御登城御指留被仰進、右之通圭付御近習頭より申上候事。

一、右者延之助殿昨日より御差引被爲在、不輕御症に付右御對顏も不被爲成候事。

五月七日。前田齊廣の子延之助歿す。

〔官私隨筆〕

五月六日

一、延之助殿御疱瘡、御順症に而昨日より御かせ之御日圖り之處、一昨日頃よりとかくだら〳〵と御寢被成、御おこし申候而もはきと御目覺無之、御惣身御瘦被成候樣なる御樣子に而、御藥なども上りかね候由。御食事は一昨日餘りよく御寢被成候故、晝頃坦齋伺候而御おこし申、御膳上げ候處二椀餘上り、夫より又御睡り、今日迄直に御睡り被成候。夜前スポイト上候處御通じ有之候へども、夫に而も御替りなく候由。御藥菱實蓮荛散上居候へども、右等御樣子に付昨夜涼膈散加石膏、御兼用に紫雪を上候へども、御藥法を定め候計に而御咽へ通り不申候故何之詮も無之由。御療養は石黑玄丈執匕、其外御醫者中誰彼伺候へども、何も合点

之參らぬ御症とのみに而、何を目當に御藥可上樣も無之躰之旨。

〔本多政和覺書〕

五月六日

一、延之助殿御痘中御不例被爲在候旨、月番江雅樂助より申聞候付、各も罷出承候樣にと、月番被申候に付罷出承候。右雅樂助申聞之趣は、延之助殿御容子、誠に並々無之程輕御痘被爲在候處、一昨日江間篁齋晝九半時頃に候哉伺に出候處、未御休み被遊候に付、女中等江尋候處、今朝より御目覺申上候得共、一向御目覺不被遊旨に付、篁齋等より段々申上候處、御目覺被遊、御飯三椀不足被召上候。御食味伺候處、被爲替候儀も無之旨被仰に付、餘り長御休御膳も不召上而は、不御宜候間、隨分御晝成り候樣申上候處、御晝成被遊、御書物三十枚計御覽被成候に付、左樣に長御覽は不御宜旨、篁齋等より申上、御書物御止め被遊候と、又候眠り被遊。昨朝も急に御目覺無之、段々申上御晝成被成、御飯二椀計被召上候。右長御眠之儀、外に被爲替候儀も無之候得共、合點不參事故、丸山了悅・大場探玄・二木順孝・森快安とやら伺候處、何故存寄無之御症之儀、何共被名付難き由申候。了悅は、御痘格別之事に而も不被爲在候得共、右之御疲に而可有之旨申上、先其分に而御藥指上候。右御飯後又候御眠、夕方に至り候而も御目覺無之、此時は何度申上候而も不御晝成に付、外御醫者及城州醫者津

田隨分齋・初丸醫者遠田元準伺被仰付候處、何茂御難症之旨申上、何之御症とも難名付、此迄か樣之症は見不申由申聞候。依而段々僉議之上、御休被成候を御抱申上、御藥指上候處、少々御返し被遊候御樣子に候得共、御むせ被遊、御難儀さうに見上申候。併御氣之付候樣之儀は無之、御鼻より香さん之藥等差上候得共、一向御應無之、何共恐入候御樣子に候。今朝も丹州醫者片山君平・町醫師山本文玄齋・本多勘解由醫師高島大膳等伺候へ共、替案無之旨等段々と申聞。

〔官私隨筆〕

五月七日

一、延之助殿御疱瘡之處御養生不被爲叶、實は昨夜九過頃御死去候由。今未之上刻御死去被成候段、山口清太夫を以被仰出候。依之御機嫌相伺候樣にと之趣、八時過頃御用番より被申越候付追付罷出。

一、普請は今日より當九日迄三日、鳴物・諸殺生等は當月廿六日迄御忌中日數遠慮可仕旨。且又頭分以上之面々爲伺御機嫌、明八日九時過登城之儀一統觸之寫暮前到來。

〔官私隨筆〕

五月九日

一、延之助殿御戒名以添紙面被申越候如左。

賢良院殿文雉延明居士　神位

前田延之助行狀

〔賢良公子御夜話〕

賢良院樣常々御意被遊候は、聖賢と稱する人之言語文章記錄に載する所、人の規則たる事はとかく論するに及ばす。只怪むべきは、高名の人著す所の書籍怪談尤多く、詐僞の說たる事明なる事共を公然と記し置けり。是唐土の人の氣風なるかと每度御意有之。文政四年格別御省略之被仰出あれ共、賢良院樣御側廻りは、元來御質素を御好被遊候に付、御省略可被成も無之、殊更御十四歲之御時なれば、此等之趣申上る人もなき處に、其刻より御表にて御燭臺二本相立候を、每度御自身に一つは御消被遊候。御側之者ともし候得共、又御消被遊、度々に及で御燭臺一つに而御宜き段御意被遊候。また御奧に而は御燭臺必至と御止被遊、御表と違ひ御奧に而は細かき御調筆等も不被遊候間、御燭臺に不被及候段何事にもさわらぬ御意有之。御心中に而は、專ら御省略之御趣意を御守り被遊、御意には御出し不被遊候事、誠に難有事也と何も奉感候。御八・九歲之御頃なりけん、二之御丸御居間前之せまき御泉水に而、御なぐさみに小さき板舟二つ御拵、豆人形御乘御流し御あそびの內、一つの板舟水のよどみに

文政は天保なるべし

十四は十三なるべし

かゝり、已に覆んとしける時、急に御走り、其まゝ右舟を御取上被遊候。其時又一つの板舟も彼よどみにかゝり候に付、御抱守安見方六急ぎとり上んとしければ、御とゞめ被遊、方六其舟には人は乗らぬぞと御意被遊候由。かりそめの御遊戯之内なれ共、人にかたどりたる物の乗たる舟と、人形の乗ぬ舟とを御辨別被遊、御自身御救ひ上被遊候事、並々の御心意氣には有間敷なりと申合へり。

常々御咄申上る刻、御先代様之御事に及候得ば、何となく御座を御改被遊、御恭敬之心目立ず御容躰にあらはれ候事。

御咄之内、古今之名將奇策智謀之事共申上候得共、毎も格別御感心之躰に見えさせられず。只太閤秀吉公の事のみ殊の外御感心に而、眞の英雄と申は太閤の事ならんと、毎度御意被遊候事。

常に御意被遊候は、日本程調寶の國は是なからん。信濃・上野などは格別、其他大躰山海の便りよく、鹽あり、薪あり、五穀さへ豊饒なる時は此上もなき便利の國土也。唐土は地方廣大なれば、魚鹽の便り通せず、却而不自由の國也。是に依而人皆肉食せざる事あたはず。然ば日本に而肉食せざるは、風土自然の道理ならんか。又日本の假名程調寶なるものはなし。いかほど下賤文盲の者に而も、四十七字をならひ覺れば、日用の事は云に及ばず、大抵の書籍

中は宙なるべし

も假名にて讀るものなれば、學文にも甚便り宜し。唐土は假名無れば、一字々々音訓の審に通ぜざれば、昔の事も通じがたし。是も日本の唐土より宜き事なり。

御近邊の者若し痛所等有之、御遊之御相手迷惑に奉存候容子など早く御察し被遊、何となく其日は走り廻りする御遊は不被遊、御靜に御物語等に而、其者退出後御遊毎茂の通り被遊候。痛所など有之者、其日の御相手いたし迷惑に奉存る心中御察被爲在而之事と、何も難有奉存候事。

平生御讀書を御好被遊、御目覺より御朝御膳、及び御髮上候間迄も御書籍御目を放たれず。處々に御不審紙を附させられ、不斷御書拔被遊、品により御側の者にも被仰付候。又珍敷鳥獸など御覽に入候者有時は、必御自身に毛色形ち等御寫被遊、本艸綱目の拾遺御編集之御思召と奉察候。凡何之書と云に寄らず、すら〳〵と一通り御讀被遊、或は半程にて餘の書拔に御移り被遊事も有之、一向御意を御留被遊御容子とは不奉見候得共、大抵一返御覽被遊候。書籍は大方中に御覺被遊候。殊に奉怪事は、御書見之半或は御調筆又は御咄之間にても、不圖御立被遊、御走り廻りの御遊に相成、或は御庭へ御出、御なぐさみなど有之候而、又本の通り御書見・御調筆・御咄等を最前之跡御次被遊候に、御書見・御調筆は御自身の御覺故御容子不奉伺候へ共、御咄之儀は半分御聞指、或は御意の半など引續き御咄被遊候に、御側之者

はしかと何方迄と申事覺束なしといへ共、御自身には歴々と御覺被遊候事御平生也。惣躰物毎に御執着之儀少も無之、甚御サクキ事前條之通也。是御工夫之趣にやと奉察候事。

左傳御讀被遊候刻、初而見ゆる人物は必ず善き人か惡き人かと御尋被遊候。或時初め善き人と見ゆる人後に惡事あり、初惡き人後に善事あるを御不審に而、金谷多門に御尋被遊けるに、多門申上候は、是皆一藝一能の人物に候故、心術は取に足らず。此に依而初は君に忠ある人も終に反き、初め不義の行ある人も後は功名を立るなど、盡く心志に始終の守り無之故と奉存候。始終を通じて誤りなきは、則ち聖賢と賞する人のみに候はんと申上げるに、如何思召けん重而何の御意も不被遊候事。

或時二之御丸御廣式より、夜更て御歸舘之後、種々御咄之時、御懷中より小菊とぢの小冊一本御取出し、是見よと御意被遊しかば、いづれも打より拜見仕りしに、山海名品闘(クラベ)記とか題號ありて、猿と猩々と己れ〳〵が住所の品物土産を比べ合、論辨するさま甚面白かりし。拜見終りて山口常三郎に淨書被仰付ぬ。後にきけば御廣式にて御なぐさみの御著述被遊しとぞ。淨書出來上りし後、重て御廣式に御持參被遊、其後御居宅の御表にはなかりき。

又或時同じく夜中御歸舘御咄被遊候は、重の内にも國が二ヶ國とありしに、蓋とればいがともにある丹波栗、又屋根の上にも帆が見ゆる也とあるに、龍宮の上で鹽干の沖の松（五文字覺不備。）と御

つけ被遊し。御意のやうは、御自身に御つけ被遊候樣うけたまはりぬ。御自作の事、其後たしかにもきかず。

天保四年の大晦日泊り御番せし時、予三十九歲なりしかば、御奥御入の間休息してありし内、明れば四十歲になる事など人々とはなし合、諺の花てふ年も今夜にて明れは登る老の初坂、と口ずさみ笑興しけるが、ある人此腰折を御耳に入しかば、御笑ありて、折ふしは予が事を初坂々々と召れ候而、御きさくにおはしければ、かゝる御戯言たび〳〵ありぬ。

毎日御用の御硯箱餘り見苦しく相成候に付、御守の人々相談の上新に御出來の事奉窺しかば、ともかくもの御意なりしかば、御好みの儀も無御座候はゞと伺上候へば、御自身に御繪ひき被遊、御引出一つあるのみにて餘り風流なき御好ゆゑ、塗色金具にても吟味して奉上ると相議せしに、其翌日御意被遊候て、硯箱塗は古き分の通にてよろし、金具品々御覽に入候樣被仰出候に付、種々取寄入御覽候處、甚粗末なる品御えり出し、此分打候樣にと御意ゆゑ、無是非其分にて出來奉上候しに、餘り御質朴の御硯箱なれば、御近習の子どもなど笑ふ者もありける。

毎度御書被遊候內、殊に鳥を被遊候。百鶴の圖も御出來、烏三十ばかり種々變態御ゑがき遊し候事もあり。或時は花鳥の圖甚御世話被遊、彩色もきれいに出來上り、何も拜見被仰付皆

奉感。拜見すむとそのまゝ大筆にてべた〳〵とあらぬ御ざれがき被遊、是はと驚き、惜しき事と思はぬ人なし。其様子御覽ありて、いつも御きげんよく、事の外御笑ひ被遊れける事度々なり。

謎解物、團扇の判じ物、或は智恵の板など御好被遊、はやく御さとり被遊事奇妙なり。それゆゑ判じ物の類とけかぬる品あれば、御覽に入て初てわかる事度々なりし。

御馬術御稽古に、明石數右衛門と言へる御馬役組外二百石罷出しに、此人酒ずきにてある上、顏色甚赤かりしかば、或時姓名ともに能つけたり。彼は赤し顏右衛門なりと御意ありて、大に御笑被遊し。

御生質御記臆拔群に勝させられ、常に三才圖會を能く御覽被遊候ひしが、大抵何の事は何册目何丁目表裏に有之と申事迄覺被遊候。

御著述九仙山志一回を以て一卷とす。合て三十六卷、天保五年九月二十七日淨書成る。假裝して十七册と成。御草稿合本三册共、以御廣式頭野村勘兵衛奉上す、御草稿中往々御筆の條あり。又御添削の御筆跡最も多きに付箱に納む。同月下旬關屋平馬頭並御近習詰重て御渡の處、其節表裝合本七册に相成御箱入也。表題七枚御渡、書名幷秦楚齊燕趙韓魏一册毎符號相調候樣被仰付。表題御箱に九仙山志と調、御箱裏には賢良院殿御十三歲御著述と相調候樣被

五年は四年なるべし

仰出、同人を以て奉上。最題號表裏共御好み、見本御渡也。
九仙山志御著述の御主意、羅貫中が水滸傳御一覽の後度々御意被遊候は、水滸傳奇書也と雖も、結局甚だ寂寞にして看者をして心情悵然たらしむ。元來假設作意の書にして、終は却て眞境に迫る。此に至て興趣を失ふこと惜むべきことなりとて、是より九仙山志の御結構あり。此書六々の數に始り、九々の數に終る。六々三十六人は陰數なり、九々八十一人は陽數なり。是其初め合て一百十七人の豪傑、九仙山の謫仙下界に下るの緣故、何有道人獨り是を知る。是共初め假說實なき根元を含み、其後群豪海内に横行し、禀性の厚薄善惡に依て行跡萬般なれども、終に合同一致して撥亂反正の大功を建て、功成名遂げて再ひ九仙山に歸會し、前過を償ひ安民の功德を以し、俱に皆登天し去る。是其終を假設實なきに結び、終始茫々たり。但存する處は群雄賢愚明駿勇怯淸濁其人各窮厄達榮得意困辱千變萬化、善行或は禍を免れず、惡行或福を得る世態齷齪の眞境理外の理を摸す處、賢良公子の御主意にして、深慮遠智凡ならざる處にして、此書の大意なり。
賢良公子御易簀の前々日御前に召されて、色々御話など申上る內、多門々々と御意ありて、閹人とは皆陰莖を斷たる者かと仰せに付、いかにも御意の通りに候旨御請申上、程なく御前を退きぬ。其後思めぐらせば、此御言葉獲麟の絕筆にひとしく、御永訣の一句となれり。陽

根は男子の元根、閹人は幽閉の義なり。陽元を斷幽晴の義を御意ある事、突然御平生に不奉似、御意も多かるべきにかゝることを仰せありしこと、更に不祥讖語かと思はれて、いとゞ腸を斷つことになりぬ。

右亡父金谷多門の筆記する處にして、亡父は賢良公子の御抱守を勤仕せり。故に此書を述作せりと雖ども、眞の艸稿にして猶ほ稿を脱せざるに似たり。可考。

金谷　孔彰謹記

本年四月廿四日の條參照

五月九日。疫病流行するを以て諸郡に醫師を派遣すべきことを告ぐ。

〔御用儀品々留帳〕

一、天保四年不作之後、翌年御領國一統疫病流行、困窮人藥用方行屆申間敷与之御詮議に而、諸郡江御醫者御指向施藥可被仰付旨、御席より同五年五月御郡奉行迄被仰渡。仍而御郡奉行より御醫者被指向候間、郡々宿立・町立等之ヶ所に而御醫者止宿爲仕、泊所等向寄之村方病人指出、御藥頂戴爲仕可申。病人泊所等江罷出兼候歟、或者村中病人多之分者、其樣子村役人より御醫者方江罷越申述、其村方江御醫者相招き可申旨。

一、疫病に不限、何病氣に而も療養相願可申旨。

一、今般御醫者御指向之儀者、第一困窮人江御施藥被仰付候儀に候得ども、身元宜敷者に而

も療養御藥可被仰付、尤身元宜敷者に候はゞ藥禮仕候儀勝手次第。藥禮仕候儀に候はゞ御醫者江直に指遣可申旨。

一、藤内等人非之者相煩、御藥相願候はゞ、其病氣之樣子村役人より御醫者江相達、御藥は申請相渡可申候。人非之者診察相願候儀者出來不申旨。

一、今般御藥頂戴仕候分、藥數追而書上可申旨被仰渡、右書上左に記。尤身元宜者より藥禮仕候分者、藥數書上不申事。

右諸郡江御指向御醫者名前左に記。

能美郡　關玄迪　　石川郡　加來元貞　魚住恭菴

河北郡　池田三同　堀周庵　　口郡　築田耕雲　松田常安

奥郡　有澤良貞　　礪波郡　不破文中　黑川元良

射水郡　道田道仙　河合善庵　　新川郡　中村文安　今井昌軒

〆

右三州御郡方疫病療養御醫者被遣候旨、御用番前田美作守殿被申聞、御醫者發足之儀者各承合候樣申渡候條、爲御承知申達候、以上。

五月九日　　　　　　　　　　前田式部

御郡奉行中

〔諸事留帳〕

五月十六日

一、三州御郡方へ疫病多流行に付、爲療養御醫者被下候儀御僉議之上、當月上旬御治定、各被遣候御醫者郡分名書御郡奉行より爲披見出之、寺社奉行紙面を以左に記。

但追々當病等有之指替り之分頭書に記置候事。

能美郡		關玄迪
石川郡		賀來玄貞 魚住恭菴
河北郡	因庵代小川玄澤せがれ小川善德儀御雇御用に而罷越	池田三同 堀因庵
口郡	耕雲代白崎玄令弟白崎玄正儀同斷玄正儀御郡方廻行中病氣に而罷歸に付爲代河合善庵罷越	築田耕雲 松田常安
奥郡		有澤良貞
礪波郡		不破文中 黑川元良
射水郡	河合病氣に付代小瀨貞安	藤田道仙 河合善庵

新川郡　中村文安
　　　　今井昌軒

一、右御醫者一人江中勘銀一貫五百目宛御貸渡罷越候事。且御扶持方等請取不申、右中勘銀に而追而指引いたし候筈之事。

〔明忘錄〕

五月十一日

一、今日俄呼出に付罷出候處、御用番初年寄中何れも別席列座に而被申聞候者、今般御郡方疫病流行に付御醫者之內被遣候儀、此間申談候通之處、猶更何茂罷越候もの共御趣意會得不致而者、先々却而迷惑之筋も可有之、兎角下人多召連候而は、何かと御郡之もの共難澁之儀も有之躰に付、誠に人々行步に罷越樣之心得に而可罷越。兎角公事場懸醫者抔罷越候躰に相成候而は、御趣意相違に候。元來御仁惠を以被遣候儀に候得共、下々民百姓難澁之儀有之候而者不本意儀候條、此處与得可申談被申聞、委曲承知仕、先達作州殿より申談有之、一昨日夫々御郡へ指向御醫師心得方申渡候處、致會得、小者と申者漸一人、手籠等荷物之品は宿繼に而罷越候圖。尤かさ高樣之儀無之と存候得共、御申談之儀にも候間、今明日之內呼出會得方可申談と申達候。

〔溫敬公記史料〕

五月十六日三州郡部疫病大行。爲療養發醫。能美郡奥郡各一人。石川河北口礪波射水新川各二人。毎一人貸一貫五百目。

〔溫敬公記史料〕

六月十一日。嚮所遣醫員罷還。公命老臣召醫問疫狀。

五月十一日。非人小屋に收容せらるゝ者の保護を充分ならしむべきを命ず。

〔毎日帳書拔〕

五月十一日

非人小屋人高しらべ増減之屆、近例不入御覽候得共、去秋以來入人高多、例年ゟ違候間入御覽可申ゟ示談之上入御覽候處、死人等多御不便に被思召候。猶更無油斷遂僉議候樣被仰出。

〔毎日帳書拔〕

五月十二日

一、非人小屋裁許與力、是迄仕來に而邂逅小屋筋相廻候由に候得共、去年以來小屋入之者多、近頃疫病に而死人夥敷由に候間、當分は日々相廻候樣可申渡。向後之儀も間遠に無之樣廻り方之儀、猶更追々遂僉議可申聞旨、御算用場奉行へ申渡候事。

同席中は年寄中

五月十五日。老臣等窮民救濟の爲米・銀を獻納すべきことを通牒す。

〔官私隨筆〕

五月十五日

一、左之趣御用番演述。

去年違作に付米價貴、下々及困窮候處、御勝手御逼迫至極御取扱方も不被爲行屆に付、何も示談之上、同席中・御家老中等より銘々手繰次第、米・銀等之内御扱方爲御手當差上候筈に候間、御志次第御差上被成候樣にと存候事。

五月十五日。非人小屋に死體を求むる大犬あるを以て之を銃殺することを命ず。

〔每日帳書拔〕

五月十一日

一、非人小屋死人埋候所へ、大犬多付候に付おどし打之儀、割場附足輕每夜遣、玉込無之爲打拂候樣可申渡旨、伺之通被仰出。延之助殿御卒去御勝中也。爲打捕候儀に而は無之に付、大組御持方足輕ゟ申渡儀に而も有之間敷旨也。

塗箱は土箱なるべし

五月十五日

一、前に記非人小屋大犬連夜夥敷様子に付、此節之儀に候得共、爲打捕候様可申渡と奉存旨窺、窺之通被仰出。

〔故紙雑鈔〕

天保四年諸國飢饉なりしかども、御國は餘國に比ぶれば荒政の御取扱方被爲行届、引免等も被仰出、何茂御國恩の辱きを拜せざるはなし。翌年に至り、春初は米直段町賣百十七銅迄に上り、米至而拂底之風聞にて、何茂夏取續の米不足可致与案じ居候處、後次第に米直段下り、百五・六銅迄にも相成候而下々悦居候。其内越中・能州之者多く御助小屋へ入度願、追々御小屋も建廣まり、人數三・四千も有之様子、其後次第に増申由。四月頃迄は極めて人高多相成、四月末より疫病流行、御助小屋別而死人多く火葬いたし候處、毎日十四・五人も有之、塗箱をこしらへ、其内江死人を入、墓穴江一集に埋込候者も、毎日三十人計も有之。夫ゆゑ夜中大狗出、右屍を掘喰ひ候。其内には地犬も交り候て、幼少之者を喰殺し候事も有之。御上にも不便之儀に被思召、割場付足輕に被仰付、玉込無之鐵炮にて犬共爲御拂被成候。玉込無之儀者、其砌賢良院様御卒去に付、御忌中御遠慮中故与申候。扨又御助小屋懸りの醫者穿鑿有之、麁略之輩被指除、町奉行・御算用場奉行見分有之、大切に御取扱被成候。

例はいつもなるべし

五月十七日。非人小屋の疫病を拂ふ爲彌彥送をして祈禱せしめんことを議す。

〔溫敬公御日記〕

五月十七日

一、此節非人小屋ゟ以の外疫病人多、死人も有之に付、何となく人氣くじけ、陰氣相成申候。依而右小屋へ寶圓寺・天德院之內遣、大般若經爲繰、且は死人うづめ置申處へも遣、讀經いたし候はゞ、人氣も直り、自ら疫病も薄らぎ申樣に相成可然と、算用場奉行山崎賴母心付候よしに而、月番へ相達申旨。仍而年寄中申合候處、兩寺之內より非人小屋ゟ遣候儀、餘り如何之儀に付、猶各申合候處、此頃は例ヤシコ送りと申者、町等徘徊いたし候へ共、當時は遠所等へ行、地廻りに不居申旨。依而右ヤシコオクリ呼寄候而、彼邊へ遣候はゞ可然と存候之旨。猶此段伺候由申出候はゞ、其段寺社奉行へ申渡、ヤシコ送り呼戾し可申旨、美作守より以善右衞門言上、其通可然旨命じ遣す。

〔每日帳書拔〕

五月十八日

一、非人小屋疫病煩之者夥敷に付、山伏へ申渡疫病神除爲致、且死人も多に付寺庵之內能越

讀經之儀可申渡と伺、伺之通被仰出。

〔明忘錄〕

五月十八日

一、今日瀨左衞門呼出に付、俄二御丸江罷出候處、堀覺之丞を以、山伏疫神除相勤儀に相成居候處、未何等も不致、頃日專右病氣流行に付、早速右疫神除相勤候樣可申渡旨書取相渡候。

御助小屋人々至而疫病相滯候に付、先此方へ相廻候樣可申渡旨也。

一、右御助小屋病亡人多、葬方不行屆に付何れ歎罷在、人氣も不穩。依之葬場所江僧侶指遣讀經爲致候樣に、是亦遣方等遂詮議可申渡旨也。

但、右疫神祭入用幷弔方入用之儀も、御上より可被下旨、是亦遂詮議可申旨被申渡候事。

右疫神祭之儀は、頃日御凶事鳴物等控罷在時節に候得者、如何と尋遣候所、遠慮中に而も指支不申段、覺之丞より申越候事。

五月十九日。前田齊廣の子延之助の葬儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

五月十五日

御横目江

五月十九日賢良院樣御葬式に付、普請之儀御當日御葬式相濟候迄自分に差控可申候。
一、御中陰御法事、當廿二日一朝於天德院御執行に付、御法事相濟候迄御寺近邊に罷在候者
普請自分に指控可申候。
右之趣被得其意、一統可被申渡候事。
五　月
別紙之通夫々可申談旨、御用番美作守殿被仰聞候條、御同席御傳達、御支配御申談可被成候、
以上。
五月十六日　　御　横　目
御表小將御番頭衆中
五月十九日
一、今朝六時御供揃に而、同六半時過賢良院樣御葬送於天德院御納被遊候事。
〔御家老方等諸事留帳〕
五月十九日
一、今日賢良院樣御葬式、御跡騎馬相勤候付、御供人六つ時揃に付六時前出宅。金谷御居宅
江出、六半時頃御供人相揃候段御横目津田判太夫罷出申聞。五つ時前追付御出棺之旨御廣式

頭野村勘兵衛申聞、御供人何も廻り候上宜敷時分又案内可仕旨被極。宜段申聞、七十間御門内御堀際へ罷出有之。追付御出棺に付引離御後より參、金谷御門之外柵御門外に從者廻有之。其處に而乘馬御供仕候事。

一、五つ半時前御寺江御着棺。讀經等相濟、御廟江被入、御穴江御收棺之上、御横目大屋武右衞門御見分宜段申聞。罷出見分仕引取、假御柵の外上敷之上に最初より控居候處江罷越候處、士懸候上又々同人宜申聞。罷出見分仕引取候事。

但、兩度共寺社奉行篠原監物附罷越。

一、九時前相濟、歸宅四半時前之事。

一、御先騎馬志村平之丞、御騎馬野村勘兵衞、御横目津田判太夫。

一、惣御縮引離御供拙者之事。

一、御寺に而御廟相濟候上、常上下に相改披き候事。

一、今日之服淺黃上下・染帷子之事。天氣宜に付草履、若雨降候へばわらじ之事。

一、御寺より御廟迄之御供半股だち之事。

一、今日御寺詰年寄中又三郎御名代庄兵衞之事。

但、庄兵衞儀は御廟江御着棺之上、御火屋代りに御棺据上、御代香相勤引取之事。又三郎

御寺は天德院

御式臺敷付に御見迻仕候上引取之事。

五月廿三日。前田齊泰の膢中を問ふ閣老の奉書金澤に達す。

〔諸事要用雜記〕

五月廿三日

一、今度御膢中爲御尋、御老中御連名之御奉書今日朝之內到來、御上下被爲召御拜戴被遊候。右は宿繼に而無之、聞番ゟ御渡、此方足輕飛脚を以御到來之事。

五月。疫疾大に行はる。

〔珍事留書〕

一、三月之頃次第に遠所より乞食多く出る。諸方町端等之輕き者、或は後家・孀・老人・幼少者等、家を捨貧人小屋入願之者多く、幷頭振・百姓之分も同斷。他國は猶以ヶ樣之族は云におよばず、金銀等乍持飢死る程之所有之由。

一、四月頃より山里・濱等之貧家等に疫病大はやり、老若死る事數多也。死絶る家も有之。哀成事共也。御城下にも疫病流行に而、輕き者等死する者澤山有之。諸國共右樣之事之由。

一、五月之頃疫病次第に流行に相成、町・在共家並に煩伏、家內不殘煩、緣者或は近邊之者參り致看病也。右樣之族數多有之、中には皆死するもあり。

三ヶ所は公事場、町會所及び川上牢屋

一、此頃貧人小屋〻疫病入り、去年以來大人數之事故難題儀成事無限。扨毎日三十人計死する由。右に付御小屋懸り之人多く被仰付、三ヶ所懸り之外に、御醫師之子弟迄多く療治方被仰付候得共、去年以來之貧服故中々療養相不叶、死人止ず。笠舞村之邊有死骸大成穴掘り、何十人も一集に入埋る。赤坂さんまい等晝夜不明。此邊臭氣甚故、大犬多く出死骸を喰、病人にも當り申候に付、足輕共に被仰付、晝夜から鐵炮放追散す。且如此死人多故、人々之愁傷之氣有之、人々奇異成事申候に付、惣死人之爲、從御上專光寺等へ被仰付供養有之候に付、天德院・大乘寺より僧貧人小屋〻參、毎日打續候御施餓鬼等有之也。

一、疫病除之ため山伏中〻やひこ迄被仰付、貧人小屋より始り、諸方へ執行に遣るなり。

一、遠所在方等疫病猶以多く有之に付、御救として御醫師中〻遠所廻り療治手分被仰付、所々へ御醫師發足有之也。

一、病人御救之ため、武士町末々在々所々〻從御上藥法附之觸被仰出る。但此御觸は、享保八年丑年飢饉之後時疫流行候所、從公儀諸國〻御觸之藥法寫之由。

一、時疫又は餓死等に而兎角死人多有之、從御上貧窮之者共〻樣々之御救方被仰付候事。

〔天保より弘化まで日記〕

當年疫大流行、死人多。ききん翌年食事惡敷に付、流行の由承る。

五月米高直、下民難儀に付爲御救一統に付十銅宛御引足、町會所より小札相渡。此時升に付百十五文賣。六月末より少々宛下る。

五月。辰巳用水の清潔を保持すべき件を議す。

〔諸事要用雜記〕

覺

一、辰巳上水江筋𛀁塵芥捨申間敷、幷穢敷品等洗流、曁洗足等堅仕間敷事。

一、猥水汲取申間敷事。

但、若火事之節は格別之事。

一、江筋之內石垣落石等有之候共、堅拾取申間敷事。

右辰巳上水は御殿水之儀に候へば、若前條等之儀有之而は第一不敬之至、其上御不益に相成候。右之趣先達而も一統被仰渡有之候得共、中には心得違之者も有之躰に候間、今般改而水道裁許之者𛀁申渡、右樣之者有之においては急度見咎、寄時宜前々之通急度爲相糺申筋も御座候間、此段御家中末々之者幷寺社門前町々曁近在百姓等迄、急度相心得候樣夫々被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

五　月　　　　　　　　　　横　山　義　六　郎

岡崎右近
青木多門
前田美作守様

五月。藤内等非人小屋に收容せられたる者の死者を荼毗に附するの命を拒絶す。

〔異部落一卷〕

非人小屋に多死人有之由に而、以來火葬に可申付旨、藤内頭𛀁申渡有之に付、御郡所𛀁指出候紙面寫を以、藤内頭より相達候留

非人小屋に罷在候者相果候死骸、藤内共爲役儀葬り候樣可申渡旨被爲仰渡候に付、御當所向寄に罷在候藤内共𛀁其段申渡、且又藤内頭より申渡候得ば、葬り候由申居候者有之哉与相尋候處、左之通御願申上候。

一、是迄非人小屋に罷在候者、死骸葬り候例無御座、猶又藤内頭より申渡候得ば葬候樣之儀、申居候者一人も無御座候。右葬不申儀、彼等死骸迄に而者無御座、芝居役者並賣女・越前萬歳・皮細工人・舞々三太夫、是等者身分筋目者如何に御座候共、下藝職下り之者故、前々より葬不申儀に御座候。

一、御武士樣並御寺方御奉公人、町家・百姓家之御死去人火葬者、前々より藤内共葬、尤手間料申請候而渡世仕、御公事場等諸向御用を爲役儀相勤罷在候。左候得ば輕き者乍も、葬方前々より相分り有之、役儀も夫々相勤罷在候得ば、是迄不仕儀を今般新に被爲仰渡候而者、甚難儀奉迷惑譯に御座候間、乍恐右等之趣被爲聞召上譯、何分在來之通被爲仰付被下候樣、藤內共相願、私共も奉願上候間、此段宜御願上可被下候、以上。

午四月　藤內頭　仁藏

三右衛門

增泉村肝煎　七郞右衛門殿

御助御小屋入之者、去年以來疫病相煩病死人多有之に付、今般御詮議之上火葬に仕、賃錢も成限り相減可申旨、先達而被仰渡候處、是迄非人小屋に罷在候者、死骸葬り候例無御座、藤內頭より申渡候得共、葬候樣之儀申居候者一人も無御座。右葬不申儀者、彼等死骸迄に而者無御座、芝居役者並賣女・越前萬歲・皮細工人・舞々三太夫、是等者身分筋目者如何御座候共、下藝職下り之者故、前々より葬り不申旨等、委曲小紙を以申上候處、當朔日御召出被仰渡候は、元來御助小屋入人々之儀者、筋目正敷百姓・町人・極困窮之者等、御仁政を以御養ひ、重而百姓に御取立、或は御小屋出願出候得者家相求候者に而、御扱方非人等之趣に而無之處、

右等之類与存罷在候儀者心得違之趣等被仰渡、支配藤內共ゟ申渡、火葬仕候樣被仰渡奉恐入候。依而先達而指上候小紙御引下げ奉願上。就夫右火葬之儀被仰渡、可奉畏儀に可有御座候得共、御公事場を始、諸御役所向御用當時烈敷、藤內共一統晝夜馳廻り、其上去年以來諸方疫病流行仕、病死人多、七三昧是又晝夜之火葬、手に及び兼候儀に御座候間、何分奉恐入候得共、此段御賢慮被成下、御助小屋入之者火葬之儀、宜御詮議被成下、御用捨被仰付被下候樣奉願上候、以上。

五　月　　藤內頭　仁　藏

三右衞門

御郡御奉行所

六月四日。藩の貸米に對しては浦口錢を徵すべからざることを定む。

〔御郡典〕

都而御貸米幷御救米与名目有之分は、他郡等に而相渡り、船積を以取寄候節、出津・入津浦々に而浦口錢取立及迷惑に候間、以來右御貸米之分口錢相懸不申樣被致度旨紙面被指出、詮議之上、右御貸米之分浦口錢等用捨之儀承屆候條、各支配所潤改人等ゟ此段可被申渡候、以上。

六　月　四　日　　御　算　用　場

御郡奉行中

右之通申來候に付、寫相越之候條、得其意、此段潤改人等江不相洩樣可申談置者也。

午六月廿日　　御郡奉行

加州三郡幷能州口郡村々役人

尙以遠所町奉行江も、右之趣御算用場より申談有之筈に候條、此段爲念申渡置者也。

六月七日。小割銀の通用期限を豫定より延ぶべきことを告ぐ。

〔觸留〕

當時通用之小割銀手形、來未年迄に正銀与引替之筈に而、則手形に其趣印押有之候得共、百目手形通用中は、小割之分茂通用無之而者一統不辨利之儀も有之候に付、當分是迄之通通用被仰付候。依之右手形來年中に相改、右年限之印相省き、引替所印を加へ候分出來之筈に候處、當時通用之分中には、甚手馴上納等指支之分も有之躰に相聞江候條、右之分は手形引替所において、當七月三日より奇日毎新札与引替可申候。尤追々申渡候迄者、新古兩樣打込通用可致候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

六月七日　　長又三郎

六月十日。藩の財政困難なるを以て借上銀を命ずることを告ぐ。

〔御郡典〕

天保五年午六月十日被仰渡寫。

御勝手向御逼迫至極に付、近年增御借知、曁町・在御用銀も被仰付、追々格別之御省略を以御取續之處、去年御領國非常之違作に而、御取箇過分之御引方に相成、加之御國民御取救方等莫大之御儀に而、當年御運方如何共被成方無之、最早御公務も相欠候程之御場合に至り候。依之拙者共僉議之趣相達御聽、當一作御家中半納拂代銀之內を以、別紙割合之通御借上被成候。近年增御借知も被仰付候得共、指當り外に一圓被成方も無之故、乍御心外不被得止事被仰付候筈に候。且又去年能・越引免に當る御償米御渡可被成處、右之族に付無御據當年は難被及御沙汰候。右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配不相洩樣可被申渡候。

覺

一、百十匁之割　自分知百石に付　百一石より百五十石餘迄

一、百二十目之割　同　百六十石より二百石餘迄

一、百三十目之割　同　二百一石より二百五十石迄

一、百四十目之割　同　二百六十石より二百九十石迄

一、百五十目之割　同　三百石より四百四十石餘迄
一、百六十目之割　同　四百五十石より九百九十石餘迄
一、百七十目之割　同　千石より二千九百五十石
一、百八十目之割　同　三千石より四千九百九十石餘迄
一、二百目之割　同　一萬石以上
一、都而百石以下之人々は御借上不被仰付候事。
一、御步並以上御切米・御扶持方之人々に而も、知行百石以上に相當り候分は、一統割合之通御借上之事。
一、隱居料も前段割合を以御借上之事。
一、遠慮等被仰付置候人々も、前段割合を以御借上之事。
一、遠慮等被仰付置候人々も、前段割合を以御借上之事。
一、他國居住之人々も前段割合を以御借上之事。
一、頭分は百石以上之人々は、役料百石に付百目宛割合を以御借上之事。
一、三之一被下置候人々は御借上不被仰付候事。
一、右御借上、當七月廿八日迄之內御算用場ゟ上納可仕事。

但、頭分以上は直に可指出、平士以下は頭・支配人手前へ取集可指出、切手等之分は當十一月廿八日迄に可指出事。

以上

午　六　月

六月十三日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

六月十三日

一、今日九半時之御供揃に而、兩學校へ御出被遊候事。

六月十四日。更に省略に就いて議せしむ。

〔諸事要用雜記〕

六月十四日

一、左之通一昨日別席より談之候事。

御勝手御運方御差支に付、近年追々御省略も被仰出、去春より御次內御入用も半高計に而押合候御仕法も有之候。然處去年御領國不作に而、過分之御引高に相成、御手繰方御差支之處、夫食并窮民御救方も過分之儀に而、彌増御不足相嵩、當年之御不足是迄之姿とは品違、最早

被成方も無之、御危急之御場合に至候儀に候得ば、此儘に而は御取續は難被成、何と歟今一篇格別之御仕法も有之候はゞ、其御釣合に因而此末之取扱方も可有之旨、年寄中より申上候。是とても御次内格別御省略も有之儀に候得共、猶今一篇嚴重御省略被仰付候段被仰出候條、被得共意御詮議有之、尤御次廻等江も御申渡、心付之趣等申聞候樣可被申談候事。

午 六 月

是月は小盡なり

六月晦日。非人小屋に收容せらるゝ者の員數を調査す。

〔諸事留帳〕

覺

一、二千四百七十八人　午五月晦日書上申人高

一、三十三人　午六月朔日より同廿九日まで御郡方之者送り入人

一、五 人　右同斷町方之者送り入人

一、二百二十五人　右同斷町・在之者奉公幷五十日雇り入人

〆二千七百四十一人

内

百九十一人　午六月朔日より同二十九日まで町・在之者奉公幷五十日雇出人

二百八十六人　　右同斷死去人
十七人　　右同斷欠落人
殘而
二千二百四十七人　　午六月二十九日在人高

六月。家中の者金銀調達の爲收納米の藏縮をなす件に關して告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

定番頭江

御家中之人々之內、金銀調達爲引當收納米藏縮いたし、其年を限り藏解可致旨近年毎度申渡置候處、中には翌年江越候人々も有之躰相聞、心得違之事に候。其上近くは卷縮と申名目に而、口入人共數軒より藏縮を取集め、夫々當り候銀高致調達、夫々配分いたし貸付申に付、全く返銀不相揃而は藏解不相渡躰に候。元來卷縮と申名目は前々は無之樣子に候處、次第に致增長、其內には不正之儀も有之由等聞え、如何之事に候。右等は第一御召米渡方年々遲々に相成不容易儀、且米商方にも指障候條、年內に不差支樣いたし候儀は勿論、向後都而卷縮を以致調達候儀無之樣急度相心得可申候。尤町方之者共已來卷縮取組不致樣嚴重可申渡旨、町奉行へ申渡候。

右之趣被得其意、組・支配等幷家來等迄不相洩樣一統可被申談候事。

六　月　　　　　長　又三郎

石野雅樂助殿等

七月七日。家中より借上銀を行ふも困窮甚だしき者あらば之を上申せしむ。

〔諸事要用雜記〕

七月七日

一、左之通內々演述之旨池田保左衞門申聞候事。

當月朔日內膳殿御別席に而私共江被仰聞候は、御勝手御運方必至御差支に付、今般御家中より御借上之儀被仰出候通に候。百石以下小身之人々には、別而可爲難澁与格別之思召を以御借上不被仰付候。且又百石以上之人々之內にも格別致難澁、極困究之族も可有之哉。實に指迫り、若當月上納も不致得族之人々、何与歟申聞之趣も有之候はゞ、頭・支配人手前において得与遂穿鑿、實に指迫り候程之者有之儀者、上納方先暫延引之儀承屆置、委曲追而御內々及御達可申候。然上は其樣子に寄、何与歟御僉議方も可有御座哉之旨、御內々爲心得被仰聞候。乍併今般之御借上被仰付候上にも、猶又當年中莫大之御不足も有之、御手繰必至御差支に候

條、右様之人々多相成候而は、第一御手當相違仕候間、右等之趣深く勘辨仕、精誠入念遂僉議可申候。尤本文之趣組・支配ゟ申談候儀に而は無之候。是等之趣各様ゟ極内々及御演述候様被仰聞候事。

七　月　　池田保左衛門
　　　　　前田清八
　　　　　多羅尾左一郎

七月廿六日。金谷御居宅を再び金谷御屋敷と稱すべきことを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

七月廿六日

御横目ゟ

金谷御居宅、最前之通御屋敷与唱可申旨被仰出候條、此段寄々可被申談候事。

右之通披見物有之事。

七月。幕府の令に基づき造酒の石高を一昨年の三分の一とすべきことを告ぐ。

天保四年二月廿二日の條參照

本年十二月十日の條參照
巳年は天保四年

〔御郡典〕

今以米價高直に付、追而被及御沙汰に候迄、去巳年以前迄造來候米高三分二相減、三分之一酒造之儀等、今般公邊御書付寫等、別紙之通年寄中被相渡候。尤御領國之分は、去年一作三分一造被仰渡置候之儀に候得ば、當年より尚亦去年同様相心得候而可然儀に候得共、今般之儀は公邊より厚御趣意を以被仰渡之儀に候條、當年より追而被及御沙汰に候迄、去年迄之酒造高三之一造之儀、無違失相心得候樣被申渡、人別請書取立早速可被指出候。將又三之二に相當り候酒造道具之分は、各手合先づ縮方申付、酒造石高等委曲帳面に仕立、當月廿日迄に當場江可被指出、當場僉議之趣有之、年寄中江も相達、追而當場役人相廻縮方申付候條、此段も可被申渡置候、以上。

午七月　　　御算用場

內藤十兵衛殿

稻葉助五郎殿

酒造之儀に付大目付須田大隅守殿より到來之御書付寫一通、相越之候條被得其意、前々之趣を以夫々可被申觸候、以上。

甲午六月八日　　　奧村丹後守

本文は幕令なり

大目付江

近年違作之國柄多、米穀拂底に付、諸國酒造之儀、去巳年造米高三分一相減、三分二可致酒造旨相觸候處、今以米價高直に而、下々之者及難澁候旨相聞候間、追而及沙汰候迄、去巳年以前迄來候米高三分二相減、三分一可致酒造候。依而去巳年以前迄造米高・減石之高共書付にいたし、御料は其所之奉行・御代官、御預所・私領は領主・地頭より早々可指出候。品に寄不時に改之者指遣候儀も可有之候間、若其節右書付に相違之儀も有之候はゞ、其者は勿論、其所之役人迄吟味之上急度可申付候條、心得違無之樣可致候。

右之趣御料・私領・寺社領共、不相洩樣早々可觸知者也。

五月

七月。米價大に下落す。

〔天保より弘化まで日記〕

六月下旬より米次第下落。批屋米升八十一銅。七月に成下直。

八月八日。前田齊泰瀧之間に於いて林周輔をして書を講ぜしむ。

〔諸事要用雜記〕

八月八日

一、今日月並講釋に付、五つ六分五りん芙蓉之御間江御出、御聽聞被爲在候事。

但、講師林周輔。

八月十一日。領内に於いて武器を藏置する場所を調査す。

〔御家老方等諸事留帳〕

八月十一日

御武器被遣置候箇條左之通。

一、今石動御旅屋御土藏入

一、越中境御旅屋幷御關所附

一、魚津御土藏入

一、高岡御旅屋跡御土藏入

一、東猪谷御關所附

一、別宮御貸屋渡

一、木滑御貸屋並御關所附

一、河原山御關所附

一、東岩瀬御土藏入
一、宇出津御土藏入
一、七尾・輪島御土藏入
一、小松御城附
一、當所御武具奉行取捌御道具
但、火矢・ホウロク・御鐵炮・御弓矢等、右等之品々多分帳面扣席に有之。寶暦火事後文化御燒失にも調理調出。

八月十三日。前田齊泰學校に臨む。

〔御家老方諸事留帳〕
八月十三日
學校御次第、最初武學校へ御出、柔術御覽相濟、文學校御出、鶴見門弟易學幷あて物も被仰付、算術も御覽、相濟又武學校ゟ御出、柔術・棒術御覽被遊、御戻り之事。

八月廿三日。前田齊泰人持組の士の調馬を覽る。

〔諸事要用雜記〕
八月廿三日

一、今日八時之御供揃に而御馬場御出被仰出、御横目中御先へ參り、宜時分御横目足輕を以御案内被申上、無程御出、人持中等乘馬御覽被遊。相濟、持馬之内四つ二之鞍被仰付御覽被遊、七時過御戻り被遊候事。

一、右御出之節一統常袴着用、配膳役一統被召連候事。

八月廿三日。前田齊廣の女壽々姫の本多播磨守に嫁したる後その居所を廣坂御廣式と稱せしむ。

〔諸事要用雜記〕

御横目江

壽々姫樣御引移之上、御座所之儀、廣坂御廣式と唱可申旨被仰出候條、夫々可被申談候事。

別紙之通夫々可申談旨、御用番又三郎殿被仰聞候條、御承知被成御同役御同席御傳達、御支配御申談可被成候、以上。

八月廿三日　　　　御横目

御表小將御番頭衆中

八月廿七日。前田齊泰石川郡松任に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

八月廿七日

一、今日四半時之御供揃に而、同刻過御出。御鷹野之振に而野町口より松任江御行歩御出被遊。野町松門迄御用部屋等御召連之人々奉出向。其邊より御早乘被遊、松任町之内御行過、同所端より二・三町程被爲入、夫より御乘戻し、御往來早乘に而笠舞屋六郎右衞門方に而小休被遊。夫より同所城跡幷若宮御巡見、御步行に而御戻り、野町々端より御馬上に而御歸殿被遊候。御戻り暮頃之事。

八月。米穀大に豐穰す。

〔珍事留書〕

一、六月當春以來最上之順氣に而、此頃暑甚强く、又折々雨降り、田畑萬事能作之事。

一、七月當年豐年之由に而、人氣次第に穩に成、町賣米一升に四・五文宛度々下り、餘程下直に成。

一、八月當秋上作に而、稻六尺許りも有之分、中石川郡二つ屋村邊に而則見申也。ヶ樣之分所々に有之由。或は穗之長さ一尺餘り有之候も折々有之由。且又諸國共に同樣豐作之由。

九月朔日。前田齊泰石川郡粟ヶ崎に行步を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月朔日

一、今日九時御供揃に而御鷹野御出、七つ屋口より御旅屋江被爲入、大野・宮腰道より御戻り被遊候。暮合御歸殿之事。

〔溫敬公記史料〕

九月二日。公召理財主司曰。余昨者如粟崎。親知年豐熟。去年以歲歉之故。裁減諸臣秩祿。以救一時之急。故今年不能全償之。乃償其半欲以紓諸臣之窮、宜議以聞。

九月朔日。奥村丹後守冗員淘汰の審議に關して意見を述ぶ。

〔官私隨筆〕

九月朔日

一、左之紙面遣之。但加樣之類是迄多くは留置不申候へども、是は少々譯有之、遺忘之ために記之。

當日目出度、昨日は御賁臨、乍暫時拜面忝奉存候。任仰使者をも進上不仕候。愈御淸康奉賀候。猶御自愛可被成候。扨は其節御內話之冗官を被減候と申御僉議之事、御手初めに左樣之儀被仰出候而も宜敷候哉、貴所樣思召に而は今少御次第も可有之哉と之儀に付、思召之趣御

尤、乍去俄に御答も申かね候旨申上置候。夜前よりも相考候處、冗官を被減候と申事は、尤時節相應之御儀ながら、今少本卜へ付候而御志を被立候樣に有之度事歟と奉存候。冗字はもと散也と註し候而、此散字は散木・散人など之散に而、無用之事を申すと聞え申候。冗官と申事をも無事備員と註し有之、いづれ無用之官を申すと聞え申候。無用之役人はいつにも減ぜられ候而可宜事に候へども、たとへば御馬廻頭・御小將頭抔申樣なる役前は、皆有用之官にて冗官とは申がたかるべき歟と奉存候。冗官にては無之候へども、平時にさして人多くも御用無之ものを、流例等にて本員之通被仰付來り候分は、冗官にも準じ可申哉。左候へば御僉議次第御減少は尤あるまじき筋に而は無之。其時は尤永代御定之通之數に可被仰付ため、今暫く被減候に而、只今被減候が則永代迄も御定制之闕ざる根となり可申わけになり不申而は叶不申候。左樣有之候時は害もあるまじき事には候へども、元來政事と申ものは根元と枝葉が有之、根元がたち候へば枝葉はおのづから榮え可申事に御座候。其根元と申而は上之御一心にとゞまり、夫よりして政綱之上に而は賢者を擧られ候と賞罰之正敷候とのふたつに有之段、古人其論決定に御座候。此ふたつも形は少違候へども、極まる所は善を擧て不善を退くるの二つに歸し可申候。冗員を被減候にも、先此根元之所より御僉議が參り至り候樣に有之度事と奉存候。たとひ冗員を被減候而も、相殘る役人之内に不善人多く居候而は、何之甲斐もなき事

に而御座候。されば冗官を減ぜられ候上に而申候時は、とかく先よきものを御用ひ有之、奸惡之ものを淘汰被成候事を基本として、其餘波を及ぼされ候而冗員を減省せられ候所へも至り候樣に有之度歟と愚存には奉存候。惣じて天下はたゞ善と惡との二つにて、惡は勝やすく候故、政事之勤め之品も、たとひ其筋あしからぬ事にても、前後輕重之釣合がぬけ候と、はや其所へ奸惡之徒付込候而、己が志を達する媒とする樣に成申候。右之本さへほゞ立候上は、冗員之御減省に不限、何事も阿方より自然と左樣に成行候はで不叶事に成可申候。本が立不申時は、何事も皆邪惡之助けと成可申。たとへば右冗官之事に付而申候ても、頭分抔之儀は御上之思召、各之御僉議に而御取極可有御座、夫に準じ下々小役人迄も餘る所は減ぜらるべき之所、右之根元立不申、奸惡之徒多く入交り居候而は、名目のみは冗員を被減候と申ものに而、其實は皆奸徒之妨になるものを追拂候樣なる事に成行申儀、必然之勢に御座候。左樣有之候而は、御勝手御省略之爲に被爲行候事も、其御爲に成候儀は至而薄く、奸惡之徒之私德のみ多き事に成行可申候。依而は御勝手御財用之御僉議を被成候にも、何を被成候にも、まづ政事は政事之根元より不被行候而は全美之事には成申間敷。御財用之所のみに御目とまり候而は、御財用之御運びも出來申間敷。たとひ萬一御運びは一旦可也に成候樣に而も、國脈を縮むる媒に而可有御座候。右之譯に御座候へば、彌官員を被減事に候はゞ、其事はまづ

第二に被成、夫を幸に諸役人之善悪をよく〳〵御見わけ、奸悪之族を被退、良善を御用ひ有之候が何より之御省略に而可有御座。下々之者は又其支配人へ能々被仰諭、各善を揚て悪を抑へ候様に成候はゞ、白川侯之御政事と跡も似たる事に成可申候。先頃以来之御模様を考候處、只今之處誠に千載之一時、此機を過されまじき所歟と奉存候。能々御熟談奉祈候。

一、増御借知之事を頭中抔何も異口同音に申上候付て御不審之趣。夫は畢竟人々才力に程有之候而、餘之手段も存付不申故、まづ左様之所へ心を付候哉と申置候。猶又考候處、大意之所は右之通に而、其内には惣じて極難澁之人々之内には、増御借知抔被仰付、諸借銀書上抔を却而希居候ものも可有之候。左様之所より少しく舌打心を挾み雷同いたし候ものも、有がたきとも申がたかるべく候哉。いづれ増御借知は、武士・商家へかけて之釣合むづかしかるべき事かと愚存には奉存候。右等さして替る事も無御座候へども、昨日之談に而も申上残したる様に而物たらず御座候故、聊亂毫得貴意申候。呉々無御油斷様にと奉存候。愚考之當否は尤辨がたく御座候間、此所に必を御取被成候儀は尤御無用可被成下、只御考合之ため計に申上候。

一、乍序申上候。播州殿へ御逢之節、宜敷此間御示談之儀猶又考候へども、別に存付候儀も無之由宜被仰入可被下候、以上。

榮實は奥村丹後守內膳は奥村惇叙にて當月の御用番なり

九月朔日　　　　　　榮　　實

内　膳　殿

九月二日。前田齊泰の子利順の色直を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

九月二日、於江戸表龜丸殿御色直・御箸御祝有り。同日爲嘉儀女使を以て一種一荷を賜ふ。内府様御初より一種宛賜る。此外御內證にて品々賜る。公よりも女使、公方様御初ゟ鮮鯛一折宛献ぜらる。此外御內證にて品々進上せらる。以女使龜丸殿ゟ爲嘉儀卷物五・一種、内府公より一種一荷、御臺様より卷物三・一種、大納言様・御簾中様一種賜る也。同日龜丸殿より御使以老臣卷物五・一種一荷被献之、内府様・御臺様ゟ卷物三・一種一荷充、大納言様・御簾中様ゟ一種一荷被献之なり。

〔官私隨筆〕

九月十日

一、龜丸殿御色直・御箸初御祝儀、當二日御首尾能相濟候段申來候由、御用番より以紙面被申越。

九月三日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

九月三日。臨學校。

九月五日。前田齊泰人持組の士の乘馬を觀る。

〔諸事要用雜記〕

九月五日

一、今日八時御供揃に而堂形御馬場江御出被遊、松平帯刀等廿二人乘馬御覽被遊。相濟、持馬五疋御馬役江被仰付御覽被遊候事。

九月六日。前田齊泰郊外千日町口に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

九月六日

一、今日九時之御供揃に而御鷹野御出昨日被仰出、同刻過御出、千日町々端より犀川土手通り所々御廻り、市川村三右衛門方に而御小休。夫より所々御廻り、御供田道通り、千日町より御戻り被遊候。七半時過之事。

九月六日。石川郡本吉町に火災あり。

〔毎日帳書抜〕

九月六日

一、本吉町出火、千百四十軒計焼失之事。

〔御家老方諸事留帳〕

九月七日

一、昨未の上刻より本吉浦出火、今曉八つ時頃及鎮火由、本吉奉行崎田達之助より注進有之。

〔珍事留書〕

一、九月六日本吉出火、二十六軒殘り、外皆類焼なり。

〔御家老方等諸事留〕

九月七日

一、本吉浦千百七十軒餘之處、千百四十軒餘焼失、土藏百五十戸前計も焼損も有之様子之事。

九月十八日。前田齊泰夫人江戸城西丸に登る。

〔溫敬公記史料〕

九月十八日。夫人氏如西城。

九月廿一日。御鷹場及び御留場に於ける殺生禁止等のことを告ぐ。

石川・河北兩御郡御鷹場江、近來殺生人多入込候躰に而、網懸もち等中に者鐵炮抔も有之、毎度取揚候。御家中一統、御免場たりとも網懸もち、或は八寸以上之串指、且三里四方天之網張儀御停止之處、心得違之者有之躰に候。

一、御留場之內堀々・俣川・不湖に而投網打候儀、獵師たりとも御停止に候、惣而本川筋之分も、每歲九月朔日より翌年三月晦日迄投網打候儀、御家中は勿論殺生渡世之者も從前々御停止に候。水戶口より大潟之分は御免に候得共、是又潟緣江寄鳥みとがめ候處に而は打申間敷旨。且又都而御場之內本道之外は、殺生道具抔携罷通儀不相成段被仰出置、文化元年にも一統申渡置候通に候。

一、每歲九月朔日より翌年三月晦日迄、宮腰口・粟ケ崎筋、金澤町端より上は犀川迄下は淺野川を限り、兩川幷大野川共濱手迄、暨古保川・金くらゐ川・安原川共、都而魚殺生御停止に被仰付候。獵師之分は水戶口より大潟迄大川筋御免被成候旨、是又文化元年被仰出一統申渡置候通に候。

一、上口往還道より山手之方伏見川を限、西は中村用水を限、每歲十月朔日より翌年二月晦日迄、御家中之面々鷹幷雉子突指竿御免、且又從松任手取川迄道より山手・濱手共、每歲十月

朔日より翌年三月晦日迄御留場に候處、右之期月心得違之者も有之躰に候。右之通に候處、近來心得違之者も有之躰に付、今度召捕方之儀改而御郡方之者ゟ申渡、曁藤內共も相廻し、嚴重見咎候樣申渡置候。依之御家中之面々等、家來末々迄心得違無之樣嚴重可申渡旨被仰出候條、一統可有御申觸候事。

一、御家中之人々風俗等之儀、從金龍院樣段々被仰出之趣有之、諸殺生等も一旦被禁候得共、殺生之儀は文政七年從御當代樣被仰出、當務之餘暇に岩乘之試適罷越候儀は不苦、無息之人々にも稽古之怠りに不相成樣心得、折々罷越候儀は不苦段一統申渡置候通に候處、近年次第に增長いたし、其時節に至り候得者萬事を拋殺生方に而已心を盡し、剩御日柄にも竊に山川等ゟ罷越致殺生、其內御停止之殺生道具を取扱、或は御鷹場へ紛込、曁犀川魚殺生請負人有之處無札之殺生人多入込候儀等も相聞、且士に不似合卑劣之振舞も有之躰、彼是不心得之至に候。向後本意を不取失、是迄段々被仰出之趣堅相守可申候。御鷹場等之儀は委曲別紙若年寄紙面寫之通に候。陪臣之者共ゟは主人々々より急度可申付候。以後心得違之者有之においては、嚴重可被仰付候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

九月廿一日　　　　　　　奥村內膳

九月廿六日。老臣本多播磨守、前田齊廣の女壽々姫に納采す。

〔溫敬公日記〕

九月廿二日。仍舊例賜壽々姫知行千石年金百兩。

〔官私隨筆〕

九月廿四日

一、明後廿六日壽々姫樣へ播磨守より御結納御祝儀物献上に付、御殿詰役人六半時揃、各には五時登城。服は在合之熨斗目・半上下返小紋之外勝手次第之旨、且又御祝詞も申上候筈之旨御用番より廻狀到來。

〔珍事留書〕

一、壽々姫樣本多播磨守え御入輿被仰付候に付、播磨樣九月廿六日御結納之御登城。

九月廿八日。前田齊泰卯辰山に行步を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月廿八日

一、今日若松村より御鷹野之振に而所々山通り、春日山迄御行步御出被遊候。庚申塚邊に御

奥より、御出之時分之御休所假屋出來、御休被遊候。九つ一分御出、掛流六つ御戻之事。御供拙者罷出る。

九月。城下に豐年祭行はる。

〔珍事留書〕

一、九月中頃より豐年祭と申事流行、初は事輕に氏子中申談、不時に日數二日氏神之社祭り申也。

一、去年來遠所等より貧人小屋へ入申者ども、此頃追々在所々々ゟ御返しに付、一人々々錢被下候由之事。

一、豐年祭次第に增長いたし、繁華之事に相成。同廿五日頃より安江之八幡宮・白髭等氏子中申談、家並に行燈を出し、其上に小き作物拵、又は一町申談櫻作花を軒にさし、提灯釣も有り。其外に壹町々々祇園拍子裝束等見事之事共、或は俄・芝居・作やま・獅子・作物等一々筆に難盡程之事也。右何も耕作之事を執り、早苗の頃より秋迄之事裝束等に用る也。

一、此節賣米一升古米は六十九文、新米は七十二文。右は去年不順氣之米故、藏入用米に相成不申故之由。錢相場九貫八・九百文、味噌一合に付十一文、豆腐一丁に付廿貳文、大豆一升に付上之分九十一文より七十文、小豆一升に付八十文。

一、諸色等下直に賣拂可申段、町方江御觸毎度有之由。

〔癸巳救荒錄〕

當年は昨年に比すべくもあらず、天氣順晉にして萬作生熟し、追々新穀出來の節に至ては米價次第に下直し、石價大抵六十四・五匁には不過、店方小賣米は一升に付六十七・八文まで下りしかば、諸品の直段も日に低下し、世人初て蘇生の心地して人氣も平和になり、互に有年を賀する事にはなりぬ。因て人々身の無恙を喜ぶの餘り、毎歳春秋は生ぶすなをまつるの古例なれば、幸に今將秋祭の折なれば、各々產宮祭祀に乘て豐祭をいとなみしなり。大抵常祭前後三日の定期なれども、別に兩三日をまつり、町々より思ひ〳〵の俄狂言種々の作り物を趣向し、或は築樓子供をどり、或は樓船を戲作し、樓上には子供芝居或は祇園囃等いづれも一樣の裝束を着し、日々金澤中を互に引渡り、夜は三味線太鼓座敷をどり、或は家戶平等に神燈をさゝげ、人笑賑ひのために色々の圖を畫きたる萬燈あたかも白晝の如し。或は其沙汰を不聞所は、定式の神會までにて爲濟たるも、此等の沙汰を聞ては堪へぬ若者、何か遊戲を思ふ折なれば、天にも登る心地し、市中俄にさわぎ立、町內をかけ廻り米錢を集め神主を促し、又々豐祭をいとなみ、我人におとらじと金錢を費じ、町々晝夜を分たず諸職人をかたらふ事にて、次第に仕組も面白くなりては、上樣を始め奉り御大老樣へも召寄せられ、何れも

其をどり狂言等貴覽にあづかる程なれば、小身の御藩士は勿論にて、町々在々に至るまで見物に出る事にて、市中の群集大方ならず。老人子供はふみ仆され、或は泣或は笑ひ、又は人に醉て俄に氣色を變じ、路傍に寄て吐きつ叩きつ介抱するもあり。又は群集に紛れ子を見失ひ、狂氣の如くなりて尋るもありて、誠に仕組狂言より自然生の物狂まで、前代未聞の遊戲共賑ひたとふるに物なし。

十月八日。大坂鎰屋善兵衞を藩の產物問屋に指定したることを告ぐ。

〔御郡典〕

御領國に而出來之諸產物、大坂梶木町鎰屋善兵衞一軒問屋相建、於右店爲賣捌候儀、御勝手方年寄中等江相達、大坂町御奉行江御屆方相濟候條、大坂江荷物指出度者は、主附當町一丸甚六江及斷、荷物に指札刺、荷印一手にいたし、同人添紙面を以右善兵衞方江持屆可申候。且亦善兵衞方江荷物持屆候迄之手繰銀借用致度者は、右主附甚六承合候得ば相辨申筈に候。右之趣被得其意可被申渡候、以上。

十月八日　　御算用場

御郡奉行中

十月十九日。諸士の百姓地を請地とすることを禁ず。

〔諸事要用雜記〕

御家中之人々、御郡地之内を百姓相對を以請地いたし候儀、近年次第に增長、中には手厚に圍を付、建物等を構、榮耀之儀も有之躰相聞え、不可然儀に候。向後御郡地を請地にいたし候儀可爲無用候事。

右之通被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申談候、以上。

十月十九日　　長　又三郎

佐藤隼人樣

十月廿四日。金澤の宮腰屋久右衛門及び石川郡宮腰の錢屋五兵衛二人に船櫂數調理役を命じたることを告ぐ。

〔御郡典〕

當町　宮腰屋久右衛門

宮腰　錢屋五兵衛

右之者共、御領國中船々櫂數調理役申渡候に付、渡海船幷獵船出來退轉之儀、綿密に取調理置、每歲十月迄帳面に仕立、右兩人之內江可被指出候。久右衛門等之內廻りヶ所は、於廻先に右調理帳取立候筈に候條、諸浦船肝煎幷浦方肝煎江可被申渡候。且亦加州本吉新屋又次幷

越中吉久新屋喜六、右兩人下役申渡置候間、指懸り諸浦江相廻候船櫂數調理候儀も可有之候間、此段も兼而爲承知申達。將亦諸浦より每歲指出候調理帳、向寄に付右下役兩人之內江指出候儀は勝手次第に候。

一、加・越・能潟舟幷川舟出來退轉之儀も、每歲十月中迄に指出候樣、潟緣村々幷川舟相用候村々肝煎等江、右同樣可被申渡。

一、渡海船勝手に他國に而仕替候歟、又は賣拂候節、元船極印削り取退轉等案內之節、其支配々々肝煎江迄指出可申。右極印削取不指出內は、退轉不承屆候條、此段船持共へ可被申渡候。右船肝煎迄取立候分、久右衛門等江相達候樣、是又可被申渡候。尤於諸浦等紛敷船等於有之は、詮議之上品に寄急度咎申付候。此段も可被申渡置候、以上。

十月廿四日　　御算用場

淺加伊織殿

菊池九右衛門殿

追而本文爲調理方、宮腰屋久右衛門下役召連、追付出立、加州・能州浦々相廻り候條、本文之趣を以都而不指支樣可被申渡候。尤相廻り候節は、自分止宿之筈に候條、此段も可被申渡置候。且急速先々相廻、從落着可被相返候、以上。

十月。荒歳手當の爲二萬石の蓄米を諸郡に命ず。

〔御用儀品々留帳〕

一、荒歳爲御手當籾納等、可成だけ御蓄被仰付度御僉議も有之候所、去年度莫大之御損毛、暨當春來も追々御救米等不少故、御運方彌増御指支に付、何分右手當被成方無之、乍然思召茂有之、去年以來乍少分除米も被仰付候得共、中々以不被爲行屆。然所今年順氣無類之年柄に付、作物一躰取入宜敷躰。因茲御領國百姓共一統より二萬石、別段爲納置可申候。尤前段被仰付置候除米之儀茂、追々御加入有之度御趣意に候。勿論改作御法も有之儀に候得共、御逼迫中者是以後も作躰之模様に寄、臨時御僉議も可有之候條、下々信服、不惡樣申示爲相收可申候。

右之趣御郡奉行ゟ可被申渡事。

甲午十月

右御書立、天保五年御席より御算用場ゟ相渡り、御算用場ゟ相渡り、御算用場より郡奉行ゟ御渡、御郡奉行より諸郡惣年寄ゟ御渡、前年作損に付過分至極之御引方、此末不作有之候而者、困窮人御救方之御手當無之、作損之儀者定免之改作御法有之、御逼迫に而も御取扱方可被仰付候得共、困窮人御取扱之ため、今般御蓄米被仰付候御趣意に候。文政五年別除返上米

御取立被仰付、其節も作損方御取扱に者被仰付間敷旨被仰渡置候得共、無程作損方之方江、
右別除返上御取立米御引取、御貯用御立置にも相成不申、今般之御蓄米も右別除返上同様に
相成候而者、所詮も無之段、御郡奉行より御算用場奉行江御懸合有之候處、右様作損方江御
引取被成候譯に而者全無之旨、譯而被仰渡、何分二萬石取立可申旨被仰渡、諸郡惣年寄相談
之上、右二萬石諸郡草高に平均割に仕取立可申。米高二萬石之內三千石者、代銀に而翌年春
取立上納可仕、一萬七千石者當暮取立、御收納藏江納置可申旨相違候所、御郡所より御算用
場御引合之上御聞届、尤右御蓄米本勘常入に者相成不申候間、藏所附迄御郡所江書出、本勘
目錄指出候に者不及旨被仰渡候。右御郡々割當左に記。

一、二萬石　天保五年御蓄米納取立分

内一萬七千石　同年米納

三千石　同六年四月銀上納

右之內

二千八百十石　石川　千七百三十石　能美

千二百九十石　河北　二千六百三十石　口郡

三千九百五十石　礪波　二千六百六十石　射水

三千四百二十石　新川　千五百十石　奥郡

〆

一、惣年寄・年寄並役人にも、今般御蓄米之内を以指上候得共、下々心服も宜敷候間、何分相進指上可申、且又新田裁許・山廻り之儀も、志次第指上候様可仕旨、御郡所より被仰渡。仍而一郡當り米高之内、惣年寄・年寄並・新田裁許・山廻人々身當り米引去、殘り米高一郡草高に致割符取立。仍而年寄・新田裁許・山廻幷惣草高割當り引合而、二萬石之御取立米高也。

十一月三日。與力安武半之丞、日置知左衛門を殺害す。

〔九里夕庵等覺書〕

天保五年十一月三日小立野寶圓寺向小路與力町之内に而、盜賊改方御用相勤候日置知左衛門（永原權太夫與力祿二百石、五十歲餘。）同人おい寺社方修理裁許相勤候安武半之丞（篠原主水與力祿百八十石、三十歲餘。）及刄傷候始抹方等左之通。

日置知左衛門駕籠に乘、（先棒又八 跡棒與三松）小者嘉藏召連、役所え出候途中、同町阿部三之助門前え行懸り候處、（知左衛門宅より半町計有之。）半之丞向より來り、合羽を脫草履をはき、日置様と聲を懸候。駕籠內より答候處、半之丞に候、此間之鬱憤と言も不果、刀を拔駕籠を突候處、跡棒駕籠舁與三松駕籠之戸を引候處、右刀に被遮明不申。其內戸明候に付、半之丞を後ろより抱留候處、半

之丞袖下江手懸り候に付、其儘引倒さんといたし候處、知左衛門無透、逃し候而者不相成、半之丞後ろを拂候處、與三松足に疵付、難堪に付振放し、建杖を以取支居候內、半之丞頭を打候之處、右杖打折、いたし方無之逃去候。半之丞知左衛門は疊懸切込節、暫切合候內、知左衛門初太刀之深手に疲れ候哉、横に倒れ候處、頭江切込咽を指通し居候內、知左衛門せがれ昌太郎 二十歲餘 駈付、刀を拔向ひ候處、半之丞申入度趣意有之候間、知左衛門宅江可罷越段申聞候處、昌太郎承知に而兩人共知左衛門居宅門內江入、彼是いたし居候內、近隣菅野彌八郎・同人せがれ三太郎・田中善五郎・同人弟多仲駈付、双方取押、兩人共知左衛門宅入申候。然處早川淺之丞・小川平太郎・齋藤判太夫・辻治兵衛・同政太郎・長屋勘左衛門 生山權之丞・森嶋彥左衛門・山本勘兵衛・淺賀文右衛門・毛利左次馬等追々駈付、段々樣子相尋候處、半之丞途中に而知左衛門を打果候旨に付、其段菅野彌八郎等より寺社奉行江相達す。書付左之通。

私共儀、近邊喧嘩と申候に付、早速門前江罷出候處、日置知左衛門方之由申候に付、早速知左衛門方江罷越候處、安武半之丞・日置知左衛門せがれ昌太郎拔合罷在申候故、先引分け樣子承候處、半之丞儀知左衛門を打果候旨申聞候。依而縮方相心得、双方一類江申遣申候。右爲御斷如此御座候、以上。

菅野彌八郎
同　三太郎
田中善五郎
同　多仲

午十一月三日

前田萬之助殿
前田式部殿
品川左門殿

〔九里夕庵等覺書〕

私儀、今日母方をぢ日置知左衛門於途中相果候に付、御尋之趣奉得其意候。私無妻に付、知左衛門惣領娘貰呉候様申越候へ共、娘年若に而、遠所留守等不安心故難貰旨及斷。其後再往申越候は、年若に而留守不安心に候はゞ、知左衛門方へ致同居候而成共貰呉候様申越。元來をぢ申聞候儀を再往及斷候儀難仕、其上私家兼而居住相望不申に付、貰拂同居仕度旨及答、私家六組御歩安田甚右衛門儀相望候に付、彼方へ賣拂、五ヶ年同居いたし度旨知左衛門ゟ申入候處、承知之旨申越候に付、緣談之儀內約仕、當七月十六・七日にも候哉、同居之趣書付を以御達申候。然處同十九日頃冷飯を爲給、或は知左衛門湯あび仕候跡ゟ入可申などゝ申聞候

に付、井澤屋久兵衛と申者を以、右等之趣に而は同居仕兼心配仕候段申入候處、娘召連他へ罷越可申旨申聞候に付、左候而は先達而申入候通、遠所留守等指支候旨及答候處、間仕切に而別暮に可仕旨申聞候に付、則別暮に仕罷在候處、知左衞門隣家鈴木辰右衞門方相求不申哉、承知に候はゞ鈴木家爲賣可申旨申聞候へ共、銀子無御座候に付難罷越旨及答候。然所辰右衞門家此度賣拂候に付、家求可罷越旨申聞候へ共、右之通銀子指支候に付難相求旨申入候へば、娘致内約置候故同居致させ置候へ共、娘内約破斷に仕候間退き可申旨申聞。左程迄之事に候はゞ退き可申、併五ヶ年同居承知いたし置、只今に至り左樣之儀申聞候は、何等之儀に候哉と申入候處、同居爲致置候而は失墜も相懸り、勝手難澁におよび候間、内約までも致破斷可申候。依而退き可申旨申聞候へ共、退き所無之當惑至極仕候。元來知左衞門儀、今更勝手難澁と申儀も、於私は難辨御座候。然所私退所無御座候儀を、無理なる事を申聞候と被存候へ共、知左衞門辯才を以井澤屋久兵衞ゟ申付、色々と申聞、私無智不辯に而いたし方も無之、無是非退候事に仕、當時養いとこ水野左門方大坂詰中に候へ者、同居之趣をば承知仕候故御達申上候處、左門方御歩頭衆内談聞居之上に無之而は、御達方相成不申旨代判申聞、退き方無之に付、以前召仕候家來之方に忍罷在、寢食仕兼鬱憤難忍に付、不得止事可打果と存込、今朝中西惣右衞門・阿部三之助屋敷境に而、右知左衞門ゟ行逢候に付、逢度段申入、駕籠之戸

引候に付、私合羽帽子取除、先達而より之鬱憤之儀申述、可致勝負旨申入候處、心得候と答
脇指拔放候に付、私刀拔放候處、駕籠舁駕籠之戶建候に付、戶之外より兩度突込候處、駕籠
人足後ろより抱〆、後ろ江引留候に付、少し引れ行候處、駕籠より罷出打懸候に付受留、抱
〆居候人足相拂候へば手を放候處、又打懸候を受留、人足建杖を以取さゝへ候に付、切拂候
へば立退申候處江、知左衛門又候打懸候に付、受流踏込打留打果申候。然所江知左衛門せが
れ昌太郞、拔身を持罷越候に付立向、其方父打留候間仇打可致、併知左衛門娘民儀、是迄妻
同樣に暮居候に付、此人にも孝道爲相立申度候間、昌太郞宅江可罷越、其上兩人に而仇打可
致、左候へば兩人共孝道相立可申、みん之刄は介錯と心得可申旨申入候處、承知に而門內江
引取候に付、跡より門內江罷越、みん呼出仇打可致旨申付居候處江、菅野彌八郞等罷越取お
さへ候に付、無是非引分れ申候。駕籠舁與三松儀疵付候樣子御尋、はきと覺は無御座候へ共、
取さゝへ候節私刀障候哉と奉存、何共御上御難題を相懸奉恐入候。此上は御下知次第可奉心
得候。此外可申上品無御座候、以上。

午十一月三日　　　　　　　　　　　　安武半之丞　判

前田萬之助等三人殿

〔九里夕庵等覺書〕

私父左衞門儀をひ篠原主水與力安武半之丞と及刄傷相果候に付、其節之樣子私手前御尋被成候。知左衞門儀今朝役所に付、步行難儀仕駕籠に而罷出候處、無間も家來小者罷歸、半之丞知左衞門と及刄傷候段相達候に付、追取刀に而罷出、橫町堀安太夫門前迄罷越候處、右半之丞血刀提、私を目懸罷越に付、其儘私も拔付候處、半之丞聲を懸、暫相待吳候樣申聞、何れ私方迄可罷越旨に付、任其意門內迄同道罷越、趣意承り罷在候處、近隣菅野彌八郎幷せがれ三太郎、曁田中善五郎・同人弟多仲罷越引分候に付、達本意不申。右申上候處、知左衞門半之丞と兩人不和順之趣無之哉と被仰聞。元來私妹儀半之丞儀と緣談內約仕候に付、同人儀私方江同居仕居候處、右に付同氏と半之丞住居方之儀に付、少し宛了簡相違之儀も有之樣子に而、近頃半之丞儀御步水野左門方江同居いたし、右內約も斷申候。右に付彼是雙方心底不快之儀も有之由に御座候ゞ。併就其儀申分箇間敷儀は及承不申候。此外可申上品無御座候、以上。

日置知左衞門せがれ

日　置　昌　太　郎

午十一月三日

前田萬之助殿

前　田　式　部殿

品　川　左　門殿

十一月四日。是日以後壽々姫將に本多播磨守に入輿せんとするを以て道具を運搬す。

〔諸事要用雜記〕

御横目江

壽々姫樣御道具被遣候節、辻々警固相建、往來爲指留候に付、若指懸り候用事等申立道筋江罷出度抔申聞候者有之候而も、行列中は差扣候樣警固之者より可申談候條、下々心得違無之樣可相心得候。差急御用有之罷通候人々、脇道往來指支候分は、其段警固之者江相斷、片寄作法能可罷通候。

右之通夫々可被申談候事。

別紙兩通之趣夫々可申談旨、內膳殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御支配御申談可被成候、以上。

十月廿八日　　　　御横目

御表小將御番頭衆中

〔官私隨筆〕

十一月二日

一、明後四日壽々姫樣初立御道具被遣候付、御殿揃刻限五時過、各は五半時登城、御道具被遣候節三御丸へ罷出致蹲踞、相濟、相公初方々樣へ御祝詞可申上候。服は在合之のしめ・半上下返小紋之外勝手次第相用候筈に候由等、御用番より廻狀來る。

〔珍事留書〕

一、壽々姫樣本多播磨守樣ゟ御入輿被仰付候に付云々。十一月四日・六日・十三日御道具被爲持。右往來筋警固・町屋店飾等、御姫樣御通之節同樣之格式也。

十一月四日。家中の者請地地子銀を期月に上納すべきことを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

十一月四日

定番頭ゟ

御家中之人々請地地子銀、御定之通每歲可致上納處、難澁等を申立、期月上納相滯候人々も有之、時々御普請奉行より頭・支配人等ゟ及催促候得共、速に上納無之、勘定方難相立旨等御普請奉行申聞候に付、向後無間違可致上納旨等文政三年申渡置候處、近年又々上納延引之人々も有之由相聞候。先以不心得之儀に候。以來期月無遲滯可致上納候。若其上にも相滯候者は、人別に相達候樣御普請奉行ゟ申渡置候條、心得違無之樣急度可相心得候。

右之趣被得其意、組・支配不相洩様一統可被申談候、以上。

午十一月

十一月十三日。金澤新町より火を失す。

〔毎日帳書抜〕

十一月十三日

一、新町米屋與三右衛門方より出火、及大火、奉書火消申渡。

〔諸事要用雑記〕

一、十一月十三日曉天七時過、新町米屋與三右衛門店借より出火、無程一番丁通りへ出、新町橋爪迄兩側共燒失、六半時頃及鎮火候。拙者儀一寸御殿ゟ出、近火之儀に付無程致退散候事。

十一月十九日。壽々姫、老臣本多播磨守に入輿す。

〔諸事要用雑記〕

十一月十九日

一、壽々姫樣今日御引移に付、爲御輿迎播磨守殿登城。五つ九歩御居間書院ゟ御出、同人御用番誘引罷出、御意有之、御のし三方御表小將持出指上、御手自御のし被下、御禮。重而追

播磨守は本多政和

倍高は嵩高

付御入輿之儀御意有之、無程御入之事。

一、壽々姫樣益御機嫌能、九時前御發輿被遊候。御作法付通り、爲御見送り年寄中初三の御丸ゟ罷出、年寄中は菱御櫓下御堀端、御表頭分は橋爪之方後ろにして罷出、御近習頭者三之御丸下馬に並居、御輿御通り之時分蹲踞之事。

一、今日朝より風雨荒候事。

一、御發輿候後年寄中等恐悦申上、無程御居間書院ゟ御出御意有之候事。

一、重而御供相披候上、御供之美作守殿・藏人殿被爲召候。此時御用番誘引、御供大儀之旨御意有之。畢而內匠殿・又三郞殿被爲召候事。

〔珍事留書〕

一、十一月十九日御婚禮御送として前田美作守樣・御家老横山藏人樣御供。右に准じ御行列等都而倍高成事どもなり。

〔珍事留書〕

一、十一月廿四日壽々姫樣・播磨守樣初而之御登城。播磨守樣御家老役、同日皆子餅御獻上之御使者被仰付候事。

十一月。非人小屋に收容せらるゝ窮民大に減少す。

〔溫敬公記史料〕

十一月。至是月悲田院窮民減千七百餘人。

十二月六日。先に日置知左衞門を殺害したる與力安武半之丞及びその他關係者處分せらる。

〔九里夕庵等覺書〕

公事場奉行ゟ

篠原主水與力
安武半之丞

右半之丞儀、永原權太夫與力日置知左衞門打果候に付、先玉井賴母ゟ被預置候。知左衞門儀半之丞母方をぢ之續に候處、半之丞より仕懸及双傷打果候段、大罪之者に付、御紀之趣も有之、牢揚屋へ被入置候條、明十六日賴母より引受、右之趣被申渡、牢揚屋へ可被入置候事。

午十一月

半之丞知左衞門を打果候趣、半之丞口書之趣と駕籠舁與三松申分之趣相違に付紀有之、及對決候處、半之丞申分難相立、重々不屆之譯に而禁牢被仰付候由。且昌太郎手前も御紀有之、左之通申渡。

日置故知左衞門せがれ

日置昌太郎

同人娘

みん

右昌太郎父知左衞門儀、安武半之丞に被打果候節之首尾申分之趣、士道・孝道共取失族不埒至極候條、先一類ゟ御預被成旨被仰出。且又みん儀は是迄之通愼方申渡。

右之通之處、半之丞知左衞門妻と兼而密通いたし居候由世上雜說高く、其趣達高聽候哉、半之丞以前召仕候下女於公事場尋有之由之處、右女は存知不申、半之丞以前召仕候妾右樣之譯合咄合候儀有之由申聞に付、右妾呼立尋有之處、密通之躰見受候事有之由申聞に付、知左衞門妻手前糺有之候得共、右樣之儀可有樣無之旨申聞難決に付、及對決候へ共雙方申分難決由。依而知左衞門妻、里蓮福寺ゟ御預に相成由。知左衞門家來嘉藏主人之大事を見捨候故歟禁牢。駕籠舁又八は奧村丹後守殿家來足輕之せがれ之由に而、主人預に相成候由。然處十二月六日半之丞梟首被仰付、左之通。

梟首

安武半之丞

此ものをぢへ對し、邪心を以無筋儀を鬱憤に存、可打果と存詰、途中に待伏、駕籠に乘罷越

候處ニ拔刀を突込、夫より切むすび打果畢。大罪露顯之上如斯申付もの也。

十二月六日

半之丞寄親篠原主水ニ公事場より之紙面寫。

御自分與力　安武半之丞

右半之丞儀、前月三日母方をぢ永原權太夫與力日置知左衞門へ遺恨有之旨に而、途中致待伏及殺害候一件、於公事場御糺被仰付候處、遺恨趣意可及刄傷程之儀にも無之、却而半之丞不所存之儀有之候處、をぢを及殺害、剩其節之始末方等彼是不分明之儀も有之、重々不屆至極大罪之者に付梟首被仰付候。

右半之丞手前於公事場御糺之趣、委細及言上候處、落着如此被仰出候に付、今日首を爲刎、下口ニ梟首申付候條、此段一類ニ可有御申渡候。尤半之丞所持之品闕所爲申付、帳面二冊同様に記、白紙もとぢ込指出候樣、一類ニ可有御申渡候。家幷居屋敷之儀は、御普請會所御格之通可有御心得候、以上。

午十二月六日　　成瀨主稅等四人

篠原主水殿

右之通に候處、無程知左衞門末之娘へ御貪着無之旨被仰渡。同月廿六日昌太郎儀は遠嶋、當

時雪中に付被遣候迄牢揚屋江被入置候旨。知左衛門妻は永く蓮福寺江御預、姉娘は御貪着無之、其外何も御免之由也。知左衛門家財は、一類依賴兩人娘江被下候。駕籠舁與三松御褒詞有之、鳥目十貫文被下候段、於公事場申渡有之。然所翌日町會所より呼立有之、律義者之由褒詞有之、米七俵被下候由也。初手負候節、知左衛門一類より米・鳥目遣候由。其外にも米錢遂り候人々も有之由也。追而知左衛門娘兩人は、知左衛門寄親方江引取養育有之由也。

〔國事雜抄〕

土取場撞木町山屋與兵衛せがれ

米七俵　　與三松

右與三松儀、前月三日永原權太夫與力日置知左衛門に被雇、駕籠舁罷越候於途中、安武半之丞儀右知左衛門を打果候刻、與三松働方委曲公事場より相達御聽候處、爲御褒美鳥目十貫文拜領被仰付候儀、於此方共に忝儀に候。右樣公事場御褒美有之儀、誠に奇特之至令感入候。依之右之通遣之候條、彌御國恩難有奉存、諸事大切に相心得可申候。

午十二月　　中川平膳

澤田義門

十二月八日。小幡豹三、成瀨掃部の門に張文を行ふ。

〔本多播磨守覺〕

十二月八日

一、今朝掃部門に張文有之、自分之儀と者被存候得共、宛所無之故相達候旨に而被出之。右作州等三人奥之間に而致破封、一覧候所、御馬廻小幡忠右衛門せがれ豹三と申者、御勝手之儀心附之趣有之候得共、御奉公不申上者に候得者、御達申候手段無之故、明朝推參御達申度旨判形之紙面、掃部宛所あり。右樣之例有之候哉、調理候得共不見當。寛政中歟、故城州幼少之節、家來田村久右衛門と歟申者、家事之儀に付故城州江申達候趣有之候處、心得違之趣に付指扣被申付。其後故城州後見中、河州江申達咎被申付置候處、御横目何某被及訴候儀有之。其節は右家來不縮無之樣に、月番より被申渡候儀等、舊記に相見え候。此度のは元來心付達度与存候處者宜候へ共、致方不宜。依而不縮無之樣にと申程には及間敷と各段々申合候上、余・坂井小左衛門別席に而逢、右之趣申入。依而先外出指留候樣頭江可申渡、心付之儀は跡より相尋申に而可有之。訴狀幷頭へ申渡候覺書下物上之候處、卽日伺之通与被仰出候由、同人演述に付、頭志村平之丞呼出、覺書渡之。

志村平之丞江

小幡忠右衛門せがれ　豹　三

余は本多播磨守

右豹三儀、成瀨掃部門ゟ致張文候。心付之趣申出度儀に候はゞ、其筋ゟ致様も可有之處、御法を犯候段、心得違之儀候條、先外出指留相愼罷在候様可申渡候。心付之趣は、追而相尋申に而可有之候事。

十二月十日、志村平之丞ゟ

小幡忠右衛門せがれ　豹　三

右豹三儀、御勝手御難澁に付、心付罷在儀趣相認指出、相達御聽候處、最初致張文候儀は、心得違に候得共、御國恩を存付申出候儀、奇特に被思召候旨被仰出候條、此段被申聞、外出指解可被申候事。

右申渡之書立、卽日以雅樂助被返下、伺之通可申渡旨被仰出、平之丞呼出申渡。

十二月十日。本年の造酒石高を三分の二とすべき幕令を傳ふ。

本年七月の參照

〔御郡典〕

諸國酒造三分之二造之儀に付、從公儀相渡候御書付寫一結二通相達之候條、被得意、夫々可被申渡候。且當春申渡置候三分二に當る酒造道具縮方被申付候內、各於手合指解、三分一之道具縮方嚴重可被申付置候、以上。

午十二月十二日　御算用場

淺加伊織殿
菊池九右衛門殿

諸國酒造之儀に付、大御目付土屋肥後守殿より到來之御書付寫一通相越之候條、被得其意、前々之趣を以夫々可被申觸候、以上。

甲午十二月十日　奥村丹後守

篠原監物殿
原五郎左衛門殿
有賀甚六郎殿
石黒宇兵衛殿

本文は幕令なり

大目付江

諸國酒造之儀三分二減石可致旨、當五月中相觸候處、當年は諸國豐熟之趣相聞候間、追而及沙汰候迄は、去巳年以前迄造來米高之三分一相減、三分二可致酒造候。尤去巳年以前迄造來米高幷減石高共書付にいたし、御料は其所々奉行・御代官、御預所・私領は領主・地頭より早々可指出旨相觸置候間、其節指出置候書付に而、右數委曲相譯り可申儀に付、此度は別段書付指出候に不及候得共、其外之儀は是迄之通相心得、減石之儀彌嚴重相守可申候。若過造等い

たすにおいては、其者は勿論、其所之役人迄吟味之上、急度可申付候條、心得違無之様可致候。

右之趣御料・私領・寺社領共、不相洩様早々可觸知者也。

午十一月

右之通可被相觸候。

十二月十九日。本年を以て増借知の年限盡きたるも尚當分之を繼續すべきことを告ぐ。

〔每日帳書拔〕

十二月十九日

一、御借知増方五ヶ年中改而被仰付置、當年に而年限相滿候得共、御勝手御窮迫至極之上凶作に付而、當分都而是迄之通、御借知　御借米被仰付候旨等、頭分以上御殿へ招申渡。

〔御郡典〕

御家中御借知等之儀、去る寅年より五ヶ年中改而増方被仰付置候處、當年迄に年限相濟候得共、御勝手御逼迫至極之上、去年凶作莫大之御引高に相成、彌以御運方御六ヶ敷、依之不被得止事、當分都而是迄之割合之通御借知米被仰付候。御家中之人々においても可爲難澁儀、

深く御心痛被爲在候得共、前文之ごとく誠に無御據次第に候條、是迄等之趣致會得候樣可申聞旨被仰出候。

右之趣被得其意、組・支配ゟ不相洩樣可被申渡候、以上。

十二月　　本多播磨守

十二月廿四日。御郡方に於ける宗門改の手續を改む。

〔官私隨筆〕

十二月廿四日

御郡奉行ゟ

每年宗門改御步横目三州相廻、惣年寄等判形見屆來候へども、以來各支配之分は都而各に而判形見屆、改帳等可被差出候事。

午十二月

御横目ゟ

每年宗門改御步横目三州相廻、惣年寄等判形見屆來候へども、以來御郡奉行支配之分は、右奉行にて見屆候樣申渡候。遠所町方等曁御預所村々宗門改之儀は、是迄之通御步横目相廻見屆候筈に候條、被得其意可被申渡候事。

十二月廿六日。來年頭より諸郡惣年寄等に通り懸りの目見を許し、且つ年寄並の苗字を稱し得べきことを告ぐ。

〔司農典〕

御郡惣年寄幷年寄並之者、來年頭より御通り懸御目見被仰付候節、御禮錢代百疋宛献上爲致可申候。

右之通、今日御用番播磨守殿被仰渡候事。

午十二月廿六日　　御郡奉行

諸郡惣年寄中・年寄並中

〔每日帳書拔〕

十二月廿六日

一、御郡年寄並之者共、以來苗字爲名乘可申、且御郡惣年寄幷年寄並之者、來年頭御通懸り御目見之節御禮錢代百疋充爲上可申旨等申渡。

十二月廿八日。藩の財政窮乏するを以て諸士の役料知に借上を命ず。

〔本多政和覺書〕

十二月廿六日

一、左之覺書御勝手方より被出、申渡日限之儀者跡より可被申聞旨執筆を以被申聞。右廿八日申渡。

御勝手御運方之儀、其以來種々御僉議被仰付候へ共、根元御取箇に不致符合、年々過分之御不足相立候に付、次第に御窮迫至極に相成候。如斯に而畢竟被成方も無之に付、今度猶又格別御省略等を以、此末御運方之處格別に御僉議被仰付候。依之頭分等役料知之儀は御格も有之候得共、不被得止事別紙割合書之通御借上、手替足輕等茂御減少被仰付候。御家中一統御借知等之儀、來年よりも是迄之通被仰付候上、役料知迄も御借上之儀、何茂難澁之程深く御察入、御心痛被爲在候得共、誠に無御據次第に候條、何茂會得いたし、心服を以御用立可申候。此段可申渡旨被仰出候。右之趣可被得其意候、以上。

十二月　　本多播磨守

役料知御借上之割

千石以上役料高　百石に付　七十石宛

八百石以上　同　五十石宛

六百五十石以上　同　三十五石宛
四百五十石以上　同　二十五石宛
二百石石以上　同　十五石宛
二百石以下之人々　同　七石宛

一、頭分・平士・坊主頭迄茂、都而役料知之分は右割合を以御借上之事。
一、御射手・御異風弓手料等も右割合を以御借上之事。
一、頭分手替足輕・小者、幷御郡奉行等被下足輕、都而五人之分者二人御減少、三人以下は一人宛御減少被仰付候。自然手替等揃不申而難相成時者、臨時御渡可有之事。
一、右役料知御借上之分、都而銀納に被仰付、來年より五ヶ年御借上、手替足輕等茂右年限中は減少被仰付候事。
　但、銀納方之儀は追而可申渡候事。

十二月廿八日。諸郡惣年寄・年寄並等蓄米に盡力せしを以て賞せらる。

本文以外の惣年寄に對する賞賜等は略す

〔郡方御觸〕

御上下一具・白銀三枚宛　礪波郡惣年寄　石崎彥三郎
　　　　　　　　　　　　能美郡惣年寄　北村與右衛門

石川郡惣年寄　水内六左衛門

右今般御蓄米之御趣意會得方宜敷、一統江申談方行届、身分々々より茂致指上米候由達御聽、奇特之事に候。依之格別之趣を以被下之候。尚更農事勢子方等彌厚心懸、此末萬端御用立候之様可相心得候。此段可申聞旨被仰出候。

十　二　月

今日於御次、石崎彦三郎等結構被仰出を以、拜領物被仰付候に付、別紙兩通之通分而被仰出候條、急度被得其意、聊心得違不致被可相心得候。依而御本紙相渡候條、寫取可相返候、以上。

午十二月廿八日　　　御郡奉行

諸郡惣年寄中・年寄並中

此度拜領被仰付候御上下幷染物、御用之節之外者着用不相成儀勿論之事候條、此段惣年寄共等江可被申渡候事。

午　十　二　月

當年御郡方御蓄米之儀被仰出候處、惣年寄共等孰茂御國恩を存付致出情候に付、今般御紋之御品茂拜領被仰付、且又年頭御目見之節献上物等之儀、各依願御聞届有之儀者、出格之御取

扱に候得者、一入孰茂職分相勵、猶亦百姓成立方等専要相心得可申候。自然茂今度右取扱に乘じ、身分を忘れ僣上之儀等有之候而者、御趣意に茂違申儀候條、衣食住等之儀を初、都而文政二年被仰出之通、少茂無違失相守、奢侈不心得之族無之樣、嚴重可申渡旨被仰出候條、右被得其意、右之趣得与可被申諭候事。

午十二月

十二月。諸郡惣年寄以下の轉役したる場合に於いてはその役料を日割とすべきことを定む。

〔司農典〕

御仕法以來諸郡惣年寄・年寄並・新田裁許・山廻轉役等有之節、役料月割、鍬役米日割を以相渡候得共、今度僉議之上役料之分も日割を以、以來可相渡候條可得其意候、以上。

午十二月　　　御郡奉行

諸郡惣年寄・年寄並中等

天保六年

正月朔日。前田齊泰金澤城に年頭の禮を受く。

〔諸事要用雑記〕

正月元日

一、益御機嫌能被爲遊御超歳候。六半時過御目覚被遊、御椽中御膳被爲召上、畢而於御上段大福等御祝方御祝被遊候。

一、四つ三歩御表江御出、御小書院江御着座、諸大夫之面々御禮、若年寄迄相濟、夫より御大廣間御下段御着座、人持・頭分一統御禮被爲受、相濟被爲入候節、鶴之庖丁御料理頭松本是太夫相勤、御覧被遊、無程御入被遊候事。

一、九時前重而御表江御出、最初相濟不申人持・頭分・御大小將より坊主頭迄一統御禮。御入之節御居間書院三之間に而、犬千代丸様御側小將幷御近習之人々御禮。相濟、舟之間に而御表小將御禮。相濟御入被遊候事。

〔御家老方諸事留帳〕

正月元日

一、六半時過登城、四つ時過各御小書院において御禮申上候。當時人持幷頭分一統禮に付、御小書院相濟大廣間江御出御禮被爲請。御後より參、矢天井之間後にして据居候事。

右之節御唐紙將監・庄兵衛、御先立外記之事。

一、重而御出、大廣間において御大小將等御禮被爲請。右御出之節山城守使者、矢天井之間において御通懸り御禮之事。

一、月番より席に罷越候樣申來、主附將監御次に付拙者罷出候處、御熨斗頂戴被仰付候旨演述。餘程在て御熨斗頂戴、二ノ間に而若年寄之外向合せに而頂戴。御禮御臺所奉行荒木平左衞門を以申上候。

一、鶴之御吸物御下、御內々に而近年頂戴被仰付、二ノ間に而各列座、御膳奉行永原猪之助申述。追付頂戴、御吸物鶴二切・つき牛蒡・薄輪大根・蕁菜、御吸物一篇、御引盃、御取肴松葉鯣。右御禮御膳奉行永井平吉を以申上候事。

一、八つ時前退出、直に御廣式江罷出、年寄中一集に相成、村田定之助を以申上候事。

正月二日。謠初の儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

正月二日

一、七時御表江御出、追付御謠初御規式相初り、年寄中等御盃頂戴。相濟、御流頂戴被仰付候。御肴役美作守。內膳。相濟、七つ七分過御入被遊候事。

正月十九日。具足の鏡餅直を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

正月十九日

一、今日御鏡餠幷御身鏡頂戴有之。御禮御臺奉行幷御臺所奉行江申述。

正月二十日。本年より更に借知を命ずべきを以て儉約を勵行せしむ。

〔典制彙纂〕

御勝手向御逼迫至極に付、御家中之人々茂可爲難澁儀に候得共、今年よりも當分御借知等被仰付、頭分等役料迄も御借上之義被仰出、一統申渡。右樣被仰付候儀、御上において御心外至極之御儀に候得共、被成方も無之に付被仰出候儀に候。ヶ樣之御時節に候間、猶更御家中之人々暮方等質素相心得、萬端節儉を以取續可申儀肝要に候條、風俗等之儀每度被仰渡候通、心得違無之樣急度相心得可申候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意――

正月廿日　前田美作守

正月二十日。江戸詰中に於ける諸士儉約の心得を諭す。

〔典制彙纂〕

江戸表御式臺を初、御表向都而綿衣等麁服着用可致旨等、前々被仰出置候。當時別而嚴敷御

省略中之儀に候間、當御在府より以後、當分都而綿衣專に着用可致候。上使等押立候御客之節は、輕き絹類相用、御一門樣方等御出之節、前日爲御知之分も、常御見廻懸り之振に候得者、綿衣等着用可致候。御內輪相勤候人々者、猶以可爲麁服候事。

但、何与歟御含に而御設有之、御客之節者其時々着服之儀、御客方より可申談候。

一、江戶詰中於御貸長屋無益之參會致間敷候。都而小屋暮方之儀質素に相心得、入ざる慰事抔に長じ、費ヶ間敷儀勿論有之間敷候事。

一、餞別幷土產物堅可爲無用候。詰中金澤より食物類相送候儀等、近頃別而致增長躰に候。右樣取遣之儀相互に堅指止可申事。

一、足輕已下之者共も、尤小屋暮抔、分限不相應之族無之樣可相心得候。御門外たりとも綿服之外は不相成、尤夏之服も右に可準候。刀・脇指拵も、金銀相用候儀者堅不相成候事。

附、御家中家來・若黨・小者之內にも、衣類等不相應之者も有之樣子に候。已來其主人より嚴重可申渡候。

右等之儀に付而者、前々より被仰出候趣、御參勤之時分申渡候得ども、追々嚴敷被仰出候趣申渡候故、享和三年以來分而不申渡候。然所文政七年從金龍院樣着服等之儀被仰出、江戶表詰人服之儀も、殿中之外者都而綿衣相用候儀可爲勝手次第、其品々之儀者人々之心得も可有

之事に候旨等申渡候處、中に者會得違も有之哉、過不及候躰も相聞え候に付、御内輪に而も麁服着用之儀、被仰出置候通相心得可申候。江戸表始御公界向之儀者、絹等着用之儀、今度被仰出以前通可相心得旨、同前慕從御當代樣被仰出、一統申渡候故、不斗致心得違、御表向者綿衣着用致間敷事之樣に相心得候哉、近年麁服相用候儀者無之躰に候。其外無用之參會等之儀も、每々嚴重被仰出申渡置候所、是又心得違之人々有之体に候。自今之儀、右之條々嚴重可申渡旨被仰出候條、無違失相守可申候。近頃別而嚴敷御省略等被仰付候得共、御勝手御運方御急迫至極に付、江戸表之儀猶又此上御僉議之品も可有之御時節に候間、一統御逼迫之御樣子奉恐察候。猶以無用之費を相省、精誠遂勘辨、聊も御難題に不相成樣、急度相心得可申儀可爲肝要候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々へも嚴重可被申渡候事。

定番頭江

別紙之通當春御參勤御供之人々江申渡候。御外邊すら麁服着用之儀に候へば、於此表は猶以右に準遂省略、麁品を相用、不益費無之樣嚴重相心得、尤餞別並贈物等向後堅指止可申候。且又以來江戸交代等に而罷越候人々も、兼而相心得罷在、無違失相守可申候。

右之趣被其意、組・支配等不相洩樣一統可被申談候事。

正月廿二日。前田齊泰の子利順の病疱瘡と治定す。

〔宮私隨筆〕

正月廿八日

一、龜丸殿當十七日夕より少々御熱氣被爲在、翌十八日御同樣之御脈狀も一等御進み、御面部亦疹御發、十九日御惣身御發物被爲見、同廿日御熱氣餘程御解、御脈狀も御平常に而、御發物は御紅滑、御血色も御宜、廿一日御同容之處、廿二日之所に而御疱瘡御治定、御順症被成御座候段、山城守殿等より廿二日不時立町飛脚早飛脚步に傳附、只今申來候付、相公樣へ恐悅中上候間、自分には以紙面申上候樣にと之趣。且又龜丸殿へ明日出以紙面御容躰相窺、姬君樣へ以紙面恐悅中上候筈之旨も被申越之、及返書。

〔諸事要用雜記〕

正月廿八日

一、龜丸殿御疱御治定之段、廿二日立早飛脚今日到着。隨分御順症之由に候事。

正月廿七日。東本願寺の遷佛式に身分不相應の喜捨を爲し又は窃に參詣することを禁ず。

〔郡方御觸〕

東本願寺先達而燒失之處、再建成就に付、來る三月遷佛之躰に付、門徒共種々致寄進、御領國中一向宗之寺庵追々上京に付、新に法衣等出來申立、且家々奉加相勸候躰相聞候。右再建に付而者、先達而御門主より、國々門末惣門徒共江之教化にも、寄進者自分にかなひ候報謝之程、委細に被示置候趣ども有之處、身分不相應致寄進候而は、去々年之作難に而過分之御償米茂被仰付、御上御難澁之程茂不存付事に相當り、御門主より之教化にも不相叶儀に候。若身分不相應致寄進、且那寺より之勸化にも多割符候樣之儀相知候においては、嚴重可申付候。

右遷佛に付末々迄拔々致上京候者多候而者、出作怠にも可相成候條、無油斷制方可有之儀に候。且又御郡方より上京いたし候者有之節、届方如何いたし候哉。中に者且那寺へ對し存念有之、上京之序に者本山向江惡敷申成、後住抔障に相成候樣之儀茂有之躰相聞候條、上京之儀届不相洩樣申渡置、届之時分共樣子に寄、成丈不承届樣有之可然候。

一、寺庵官位昇進之節、門徒江勸化之儀者、寺社奉行より御郡奉行江詮議之上、昇進願有之振に相成居候處、門徒共申談、表向は目立不申樣仕成置、內證に而致寄進候族も有之躰に候。是等之儀相知れ候においては者、急度可申付候條、心得方嚴重可申渡置候。

右之趣御郡奉行より年寄共等江得与申渡、御門主より之教化を守、人々實意相立候樣可申談旨、御郡奉行へ可被申談候。尤寺社奉行江茂、寺庵心得方改而申渡置候事。

正　月

寺社奉行江

當年東本願寺堂塔再建成就に而、來る三月遷佛有之躰に候。右に付門徒共身分不相應之寄進等いたし候躰相聞候付、別紙寫之通り御郡奉行より夫々申渡筈候。依之一派之寺庵も心得方嚴重に可被申渡置候。依別紙寫相渡候事。

別紙兩通之趣被得其意、配下之寺庵江心得方夫々嚴重可被申渡候、以上

正月廿七日　　前田式部

正月。能登口郡の十村等難破船の取捌に關する慣習を上申す。

〔御郡典〕

御領國浦方之船幷他國船、沖合難船いたし、御領國諸浦江飄寄候節之取捌方、委細可申上旨被仰渡、奉得其意候。右樣之船致濶入候節、船頭より難船之趣浦役人江及屆候得ば、其役人早々罷出、夫々見請、旅人介抱仕、荷物等縮方申渡置、御用取次所江及斷候に付、早速手附指出爲見請、浦役人より紙面取立御達申上候。都而船頭・浦役人相同じ、難船之樣子將亦積荷

等一々見請、濡損等有之再積難成品々、陸揚爲致縮方仕置、尤舟宿江は一切預り物等不爲致樣申渡、曁介抱等之儀能々申付候。右陸揚荷物、入札拂与歟糶賣与歟船頭願出候得ば、近邊村々江觸出、商人大勢罷越、手附浦役人等立合爲賣拂申仕來に而、尤浦仕廻之節は、浦役人より指出候浦手形に請拂諸指引委細に書記、組主附奥書を加へ、船頭江相渡申儀に御座候。若難船之儀に付故障有之斷出候節は、御達申上、組主附直詮議仕、入組候儀有之、且積荷之内紛敷品御座候得ば、御指圖を請取捌申仕來に御座候。舟宿之儀、別段御縮方被仰渡之品も無御座候得共、船頭等馴合、積荷物預り物等紛敷儀一切不仕樣、組主附幷村役人等より兼而御縮方申渡候振合に御座候。右商船取捌方仕來之趣、就御尋に御達申上候、以上。

未　正　月

岡部七左衛門
三輪宇八郎
眞館彌左衛門
當摩太間
喜多一三郎
上嶋藤右衛門
北村淸右衛門

御郡御奉行所　　　　　　　　　　　　　　　高橋平兵衛

正月。御算用場奉行出納に關する豫算を提出す。

〔横山氏藏文書〕

天保六年正月御算用場より指出、同年八月御借財御仕法御符合之取しらべ等、江戸表へ相伺候紙面に相添候分拔出、後年見易きために書拔候事。

御平生御出納凡圖り。但、追々御仕切銀に相成候ヶ所も記候事。

入之部

一、二十三萬三千八百十九石餘　　　御收納高

但、十ヶ年平均を以一ヶ年當り

一、二萬九千二百三十六石餘　　　諸返上米等

但、同斷

一、千十九石餘　　　江州今津等御收納高

但、同斷

一、三百三十一石餘　　　古米繰々

但、同斷

〆二十六萬四千四百五石

拂之部

一、百二十二石餘　　御膳米

但、十ヶ年を以平均一ヶ年當り

一、二百七十八石餘　　御臺所米

但、同斷

一、二千九百十九石餘　　御藏返

但、同斷

一、六萬百四十七石餘　　定不時下行

但、同斷

一、千五百十九石餘　　御知行割御扶持高

但、同斷

一、二千五百九十六石餘　　過上塩代米

但、同斷

一、二萬九千六百七十二石餘　塩手米
但、同斷
一、百五十石餘　素麫代米
但、同斷
一、五百石　勝興寺御合力
但、増減無之
一、十四石餘　白山地不足渡り
但、同斷
一、七石餘　猪狩御褒美
但、十ヶ年を以平均一ヶ年
一、四十九石餘　追詰米藏敷
但、同斷
一、二百五十三石餘　川下雜用
但、同斷
一、三千石　御郡所雜用

但、當時此石高に相成候

一、二百五十五石　　　　　　　　塩原村等御仕入

但、增減無之

一、五　百　石　　　　　　　　　諸郡堤入用

但、卯年より未年迄

一、七十五石　　　　　　　　　　舟倉江さらへ入用

但、增減無之

一、百三十石　　　　　　　　　　室山野除米

但、同斷

一、八十七石餘　　　　　　　　　同所用水入用

但、去巳年石高

一、二千五十七石餘　　　　　　　貧村御救米

但、十ヶ年を以平均一ヶ年當り

一、五千九百二十石餘　　　　　　變地御償米

但、同斷

一、七百四石餘　　　　非人小屋

但、同斷

一、二千九百八十五百餘　　　　百姓斗過米

但、同斷

一、八百六十六石餘　　　　新變地取扱

但、同斷

一、二百七七十石　　　　河北郡除米

但、增減無之

一、千百五石餘　　　　火事家御貸米

但、十ヶ年を以平均一ヶ年當り

一、七百石　　　　粟ヶ崎村藤右衛門・德兵衛江被下米

但、當時增減無之亥年迄

一、一萬石　　　　非常御手當籾正米

但、當時二千五百石に候へ共右石に相立申候

一、四萬石　　　　作難御貸米

內一萬五千石　引替所江相渡、水作難に而不足有之候得ば、町在御用銀を以相辨可申事

〆十六萬六千八百八十石

一、二萬八千八十二石計　現米延拂米

但、十ヶ年を以平均一ヶ年當り

二口合十九萬四千九百六十二石

殘而六萬九千四百四十三石　御廻米

內一萬八千四百廿七石計　運賃等大坂等御扶持江戸御廻米

入之部

一、二千五百五十貫八百目計　五萬千十六石代、石に付五十目圖り

一、四千百四十五貫四百目餘　諸方御土藏上り

但、十ヶ年を以平均一ヶ年當り

一、二千四百二十九貫目餘　御算用場上り

但、同斷

三口合九千百二十五貫二百目

拂之部

一、三千三百四十八貫五百目餘　　小拂所渡り

但、十ヶ年を以平均一ヶ年當り

一、五千八百六十貫四百目餘　　江戸惣御入用中勘

但、五ヶ年を以平均、一ヶ年當り町方御借財七千三百八十九兩、計代四百六十五貫五百目

引去り殘り高

一、七百貫目　　京大坂小拂

但、此分此表に而相知兼候付凡圖り

一、三百二十八貫目　　御作事定不時銀共

但、當時定銀二百七十八貫と相成、不時銀五十貫目と相立申候

一、五十貫目　　長棟山銀代

但、當時此銀高に付相立申候

一、百八十貫目　　御次御用

但、同斷

一、二十貫目　　町會所償渡り

但、同斷

一、百二十五貫百目餘　　出銀渡り

但、十ヶ年を以平均一ヶ年當り

一、百八十一貫二百目　　御用地地子米代等

但、此分近年より御算用場直渡りに相成、其已前之處急に相知兼候付、二ヶ年平均を以一ヶ年當り

一、二十二貫五百目餘　　壽々姫樣江被進御知行千石代石五十目圖、但夫銀共、

但時相場之事

一、六貫八百目　　右同斷、被進金百兩代

〆一萬八百二十二貫五百目

付札、本文二口之御入用、當時に而は、御不足四百二十貫目內之御埋合に相成候。只今此所に而相省指引立候而は、先達而入御覽候分与致相違、其上御次御入用を始、是迄之渡高を以惣御不足取圖有之候付、追而別段御符合之御圖り方仕立候節、本文二口之御入用相省可申候。

指引して千六百九十七貫三百目　　御不足

右之外六百貫目　江戸不時御入用
　三百貫目　御國不時御入用
三口〆二千五百九十七貫三百目
　此方に
百五十四貫六百目　諸方上り當時增高
四百七十一貫目　御算用場上り右同斷
〆六百二十五貫六百目
　指引〆
千九百七十一貫七百目　惣御不足高
　此分惣御入用之内を以御埋合

正月。從來御納戸銀を以て下賜したる給銀の一部を御郡打銀に移すの件を議す。

〔諸事留〕

　覺

一、十貫百四十目　△船渡守

一、二貫八百目　△御鳥見
一、一貫九百二十目　御藏番
一、四百目　新川口留番人
一、一貫二百目　御塩懸相見人
一、一貫百六十目　御塩升取人
〆十七貫六百二十目
三角印之外
〆四貫六百八十目

右御鳥見等御給銀、是迄御納戸銀を以御渡御座候得共、今度御詮議之趣有之、諸郡村々煩敷儀可相成丈御省被下度旨。就而者前段御給銀之內諸郡打銀を以加入御渡被成度旨、御內御詮議之趣被仰渡、奉得其意申候。元來諸郡打銀、諸御郡々々渡り方不足仕候得共、打銀相增候而は下々迷惑仕儀に付、前々被仰渡之趣有之、尤近來御郡方取立物多、難儀迷惑仕罷在申儀に御座候。乍併御當節之儀、曁御郡之內煩敷儀御省き可被下儀に御座候はゞ、諸郡打銀渡り之品之內御郡打銀を以相辨じ、其見替を以、前段御納戸銀を以御渡之內四貫六百八十目之分は、先當分諸郡打銀を以御渡御座候而も可然哉に奉存候。御鳥見幷船渡守御給銀之內は、是

迄之通御納戸銀を以御渡被下候様仕度奉存候。尙更追而私共内詮議之趣、別紙を以御達可申上候間、御詮議被下候様仕度奉願候、以上。

未正月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　諸郡惣年寄連名

御郡御奉行所

二月三日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

二月三日

一、今日兩學校江九半時之御供揃に而、八半時前御出、七つ二分御戻被遊候事。

二月三日。郡方の者等他國他領より金銀を借用することを禁ず。

〔郡方御觸〕

御郡方之者共、他國・他領・御代官所より金銀等貸借いたし候儀、前々御停止、尤借金いたし候者有之において者、追出申付候旨申渡置候處、中に者御郡之内心得違之ものども有之、寶曆年中以來新川郡等村々之內、飛州金借請候者有之、返濟方相滯掛合に相成候儀。借請候者ども、其時々急度手當之上返濟方申渡、若向後借請申もの於有之者、先格之通追出申付候旨等、其時々先役共より申渡置候。然處今度新川郡犬嶋村彥右衞門等飛州金借用、返濟方之儀

申渡候様致度旨、同州御代官大井帯刀殿手代齋藤勝平等より申來、彼是餘程年數茂相立、双方共及違亂候躰に付、今度返濟方下濟之趣に申渡候間、以來御郡之者与貸借取組不致様、夫々觸渡有之候様、右勝平等江申遣、別而御代官所之者共より借用金相滯候分者、公訴之沙汰を以願出候趣に付、品により不容易儀も可致出來、左様之儀於有之は、借用いたし候ものは勿論、其所一統之難題与相成候哉も難計儀に候。右等之趣者いづれも承知可罷在儀与存候得共、心得違いたし候もの共も有之に付、今度改而一統申渡置候。以來右躰心得違之者有之、先々役筋より懸合之儀致出來、左様之節假令下濟を以先々金主手前相濟候とも、本人者不及申、請人又者取持いたし候者ども迄茂、無用捨嚴重遂穿鑿、夫々手當之上、本人之儀者先格之通追出しに可申付候條、御郡方之者ども一統心得違不致様、嚴重可相心得候事。

右之趣得其意、御郡方町・在役人共江、其許中より夫々不相洩様可申談候。且分役之人々江茂、向寄より可及演述候、以上。

未二月三日

内藤十兵衛

林　源多郎

新川郡之外諸郡惣年寄・年寄並中

二月六日。前田齊泰の子利順の疱瘡癒え酒湯を浴す。

〔官私隨筆〕

二月十三日

一、龜丸殿御疱瘡段々御順症に被爲在、去六日御酒湯被爲引、御湯後何之御替も不被爲在、益御機嫌能被成御座候段、山城守殿等より申來候由等、御用番より以廻狀申來。

廣坂御廣式は本多播磨守政和夫人

二月十四日。前田齊泰、齊廣の女壽々姫を本多播磨守の邸に訪ふ。

〔諸事要用雜記〕

二月朔日

當月十四日蓮池御庭より廣坂御廣式江御立寄可被遊旨被仰出候。御庭縮之振に而、都而播磨守家來之分は不指出筈に候。榮操院樣御初も被爲入候間、尙又二御丸御廣式頭曁松平織人等も夫々示合、遂僉議可被相伺候事。

二月十四日

一、今日四半時御出、蓮池通廣坂御廣式江御立寄、夜八半時過御戻り被遊候事。

〔大鋸文書〕

天保六年未二月十四日播磨守殿廣坂御廣式江宰相樣御立寄、榮操院樣・基五郎樣与御三方樣御入、相公樣御亭御入之上飾付御道具再三御覽、幷飾付道具目錄御覽被遊候而之御意には、

播磨守者大家故取合珍敷道具被遊御覽、近來御目正月被遊候段被遊御意候事。御歸城御同日五更前之由。

翌十五日播磨守殿御登城之上、御用部屋を以被仰出候に者、播磨守色々道具取合、并種々馳走に而及深更、御喜悅至極に被思召候段、御用部屋を以被仰出候。此段播磨守様より廣坂御廣式懸り御役人等へ十六日御披露有之候由。

二月十六日。人持組頭、その組中に藩の寺方普請入用銀を献納せんことを勸告す。

相組は人持組なり

〔本多政和覺書〕

二月十六日

一、御勝手向次第に御窮迫至極に付、去年以來尙又格別嚴重之御省略等を以、此末御運方之儀御詮議被仰付候。就夫此度頭中等役料御借上、手替足輕を茂御減少被仰付候。各に者大身之處、右等之釣合も有之候間、可相成は何卒御領國御寺方御普請御入用之內、當年より五箇年許茂御手傳被申上候樣致度候條、先內々申試候樣にと御勝手方より申談に付、此段及御演述候條、相組中御申談候而、手繰可相成御面々者、銀高之多少によらず成丈御手傳御申上候樣にと存候。一統難澁之時節、面々手前茂指閊可申候へば、强而過分に被指上、以後御奉公

等之指障に相成候而者趣意違可申候間、精誠被遂節儉、取續方不指支程之所を以、成限り御用立被申候樣致度事に候。此趣面々得と御心得候而、何程被指上候段夫々直に可被書出候事。

二月十七日。江戸詰の者の不時拜借願を許さゞるべきを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

二月十七日

今般格別御省略に付、江戸表においても嚴重御僉議有之筈之旨等表向申渡有之通に候、ヶ樣之御時節柄に付、御次内においても、指定り候被下方も御減少被仰付候程之儀に候へば、不時拜借願等彼地においても一切難及僉議候條、人々共心得を以、着服・小屋萃等專ら節儉いたし、願方申出間敷候。

右之通一統御申渡可有之事。

右石野等より申談候事。

二月十九日。小松御城番前田織江足輕をして鐵炮を以て捕鳥せしめ、爲に逼塞を命ぜらる。

〔本多政和覺書〕

二月十九日

一、小松御城番前田織江役儀被指除逼塞被仰付、詰中に付出府之儀被申談候處、罷出候に付、今夜於內膳宅又兵衞立合被申談。右は小松邊舟に而足輕等に鐵炮爲打鳥取候趣に付而也。表へ出被仰付候上、品不輕に付不心得之趣有之旨を以如斯。御城付足輕等夫々御扶持被召放。

二月廿二日。越中守山の猿曳七右衞門に鑑札を與へたることを告ぐ。

〔御郡典〕

射水郡守山町猿曳七右衞門儀、由緒有之、御領國在々牛馬厩祈禱に相廻り候處、近年紛敷猿曳立入、右七右衞門名前謀り有之、祈禱致歩き候由に而、七右衞門儀及迷惑候旨歎出候に付、於在々猿曳相廻候節、名前等得与聞糺、右躰謀り者に候はゞ、役所へ召連罷出候樣、委曲紙面を以去々年十一月諸郡一統申渡置候處、今以右樣謀り者有之、祈禱に歩き候儀有之由に而、七右衞門重而相歎、見合印札等之儀願出候趣有之に付、猶亦今度詮議之上、猿曳爲見合、役所より燒印之木札七右衞門江相渡、在々江祈禱に相廻候節致持參候樣申渡候。依之右印札寫別紙一枚爲見合与相越之候條、得其意、村々に寫取置、以後猿曳相廻候節、右見合を以札相改、祈禱爲致、紛敷者立入不申樣取調理相心得、牛馬所持之者共江夫々不相洩樣可申渡置候。若此段右見合札不致所持猿牽、祈禱に相廻候族も有之候はゞ遂穿鑿、彌謀り者之儀相顯れ候

本年閏七月廿八日の條參照

はゞ召連、御郡々向寄役所江可斷出者也。

未二月廿二日　　御郡奉行

諸郡村々役人

二月廿四日。前田齊泰の子利義の髮置の祝儀を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

二月廿四日基五郎殿御髮置御祝、御白髮土肥權六郎指上なり。

二月。算用聞役等に命じ諸色の直段を調査しその下落を計らしむ。

〔郡方御觸〕

近年諸色高直に相成、中には米直段等に茂不拘品迄も、無謂直段引上、高利を貪り候者茂有之躰、不屆至極に候。米穀高直に付、諸色之內直段引上り候品茂可有之、都而米穀價准じ可申道理に候得共、諸色之直段一旦引上候得者、容易に不致直下、甚不正之至に候。所々宿立等に申付置候算用聞役之者共、諸色吟味方等専用之品に候處、近年等閑至極に相成候之躰。夫故商人共於手前茂猥に相成、不埒之至候。今般御用番年寄衆より、譯而被仰渡之趣茂有之に付、追々遂詮議可申渡品茂可有之。併諸色直段而已致省略候而も、品物出來方劣り候而者共詮茂無之候。乃至豆腐一箱に候はゞ、箱寸尺相改、大豆等何程を以豆腐一箱致出來、潤色何

程引、何程に可賣出与申儀、綿密に書記可相達候。酒直段之儀何程与申儀、於役所承屆候向茂有之候得共、全左樣にも無之候條、每歲酒造込之時分、前價に准じ可賣出、右等に茂不限、都而商人共取扱候品、何品に不寄直段之儀綿密に取しらべ可書出候。

一、批賣米之儀、每月役所江書出候向茂有之候得共、批屋共於手前書出置候直段之米賣切候抔与申立、別搗之名目を以增直段を懸賣捌候儀も有之躰に候。宿所之儀は旅人往來茂有之に付、上白米等貯置候之儀は可有之候得者、兼而取極置候直段之米賣切候抔与申立候儀者有間敷筈。不埒之至に候條、白米數品取扱不申、兼而取極置候直段通賣渡、尤米搗方豎升目等少も不正之族無之樣嚴重申渡、若不正之者有之候はゞ無用捨可及斷候。是等之趣第一所々算用聞共無油斷相心得罷在、表向書付を以斷出兼候儀も有之候はゞ、役所江罷出直々可申聞候。

一、批賣米之儀、今般詮議之上米直段批屋店先きに張紙を爲出可申候。何月何日より何程与、直段高下度每に張替、其段役所江可書出候。

附、黑米直段に何程相增白米直極候趣、前々より定も有之處、所々不一樣躰。是等者第一其處算用聞等役人共等閑故与相聞候。尙更申談、定之通違失無之樣相心得、時々米價高下度每能々致吟味候上、賣直段等委曲役所江可書出候。

一、批屋共米買入指支候節者、其段可及斷候。在々百姓共賣出候品々、相場をはづし高利を

取不申樣嚴重可申渡候。宿立之所々商人共手前、諸色直段致省略候而も、百姓共より賣出候品々茂多く有之、根元之直段を指詰不申而者、諸色引下方等吟味不行届候。是等之趣能々致會得、御郡百姓共等江も得与可申渡候。

一、油直段之儀、殊之外高直に候。加州向者御算用場において、時々詮議之上直段取極茂有之候得ども、近來打續菜種直段引立候故、油直段甚高直に相成候。右者菜種買〆置候者も可有之哉、尚更無油斷遂穿鑿、若右樣之儀有之候はゞ無泥可及斷候。能州之向之儀者以來菜種何程に賣渡候与申儀、且油直段茂時々相しらべ可書出候。

一、諸職人作料曁挊人日用賃迄茂引上候躰。右者去々年不作に而、米直段等格別高直に付、右に准じ自然与引上候哉にも相聞候得共、當時米直段茂格別引下候故、諸色直段引下方遂吟味候に付而は、諸職人・日用賃迄も引下げ不申而者穿鑿方不行届候條、是等之所も綿密に相しらべ可申聞候。尤諸職人作料等以來何程与取極置、若作料等引上不申而不叶子細も有之候はゞ、其時々書付を以可申聞、詮議之上可及指圖候。

一、酒造幷酢・醬油商賣人共取扱候樽之儀、近年直段も引上、酒屋等於手前迷惑之躰、且者升目不全樽も有之躰。旁今般詮議之上、役所燒印爲押入候條、以來其所々役人共、役所より右燒印請取、每歲酒屋等手前江買入候樽綿密相改、升目相違無之分は燒印押渡可申候。升目不

足之分者無用捨指省、升目餘計入候分も不相當候條、五勺計過分は其儘燒印押渡可申、夫より餘計入り候はゞ是亦指省爲結直可申候。此段酒屋等江可申渡、然上升目不足之樽取扱候者有之候はゞ、無用捨可及斷候。此段一統江申渡置、其所之役人共於手前綿密可相改候。右近年諸色高直、一統致難儀候に付、詮議方申渡候之條、得其意、町・在役人共を始、下々一統不相洩樣申渡、無油斷遂吟味、役人共手前に而決兼候品者、役所江及斷可請指圖候。且前段申渡候諸色、直段引下方取しらべ之儀、早速取懸り帳面可差出候事。

未　二　月

三月十一日。金澤横安江町より火を失す。

〔日用雜記〕

一、三月十一日曉七時西末寺前青木八郎左衛門殿より失火、兩末寺類燒、溝口賴母殿・水原□□・荒木津太夫殿・杉江杢左衛門殿・長瀨七左衛門殿・永井舍人殿・前田源五左衛門殿・上木金左衛門殿・山口淸太夫殿・大橋九左衛門殿・小泉守之助殿・山崎雅五郎殿・澤根虎三郎殿等〆三十四軒、伴源左衛門殿長屋門計燒失。伴八矢殿家中四軒、前田將監殿家中二軒、寺西藏人殿家中四軒、〆十軒燒失。東末寺・西末寺・照圓寺・西勝寺・光敎寺・乘敬寺・上宮寺・宗林寺・西源寺・惠光寺・超雲寺〆十一軒燒失。町家七百九十七軒燒失。郡地百十三軒燒失。內乙丸村二

十四軒燒失。都合九百四十四軒燒失之由に御座候。

〔渡邊氏文書〕

天保六乙未年三月十一日曉七つ時より晝九つ時まで、橫安江町靑木八郞左衞門出火、武家寺庵町家軒數附。

靑木　白崎　槻尾　前田　長瀨　溝口　水原

杉江　永井　山崎　上木　野田　中村　比良

深尾　小泉　村澤　大久保　熊谷　大橋　永井

水越　荒木　山口　團　伴　長屋　辻

〃

東末寺　西末寺　西源寺　上宮寺　西勝寺　照圓寺　超雲寺

惠光寺　光敎寺

〃

橫安江町　三十三軒　東末寺町　四十九軒　西御坊町　百七軒

中嶋町　百十八軒　堀川笠市町　三百七十五軒　塩屋町　七十七軒

廣誓寺門前　二軒　熊坂橋々番　一軒　極樂橋々番　二軒

〆七百八十八軒
寺西家中　三　軒　　今枝與力　一　軒
淺野町釜屋　一　軒　　中嶋村　八　軒　　乙丸村　三十八軒
非人家　七十七軒
二口〆八百九十三軒
惣高九百三十九軒

〔珍事留書〕

一、三月十一日曉天彦三町東末寺向青木八郎左衛門方より出火いたし、後山崎朝之丞方へ火うつり、夫より東末寺山門へ移り、本堂等燒失。夫より極樂橋邊末寺向彦三町入口へ火移り、居屋敷所々燒失。照圓寺幷屋敷、西末寺寺內御坊不殘、西末寺本堂等燒失。西御坊町より鹽屋町・堀川笠市・古餌さし町・惠光寺前・岩根永井舍人殿等燒失。夫より堀川揚場・川向中嶋乞食町・淺野町吹屋邊數軒、寺西藏人殿家中三四軒、此邊にて止る。淺野川下乙丸村不殘燒る。

右は飛火とも云、又別火共云也。

一、右火事は風烈敷、東末寺・西末寺此邊大躰一同に燒失。中堀川邊燒失之時分淺野町ふきやの邊燒失。武士町寺等都合九百五十軒許燒之內由。燒出曉七つ時頃、晝九つ半時前燒止る

也。

〔毎日帳書拔〕

三月十一日

一、今曉七時前横安江町青木八郎左衞門方より出火、及大火、兩末寺等も類燒、奉書火消申渡。晝九時過鎭火。

但、怪我人有之、其内死去之者も一人有之。

三月十四日。前田齊泰金澤を發して參覲の途に就く。

〔官私隨筆〕

三月十四日

一、今日御發駕五時御供揃、御殿揃刻限六半時に付、五時前上下に而出宅登城。五つ三之丸に而承之。

一、御居間書院へ被召候由に付罷越、御附使者被召候御樣子也。其次播磨守・土佐守・又三郎一切、其次丹後守・又兵衞一切罷出候處、今日は天氣相も宜御喜悦之旨御意。應之及御請候處、丹後守儀氣滯快押而罷出一段之儀思召之、猶又遂保養候樣にと御意。御懇之御意之趣難有仕合奉存旨申上候處、各無事と御意、又御請申上退去。其次内匠被罷出、其次御家老中述

也。

一、四半時過御發駕如例、御玄關へ罷出、無事と御意。益御旅行可被遊恐悦之至奉存旨申上候。

〔溫敬公記史料〕

三月十四日。駕發金澤。二十六日到于江戸。扈從老臣奥村内膳。

三月十八日。人持組の士の風俗に關して訓諭す。

〔官私隨筆〕

三月十四日

一、御用番と又三郎殿と演述候は、前月又三郎御前へ被召候節、人持中之儀若き人々近頃參會等卑劣成趣共も有之躰被聞召候。大音帶刀・松平監物抔右等之樣子被聞召候。其外にも猶可有之候間、致穿鑿心得之儀申談可宜旨御意に付、各示談之處、其人々迄へ申談候而はふと洩候もの等有之候而は如何敷候間、一統に可申談哉と被申上置、一統申談候覺書も被致置候。依而は筆頭を呼立申談候歟、又は二・三人充追々呼立申談可然と被申合候間、其心得可仕旨被申聞。

〔官私隨筆〕

三月十八日

一、左之內廻狀被越之。

人持風俗之儀に付御噂之趣等、此間御咄申候通之譯に付、別紙寫之通組頭切內々可申渡哉之旨御發駕前相伺候處、伺之通被仰出候。右別紙寫一通充指進候間、御組へ御談被成候樣存候。申談方之儀は、重而申合候儀有之候はゞ可申進候間、左樣御承知可被成候、以上。

三月十八日　本多播磨守

奧村丹後守樣

村井又兵衞樣

猶々又兵衞殿は內膳殿組へ被仰談候樣存候、以上。

諸士風俗之儀、從前々被仰出之趣、就中近者金龍院樣御代中段々被仰出、御世話被爲在、其後も每度被仰出有之趣承知之通に候。各儀者重き組柄に被差置、諸士之目當にも相成候程之身分に候へば、別而被仰出之趣聊無違失可被相心得處、近頃何となく心得方相弛、若き面々抔萬事心懸薄く、中には何事も自己之意に任せ、心易面々抔被打寄候而も相互に志を被相勵候儀は無之、却而無益之雜談に長じ、或は餘り鬪氣過候族も有之躰。且又茶事を被好候面々は、茶器抔持寄互に被翫之儀、中には程も過候躰略相聞候。將又衣服之儀も、金龍院樣被仰

出候砌とは相弛候躰も有之候。毎度被仰出も有之處、心得違之儀に候。此度拙者共迄御内々御噂之趣も有之候條、向後右樣之族無之樣急度相心得可被申候事。

三月廿六日。前田齊泰江戸に着す。

〔諸事要用雜記〕

三月廿六日

一、今日御着府に付御殿揃刻限朝五時之旨、御横目津田判太夫より申越候事。

一、追々御付人來り、御中屋敷御立之御付人に而夫々御道筋等拵、追付奥之口ゟ奉出向。其内追分口御付人も來り候。九つ三歩五厘砂御機嫌能御着府被遊、奥之口御式臺板端御右ゟ拙者、御左ゟ配膳役、階上御左御近習頭暨配膳役幷御表小將奉出向候。且御近習頭は階上に而御右ゟ出候筈に候得共、御出向有之に付右之通。犬千代丸樣階上ゟ御出向、御見懸被遊候而鏡板中程御右ゟ御出向、御附頭一人・御抱守一人之外に階上に罷在候。御挨拶之上御同道に而、御近習頭席前御廊下御近習詰所前邊に而御殘り被遊、御前には席之前御通、御居間書院四之間ゟ淡路守樣御使者御家老・奏者・組頭輕く御會釋、夫より同三之間ゟ姫君樣御附使者横田小一郎殿御會釋有之。御稽古所通り、御居間上之間に御着座被遊候。且又御入之節、眞龍院樣御附使者奥之口階上中程御右之方ゟ罷出。奏者多賀之事。

〔御家老等諸事覺〕

四月四日

一、相公様御途中益御機嫌能、前月廿六日午之中刻過御着府之段、内膳より申來。

三月廿九日。徳川家齊使者を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。

〔諸事要用雜記〕

三月廿九日

一、今日上使有之旨御當番御目付より申來、無程御城下り等追々參り、御出向有之、松平周防守殿御出、夫々御都合能被爲濟候事。

四月朔日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

三月晦日

一、今夕七時頃御奉書到來、明日御登城之儀申來。

明朔日御參勤之御禮被仰上候に付、六時不遲之御供揃に而兩御丸御登城、御下り兩御老中方御勤可被遊旨被仰出。

四月朔日

一、今朝御登城御出、掛流六つ六分御提灯なしに御供廻りしらノ、御待受四時過、九つ三分御歸殿被遊候事、

一、八つ七分五厘御居間書院江御出、內膳・圖書被爲召、御參勤之御禮被仰上候趣御意。畢而參府之人々御目見被仰付候事。

〔官私隨筆〕

四月九日

一、前月廿九日上使松平周防守殿御出被成、御懇之上意。且又御參勤之御禮可被仰上旨、同晦日御奉書到來。當朔日御登城被遊於御座之間御禮被仰上、被爲蒙御懇之上意、御手自御熨斗蚫御頂戴之旨等申來候由、御用番より廻狀來る。

四月十八日。前田齊泰、齊廣夫人等を招請す。

〔諸事要用雜記〕

四月十八日

一、今日眞龍院樣・姬君樣・犬千代丸樣・池之端御前樣・龜丸樣御招請、夫々御都合能被爲濟。四時過御縮り渡、夫より御祝方等相廻り、八半時頃御囃子相始り、夜六半時過相濟、方々樣御戾り、眞龍院樣夜八時前御戾り被遊候事。

和田倉御前樣は就御病中御斷之事。

四月廿五日。今枝内記の家臣互に殺傷す。

〔珍事留書〕

一、四月廿五日夜五つ時頃之由与申、今枝内記殿家來足輕中松小兵衛・村上與三右衛門与申者喧嘩有之。則内記殿裏門前に而、與三右衛門片腕を小兵衛打落し、夫より打留、門内に入、與三右衛門を打果し候段高聲に斷、番所前に有之手水鉢に立寄、左之手に杓を持ながら自害仕果申候。且與三右衛門鳶觜を持出候哉腕切落候所に鳶觜有之、小兵衛にも鳶觜疵有之由。檢使相濟、兩人共死骸親類江御渡之由。

四月廿七日。大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に宿す。

〔官私随筆〕

四月廿七日

一、備後守様昨日大聖寺御發途、今日此表へ御着御止宿に付、御旅宿へ可罷出處、脚痛に付以紙面相伺候。

四月廿九日。金澤中堀川町に火災あり。

〔珍事留書〕

四月廿九日夜、中堀川末三月十一日焼け殘分二十軒許燒失。此頃所々に火沙汰有之、且附火之由之事。

五月十六日。無役等の人持に寺社方普請入用方の手傳を命ず。

〔官私隨筆〕

五月十六日

一、御勝手向御窮迫に付、無役等之人持へ御領國寺社方御普請御入用之內御手傳被仰付候儀、先達而及御示談候通に付、委曲江戶表へ相窺候之處、僉議之通可被仰付旨被仰出候條、左樣御承知被成、別紙之趣を以夫々御申渡可被成旨、美作守殿より以紙面被申越。

別紙如左。

津田乙三郎

横山又五郎

菊地大學

生駒勘右衞門

津田兵庫

篠嶋源兵衞

岡嶋帯刀
横濱波江

御勝手向御窮迫至極に付、御領國寺社御修復御入用之內、當年より五ヶ年中各へ御手傳被仰付候。銀高之儀は、先達而內々相尋候節に申聞候通、御作事所へ可有銀納候。

五月十八日。江戶に往來するもの越後山の下を通過するに海路を取ることを禁ず。

〔典制彙纂〕

五月十八日

左之趣今度一統江觸有之。

付札、御横目江

江戶詰人等往來之節、是迄越後山之下爲に海上船に而通行之人々も有之躰に候。元來陸路通行之所に候得者、右樣船に乘候儀者難相成事に候所、不埒之至に候。向後堅乘船致間敷趣、一統江夫々可被申談候事。

未五月

五月十九日。本年類焼の諸士以下に一期を限り借知を免除す。

〔毎日帳書抜〕

五月十九日

一、當三月十一日火災之節居宅燒失之人々、其年一作御借知御用捨之段、頭分之人々は都而直に申渡、平士等之分は頭・支配人へ申渡、與力は寄親へ申渡、夫々覺書相渡。

五月廿一日。天文學者西村太冲歿す。

〔日用雜記〕

一、西村太冲老其以來相滯、五月廿一日晝四時頃指重、廿二日御禮申上候。病死披露廿四日朝葬式也。病死之上線香五把遣候。廿七日中陰法事、爲香奠金一朱相送候事。

〔西村太冲墓碣銘〕

得一舘西村先生墓碣銘幷序

先生越中礪波郡城端人也。其先五社某隷北條氏於鎌倉。高時之滅來遁於越之蓑谷村。子孫固居焉。年祀曠遠。譜系亡絶。靡知其詳矣。世々爲農家。襲稱九郎兵衞。先生其支族也。父諱某。稱長兵衞。始徙城端以賈爲業。先生年十六七。慨然自奮曰。人之在世。苟通於一藝。何憂乎其身之不立。乃欲通天文厤象之學。於是蚤夜孳々潛心焉。或謂曰。天文之學縱窮其精妙。恐

不易售。宜以醫爲業。傍治天學。先生以爲然。乃之京都學醫。時西村遠里有名於天文學。遂入其門。用力數年。能通授時。貞享二曆盡受其傳。天明七年遠里歿無後。門人笹屋某等胥謀。請先生承其後。先生因冒西村氏。既而先生於授時。貞享之曆有不滿其意者。更欲大有所闡明。聞浪華麻田剛立精測量推步之術。乞入門。剛立不聽。待以客禮。一月六次相見而已。居歲餘。先生以母疾歸鄉。臨發復乞之。剛立仍不肯。先生曰。幸而母疾瘥當復來。願許焉。抵鄉母疾既瘥矣。卽日上途。直往乞謁。剛立感其誠切。遂執師弟之禮。數年之後悉傳奥秘。剛立之門。其傳歲實消長法者四人。而先生其一也。先生家素富貲產。至是盡破其產。專用力斯術。至歷代天文氣象之書及西洋新奇之說。淹貫殆遍。先生諱篤行。字審之。稱太冲。資性直率朴素、不事修飾。事母至孝。邑人往々有爲之化者。寛政十一年正月有命。赴府城於明倫堂。講天學。先生上言曰。天學大率有二途。命理也。形氣也。探幽眇之理。通陰陽之象。知風雨霜露之所以然。是謂命理學。觀七曜衆象星之運行。察晦朔弦望交蝕。定氣候。紀天時。脩於測量推步之術。是謂形氣學。微臣所傳者形氣之學。無所用講說。乃賜金還之。十二年乞移居於京師。不允。於是每歲例賜黃金五兩。文化八年公府賞其至孝。賜黃金若干。文政四年七月爲醫員格。賜日俸十五口。掌天文曆象之事。先生每歲測吾加越之氣節。造略曆獻之。公府或與之同志。屬京師之門人。有呈之土御門閣下。遂傳經御覽。且特命列門籍。人以爲榮。先生以

明和四年生。以天保六年五月廿一日卒。享年六十九。配蓑谷氏。生四男一女。長稱十一郎。在京師承遠里之後。先死。次稱長兵衛。嗣城端蓑谷家。次某早死。次政行稱佐左衛門。襲先生後爲醫員格。女適大音氏臣岩本某。先生之門傳所謂歲實消長法者。茶室康哉。小原時維二人也。頃者時雍等來謂余曰。先生浩博精微之學。固顯於當時。然而未有表著之於來世者。余甚懼焉。請銘之。余於天文曆象之學尤淺陋。莫足以知先生。雖然竊善時雍等之志。遂作銘曰。

放勳授時　義和是命　重華受終　以齊七政　粤知曆象　帝王所敬　施及後代　述作愈密
顯微隱見　莫逃我術　孰謂天高　如示諸斯　孰謂天遠　跂手望之　運行在上　知之者人
人之云亡　典型猶存　有此徒弟　來世永遵

天保十三歲次壬寅秋九月

儒員明倫助教　大島桃年撰

長井寬鄉子毅氏書

五月廿七日。前田齊泰夫人江戸城西丸に登る。

〔諸事要用雜記〕

五月廿七日.

一、姫君樣今日西丸江御登城遊候事。

五月。火災に關し流言を放つ者を捕縛す。

〔珍事留書〕

五月五日河原町宮竹屋より出火有之多燒失仕由、五・六日前方より執沙汰いたし、河原町邊道具等認め、火之用心嚴重に仕、夜中迄不寢番家々に立置由也。右之流言申出候者有之、被召捕候由也。

五月。東西本願寺別院再建の場合に於いてその規模を縮少すべきことを命ず。

〔御親翰帳拔書〕

五　月

一、兩末寺市中に有之故、若火災之節類燒之儀氣遣敷思召候間、此度再建有之候はゞいかにも建物低くいたし、山門之儀は建立見合可申旨被仰出之趣江戸表より申來。

五月。町方の風俗に就いて示諭す。

〔御觸留〕

町方風俗の儀前々被仰出も在之候所、次第に奢侈遊惰に相流、近年は分限の者も離散の躰相聞候。文政三年御家中の人々風俗等の儀被仰出候節、町方の儀は武士とは違候儀に候間、惡敷風俗にて無之候得ば、着服等の儀、御定の外は如何共分限に應じ可爲勝手次第旨被仰渡置候處、當時にては各其身元分限を踰え、惡敷風俗次第に致增長、家作幷女共衣類等萬事榮耀に相成、或は嫁娶等の節身元を取失、過分之拵等相用、其外振舞等の節料理に至り候迄忘却候趣共有之、且又商賣方においても、すぎわひに金を不顧、姦利而已相貪、不正の族も在之躰相聞、不心得の至に候條、以後の儀急度被申渡、自然此上致心得違、不愼の者在之候はゞ、嚴重咎等可被申付事。

未五月

別紙寫之通、前月御用番長又三郎殿御渡、猶又御別席にて段々被仰渡の趣共在之、追て可申渡筋も候へ共、先本文御覺書寫相渡候條、無違失相心得候樣、町方一統嚴重可申渡候。

右之趣夫々可被申渡候、以上。

天保六年未六月廿日　澤田義門

吉田丹次郎殿

六月二日。他國者にして賊を働きて捕へられたるときはその本籍に照會

したる後入墨を施さしむ。

〔小松舊記〕

付札、御算用場奉行ゟ

他國者御領内ゟ入込致賊、召捕候上は入墨可申付旨被仰出、其段寛政三年申渡置候通に候。右致賊候者住所慥成者は、御代官所等暨其御領主ゟ御届有之、無構者之段申來候上入墨可申付儀に候條、以來可有其心得候。右之趣御郡奉行中等ゟも可被申談候事。

乙未六月

別紙之通可申談旨、御用番左京殿被仰渡候に付、寫相達之候條可被得其意候、以上。

六月二日　　御算用場

有賀清右衞門殿等

六月十二日　前田重教の五十回忌法會を江戸廣德寺に執行し、齊泰之に詣づ。

〔諸事要用雜記〕

六月十一日

一、明十二日於廣德寺泰雲院樣五十回御忌御茶湯御執行に付、五時之御供揃に而御案內次第御參詣、御讀經御聽聞可被遊旨被仰出候。

同十二日

一、今日五時御供揃に付、三つ鐘時分罷出、無程御小將中も被罷出候に付、御香等相渡、追付山森氏同道、御小將三人共一集に廣德寺江罷越、夫々御間圍等見分。其頃御參詣被遊御差支無之段、內膳殿より御案內申上り候由。御拜順書等御小將中役僧江被渡、其節客殿に而御拜相濟、直に御序拜等御靈屋江被爲入候趣御都合申含置候。無程駿河守樣御參詣、出雲守樣には御前御參詣後無程御參詣被遊候。東御門御付人に而、拙者共等何茂御出向申、三つ橋御付人に而內膳殿被罷出、五つ一步御出、廣德寺江被爲入、敷付圖之通奉出向、御左側之者御先立、和尙幷役僧に御會釋有之、直に書院江御通被遊。御座之間緣頰入口杉戶之外に而脇指取、無程御茶湯相始可申段內膳殿より被申上、御取次山森。夫より客殿脇御聽聞所江被爲入御着座之上、御簾上候樣被仰出候に付、其段御大小將江申談、兩人に而御着座前一間外より內江卷上る。房內になる。讀經相初り御聽聞被遊。其內書院江被爲入、御手水御用有之。其節御簾卷上候儘に致し置候。讀經相濟、客殿江餝り有之御位牌內陣江御遷座有之。續て暫讀經有之。相濟、其節內膳殿客殿後廊下迄被參、御燒香宜段被申上、拙者御取次。御聽聞所

において御清め御手水御表小將差上、御簾際御腰屏風拙者疊み片寄、山森氏は外より御簾外へ被相廻御先立、直に御拜に被爲入。御拜中に御左之方へ廻り居る。尤御刀持も廻る。御小將一人は御湯桶取除、御溜りに殘り、其餘御近習一人・御小將兩人御供。御拜相濟、直に御靈屋江被爲入、御序拜等相濟。御靈屋前に屏風圍有之、利倉善佐罷出居、御戻り之節御會釋御意有之。夫より御出入衆御溜江被爲入御逢、其節上之口山森氏的る。前田又吉殿御一人也。夫より御兩様出雲守様駿河守様御溜江被爲入、御對顏。夫より書院江御通、追付內膳殿方丈同道、御座之間近く被參、方丈御逢可有御座哉被相伺、其段申上、追付內膳殿誘引被罷出。其節御刀持等并伺公之御近習頭脇刺さす。御大儀之段御挨拶有之。內膳殿御取合、御滯なく被爲濟候趣も方丈直々被申上、退去。夫より御供宜哉相尋、宜其段申上、直に御引上げ御戻被遊候。階下に而內膳江御意、其外方丈初御會釋有之候事。四つ三歩過御戻り也。

六月十二日。前田重教の五十回忌法會を金澤寶圓寺に執行す。

〔溫敬公記史料〕

六月十二日。修泰雲公五十年忌法會于寶圓寺。

是日大赦。

六月廿一日。前田齊廣の女壽々姬金澤に逝去す。

〔官私随筆〕

六月朔日

一、壽々姫様御滞に付、各明日廣坂御廣式へ罷出相伺御機嫌候之條、各様にも御伺可被成候。若御當病等に而御出難被成候はゞ、以御紙面御伺可被成旨、御用番より以紙面被申越。

〔官私随筆〕

六月十八日

一、壽々姫様當七日より御脚氣腫之御様子に而、御通じ方不御宜、召上り方も御少く候處、夜前より次第に御衝逆之御様子に而、御煩悶被成、御惣躰不御穩旨、御醫者中申聞候段、岡田平之丞申聞候。依之今日各廣坂御廣式へ罷出御機嫌相伺候條、可罷出旨御用番より以紙面被申越候付、以紙面相伺候。

〔官私随筆〕

六月廿二日

一、壽々姫様御氣色御療養被不爲叶、今巳之中刻御卒去之段播磨守殿等より被申越候付申進候。先以奉絶言語儀に御座候。右に付御廣式へ罷出、基五郎殿・榮操院様御機嫌相窺候間、御自分様には御出難被成候はゞ、以御紙面御窺可被成旨等、御用番より以紙面被申越則伺候。

壽々姫は藩臣本多播磨守政和の室

飛脚到來は江戸へなり

一、右に付普請は今日より明後廿四日迄三日、鳴物等は當廿八日迄、諸殺生は來月十一日迄御忌中日數遠慮可仕旨。且又頭分以上之面々、明廿三日爲伺御機嫌御用番宅へ可有參出旨等、一統觸之寫來る。

〔官私隨筆〕

六月廿三日

一、壽々姫樣御法號別紙寫之通之旨に而、竹田彦六郎出候付、爲御承知申進候旨御用番より廻狀來る。

永禧院殿翼安文琴大禪定尼

〔諸事要用〕

六月二十日

一、今日當十四日出早飛脚到來。壽々姫樣御脚氣に而御滯之由申來候事。

六月廿六日

一、壽々姫樣十四日出に御容子早飛脚を以申來候後、十七・八日之頃又々御差引被爲在、十九日之處に而、平承丸も被爲召上候處、八勺と二勺御水瀉も被爲在候處、其後御陽脫御疲勞被爲在候由。不輕御症之御便有之候事。

六月廿七日
一、壽々姫樣御氣滯之處御差引被爲在、廿一日暮六時より加藤氏、同夜九時より佐藤氏相詰候處、次第に御疲勞被爲見、御急變難斗、廿二日朝六時御差重り、御大切に被爲及候段、同日立早飛脚ゟ傳附申來候事。
但廿日には御惣躰御穩之由之處、廿一日御衝心、同日夕七半時過、實は被爲及御大切候由之事。

〔見聞袋群斗記〕
六月上旬より壽々姫樣御病氣之處、同月廿二日巳の刻御卒去。七月五日御葬式、大乘寺ゟ御移り、同寺境内ゟ御納り、御年十七。御法號永禧院殿と申なり。

六月。先の火災に金澤兩本願寺別院燒失したるを以て百姓等の過大の寄進を爲すことを戒む。

〔郡方御觸〕
兩本願寺末寺先達而火災之節致類燒候處、門徒共種々致寄進候躰に候得共、身分不相應之寄進者致間鋪候。追而再建茂可有之、左樣之時節に至り候而茂、過分之寄進いたし候之者於有之者、嚴重可申付候條、心得違無之樣兼而可申付候。尤此節出作之時節に候間、忽に不相成

様急度可申渡候。

一、右末寺類燒に付再建之儀、東方本山御門主に茂、近年世柄も惡敷故御厭ひ之事に候。ケ樣之譯に而者、門徒共身分を打忘、不相應之寄進抔いたし候而者、御門主之御趣意に茂違候儀に候條、是等之儀得与相心得可申儀に候。勿論西方門徒共にも、右同樣可相心得候。

右之趣御郡奉行より年寄共江得与申渡、御門主より之敎化を守、寄進方身分不過樣可申諭旨、御郡奉行江可被申談候。

右之趣遠所町奉行幷寺社奉行江、寺庵心得方改而可被申談候事。

六　月

六月。諸郡引免復舊の詮議を今年に限り行はざるべきことを告ぐ。

〔諸郡御用留〕

當年諸郡引免年期明に付、立歸方夫々遂僉議、且又御當節之儀に付新開增免等彼是加詮議可申手配も有之候得共、去暮御蓄米御領國一統貳萬石相收、曁右之方江爲冥加別段銀米指上、其上御當用之方江も冥加銀諸郡共指上、末々迄御國恩を不忘志神妙之至。引免立歸方等は改作方地盤に付候儀に候得共、此上今年遂詮議候而は一統可及迷惑儀に付、格別之趣を以右立歸方等當年一作御用捨、來年可遂詮議候條、此段諸郡江申渡候樣、御郡奉行改作專務之人々

に可被申談候事。

六　月

七月朔日。家作を簡易とすべき前令の恪守を命ず。

〔官私隨筆〕

七月朔日

一、家作之儀毎度被仰出も有之處、近來心得方相ゆるみ候躰に而、中には分限不相應之家作いたし候者も有之躰、心得違之至に候。是以後新宅は勿論、修復等も手輕にいたし、前々御定之通違失無之樣急度相心得可申候。此段可申渡旨被出候由、定番頭へ申渡候旨御用番より來る。

七月廿六日。前田齊泰の子利行金澤に生まる。

〔官私隨筆〕

七月廿六日

一、基五郎殿御產婦方今日出產、御男子樣御誕生被成候段被仰出候趣、中村五兵衞演述に付爲御承知申進候旨。且又明日各御廣式へ罷出御祝詞申上候由。

〔見聞袋群斗記〕

七月廿六日於二ノ御丸御廣式、巳の刻御男子御誕生。墓目御用奥村内膳なり。

〔諸事要用雜記〕

閏七月三日

一、今朝御飛脚到着、二之御丸御廣式において御男子様御出生有之由申來候事。

於二御丸御廣式、前月廿六日御男子様御誕生被成候に付、明四日御次廻り上下着用之事。

到着は江戸へなり

閏　七　月

〔諸事要用雜記〕

一、左之通爲承知別席より演述之事。

前月廿六日二御丸御廣式において、御男子様御誕生被成候事。

壬七月四日

一、右御出生に付、墓目御用丹州殿御斷之由に而、於此表内膳殿ゟ被仰付、昨夕より於御樂屋被相勤、今夕相濟、其段以御近習頭内膳殿言上。御意可申述旨申上、左之通有澤氏被申述候。

江戸に於いてなり

墓目式首尾能相濟、御喜悅被遊、大儀に思召候段御意。

七月廿六日。實從兄弟を末期養子とする件に關して告ぐ。

〔國事雜抄〕

先達而實いとこ年增之者は、末期養子等相願候儀は不相成趣、被仰渡候に付、同年之者は如何可有御座哉之旨御達申置候處、同年之者は末期養子等不指支段、御用番被仰聞候條、爲御承知致廻狀候、已上。

七月廿六日　　　　　　高田勘右衛門

同役中

本文に對する決定は十一月十四日に在り

七月。領內に存する鐵炮の取締方法を議す。

〔郡方御觸〕

御領國鐵炮縮方之儀、年古き儀に而、いつとなく縮方相弛み居申御郡茂御座候に付、以後之取縮方、夫々遂詮議御達可申上旨、先達而被仰渡之趣奉得其意。因玆三州郡々之樣子段々相調理候處、是迄區々に相成居候に付、今般詮議之上、以後縮方之儀左之通相極申度奉存候。

一、能美郡山方幷片山入村々、暨能州四郡村々之儀者、先年より威打之儀時々相願不申、村々領切追拂來申候。右郡々之儀は鳥殺生御免之場所故、如此成來り申儀与奉存候。尤能美郡之儀は、先年より獵師鐵炮所持仕候者共之儀、向後猪・鹿・猿・鳥類鐵炮に而打捕申儀、獵師渡世に仕儀に候條不苦旨被仰渡候段、元祿八年九月加州御郡奉行長瀨湍兵衛等より申渡置候

舊記有之。能州方にも猪・鹿・狼多出、田畑を荒し人馬江も懸り候節者、不及相窺玉入鐵炮に而爲打可申旨。且玉入鐵炮免許之儀に候間、常威鐵炮向後不及願旨等、公儀御觸之趣、寶永六年被仰渡之儀、能州四郡江申渡置候舊記有之。曁安永年中下も方依願、獵師等鐵炮御渡之分茂御座候に付、前々威打之儀相願不申儀与奉存候。乍併今般被仰渡之趣茂御座候事故、以來時々御達申上、御聞届を請可申与詮議仕候得ども、元來右郡々之儀者、餘程里數も有之、能州抔は往返七・八日茂相懸り申處も御座候に付、時々願出御聞届を請候事に相成候而者、猿抔は五・六十疋或は百疋計も一群に相成徘徊いたし、尤日中山畑江出作物暫時に喰荒し候に付、遠路往返之隙取候而者所詮茂無之、百姓共甚及迷惑申儀に御座候。依而以來者組主附年寄於手前、時々聞届威打爲仕、尤手附役之者幷村役人共指出、縮方嚴重爲相心得、打仕舞候得者組主附手前江鐵炮爲取置可申与奉存候。且又狩人之儀は渡世之筋に御座候間、山入村々に而獸類又者雉子・山鳥・鳩之類等、都而作物に相障り候鳥類打捕申儀、是迄之通不指支樣仕度奉存候。

一、石川・河北兩御郡山入村々威打之儀は、前々譯而御達不申上、里方村々者多分御留場之事故、時々御達申上、御聞届を請申渡來候得ども、以來者山方・里方共時々御達申上、御聞届を請可申渡与奉存候。尤威打仕候節は、手附役之者幷村役人共指出、御縮方嚴重可申渡与奉存

候。打仕舞候得者、組主附手前へ鐵炮取揚置候樣可申渡与奉存候。

但、山入村々において、狩人共獸類等打捕申儀等、前條同樣不指支樣仕度奉存候。

一、礪波郡・射水郡・新川郡、右三御郡之分者、威打都而是迄時々御達申上、御聞届を請申渡候儀に候間、以來茂彌無違失爲相心得、尤威打仕候節は、手附村役人指出、縮方嚴重爲相心得、打仕舞候得者組主附手前江鐵炮取揚置申儀、在來之通尙又無相違相心得候樣可申渡与奉存候。

但、右郡々山入村々に而、狩人共獸類等前條同樣仕度奉存候。

一、狩人之外鐵炮所持之者、不殘鐵炮取揚候而者、狩人無之村々者指支之筋も可有御座、所に寄遠方より狩人相雇候而者、何歟面倒之筋茂可有御座与奉存候。依而御先代樣より拜領之鐵炮、幷先年奉願御渡之分者、狩人に而無之とも其儘指置、其外無謂自分に持傳候鐵炮は夫々取揚、御鐵炮奉行江相達可申与奉存候。猶更當時村々に所持仕居候鐵炮、入念相調理させ、右之通相改申度奉存候。

但、狩人之外威之ため先年御渡之鐵炮、村々百姓共所持仕居候分茂有之、又者村役人手前に預り居候分も有之躰に候。此分は夫々引揚、改而組主附年寄手前江指預、證文取立、狩人江相渡り居候分茂是又相改、證文取立、御鐵炮奉行江差出置可申与奉存候。

一、右之通相改候上者、鐵炮持主致病死候歟、又者故障有之節、狩人所持之分者、其組主附年寄手前ゟ取揚置、追而悴、親同様狩人仕度旨願出候者、私共添書を以鐵炮改御奉行ゟ相達、受差圖可申与奉存候。

但、右狩人等所持之鐵炮、猥に他家ゟ讓替爲仕申間鋪。併何与歟無據子細有之、他家ゟ讓替不申而不叶儀有之においては、其譯書附取立、鐵炮改御奉行ゟ相達、可受差圖与奉存候。

一、鐵炮修覆仕候歟、又者新敷筒に仕替候刻者、私共於手前承届、兼而相渡居候寸尺等之通、無相違樣爲調替可申与奉存候。

一、鐵炮賣買或者質物に入候儀、堅不相成樣可申渡与奉存候。右先達而被仰渡之趣に付、私共詮議之趣御達申上候。猶又御詮議之上、御差圖御座候樣仕度奉存候。尤御鐵炮奉行ゟ茂、夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

未七月　　山口新左衛門

馬場右近

長又三郎樣

〔御郡典〕

七月。製鹽の公定減損率を示す。

今度御鹽方役人能州於廻先、御廻鹽積渡方立會致見分候處、拼出人足共甚手荒之取扱に付、共節相示し置候旨に候得共、元來鹽は水物にて、取扱に寄內實相減候儀は、何れも相心得罷在候筈。無左而も御荷物に相成品、麁末に致取扱候儀は沙汰之限に候。御廻鹽於屆所、迯升目之表海上一升之用捨欠を以請取候處、近年內實少、下々之者難儀之躰相聞候。依之追々可遂詮議候得共、猶更麁末之取扱等不致樣被申渡、小代官・村役人共勢子方嚴重相心得候樣可被申渡候。且亦當年古鹽御廻鹽之內、欠立候分も有之候處、欠減定之儀は左之通に候條、積渡方小代官等江夫々被申渡、御廻鹽之節欠立候村々、其時々小代官等より直に當場江も相達候樣可被申渡渡候、以上。

七　月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御　算　用　場

御　郡　奉　行　中

御鹽升廻用捨欠定

文化九年より三升欠、同十四年一升增欠四升に候處、又候天保二年一升增欠減用捨。當時如斯。

一、五　升　　　　燒揚候月。但御預所三升

右同年より四升欠、同十四年一升增欠五升に候處、又候天保二年一升增欠減用捨、當時如斯。

一、六　升　　右翌月より三ヶ月之間。但御預所は四升

右同年より五升欠、同十四年一升増欠減用捨。當時如斯。

一、六　升　　右五ヶ月より共年中。但御預所は五升

右同年より七升欠、同十四年一升増欠減用捨。當時如斯。

一、八　升　　翌年ゟ越。但御預所は七升

右同年より一斗欠、同十四年一升増欠減用捨。當時如斯。

一、一斗一升　　古々鹽。但御預所は一斗

右之通に候事。

未　七　月

右之通御算用場より申來候に付、奥郡ゟ申渡候。口郡之儀も同様に付、申渡候之條、夫々嚴重相心得可申候、以上。

未　七　月　　山口新左衛門

馬場右近

口　郡

惣年寄中・年寄並中

吟味人中・相見人中

閏七月四日。非常救濟用の圍籾を本年より增額すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

御算用場奉行〻

非常之年柄御救爲御手當、御收納米之內正米二千五百石之圖に而、年々御圍籾被仰付候得共、重而御詮議之趣有之、當年より七千五百石相增、都合正米一萬石御圍籾年々御貯用被仰付候條、被得其意、御郡奉行〻可被申談候事。

未閏七月

非常之年柄御救爲御手當、御收納米之內正米二千五百石之圖に而、年々御圍籾被仰付候得共、重而御僉議之趣有之、當年より七千五百石相增、都合正米一萬石御圍籾年々御貯用被仰付候段、別紙寫之通御勝手方年寄中被申聞候條、被得其意、納方之儀夫々可被申渡候、以上。

未閏七月四日　　御算用場

御郡奉行中

閏七月六日。前田齊泰の子利行の七夜の祝儀を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

閏七月六日御七夜御祝儀、御名豐之丞殿と土肥權太郎より指上る。

〔官私隨筆〕

閏七月六日

一、今般御出生之御男子樣、御名豐之丞殿と被稱、殿付に唱可申候。右之趣何も可申聞旨被仰出置候由、今日中村五兵衛演述。且又今日御七夜御祝に付、兩樣之御祝詞相公樣へ今日日付紙面を以申上、豐之丞殿へ御七夜御祝詞申上御機嫌も相伺、甚五郎殿・榮操院樣へも御七夜之御祝詞申上候由等、御用番より以紙面申來、以紙面申上候。

〔於江戸毎日書立幷日記之內書拔〕

閏七月廿日

一、今般御男子樣御誕生、御名豐之丞殿与御定り之儀等被仰出候付、頭・支配ゟ申談方覺書、先例之趣を以一昨日下物相認、入御覽候上、御横目ゟ申渡候處、組頭を初心付候は、御妾腹に而御嫡子御出生に候者、若子樣与被仰渡候得共、御妾腹に而御二男樣よりは若子樣与御調者無之、右御調之儀者不宜哉与、御横目申聞候に付、御先例御次男樣御出生之節、若子樣与御調被仰渡候御先例共有之候得共、御横目より申聞之趣も相聞え居候付、御男子樣与調替、重而御横目ゟ相渡、其段以善右衛門申上置候事。

閏七月十八日。羽咋郡西性寺等に同郡火打谷村より產する吳須の取扱主附たらしむることを許す。

〔吳須土堀出方等一件〕

羽咋郡小山村　西性寺
鹿嶋郡井田村　明傳寺

右西性寺等、羽咋郡火打谷村領より出候吳須取扱方主附申度旨等願之趣、各添書を以被指出候。仍而遂詮議候所、廣く用立候吳須に而は無之体に候得共、追々掘出候はゞ得与樣子も相知可申候間、先爲試、右兩寺願之通吳須取扱方主付之儀承屆候。尤只今之內は不及役立に茂候條、追々掘試み、宜吳須出候はゞ其段可及屆候。右に付御算用場より申渡品茂可有之候。此段可被申渡候、以上。

閏七月十八日　長　又三郎

前田萬之助殿

〔吳須土堀出方等一件〕

能州羽咋郡火打谷村領より吳須出候に付、取扱方主附等之儀、拙寺共ゟ被爲仰付被下候樣、先達而奉願上候處、今般御詮議之上、廣く用立候吳須に而者無之躰之由に而、不及役立、先

役立は納稅の義

爲試拙寺共𛀁取扱方之儀、御用番長又三郎殿より被爲仰渡、難有奉得其意候。然上者掘出し、宜敷吳須出候節は早速御達可奉申上候。依而御請上之申候、以上。

天保六年閏七月廿九日

羽喰郡小山村　西性寺

鹿嶋郡井田村　明傳寺

寺社御奉行所

閏七月廿三日。德川家齊、前田齊泰に雲雀を贈る。

〔諸事要用雜記〕

閏七月廿二日

一、明廿三日雲雀拜領之上使御沙汰之旨、御客方より申來。

明廿三日上使之御沙汰に付、御殿揃刻限五半時与可申談旨、內膳殿被仰聞候旨、御横目所披見物之事。

閏七月廿三日

一、今日九つ七分過、彌上使之旨御小人目付參る。

一、御城下御付人八つ一分五りん御表𛀁御出、例之通御出向に而、夫々御例之通相濟候事。

御退出八半鎌之事。

一、御時刻移り候に付御登城は不被遊由被仰出、七時御出、御老中方御廻勤被遊候事。御戻り懸流六つ鐘。

本年二月廿二日の條參照

閏七月廿八日。越中守山の猿曳七右衞門の鑑札を沒收したることを告ぐ。

〔御郡典〕

射水郡守山町猿曳七右衞門儀由緒有之、御領國在々牛馬祈禱に相廻り候處、近年紛敷猿曳立入、右七右衞門名前を謀り、在々祈禱いたし步き候由に而、七右衞門儀及迷惑候旨歎出に付、當春詮議之上、猿曳爲見合役所より燒印之木札七右衞門江相渡、在々江祈禱に相廻り候節致持參候樣申渡置、其節爲見合右印札寫を以、右等之趣一統江觸渡置候。然處七右衞門儀、右燒印札相渡候而より、以前与は事も違候樣に相心得候哉、村々に而祈禱、過分に申乞候儀有之躰に而、迷惑之趣斷出候向々も有之。七右衞門心得違之趣に付、此度詮議之上、右印札取揚、以後之儀嚴重申渡置候條、得其意、此段夫々申渡、七右衞門儀旣祈禱に相廻り候はゞ、前々之通に相心得候樣、村方之者共江可申渡候。且又近年七右衞門名前謀り、紛敷猿曳祈禱に步き候條、此儀は去々年十一月申渡置候通相心得、名前等聞調理、紛敷者に候はゞ指押置、其段可及斷者也。

未閏七月廿八日　　　笠間又六郎

本年五月の條參照

閏七月。町方の風俗に關する心得方を諭し、一二日讀を勵行せしむ。

〔金澤町中法度書等〕

當六月廿八日御席ゟ御呼立にて、罷出候處、町方風俗方等之儀に付、御用番又三郎殿御別席にて段々被仰渡之趣共も有之、御覺書寫其節相渡候通に候。猶又町中心得方之儀申渡候。是迄風俗等之儀、毎度被仰渡も有之、其裁許々々よりも心得方時々申渡、何茂承知之通に候處、一旦被仰渡候刻者、着服等も急度相心得申躰に令見聞候へ共、暫程經候得者又候立戻、中には屹度志を相立被仰渡通り可相守と心得候者も、端々弛み來候世風にひかれ、其が爲に志を相遂得不申者も可有之候。町家は町家にて之尊卑貧福、各其分限を踰え不申樣有之度處、其分を不相守僭上に相成、譬ば小商人之家內等、平常之着服麁品に候共、振舞等に罷越族末之家內着服有之向ゟは、知音之もの等より品宜き衣服を借り受、或損銀を以借りとゝのへ、外見を餝り不罷越者不相成儀之樣に相心得、家作に付而者、小手前之商人等も分限者之家居を羨み、家室を飾り、或を茶形等之小間をしつらひ、嫁娶等に付而者掎方幷料理等に至迄甚致增長、分限をこえ、美味或は麁肴に而も種々不指出而は、末之人々ゟ對し無禮麁末にも可相當哉与之泥みに而、いらざる馳走を盡し、音信抔も世風にひかれ、年々過分に相成り、中に

者又不心得に而、己が分限にも心付ず、馳走多くいたし申者も可有之、是等者皆薄情に而にくむべき風俗、殊に費用至極之事に而、今日之商賣方まうけ不相應之家内暮し方ゆゑ、入用におはれ、終に家にもはなれ申處ゟ至る筋に候。右に准じ分限宜きものも同様の事に而、只々分を諭し申暮し方者あるまじき儀に候。毎度被仰渡も有之事、何れも厚く令勘辨、費用を省き、いかにも商賣方相勵みまうけ相應之暮し方肝要に候。とかく斯申渡候趣意取違、一切家作を指扣へ、或者遊參見物等にも不相越、町家之賑ひをうしなひ、俄に窮屈のみに暮し、町中ひそみ申形に移候而者、商賣方にも相響、不穩儀に而、聊不相好儀に候。家作等も榮耀を省き、暨土藏普請等無據分者隨分可致候。只分限を取失ひ不申様にと迄申事に候。前々被仰出置候御法度之品々、町中二日讀にも有之通り、無違失可相心得候。各其分を取失、風俗方等跡々より被仰渡通り相守り不申而者、畢竟身元及零落候儀殘念なる仕合に而、子孫相續方も是がために無覺束相成儀、氣之毒之至に候。跡々より被仰出候趣は勿論、今般改而被仰渡候御趣意、猶又御定書之內脇書を以申渡候趣共、以來急度相心得、少しも違失無之様心根を相改可申候。尤裁許々々之者は申迄も無之、此趣致會得、下々念頃に可致教諭候。毎度被仰出も有之處、忽に弛み申儀不心得之至に候。ケ様に申渡候上に不心得之者於有之者、嚴重之沙汰におよぶべく候間、兼而此旨相心得可罷在候事。

天保六年閏七月

中川平膳
澤田義門

〔町中二日讀御定書拾七箇條〕

一、賣人は定其商賣、職人は其職専にすべき事。

此御箇條、町人誠に平生忘間敷第一に候所、近年段々奢侈に相成、渡世に怠り、身代滅亡之根元に候條、以來は暮方急度相改、省略を守、大躰世間勤合等茂欠き、家業入情に相勵、尤商賣方において姦利而已相貪、不正之族一切無之、正路に相心得、身代成立候儀専要に候事。

一、町人之衣類、男女とも・絹・紬・木綿・布、其分限に應じ可着用事。

此御箇條に候處、近年次第致增長、上品を相用、身元相應之者は、妻・娘抔は表は爲指品に無之而も、高料之染模樣等いたし、又は不目立樣に仕なし上品を用ひ、或は下女等に至まで天鵞絨緒之塗下駄等はき候事、皆以奢侈之至りに候。向後急度可相改候。

一、品々毛織・天鵞絨・繻珍等之卷物類、紗綾・緸・縮緬・明石縮、幷女小袖壹反に付百三十目、同帷子四十三匁より高直成表商賣一圓御停止。右毛織其外卷物、武具・馬具之用に立申程切にて賣候儀、幷女之帶は不苦事。

女帶之儀、御先代樣箇樣に御觸置之儀に候へども、右毛織・天鵞絨等都而上品之品、當時着用

堅く不相成事。

一、町中振舞、一汁・三菜香物共、酒可為貳篇事。鶴・白鳥・他國肴、木具出候儀、幷もり交菜、後段無用之事。

附、他國客人幷御家中歴々振舞候ても、右定之通可相守之。重菓子抔出候儀不苦事。往古は御家中高知歴々相招、或は御用儀等に付他國富たる者に急度振舞候躰。近年御家中歴々相招候儀無之、他國者罷越候而急度可振舞儀は、役人可受指圖候。其外前條之通。

一、葬禮・佛事之儀不可過其分限事。

連日之法事一圓不相成。曁寺中疊替・音物等、都而奢たる致方向後可差止候。若夜食を贈候とも、可為一汁一菜候事。

一、葬禮之儀桶に致、成程かろく仕、一門之外は一人も罷越間敷事。

右之通に候得共、組合之者參詣は指支間敷、併大勢名聞之參詣堅く可為無用事。

一、家作諸事相守儉約、成程かろく可致事。

附り、なげし作り・杉戸付書院、くし形・彫もの・組もの無用、床縁・さんかまち塗候儀、幷唐紙張付令停止。但上使宿一・二軒は格別之事。

本通筋を初、前建等相應に作事可致處、其儀は淺間にいたし、內分は圓形之小間等榮耀之普

請堅無用之事。
一、古家を買候とも、家振舞惣て無用之事。
家賣買組合納得、今以急度振舞候向茂有之躰に候。若納得時刻後れ候ば、至而かろくかさ飯可差出、其外無用可爲事。
一、嫁娶・新宅・前髮を取候祝儀、幷二日寄合之刻、振舞一圓無用之事。
一、嫁娶之刻、萬事成程かろく可致事。附り、刀・脇刺等遣し候儀無用之事。
嫁娶等揃方近年甚致増長候躰。以後は急度相改、何れも事輕く可致、尤數日祝に相集候儀等堅無用之事。
一、正月餅面々祝許かろく可仕事。
近年鏡餅に不限、音信・贈答甚敷相成候。不遣して難叶向は、至而かろく可相心得事。
一、年頭・五節句等之祝儀・音物贈答無用。
佳節幷雛祭り・のぼり等に事寄せ奢候儀有之躰。甚不心得に候。急度可差止事。
一、雛之儀、八寸以上は不取扱筈。彌其通りに可心得事。
一、町屋二階より、不依晝夜水抔捨候儀、或は津を吐申儀、堅く御停止に候間、旅人幷子供・下々迄得と可申附事。

一、火事有之由よばはり候はゞ、たとひ風下之者たりとも早速懸り附消可申候。火大きに成り候はゞ、風下之者共は面々之屋根江水を打、火の粉を防、火本江罷出間敷候。但火しめり候はゞ、水を持火本江罷出可申事。

一、男女出合宿堅御停止、幷かこひ女預り申間敷事。

一、音信・贈答之儀、前段にも有之候得共、吉凶共無據可差遣候はゞ、至而かろく可相心得事。

右二日讀近年懈怠之躰承り請候。前々より被仰出候御法度等之條々に候得ば、何も奉承知、晝夜忘まじき筈に候。猶又享和三年村杢右衞門・井上猿之助十七箇條脇書を以申渡候分、今般令差略相渡候條、二日讀之節彌以此箇條無懈、裁許々々より念頃に申諭、會得いたさせ可申候。今般被仰渡も有之儀に付、如斯改而申渡候條、二日讀之儀無怠可申談事。

天保六年閏七月

中川平膳

澤田義門

八月十一日。代官手附の者の納租を取扱ふことを止め、新田裁許・山廻をして之に當らしむ。

〔每日帳書抜〕

八月十一日

一、御郡代官納方種々不正之趣有之、手附共風俗不宜等沙汰之限に付、向後納方手付差除、當分諸郡共新田裁許・山廻に爲相納可申旨、御算用場奉行へ申渡候由、御勝手方より演述之事。

〔司農典〕

付札、御算用場〻

御郡代官納方種々不正之趣有之、前々御算用場より嚴重示方も有之躰に候得共、習俗相改兼、猶亦舊冬申渡候通に候處、手附共一躰風俗不宜、不正之筋次第致增長、諸郡百姓共憂不少躰沙汰之限に候。依之に夫々不正之趣可及穿鑿に筈に候得共、舊染之惡習故格別之詮議を以不及其沙汰に候。向後納方手附指除、當分諸郡共新田裁許・山廻り〻爲相納可申候。若亦人少に而納方手張候はゞ、當時之不役之年寄列幷新田裁許等子弟之内をも指加、納方不指支樣可相心得候。且亦納手附指除候に付、納方而已之手附、人撰を以一組兩人に相極、或は大組等兩人に而指支候向、品に寄手附加人可申付候。

一、新田裁許・山廻り納方相勤候者共不及申に儀に候得共、聊こぼし米等不致、百姓憂無之樣急度可相心得候。勿論米性等精誠遂吟味爲納可申候。

右之趣被得其意、夫々申渡候樣御郡奉行〻可被申談候。尤右奉行においても、尙亦無油斷相

心得候樣、是又可被申談候。右之外御代官等納方之儀は追而可申渡候事。

乙未八月

八月十一日。人特組横濱波江知行を召放さる。

〔官私隨筆〕

八月十一日

一、御用番より左之紙面等來る。

別紙覺書一通指進候條可被得其意候。御宅へ播磨守爲立會八時より被罷越候樣申談候。御横目も兩人罷出候筈に御座候、以上。

八月十一日　　横山山城守

奥村丹後守樣

丹後守殿へ　　横濱波江

右波江儀、當六月六日行步に罷出、松任に相休、夫より水嶋夏之水見分仕度旨申聞候へ共、夜分にも可相成に付相止候樣、家來小將後藤勇藏と申者より達而申入候處甚憤り、足輕一人召連罷越、夫より不罷歸に付所々相尋候處、江沼郡那谷邊に而出合、迎之者供いたし、同九

横濱波江は知行千五十石

日夜分罷歸候に付、波江へ樣子相尋候へ共、應答方都合不仕區々に申聞、始終相分不申、都而病氣之躰に付、緣者共示談之上縮方嚴重仕置候間、當分外出爲相控、急度爲遂保養度旨。且家來手前相尋申聞候趣ども、一類澤田義門等紙面指出候付、如何可有御申渡哉之旨御添紙面を以被出之候。右之趣相達御聽候處、重き身分に而右之爲躰、別而不埒至極之儀に被思召候。依之知行被召放、一門共へ被指預候段被仰出候條、此段一門共へ可有御申渡候事。

乙未八月十一日

〔官私隨筆〕

八月十五日

故右門知行之内

一、五百五十石　横濱直記

横濱波江儀不埒至極之儀有之に付、知行被召放、跡式不被及御貪着候。乍然波江祖父心齋儀は、泰雲院樣・太梁院樣・金龍院樣・觀樹院樣御近習御用數十年相勤候者に付、格別之思召を以直記儀被召出、如斯相續被仰付、仙石帶刀等並被仰付。

（頭注）直記は波江の弟

八月十八日。馬士の不埒なる行爲を戒飭す。

〔御郡典〕

宿驛・在馬牽方不屆至極之儀有之、前々毎度申渡候趣も有之候得共、一旦之事に相成、無程相弛み、中には不作法至極之馬士共有之、長綱に牽或は繋捨置申儀等有之、往來之者共等別而致難儀申儀。除け等与聲を懸候者有之候得ば、心得方不宜馬士共は過言等申募り候儀も有之躰相聞え、甚以不屆至極之事に候。仍而猶更今度右之通申渡候條、得其意、嚴重可申渡置候。向後心得違之馬士共於有之者、品に寄咎可申付候。勿論手先足輕相廻、見咎方等申渡置候條、此段も可申渡置候。

右之通夫々得其意、不相洩樣可申渡候事。

未八月十八日　　　　　　　　　　　內藤十兵衛

　　　　　　　　　　　　　　　　　岡田喜兵衛

諸郡宿驛幷村々役人

八月廿九日。大聖寺侯前田利之、その世嗣利極と共に本鄕邸の馬場に臨む。

〔諸事要月雜記〕

八月廿八日

一、明廿九日備後守樣・駿河守樣御馬場江御出之由、高田被申聞候。久々御遠々敷故、御菓

子等被進候筈之由之事。

同廿九日

一、今日備後守樣には爲御拜見、駿河守樣御同道御馬場江御出之儀、大野才記より申來る。

一、八時過追付御出可被遊處、御用有之御取懸り之處、只今御出被成候段御馬場より御案内有之。御取懸り御用有之に付暫御出御遲成候由、高田氏を以被仰出に付、則拙者御馬場江參り、備後守樣初御側江出、其段申上る。緩々御仕廻被遊候樣御挨拶有之、其段申上る。

一、備後守樣御境二枚開江、三十人方より御付人出置、坂下二枚開へ案內、同所より三十人小頭御先立。夫より內御近習頭・御刀取役兩人、御表小將同道御出向申、御馬見所江御誘引申、御馬見所後ロ之方御緣より御上り、上之間江御通り御着座、御たばこ盆・御茶御相伴之御小將之內より上る。無程御前御出、二之間通り上之間江御出、御兩樣之上ミに御着座、御對顏。追付御馬牽上げ被爲召候。相濟、駿河守樣爲御牽之御馬可被爲召旨に而、御近習頭へ申談る。追付牽上げ被爲召候。右前御肩衣はづし被遊候。御乘馬相濟、重而御前兩疋被爲召、相濟、御馬役江左之通被仰付。其內御菓子・御吸物・御酒・御重肴指上、尤御前へも上る。相濟、御煎茶差上、御供等宜段申上る。其時御挨拶に而、御前御床下モ之御襖開之御入。御兩樣には御草履取御先立、御馬見所御正面階壇下江相廻、夫より御馬場通り御戻り被成候事。

江被召、仰之趣は、御病中御不辨に而御口上難被仰述、依而御口上之趣御書取被成候間、此段宜可申上旨被仰、御書取被渡下候に付、及御請。最前之御間大書院江退き候上、御醫師木村東佺等相招御容躰相尋候之處、別紙之通申聞候。畢而退出仕、旅宿へ罷歸。翌二日晝後彼表發足仕、今四日夕此表江歸着仕候。淡路守樣御容躰見上候處、御顏色甚不御宜、私儀去々年江戸表において御目通仕候節抔与者、御惣躰御格別に御衰弱被爲在候。御目通江罷出居候内、氣候之儀等仰之趣茂御座候處、少々御變口被爲在、御言語御不自由之御樣子に御座候。則御口上書幷御容躰書上之申候。

但當朔日登城仕候節、於御大書院、御熨斗三方・御茶・たばこ盆出、御目通江被召、重而右御間江復座仕候上、二汁五菜之御料理・御酒・御吸物・御肴・御口取・御濃茶・御後菓子・御薄茶被下、給事御手廻組三人被仕、御料理之中御家老幷御馳走方組頭度々爲挨拶罷出申候。同日夕旅宿へ御小將吉川安右衞門を以、今般御使相勤大儀に被思召候之旨仰之趣を以、縮緬五卷拜受被仰付。且淡路守樣御領内罷通候節、町端江御郡奉行等罷出、町奉行增山音摩儀町端より旅宿迄先乘仕、旅宿玄關江御手廻組宮口可也、奥村定右衞門出迎、誘引も仕候。登城仕候節、旅宿より御城下乘所迄、右音摩先乘仕、同所より御先手先立仕、御玄關前御白洲江御家老初諸役人罷出申候。今般爲御名代被遣候に付、右之御取扱之御樣子に而、途中所々江罷出候御

役人、暨御白洲江罷出候御家老初、御番人御馬廻等何茂熨斗目・上下着用仕、平伏仕候。前後惣而右之通に御座候。於旅宿も三時御料理一汁三菜、御酒・御吸物等被下、給事御手廻組三人被仕候。御馳走方組頭茂度々見廻申候。御手廻組三人には代り合、晝夜共相詰罷在申候。且又二日朝發足可仕處、同日晝茂御料理被下候に付、相見合、晝後發足仕候、以上。

九月四日　御使　青山將監　判

〔穩樂齋隨意集〕

一、諸侯方於御國御隱居之節、御國許御目付被遣、判元を被見屆、病體爲見分御醫者被遣候得共、富山侯は御家より御願に付、其儀無之、金龍公之節之通にて相濟。依之十月朔日は富山江青山將監殿被遣之。

十月は九月の誤

九月八日。前田齊泰、德川家治の五十回忌法會に上野寛永寺に豫參す。

〔諸事要用雜記〕

九月六日

浚明院樣五十回御忌御法事に付、明後八日曉八時之御供揃に而、常照院江被爲入、御衣冠被爲召、夫より上野御豫參可被遊旨被仰出之、主付より夫々申候事。

九月八日

一、今暁御供追々相揃、八時御供廻り被仰出、無程八つ一歩五りん御出、常照院江被爲入、御膳被爲召上、御官服被遊候而、六時過御提灯に而御供所江被爲入。紀州様・尾州様御斷に而、水戸様迄御豫參被遊。兼而水戸様江御心添之儀被仰込有之、於御靈屋御習禮等有之由。夫より御成之節御進退等有之、還御後御自拜有之。常照院江御立寄、御膳被爲召上、尾州様御成後御自拜に御參詣之由に而、暫御見合等も有之由に而、晝八半時過御歸殿被遊候事。

一、御成之時分御進退等之事、粗拜聽等仕候處に而者、御供所へ被爲入御待之内、公方様御手水廻り御案内、常照院より申上、御唐門之内向て左之方に御着座、勅額門江被爲入候時分御出向、御唐門之外御假廊下西之方向て左也。切拔口外に御草履に而御出向、御成之節御平伏、御行過之御跡へ御付、唐門内江御入、初め之處に御扣、御三家様方御階御上り之處に而、御前には御階向に右之方より御上り、御假屋に御着座、讀經相濟、御三家様御階御下り之處に而、御前にも御下り、唐門之内初め之御着座處江御出、御三家様御自拜相濟、直に御退、御門主御先行、公方様御廟江被爲入通御之節御平伏、御廟より直に還御、其節御平伏、上意有之由。管絃有之。上意慥には御拜聽は無之由に候得共、御進退は有之由慥に常照院など見上候由。御前にも上様御進退有之と御覺之由也。相濟、一先御供所江被爲入、御名代等相濟、御自拜に被爲入、夫より常照院へ御戻り被遊候事。

一、右常照院より御供所迄、御輿被爲召候事。

一、御先宮に而は、還御之節、御唐門之外初め之切抜口へ御出御迯り被遊候由。御當宮に而は御迯りは御唐門內也。

一、御冠服も此度は御當宮に而御位者御替りなく御指貫、此品は藤之御分、又は鳥だすき、是は御若年之御服之由。京家に而は鳥だすきは御廿五迄、關東に而者御三十三、御前御年增も有之、御二十七に被爲成候得共、右關東定に而は御支なしとて、此旨鳥だすき被爲召候由也。御太刀、衞府御當宮に而は螺でん青貝なり。入之銀御拵御太刀也。夫々此度新出來之事。

一、今日之御豫參、萬事御都合能、天氣合も無類也。寛政四年已來打絕無之候。御當代に而も、文政十一・同十二にも付仰出候得共御斷被成候處、此度御成も有之、全き御豫參被爲濟候事。

〔諸事要用雜記〕

九月十八日。前田齊泰の子利順宮參を江戶富士社に行ふ。

九月十三日

一、今日高田善左衞門御使者を以、近々御宮參に付龜丸殿ゟ御鎗二筋燕口すゝ竹羅紗色・干鯛代包のし・御馬一疋新川鹿毛鞍置、今朝被進之候事。

〔見聞袋群斗記〕

九月十八日、龜丸殿富士社江御宮參、御吉例之通り御中屋敷江御立寄。同日爲御嘉儀、老女衆奉文を以て、鮮鯛一折を賜ふ。內府樣御初より同品賜るなり。依之龜丸殿よりも以女使被献卷物三・鮮鯛一折、御臺樣江卷物二・鮮鯛一折、其外內府樣御初御三方江鮮鯛一折充被献之なり。

〔諸事要用雜記〕

九月十八日

一、今日龜丸殿富士社江御參詣被遊候。曇天に候得共雨降不申、好き御都合之事。

一、右御舍に而今日御囃子被仰出、暮頃相始り候事。

九月二十日。越中境關所に保存する書類の年號を上申す。

〔國事雜抄〕

御關所御用留帳等有高年號

一、寬文之頃より　御用留帳

一、寶曆之頃より　往來人帳

一、同　斷　過　書

右之通に御座候。此外古き留帳等、先年御土藏損じ候節損じ、其後も長く御道具等打込相成

居候に付、鼠喰等も殊之外いたみ申候。和田清三郎殿御在役中より、往來帳等入御覧候事相成、其後は御關所往來人帳等之帳面も中折に御座候得共、先年は多分薄墨紙或はちり紙等にて拵有之、夫故別て損じ可申哉と奉存候。其内御入紙面、其外に古き來狀等、少し相殘申候。右御尋に付如斯御座候、以上。

未九月二十日

川口彌三左衛門

東方權左衛門

柴野甚助

茨木主殿様

九月廿二日。前小松町奉行富田九内・堀平馬不埒を以て減知逼塞を命ぜらる。

〔諸事要用雜記〕

九月廿二日

一、御先弓頭富田九内小松町奉行相勤候内、同所之御かね明き候由に而、元二十貫目とやらに利足過分に相成、元利當時七十貫目餘之由沙汰有之候。右元銀は一類馳合出候得共、利足出道無之、御達に成候由。役所之銀を拜借と申名目に而もなき哉、御達申而借用仕譯は無之

故之事之由。不正至極也。堀も同様之由。
私組富田九内、先役小松町奉行相勤候内不埒之趣有之候段被爲聞召、依之御役儀被指除、組
外江被指加、自分知五百石之内二百石御減少、逼塞被仰付候。此段可申渡旨被仰出之趣、私
宅江相招可申渡處、脚痛致難儀候に付彼宅江罷越申渡候處、奉畏迷惑至極奉存候旨申聞候。
右之節御横目細井辨次郎指引仕候、以上。

乙未九月廿二日　　横山山城守

本多播磨守殿

前田美作守殿

長　又三郎殿

堀　平馬

右私組平馬儀、小松町奉行相勤罷在候處、不心得之趣有之に付、役儀被指除、指扣被仰付置
候。然處右在役中不埒之趣有之段被聞召候。依之知行高五百石之内二百石御減少、逼塞被仰
付候段被仰出候旨、御覺書を以被仰渡之趣、同役御用番山口左次馬立會申渡候處、奉畏迷惑
至極奉存候旨申聞候に付、御請私手前へ取置申候、以上。

未九月廿二日　　神田吉左衛門

前田美作守殿

九月廿九日。前田治脩夫人十七回忌法會を下谷廣德寺に執行す。

〔諸事要用雜記〕

九月廿八日

一、明廿九日法梁院樣十七回御忌御法事に付、九時之御供揃に而、御法事奉行より御案內次第、廣德寺江御參詣可被遊旨被仰出候。

九月廿九日

一、九半時過法華頓寫相濟候段內膳殿より御案內、八つ二分過御法事濟寄に付、御參詣御差支なき由重而御案內に付、追付御供廻り被仰出、同二分五りん過御出、廣德寺江御參詣被遊、七つ鎌御歸殿被遊候事。

十月十五日。幕府、富山侯前田利幹の隱居は加賀侯の代願にて可なることを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

十月十五日

一、八半時前御表江御出、於御小書院溜御先手吉松庄左衞門殿御逢、無程御入被遊候事。

一、右は淡路守様御病氣之處、御參府も被成兼、追々御願に而是迄御國被成御座候得共、最早當夏中に而御願之程も相濟候に付、先達而此方様より當秋中迄御願に相成、其内に段々御内慮御願有之、於御在所御隱居、出雲守様江御家督之儀、此方様より御引取御願之儀段々相調、御在所江御目付并御醫師も不被遣、萬事此方様江御任之儀に御願相濟候。御當家に而者御國御隱居之御例も有之、御末家之儀、御在府には御家老富山江被遣、御判元も御見屆可被成旨、夫々御指圖相濟候に付、右御願書今日吉松庄左衞門殿を以御用番江御進達有之候。依而淡路守様よりも何等之御願も無之、全く御本家御引受に相成候。一通御隱居・御家督は淡路守様御家に而は御直御願、備後守様御家に而は御本家御引取之儀も有之由。依而此方様より御願之上、富山様よりも御願書御指出被成度趣も有之候に付、其段御用番江御伺有之候得共、淡路守様より御願には不及、此方様迄に而宜由御差圖有之事。

御先手は幕府のなり

富山侯前田利幹は是月十九日致仕を許さる

備後守は大聖寺侯前田利之

十月十八日。羽咋郡小山西性寺の製する陶器を藩外に販賣するを禁ず。

〔每日帳書拔〕

十月十八日

一、羽咋郡小山村西性寺等火打谷より掘出候吳須、内職手燒之品に相用候處、はびき方等も

宜敷に付、爲冥加銀二枚差上度旨相願候由、寺社奉行紙面出候得共、僧徒之身分他國へ差遣し致商賣候儀は不相當儀に付、難承届段申渡紙面相返。

十月十九日。富山侯前田利保、家督相續を命ぜられたることを前田齊泰に謝す。

〔諸事要用雜記〕

十月十八日

一、御用之儀有之候條、明十九日四時御登城、淡路守樣御名代御一類之內、幷出雲守樣御同道、御登城被成候樣御奉書到來之事。

但、御痲邪氣之由に而、御名代者駿河守樣江御賴被遊候事。

一、右之趣出雲守樣江被仰進候上、御同所樣御出、御承知之御口上被仰上、御痲邪氣に而對顏は不被遊旨被仰進候。

十月十九日

一、今日御願之通淡路守樣御隱居、出雲守樣御家督被仰出候段、御城江相詰候聞番不破紋左衞門より富永左膳迄申越候事。

一、右御名代御勤之駿河守樣御出被成、內膳を以御名代御勤之由被仰上候由。畢而御近習頭

出雲守は前田利保

駿河守は大聖寺侯世嗣前田利極

御取次に而、右御祝儀被仰上、御對顏は無之候事。

一、出雲守樣御出、今日御家督御相續難有思召旨御口上、御近習頭御取次、御痛邪氣に付御對顏は不被遊、目出度思召候旨御應答被仰出候事。

十月廿六日。前田齊泰水戸侯德川齊昭の小梅邸に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

九月十二日

一、當朔日御登城之節、於殿中水戸樣江御逢之處、近々あなた小梅之御屋敷江御出被成候樣御直約御座候由。先達而會津樣、御借用に而被爲入候事も有之由御直談。仍而粗聞番に而間合しらべも有之、會津樣は兩度御出、一度は御借用に而被爲入、一度は會津樣被爲入居候處江水戸樣御出被成、夫より御膳等もあなたより被進候由。此方之御模樣如何相成候や相分り不申候。多分水戸樣も被爲入候御樣子之由、重而聞番承り合之由に候。大抵右會津樣之御振に而者、御先詰も御用人に御留守居外に御小將六人參り、あなたより御用人等も罷出候由に候。是等尤御料理爲御持被下候由に候。水戸樣江も御提重等被遣候由。水戸樣へ被爲入候節は、御先詰も三人程參り候由に候。此度之御模樣如何相成候哉不相分候得共、水戸樣も被爲入候御樣子之由聞番承り合候に付、左候へば同勤一人・配膳役一人・御裝束方一人充位に而可

宜旨、高田氏被申聞候。野間裝束に而可有之、配膳役・御裝束方江心得申談置候事。

〔諸事要用雑記〕

十月廿六日

一、今朝七つ二歩御出、水戸様御下屋敷江御常服に而被爲入。御同所御長屋之内御二階上之方、御坐之間に相成居。其處に而あなた御用人等被爲召、御家老は御供に而參り候に付、其節は不出、高田誘引、山崎伺公。都而此都合は聞番不破示合之由。御辨當被召上、御野間御裝束に御改、六時過水戸様御出被遊候、御出宜旨山方運阿彌申聞に付、同所御式臺に而御草鞋被爲召、高田・山崎・不破・森・前田御茶屋入口二枚開迄御供仕、引取。右御長屋之內、御先詰を初御供人溜席分有之、其處に相詰候由。御先立山方運阿彌等仕候由。水戸様御同道に而御鷹被遊候。御双方共御拳有之。於御茶屋御會席御料理被進、外御菓子等も被進候由。終日能御都合に而、御謠迄も御二人様とも被遊候位之御模様之由に而、水戸様に者七半時過御戻り被遊、夫より御夜食被進。其節御家老等罷出居。且高田等水戸様御戻り後御庭拜見被仰付候由。夜六半時過御歸殿被遊候事。

一、御先詰より御供人江、御酒等被下候由に候。

一、今日水戸様江御出に付、御待受七半時と被仰出候事。

一、水戶樣ゟ御提重等被進候由。其外御家老初へも被下候由。都而別席取扱に候。おなたによ
り左之通被進候事。

御印籠　二つ　臺居
御提重　御菓子入
御畑物　一籠
別段御大鷹　一据

右御前ゟ被進候。

御小衝立　一箱
白魚　一籠
鯉　二獻一桶
別段御拳之鴨　一つ

右姫君樣ゟ被進候。

兎　二つ　一籠

右犬千代丸樣ゟ被進。

一、御戾り之上、右品々到來居、入御覽候。姫君樣之御分御住居ゟ廻し候。且又今日之御獲

柄水戸様并此方様之御拳不殘合十一、御獲柄竿之儘、小石川江御歸殿之上、直に運阿彌より富永左膳迄爲持來り候事。

一、被進候御品、御提重入等御取分候而、巣鴨へも被進候由に候。且又小梅村御屋敷守より、大根・くわい獻上致候事。

一、寛政八年尾張様外山之御屋敷江被爲入候節、御戻り之上、御近習之者を以御禮被仰進、翌日聞番被遣候由、聞番方に相見え、先例相しらべ候様高田被申聞、則相しらべ候へ共見當り不申候。別席僉議之上、今日御戻り後、左之通御口上を以御近習頭江被仰付候旨、昨日高田被申談候。御上屋敷へ可相勤筈に候へ共、山方運阿彌御取次之儀、夜に入御使相勤候儀も、末様御面倒之儀も可有之と、聞番不破より山方へ示合之上、小梅之於御屋敷、小石川へ相勤候趣に取計出來之儀に示合候に付、則御先詰之山小氏、於小梅被相勤候事。

御口上手扣左之通。

兼而蒙仰候に付、今日者小梅御屋敷江罷出候處、御料理等種々御馳走共、殊に御庭內御同道被成下、其上品々拜受仕、段々御懇之御儀、厚忝仕合奉存候。先御禮近習之者を以、此段申上候。

十月廿六日　　　御名使者　　山崎小右衛門

右御取次山方運阿彌を以申上、御應答之趣同人申聞、彼於御屋敷達御聽。

〔溫敬公御日記〕

十月廿六日

一、今曉七時供揃にて、七つ打供爲廻出宅、水戶殿小梅屋敷へ參上、夜五時前歸宅之事。

一、今日總餌柄。

水戶殿　　拳　　眞鴨五つ　小鴨一つ

予　　拳　　同斷　　同斷

彼方鷹匠高久彥太夫　　翕　　眞鴨一つ

一、今日夕・夜共水戶殿より會席出る。其外供人先詰之者、且供人下々までも肴等出候事。

拜受之品々。

今日餌柄不殘　　大鷹　一据　　くるみ印籠　二つ

彼屋敷出來之畑物等品々一籠

住居へ內々。

小つい立　一脚　　鯉　二　　彼の屋敷にて捕揚候白魚　一籠

水戶殿拳之眞鳧　一つ

犬千代丸江

上屋敷にて出生之兎黒ぶち牝・牡

右之通。且餌柄之分は上屋敷江まで爲持に相成、水戶殿上屋敷より此屋敷まで來る。

〔見聞袋群斗記〕

十月廿六日水戶齊昭公御下屋敷小梅村御邸御招に付御出、御鷹場有之。何歟御用談も有之、終日御出なり。

〔溫敬公御日記〕

十一月五日

一、水戶殿小梅屋敷江參上いたし候積る爲挨拶、今日聞番使者にて左之通進物。

水戶殿江

側　棚秀平細工　紋絹　五端　干鰯二千入　一籠

御守殿江

干菓子糸卷　一箱

御簾中江

硯箱堀越細工　交肴　一籠

鶴千代鷹殿江

鴛鴦　一番

以上

御守殿江は水戸殿より御傳可被下旨、口上に申述る筈也。

十一月二日。前田齊泰平尾邸に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

十一月朔日

一、明二日五時不遲之御供揃に而、御下屋敷へ御出可被遊旨被仰出、夫々申談候事。

一、此度從水戸様被進候御鷹、明日御供被仰付候。御先江罷越候筈に、据人金子又右衛門江申談候事。

一、明日御鷹野御趣意に而被爲入候付、御先詰此御屋敷より野間装束に而御出前罷出、直に平尾江罷越候筈に候。且右に付、御行歩に御出之節とも違候事、御先詰人高も今一局相減可然哉に高田氏等示合、委曲拙者相伺候處、其通被仰出候に付、減方等示談之上夫々申談候。且御膳所は人高減じ候而、輕く相建候事に先達而御出之節詮議相極候に付、明日も寒天之儀御辨當に而も如何に付、先日之通と申談候。則相建候筈に候事。

御鷹野之振に而御下屋敷江被爲入候節御先詰等減方。
一、御近習頭　是迄之通一人。
一、奥御取次　兩人之處一人になる。
一、配膳役　不時共三人之處二人になる。
一、御近習番　近年之通二人。
一、御膳所向　近く詮議之通。
一、御居間方溜　不時共六人參り候處、當り之御先詰迄三人になる。
一、御歩横目一人。
一、御歩横目足輕一人充參り候處、御歩横目は相減、御横目足輕迄になる。
一、御茶堂、是迄之通一人。
一、物書平坊主共三人參り候處、平之內一人相減、二人になる。
一、奥之口空地小遣三人參り候處、兩方より一人宛參り、一人減ず。
一、御醫者御出前伺に而不被召連。
一、御先詰之人々、頭分初御上屋敷より野間裝束に而參り、從者若黨一人、鑓・草履取迄召連候事。

但、持馬之人々爲牽候儀は格別之事。

一、右に付平士等右に准じ減少召連可申候。尤御貸馬等受取不申候。

右之通夫々示談之上相極、從者召連方之儀無急度配膳役等へ申談候事。

一、御膳所認之御重菓子、先日之通御用意無之、且御住居幷巣鴨より召上り御菓子被進候儀、先日御出之節申合候儀も有之候得共、明日者御鷹御趣意に而、其上日短、召上り之御間も無之候間、御斷に相成可然哉と伺被仰出、其段老女江申入、不被進儀に相成候。仍而召上り候物は夕御膳迄に候事。

但、右御鷹に而なく、御行歩に御出之節は被進可然。是等有之候而は、御居間方溜よりも少餘計參り居不申而は御用支に候事。

拙者共御先詰、明日之處一人參り候筈に而、大村氏被出候筈之事。

〔諸事要用雜記〕

十一月二日

一、今朝懸流四つ二分鐘の五つ餘程前也御出被遊、晝頃より雨に成、夕御膳後御庭御出も不被爲成、早く御戻り之儀御下屋敷より申來。御待受七半時に付、夫々御居間小頭等申遣、七つ二分御戻被遊候事。

一、御鷹御翕無之、網に而夜前幷今朝打候由に而、眞鴨五つ・小鴨御獲柄有之候事。

十一月八日。金澤鶴來屋左平等の外伊勢暦を摘寫して出板することを禁ず。

〔諸郡御用留〕

當町鶴來屋左平等三人、伊勢暦之內拔書月頭与唱候略暦書拔、前々より賣弘め來候處、外々より近來右に似寄候紛敷略暦賣弘申に付、右左平等三人月頭賣弘株商賣相願候に付、御勝手方年寄中等江も相達、承屆候條、以來紛鋪暦取扱不申樣夫々可被申渡候、以上。

未十一月　　　　御算用場

御郡奉行中

右之通申來候に付、寫相越え候條、得其意、夫々不相洩樣可相渡候、以上。

十一月八日　　　　內藤十兵衛

馬場右近

諸郡惣年寄中・年寄並中

〔御用儀品々留帳〕

一、金澤町鶴來屋左平等三人、是迄伊勢暦之內拔出候月頭書、致出板賣弘來候に付、天保六

年願に寄株商賣御聞届之旨、御席より被仰渡候段、天保六年御算用場觸付。

別紙とは先に上申したる意見書にして本年七月の條に在り

十一月十四日。領内に於ける鐵炮の取締に關し令す。

〔郡方御觸〕

御領國鐵炮縮方之儀、年古き儀に而いつとなく縮方相弛み居候御郡茂有之。因玆三州郡々之樣子先達而相しらべ、以後縮方之儀取極別紙之通及御達候處、拙者共詮議之通御聞届、御付札を以被仰渡候に付、寫相越之候條、可得其意候。依之以來縮方嚴重相心得候樣、一統不相洩夫々可申渡候。

一、能美郡山方幷片山入村々、曁能州四郡村々之儀、猪・鹿等作物喰荒、おどし打致度節者、其村々より時々組主附年寄迄願出させ、右年寄於手前聞届、村役人幷手附役之者指出、縮方嚴重爲相心得、打仕舞候者組主附手前江鐵炮取揚置、右打仕廻候趣役所へ可及屆候。

一、石川・河北兩郡山方・里方共村々より、時々拙者共江願出聞届を請、威打爲仕、尤手附村役人指出、縮方嚴重可相心得、打仕舞候はゞ組主附手前江鐵炮取揚置、右打仕舞候段可及斷候。

一、礪波・射水・新川右三郡之分者、おどし打爲仕候節聞届を請申儀等、都而在來之通彌以無違失可相心得候。

一、狩人幷狩人之外に而茂鐵炮所持之者、拜領之鐵炮或者御預け之分、曁先年奉願御渡之譯、且持主之名前、鐵炮寸尺・玉目等、夫々巨細帳に仕立、同様之分三冊宛、來月十六日迄に可指出候。將又是迄無謂自分に持傳候鐵炮は取揚候條、夫々相しらべ、當月中に役所ゟ可指出候。尤此分も寸尺・玉目・持主名前等、書付調可指出候。

但、右之通組主附手前ゟ鐵炮指預け候條、面々拜領之分、或者御預之分茂有之候はゞ、其分茂書加、追而預り證文可差出候。且又狩人ゟ相渡居候分も、持主證文取立、村役人曁主附加奥書可差出候。

一、鐵炮相損修覆仕候歟、又者新筒に仕替候節者、書付を以願出、尤入用銀茂取立可指出候。

右之通無違失可相心得候。先達而被仰渡之趣茂有之に付、今般如此申渡候條、此餘御縮方相弛み不申様、嚴重可相心得候、以上。

未十一月十四日　　　　內藤十兵衛

馬場右近

諸郡惣年寄・年寄並中

十一月廿五日。通用の小割札古札引替の期限に關して告ぐ。

〔觸留〕

當時通用之小割札古札之分、當月中引替所ゟ指出、新札与引替可申旨、先達而申渡置候得ども、未引替殘多有之躰に相聞候間、右小割札來三月中迄、新・古打込可致通用候。四月朔日より通用差留候條、三月中不殘引替可申候。百目札之儀者、尤當月中引替可申事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十一月廿五日　　本多播磨守

十一月。能登口郡に產する苧絈買入方に資銀を貸與し且つその製品を精良ならしむべきを告ぐ。

〔御郡典〕

羽咋・鹿嶋兩御郡村々苧絈稼方之儀は、往古より押立候產業に候處、近年不景氣に相成、江州表前銀仕送方折々指留、年柄に寄絈師之人々等及迷惑候躰。依之絈方仕法相立候はゞ、產業之爲筋にも可相成趣に付、頃日絈方御仕法御詮議最中之處、江州より仕送銀も指止、時節柄絈口過之人々難澁之躰に付、是迄絈中買仕來之人々等ゟ當分銀子相渡し、其許中手形を以中買より銀子爲引請、小買人撰み之上貸附有之、絈爲買入候間、絈師之人々絈仕立方、無數・短尺等不正之絈取扱不申樣、於村々吟味有之、今度銀子相渡人縮有之者之外、脇賣不仕樣村切縮方有之、一圓洩絈無之樣相心得可被申候。根元如此不景氣に相成候儀は、絈中買幷小買絈

師に至迄、不正之短尺・無數紬取扱候故、能州紬年々名目相衰、畢竟産業之者共憂に相成候間、以來相改人々吟味仕、三尺八寸に八百筋に相仕立候樣、綿密詮議可有之候。猶更追々御仕法方御詮議之趣被仰渡候はゞ、萬端遂詮議、夫々可申談、御仕法全き場に至り候はゞ、一統安堵仕相稼申儀に而可有之候間、此段被申談候樣致度、此紙面先々急々相廻、承知之趣致判形可被相返候、以上。

未十一月

岡部七左衞門
三輪宇八郎
北村甚左衞門
眞館彌左衞門
北村惣助
高橋平兵衞
河合瀨兵衞

肝煎・組合頭中

邑知組　東庄組　西庄組
崎山組　山三引組　熊木組

十二月十一日。德川家齊夫人歳暮の祝儀を前田齊泰等に贈る。

〔諸事要用雜記〕

十二月十一日

一、今日從御臺樣歲暮之御使久留孫太夫殿御越、九半時頃御表江御出、夫々例之通相濟候事。

一、眞龍院江從公方樣上使、從御臺樣御使兼太田與次右衞門殿御越、御菓子等出、相濟、宜旨古屋甚兵衞より御案內申上候而、八つ三步過引出橋より御出、御逢被遊候事。引出橋內御廊下迄御供致候事。

十二月廿二日。前田齊泰稽古能を舞ふ。

〔諸事要用雜記〕

十二月廿二日

一、御裝束なしに而御稽古仕廻御能被仰出、則九半時揃に而、祝言共六番有之、不殘御前被遊候。右御相手御手役者迄、一役二人程充指出候事。

冬。氣候大に順を失ふ。

〔救荒新策〕

天保六未年の冬、雪降らずして寒候已に盡き、立春の後に至て大雪俄に積り、軒にひとしく、積雪久しく春を厭て、大小麥三朔を雪下に經たり。遂に申年不熟の兆を致せり。

是歳。領内に十三ケ所の備荒倉を築造せしむ。

〔改作方年中行事〕

一、天保五年御蓄米被仰付候に付而、荒年之御蓄之儀故、諸郡とも一組に一ヶ所宛備荒倉可被仰付處、御當節一時に難被仰付に付、先要用之處被仰付、追々御建増可被爲成御趣意之處、下方より冥加として材木等指上、幷右御入用銀加入相願候に付、御達申上御聞屆有之、天保六年十三ヶ所出來、備荒倉与名目被仰渡候事。

右十三ヶ所之分左之通

礪波郡福田組　六家　　同郡能美組　池尻

但、此二ヶ所地子米藏宿給銀計下より相勤る。

新川郡　三日市

但、此地子米藏宿給銀所方より永代可相勤旨。仍願承屆る。

同　泊町　　同　滑川

能美郡　小松　　石川郡　松任

河北郡　津幡　　口郡　大町

奥郡　宇出津

但、以上七ヶ所御藏圍內に付、前段藏番に不及。

射水郡　下　村　　　射水郡　小　杉

射水郡　加　納

但、以下三ヶ所地子米藏番計下より相勤る。

〆十三ヶ所改作所手合之御藏也。

一、屋根葺替等普請手入之儀、改作所より可申付願出候得者、願書定役へ相渡、詮議渡す也。承屆分者其旨裏書等に而相渡す。

一、入用銀は最初願候節、圖り方仕出し指出すに付、承屆候得者、普請出來之上、銀高請取切手出之、例之通に而相渡す也。

一、別ヶ所之右藏番人立替、役所へ願出候得者、承屆べく分定役へ相渡、裏書等爲仕出候也。番人誓詞、定役相談所廻り之刻見屆之。

天保七年

正月朔日。前田齊泰登營して年賀の禮を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

正月元日

一、今曉益御機嫌能、八半時御目覺被遊、御膳被召上、夫より大福等御祝方御例之通有之、六時前相濟。指引御奧小將御番頭大村之事。

一、御直垂被爲召、掛流五時御登城被遊、大抵昌平邊に而御提灯引け圖り之處、程六ケ敷、少御早く、御城迄御提灯也。御待受四時過之事。

一、御城下り御付人四つ八歩五厘來り、是は御席より出候由御次に案內有之筈。そろ〳〵御出向申合、御用部屋初御式臺ゑ參り候處、昌平橋御付人來る。是に而年寄衆被罷出候に付、敷付端御左ゑ大村御奧小將御番頭、御右ゑ奧御取次大野、配膳役兩人御左右ゑ奉出向、鏡板ゑ內膳・藏人罷出。無程三丁目御付人、其內被爲入、大御門より表御式臺御入、御禮御首尾能被仰上候旨內膳ゑ御意。藏人御先立に而被爲入、階上御右之方へ御用部屋初御近習頭・配膳役幷御表小將、且又御膳奉行・御納戶奉行罷出、御間之內御供其外諸頭・取次御小將等御式臺に列居、御白洲ゑ有澤罷出、御勝手座敷等右筆等幷御出入之町人御通懸御目見、新御廊下より御先立御用部屋、御居間ゑ被爲入。御稽古所通也。

正月廿三日。前田齊泰夫人江戶城西丸に登る。

〔諸事要用雜記〕

正月廿二日

一、今日姬君樣西丸ゑ御登城被遊候事。

正月廿七日。兩替手形を銀仲手形と交換すべき期限を告示す。

〔觸留〕

當町兩替升屋次右衛門・酒屋宗左衛門預り百目手形、以來指止候に付、銀仲手形与引替可相渡候條、所持之人々當三月中引替所へ指出可申候。

一、小割手形古札之分、四月朔日より通用指留候段等、先達而申渡置候通に候。右古札引替殘り有之候者、同月廿九日迄に引替所へ指出、全引替可申候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

正月廿七日　長　又三郎

正月。田地の施肥を豐かにすべき方法を講ぜしむ。

〔司農典〕

作之豐凶者、氣候に寄申儀には候得共、屎物手入方に寄地味惣躰出來劣に相成候儀。行屆候得者、假令無是非氣候不順氣に而も、出來劣りも左而已にも有之間敷儀。仍而屎物いかにも可致手厚に候處、近年一躰高貴に付行屆兼候躰にも相聞得候間、猶更屎物成限り爲行屆候樣、御勝手方御席より被仰談之趣も有之候間、惣而干鰯等直安に買入方も可有之哉。礪波郡より去暮松前鯡等買入方仕法之趣申聞も有之、猶亦於役所に此節詮議之趣も有之候得共、御郡に

尚可然百姓之爲に相成候仕法等、心付之趣も候はゞ可申聞、幾重にも可遂詮議候事。

正　月　　　　　　　　　　　　　改作方御郡奉行

諸　　郡

二月六日。徳川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。

〔諸事要用雜記〕

二月六日

一、今日御使番松平金之丞殿を以、御鷹之鶴御拜領被遊、萬端首尾能被爲濟候。御城下り御付人、九つ七分五りん過參る。夫より御表江御出被遊候。御退出之上御入之節、御勝手座敷幷坊主衆溜、且御兩家樣御對顏被遊候事。御入八つ一分過也。

一、今日上使後御登城、幷井伊殿、且御老中方御廻勤之儀、御大小將御番頭より伺。上使相濟彼是御刻限も移可申候間、御登城は不被遊御圖り之由、御用部屋被申聞。依而八半打て、夫よりそろ〳〵御供廻り被仰出候事。

一、御廻勤御出八つ七分五りん、御戻り暮合之事。

一、御拜領之鶴御居間に而御覽相濟、可相渡旨被仰出、御料理頭へ相渡候處、前々之通毛塩に可仕旨申聞、其通与申談候事。

二月十六日。藩の財政は自今收入のみを以て支出に當つべき方法を講ぜしむ。

〔毎日帳書拔〕

二月十六日

一、御勝手向追々御逼迫、當時過分之御借財、御手繰も難出來に付、不被得止事御借財向へは定數之別除米相立、向後御借財不相嵩、御勝手御取直之道可相立樣、夫々御仕法被仰付候。然上は都而御入箇而已に而御取調理無之而は不相成候間、是等之趣一統深存込、今一篇御入用減方之儀精誠を盡可有僉議旨等、於御勝手方申渡有之。

〔典制彙纂〕

御勝手向御運方連々御逼迫に付、追々御省略之儀申渡置候通に候。是迄種々御仕法を以、其時に一旦者御凌有之候得共、年々過分之御不足御調達を以御取續之處、去巳年凶作以來御借財彌增に相當、御入箇悉皆跡引に相成、御公務を初年分之御拂方者、都而御調達に而御辨用之族故、年々利足渡過分に相成、第一御地盤之御出入御符合無之故、如何程御入用減方付候而茂、御勝手御取直之筋一圓不相見得、追々御政事向も不被爲行屆而者不容易儀。依之重々遂詮議、去午年より嚴重御省略之儀申談、御符合之詮議に取懸り候處、一統出情に寄追々減

方致出來、中に者格別御入用相減候向々も有之候得共、末永久全御出納之御符合者不相調、乍然當時過分之御借財御手繰も難出來に付、不得止事御借財向ゟは定數之別除米相立、向後御借財不相嵩、御勝手御取直之通可相立候樣、今般江戶・大坂・御國向共夫々御仕法被仰付候。然上者此後不時御入用有之候共、御調達者難被仰付、都而御入箇而已に而御取調理無之而は不相成候間、是等之趣一統彌存込、是迄減方付候品々跡戾り不致樣相心得候儀者勿論、今一篇打返遂詮議、御入用減方も有之儀、是非御勝手御取直無之而者不相成儀に候條、猶更一統力を合、誠實を以可致出情儀肝要之事に候。

一、是迄之御運方は、時々御調達を以繰合、無御指支樣に取計來候得共、右之通以來者御入箇而已を以御辨合候圖に付、月に寄御次向を初諸渡り方繰延樣之儀も可有之候。將又非常之御手當御圖り通未相調儀間、近年之內何と歟過分之御入用出來に候者、先定式御入用方を被打欠、御凌被成候より無他事御手繰方に候間、此等之趣心得可有之候事。

申　二　月

二月十八日。前田齊泰の子利順髮置の儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

二月十八日

一、今日龜丸殿御髮置御規式、御首尾能被爲濟候。右御白髮上御用、兼而被仰付候通り、大村肴次郎相勤候事。

一、右御祝儀として、大奥より女使を以夫々御拜領物有。右爲御禮八時過、昨日被仰出候通御廻勤被遊、八つ八歩御戻り被遊候事。

〔見聞袋群斗記〕

二月十八日龜丸殿御髮置御祝、同日將軍家より爲嘉儀、女使を以て綿二十把・一種一荷賜るなり。内府様より一種一荷、御臺様より卷物三・一種、大納言様・御簾中様より鮮肴一折充賜之なり。同日龜丸殿より御使以老臣、縮紗五卷・一種一荷被獻なり。内府様・御臺様に卷物三・一種一荷充、大納言様・御簾中様に一種一荷充被獻之なり。

二月廿三日。卯辰茶屋町跡の風紀に就いて議す。

〔本多政和覺書〕

二月廿三日

一、前田圭馬別席に而申聞候は、卯辰芝居之儀に付先達而より段々被仰聞候趣有之、右方は當時隨分替儀も無之得共、茶屋町跡大きに訝敷様子、十に八・九分は御家中子弟、中には有祿も有之様子に候。名前調理させ候へ共、俳名等を付罷在候故、何方之者と申儀も難知御座

龜丸は後の鳥取侯池田慶榮

候。右之通に而は甚不埒之儀、畢竟大破之處ゑ至候而は不宜候間、何と歟御僉議之筋も有之間敷候哉。主馬心附候處に而は、町奉行幷私へ御席より被仰渡、每夜足輕を廻し、殊々敷申觸し調理、及遊興候者有之候はゞ裏口より逃し候と歟申恰好に成候はゞ、御家中之人々痛みに茂不成、彼是可然哉と奉存候。其上罷越候者、急度調理方も有之儀と存候。猶更御勘考候御差圖御座候樣仕度旨申聞候事。

二月廿三日。鳳至郡輪島町に火災あり。

〔每日帳書拔〕

二月二十三日

一、當月十日輪嶋河井町出火、五百二十軒餘燒失。

二月。諸郡より收納米皆濟賞美に關する從來の慣例を上申す。

〔上田舊記〕

年內御收納皆濟仕候爲御賞美、正月十六日於御算用場、御目錄を以御銀等頂戴被仰付候儀、文政四年御仕法以前は、無組御扶持人之者裁許組御郡一番皆濟仕候得者、身當銀三枚之外に、一番皆濟之御賞美銀三枚・紬二反被下候。文化七年內嶋村故源作元組裁許仕居、御郡一番皆濟仕候處、右之通被仰付候。御仕法後に而は惣年寄主附組一番皆濟仕候得ば、銀三枚・紬二反被

仰付、身當り之分は不被仰付候。二組主附罷在候者、兼組一番皆濟仕候得者、身當り与兩方とも被仰付候。笠間七右衞門・南兵左衞門兩人江、倉垣組當分主附被仰付置候而、天保三年倉垣組一番皆濟仕候處、兩人共身當り銀二枚宛、外に右倉垣組一番皆濟之御賞、兩人江銀二枚・紬二端被仰付候。尤此年一統減方被仰付、銀二枚宛に相成申候。笠野組之儀、西川源兵衞・渡邊兵右衞門兩人江當分主附被仰付置、去年御郡一番皆濟仕候而、則當春右兩人江銀三枚・紬二端被仰付、外に身當り銀三枚宛被仰付候。且又惣年寄之儀者、主附組無御座候而も、毎春身當銀三枚宛被仰付儀に御座候處、渡邊兵右衞門儀河北郡惣年寄に而、石川郡に主附組被仰付置候所、毎春御目錄は石川郡江御書加頂戴被仰付候。河北郡に而は身當り之分頂戴不被仰付候。尤同人儀、石川郡に而は一番皆濟仕候儀は無御座候。右是迄之處書上申候、以上。

申　二　月　　　　　　　　　　　　　諸　郡

二月。收納米上納に關する規定を更改す。

〔司農典〕

今般御收納米納方相改候に付仕法書覺

一、今般御米納方手附御指除、新田裁許等就被仰付候に、御米入拂方に而手附都而爲携申間敷。併納人本役方御用に而手張候節は、書算方等暨下調理の者に、爲致手傳候儀者格別之事。

一、御米納方割符之儀、御藏に納米高、組主附より惣年寄江爲書出、惣年寄手前に於、納方之人々の不同無之樣可致割符事。

一、御藏下敷之儀、是迄之通都而斗下百姓より爲致入念可申、其節納人致見分可申事。

一、是迄代官宿相勤候者指除、新田裁許等手前に而、人撰を以止宿所相極、尤以來納方御排方之節、宿之者一切御米爲携申間敷候。所に寄家數無之ヶ處抔、近村止宿相極、惣而是迄之惡習押移り不申樣、嚴重可相心得事。

一、御藏納之節升取人、是迄村方に寄餘人を相願、村方一統之分米爲相斗申儀も有之由。以來其身々々爲相斗可申、一人に而不殘相斗申儀者堅不相成儀。尤中入札之儀者、是迄之通表に何村誰与調、裏に納人名前調、嚴重に入可申事。

附り、懸番日に御郡奉行幷篭筒番折々見廻候間、兼而其心得有之、嚴重可相心得事。

一、御藏納之節、手傳人足之名目を以、是迄多入込、百姓共手前失費相懸り候由相聞候。以來新田裁許等手前に而、人柄相撰、たてり一人宛相雇可申事。

附り、米積之儀者斗り下百姓之内爲積可申事。

一、御藏納之節、石數餘計にせり立相納候而も、自然与俵拵等麁相に相成候條、時宜見計石數相極、入念相納可申事。

一、御米俵拵之儀、繩・俵等御領國中一樣に可有之所、中に者其郡其村に寄、甚麁抹之拵方等有之候。是等者百姓之心得方等閑、且は村役人等之申談方不行屆儀に候。御收納米之儀者、何分にも大切に相心得、幾重にも誠實を盡し、入念に長たる者より可申諭儀に候。既に新川郡之內に者、俵拵・繩・俵等宜敷ヶ處も有之、是等村肝煎之申諭方行屆候故之儀与相聞え、兼見本繩・俵等拵置、小前之百姓共にも夫々申諭、一圓麁略無之樣爲相心得可申候。斯申渡候上、當年御收納米繩・俵等拵方不宜候得者、村肝煎越度に可申付候條、其心得可有之事。

一、御藏一ヶ所に納人兩三人宛組合致置、不正之儀等有之候はゞ、相互に可及斷。若外御藏納人より斷出候儀有之候はゞ、其御藏納人一統可爲越度候。勿論御藏に寄、少々相納候ヶ所に而も、御宿方之儀に候間、一人に而相納候儀者堅く不相成事。

一、皆濟押切帳等、幷皆濟狀之儀、組主附手前に而爲相調、御郡奉行印章請納人江相渡可申事。

一、春秋夫銀取立之儀、組主附江取立、御郡奉行名前に而諸方御土藏江致上納、右御奉行請取切手、村方より納人江相渡、皆濟狀爲請可申事。

一、每歲十二月本勘書入方之儀、いかにも入念相調理、麁略無之樣嚴重に可爲心得。且亦通縮之儀、手附名前に而惣年寄加奧書候得共、以來新田裁許等名前にいたし、及奧書に不申事。

一、五月升廻以前者、是迄之通納人御藏戸前に下封いたし、上封者惣年寄等致置可申事。
一、升廻後者納人下封附置、上封之儀者、御郡奉行幷篁笥番之内附可事。
一、升廻後御米御拂之節、封切相見人之儀、其藏に納口無之、新田裁許等罷出可申事。
一、出船等番繰帳之儀者、御算用場入目六寫を以申渡候はゞ、納人一御藏切鬮取いたし、順番取極、其節出役御郡奉行幷篁笥番之内書出可申。其上に而右出役人名前を以、一手合引集、出船幷川上御奉行等ゟ帳面に認迻遣候間、調筆之儀者納人或者手附ゟ可申付候事。
一、出船幷五月升廻暨斗立等之節、欠相立候得者、役儀取放候條、升目等之儀者いかにも大切に可相心得事。
一、雨漏米色附俵等有之節者、欠米同様に取捌候事。
一、大鼠喰・大くつろぎ俵等有之節者、其時宜に寄、詮議之上可申渡事。
一、出船ヶ所及川下・潟下・馬下ヶ所ゟ者、新田裁許等納人一兩人宛、其御用中詰切可申。都而御米請拂に拘り候儀は、手附を以相辨候儀、堅相成不申候事。
一、川下・潟下積廻米有之刻、上乘之儀、納人可致上乘儀に候事。附り、新田裁許等外御用に而難罷出儀も有之候はゞ、名代指出候共、手附上乘爲致候儀者相成不申事。

一、寄積幷卷封之儀、新穀納方等に而指支候之節、納人より願出可申、人足之儀是迄之通、遠所日用裁許手合に而爲致、御入用之儀も右日用裁許於手前に、小拂銀受取相渡候事。

一、每歲二月二十日頃迄に、御詰米帳是迄之振を以書出可申事。

一、目拂米是迄之振を以書出可申事。

一、五月升廻之節、御役人廻先江納口有之人々召出可申。其節指出候諸書物等、都而是迄之振を以書出可申事。

一、御藏納之節、斗下百姓共、船手寄宜敷ヶ所舟に運、波渡場より御藏元迄持運之砌、所方之人足共罷出無躰に持運、賃錢を貪申處も有之、百姓共迷惑がり申由。以來右躰族有之候はゞ、無泥可斷出事。

一、是迄升廻以前者、惣年寄等御拂有之刻致出役、跡封附置申格に候處、中に者心得違之趣も有之樣子。以來御條目之通急度可相心得、皆濟留封之上、翌年春篳筒番相廻り、本勘相調理、若諸返上米たりとも不足有之候得者、急度嚴重相糺可申筈に候條、其心得可有之事。

一、御米改役人相廻り候節、納口有之人々、其藏前江罷出可申。其節指出候書物は、都而判形いたし可指出置、追而右御用相濟候上、拙者共紙面与引替申筈に候事。

右今般詮議之上、夫々申渡候條、嚴重相心得可申候。納人者不及申に、斗下村々江も可申渡

候、以上。

天保七年二月

廣瀨平丞
中村岡三郎
中村蕃
井上井之助
石黒鉄八郎
矢部順平

諸郡惣年寄中・年寄並中

二月。羽咋郡西性寺等樂燒以外の製陶を禁止せられたるを以て請書を呈す。

〔呉須土掘出方等一件〕

拙寺共之儀者、貧寺小庵に御座候故、爲内職燒物仕、寺相續方之助力に仕度之旨、先達而奉願上候之處、樂燒之儀者勝手に賣捌可申、土燒物之儀は外に御指障に相成候間、御指留之段被仰渡置候處、今般土燒物之躰之燒物仕候樣御聞請御座候に付、土燒物堅不仕候樣重而嚴重被仰渡、奉得其意候。此儀に付追而願之筋御座候間、宜樣奉願候。右御請上之申候、以上。

天保七年二月

羽喰郡小山村　西性寺
鹿嶋郡井田村　明傳寺

寺社御奉行所

三月六日。前田齊泰夫人慶寧と共に江戸城大奥に登る。

〔諸事要雜記〕

三月六日

一、今日犬千代丸様大奥江御登城、至極御都合御宜、追々御目見等之御様子、御城江罷出居候老女より申來り、時々申上り候事。

但、五半時過御上り、夜五つ前御下り被遊候事。

〔見聞袋群斗記〕

三月六日、犬千代丸様・姫君様御同伴にて大奥へ御登城。此度二度目也。依て公より鮮鯛一折献ぜらる。御臺様江も御同様なり。此外御内證にて品々進上し給ふ。内府様・御初江は都而進上物に不及と御指圖に付進上無之。公方様・御臺様より御内證にて品々賜物有之なり。

〔恭敏公記史料〕

三月六日。伴母德川氏謁將軍。於內寢献魚及物。將軍親賜長鰒。亦賜魚及物。是日將軍賜我

扈従番頭以下十七人銀各二錠。

三月九日。藩の財政を整理すべきに付き家中に節約を勸む。

〔每日帳書拔〕

三月九日

一、御勝手御逼迫、今度江戶・大坂・御國共御借財御仕法被仰付、以後御入箇而已を以御算用之筈に付、去年迄御省略被仰付候品々勿論是迄之通に而、尙又此末御省略方之儀諸役人へ申渡候筋も有之候條、御家中之人々心得方之儀も、先達而申談置候通萬事遂節儉、御難題不相願樣相心得候儀肝要之旨、於御勝手方申渡有之。

〔典制彙纂〕

御勝手向御逼迫に付、去巳年より三ヶ年嚴敷御省略被仰付候儀、先達而申渡置候通に候處、去年に而年限相濟候。然處是迄每度申聞候通、御地盤御出入御符合無之、剰去巳年凶作以來、御借財彌增相嵩、御取箇悉皆跡引に相成、如何程御入用相成候而茂、御勝手御取直之筋一圓不相見、追々御政事向も不被爲行屆而者不容易儀に付、今度江戶・大坂・御國向共御借財御仕法被仰付、以後御入箇而已を以御辨用之筈に付、御省略方之儀諸役人江申渡候筋も有之候條、御家中之人々心得方之儀も、先達而申談置候通萬事遂節儉、御難題不相願樣相心得候儀肝要

之事に候。右之趣被得其意、同役中傳達――

三月十六日　　　　　　　　美作守

三月十三日。前田齊泰就封の暇を受く。

〔諸事要用雜記〕

三月十三日

一、御本丸より松平和泉守殿、西丸より脇坂中務大輔殿御越之御小人目付來り、御次廻り上下着用申談。

一、御本丸上使御城下り九つ四歩、夫より追々御付人來る。御例之通大御門迄御出。於御小書院御料理可出處、御斷に付御菓子出、御前御相伴、御重引并御濃茶御持參被遊候事。

一、西丸上使九つ九歩御勤仕廻信濃守樣より之御付人來、夫より御出向等夫々御例之通、御料理も出、御盃事有之、相濟御退出。

一、御臺樣より之御使長谷川能登守殿、初め御住居に御扣被成御座候に付、西丸上使御退出之上内通り御客方より爲知、御前には一先御入、無程御出之處、御住居御立之御付人に而御出向被遊、夫々御作法通相濟、八つ八歩御入之事。

三月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔溫敬公史料〕

三月十五日。登城謝之。横山山城守奥村内膳謁將軍。

〔諸事要用雜記〕

三月十五日

一、今朝御登城五つ鎌、御下り九つ二分之事。

三月廿三日。前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。

〔諸事要用雜記〕

三月廿三日

一、今日益御機嫌能御發駕被遊候。拙者儀今日御見立に付、夜前泊りより歸無程罷出、御發駕後發足之事。

〔官私隨筆〕

四月朔日

一、相公樣益御機嫌能、前月廿三日午上刻御發駕被遊候旨、山城守殿より以中飛脚申來候由、御用番廻狀來る。

三月廿八日。孝子佐々屋建太郎賞せらる。

〔大鋸文書〕

眞長寺門前佐々屋武助嫡子十五歳　建太郎

右建太郎儀、今般武助之代牢願出候に付召出相糺候處、一々實情を以分明之折節、父母は世に二つなきものに而、此上もなき大切なるものと相心得候由泣□申聞候躰、聊飾もなき者に而、實情至極に而立合候役人共迄令感涙候儀。實孝子に紛れ無く候に付年寄衆に相達、不及代牢出牢申付、猶更建太郎平日之様子廣く聞合候處、實に孝行之躰逐一々相聞、感入之至に候。依之爲褒美召出、肝煎手傳申付、名を孝子郎与爲相改候條、彌無懈怠孝志を遂、萬事大切に可相心得候事。

申三月廿八日

澤田義門

中川平膳

吉田丹次郎殿

右に付瀨波屋之狂歌に

笹藪の中にはえたる筝はかのもふそふにおとらざりけり

三月。百姓に衣食住を質素にすべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

百姓共衣食住御縮方之儀は、前々被仰渡茂有之、拙者共春秋御郡廻之時分嚴重申渡置候得共、近年甚僭上に至り候躰承及候。就中衣類之儀者、目に觸候得者、自然与御停止之品相求致着用、いつとなく心得違之者も有之由。就夫吳服商人在々江立入申に付、女子供抔見請候得者不計身分不相應之品茂買調申樣に相成、畢竟身代持損及難儀候者共茂間々可有之候。當時格外御省略茂被仰渡候時節に候得者、於御郡方には別而人々手前質素に可相暮筈に候處、前段之族に而御縮方難相立儀は甚不埒之至に候。以來百姓共等衣食住等奢侈之儀無之樣嚴重可申渡。若身分不相應之衣類致者用候歟、又者居宅之作事抔榮耀之品有之において者、見咎及斷候之樣手先役人共江申渡候。且又吳服商人共御郡在々江堅く立入不申樣、宿立等六ヶ所に罷在候右商賣人共江嚴重可申渡候。若此上に茂村に立入、吳服物賣弘め候儀於有之者、廻り藤內共見付次第、往還筋江送り出候樣申渡候間、村々役人共においても、右等之趣急度相心得、常々無油斷申渡、御縮方行屆候樣可相心得。萬一心得違之者も有之、露顯之上者、村役人共可爲越度候條、此旨能々相心得、末々孀住之もの迄も入念申渡、村役人共引請之請書可差出者也。

申　三　月　　　御　郡　奉　行

諸郡村々役人

三月。虚無僧及び浪人を村々に立入らしめざるべきことを諭す。

〔能州郡方舊記〕

虚無僧幷浪人者、近年村々を致徘徊、押乞等いたし候に付、縮方之趣村役人等より申入候得共聞入不申、中には同道人之内病氣之躰に仕成、逗留之儀押而申聞、人多に旅宿を乞、取扱方麁末抔申立、又は亭主留守中女子供へ對し、草鞋錢ねだり候躰相聞え候。元來虚無僧之儀は往還筋之外わきみちゟ立入、勸進いたし候儀は不相成はず。浪人ものなど村々ゟ立入押乞等不法申懸候儀は有之間敷儀。右等之躰者畢竟役人共廻方等等閑故と相聞え候に付、今般改而嚴重廻方申渡、右躰之者已來村々へ不立入樣、不法申懸候者有之候はゞ、召捕可指出旨申渡候條、村々役人共此旨可相心得者也。

天保七年三月　　　　　　　　　　御郡奉行

四月七日。前田齊泰金澤城に着す。

〔官私隨筆〕

四月七日

一、相公樣前月廿三日江戶御發駕、昨六日御着城之筈之處、去三日姬川出水にて、一日糸魚川に御逗留、今七日益御機嫌克御着城。

八半時は夜中なり

〔諸事要用雜記〕

四月七日

一、今曉八時之御供揃に而高岡驛御發駕被遊、八半時益御機嫌能御着城被遊候。御居間ゟ御着座之上、配膳役御のし指上る。相濟、將監被爲召、御着恐悅。夫より同席何茂隱居之人々罷出、恐悅申上、御意有之、御直に御請申上る。

四月十二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

四月十二日

一、今日九半時之御供揃に而、兩學校ゟ御出可被遊旨比良を以被仰出、九つ七分五りん御出。於武學校吉田權平方不時的御覽、夫より萩原勘太夫方組打御覽。其內文學校宜段御案內有之、夫より講書孟子、講師大島希軒御聽聞被遊候事。

四月十四日。收納米を皆濟したる惣年寄及び年寄並に對する賞賜の規程を告ぐ。

〔司農典〕

皆濟御賞美被下方

一、御領國一番致皆濟候はゞ、銀五枚・紬二端被下、御郡一番皆濟に者、銀三枚・紬二端被下、其餘十二月二十日迄に致皆濟候分者、銀三枚宛被下候御格也。

但、小組之分御領國一番皆濟には金二兩・紬二反被下、御郡一番皆濟に者銀三枚迄被下、十二月二十日迄に致皆濟候得者銀二枚被下候。

一、無組惣年寄者組無之に付、爲勢子方与銀三枚宛被下。

但、組持に成候得者、右勢子方被下方無之。

一、當分兼帯組有之、兩組持候者、自組者右御格之通被下、兼帯組に被下者無之。

但、兼帯組一番皆濟いたし候得者、不時に一番皆濟當り被下候に付、自組与二重之被下方に相成候。北村爲次郎分者自組無之事故、若山組に而被下、勢子方者不被下候事。

一、惣年寄惣主附之組者不被下候事。

但、一番皆濟いたし候節者、不時に一番皆濟當り被下候事。

諸郡皆濟爲御賞美与被下方之儀、先達而各樣より先例等御書上に候處、重而御詮議之趣有之、御所村先長次郎等、當分裁許組御領國一番皆濟幷身當り共被下候例有之、書上候處、猶亦於

御役所に前々舊記御調理有之、右者非例之趣に而、以來は御別紙御覺書之通被下候御格に候間、此段一統江可申渡置旨、御用番石黒鏃八郎様より被仰渡候間、左様御心得夫々御寫取、從落着御返可被成候、以上。

申四月十四日　　　水内六左衞門

諸郡惣年寄中様・年寄並中様

四月十五日。前田齊泰放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

四月十五日

一、今日御鷹野御出九つ一分、御待受七時過、御戻り暮合之事。

一、今日御獲物大鵜一つ　小鵜十三・水鷄一、内十一御拳之事。

四月廿二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

四月廿二日

一、今日九半時御供揃に而兩學校御出被仰出、九つ八分五りん御出、八半牛鎌御戻り之事。

四月廿三日。前田齊泰、瀧之間に講書を聽聞す。

〔諸事要用雜記〕

四月廿三日

一、今朝瀧之間講書に付、御出可被遊旨當朝被仰出、則御出御聽聞之事。

四月廿六日。能登一宮寺家に於いて取拔賴母子を賣弘めたるを以て御郡方の者の之を買取るべからざることを告ぐ。

〔諸郡御用留〕

能州一宮寺家神宮寺方において、頃日取拔賴母子与名附、富突樣之儀相企、右札賣弘も候躰粗承及候。右札相求候儀堅く不相成候條、心得違不致樣、一統不相洩可申渡候。尤富突之儀は前々より御止之品に而、毎度申渡一統承知いたし罷在候儀に候得共、若心得違いたし、右札相求候者於承及者、急度咎可申付候條、得其意、是等之趣夫々嚴重可申渡者也。

申四月廿六日　　御郡奉行

加州三郡幷能州奥・口村々役人

四月廿八日。衡器取締に關する幕府の令を傳ふ。

〔御郡典〕

諸秤之儀、古來より守隨彥太郎役人相廻改候處、近年は私事之樣に心得候哉、諸秤數多致所持候者も、秤少々出し見せ、不宜秤は隱置、或秤は不致所持旨を申、改不請者も有之樣相聞え候。前以相觸候通、守隨方より役人相廻改候節、諸秤不隱置、不殘出し改受候樣可致候。尤紛敷秤は取上候筈に候。此旨急度可相守者也。

右之通東海道・東海道・北陸道并丹後・丹波・但馬都合三十三ヶ國、御料は御代官、私領は地頭より可被相觸候。

右之通先年相觸候處、可取上秤も守隨方ゟ不相渡場所有之。猥に秤賣買いたし、緒等も手前に取替、懸目不同之秤遣候者も有之趣相聞、不屆に候。前々相觸候通、守隨方役人相廻改候節、諸秤不殘改を請、西三十三ヶ國之秤東三十三ヶ國に而通用無之、取上に相成候筋之秤は守隨方ゟ可相渡、諸秤新古に不限守隨之外に而賣買致間敷、手前に而衡并錘緒等取替申間敷候。若諸秤隱置改不請、猥に賣買いたし、或は手前に而衡并錘緒等取替候者有之候はゞ、急度咎可申付候。

右之通先達而相觸候向々ゟ尙亦可被相觸候。

三　　月

右之通可被相觸候。

諸秤改之儀に付、從公儀相渡候御書付寫一通相越之候條、被得其意、組・支配幷與力且亦家來末々迄可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

丙申四月廿八日　奥村丹後守

淺加伊織殿

馬場右兵衛殿

五月朔日。前田齊泰、石川郡御河端筋に放鷹す。

〔大鋸文書〕

今日淺賀伊織御次御用之旨申來、罷越候處、御用部屋高田善右衛門申聞候者、昨朔日御前大河端筋御鷹野に御出之處、前々より御出御座候而茂、無構農業營候被仰出置候處、御見請被遊候得者、御通中耕作指止蹲踞仕候躰。此儀者御主意にも違候間、決而已來無構農事いたし候樣、入念可申渡旨被仰出候。

一、七つ屋邊より大榎之間迄之内与歟御覺被遊候。農人馬に而田をすき罷在候躰に而、馬も傍に有之候。然處右農人小兒を抱申蹲踞仕候に付、田をすき候には小兒携抔いたし候而は決

而不自由なるべくに、是者母親なき者に茂候哉与被為思召、御不便に思召、御忍難被遊被為在候。右農人者何村誰与申者に候哉、小兒眠り居候躰、何分名前被聞召度段被仰出候間、穿鑿仕申上候樣善右衛門申聞候。併あらたて尋候者、必恐入名をつゝみ可申哉にも被存候間、此處含罷在、可然可尋出候。若御咎被遊候与相心得、在躰不申出而者甚致相違候旨、譯而善右衛門申聞候事。

申五月二日

諸江村百姓　太左衛門

同人忰五歲　長　松

右御尋之上右之者に而、妻は當歲子を抱外へ罷越候に付、右長松召連れ農業いたし居候所、御出に付長松恐れ父へすがり居候段申聞、其段御達に相成候事。

五月八日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。

〔本多政和覺書〕

五月八日

一、備後守樣御旅舘御出之見番來り候に付、各御式臺江罷出る。但年寄中等は內より左之方、御家老若年寄者內より右之方へ被出。四時過御登城、各罷在候處に而御會釋有之。御奏者番伊藤主馬階上へ罷出有之、御先立す。

御大小將岡田長次郎御刀持之。直に芙蓉之間御溜、各御跡より參り瀧之間に罷在。御前江之御口上御家老八郎右衞門罷出承り、其次高田善右衞門罷出、畢而余等御逢被成度旨伊藤主馬申聞候に付、余・又三郎・内膳罷出る。先御敷居之外に而御禮、尤帶刀之儘。近うと仰に付、内江ずり入候處、相公様御勇健に被爲在、恐悦に思召候。各無御障珍重思召候旨仰に付、益御機嫌能被遊御旅行、恐悦に奉存候。蒙御懇之仰忝仕合奉存候旨、余申上退去。其次内匠被出、其次御家老・若年寄被出。御對顏可被遊旨八郎右衞門重而罷出被申上、右主馬御先立に而御居間書院へ御通。畢而如元芙蓉之御間へ被爲入候に付、各御式臺江罷出、但、御出御戻り共段之方上に列す尤役列也。瀧之間も同斷。主馬御先立に而御戻り、如最初各罷在候處に而御會釋、御式臺前敷石之所餘程御出過に付、各竹之間御勝手座敷通り席へ罷越。但此時御立歸りに而、芙蓉之間へ御溜、御對顏之御禮被仰上候に付而也。但御式臺廣間に大小將番頭・同御横目・大小將伺公、實檢之間には御異風小頭・御異風、竹之間御廊下に御使番、矢天井之御間に御射手小頭・御射手伺公也。芙蓉之間御溜之上、御多葉粉盆・御茶出る。表小將御給仕、指引加藤三郎左衞門。芙蓉之間より御居間書院江之御刀持は、表小將勤之。御下城相濟、無程四半時也。

五月十日。石川・河北兩郡の松山にて落葉を搔くものは一ケ月六次以外に於いてすることを禁ず。

〔坂井直政〕

石川・河北兩郡松山江、足輕・小者等松之落葉かきに罷越候儀、前々毎月朔日・五日・十一日・十五日・二十一日・二十五日六齋日之外不相成段、先年一統相觸置候處、近年猥りに相成、御縮方に指障候旨等、別紙寫之通御郡奉行申聞候。以來右日限之外登山不致樣、家來末々迄不相洩樣可被申渡候。此段同席幷同役中傳達有之、組・支配之人々江被申渡、組等之内裁許有之而々は、其支配江茂相達候樣可有御申渡候、以上。

五月十日　　　　御算用場

大田小又助殿

五月十七日。犀川に洪水あり。

〔本多政和覺書〕

五月十七日

一、今日犀川出水に付出役仕候處、橋之千鳥上の千鳥・下の千鳥と之間迄水増、今少相増候はゞ橋往來も差止可申筈之處、次第に減水、水壹尺許も減、下の千鳥之下を通り候程に相成居故引上候旨。且淺野川は定水より少々相增、下の假橋往來指留候旨、御横目大屋武左衛門九半時過罷出申聞候事。

但、水は次第に減水仕候。法島村田地へ切込、二十間許水付に成候に付、篭粂を以取防候旨、重而安宅榮之助以執筆申聞。

五月晦日。金澤城外堂形米倉所屬の役所燒失す。

是月は大盡なり

〔御城方御親翰御加筆物寫〕

今曉申五月晦日六半頃堂形役所燒失に付、播磨守見分仕候處、右役所五間四方計有之、多分燒失、前之方少々相殘り、諸帳面等も不殘燒亡仕候。昨日者奇日に付役所相立不申、番人も罷在候へ共、居小屋は餘程隔り候儀、火之元氣遣敷儀は無御座旨等、右奉行申聞候。御作事奉行も罷出居、夫々取仕抹爲致可申旨申聞候。尤御藏者御別條無御座候。外に替儀も無之に付、直に退出仕候趣、原宅右衞門を以加藤三郎左衞門に申含申上候事。

〔珍事留書〕

五月廿一日曉七つ半時前、堂形御藏少々燒失有之。右に付御藏懸り之者共段々御詮議有之處、明知方代官足輕篠田何某与申者、御藏米私欲いたし、防之ため附火之由白狀いたす。此者所々に銀に付取組有之、樣々不筋之趣有之、寺庵方にも多くかゝはり有之。

日附は誤なるべし

五月。郡方に出づる藩の餌指の取締に就いて告ぐ。

〔御郡典〕

付札、御郡奉行へ
御餌指共御郡方へ殺生に罷越候節、人足多召仕、同所に數日致逗留、餌米等も多受取、且作物踏荒し候儀等有之、彼是村方及迷惑候段相聞候に付、今般御餌指共へ心得違方之儀嚴重申渡候。元來人足仕方等之儀、安永九年・寛政四年にも申渡置候通に候。以來定に相振れ候儀有之候はゞ、御餌指共名前承り、無泥及届に候樣可被申渡候。勿論於村々に、前々より定之外食物等令馳走、或は相對を以人多に心得違無之樣、急度可被申渡候事。

申　五　月

五月。金子と銀子との交換比例を改定す。

〔郡方御觸〕

付札、御算用場奉行へ
引替所金相場、當時六十八匁に候處、春來江戶・大坂共金相場引下げ不都合に相成候に付、今日より右相場相改、金一兩に付六十四匁に而引替可申。外雜用五分取立候儀は可爲是迄之通旨、引替奉行へ申渡候。依而金上納之分茂、右同樣六十四匁之圖を以、上納方不指支樣可被相心得候事。

丙　申　五　月

六月二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

六月三日

一、今日兩學校御出被仰出、八つ鎌下御出、同六半時過御戻り被遊候事。

六月七日。羽咋郡西性寺等の製出する繪附樂燒の賣捌を許す。

本年二月の條參照

〔吳須土掘出方等一件〕

乍恐書附を以奉願上候

一、拙寺共儀者貧寺小庵に付、代々燒物手懸居候而內職に仕、寺務相續之引足に仕度旨、先達而奉願上候處、御聞屆被爲成下、出來之樂燒勝手に賣捌可申樣被爲仰渡、奉得其意難有仕合に奉存候。然處土燒之儀者御指留之趣、再往被爲御申渡奉畏、御請書奉指上置候。夫に付今般爲御見本奉指上候燒物之儀者、先達而御許容被爲有候火打谷村より之吳須及製法に、色合試申候處、吳須精味宜敷に付、樂土に而下地燒〃、右吳須に而背書柴等都而樂藥を以出來仕燒物に御座候得者、外々に仕候土燒与者違、何れ樂法を以樂竈に而出來申譯合に御座候間、燒〃錦繪躰之燒物、在來之通り賣捌可申樣御聞屆被爲下候樣奉願上候。此外手馴申燒物茂存不申候得者、此分御指留御座候而者、必至与致方無御座、指當り及難澁申譯合に御座候間、

何卒此段格別之御僉議を以、願之通被爲聞屆上被下候はゞ、難有忝仕合奉存候。前書奉申上候通、日用乏敷拙僧共に御座候得ば、右手燒不仕候而者致方茂無御座候。且又元入等相賴申候銀主方ゟ、返辨之手段も無御座候間、爲內職願之通り御聞屆被爲下候樣奉願上候、以上。

天保七年申四月

羽喰郡小山村　西　性　寺

鹿嶋郡井田村　明　傳　寺

寺社御奉行所

此願天保七丙申六月七日、吳須を以樂燒之品賣捌方、西性寺等願之通御聞届之段、山田新左衞門を以西川七郎左衞門ゟ御談、卽刻同寺呼出被仰渡候事。

六月十四日。前田齊泰、奧村丹後守に月番加判を命ぜんとの意を告げしむ。

〔官私隨筆〕

六月十四日

今日四時過罷出、以竹田掃部御機嫌伺候。

但、先日御前へ被爲召候節、指かゝり候付不申上候。私脚痛爾々不仕候付、もし被爲召候儀抔有之時、ふと俄に退座仕度儀も可有之、此段御申上候而可宜候はゞ、可然御心得御申

上候樣に仕度旨申入候。

一、被爲召候旨加藤三郎左衞門申聞に付、罷越、御用之間へ罷出、御意之儀等有之。畢而當時御上にも御年若、年寄共も若年に候。丹後守は老練之儀、學問も有之功者之事に候間、近日加判月番之儀可被仰渡と被思召候。依而先御內意被仰聞候由御意に付、三尺計退座仕、先以無存懸御意之趣難有仕合奉存候。私儀は不都束成生質に而何歟行屆不申、金龍院樣御氣に奉背、其節如何樣にも可被仰付候處、御寬宥之御取捌に被仰付、其後御目通へ罷出候儀等も早速御免被遊、至御當代候而重き御役儀をも被仰付、誠に身分に取重疊難有仕合奉存候。然處從來不辯舌に罷在、且脚痛難儀仕、近頃出仕等をさへ懈怠仕候族に御座候處、先日以來段々御懇に被仰出、しば〳〵被罷出候樣に被仰付候さへ身に餘り難有奉存候處、又候加樣之御意之趣、其上過分之御意共誠に奉恐入、何と御請も申上得不申候。乍去右御樣子共も御座候間、此儀は何分にも御用捨被成下樣にと申上候處、御先代樣御手前之儀は、於御牌前被仰譯をも可被仰上候之間、無泥御請可申上旨御意に付、重々奉恐入御儀、難有事は可申上樣も無御座候。乍去私において何分御請は申上兼候間、何卒今一遍御考被成下候樣仕度旨申上候處、此儀は今更被思召付候御事に而も無之候間、とかく御請申上候樣にと御意に付、再往之御意之趣をいなみ奉り候段奉恐入候間、猶又退候上相考、御請奉申上にて可有御座旨申上。且竹

田掃部等内を以申上候而も苦間敷哉乍恐奉伺旨申上候處、其通相心得候趣御意に付退去。
一、八時前にも候哉被召候旨に付、御用之間へ罷出候處、先刻被仰聞候趣兼々より思召被爲在候御事に候間、御請可申上旨御意に付、先刻退候上打返思慮仕候へども、何分にも御請可申上筋とは不奉存、元來行屆不申儀に候へば、御目金に背き奉り可申段深く奉恐入候間、何分にも御用捨被成下樣にと之趣申上候處、又々强而御請申上候樣にと御意に付、再往御意之上又候御辭退申上候儀深く奉恐入候へども、加判等之儀は何卒御用捨奉願候。加判同事に相心得、示談等仕候儀は何分にも可奉畏旨申上候處、左候はゞ猶又御考可被遊旨御意。
一、右以後播磨守被召、段々御意有之由に而、播州より可申談候趣共有之。依而猶又愚慮之趣申述候處、播州・作州御前へ被罷出被申上候趣有之樣子也。
〔官私隨筆〕
六月十四日
一、退出之上播州方へ左之通申遣候處、承知、各へも可被申入旨返書あり。
土用中御揃御淸康被成御達、――于時今日之御內意誠にくゝ奉恐入儀、難有仕合冥加至極とかく言葉も無御座候。夫に付再往再々往御辭退申上候段甚如何敷、是又深く恐入候へども、無據譯合ども御承知之通に御座候。元來脚痛等に付而、當時相勤罷在候御役儀をさへ御斷申

上候族に御座候處、誠に存掛無之儀、是計りに而も冥加之至に御座候處、ましてや從來之趣共も有之候を、段々之御內意、ともとかく可申上樣も無之儀、御察可被下候。當時何か御事多之御時節を可奉察と之御趣意共も承知仕候へども、其處へ幹當仕候才德無之候而は何之御詮も無之、只徒に御上之御鑒識を奉汚候と申ものに而甚大切成儀。此所を誤り申候而は、其なし得可申程之所をも、却而なす事不能樣に可罷成段、不及申奉存候。其上近年多病に罷成、且不辯舌は御存知之通に而、懈怠勝に可罷成段も奉恐入儀。尤押立たる御用も相勤得不申儀に御座候へば、御請申上得不申筋之段御推量も被下候而、猶又何分宜敷御取計之程御賴申上候。とかく不辯に而、先刻いまだ申述足り不申樣に御座候付而、此趣得貴意、わざと以紙面申上候事も如何と奉存候付、貴所樣迄以內狀申上候。宜御取計之程深く奉賴候、以上。

六月十四日夕

奥村丹後守

播磨守樣 几右

六月十四日。婚姻又は養子緣組の際金銀を授受するを禁ず。

〔郡方御觸〕

御家中之人々風俗等之儀、從金龍院樣段々被仰出之趣有之、猶又從御當代樣茂被仰出置候。然處中に者母或者娘等致出走候儀、近頃別而多有之候。是等者常々家內取締不行屆故に候。

將又男子無之者養子いたし候節、持參金有之様成風聞茂有之。左様之儀者有間敷儀之段、先年從公儀被仰渡之趣有之。其節申渡置候通に而、於御家も諸士娘等爲致嫁娶候節、又者子弟養子に遣候時分、拵料抔与申趣に而金銀遣候儀に付、前々被仰出茂有之、近くも一統申渡置候處、今以竊に取遣いたし候者茂有之躰、不心得之至に候。向後右等之趣無之様可相心得候。自然此後心得違之者於有之者、嚴重可被仰付候事。

右之通被仰出候條、被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

六月十四日　　　　　　　　　　　　奥村内膳

渡瀨七郎太夫殿

駒井丹之丞殿

御家中之人々家内縮方等之儀に付、今般一統觸置候趣承知之通に候。當時御家中之人々勝手難澁に付、不宜風俗茂有之躰被聞召候。就而者御救茂被仰付度旨、拙者共迄御意之趣茂有之候。併當時之御勝手振故、其儀茂難被爲成候。諸士風俗之儀者、金龍院様段々御世話被遊、嚴重被仰渡候趣有之、尙又從御當代様茂被仰出之趣有之、時々申渡置候通に候。然處又々相弛み、當時種々与惡敷風俗茂有之候。諸士子弟文武之心懸次第薄く、諸稽古所出座茂少き躰に候。先達分而申渡候趣茂有之候處、右様之族不心得之至に候。乍然毎度相觸候儀も如何に

付、今般一統風俗之儀、委曲者不申渡候。家内縮方之儀幷持參金之儀者、近く增長之躰に付、其事を指而被仰渡儀に候之條、何分風俗之儀に付、是迄被仰出候儀等此後不相弛樣、組・支配江常々被申諭、被仰出之御趣意相通候樣、無油斷可致指引候。且又茶事當時流行、右に付中に者分限不相應榮耀之儀茂有之躰相聞候。不心得之儀に候。是等之趣分而申談候條被得其意、諸頭等江も各より夫々可有演述候事。

六月廿二日。前田齊泰、奧村丹後守が月番加判を受諾し得ざるの意を容れ、日々年寄中席に出勤を命ず。

〔官私隨筆〕

六月廿二日

一、御用之間へ被召罷出候處、先日月番加判可被仰付旨御內意被仰出候處、段々申上候趣被聞召候付、此上强而被仰渡候儀も被遊兼候付、其段は御見合被遊候。依而は御示談被遊度御儀も有之候間、以來日々罷出、年寄中席御用之儀も可及示談候。乍大儀明日より日々罷出可申旨御意に付、段々御意之趣委曲奉畏、先以御用にも相立不申候處、無存掛儀難有仕合奉存候。且又加判月番之儀は內意奉申上候趣被聞召屆、難有仕合奉存候。日々罷出及示談候儀も恐入申候へども、此上御斷申上候段も如何敷奉存候付、御請奉申上候。其上段々御懇之趣、

難有仕合奉存旨申上候處、早速御請申上御喜悦被思召候旨御意に付、難有仕合奉存候、被知召候通近く病身に罷成、懈怠勝に可有御座哉と奉恐入候旨申上退去。

〔官私隨筆〕

七月六日

一、今日御用相濟候而も退出見合有之樣にと播磨守等へ市三郎より演述。自分は退出可仕といたし候處、自分も見合候樣にと將監演述也。

一、八半時頃御寢所へ被爲召、追付同所御緣頰へ御出、近頃能州大谷村に而出生之白燕二、外に常之燕一有之拜見、公方樣より御拜領之御燈籠二□有之、夫をも拜見候。其後たばこ盆・御干菓子・御茶被下、且御額其外御手鑑數本拜見、御懇之御意有之。七時退座、御居間二之間に而以市三郎御禮申上候。

六月。領内に向五ケ年間用銀の上納を命ず。

〔郡方御觸〕

一、四千五百貫目　天保七年御領國御用銀惣高

但五ケ年に御取立之事

内

二千七百八十貫目　御郡方

此內

千五百六十六貫百六十九匁七分四厘　去未年諸郡より御當用之方江指上銀高

殘而

千二百十三貫八百三十目　今般御用銀高

此割

五百貫目　石川郡　四百四十貫目　河北郡

五十貫目　奥郡　五十八貫目　礪波郡

百五貫八百目　射水郡　十貫目　新川郡

五十貫三十目　松任

九百八十貫目　金澤　六十貫目　宮腰

六十貫目　本吉　五十二貫目　湊

六十五貫目　小松安宅　八十貫目　今石動三ヶ所

五十貫目　魚津　五十五貫目　所口

未は天保六年

八貫目　　遠所寺社　　二百七十貫目　高岡

申　六　月

御郡奉行江

御勝手向連々御難澁之上、不時御物入打續、其時々御調達等を以相防來候處、追々御借財相嵩、加之去る巳年違作御損失之以後茂、彌増御運方必至与御差支、御手返も難致出來に付、一昨年より尚更嚴重御省略被仰付候得ども、中々右減方を以御埋合可致出來樣茂無之、此儘に而は不年必定御行詰り之處江被爲至、御公務茂御差支、且御國民御撫育之思召も相立兼候に付、不得止事今般御借財御返辨方、地・他共格別御仕法被仰付、以來御地盤御入用者御取箇を以御取續之筈に付、此末四・五年之處御運方甚御大事之場合に候。依之拙者共重々詮議之趣相達御聽、近年町・在御用銀被仰付間茂無之、可爲迷惑候得ども、重而三州町・在江御用銀被仰付候條、一ヶ年千貫目宛、當年より五ヶ年全御用立候樣有之度候。打續如此被仰付候儀、御忍難被爲成儀に候得共、此度之儀者當座御辨用之筋とも品違、此末御勝手御取直之爲に被仰付御趣意に候條、此所何も厚存込、分限相應急度御用立候樣、支配々々において得与可被申諭候。御用銀割合之儀者、御算用場可被承合候事。

丙申三月

今般町・在共御用銀被仰付候處、三州之內能美郡・口郡之儀は御當用方冥加銀指上候者共多に付、今般御用銀者不申渡候。依而別紙御書立寫兩通相越之候條、御書立之御趣意、御用銀可申付程之者共江夫々可申談候、以上。

申六月二十日

淺加伊織

笠間又六郎

能美郡口郡惣年寄中

年寄並中

御郡奉行江

今般町・在御用銀被仰付候儀、別紙を以申渡通に候。御郡方之儀者、去年御當用方冥加銀指上候者ども有之、志神妙之儀に付、過分指上候ものどもは可被指省、其他冥加銀指上候もの共も、割合方之儀各手前において得与可有詮議候事。

丙申三月

三月とあるは六月なるべし

六月。降雨久しきに亙りて晴れず。

〔珍事留書〕

一、六月不順氣に而雨降續、次第に米高直に相成、世上何と無物騷成中にも、犀川河上新町笠舞屋何某与申者、深山之池へ鐵もの打込候故數日雨降續等与風聞有之。右笠舞屋米買〆居申由に而、當月六日夜何所之者に候哉大勢參り、暫時に笠舞やをこはし申候。追而役人數十人出候へ共、何れも行衞知不申事。右笠舞やも詮議之上、不筋も無之哉御免之事。

一、暑中雨降續、都而之畑物等不宜由。當月廿四・五日大乘寺において照乞之御祈禱被仰付有之由。

一、米買〆候者有之哉之御詮議嚴重之事。

〔丙申救荒錄〕

玆に天保七丙申の歲初夏の頃より、又々天常令の氣を失ひ、陰雨日々不見日とてもなき程の不順にて、盛夏土用の中といふ共冷涼の氣にたえず、他適の外は袷・綿入を着する許なれば、諸人唯事ならずと恐れをなすも理りとこそ。此間府より大乘寺或は大野湊の神社又は能州石動山等の諸寺諸山に御令命ありて、天氣順霽の御祈りあれども露しるしなく、終に天下の凶作とはなりぬ。然るに巳の歲よりも猶甚しく、依之御封內の農民へ御貸米下されたり。此分凡十九萬七千六百石と承る。

七月七日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

七月七日。臨學校。

七月十一日。是の日以後窮民等石川郡宮腰錢屋五兵衞の家に集り救助を求む。

〔本多政和覺書〕

七月二十日

一、宮腰町奉行神尾主殿以執筆申聞候は、支配所宮腰錢屋五兵衞と申者身元宜者に付、此方へ當十一日・十二日・十三日同所罷在候輕き者共三百人計罷越、多分女之躰に而、五兵儀一人に而能事致候儀不相當、米高直に而輕き者共食事指支候間、米施候様致度旨申聞、中には少々助力致吳候抔与申聞相集候に付、役人共指出段々申諭候處、何茂引退き申候。其後何之相替儀も無之候へ共、若風評之儀及御聞候而者如何に付、此段無急度申上置候旨申聞候旨等、執筆申聞。

但、錢屋五兵衞手前色々惡敷風評有之、其様子段々相糺候處、疑敷儀も無之旨等申聞候由之事。

七月十二日。昨今兩日前田齊廣の十三回忌法會を天德院に執行す。

〔見聞袋群斗記〕

七月十一日・十二日兩日御法會を於天德院御執行、金龍院樣御十三回忌なり。兩日とも御參詣。同日御赦等御先例之通りなり。

〔諸事要用雜記〕

七月十二日

一、今日就御法事、天德院御案內之上九つ鎌御出、御戾り八つ一分。

但於御寺御燒飯被召上候事。

七月廿四日。早稻を苅取りその不熟の狀を訴ふるを禁ず。

〔諸郡御用留〕

諸郡共當年之氣候柄に寄、不熟之趣申立候內、別而石川・河北郡など早稻稔惡敷旨申觸候。甚敷は組主付等に見立之儀申出候躰、粗相聞え候。早物に見立与申儀は、改作方御法に無之儀者、百姓分には急度承知可罷在儀。加之右之通實入不宜とて、いまだ赤らみ不申早稻等を苅取、組主付に致持參候者も有之。中には大に心得違之ものは、給人々々に茂如此とて爲見候族も候之躰、誠に不埒之至沙汰之限り候。然內給人等には事々敷歎之趣申聞、其中には端々

指紙付に而は可有之得ども、早稲等賣出し候族も相聞え候。諸上納等引當に、指紙を以賣捌候儀は可有之候得ども、右躰難事之趣給人等に申觸し候には不似合儀。旁以賣出候向茂品に寄可遂穿鑿候。是迄不熟之年柄有之儀は申迄茂無之候得共、右樣赤らみ不申稲を持步行候樣之儀は聊無之儀。偏に人氣惡敷押移り候故之儀与不屆之事に候。此上前文之族於及承者、無用捨急度遂吟味曲事に可申付候。

右之趣急速一統不相洩樣嚴重に可申渡候、以上。

七月廿四日

廣瀨平丞

中村菾

矢部順平

石黑左門

諸郡惣年寄年寄並中

七月廿四日。町人等の宮樣方貸附銀を周旋するを禁ず。

〔毎日帳書抜〕

七月廿四日

一、宮樣方御貸附銀、町人共等致口入貸渡候においては、曲事可申付旨前々申渡置候得共、

中には心得違之者も有之躰候。以來浪人者幷町人共等取持いたし候者於有之は、急度被仰付候旨等町奉行へ申渡。御家中之人々之儀も定番頭へ申渡候事。

七月廿六日。富山侯前田利幹卒去の報金澤に達す。

〔諸事要用雜記〕

七月廿六日

一、淡路守樣御滯之處、御差引も被爲在候由追々御便有之。今日御小將湯原平馬指急御使にて、爲御見廻御菓子等被進候。其內御大切之由申來、今夕發足之由にて御使由比勘兵衞江御使被仰渡、途中早打之心得之儀被仰渡發足之事。

一、今晚八半時頃高山樣より御使者御小將堀田萬兵衞罷越、暮頃御卒去之段申來候事。

七月晦日。石川郡本吉に打毀しを行ふ。是月は大盡なり

〔續漸得雜記〕

天保七年申八月

本吉町紺屋三郞兵衞方等へ大勢飛入仕候一件に付、私共早速出役可仕旨被仰渡候に付、則石川郡平加村迄出役仕り承合候處、一昨晦日同夜五半時之頃、本吉領字高濱と申松林へ大勢集り、最初濱町批屋新村屋仕右衞門方江亂入、店に有之白米八斗程、俵米三石切解き往來へま

き散し、通り少々打毀ち、夫より正壽寺釣鐘七つ計つき鳴らし、右を相圖与見え片町紺屋三郎兵衛方江亂入、前通り餘程打毀、奥間幷諸道具等多疵付、夫より紺屋又助方江亂入少々打毀、又々明瓶屋傳右衛方江飛入、是又少々打毀、何方江歟引取申由に御座候。

一、右人數二百人計にて、三手に相成、前後相扣、一手は亂入仕候由にて、右之者ども相言葉に百八文与申懸候得ば、は・そうかいな与答申候由。右答不仕者は、割竹に而打擲におよび申由に御座候。

一、疵付人も有之由に付承合申候處、紺屋又助与申者、額少々打疵を請申候由に御座候。

一、各寄合候人數、多は湊渡舟に指向候由に御座候得ども、大勢之人故渡舟に難爲乘与申入候處、何茂川を罷越由。左候へば多分能美郡村々之內、又は小松町之者に而も可有之与申事に御座候。

一、昨朔日夜四時頃、小松八日市町和泉屋・山上屋・北市屋、右三軒餘程打毀候段、笠間村藤內より及屆候。人數はやはり二百人計与申事御座候。右三人名前相知不申候。

右之趣先御注進申上候。且又本吉町之儀、昨日改方之與力中兩人幷足輕小頭共三十人計、外に藤內五十人計、何茂本吉町止宿仕、夫々縮方有之候に付、夜前之所は相替儀無御座、猶承合御達奉申上候、以上。

八月二日

御郡御奉行所

羽野源助
加藤平作

七月。米價漸く騰貴す。

〔官私隨筆〕

七月廿四日

一、頃日米價高貴、先日以來小賣之直段百文之内、町奉行より引足申付、九十八文に爲賣候處、其後百二文に成、又百五文に成、其後今日之所百八文に成候由承候。

一、近頃は町會所より、貧窮之者迄へ引足申付候由。九十八文に爲買候由也。

〔珍事留書〕

一、七月雨天勝、餘程之不作与申由。町賣米百八文、諸色高直なり。右に付御上より、輕き者どもへ御救方樣々被仰付候。役人相しらべ難澁之者へ札相渡、右札持參之者へ一人三文宛御上より御足し、錢組合頭にて相渡申候。且又武士等より米等救方樣々有之候事。

八月朔日。能美郡小松町に打毀し行はる。

〔郡方御觸〕

昨朔日夜五つ時過、何づ方之者に候哉、三・四十人計、小松八日市町泉屋市兵衛方江罷越、家諸道具打毀ち、追々人數相增、別紙之人々方打毀ち、同夜九つ時頃北市屋永助方打毀ち、今曉七つ時頃引取申由。尤何づ方江引取候哉相知不申由。白山下御公領西谷之者共与申取沙汰に御座候。北市屋永助抔方は、家內に有之候道具幷土藏に有之候道具被出、外江持出打毀ち、夜具は引裂、釜之底を拔、藥種商賣仕候處外江蒔散し有之旨、只今承り候に付、御內達申上候、以上。

申八月二日　　　　北村與右衛門

御改作方御郡御奉行所

昨朔日夜五つ時過より、左之名前之人々家諸道具打毀ち候由。

小松八日市町　　泉屋　市兵衛

但、御場印買置、御藏米批屋江散賣仕、自宅にも批商賣仕候。

同町　　山上屋　喜兵衛

但、右同斷。

同所材木町　　山上屋　彌兵衛

但、批商賣仕候。

同所西町　山上屋　源右衛門

但、右同斷。

小松泥町　北市屋　永　助

但、町年寄。

〔續漸得雜記〕

一、近年米續而高直候處、當年格別凶作、次第直段相募り候に付、當朔日夜山手村方百姓共相集り、（御公領地枝村小原村与申事。）夜五時より曉天七時までに三軒（三日市町泉屋・同町山喜、梯北市屋孫三郎、親は町年寄也。）打毀申候。外に三軒（西町山上屋・中町笠屋彌兵衛兩人共へぎや、北市屋是は行松文助事なり。）手懸申候。誠に前代未聞之騷動に御座候。人數高は五・六百人計、撰人之様子に而町方ゟ打入、町方相廻り、打毀申家を少々充手懸置、四日市町五間堂屋前ゟ集り、酒を出させ何茂呑申由。夫より三日市町泉屋ゟ懸り申候。家諸道具等迄盡く打こはし、批屋の事故大豆・小豆・米等數十俵こもを打破、往來へ蒔散し申候。泉屋には宜品共は藏ゟ入、口に炭を積、戸前に角物・牧木を夥敷積置候故、藏には格別手懸不申由。夫より山喜を打毀、是も壁抔打落、天井・敷居・板敷等迄も打毀、柱抔一本も不殘鐵にて半分程切込有之由。夫より梯北市屋ゟ取懸り、是も右同様にて藥種抔往來へ打散し、諸道具等も往來へ投出し、盡く打こはし、夫より藏ゟ入込、酒桶其外着類・皿鉢之類、鐵に而箱共に打こはし申

由。金銀之類はたゝきまき、或は後ろの川江投込抔仕候由。北市屋前は藥種之薫りにて、極樂世界之佛方喧嘩之心持。藏之前抔は皿鉢・着類打散し候有様、吉野初瀬之花紅葉を打散し候様に被思候事この事に御座候。後ろ之川江打込候道具にて、凡六・七間計丘に成申よし。此度の百姓共の働之様子、誠に言語に絶し申致方。殘り四・五百人者、大瀨村より山城橋邊に三・四ヶ所分屯仕居候はゞ、若町方江入込者之内一人に而も被召捕候者御座候はゞ、不殘打込取返し可申様子に手配之由に承り申候。何茂出立は一尺四・五寸計の野刀に、八・九寸計之首かき之様成小脇ざしを帶し申由。鐵炮三挺・鑓十筋計持參仕、鐵炮は三日市町泉屋を手懸申節一放打申候。公領橋にて一放打申よし。町筋通り候節かけやにて蔀をたゝき、若き者ども梯北市屋をこはし候間、手傳いたし候様觸通り申候。右百姓共之内七・八人六尺有餘之男之内、一人前髮にて十八・九歳男居申候。此前髮萬事指引仕候よし。何茂不劣大兵ながら、内一人勝れて大兵にて、六尺計之棒を持居申、如何成こはれ不申品にても、此男棒にてたゝき候得者、微ぢんに打くだき申候。五斗俵抔を片手に投出し候事、小兒之手まりを扱ひ候よりも輕げに見え申由。鯨波聲を揚、諸道具を打こはし候音夥敷事にて、何茂肝を冷し申候。

右天保七年八月、小松在住之知音より爲知之寫也。

公領橋はくれう橋

八月四日。禁を犯して米穀を藩外に輸出する者の監視を嚴にせしむ。

〔郡方御觸〕

御算用場〻

此節米價高貴、他國者猶以高直之樣子に付、密々他國〻積出候樣之儀有之間敷哉も難計候。自然左樣之者有之候者、嚴重可被仰付候條、改而津々浦々嚴敷申渡、淵改役〻茂尙更心得方申付候樣、御郡奉行・遠所町奉行〻夫々急速可被申談候事。

八　月

右之通御勝手方年寄衆被仰候旨に而、御算用場より就到來、寫相越之候條、得其意、夫々不相洩樣嚴重申渡、淵改人心得方之儀も、譯而嚴重申渡、急速先々相廻、落着より可相返候、以上。

申八月四日　岡田喜兵衞

村田半助

加州三郡惣年寄中・年寄並中

八月四日。食用の米穀缺乏するを以て之が供給の方法を講ずべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

無數は少數の意なり

古米無數之躰に而、直段引揚候に付、町會所において取調理有之、米切手銀仲等〻指入に相成居候分、町會所〻引揚、所々用米指支候ヶ所〻相渡候樣、御用番年寄中〻申聞之趣、此間相觸置候通に候。就夫此節之儀に候間、町・在之内身元相應之者たりとも、食用之外切手幷米粈等多貯置候儀者有之間敷筈に候條、右族有之候はゞ早々賣出、所方用米之足りに相成候様可被申渡候。用米指支候段申出、追而其ヶ所之者米等貯置候趣相知候はゞ、所持人之儀者急度可申付、其所之役人等不行届儀に候條、於各に茂入念被相調理、油斷無之樣夫々可被申渡候、以上。

八月四日　　御算用場

岡田喜兵衛殿

村田半助殿

八月五日。前田齊泰、諸般の政務に勵精し、特に本年の米價高貴なるを以て救濟を怠るべからざることを諭す。

〔御親翰拜寫〕

從相公樣天保七丙申年八月五日播磨守・美作守・掃部・八郎右衛門御前〻被爲召、被渡下候御親翰寫之、今日出席無之面々〻は申談拜見爲致可申、丹後守〻當時御用向示談之儀被仰渡筈候

間、拜見爲致存寄之儀可申上旨被仰出候事。

幼少より家督蒙仰、政事向之儀覺悟も無之處、從來分國中靜謐、偏に何茂輔佐宜敷故と令大慶候事。

一、右之通に候得共、連々勝手難澁に付、家中を初下々迄も救方不行屆、隨而風俗不宜、下々及難儀候者共多躰承り、深心痛之事に候。仍而は不德ながら、只今より可成限り政事向致世話、國中何茂其程々を得候而、安樂に罷在候樣有之度存候處、中々一存に可及事に而無之候間、何も力を合候而、國家之世話被致候樣有之度候事。

一、右之通に候處、近來勝手向殊更逼迫に付、政事向別而不行屆令心勞候。然處是まで何茂世話有之地盤運方等、大概形も付候程に相成り喜悅之事に候。

一、右之通に候處、借銀仕法方之儀、何茂詮議之趣存寄と相違之品有之、無據趣に付何茂了簡通に參り不申、此儀は可爲心外と氣毒に存候。乍然此末打捨不申、何分にも深被致世話、勝手取返之處ゟ參り申樣猶更願存候事。

一、勝手運方等之儀、前々之樣子承り候處、只今程手詰り相成候事は無之躰。然ば政事向も只今程不行屆儀は有之間敷と存候。先祖以來之國家、當代に至り如是之場合に及び候儀、實に不德故と申譯も無之、此處を相考へ候得ば、晝夜不安存候。此所を深く被察、厚く世話有

之様致度存候事。
一、右に付ては、尤勝手財用之所のみ僉議有之候而は、政事之根本相立不申、全き儀にては無之故、又々立戻り候様之儀も可有之候間、惣様政事之上に付萬端へ渡り、夫々申付方精誠被遂僉議可被申越、別存有之人々人別に無泥可被申聞事。
一、右之通に候所、指當り當年度初より氣候不順にて、米價高貴に相成、下々及難儀候躰候。此通に而者此末取扱方大切に可有之候。加様の年柄、政事向・救方等少も遲々難致儀に候條、無油斷相心得可被申事。

天保七年八月五日

右執茂拜見之上、心付之趣は追而可奉窺与、先當座之御請連名に而指上候事。

八月七日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

八月七日
一、今日九半時之御供揃に而兩學校江御出、夫より直に御馬場江御出可被遊旨被仰出、則八時過御出。御戻り同半時之事。

八月十三日。大風雨あり。

〔見聞袋群斗記〕

八月十三日大風雨、能美郡出火。同十四日越中小矢川洪水、鳧嶋之米廩及び民家七百餘其災にかゝるなり。

八月十五日。米穀缺乏するを以て一切の食用品を領外に輸出するを禁ず。

〔御郡典〕

當時用米指支、一統難儀之時節に候條、町・在共應分限、食物を始萬事致省略、取續方無油斷可相心得。右に付都而食用に相成分、何品に不寄當分他國出指留候條、此段末々迄可被申渡候。仍而津々浦々等縮方之儀、嚴重可被申渡候。

右之通年寄中江も相達申談候條、被得其意、末々迄不相洩樣急速可被申渡候、以上。

八月十五日　　御算用場

永原虎一郎殿

村田半助殿

八月廿一日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

八月廿一日

一、今日學校へ御出八時鎌、御戻り七つ七分之事。

八月廿四日。諸郡惣年寄をして各その擔當の組に就いて力を致さしめ苟も他に附和雷同すること勿らしむ。

〔司農典〕

御郡惣年寄等之儀者、第一農事勢子方、御收納取圖り之儀、專要之勤向に候得者、須臾も無怠相勵、聊以他を不顧、銘々請持候御郡に實意を以取扱可申儀、今更申迄も無之候。然處近年之姿、假令者一郡之作方惡敷候得者、其模樣他郡江も相移り、時々巨細之注進迄も一統同樣之申立有之、其實否難計候得共、於外聞に難辨次第も有之候。併下方心服之ため、時勢に因而無據右樣之取計も致出來候歟与存候得共、是以不相當事に候。勿論作物熟不熟之儀者、專ら氣候に隨ひ可申儀。左すれ者一躰之事に而、人事之可及事に而も有之間敷候得共、地味厚薄等其所々地元に應じ、廣大之御郡々數多之村々に候得者、是非一樣に可有之道理与も難申候。左候得者其向々惣年寄等右之差別、無殘候處押極、都而他組之模樣に不拘、御納所皆濟方等之儀實意を以相勵可申。當年氣候茂不順之儀に候得者、所々作物不同も可有之、當時御逼迫之折柄、彌以精實を盡し粉骨碎身相働不申而は、惣年寄等是迄段々結構御取立被仰付置候詮茂難相立候に付、拙者內存之趣申達候間、重々無油斷心得罷在候樣、譯而被申渡置可

然存候事。

八　　月

諸郡惣年寄等心得方之儀に付、別紙御算用場奉行中被相渡、尙更拙者共よりも、心得方惣躰厚可申談旨被申聞候間、申迄も無之候得共、各精勤を勵み可申候。別紙寫取、早速先々演述可有候、以上。

申八月二十四日　　中村蔀

井上井之助

諸郡惣年寄中・年寄並中

八月。米價高直なるを以て窮民に補償を與ふ。

〔官私隨筆〕

八月五日

一、頃日米價高貴に付、前月十九日自分御前へ罷出候節、御意之趣有之。御用番へ申達、其以來御算用場奉行・町奉行等へ段々僉議有之、町方に而藏宿印紙增印申付、諸給人切手にも增印出來。其上銀仲共手前より御郡方之札に依而質入にいたし置候切手相しらべ候處、三萬石餘有之由。依而其切手共取揚、相拂候趣に僉議治定。其由前月晦日申渡有之。依而小賣米直

段、當月朔日より三文下げ百五文に申付。夫より五日毎に三文充引下げ候事に申談じ、批屋に張紙をも爲出候由。然處昨日歟又二文下げ百三文に成候由承之。

〔珍事留書〕

一、八月米高直に付、世上物騒敷、町賣米何日より何日迄と五日め五日めに貳文宛下、九十七文に相成、又百十四文。札米九十四文、右札米は御上より御足しに付下直也。百十四文より又百五文迄下り、札米は九十四文也。右直段替度毎に米屋々々に下げ札有之也。

〔御家老等留〕

八月二十六日

一、次第に米無數、買人多く遠所より出候に付、昨日より九十七銅迄に下るを、百十四銅に引上。是に而遠所よりは高貴に相成に付、買入人少相成候圖り。依而至極之困窮者は二十銅償、中分十銅之償に仕圖り之由、町奉行せん儀。批屋は常々御城下一日二百石計用米、此節四百石計にも相成由。町會所償銀等一日に五貫目計に相成候旨。

八月。氣候寒冷にして降霰を見る。

〔珍事留書〕

一、此頃大きに寒く、丸雪少々降り申候。八月廿日之頃、上下とも山手之方里々に餘程丸雪

降申候由。

八月。綿作を一作卸しとする從來の慣習を改めしむ。

〔郡方御觸〕

加州筋中興綿作引合宜に付、作方相增候躰。然る處請作之者共ゟ、親作より綿作に限り一作下しに致し、翌年卸し方引揚候由。右者一作綿作り候得者、地面乾き、來作取入決而宜敷故、一作々々に而引揚候躰。然共綿作氣候柄に寄、取手茂宜敷故、不得止請作致候躰に相聞え候。右者高持之者共いたし方甚不宜、小前之者成立得不申哉に候條、以後綿作一作卸之儀は差止、翌年取手茂宜候においで者、外卸し作之通作り尻指替申間敷候。此段一統不相洩樣可申渡候、以上。

申八月　改作方御郡奉行

加州三郡惣年寄中・年寄並中

中興は中古

九月三日。前田齊泰、陸原大次郎をして書を講ぜしむ。

〔諸事要用雜記〕

九月六日　陸原大次郎

右於御前講釋被仰付候事。
一、御前講是迄御上段に御著座、於二之間申上候得共、於學校講書御聽聞とも譯違候儀、御上段に御着座は不相當由、御用部屋中心付之趣も有之。尤之儀に付委曲申上候處、其思召に付二之間御縁頰江罷出、御前には御下段に御着座之儀に相成、則當三日より此通りに改り候事。

九月三日。前田齊泰自己の行狀に反省すべき點なきかを諮問す。

〔覺書〕

九月三日

一、坂井小左衞門別席に而申聞候者、今朝御前江被召罷出候處、頃日所々用米差閊、下々之者及難儀候躰被聞召、御心痛被遊候。右に付ては、御前御身分御愼被遊候品も無之哉之旨、昨日奥取次へも御尋被遊候。小左衞門にも心付候品も有之候はゞ申上候樣御意有之候。當時御行狀等聊心付申上候品心付無之候。是迄も加樣之御意一向不爲在候處、今度加樣に被仰出之儀、誠に恐悦至極なる儀に御座候。加程に御志被爲在候儀に候へば、何と歟申上方も有之候得ば宜候得共、不才之儀心付不申候間、各樣御心付之儀も有之候者被仰候樣仕度。左候はゞ共趣可申上旨等段々申聞。右丹州等三人一緒に承候事。段々被仰出候趣誠に難有儀に候。

相考心付之儀有之候はゞ、追而可申達旨申入候事。右申聞候内小左衛門落涙之様子也。

九月六日。石川郡宮腰室屋三郎兵衛米穀を買占め密に輸出するを以て斬せらる。

〔珍事留書〕

一、宮腰に而錢屋五兵衛・室屋三郎兵衛方隱居等申合、米等野菜に至迄多く買〆津出之由風聞。依而右之者共被召捕、御詮議有之候處相違無之由。併錢屋五兵衛等申開宜、御免被仰付候。室屋三郎兵衛一存に而買〆津出仕段白狀之由。其譯を聞に、右三郎兵衛養父隱居之發端に而、錢屋五兵衛申談、加樣之致方出來故、室屋隱居之罪難遁に付、養子三郎兵衛一存之致方と白狀仕罪に依而、九月六日宮腰の濱において討首被仰付候。此日天氣宜、近郷より見物に出人中々夥。其場所は宮腰・大野領境宮腰之濱に而、二十間四面杭打繩張廻し、其内に簀圍いたし、此所に而暫く爲休、夫より引出候而罪名讀渡有之由。其場へ詰役人、公事場横目脇田三左衛門、外に與力兩人、其外公事場足輕幷警固足輕等多く相詰申候由。且罪人御請之上、早速引居ゑ、左右手を一人宛後へ扣、前へ一人居り首を引延候處へ、右繩張簀圍之内より斬手走り出、首を討落し申由。首・手を持候者とうない之者之由。斬手如何いたし候哉斬損じ、兩三度におよび候由。且又宮腰の町奉行先に相詰、右場公事場横目へ相渡引退候之由。公事

場より宮腰迄之道中、公事場與力兩人警固之足輕多差添罷越候事。今日勝たる天氣に而、見物人群集をなし押合候而、間近き者も見え兼候由之事。

〔文化より弘化まで日記〕

天保七年十月六日宮腰町人室屋三郎右衛門、當夏より米等隱置、密に他國江致廻船。依而同所濱に獅子垣爲結、其内に而生胴被仰付。

日附人名前と異なり

九月六日。麥作の反別を成るべく增加せしむべきことを令す。

〔司農典〕

當年柄に付、麥蒔込方之儀、於村々に成限り餘計作付、尤組主附中等にも油斷も無之儀、譯而申渡にも不及儀に候得共、麥種不足之村々も可有之、左樣之所は何分組主附等之人々相互精誠穿鑿、厚く致世話、いかにも作增候之樣、幾重にも相心得可申候、以上。

申九月六日　　井上井之助

駒井丹之丞

諸郡惣年寄中・年寄並中

九月十一日。德川家齊將に將軍職を家慶に讓らんとすることを告げたりとの報金澤に達す。

駿河守は大聖寺侯世嗣前田利極

〔覺書〕

九月十一日

一、當月四日出江戸町飛脚、早飛脚歩五日に相延、御用所御用に而今日着、城州等紙面來る。右卽刻追札に而以善右衛門入御覽、寫御用所ゐ渡。

今四日惣出仕等之儀、大目付衆より御書付到來、御在國之御方は御名代可被指出旨に付、駿河守樣御名代御賴之趣申上、卽四日爲御名代御登城被成候。被仰渡候趣、御城より直に御出圖書へ被仰聞趣等、右に付早飛脚に申進候旨紙面添物數品。

先達而御內意被仰出候通、內府樣御歲茂被重候付而、御政務被遊御讓、御本丸ゐ來酉年四月可被爲移候。公方樣被遊御隱居、西丸ゐ可被成御移候。右之趣京都ゐも被仰遣、將軍宣下之儀も御願被仰遣候。不相替內府樣へ御奉公可仕候。此段可申聞旨御意候。右之趣於溜之間、井伊掃部頭殿・酒井雅樂頭殿・酒井左衛門尉殿・松平隱岐守殿・兩御丸御老中方幷脇坂中務大輔殿御列座、御用番松平和泉守殿御演述之旨也。

九月十二日。年寄中等、前田齊泰に當分演能を廢すべきことを上申す。

〔諸事要用雜記〕

九月十二日

一、當年不作に而、所々用米も指支候躰。此節御能抔は御不似合に付、暫不被遊方御宜かるべき由年寄中被申聞候由、御用部屋中被申聞。頃日御沙汰も可有之時分に候へ共、未何之御様子も無之、嘸何等之被仰出も無之と相見候由相答候。右年寄中より被申聞候は、先達而年寄中より被申上相始り候事故、只今被申上候事之由に候。依而其趣委曲申上置候事。

九月十二日。救窮用の米穀足らざるを以てその方法を議す。

〔御家老等留〕

九月十二日

一、昨夜別廻五時前内膳より來、五時過青山へ遣之。此節用米支に付町奉行より達紙面也。但、町奉行手に而救高前月二十九日までに五千六百石餘、今買置候米一萬四千石計。春日町等三ヶ所江例年新穀入一日百石餘宛、八月中には三千四五百石も有之、當年は春日町・金浦町江入米無之、野町口まで漸一日六・七石、當二日より日に寄二・三十石も出る。七月頃より救之人家五千四百軒餘、人數一萬七千人計、償之銀高前月二十九日までに大略二百五十貫目計、此末銀高大數圖千貫目計。當月中之飯米は有之候得共、來月より之分は手當無之。右に付米・銀之儀指支に付、急速せん議之事相達候也。

右に付當時惡癖に而、百姓共質米に致置候躰に付、來月之所右等之米入交、一日二百石宛入

米致候様申渡か、又は堂形御藏幷石動等之歩入米御渡歟、兩様之內。又銀之儀は引替所增銀手形出來と歟之せん議を相達候也。

九月十九日。年寄等、成瀨掃部が寺島藏人と謀る所あるを以て其處分に關し上申す。

〔本多政和覺書〕

九月十九日

一、丹後守・播磨守・美作守、御透に被爲在候はゞ御前江罷出申上度儀御座候間、被召候様仕度旨、以執筆善右衞門へ申達置候處、九半時過被召候旨、茂兵衞申聞候に付、御用之御間へ罷出、左之伺紙面上之。右委曲口上に而申上、荒增は書面之通に御座候旨申上。

御政事向之儀に付、段々思召之趣先日被仰出候に付、追々心付等之品可奉伺筈に御座候。就夫私共を初、諸役人一致に心を合和熟不仕而は、何様之事も不被行儀と奉存候。且寺嶋藏人儀、當時役御免にて罷在候へ共、彼是御役人等之內と出會仕、何歟取組候躰も有之に付、第一此者手前何と歟不被仰付而は、萬事僉議にも難取懸旨等、先日奉申上候通に御座候。然處成瀨掃部儀、其以來右藏人と心易仕、彼仁信用之躰に付、御內々被仰出候趣有之、表向は奉畏候段等申上旨、御意に而奉拜聽候之通に御座候へ共、其後承り候へば、先藏人信仰仕居候

躰に相聞え、其上近頃迄は御勝手方等出情仕相勤罷在候處、當夏御歸國之頃より萬事了簡を扣罷在、右に付而は種々と存寄も有之様子に相聞候。私共僉議之泥に相成申候。且右了簡を扣候儀等に付、相尋候趣も御座候處、始末申聞方不都合之儀も有之。此儘に被成置候而は、不御爲奉存候間、御家老役幷年寄共加判・御勝手方共、御免可被仰付候哉。但是迄役儀等情に入相勤候之儀に御座候間、御免被仰付候節、役儀等出情相勤候段は御大慶被思召候旨可申聞哉。左候はゞ左之通可申渡候哉。

美作守殿江

成瀬掃部

右掃部儀思召之趣有之、御家老役幷年寄中席御用之加判、暨御勝手方御用共御免被成候。是迄役向心懸相勤、別而近年御勝手方御用之筋致精勤、御大慶被思召候。此段可申聞旨被仰出候條、可有御申渡候事。

右之通私共何茂僉議仕候。掃部儀才力も有之、急度御用に相立可申人品に御座候に付、何と歟申諭爲相勤申度と奉存候得共、段々奉申上候通り不得止事次第に付、右之趣奉伺候。猶更被加御思慮、思召之趣被仰出候様仕度奉存候。猶委曲は口達を以可奉申上候、以上。

九月十九日

播磨守等四人

決而は必ずの意

右掃部儀、生質正直なる人品に而、去々年御勝手方被仰付候節より、格別出情相勤、御勝手向之儀も略御符合之形にも相成候儀者、掃部之功に御座候。當春迄は萬事示談合等も能調、打明け示談仕候處に而は、外に底意も無之、平和に相見え申候處、御歸國之上又兵衛再勤被仰付候節より、俄に様子替り、萬事存寄を差扣候躰に相見え、又兵衛之事を甚憤り罷在候躰に相聞え申候。又兵衛儀、元來掃部了簡を押へ候所存は聊も無之儀之處、右之通掃部心得之儀は、全躰掃部生質我より長候人をば好み不申躰有之故、左様にも有之由。其後又兵衛は病死仕候へ共、丹後守儀無程日々出席之儀をも被仰出候故、右に付彌指扣、存寄をも一向に不申出躰に相聞え候。右之通正直なる人品に而、平和に申合候節は替儀も無之候へ共、右之通怪しからぬ存寄有之儀は、何歟存念も有之故と奉存候。縱外は隨分正直に御座候而も、右様之心底有之人、席中に罷在候儀は不可然、又私共も相泥候儀に御座候。且寺嶋藏人之事は今以信仰仕、益友之心得罷在候由に候へば、御前江申上候儀は相違を申上候と申物。右之通藏人信仰仕居候儀に候者、此後追々藏人手前僉議仕候節者、決而別存も可有之。夫而已ならず、如形藏人信仰仕居候事に候へ者、藏人手前僉議之模様彼方へ相泄申間敷共難申、何歟僉議之差障に相成申候間、何れ掃部御免無御座候而者、諸役人和熟と申儀も無之、私共等席之中に一物有之候而、如何様之儀も難出來儀に御座候間、這處第一に申上候趣御座候旨申上。又掃

部へ先達而より折々懸合候儀も御座候處、其以前とは様子替り、何を申入候而も逃れ候答計に而、熟談と申は難出來故、這上私共より申諭候儀は六ヶ敷御座候旨等段々申上。丹州・作州よりも段々存寄之趣共被申上、當時御表向にも、掃部之事心服不宜向も有之趣被申上。且去々年より當春迄之處、掃部向之外には不心服之人品も有之様子に候へ共、掃部向は不及申、其外にも隨分心服仕、御省略向等張込候人も有之候へ共、御仕法之儀當夏相變、又又兵衞・丹後守等之御沙汰も有之、掃部は存寄を扣候故、當時之處諸役人心底一向定り不申、人々張込相勤候儀者無之様子に相見え申候。如斯に而は迚も不被行事に候間、何と歟諸役人心定も仕様に無之而は難相成。且掃部了簡を扣候儀相尋候趣御座候處、當夏頃は見込相違仕候儀有之而は右見込相違之段は、其後奉達御内聽置候間、其處に懸念は無之候へ共、御仕法之儀最初僉議通と相違仕、尤御仕法迄之儀に候へ者、彼是なく候へ共、全躰意氣込通相違仕候故、か様之躰に而者何も不被行儀と申聞。又美作守抔へ申聞候處は、又夫とも替り候様に相聞候。去年頃迄之景氣とは別段之儀に御座候旨等申上候處、掃部手前之儀は猶御考之上可被仰出旨御意に付、昨日水原清五郎等手前之儀、御親翰返上之、幸藏事と這上は何茂別存無御座候間、兩人共當二十二日可被仰渡候哉。幸藏儀、是迄者御近習頭へ加り相勤候様にと之趣に而、御

近習御用と申譯に而は無之候間、此度轉役之節は御近習御用と可被仰渡哉。其趣に被仰渡方相調申候。猶更思召次第可被仰渡旨申上、被仰渡之覺書上之。且有澤幸藏儀に付心付候と申者、外之儀に而も無之、幸藏は他家より養子に罷越居候處、養家妹、先達而永禧院殿御廣式へ上り居候千崎と申者下宿之上は、何歟不正樣之風聞も御座候。尤慥成儀に御座候はゞ、急度僉議方も有之候へ共、世評一通之儀に候へ者、轉役抔被仰付候而も差閊申間敷樣に奉存候。去共申合居候趣は、一往申上置候旨申上、退去之事。

左の通御加筆廿一日に被渡下。

委曲令承知候。各僉議之通、掃部儀役儀幷各席用加判・勝手方共免許可被申付候條、左樣被相心得、此伺之通り可被申渡候。

九月廿二日。家老成瀨掃部その職を免ぜらる。

〔榮辱雜記〕

九月二十二日

御家老役幷御勝手方共御免除　　成瀨掃部

九月廿六日。前田齊泰、石川郡宮腰に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

九月廿六日
一、今日御鷹野御出九つ一分、七つ屋口より被爲入、所々御廻り、宮腰口町端より御上り被遊候。天氣快晴之事。夜六つ三分御戻被遊候事。
一、今日野間御供拙者罷出候。御用部屋竹田氏之事。
一、御獲物朝之内投網に而雁一つ・青鷺二つ。夫より御廻り之内かもめ一・鶴一つ有之事。

九月。前田齊泰領内の凶作を幕府に屆出づ。

〔御家老等留〕

拙者領分作躰、當春來雨降續、著氣至而薄、一体作物不熟至極之上、別而稲虫付等多く、加之川々度々洪水にて、地許過分及損毛、人家流失、イみ所も無之程之向も有之候。然内八月中旬一圓には無之候へども、北風以之外强、海邊筋等立毛悉相痛實入不申。全体前段之氣候柄に候處、例よりは冷氣も甚相進、所に寄不節、七月下旬雪氣有之、山方田地者皆無同様之場所不少。且又頃日に至り候而は、烈風度々有之、里方にも所に寄、高山より氷吹下し、數百ヶ村立毛彌増之及損毛候。右之趣に付、何程の取劣に可及哉、損毛高之儀は收納之上御屆可申候得共、非常之凶作に付、先此段御屆申上候、以上。

申　九　月　　　　松平加賀守

九月。秋收の季多雨なるを以て新穀の乾燥方法を示す。

〔司農典〕

秋入之節降勝に而米干兼候に付、内干与名付、はさ掛之上致雨覆、或者家納屋之軒下与歟、あま等之雨露之憂無之所に而致世話、干立候得者、隨分米性も宜干揚り候由に候。當年抔米拂底に而、諸方新穀待居候得共、何分雨天に而干兼、米出來不申年柄、何分右樣いたし、一時も早く米出來之儀肝要之事に候。此段村々江申渡、少々に而も干立早速出來之儀可申渡候、以上。

九月　改作方御郡奉行

諸郡惣年寄・年寄並中

九月。町・在に命じ當分造酒に着手すること勿らしむ。

〔郡方御觸〕

卷目之上、御算用場奉行江

當年米價格別高直、所々用米茂指支候躰、尤人々心得も可有之儀に候得ども、町・在之もの共一統粥を給べ、食用之儀萬事大切に相心得可申候。

一、酒造之儀、當年者三分二相減、三分一酒造可致旨、從公儀被仰渡、其段申渡置候得ども、

御領國之儀者前條之譯柄に候條、當年新穀全出來迄先相見合可申候。
一、穀類に而造り候下品之物、輕き者食用に相成候品物は格別、干菓子・蒸菓子等榮耀之品一切取扱致間敷候。都而穀物猥に相費不申樣專一に可相心得候。
右之趣被得其意、心得違無之樣急度可申渡旨、所々町奉行等幷御郡奉行等江可被申談候事。

九　月

〔珍事留書〕

一、酒造候儀先達而より御指止之事。
一、酒一升二百八十文計之事。併右酒七尾等遠所より入酒之由。此頃平賣は不及申、通に而も酒不足之由に而賣不申。酒屋一統此頃無商賣之事。
一、町賣米一升百二十一文也。
一、大豆中分之所一升百二十三四文之事。
一、小豆一升百四十文之事。
一、味噌一升百八十文之事。
一、蒸菓子之類・干菓子拵候儀御指止之事。且煎餅は少々拵賣候儀不指支段御申渡有之候由之事。

一、油一升に付五百十文之事。
一、綿一貫に付綿目十六貫賣候事。
一、麻苧至而之分百目に付二百文之事。
一、紙至而高直、下中折一帖に付三十二三文。右に准じ候紙直段之事。
一、とうふ一丁に付三十文、同油揚一丁六文。右に准じ諸色格別高直。
一、御上より様々御救方被仰付候へども乞食多く出來、御上より被仰出有之、御家中よりも救米等多出候事。

十月六日。前田齊泰その食膳を節減す。

〔官私隨筆〕

十月五日

一、御用之間へ被召、御膳米御減少被仰付候事御意有。其儀播州等へ密に物語いたし候處、翌日定番頭等へ對談之節其由內々はなし候と申入。依而其趣以小左衛門申上置候也。

〔諸事要用雜記〕

一、當年凶作、此節所々用米も指支候躰。右等之年柄之思召も候哉、御僉議之上、當分御膳米內之御減少被仰出候。其後當月末に小頭被爲召、御膳米御減少も被仰出候に付、是迄之通

に仕上候に不及段被仰出候事。

一、當時朝・夕一汁一菜、御夜食は一汁外煮物に御一菜と相成居候處、思召被爲在候哉、當分朝・夜御一菜、夕は是迄之通と被仰出候。是迄とても御麁菜に被爲在候處、右之通被仰出、御用部屋初奉恐入、奉願元成にもと申上度候へ共、被爲思召付、御身分之御愼に被仰出候哉之御様子に付、其儀も仕兼候由。仍而寒天にも向候事、御一菜と申ては御汁無之時も御座候事、其儀も甚如何敷奉存候。仍而御一菜之節は御汁迄に被仰付、且御煮物に而も、御汁に代り候程之御品は、御煮物迄に而宜、猶更取計指上候様申談べく段申上、其段御膳奉行ゟ申談候事。

一、右之趣御奥へも通じ可然由に而、則委曲小野崎へ申含候。右御一菜に相成候に付而は、御奥より被進候御料理も可然取計、是迄とは相增候様之儀は御趣意に違可申由、得と申入置候事。

十月六日。前田齊泰、改作奉行等に救窮の方法を誤るなからしむることを諭さしむ。

〔本多政和覺書〕

十月八日

一、御郡奉行廣瀬平之丞等郡方見分之樣子追々言上有之、御心痛被思召候。右に付去巳年凶作之節、御取救過分之處茂有之躰被聞召、尤御取救過候儀は其分に候へ共、又中には不行屆處茂可有之候。何れ郡方改作之人々詮議委からず樣に被思召候間、此節入念申渡候樣等之事、月番被召此間被仰出候に付、今日改作專務之人々呼立、一統二の間相同じ右之趣申聞、郡方之人々へも跡々申談。

十月十二日。前田齊泰の子利順の病痲疹と決定す。

〔官私隨筆〕

十月二十日

一、龜丸殿當九日より御熱有之候處、十二日より御痲疹に御治定、御順症之旨申來候由に而、御用番より今曉廻狀到來。今日出席之上以五兵衞恐悅申上候處、御喜悅之旨以同人被仰出。

十月十二日。凶年なるを以て收納取扱及び窮民救濟に關する心得を諭す。

〔御郡典〕

當年不順氣に而作躰不宜、中には厚難之村々も有之由。其上當作之儀、一村之内にも格別甲乙有之躰。左すれば撰方も不同可相成筈。別而ケ樣之年柄に候得ば、他之釣合に不相泥、少に而も有餘之村々綿密に遂穿鑿、御收納方成限爲相勵、御取箇惣樣之持合を以、何分都合致候

様心懸尤之事に候。且亦村々困窮人共取續之儀、聊無油斷相心得、手早く立廻、不及飢餓介抱方等急度可致指引候。何れにもヶ様之時節、彌以一統精力を盡し、從來身元可也之者幾重にも爲致不肖、小前之者稼穡に不相離様、精實を以深切に取扱候はゞ、下々人氣にも相觸申間敷。元より村々作柄等厚薄に應じ取扱之不同は可有之筋ㄅ、致心服候様有之度儀に候條、是等之趣深令勘辨、何れも厚心懸遂詮議候儀肝要之事に候。右之趣諸郡組々主附江も夫々可及演述候事。

申　十　月

右十月十二日有賀甚六郎様御家老御同席、御算用場御奉行・御郡御奉行・御改作方御奉行御立會、諸郡惣年寄御呼立、夫々御演述、別紙御書取御渡、末々取扱方重々被仰渡候事。

十月十六日

惣年寄より右之趣廻狀之事。

十月十三日。石川郡本吉及び能美郡小松の騷擾を鎭撫したる改方與力以下に賞賜す。

〔毎日帳書抜〕

十月十三日

一、七月晦日夜本吉町騒立候付、八月朔日右御縮方御用改方與力吉田市十郎・齋藤左次馬へ申渡候處、即刻發足彼地へ罷越候。然處同夜小松町騒立候付、翌二日右御縮方御用市十郎へ申渡差遣、左次馬は本吉町に居留、兩人共御用向出情相勤候付、與力へ銀二枚計、足輕小頭へ銀五匁計、足輕へ金百疋計、加人へ銀三匁計充可被下成之旨、伺之通被仰出。

十月十五日。前田齊泰郊外千日町に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

十月十五日

一、今日九つ三分御出、千日町町端より御鷹野、所々御廻り、示野渡船御渡り被遊、大豆田口より御上り、六鎌下御戻り被遊候事。

十月十九日。此の夜降雪あり。

〔珍事留帳〕

一、十月十九日夜雪六寸餘り降候也。

一、同廿五日・六日に雪一尺五寸計降也。

一、米町賣一升百二十三文。

一、綿代一貫に付十二貫五分賣候也。

一、諸國共不作に付、何に不依喰物は萬事排底に而高直也。

十月廿二日。前田慶寧の病痲疹と決定す。

〔御家老等留〕

十月廿九日

一、犬千代丸様廿日より御熱氣被爲在、廿二日御痲疹に御治定、町飛脚日圖り早飛脚今日到來、御容子等主附助萬之助より來。右に付相公様江恐悦申上、拙者出席不申候に付以紙面申上候。下物執筆より指越、御用番江出す。

〔本多政和覺書〕

十月廿九日

一、犬千代丸様御痲疹之處、御順症に被成御座候旨、御附方へ申來候紙面披見に被出。右に付丹州初若年寄中迄松之間二之間列座、御近習頭佐藤隼人を以恐悦申上候處、重而以同人御喜悦被思召候旨御意有之。

十月廿三日。前田齊泰の子利順の痲疹癒え酒湯を浴す。

〔官私隨筆〕

十一月二日

一、龜丸殿御痲疹御順症御肥立ち、前月廿三日御酒湯被召候旨に付、以茂兵衞恐悅申上候處、以同人御喜悅之旨被仰出。

十月。綿の價騰貴したるを以てその相場を公定す。

〔御郡典〕

卷目之上、御算用場奉行〻

綿直段引上、小前之者共機渡世致難儀候躰に付、去年出來之分一駄に付二十五兩に致商賣候筈に候條、御郡方綿商賣いたし候者共、右直段を以賣渡候樣可申渡旨、御郡奉行等へ可被申談候事。

申十月

十月。本年に限り圍籾の量を減ずべきことを告ぐ。

〔郡方御觸〕

付札、御算用場奉行〻

非常之年柄御救爲御手當、御收納米之內より正米二千五百石之圖を以、天保四年より御圍籾被仰付候所、重而御僉議之趣有之、昨年より七千五百石相增、都合正米一萬石御圍籾、年々御貯用被仰付候へ共、今年不順氣に而御領國不作之所、右之通一萬石籾納被仰付候而者、一

統可爲難澁に付、格別之趣を以當一作天保四年被仰付候通、正米二千五百石被仰付、明年より年々一萬石充被仰付候條、被得其意、御郡奉行へ可被申談候事。

丙申十一月

十一月朔日。是日以後寺島藏人の處分に關して議す。

〔本多政和覺書〕

十一月朔日

一、御透に被爲在候はゞ、播磨守・又三郎御前江罷出申度候間、被召候樣仕度旨、以執筆市三郎等へ申達置候所、今日者御用多に被爲在候、不差急儀候はゞ、明日にも可被召哉之旨被仰出候に付、差急不申に而者無之候へ共、御用多に被爲在候はゞ、明日に而も差閊不申旨申達置候處、九時過被召候旨に付、又三郎同道御用之間へ罷出、寺嶋藏人手前之儀、先達而被仰出候趣に付、其後手筋々々を以聞合候處、品を差取組事等相顯候儀は無之候へ共、蔭にて御役人等と取組、種々と御政事之害に成候儀は相違無之躰。尤御役人等每度參會仕候樣子御座候。其外下々より賄賂取受候儀も有之樣子。但是は枝葉之事に而、本文は御役人等と取組候儀等に御座候。右に付被仰付方之儀、一通り之御咎にては相濟申間敷、又其詮茂有之間敷と奉存候間、嚴重過候樣には候得共、五ヶ山之內へ蟄居可被仰付候哉。松雲院樣御代には、這類

多御座候而伺書に調上候。葛卷權佐は能州之內村方へ被遣、堀主馬は嶋之內へ蟄居被仰付候。
右は常之遠嶋流刑とは品違申候。藏人事如形人物に候へ者、金澤より通路有之處は宜ヶ間敷
候間、右之通僉議仕候。尤御取扱方、常之流刑人とは夫々格別に被仰付可然と奉存候。依而
御扶持方も十五人扶持之趣に調申候。右之通顯れ候者大惡も無之、人物姦成處を以被仰付候
儀に候得者、家斷絶仕候儀はいかゞに奉存候間、養子主馬祖父知行四百五十石之內三百石計
可被下哉と調置申候。先年戶田與一郎等召返候時等、大躰三の一計被仰付候へ共、藏人事は
格別に品宜、右之通被仰付候はゞ可然と申合候。委曲御伺書に調置候旨申上、伺書上之候處、
御考被遊可被仰出旨御意に付、意趣表向伺候節は、御家老中へ茂示談仕可奉伺筈御座候得共、
御家老之內庄兵衞・八郎右衞門抔は、成瀨掃部と心易樣子に候間、前廉より若々相洩候而者如
何に奉存候間、一往奉得御內意、被仰出候はゞ申聞、其上表向伺書差上候心得に罷在候。依
而這伺書は前月調候儘に而、月付け茂違ひ日付も無之候へ共、口上計に而者いかゞに奉存候
に付、入御覽申候旨申上。且大學秦誓之條に有之、人物抔其品惡事と申儀は無之候へ共、人
のきあるを惡み、彥聖なるを不通と申處にて放流仕候儀に御座候。藏人は其處へ相當候人物
と丹後守申罷在候。右之章仁人流之と有之、仁人と申が眼目之處に而、至極之仁人に而無之
而は、右之通大惡有之人にて無之故、其儘に仕置候へ共、右樣之人物に而政事之害に成、下

々成立得不申處有之故、仁人は放流之仕候と申意味に御座候抔と、是又申合罷在候儀も御座候旨等申上、退去之事。

［本多政和覺書］

十一月二日

一、八半時前余・又三郎被召候旨に付、御用之間へ罷出之處、昨日相伺候寺嶋藏人事思召不被爲在候。配所之儀、金澤より通路有之ヶ所は宜ヶ間敷候間、五ヶ山へ可被遣哉と之伺候へ共、能州嶋之內へ被遣候とも、御締所之儀に候へ者通路は有之間敷と被思召候。同流刑ながら、五ヶ山者嚴重なる樣に相聞え候。藏人者外流刑人とは格別結構に可被仰付と之趣に候へ者、同敷は嶋之內へ被遣候方可然候、いかゞに候哉之旨御意に付、先達も其儀申合不申に而者無御座候へ共、嶋之儀は御締所之儀には御座候へ共、先年より密々通路仕候者無之に而も無御座候。尤表向者通路無御座候趣に候へ共、右之通に御座候間、五ヶ山へ被遣候得者、其處嚴重に而可然哉与申合候故、加樣奉伺候へ共、被仰出之上は今一往申合可申上旨申上候處、伺紙面文中、蔭に而取組御政事之害に成候に付、御咎等之儀僉議仕候樣被仰出候と有之。是は加樣に被仰出候事者無之候。播磨守歟、先達而藏人手前之事段々申上候故に候はゞ、御咎等之儀僉議仕候樣被仰出候事に候間、重而伺書差上候節、調直差上候樣御意に付、尤其心得に

罷在候へ共、調方荒目に而相分兼申候と奉存候間、重而調直差上可申旨申上。畢而先年金龍院様段々被仰出之趣、帳面入御覽候樣、先刻丹州召被仰出候に付、右帳面又三郎持參被入御覽候所、御覽相濟、其節一緒被仰出候山本中務・大田小又助、當時心得方いかゞ有之哉と御意に付、小又助は折々藏人と出會仕候樣子に候へ共、慥か樣と申儀も承不申候。中務は近頃藏人と申分仕、其後通路不仕樣子承申候旨等申上退去之事。

〔本多政和覺書〕

十一月三日

一、昨日被仰出候寺嶋之事、能州へ被遣候とも、縮方之儀嚴重に有之候へ者無彼是儀。何れ一通りからざる人物に候間、五ヶ山へ被遣候とも、彼仁存生中は急度心得無之而は不相成儀。五ヶ山へ被遣候とて、油斷仕候而者必其害可有之儀。何れ被仰出之上を强而五ヶ山へと申上候にも及間敷と、丹州等申合、右無存寄旨等月番御前江被申上候事。

〔本多政和覺書〕

十一月四日

一、昨日寺嶋一件、今朝御家老中江及示談候所、同意之旨被申、其內御扶持高之處、十五人扶持は結構過可申哉与八郎右衛門被申候に付、猶しらべ候處、葛卷權佐者八百五十石にて十

人扶持、多賀隼人一千石にて二十人扶持、關屋雲八郎者四百石にて二十人扶持にて、さして知行之高下にも拘り無之樣にも見え候故、猶又申合、右中川心付候趣をも申上、此上は思召次第被仰出候樣申上可然と之事に付、余・月番御前江罷出度之旨、將監を以申上候處、八時前被召候に付、御用之間へ罷出、御家老中存寄無之に付、本文伺候旨申上、伺書差上、御扶持高之儀に付八郎右衞門申聞等之趣をも申上候處、以御朱書可被渡下旨御意に付、及御請退去之事。

一、右伺紙面夫々伺之通、御扶持高は十五人扶持被下候旨、御加筆物月番江以御近習頭被渡下。

十一月二日。本年凶作なるを以て租米の檢査を寛にすべきことを命ず。

〔司農典〕

當年諸郡不一方作難に付、納米米症撰方之儀、諸郡より願出候に付、別紙之通改作方御郡奉行申聞候に付、寫相達候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十一月二日　　御算用場

御郡奉行中

當年諸郡共不一形作難之所、御藏幷町藏共納米米症撰方甚敷、一統及迷惑に候趣、諸郡共歎

出候に付、重々遂詮議候上御達申候。元來當年不順氣に而虫附病等多、惣別柔弱に生立、米性甚不宜、夫々仕立候處屑米多、精米に可相成分拂底至極。併御收納米之儀はいかにも米症撰立可納儀に候得共、右不熟に付平年よりは米性可相劣候處、諸代官幷町藏撰方甚敷、數度仕立爲直、省き米多いたし持歸候に付、一統致迷惑候。中にも町藏には格別嚴敷相撰候向も有之躰に御座候。當年步入方格別進み兼、所々用米等も指支、於役所に重々遂詮議罷在候處、右樣撰方甚敷相成候而は、厚難之村々等必至与及難儀申候。尤御收納米等之儀麁抹無之趣は重々申渡置候儀に候得ば、於村々に精誠仕候米可成丈爲相納申度。右樣省米等多相成候而は、彌御收納方指支可申候間、諸代官幷所々町藏江、右之趣相心得納可申旨、急速被仰渡御座候樣仕度存候。則諸郡より指出候書付等繼立、夫々御達之申候、以上。

十月二十二日　　中村蔀

石黑左門

御算用場

十一月四日。前田慶寧の痲疹癒え酒湯を浴す。

〔官私隨筆〕

十一月十三日

一、犬千代丸様御痲疹御順症に御肥立被遊、當四日御酒場被爲引候由、江戸より申來。各上下に改列座、以牽次郎御祝詞申上候所、御喜悦之旨以同人被仰出。

十一月四日。河北郡倶利伽羅權現社及び石川郡白山本宮坊舍災に罹る。

〔續漸得雜記〕

天保七年申十一月四日曉天、倶利伽羅茶屋より出火、多分類燒。長樂寺宿坊者殘り、山門・社堂不殘類燒之よし。同白山下御坊出火、其飛火白山社前杉に移、拜殿屋根江移り可申處、早速伐倒し、宮の屋根まはり燒失は無之。上下靈社之火災珍事与申事に候。

十一月四日。寺島藏人能登島に配流を命ぜらる。

〔文化より弘化まで日記〕

寺島藏人

御手前儀、心得方不可然儀有之候に付、先年より每度御咎等被仰付、就中金龍院様御代、文政二年御咎被仰付候節、段々被仰渡之趣も有之候處、今以其身に不預儀を、蔭にて取組之族共相聞、御政事の害に相成候。假令志は御爲与相成候儀に候共、致方不宜故皆以御不爲と相成儀に候。全躰御先代様被仰出之趣を忘却仕候段不屆千萬に被思召候。依之能州島之內蟄居被仰付、御知行被召放、於配所十五人扶持被下。配所へ發足迄は、人持御預被成候事。

御屋敷は長氏

十一月四日

〔珍事留書〕

一、御馬廻頭當時御免頭分知行高四百五十石居屋敷味噌藏町に而寺嶋藏人与申人、是迄度々御尤被仰付候處、其心得も無之哉、御政務萬端に障候儀有之由に而、能州嶋の地へ蟄居被仰付、彼地において十五人御扶持被下置候。當分本多圖書殿ゟ御預之事。

右被仰渡御屋敷に而有之。當月御用番也。御詰合播磨守様・奥村内膳様、大小將横目兩人、御徒横目兩人之事。右當日四日也。御屋敷諸場相立、給人一統・足輕一統御觸附有之罷出。餘組は役柄により罷出。且暮六つ時頃藏人被罷越、上段之御間へ被通候。被仰渡丸書御間也。被仰渡之上夫々御法之通に相成。上段之御間へ座付也。同御間指向ひ、御上御徒一人代り代りに相詰、御縁側へ御組方兩人・平給人一人代る〳〵相詰る。上段之御間・櫻之御間境御唐紙建切り、櫻之御間ゟ惣給人相詰る。鑓之御間へ足輕多く相詰る。是者捕手之爲なり。都而御間等御館廻り警固嚴重なり。翌日朝五つ時過、本多圖書殿より役人指添迎に來る。上段之御間に而裝束着替、髮も結直し、流人御作法通りに相成る。右裝束圖書殿より持參也。髮結も圖書殿御家來也。夫々用意相濟候上、御上御横目圖書殿役人ゟ引渡申候。且七十疊敷御縁より砂庭へ假壇橋かゝり、此所に而駕籠に乘せ、夫よりから門を出、表御門より通候事。

右藏人、當時之御政務に彼是批判いたし、他役に取組、何か障に相成人之由。

〔寺島應養流謫の記〕

天保七丙申十一月四日早起如毎、登樓筆を採て青緑山水を書く。于時篠原敬齋より、奇絶之書畫有り、來りて見よとの書翰來る。予之好處、且久敷不接面晤、依而欲行。短景午に至る、一飯を食し則行。主人互に平安を賀し、後出す處の書は、程正齋が書雙幅也。奇なる哉此書幅、予が舊友富田源内（御射手號伯氏亦菁義）が珍藏する處の物にして、且而見る處の物也。其他美人の書畫あり。程子の幅、富田痴龍翁之傳記、曁岡野友輔が記あり、則幅に添。傳記中に云。昔山本源右衞門の所藏の物にして、葛卷權佐昌興謫所の壁間に掛、愛翫する所のもの也と。眞僞雖不可知、書體古雅、誠に可尊可敬。雅談終昌興之事におよび、こゝろに思、昌興至誠忠良の臣たること賞歎數刻にして、尙情を殘して出、原黄崕ゟ立より此頃疎濶之情を演、心嬉敷家に歸。然處門內に人有り、從何方と尋ぬるに、長又三郎使也。怪み入而紙面を見るに、御用有之追付長家ゟ可出与之書面也。依而妻子家臣を集め、何れにも是自分家之凶事至る處也。何れも其心得に而可罷在与申入。長家ゟ行處、門內釣提灯其備不一方。廣間へ通。長榮高張嚴重也。暫して御横目（兒島五郎右衞門、羽田三作）誘引、帶刀を取候樣申聞。從夫又三郎前ゟ出る（奥村內膳立會）。御書立を以、能州島地ゟ蟄居被仰付、御知行被召放、十五人扶持被下。配所出來迄人持ゟ御預と也。懷

中下げ物、御徒横目兩人可請取之旨申聞、相渡す。曉天に至而食事一汁二菜。警衞之士多、いづれも無刀、予が前を過る者中座之敬を不失。翌五日本多圖書政守ゟ御預と成。長家に有内、いづれゟ御預と云事を不聞。五時過本多家之家臣罷越、衣服を脫替させ、本結を拂ひ、紙に而結へる。衣服、ヱリナシ、紐付、帶なし。長家を出る時、警衞の士數多手を付いて伺向す。故に進而及挨拶、式臺橫間之内より乘物に乘出。途中の衞士都合五十三人。四つ時過本多家ゟ著、乘物の儘間の内ゟかきいれ、あやしの囚屋にいる。圖書挨拶、可相愼之旨。從此方も及挨拶、衞士追々出でて挨拶す。途中之警衞之士左之通。

徳田太左衞門　上野半左衞門　上坂豐太夫　川崎左平太　高木豫六郎
濱口鎌之助　岸川喜左衞門　杉本松之助　幸坂平馬　村谷忠左衞門
村本善藏

右之外足輕十三人、都合五十三人。

日夜之衞士

澤崎七左衞門　馬淵孫兵衞　上坂豐太夫　内田喜太郎　濱田鎌之助
川崎左平太　藤江八百七　小島友右衞門　櫻井徳三郎　曾川源八

懸役家老

今村安右衛門　上野半左衛門　德田太左衛門　小山忠太夫　伊藤林太夫
上野藤兵衛　長谷川平嶌門
此外徒組髮結役岸川喜左衛門・村本善藏等四人。
可憐妻子舊恩之臣等、假初に別出て、豈計ん生涯の離別となる事を。只茫然不辨事之是非。
曾聞、丈夫非無涙、敢て離別之間に不灑と。歎息數行、於此無語。
風雪烈敷、いと物冷じき夜半に、妻子・舊恩之臣等流浪之身と成、何れへ立退しにやと思ふこゝろの切なる、あはれとも又いふべからず。
文政二年詠ぜしを思ひ出ぬ。

君がため民のためとて砕く身の爲としならぬ世をやなげかん

君を思ひ、國を思ふこゝろ、月花風雨霜雪、片時茂わするゝことあたはず。今年荒歲此社稷を如何。嗚呼生民何之罪かある。悲嘆無止時。
金龍公御前へ罷出たる時、大地縫殿左衛門を以予に御意あり。世之ことわざに、千疋の鼻缺猿の中に、一疋眞猿と申事あり。千疋之鼻缺たる故に、一疋の眞猿を不具なりとして、終に殺と申譬あり、可心得との御意を蒙りたる事あり。此御意子孫に聞かせん爲、今爰に記。
此砌主馬病ありて久世家にあり。不能對面之遺恨、何れの日か盡む。

警衞之士口々に予に告る。追付名跡可被仰付歟の世評、頻に流言すと也。然所同十一日主馬より主人政守江使者田中仙右衞門を以て、今日被召出之段普爲聽申越、此段藏人江被仰付可被下。且安否茂問告越。使者を以藏人江爲申聞度、不指支哉与御用番江窺候所、不指支旨也。此後被召出候御禮申上候儀も、使者を以申越。君命之委曲、系圖帳に記を以而、爰に不記。

高山深海之君恩、何れの日か報い奉らん。予享和元年被召出、四百四十石頂戴し、耳順之初度にいたる、およそ三十六年、秩祿凡一萬六千二百石を給ふ。黄金に直して石五拾目として現米七千石餘代凡三百五十貫と成。此賜之御奉公何を致來や。嗚呼君恩之重き、群臣此意を思ふべし。

時烈寒肌に透る。主人政守慈愛を以、籰火鉢を被惠。囚之内初而寒を凌ぐ。政守の慈愛に報いんとて詠る。

埋火の深き情にしら雪の降ともしらで過にけるかな

主人政守の能節儉を守る、下著・肌著も悉く綿衣也。肩衣・袴。予囚と爲り、日三度見廻り之砌別之衣を不見。閨門隨而綿衣之旨、稱すべきの甚也。

海士がたく鹽木の中にこりもせでたゞに櫻の朽やはてなん

と昔詠しを思出でゝまた、

もしほたく小島の海士の鹽木にも朽し櫻は世になにかせん

娘應姜に遣さんとてかき置ぬ。

君がため民のためとて砕く身の骨こそ父がかたみとぞ知れ

十二月二十日夜夢に、とある社に詣でゝ神拜まんと入しを、宮守とおぼしき人の歌よまざれば入まじと制せしかば、

民草を惠むの外に事ぞなき神の心になにたがふべき

と吟じ、神前に額づきたりと見て覺ぬ。

〔横山政和覺書〕

一、寺島は藏人と稱す。御小將横目より俄に拔擢せられて、御馬廻頭と成と云。天保中に遠島の刑に處せらる。朱子學者也。此門人頗多し。樞要の地にある人に其派より出たるは、成瀨掃部當職・篠原監物精一・前田式部矩正等皆其學術を遵奉す。山崎穆齋範良も皆其派也。原賴母元善は寺島の甥也。尤之を尊信す。成瀨は晴雪と號し、退隱後迂齋と稱す。文字を議り詩を作る。此人々山崎を除く外皆事務家なり。

範良とあるは範古なるべし

十一月七日。前田齊泰夫人の病痲疹と決定す。

〔官私隨筆〕

十一月十六日

一、姫君樣當七日御麻疹御治定、御順症之事今朝申來。以清五郎恐悅申上候處、以同人御喜悅之旨被仰出。

十一月十一日。本年不作なるを以て食物を節し窮民を救助すべきことを諭す。

〔觸留之抄〕

昨年御領國作躰不十分上、當年順氣惡く不熟に而、此躰に候得者來年新穀出來迄之用米取續方無覺束、他國も同樣之由に候へ者、入津米も有之間敷、先以不容易時節、隨而米價も高貴、下々可爲困窮候。尤在方之儀者常々粥・雜炊等可致食用候得共、加樣之折別而無油斷相心得、町方之者も粥之儀者勿論、猶又此節より雜炊等を給、米穀成限食延候樣可仕、其餘穀類之品、漫に費不申樣可心懸候。且右躰之年柄候へば、身元宜者は勿論、今日可也取續候者たりとも、餘分有之者は、少々に而も成限困窮者等へ可致助力候。尤御救方等可被仰付候得共、如形御勝手御逼迫に而、思召通に者不被行屆候間、猶更右之趣厚相心得、御國中餓莩之者無之樣可見繼候。依而者是以後、萬一途中行倒罷在候者等有之を見請候はゞ、不依誰々致介抱、其者之支配人等へ申達、救遣候樣に心懸可申候。

右之趣被得其意、心得違無之樣可被申渡候。尤志奇特之者共は、取しらべ交名等可被書出候

事。

十一月

昨年御領國作躰不十分上、當年順氣惡くに付、用米取續方無覺束、依之別紙寫之通り町奉行等へ申渡候條、御家中之人々も其趣相心得、自今粥等之內存寄次第相用、米穀喰延候樣可心懸候。儉約等之儀常々とても、尤手前を而已見込候儀者有之間敷事に候得共、今年之儀者別而米價高貴等に付而、下々困窮に迫り候者を取救可申儀專要に候間、侍中一統心を合、たとひ自分之手前においては、費之かゝり候品たりとも、下々之ためにハ可相成儀者、其通り取計、困窮仕候者之可成立筋を心懸可申候。是等之處、ヶ樣之時節御奉公之一事たるべく候之間、何茂油斷有之間敷候。

一、右之通り之年柄に候所、御家中之人々等之內、高構鳥等致所持、こぬか等費候儀有之躰。不都合之儀に候間、當分飼鳥等仕候儀可爲無用候事。

但、鶏・犬等者心得も可有之候事。

一、雜穀類品々費候儀有之躰に候間、精誠相心得、馬之飼料たりとも、平年同樣に相用候儀に而者有之間敷候條、人々手前にて得与吟味可仕候。

一、一分之儀者猶更精誠遂儉約、無用之費無之樣相心得可申候。但手前之儀儉約いたし候と

て、家來抔相減候儀等者尤有之間敷候。
右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十一月十一日　長　又三郎

〔本多政和覺書〕

十一月十一日

一、當年々柄に付町・在之者猶又無油斷、頃日より雜炊等を用、穀類費不申樣心懸、困窮者へ助力致候儀厚相心得可申旨等、町奉行へも申渡、御家中へも存寄次第粥・雜炊等之内相用、其外爲構等無用之儀等申渡有之。右二通組へも可申渡旨に而、添紙面に而又三郞より來る。

十一月十一日。寺島藏人の養子主馬に祖父の名跡を襲がしむ。

〔本多政和覺書〕

十一月十一日

一、左之通各列座內膳席にて被申渡、御横目高畠右衞門誘引。

寺嶋故右門跡相續

祖父右門へ被下置候知行四百五十石之內

一、三百石　寺　嶋　主　馬

右主馬養父藏人儀不屆千萬之儀有之、御知行被召放、能州嶋之內へ蟄居被仰付候。然共御

家久敷家筋之儀、且前段思召之趣も有之に付、圭馬儀祖父右衛門爲名跡被召出、如此被下之、組外へ被加之。

〔見聞袋群斗記〕

十一月十一日、寺島藏人養子圭馬被召出、御知行三百石祖父之爲名跡被下。

〔每日帳書拔〕

十一月十一日

一、寺嶋圭馬儀祖父之跡相續、結構就被仰付候、養父藏人方へ爲知申度、御預り人本多圖書方迄以使者、無急度普爲聽申遣度旨內談之趣申聞候付、的例は無之候得共、無據儀に付今日之儀は格別に承屆置候。尤以後時々之用事は不相成段も申聞置候事。

十一月十二日。凶作に付諸郡引免代り用捨米及び變地償米の額を定む。

〔本多政和覺書〕

十一月十二日

一、當年御引高候儀、先達而より段々詮議有之、十九万七千石餘御用捨米被仰付候趣、今日御勝手方に而申渡。

但御貸米に被仰付候へば、過分之米數故米出方六ヶ敷、巳年之如き引免に被仰付候へ者、其

處は宜候得共、當年は作難にも村柄に寄皆不納之所茂有之故、左樣之所如何知。行之人々は、當年中に是非御償無之而は難相成。然處右銀等之出道六ヶ敷故、先達而御算用場より役人、遠所切手之内三十五石計御借上、跡六十五石之御算用場書替切手相渡候仕法申聞候得共、重々僉議之上、右遠所切手不殘御召上、其内に而引免代り御用捨米之事に取扱、右切手を追々御拂にいたし、其代銀を以右御召上候方へ渡候事に僉議相極、今日其趣も申渡。

右切手御召米之事十六日觸出。

〔郡方御觸〕

就作難一作引免代當御收納御用捨米高

一、一萬三千九百石	能美郡
一、二萬八千四百石	石川郡
一、一萬千六百石	河北郡
一、二萬二千百石	口郡
一、一萬八千石	奥郡
一、四萬九千石	礪波郡
外千二百石	五ヶ山等

一、二萬四千石　射水郡

一、二萬九千四百石　新川郡

〆十九萬七千六百石

一、千二百八十石　能美郡新變地御償米

一、六百十五石　石川郡古變地御償米

一、三百九十四石　同郡新變地御償米

一、七百五十石　河北郡古變地御償米

一、三百九十石　同郡新變地御償米

一、九十四石　口郡古變地御償米

一、百十四石　同郡新變地御償米

一、百九十五石　奥郡古變地御償米

一、八十七石　同郡新變地御償米

一、千三百三十一石　礪波郡古變地御償米

一、六百十八石　同郡新變地御償米

一、千七石　射水郡古變地御償米

一、千三十一石　　　　　　　　同郡新變地御償米
一、千四百二十四石　　　　　　新川郡古變地御償米
一、千五百十二石　　　　　　　同郡新變地御償米
〆一萬八百四十二石

申十一月

〔諸郡御用留〕

其許中致歸村、今般御用捨米申渡候節、此中被仰渡に依而、配當方之儀委曲申談置候通に候。此度作難に付、格別御用捨米茂被仰付候儀。乍去一村ゟ相當候而は、行屆申間敷に而可有之候得共、御領國に而は莫大之御損毛、誠に御當節過分之御引方に相成候儀に候間、村々配當之儀是迄仕來茂可有之候得共、此年柄之儀に候間、其村々和熟を以、身元宜敷者共互に堪忍いたし合、配當可致儀に候間、高持之者共ゟ厚申談候間、何分綿密之詮議有之、心服を以取治之儀專要之事に候。且又困窮人ゟ致助力見繼方等之儀、今般段々別紙深御仁惠を以御觸渡之趣、先達而申渡置候得共、今度其許歸村配當方申渡之刻、別紙御主意猶又懇に村々役人共等ゟ申示し、末々不相洩可爲致會得候。非常之年柄に付、於御上も甚御心痛被爲在、御救方等も夫々相應被仰付度御趣意に候得共、御勝手向以之外御指支、思召通には不被爲行屆、御國

民之儀は一躰に被思召候、譯而凶作之折柄はいかにも御救被仰付候儀に候得共、何分前段之通に而、御年も迭り兼候御時節之儀に候間、少に而も余分有之者は、何れも深奉恐察、貧民介抱之儀幾重にも致世話、非常之取扱可致。尤先達而以來種々仕法等を以助合之趣、夫々委曲承り、何も志之程奇特千萬に付、夫々及御達置候得共、猶又加樣之折一統格別助力有之候而、於御上如何計神妙可被思召事に候。是等之仕抹一通書面而已に而申談候儀に而は行届申間敷、別而山入邊鄙愚昧之者共江は得与致合點候樣、念に入能々可爲申聞候。萬々一心得違之族於有之は、申譯も無之奉恐入次第に候。何分其許中村肝煎等取入、萬端厚世話可在之候、以上。

申十一月廿一日

中　村　蔀

武田九郎兵衞

馬　場　右　近

石　黑　左　門

諸郡惣年寄中・年寄並中

十一月十六日。百姓に引免代り用捨米を命じたるを以て給人の收納不足高を御召米とすべきことを告ぐ。

〔觸留之抄〕

當年氣候惡敷、御領國中作躰不熟に而、村之厚薄者有之候得共、一躰格別之取劣りに相成候付、詮議之上百姓手前は引免代り御用捨米に被仰付候。右に付米穀甚拂底に而、所之用米手當方幷窮民御救方等、不容易年柄に付、重々詮議之趣有之、右百姓手前御用捨米に相當る分、御家中收納米不足に相成候得共、拂切手之表不足之儘、丸收納米高能・越之分、當十月中之平均直段に而御召米に被仰付候條、當拂殘米有之人々者、毎茂之通拂切手相調、當月晦日切買出中買ゟ相渡、夫より御算用場ゟ可指出候。代銀之儀者中勘銀早速右中買方ゟ可相渡、本勘銀之儀者追而取しらべ之上可相渡候。

一、加州米之分者飯米に可相成分に付、御召米には不被仰付候。不足米來春に至り堂形藏等に而御償渡可有之候條、飯米殘り中買ゟ相拂置候分者、切手買留人手前爲相待置、追而御渡有之候はゞ、早速買主ゟ可相渡候事。

但、本文拂切手取次中買ゟ取集、給人ゟ可指出旨申渡置候條、指出次第御用捨米高引去、殘る渡米高右切手に致付札可相渡候。勿論飯米之方ゟも、引免代り御用捨米高割合せ引去可申候付、札草案左之通。

本文米高之內、何十何石何斗何升渡方不指支事。

何の誰印

一、皆濟帳之儀、前段之御用捨米高、改作方御郡奉行より諸給人江可及案内候條、藏宿預狀之者与見合、收納米に引合ひ候はゞ、別紙草案之通調可相渡候。

一、加州米に而飯米指支、能・越米例年引米有之人々は、例年引米高之内、當月まで何程引米いたし、殘り何程引米致度旨、早速御算用場江可相達候。

一、御役料知來春に至り可相拂分者、是又其節右同様之趣を以御召上之事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

十一月十六日　　長　又三郎

十一月十八日。前田齊泰夫人の痲疹癒え酒湯を浴す。

〔官私隨筆〕

十二月六日

一、姫君様御痲疹御順症に御肥立、前月十八日御酒湯被爲引候由、此間中來候へ共、御祝は廿三日有之筈之由に付、御次へ示談之上、重而之御便之上可然と、御祝詞申上候儀見合有之處、昨日前月廿四日出到着御祝之儀申來。二番御湯・三番御湯も相濟候由也。依而今日上下に改各列座、以山森權太郎御祝詞申上候所、御喜悅之旨以同人被仰出。

十一月廿七日。小松の儒湯淺寛米粃の食法を頒つ。

〔富田氏覺書〕

米粃の食法

こぬかは毒なるものにて、之を食へば腸胃を傷め、肌膚青腫れ、甚敷は終に死に至る也。瓦盞類のすやき物を碎きて、こぬかと共に鍋にて熬れば、毒氣去る也。其を篩にて、瓦盞の碎きたるを振り、穀類を少し加へて、團子或炒粉にすべし。雜炊にまぜて可也。

粟皮を炒粉に製らへる法

ぬかを水に浸せば、褐色の氣出る也。其色の盡るまで、數回も水を換へて、後熬乾かして、一斗に大豆又は米・麥のいりたるを二合計加へて、石磨にて碾也。ぬか一斗は屑七・八合と成也。

米稃にて團子を製らへる法

藁を一分許に刻み、磨にて末にし、水にひたして、褐色の惡氣を去り、米粉抔を加へて團子にする也。藁の末一斗に、稻・麥の粉ならば五・六合、粟・黍ならば一升なるべし。

右の三件は、よく知りたる人もあれど、又曾て聞たることなさ人も猶多かれば、今版行して其傳を普くせんと欲せり。常人は故俗に安んずと古人も言たれば、好善の君子冀くは之をこ

しらへて貧者に常食させ、幸に可食と謂はざ製法を授けたまへかしと云爾。

天保七丙申十一月二十七日　　小松　湯淺寛木堂

十一月廿八日。本年造酒の禁を解き、藩より賣渡す米額を限り之を釀すを得しむ。

〔御郡典〕

當年作躰不熟に付、酒造指留置候處、指解之儀別紙之通御用番年寄中被申聞候に付、寫相達之候條、酒造人共江夫々可被申渡候。右に付兼而當場より渡置候裏印物造米高之三之一、來月十日切可被書出候。右に付而百五十五匁圖を以御米可相渡候條、渡り米之外隱造等不致樣嚴重可被申渡候。尤御米受取方等之儀、當場承合候樣是亦可被申渡候。

一、酒造道具之儀、當年渡米に應じ候外、不用之道具は各於手前綿密縮方可有之候。此上隱造等いたし候儀有之候はゞ、急度可遂僉議候。右縮方之儀尙亦被遂詮議、委曲可被申聞候。

且急速先々被相廻、從落着可被相返候、以上。

十一月廿八日　　御算用場

馬場右近殿

渡瀨七郎太夫殿

本年九月の條參照

巻目之上、御算用場奉行江

當年作躰不熟に付、酒造之儀夫々指留置候得共、願之趣有之に付、酒造之儀加越能三州江御有米之内二萬五千五百石相渡し、右石高指解之儀承届候條、酒造人江相渡石高割合方、夫々支配人江可被申談候事。

十一月

〔文化より弘化まで日記〕

十月凶作に而諸色高直。此節批屋米一升代百二十三文、小豆一升代百五十文、味噌一升代百八十文、綿銀一匁に付十二匁五分賣。右に付酒造御差留、此節何方茂賣切無之。當秋酒造御差留に付、何方茂酒差支、越後等より取寄、一升に付五百文計。十二月廿日後より、追々金澤新酒出來、一升に付三匁七分。但三の一造。

十一月晦日。頭分以上及び役懸りの平士に封書を以て政事に關する意見を上申せしむ。

是月は大盡なり

〔御家老等留〕

十一月晦日

一、此間左之趣人持以下江被申渡。

惣而御政事向之儀、兎角不被行届品茂有之、或者御家中士風等、曁御國民御撫育方抔之儀に付而も、御處置方品々可有之儀。將亦指當り當年は作体不熟に而、來秋迄下々取續方之儀、被成方に寄り飢民等も可致出來哉に候。右に付而は、衆議之上廣く被聞召度之旨被仰出候之趣有之候條、頭分以上幷平士役懸り之人々、人別に封じ物を以、存付之趣無腹藏可申上候。右封物は來月十五日迄に御次ゑ持參、竹田市三郎等を以可申上候。勿論人々役筋之儀に付而心付候品有之候はゞ、其儀も可申上候。將又格別之存寄に而も無之、御直に申上候儀如何と存候品等は、御用番迄紙面を以可申聞候事。

十一月

十一月。米價高直なるを以て下賤の食用となる物以外の菓子製造を禁ず。

〔御郡典〕

卷目之上、御算用場奉行ゑ

當年米格別之高直、所々用米指支候躰に付、穀類に而造り候下品之物、輕き物食用に相成候品物は格別、干菓子等榮耀之品一切取扱致間敷旨等、先達而申渡置候處、今以宜敷品密々取扱候躰相聞候に付、右樣之品取扱候儀堅く指留、煎餅類其外實に下賤之者共食用に整候品之分は取扱、其他は可爲無用段、當町奉行ゑ申渡候條、遠所町方等も同樣相心得、品物之儀は

尙更當町奉行承合候樣、所々町奉行等幷御郡奉行ゟ重而可被申談候事。

十　一　月

十一月。諸郡惣年寄以下金澤に在る者の料理屋等にて集會するを戒む。

〔諸郡御用留〕

今年不容易作難等に付、先頃以來諸郡惣年寄幷並役等追々出府有之、頃日は多分歸鄕も有之候得共、先日已來御用談寄合等に付而は、料理屋等ゟたより寄合候樣之儀も有之由、風評相聞え候。當年柄之儀各心得も可之有事、必左樣之儀は有之間敷与存候得共、自然不苦樣に心得候人々も有之而者、外聞實儀難相濟候間、猶更心得違無之樣、別而年若之人々曁近御郡之人々等、急度可有之心得候、已上。

申十一月　　　　　　　　　　　　　　改作方御郡奉行

諸郡惣年寄・年寄並中・新田裁許・山廻中

十二月。石川郡粟崎村藤右衛門及び河北郡向粟崎村德兵衛に扶持米を與へ御郡方年寄列の待遇とす。

〔御親翰帳ぬき書〕

天保七年十一月

一、石川郡粟崎村藤右衞門・河北郡向粟崎村德兵衞儀、前々御調達銀等過分御用立、無比類者共、且兩人共船手稼を以、他國之金銀取入候商方に而、身元薄相成候へば稼方もおとり、自然与入金銀も無數に相成申譯に而、何分聞置、可成丈御用捨も有之度儀候へ共、御用銀等割符方、外々目當に仕候者共故、其儀も相成不申。依之何とか御取扱を相願度儀に候へ共、御當節之事故其儀も相願かね候間、格別之趣を以御扶持方被下、御郡方年寄列に被仰付被下候樣、御郡奉行書付御算用場奉行添書を以指出。依之先藤右衞門等時分之例等を以、僉議之趣相伺候處、藤右衞門江御扶持五十石、德兵衞江十人扶持被下、御郡方年寄列・御銀方御用被仰付候事。

御用捨とは用銀の事に關す

十二月八日。前田齊泰の子純六郎江戸に生まる。

〔見聞袋群斗記〕

十二月八日、於江戸御本宅、卯之上刻御男子御誕生。蟇目御用伊勢求馬なり。同十四日御七夜御祝、御名純六郎と田邊左兵衞指上る。

〔官私隨筆〕

十二月十八日

一、當八日於江戸表御男子樣御出生之旨申來。各上下に改御祝詞申上候。

〔官私隨筆〕

十二月廿七日

一、今度於江戸表御出生之御男子樣、御名純六郎殿と御定被成、殿付に唱候樣にと被仰出之趣、御用番演述。御用番迄恐悅之旨申述、引請其由被申上。先例之由也。

十二月十四日。年寄奥村内膳等先に前田齊泰の與へたる諭告に對して答議す。

〔御親翰帳之内書拔〕

一、御透次第播磨守・又三郎・内膳御前江罷出度旨、以善右衞門申上、九半時過以喜市郎被召候に付罷出、先達而御政事向之儀に付以御親翰被仰出候御請左之通相調上之、退去之事。

御政事向之儀に付段々思召之趣、以御親翰被仰出候御箇條共、道理當然之儀に而、何も御尤に奉存候。夫に付猶又申合、被仰出之趣に本づき、私共存寄之儀共奉申上候。

一、御勝手向連々御難澁に付、御家中を初下々迄御救方不被爲行屆、隨而風俗不宜、下々及難儀候者共多に付、從今御政事向御世話被遊、御國中何も其程々を得候而安樂に罷在候樣被遊度旨、段々思召通難有御仁心に御座候。然處如何程思召被爲在候共、諸役人右思召通り信

御親翰は八月五日に發せられたるものなりといふ

實に相心得相勤申に無御座而者、一統御仁澤を蒙り奉り候事難成儀に御座候。左候へば御政事之根元を、諸役人其器に當り、御奉公精勤仕候樣可有御座奉存候。右諸役人を相撰精勤仕候樣に仕候儀は、私共之勤に可有御座候。然者第一私共に於て右思召通り體認仕、諸役人之善惡邪正分明に見分黜陟仕候儀肝要と奉存候。今更申上候に及不申候得共、私共不肖に而左樣之處中々及不申儀に御座候間、身分之儀は猶更相勉、御政事之上之儀も精誠相心得、往々思召通り行屆候樣仕度心底に御座候。乍恐御前よりも、私共油斷之處時々御勵し被成下候樣仕度奉存候。

一、風俗之儀、是迄毎度被仰出之趣も御座候得共、兎角化し兼申候。此處は御政事萬端行屆不申而は、如何程被仰出等御座候共、風俗立直り申儀御座有間敷と奉存候。當時之弊風品々可有御座候へ共、大要を申時者、人心輕薄不實に相成り、利欲に而已走り、廉恥之心無之と申處に可有御座候。是迄御政事之上にも不信不實儀御座候故、右に付而は下々者彌不實に相成候儀と奉存候。已後御政令之上、何分名實相違不仕樣、重々吟味不仕而は相成不申儀と奉存候。且又御政事之品數端に御座候得者、品々に付宜を得不申而者難相成儀と奉存候。將又御治國之儀は、政事と御教と兩樣相對不仕而は行屆不申事に御座候得者、御政事之儀を御僉議御座候時者、御教之道も相立不申而は、全儀とは難申樣に奉存候。太梁院樣御代、學校御

往々は行く〳〵

創業御座候得共、未御仕法も全相立不申儀に御座候間、今一片御學政之御僉議無御座而者相成申間敷と奉存候。學校之御政茂行届、人才御仕立之道も行はれ、學生之內より追々御役人にも御撰擧之處江至候へば、風俗者彌盛に可相成筋と奉存候。

一、御家中を初、下々難澁之者共御救方之儀、御貯も過分に御座候得ば、如何樣共被成方可有御座哉に候得共、當時左樣之御時節に而も無御座候。但古今共、國用富饒仕候時節者、容易に御座有間敷候。左候へば時に臨、上よりは格別散財無之共、色々取扱に而下を救可申儀と奉存候。上より御散財御座候而已に而、御家中初之御救被爲行届候に而も御座有間敷候。左候得者當時とても、取扱方に依下々迄も御仁澤之行渡り候被成方可御座有と奉存候。御家中町・在同樣と申內、御家中之難澁者別而借財多に相成、行詰り候儀第一之樣に相見え申候間、此處之御處置方無御座而は相成申間敷と奉存候。町・在之儀は、業を勵候事は薄して、只々利分を重と仕、相互に助合候儀無之故、富者益富み、貧者は益窮する體に相見え、其外色々煩敷儀共多、小役人人物之不宜者も有之樣子に而、是が爲め細民之難儀に及び候事共も有之由に御座候。右等之處、其支配人共急度僉議不仕而は相成不申儀に御座候。將又何事も年經候得者、種々と共弊も出來申內、御郡方之事は改作之御法も被爲在、近頃御修補之儀も御座候得共、猶又不行屆品も有之儀に御座候間、追々御斟酌無御座而は不相成哉と奉存

候。

一、御勝手取扱之事、御財用方而已僉議仕候而は、御政事之根本相立不申、全儀に而は無御座旨等、段々被仰出候通異論無御座候。前に相調置候通、風俗御救方之儀も、第一者一統財用之融通付不申而は、日々之儀相成不申候。此處を以て申候得者、上之財用よりは、三州之財用足り申様に仕事肝要と奉存候。左候とて、御勝手向之儀等閑に仕儀に而は無御座候。去々年已來段々僉議仕、略御符合之處江も至候儀に候得者、今更違亂仕候而は不宜儀に御座候間、追々全御符合之處詮議可仕と奉存候。無左候而者如何程御仁惠を被施候思召御座候而も、思召様に者不被行届儀と奉存候。但上之御勝手を手堅仕候儀、專ら相心得候時は、不計下之難儀をも不顧、ひたすら御德分之有之様に取計候處江も至候。左候得ば下々不心服に相成、却而御勝手御取直之道も相立申間敷候間、先三州人民財用之足り候様に仕度事に御座候。左候へば下より感化仕、自らに御勝手御取直し之處江も可至儀と奉存候。右等之處大學にも重々擧被置候通御座候。然者御財用之儀者、本を主とし末を取失ひ不申様、相心得不申而者相濟不申儀と奉存候。去々年已來之僉議方、尤此趣意に而御座候へ共、御勝手御符合之處を主と仕候よりして、不計品に寄本末轉倒仕候儀も有之哉と、不行届仕合奉存候。

右之通何茂申合、御勝手向之御箇條別存無御座候に付、人別には不申上、御政事向御處置可

有御座品之儀者、追々可奉伺と奉存候。右之趣丹後守了簡も相尋候處、異存無御座旨申聞候、以上。

十二月十四日　　　　　　　　　　内膳等五人

十二月十五日。大聖寺侯前田利之卒去の報金澤に達す。

卒去は十日
發喪は十五日

〔諸事要用雜記〕

十二月十四日

一、備後守樣御病氣不輕御症に而、爲御見廻御大小將御使園田一兵衞、一昨十二日罷越、今朝罷歸候事。

〔本多政和覺書〕

十二月十六日

一、備後守樣御卒去之段早打御使用人東野千助罷越に付、先遠慮之儀町奉行等江申渡候。右に付明日相公樣御機嫌相伺之旨等、月番より之廻狀十五日之日附に而、曉八半時過丹州より來る。令下書作州へ遣。

一、出席之上松之間二之間に而、丹州初若老中迄一列、古屋喜一郎相招、備後守樣御卒去に付御機嫌奉伺旨、丹州に申述候處、重而同人罷出、何之御指障も不被爲在段御意之趣相述。

一、右御卒去に付、普請等十五日より三日遠慮之儀觸月番被渡、宅へ遣、早速組へ觸る。

十二月廿六日。御供人の携行する具足認方の制を定む。

〔每日帳書狀〕

十二月廿六日

一、御省略中御供人鑓數等減少之儀、文政十一年申渡候節、具足も組頭以下荷具足櫃、平士は荷物認与申渡置候處、不辨利之筋等有之様子に付、是以後當分組頭以下簑組に而も荷に而も勝手次第、平士は荷具足櫃幷荷物認可爲勝手次第旨申渡候由、御道中方より演述之事。

十二月。近習の士その家族に疱瘡に罹る者ある時は登城を遠慮せしむ。

〔諸事要用雜記〕

十二月

此表御子様方御疱瘡等未被爲濟候に付、御近習之人疱瘡病人有之節、三番湯懸候迄は御殿へ罷出候儀遠慮可仕候。

一、痲疹・水痘有之候はゞ、湯三度相濟候迄、御子様方御目通ゟ罷出候儀相扣可申候。

但、痲疹・水痘病人有之、御目通指扣候人々、自然御人少に而指支候向は、別火同様にいたし罷出候儀は御指支無之旨、被仰出候段口達に而申聞有之候事。

十二月。飢餓の爲死する者多し。

〔珍事留書〕

一、十二月、此頃は町方・在方共難澁者、貧人御助小屋願之者莫大に付、大躰小屋願御指留に而、町・在とも其居所において御救被下置候事。且又町・在とも飢に疲死する者多有之、誠以哀至極成死人道中にも折々有之。眼前に氣毒成躰多く有之也。

一、萬事高直成故諸商賣無之由。

一、當大とし諸方不指引至極也由。

一、世の中ふけいきなり。人皆來年の豐作を待のみ。申年目出度をはりぬ。

天保八年

正月朔日。前田齊泰金澤城に年頭の賀を受く。

〔諸事要用雜記〕

正月元日

一、四つ六歩御表ゟ御出、於御小書院諸大夫幷年寄中・御家老・若年寄御禮相濟、於御大廣間人持・頭分一統御禮。被爲入候節御居間書院四之間に御着座、鶴之庖丁御覽被遊、相濟四つ九

歩御入被遊候事。

〔御家老等留〕

正月元日

一、五つ時各登城、六半時迄出。

一、四半時過御禮人宜段申上、各御小書院江出御禮申上候。相濟、大廣間江御出、人持・頭分一統御禮被爲請、御入。

一、重而九半時頃宜段申上、御大廣間に御出、御大小將等被爲請、相濟。

一、御熨斗頂戴被仰候段、月番より主附將監に演述有之。

一、近例之通御作法書に而、鶴之御吸物御下不被下事に相成居候得共、御內々に而被下候に付、御膳奉行松平織人頂戴被仰付候旨、二ノ間列座に而申聞、各御熨斗・御吸物・御取肴するめ頂戴、八つ時過相濟退出。

一、直に御廣式江罷出、山森九兵衛を以方々樣に年始御祝詞申上候事。

正月十三日。窮民救濟の爲諸士の銀子献納を請ひしを許す。

〔御用留抄〕

私共舊臘銀子少々宛指上、飢民御救方之內江御指加御座候樣奉願、則御達御聽御座候處、志

奇特に被思召候間爲差上可申旨被仰出候段被仰渡、難有仕合奉存候。依而御請上之申候、以上。

正月十三日　　　　　　　　　　　河内山橋三郎等四十三人

津田平左衛門様

凶作に付窮民救銀同組一統示談之上、銀五匁宛差出候に付右之通也。同組之内二匁五分差出候者も有之。

正月十八日。公子女の名に牴觸する者の改名方に就いて告ぐ。

〔御郡典〕

御子様方御名文字、一字に而も同字同唱有之候得ば、多分改名可仕儀之様心得候躰に候得共、御先代様より被仰出置候儀も有之、今般詮議之趣相伺候處、御上は御構無之候間、以來相改に不及候。併御名与全く同様之名、或は文字違候而も唱方紛敷分等は、改名仕可然候事。

別紙御用番播磨守殿御渡、頭・支配人江無急度可申談旨被仰聞、則御渡之覺書寫一通指進候條、御承知被成、御同役・御同席御傳達、御組等之内裁許有之面々江も、御申談可被成候。御順達落着より御返可被成候、以上。

正月十八日　　　　　　　　　　　池田保左衛門

正月廿七日。前田齊泰、老臣等に窮民救助取續方を懈らざるべきこと等を議せしむ。

〔本多政和覺書〕

正月廿七日

一、窮民此末爲取續方之儀、猶更無油斷樣僉議之事。

但、郡方所々に寄、身元相應之者共より困窮人介抱方仕法いたし爲取續候向も有之、追々達聽に奇特之事に候。右仕法抔無之ヶ所之儀は、一入入念に僉議いたし候樣可被申渡候事。

一、町・在〻申渡置候用銀、當年上納分令用捨、下方に而困窮者を爲取救方僉議之事。

一、人持之内手前々々にて救方いたし候者有之樣子粗相聞え候間、組頭より内分相尋可被申聞候。頭分并平士も同樣頭・支配人より内分相尋、申聞候樣被申渡可然哉之事。

一、諸事省略方相緩ぎ不申樣、猶更此節申渡方有之可然哉之事。

一、諸士之内風儀不正者有之儀は、先づ勝手難澁より起り候樣に相聞え候。當時何とか取扱遣度事に候條、僉議方可被申聞候事。

一、惣而定書之儀は多分往古之儘に候へ共、當時に而は相違之ヶ條も多く可有之哉と存候。重々穿鑿之上相改候はゞ可然、猶更可被及僉議に候之事。

一、郡方は出役人多き儀は下々之ため不宜様、郡奉行共心得候様子、右者費を厭候而已之事に候哉僉議之事。

一、小百姓共借財多故成立兼候由相聞え候。成立之ため借財指引方延引之僉議之事。

一、盗賊改方手先足輕幷町附足輕共、惡習にて種々姦曲を相働き、下々迷惑不少躰に相聞え候、取縮方僉議之事。

二月朔日。前田齊泰の子利義着袴の儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

二月朔日

一、今日朞五郎殿御着袴御祝有之、御鈴通御出、御居間御下段に而御禮、御太刀馬代、御用部屋伺公、引役配膳役。夫より御のし三方配膳役御前ゟ上之。朞五郎殿御禮後、御左之方御上段御敷居一疊目へ御着座、御のし被進、相濟御入被遊候。右御出之節、御奥取次御先立仕候。

右御都合能夫々相濟候事。

二月三日。老臣等學校助教を召して學政修補に關する意見を徴す。

〔渡邊兵太夫手記〕

一、天保八丁酉二月三日學校方御席江助教一統御呼立、播磨守殿・內膳殿御列座、御學政之儀遂僉議御達可申旨被仰聞、左之通御書取御渡。

學校御草創以來御仕法全備無之、御教導方人材御仕立之道不行届被思召。依之今般被仰出之趣有之候條、御修補之儀各存寄之程申合可被申聞候。是迄師長被仰付候人々、身分御取扱方も不行屆躰に候。此儀は御詮議之品も有之候條、當時之姿に不相泥、御學政方之儀精誠遂詮議可被申聞候。且又武學校之儀も當時之處不行屆哉に候。此儀も唐山或日本に而も諸國之樣子等相考、存寄之趣候はゞ可被申聞候事。

二月三日

此節助教　中西多四郎　大嶋清太　渡邊兵太夫

下村宗兵衞　新井周藏　陸原大次郎

木下仁平

大嶋希軒も御呼立之所當病に付不罷出。依而御書取之趣多四郎等より可致演述旨被仰聞、其段傳達之由。

當時學校にては助教以上を缺けるなり

二月八日。米穀等を藩外に密輸出したるものを訴出づるものゝ賞賜に關して令す。

〔郡方御觸〕

他國・他領江致洩米候儀見咎、斷出候者江當一作代銀半高可相渡旨、去八月一統相觸置候得共、猶又詮議之上、米幷食用之品は當一作半高、是迄之通見咎人江相渡、殘り半高所方江相渡候條、被得其意、夫々不指支樣可被申渡候、以上。

二月八日　　御算用場

岡田喜兵衞殿

馬場右近殿

二月十日。今年以後上納すべき町・在の用銀を用捨し特に窮民救助の爲に力を致すべきを命ず。

〔本多政和覺書〕

二月十日

一、去年より五ケ年中三州町・在江被仰付候御用銀、當年より末四ケ年分御用捨被仰付候旨、

今日於御勝手方夫々被申渡。

但、去年凶作に付下々困窮之者共、其以來町・在身元宜者より救方致候處、御用銀被仰付置候ては十分に救得申間敷、御上にも這御時節御救方も不被行屆に付、右御用銀御用捨被仰付、下々救方之儀、所々において身元宜者に相任爲救候はゞ可然と之事に而右之通。

〔郡方御觸〕

御勝手連々御難澁之上、去る巳年違作御損失之段、彌增御指支に付、御借財御返辨方御仕法をも被仰付、依而者打續候儀に而御忍難被成候得共、此末御勝手御取直し之爲不被得止事、去年より五ヶ年之間三州町・在江御用銀被仰付候處、去年より割合之通夫々指上、奇特之儀御喜悅に被思召候。然處去年作躰又々以之外惡敷、大分之御用捨米を以被仰付候儀、一統承知たるべく候。夫に付而は窮民御救方等も別而不被行屆候處、町・在ともに相勵救合候故、先只今迄取續來候而、一統之儀御感被思召候。此末尙又互に助合爲取續候儀、御用銀をも被仰付候者行屆兼申に而可有之候。か樣之折柄別而御運方必至与御指支候得共、下々難儀之躰被聞召、御心痛被成候に付、此末四ヶ年に可指上御用銀全御用捨被成候間、此上猶精誠に相心得、困窮之者を爲取續可申旨被仰出候條、御趣意通り能々被申諭、身元相應之者共等に打任、其所々において心力を盡し相勵可成丈助合、貧窮之者飢餓に迫り、產業に離不申樣重々厚可致世

話旨、念頃に可被申渡候事。

丁酉二月

二月十五日。石川郡鶴來に火災あり。

〔丙申救荒錄〕

誠に此時節の放火は可恐事なれば、諸人恐れをなすも理りにぞ。然るに當酉の二月十五日鶴來百八十軒餘燒失せり。又いたむべき事ならずや、是も放火ならんと沙汰せしなれども、さにはあらざりし由なり。此鶴來は山民交易の地にて、富るものも多くありしといふ、依之貯米等も多く燒亡したると聞けり。此節には尤をしき事なり。

二月十六日。前田齊泰、望遠鏡・顯微鏡を製したる松田東英に賞賜す。

〔成瀬正敦日記〕

二月十六日

一、寺西藏人手醫師松田東英、細工にいたし候望遠鏡・顯微鏡、遠藤數馬より入御覽、御留に相成候付、東英に白銀七枚・染物二反御内々を以被下候付、近日數馬ゟ相渡候筈。

二月十七日。前田齊泰將に參覲せんとするを以て留守中政務の心得を老

臣等に諭す。

〔本多政和覺書〕

二月十七日

一、余等御用之間へ被召候旨に付、作州等四人罷出候處、左之御親翰之趣荒増御意に而被渡下。

領國中春來もさして餓死に及び候者有之程之聞も無之候へ共、猶此末麥作之様子にもより、新穀出來迄之取續方甚懸念に存候。追付發途にも相成候間、留守中猶更重々相心得られ、僉議可被致候。且又家中之儀も難澁之上、諸色高貴之躰に候へば、何亷指支可申候條、成立方無手拔遂僉議可被申候。暨惣様政事向之儀に付、先達而申出置候筋も、無油斷被致僉議候様にと存候、惣而是迄時勢等に而不行屆品も、加様之時節は被行易き様に存候條、此時を失不申様各被相勵、取仕切僉議有之可然候。今年は格別之年柄故、旁此段わけて申聞おき候條、精誠被相心得可被申候事。

二月十七日。改作奉行・郡奉行を領内に派遣し荒政を行はしむ。

〔見聞袋群斗記〕

二月十七日改作奉行・郡奉行、加賀の小松、能登の田鶴濱・宇出津、越中の杉木新町・小杉・岩

瀬・三日市七ヶ所にやり、救荒の政を布しむ。御郡奉行へ被仰出には、歳凶荒を以て分遣す。人民の死生に任じ、心力を盡し飢餓せしむる勿れ。凡そ事の大小となく、便宜に隨ひ裁決し淹滯ある勿れ。救荒の政遲緩して事に及ばさらしむ勿れ。仁恩をして遠近厚薄の異同あらしむる勿れ。所部を巡視して民の窮苦を問ふに懈る勿れ、吏民を督察して黜陟賞罰を誤る勿れ。盜賊を滋蔓し人心を動搖せしむる勿れ、委積ある者を諭し糶を閉るの奸あらしむる勿れ。流民を封內に納るゝ勿れ。流民の餓者を救恤し道路に斃れしむる勿れ。百生をして鄉土に安んぜしめ、流民とならしむる勿れ。國用の給せざるに至るを顧慮し、賑恤に吝に委任の重きに負く勿れと、悉く御親敎有るなり。

〔御郡典〕

石川河北兩郡根役所

内藤十兵衛　馬場右近

能美郡小松

武田九郎兵衛　渡瀨七郎太夫

口郡田鶴濱

岡田喜兵衛　槻尾甚七郎

奥郡字出津
篠原文次郎　　渡邊新藏
礪波郡杉木新町
山口常三郎　　永原虎一郎
射水郡小杉新町
崎田達之助　　荻原勘太夫
新川郡東岩瀬
山口新左衞門　　廣瀨順九郎

去年不作に付米穀乏敷、御領國一統及難儀、當年秋成迄之取續方、御郡奉行等何歟格別取捌之筋も可有之處、御郡支配人々當時之姿に而は行届兼可申に付、詮議之趣有之、年柄に付當分別紙書立之通、一郡兩人主附出役被仰付候。是迄之所は事立候品、根役所に而取捌有之様子に候得共、當分事立候品たりとも主附々々に而取計可申趣。御用番又は御算用場江可相達品之儀は、是迄之通相心得候様可被申談候事。

丁酉二月

二月十八日。前田齊泰の子利義の痲疹輕快するを以て酒湯に浴す。

〔諸事要用雑記〕

二月十八日

一、基五郎殿御麻疹之處御順快、今日御酒湯之事。

二月十九日。大坂に於いて大塩平八郎の亂に際し加賀藩邸の人數を出動せしむ。

〔大坂表放火一件〕

二月十九日大坂表放火一件廿五日到着

昨十九日朝五つ半時頃より、天滿與力組屋敷より出火之由に付、火元見指遣候所、一通之出火に而は無御座、子細茂相知れ不申候へ共、町御奉行跡部山城守殿組與力大塩平八郎と申者、當時隱居之由重立、自分家内一統を致打捨、屋敷燒拂、平八郎を初五・六人白裝束に而、人々拔身之鎗を携、天照大神宮と記候幅八・九尺計之大旗を押立、河内邊百姓大凡五百人計大筒火矢を以致放火候由風說仕候段申聞候。放火に而燒失之ヶ所は、東西與力組屋敷・御宮天滿天神社を初、東天滿之鄕不殘致放火、夫より天神橋を切落、船場之鄕に渡り、北濱中橋筋より南は安出町迄船場之鄕三歩計致放火、上町者東町御奉行役所邊より西町御奉行御役所邊迄上町之鄕四歩餘致燒失、今廿日晝八つ時頃火鎮り、未實正之所相知れ不申候へども、格別變事

に付風說等承り候儀迄申上候。右に付同日七つ時頃松平遠江守殿留守居役より別紙之通申來り候。御步横目伊藤左源太等申談、御城代幷兩御奉行へ相向御指圖請可申樣申談、卽刻御人數指遣候所、本町橋爪に而西町御奉行堀伊賀守殿に御出逢申候所、何れ江被相向候哉御尋候付、御廻文に而人數指出候段申上候所、伊賀守殿御直、御城代之儀は拙者より御達申候間、早速瓦町之口江相向消留有之候樣、尤潰家之儀可爲勝手次第旨御申談候付、直樣罷越手懸け、家二・三軒計潰し相働消留、御人數引揚、御屋敷邊無覺束、御屋敷迄退候所、火勢追々强風吹替り、裏町より火廻り、引揚候處又候右ヶ所燒失仕候段、伊藤左源太等申聞候。且類燒之人々御館入與力牧野平左衞門・服部彌右衞門・八田軍平・由比萬之助・西田靑太夫・鴻池善右衞門・同他次郎・同庄兵衞・米屋鐵五郎曁同人手代宇助・淸兵衞燒失仕候。右に付爲見廻兵粮等可被下候へども、右樣之變事故風評取々に而、諸家藏屋敷初大坂市中家內取仕抹而已、御屋敷迚も御上火之儀、御道具等取仕抹申付候儀故、先當座之取計を以、酒肴迄善右衞門初類燒之者共七人江爲見廻相送申候。且又右徒黨者共兩人討取、大筒も取揚候段同夕七つ時其町中觸渡有之、追々被召捕候由承申候。右風說与承り候儀に付此段御達申上候。右に付入用等之儀者追々御達申候、以上。

二月二十日　　　　　　　　　　　　　　　　高田彌右衞門

御算用場

御歩横目　伊藤左源太
御算用者　近藤新左衛門
同　芝山貞之進
留書足輕　一人
濱役足輕　二人
高田彌右衛門手替足輕一人
仲仕小頭等四十人

右指出候人數如此御座候、以上。

二月十九日

高田彌右衛門より御達 廿六日到着

當十九日大坂表變事、徒黨之人有之放火之様有之、及鎮火旨等御達申上候處、又候同廿日夕方上町鄕燒出候付、東町御奉行跡部山城守殿より使者を以、御人數御加勢幷飛道具等爲持御指出候様、野々村治平を以御賴に御座候。依而御歩横目菅野小左衛門、篁筒番近藤新左衛門、買上方芝山貞之進、留書足輕兩人、濱役足輕三人、仲仕小頭等三人、蔭聞兩人、仲仕三十人

召連れ、暮六つ半時出役申渡候。跡部殿御役所へ相詰候所、御城江御出被成、與力より御指圖可有之旨、用人野々村治平申聞候。御門前に相扣罷在候所、山城守殿從御城御下り、御門前に而御直々小左衛門等江御會釋有之候。早速御加勢誠以忝存候。此段宜与有之。見聞之通り火及鎮火候得共、徒黨人之者ども何与歟仕懸候躰に付、御人數等御賴申候。暫門前警固可有之旨被仰、右御人數を以相堅罷在候所、夜も明候に付引取可申哉与小左衛門御達申上候得共、今暫御用有之候間御間之內罷上り候樣與力中申聞に付、御賄被下、一統兵粮給候旨申答候之所、左樣候はゞ御勝手に御引揚被成候段申聞候。外之御人數も同樣に五つ時過引取、御屋敷御門內江被入候所、跡より淺田新兵衛を以徒黨人又々仕懸候躰追々及注進候間、乍御苦勞御押返被成候樣御賴申上度旨、山城守殿被申聞候。是より諸家樣江罷越候段新兵衛申聞候。其儘小左衛門等引返申候。跡部殿方樣子相尋候所、山城守殿等甲冑を帶し、其上に火事裝束被成、鐵炮には玉込、尤火繩、鎗・長刀等拔身、諸家御方御人數も弓・鐵炮等具足櫃爲持有之候之躰、御門外には御城代御堅めに御座候。

二月廿一日　　高田彌右衛門

本多播磨守殿等

二月二十日。諸郡に夫食の爲貸米を行ふ。

〔尙志軒雜錄拔書〕

一、天保八年酉二月廿日諸郡へ夫食御貸米被仰付候事。

一、二千二百五十石　三百七十八貫目御銀　能美郡

一、三千百五十石　千百二貫五百目御銀　石川郡

一、二千三百五十石　二百六十二貫五百目御銀　河北郡

一、三千四百石　七百八十貫目御銀渡　口郡

一、二千九百石　二百四十七貫五百目御銀　奥郡

一、五千八百五十石内三百石五ケ山分　八百九十二貫五百目同　礪波郡

一、三千九百石　六百貫目御銀　射水郡

一、五千二百石　五百二十五貫目御銀　新川郡

右二口之内七百五十石は去年取扱米之分

米〆二萬九千石、銀〆四千七百八十八貫目、但御印紙なり。

二月二十日。村方の窮民を保護して城下に出でしむるなかるべきこと等を諭す。

〔御郡典〕

無泥の次脱字あるべし

御郡村々困窮人取救方之儀は、去冬以來厚遂詮議、御救米等被仰付、且於村々も身元相應之者共より、種々取救置候儀に候。其上先頃以來共許中廻村介抱方等も申談有之、村々役人共より御請書も取立置有之候之處、村に依り必至与指迫り候者も有之躰相聞候。剰頃日御城下江御郡方之貧民罷出、御助小屋江倒れ込、或は町家軒下等に打臥罷在候者共不少躰、甚不相當儀に候。是等之儀村々役人介抱方等勢子不行屆、等閑故之儀与相聞候。若村役人之内心得違いたし、御救米割符方不正之儀も無之哉。自然右樣之族有之候而は、沙汰之限不輕儀に候。去秋以來度々被仰渡之趣も有之、其時々其元中江入念申渡置候通に而、於拙者共も申譯も無之儀、第一其元中も申諭し方不行屆儀に候。是等之所得与心を附穿鑿有之、其樣子無泥可有之候。且非人頭共江申渡、右御城下江罷出居候貧民共住所等爲聞糺、手附江引渡、其村々江爲送屆候條、得其意、尙更其村々切に而、いかにも介抱方親切に取扱、以來御城下等江罷出不申樣、縮方無油斷可相心得候。將又他國之者多御郡方江入込居候躰粗相聞え、右樣之儀有之候而は、村々困窮之者共取扱方之指障りにも可相成に付、御領內江入込候他國者は、御關外江送出候樣、御用番より被仰渡も有之候條、他國者与承り候はゞ、廻り藤內江及案內、送出候樣可申談候。猶更藤內頭共江も夫々申渡候條、可被得其意候。右等之趣村々役人共江不相洩樣、如何にも入念可申渡候、以上。

酉二月廿日

諸郡惣年寄中・年寄並中

武田九郎兵衛
渡瀬七郎太夫

二月廿三日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

二月二十三日。臨學校。

二月廿四日。前田齊泰、御目見以上の諸士に藩政の得失に關する封事を上るべきことを命ず。

〔成瀨正敦日記〕

二月二十七日

一、左之覺書此間御用番より竹田氏へ御渡、二十九日御近習頭古屋喜市郎へ申談置候事。

惣而御政事向之儀不被行屆品共可有之、或は御家中士風等曁御國民御撫育方抔之儀に付而も、御處置方品々可有之、將又差當り去年作躰不熟に而、當秋迄下々取續方之儀、被成方に寄り飢民等も可致出來哉に付、衆議を廣く被聞召度旨、先達被仰出之趣有之、頭分以上平士役懸り之人々江夫々申談候。猶又今般役儀不相勤平士および諸小頭等、都而御目見以上之人

此間は二月廿四日

々、人別に封物を以存付之趣無腹藏可申上候。最早御發駕に御間も無之候間、右封物は來三月中迄に、平士以上は御次へ持參、成瀬主稅江相達可上之候。諸小頭以下は其頭・支配人江封物之儘相達、頭等より主稅江相達可上之候。江戸御供人等都而在江戸之人々は、於彼地竹田市三郎等內江相達可申上候。御直に申上候儀如何与存候品等は、同樣御用番まで可申聞候。

本文は頭分以上の士に對するものなるべし

二月廿六日。前田齊泰先に政事に關し進言したる諸士を嘉賞す。

〔成瀬正敦日記〕

二月二十六日

一、別紙御用番被相渡、御次向去年申談置候人々江可申談旨被仰聞候付、御近習頭多賀へ申談。

御政事向等之儀、先達而御尋有之候所、心付之趣申聞候人々茂有之、御喜悅被思召候。此段可申聞旨被仰出候。以後も猶又心付之儀無泥可申上候。此段茂可申渡旨被仰出候事。

二　月

二月廿七日。前田齊泰金澤を發して參覲の途に上る。

〔本多政和覺書〕

二月廿七日

一、今日御發駕五時御供揃、諸役人揃六半時に付、服紗上下に而五時過出る。但坂下御門邊に而五つ打程。月番初何茂出被居、遅參之段相達。

一、四時過御居間書院江被召候間、廻り候樣にと之事に付、廊下迄罷越居候處、無程御出、丹州一切被出、但是迄右之次に被出候へ共、當時御用向相談も有之、日々出席之事故相伺、當春より如斯。畢而播磨守・美作守・又三郎・內膳罷出候處、今日は發途天氣相も宜と御意。御意之通今日は天氣相も宜、益御機嫌能被遊御發駕恐悅奉存候旨、余申上候處、留守中政事向無油斷と御意。播磨守・美作守城方之儀も無油斷と御意に付、御意之趣奉畏候旨申上候處、何茂無事と御意。御懇之蒙御意難有仕合奉存候旨申上退去。畢而內匠・靭負一切、御家老・若年寄中・睡鷗一切罷出候事。

一、御供廻り被仰出有之節申聞有之候樣、坊主を以御横目江申入置候處、被仰出候旨御横目より案內有之に付、御式臺へ罷出る。御廣間等伺公之人々罷出候時一度挨拶。先階上に罷在、御供宜旨申上候由御横目申聞候上、そろ〳〵階下江下る。但段の方上内より左之方。四半時過御發駕、各罷出候處に而御膝被爲附、無事と御意。益御機嫌能被遊御發駕恐悅奉存候旨、丹州被申上、御意之御請無之に付、蒙御意難有仕合奉存候旨申上。

〔溫敬公記史料〕

二月二十七日、駕發金澤。三月十日抵于江戶。扈從山崎庄兵衛。

二月廿七日。老臣等の執筆の任に在る者の濫に外間と交際すべからざることを戒む。

〔成瀬正敦日記〕

二月二十七日

左之覺書又三郎殿被相渡、定番頭より寄々申談候樣申渡候。御次之儀は付合も無之筈に候へ共、右之趣申渡置候而宜向へは申談可置旨被仰聞候事。

拙者共席相勤候執筆、曁御家老中手先相勤候執筆共之儀は、重被仰出も有之、親戚等之外は容易に付合等も不相成儀に候處、近年漫相成候付、今般以後之儀嚴重に申渡候。諸役人中等之内にも、御用內談抔と有之候而、咄合等に呼候人々も有之躰に候。右に付寬政六年被仰出之趣、一統申談置候通に候間、向後急度心得有之候樣、各より寄々可有傳達候。尤音物等之儀も無用之段、不及申儀候事。

〔御家老方等〕

四月四日

一、今度執筆江申渡候趣左之通。

一、其方中重き御用被仰付置候儀に候得者、他人は不及申、親戚に而も身近き人々之外はむ

ざと出合申間敷。曁御家老中・若年寄中之外は、呼候而も相斷罷越申間敷。將又音物等之儀も御家老中・若年寄中並身近き親戚之外は、受用有間敷候。誓詞之御ヶ條にも有之候處漸々相緩、付合之向等多相成候躰に而、何ぞに差障不可然儀に候。且又其方中之心得より起候樣に而も有之間敷、古役之人々等より成來候故、深心付も無之哉と存候。先以重き御用被仰付置、誓詞にも有之儀に候處、ヶ樣之次第は甚不宜儀に候。以後はひしと相止、誓詞御前書通無違失相守可申候。尤諸役人中等江も被申談置候。何とか申事有之候とも、無泥相斷可申候。將又無據趣有之付合申度節等は、前廉拙者共江內々申聞、承屆有之上付合可申、諸役人中御用內談抔と有之候而も、以後は罷越候儀等無用に候。右之趣相達御聽申談候間、急度相心得可申事。

酉　三　月

二月。米價大に騰貴す。

〔文化より弘化まで日記〕

天保八年正月四日より批屋米一升代百二十八銅。

二月批屋一升百七十二文、酒一升代三百五十一文。

二月。食用に代ふる摺糠・粉糠の取集高屆出の件を告ぐ。

〔御郡典〕

去年非常之凶作に付、食用方貧富に不拘可致雜食旨、度々申渡置候內、先日譯而申談候は、草茅曁摺糠之儀、於組々夫々取調理可申旨、一統江申談置候通に候。尤各無油斷、是等之儀は詮議可有之儀に候得共、猶亦下々迄厚く心得不申而は難相成時節に候。仍而右摺糠組々にて而取集高共、時々拙者共江可相達候。將又粉糠之儀も右同樣之儀に候間、折角才覺を以取集可申、此儀も其員數時々可申聞、右斷之上可申談儀も可有之候。右之趣一統不相洩樣、綿密詮議有之樣可相心得候、以上。

酉　二　月　　　　　　　　　　岡田喜兵衛

　　　　　　　　　　　　　　　矢部順平

諸郡惣年寄中・年寄並中

三月八日。藩の財政整理の爲御勝手方に於いて更に計畫するの必要あることを告ぐ。

〔成瀨正敎日記〕

三月八日

一、今日御勝手方へ御用有之候間、四つ時過越後屋敷江可罷出旨、昨日小紙到來に付、則罷

出候。左之覺書御勝手方於列座、主附播磨守殿御渡之事。
御勝手向御運方連々御逼迫に付、地・他國御借財御仕法被仰付、猶又御省略之儀可有詮議旨等、去春夫々申渡置候通に候。然處去年御領國作躰以之外不熟、過分之御用捨米被仰付、且米價も高貴に付窮民御取救等、彼是莫大之御入用、地盤御難澁之上打續候而之御物入に付、彌以御逼迫至極に被及候。御借財御仕法被仰付候上は、御調達も難被仰付儀故、不年非常凶作等有之節は、定成御入用方を被打欠、御凌被成候より外無之旨、去春申渡置候通に候得ば、何与歟格別之御取扱無之而は難叶儀故、重而詮議之品も可有之候。夫に付御省略之儀も、近年段々相極り候通、彌堅不相弛樣心得候儀は勿論、此上去春申渡置候趣を以、猶又無油斷遂詮議、且又年柄に付一作御省略之品も可有之候間、精誠遂詮議、心付之儀は無泥可被申聞候。將又御調達之儀前文之通に候得共、格別之御指支に付而は、當分御辨之爲め取計之筋も可有之候間、此段も可有承知候事。

丁酉三月

三月十日。前田齊泰江戸に着す。

〔成瀬正敦日記〕

三月十八日

一、四つ時過左之紙面、當十日立足輕早飛脚今日到着、傳封之由に而割場より差越。

一筆致啓上候。相公樣長途之御旅行無御恙、御日圖之通、今日益御機嫌能御着府被遊、恐悦之至御同然奉存候。將又彌御堅固被成御達、珍重存候。隨而私共無異儀御供致到着候。右得御意度如斯御座候、恐惶謹言。

三月十日

三月十日。御家中主人持の外長屋を借りて住居する者の難澁は貸主に於いて救助すべきことを諭す。

〔成瀬正敦日記〕

三月十日

一、左之通觸物到來、御用番へ當座之受取遣す。

別紙之通定番頭江申渡候付、相越之候條、被得其意、御近習頭中江も可被申談候、以上。

三月十日　　奥村内膳

成瀬主稅殿

定番頭江

去年以來米價高貴に付、輕き者共一統及難儀候躰。然處町方等之者は、其支配人等より救方

可有之候得共、御家中主人持之外、長屋借罷在候者之內難澁之者共は、其貸主より救方無之而は不相濟儀に候。去年救方之儀に付、段々申渡置候趣も有之、人々油斷も有之間敷候得共、長屋借り之者共之儀は、貸主より救遣し不申而は、何方よりも取救不申儀に候間、猶更入念に相心得、取救可申候。尤町方より人別迯り不申者は、町方之支配に候條、其段も可有承知候。右之趣夫々可被申談候事。

三　月

三月十三日。德川家齊使者を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。

〔見聞袋群斗記〕

三月十三日。上使老中松平和泉守殿を以て御勞有之、御登城等御先格之通なり。

三月十五日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。

〔成瀨正敦日記〕

三月二十三日

一、□月□日出候、御奉書到來之恐悅狀、裏書に而到來。

一筆啓上候。然ば去十三日以上使御懇之被爲蒙上意、昨十四日依御奉書、今十五日御登城、御參勤之御禮御首尾克被仰上、恐悅御同然之至奉存候。右之趣得御意度如斯御座候、恐惶謹

言。

三月十五日　　　　坂　井　等

成　瀨　主　稅様

〔溫敬公記史料〕

三月十五日。登城謁將軍於御座之間謝之。横山山城守・山崎庄兵衞謁將軍。

〔續德川實紀〕

三月十五日、月次の賀例のごとし。松平加賀守參覲す。

三月十六日。金澤公儀町より火を失す。

〔成瀨正敦日記〕

三月十六日

一、今曉八つ半時過、公儀町筋出火、潰家共都合百軒餘類燒、朝六半時過鎭火。右に付大火之儀、御廣式へ伺御機嫌可罷出哉与存候へ共、痔疾不出來、其上格別御近火に而も無之故不罷出候事。

〔御家老方等〕

一、三月十六日曉八半時頃帶刀町油屋庄兵衞家より出火、軒數左之通届。

八十八軒
外六軒潰家　　四軒半潰
一つ町内番小屋

三月廿二日。財力ある者は他國より米穀を買入れ其の額を屆出づべきことを命ず。

〔御郡典〕

他國米等買入方等之儀に付、別紙寫之通可申渡哉之旨、御勝手方年寄中ゟ相達候處、一統ゟ可申渡旨御申聞候條、被得其意、夫々不相洩樣急速可被申渡候、以上。

三月廿二日　　　　御算用場

岡田喜兵衞殿
槻尾甚七郎殿

去年非常之凶作に而、御領國用米取續方無覺束に付、他國米買入之儀遂詮議置候得共、いまだ買入之員數不相知分も有之、自然此末無數に候得ば、取續方手薄に付、尙亦買入之儀可遂詮議之處、一統承知之通御勝手向御逼迫至極之上、去年來之御損毛、且御救方等莫大之儀に付、御運方必至与指支、右買入方ゟ指當り金子相渡候儀指支候。仍而各支配所船持等相應之

貯有之者、格別之御時節を存付、米弁に雜穀等何成共食用に相成候品々、不依多少に人々力限り他國より買入候樣取扱可有之、買留次第當場江可致案內候。且亦御領國之者之內、去年來於他國に米弁雜穀等買留置候者有之儀、粗相知居申分も有之候。右樣買留置候分は、都而御領國最寄之浦々江引寄可申候。是等之趣爲致出精候樣可被相心得候事。

三　月

三月廿六日。麥收穫の期將に近づきたるを以てその取締方法を惣年寄に上申せしむ。

〔司農典〕

諸郡共頃日麥作追々穗に出候に付、右番之儀於村々に油斷は有之間敷候得共、尙又嚴重不相洩樣可有詮議候。麥作出來之上者いかにも致勘辨、秋成迄之取續方喰延し候樣可有指引。且是迄誠に雜食而已給候者共、一時に致食用候而者、却而腹氣にも不可然哉与被存候條、是等之處も念頃に可相心得候。尤賣出方之儀も、於組主附中に取縮方も可有之儀与存候。郡々取扱之樣子承置度候條、早々可申越候、以上。

改作方御郡奉行

酉三月廿六日

諸郡惣年寄・年寄並中

三月廿八日。京都本願寺より門徒の百姓を徴發せんとする風聞あるを以て之に應ずることなかるべきを命ず。

〔司農典〕

今度大坂表に而大塩平八郎及騒動に候一件に付、京都於本願寺に右防方用意之爲、人足門徒之者可罷出旨諸國江觸候趣相聞得候。尤其許中油斷も無之儀に候得共、一圓罷越候儀難相成候。其上耕作專之時節に候間、嚴重心得方可申付置、若密に罷越候者於有之に者不輕儀に候條、急度曲事に可申付候間、能々相心得早速可申渡候、以上。

三月二十八日　　　改作方御郡奉行

諸郡惣年寄・年寄並中

三月。米作の督勵を嚴重にすべきを令す。

〔司農典〕

當出作勢子方之儀者、毎度申渡置事、尤各油斷者有之間敷儀に候得共、自然手後れ候而者不容易趣に候條、組々主附繁々致廻村、勢子方少しも無油斷可相心得候。萬一も手後に相成候村方於有之に者、組主附可爲越度候之間、此旨急度相心得、請書可指出候、以上。

改作方御郡奉行

酉　三　月

口郡惣年寄・年寄並中

四月三日。前田齊泰登營して德川家慶の相續を祝す。

〔續德川實紀〕

四月三日。昨日御引移の御祝として群臣總出仕あり。紀伊大納言・尾張中納言・水戸宰相には御座所にて御對面あり、御手づから熨斗蚫をおくらせられ、次に松平加賀守・松平三河守・松平越前守・松平右近將監・松平上總介・松平左兵衞督・松平淡路守・松平兵部大輔・松平攝津守・松平左京大夫・松平大學頭・松平播磨守・溜詰之人々・松平近江守、同じく見えたてまつり、その他のともがらはみな大廣間にして奏者番に謁す。

四月十一日。將軍宣下の際前田齊泰束帶にて登營するを以て轅昇の着用する八德を金澤に於いて製せしむ。

〔成瀨正敦日記〕

四月十一日

一、將軍宣下之節、御束帶に而御登城に付、御轅舁着用之八德出來之儀、御國表之方下直に

付出來可申渡。夫に付是迄之八德御合紋花菱に付、三十人頭等へ相尋候所、三十人方御合紋は惣而角之内三の字に候。御部屋に而は御手廻小頭代は三つ花菱、御手廻之者は一ッ花菱之旨。寛政十一年二月二十四日上野御豫參之節松本恒右衞門御裝束方御用に而罷出、太梁院樣御轅舁八德は千種色、紋所角之内三の字、五所紋、革紐茶色、觀樹院樣御轅舁は、空色に紋所花菱三ッ付、茶革紐付候段見受、則其節之手留にも記有之旨申聞候。今般新出來被仰付候八德は、千種色、紋所角之内三の字、五所紋に而相渡候儀に相伺候間、三十人頭被申渡、仕立方申談、出來之上夫々可指越旨申來。

四月十三日。諸郡百姓にとらせ團子を食用に供すべきことを告ぐ。

〔御郡方舊記〕

とらせ團子仕立樣之事

とらせの根を掘、毛を削りおとし、藁灰のあくに能々ゆであげて、かち臼にてうち碎き、布の袋に入て、川水ならば尙更よろしく、一日も一夜も水にさらし候を干あげ、挽臼にて挽き、團子に致し、少々燒き候得ばかたまりてよし。右とらせの類一升に、糘の粉に穀類の粉三合程も相交、此頃のもち草等少々まぜ候得ば、尙更喰ひよく御座候事。

酉四月

とらせ團子製法之儀に付、御別紙御渡、早速組切村々へ申渡、專食用に爲致可申樣被仰渡候に付、相廻之申候間、早々御順達從落着年寄溜へ御返可被成候、以上。

酉四月十三日　　御出張番詰所

組々主附宛

四月廿五日。前將軍德川家齊退隱せしを以て物を前田齊泰に贈る。

〔成瀨正敦日記〕

五月七日

一、前月二十九日出町飛脚拔出早飛脚步に而指出、川支に而二日逗留、今晝前到來。當二十五日御隱居之爲御祝儀、從大御所樣上使永井肥前守殿を以、御腰物幷御肴御拜領。犬千代丸樣・龜丸殿江茂、右御同人を以御腰物幷御肴御拜領被成候。右御普爲聽、榮操院樣江御近習頭を以被仰進候。御口上書入御覽指進申候。御日柄宜時分、御使御申談可被成候。且龜丸殿當時御勤方御指略被成候へ共、御格別之御拜領物之儀に付、御同所樣より御普爲聽、方々樣より御歡も有之筈に候間、此段爲御承知申進候、以上。

四月二十九日　　坂　井・判

成　瀨　樣

〔見聞袋群斗記〕

四月廿五日、大御所樣御隱居爲御祝、公〳〵御刀大和則長代金五十枚、上使大岡主膳正を以賜る。犬千代丸樣〳〵御刀若狹冬廣代金二十枚、龜丸殿〳〵御刀豐後重行代金十五枚、上使を以賜るなり。公御初より御祝儀品々献上有るなり。御能御拜見もあり。其節見事なる折詰御菓子献上有之。御料理も御頂戴。

四月。米穀を貯藏する者に賣却を勸め、又之を隱匿する者を告發せしむ。

〔御郡典〕

御算用場奉行〳〵

去年作躰不宜、御用捨米等をも被仰付候得共、百姓共手前未だ行足不申者も多有之樣子に而、作德米賣出方も少分之躰に相聞候。如此之年柄に候得ば、人々手前後日之指支を存、又は所方用米之心當に相殘し置候者も可有之儀、其段は尤之事に候。然る處金澤を始、遠所町方等用米不足に相成可申向々も有之躰、此段不容易儀に候。此末百姓共手前々々之食用に可相成分之外、少に而も餘分有之者は、五月中に必賣出可申候。手前に貯無之者は、外より買受候而成共賣出可申候。御領國は一躰之事に候得共、御上〳〵之御奉公に候間、無油斷相心得可申候。若亦六月以後貯罷在候者、隱し候而賣出不申段及見聞に候はゞ、不依誰々に可申出候。

御穿鑿之上爲賣出、代銀は申出候者へ半高被下、殘半高は所方へ可被下候事。
一、所方用米手當之爲め、自分作徳之內貯置候者も有之候はゞ、其高書出可申候。其所之樣子次第心得方可申渡候。
一、餘計所持之者を承出、其段申立候內、自然其處之用米に可相成分有之、賣出方指支候分は、代銀は難被下。依而申出候爲御褒美与、別に銀子等可被下候間、無泥可申出候事。
右之趣被得其意、夫々申渡候樣、御郡奉行江可被申談候事。

酉四月

四月。江戸に出稼せる者送還せらる。

〔文化より弘化まで日記〕

四月、諸國飢饉に付、稼として江戸表江諸國より罷越候處、米穀何方茂差支候に付、御調理に而國々江御送。此御國にも三百人計御返し。

五月八日。御歩並以上の諸士に七月以後の飯米を借上ぐべきことを令す。

〔觸留〕

去年御領國非常之凶作に付、段々詮議被仰付、今日に至る迄士民共格別之難儀に不及樣、種々御取扱之儀承知之通に候。然處去作皆不納等之向々有之、米穀出來高過分に不足いたし、

大坂御廻米幷末々津出等をも指止、猶他國米買入等之儀申渡、何も何分にも取續候様種々遂詮議候得共、此節に至り次第に御米無數に相成、他國米も纔ならで難調、追々御領國中用米・夫食等渡方も指支、末々飢餓にも至り可申儀難計候。御家中之儀者格別之儀に付、御償米も追々被渡下筈に候得共、右様之時節に至り、侍中たりとも平常之心得に可罷在儀に而者無之、御上之御仁惠を以是迄に至り候儀に候得者、御家中人々も心力を盡し、士民一同に困窮を共にする心得に可罷在儀本意に候。自然此末困窮に迫り不穩儀も出來候而は、御留守之儀別而一統可奉恐入儀。於拙者共殊更心痛此事に候。依之御家中一統先今・來月飯米之外、七月朔日以後之分、當分御借上申渡候間、此節之儀御用立可申候。御返辨方之儀者、來月下旬より追々に相渡候様申渡候。右に付町・在等之儀も嚴重申渡候趣可有之候事。

右之趣被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候事。

酉五月八日　　　　本多播磨守

御家中之人々、七月朔日以後之飯米御借上之儀、別紙申渡候通に候。右者御歩並以上所持之分御借上に候條、指出等之儀者、御算用場より直に可申談候筈に候事。

五月八日

〔毎日帳書抜〕

五月八日

一、御領國非常之凶作、種々御取扱等有之候。自然此末困窮に迫り不穏儀も出來候而は、御留守之儀別而一統可奉恐入儀に付、御家中一統先今・來月飯米之外七月朔日以後之分當分御借上之儀等、頭分以上御用番又は筆頭之面々越後屋敷へ相招御用番申渡。年寄中等列座、且御横目差引も無之。

五月十六日。前田齊泰諸士の半知借上を實行すべき決意を告ぐ。

〔御親翰留〕

去年違作、且舊冬以來窮民取救方等多之引高に而、勝手方埋合之手段無之旨。仍而家中知行半分借上を以辨申外無之由、年寄共始勝手方之者共何茂、此度僉議通り不申付時は外に手段は一圓無之旨一決にて、各茂異存無之旨。當時家中も難澁至極之樣子に候所、右躰申付候儀誠難忍事に候。殊更先代よりも無之儀を申付、何れも可爲迷惑と深く痛入事に候得共、無是非申付ると申ものに候。尤諸上納は當年一作令用捨可申候。省略方之儀も此上嚴重可申付事に候。乍去近年追々申付候上之事、迚も行屆間敷哉に存候。勿論手元之儀も成限省略いたし候心得に者候へども、各心付之趣有之候者、尤無泥可被申聞候。何れとも心得可申候。只々取治方に差障も有之間敷哉と、心許なく存候。各油斷も無之儀に候へ共、我等始終辨兼候故、

是月は大盡なり

其方中存寄承置度候。播磨守始勝手方之面々心配察入、大儀之事に存候。猶更各心付之趣も候はゞ、播磨守等江入念被申遣、宜敷被取計候樣可被申遣候事。

右酉五月十六日山城守被爲召御渡被遊候處、金澤に遣、六月八日返上之由。

五月晦日。百姓の米穀を貯藏するものあらば急に之を賣出すべきことを命ず。

〔司農典〕

諸郡共村々百姓手前に有之候作德米等、當月中不賣出隱置候者有之候得者、右米爲賣出可申候。若隱し置候分有之、見出し候者有之候得者、右之者へ代銀半高御渡之旨先達而被仰渡、則申渡置候通に候。依而來月に至り、若役人指出御調理方有之哉も難計候。併此末一統雜食等いたし食出米も有之、賣拂度者も可有之に付、右御調理方も有之儀に候はゞ、今暫御猶豫之儀有之樣、御算用場江相達置候間、無泥喰出米可賣出候。元來用米無數之儀に付、右之如く御詮議も有之儀に候得者、少々に而も餘分有之者は早速可賣出候、以上。

酉五月晦日　　　　改作方御郡奉行

諸郡惣年寄・年寄並中

五月。行倒人を非人小屋に收容する手續を改む。

〔觸　留〕

去年非常之凶作に付、飢人多く、所々行倒罷在候者有之躰に付、當一作、行倒罷在候者、先非人小屋に而御救申渡候趣、當春及御達申候通に候。然所追々著にも向候故、次第に行倒人多、於所方勞り候由に候得共、其まゝには難差置、仕抹方甚迷惑之筋も可有之候間、以後御家中幷町方等、銘々屋敷廻りに行倒候者有之節は、御家中者不及申、町家たりとも直に非人小屋役所江斷出候者、同所より請取人早速差出、引取御救申渡、追而其段頭・支配人より裁許與力江申達候而可然与奉存候。右引送候者取救方等之儀は、僉議仕裁許與力江可申渡候間猶更御詮議有之、御聞届之上は此段早速諸向江被仰渡候樣に与奉存候事。

五　月　　　　御算用場

五月。窮民に食料として令法を與ふ。

〔文化より弘化まで日記〕

五月、輕き者江爲御救じやうぼ被下。

じやうぼは令法なり

六月九日。幕府に提出すべき藩領の繪圖出來方に關して議す。

〔成瀨正敦日記〕

六月九日

一、當五日井上井之助拙宅へ參出申聞候は、今般公儀へ御書上之三州御繪圖加州之分下繪、漸當月中出來、相伺可申与存候。夫に付先年公邊へ御指出御座候、富田權佐著述之三州志、幷金子吉次著述之白山志一返披見、御不都合等之品も無之哉、考合指上度候得共、右書物容易に披見成兼候間、夫々御取立、一返披見可被仰付哉、心付候事故申聞候。且其外御直封之御品等にも、御見しらべ可有御座御品も可有御座哉。此儀は猶更於御前御詮議被仰付候樣仕度、御序に申上置候由等申聞に付、相考候所、元來三州志等私之記錄に而、御文庫等之御記錄を以考等被仰付候品に而も無之儀。左候得ば御不都合之品等有之候与而、御指支も有之間敷儀与存候付、今日井之助御呼立、心付之趣は御序に可申上置候得共、右之譯与遂詮議候間、先下繪圖等出來、被指上候樣に与申談置候事。

六月十一日。二百石以上の士は本年の半知を減じ、以下も亦割合を以て減ずべきことを令す。

〔成瀨正敦日記〕

六月十一日

一、今日五つ半時過登城可仕旨、昨日御用番より御廻文に付、則罷出、松之間二之間ニ而御近習頭・同隱居共一列に被呼立、今般二百石以上之面々半知當一作御借上、二百石以下幷御切米之分は、以割合御借上之旨等御書立、年寄中等御列座に而、御用番内膳殿御渡に付、筆頭自分より、被仰渡之趣奉得其意候旨申述退候事。

〔成瀨正敦日記〕

六月廿九日

一、當十一日、御家中一作半知御借上等之儀、御用番内膳殿被相渡候覺書等、左之通り。

御勝手向連々御難澁至極之上、去巳年違作御損失之後、彌增御指支に付、御借財御返辨方等種々御仕法被仰付、漸御取續被成候。然處去年又候凶作、御用捨米をも被仰付。就夫而は三州窮民御救方等、彼是御入用打重り、御調達も被仰付候へ共、其上に茂御不足相立、被成方無之候。依之拙者共重々僉議之趣相達御聽、不容易儀に候へ共、當年一作、御家中知行之内半知御借上、其内二百石以下之人々、幷御切米等之分は、別紙割合書之通御借上被仰付候樣仕度旨申上候所、御家中も難澁之折柄、又候過分之御借上被仰付候儀、誠に御忍難被遊、殊更御先代より茂無之儀を被仰付、何れも可爲迷惑与深く御心痛被思召候得共、幾重にも外手段無之旨に付、被爲任其意候段被仰出候條、いか樣にも御奉公取續可相勤候。右に付而は、

家來抔も減少致省略可取續儀候得共、時節柄浪人多相成候而は、下々可及困窮候間、家來は成限減少不致様相心得可申候。

一、小祿に而家内多之人々抔、右之通御借上に相成候而は、必至与指支候者も可有之候間、左様之人々は頭・支配人手前に而得与相糺可被申聞候。何与歟御取扱可有之候。

一、右之通被仰付候に付而は、役出銀を初、諸上納・返上方等之儀は、追而可申渡候。

一、當半納賣捌方、八月朔日迄相延可申候。

但、右に付指當り手支之分は、願出候者、御借上之殘知高百石に付、五十目充之圖御借渡可有之候。尤八月中一時返上可仕候。

御借渡は御貸渡

一、諸借財等指引方之儀は、追而可申渡候。

但、小前之買掛等は、半納賣捌以後、成限品能取計可申候。

右之趣被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

六　月　　奥村内膳

覺

一、知行高二百石　内百石に付　四十八石御借上

一、百九十石　同　四十六石御借上

一、百八十石　同　　　　　　四十四石御借上
一、百七十石　同　　　　　　四十二石御借上
一、百六十石　同　　　　　　四十石御借上
一、百五十石　同　　　　　　三十八石御借上
一、百四十石　同　　　　　　三十六石御借上
一、百三十石　同　　　　　　三十四石御借上
一、百二十石　同　　　　　　三十二石御借上
一、百十石　同　　　　　　三十石御借上
一、百　石　同　　　　　　二十八石御借上
一、九十石　同　　　　　　二十五石御借上
一、八十石　同　　　　　　二十二石御借上
一、七十石　同　　　　　　十九石御借上
一、六十石　同　　　　　　十六石御借上
一、五十石　同　　　　　　十三石御借上
一、御切米・御扶持方、右知行之割合にて御借上之事。

一、足輕は御切米之内一割御借上之事。

一、役料は別紙割合書之通御借上之事。

一、手替足輕・小者は不殘御借上之事。

但、平士被下足輕御借上、代り役金可被下候事。

一、隱居料も一統割合之通御借上之事。

一、遠慮等被仰付置候人々も一統割合之通御借上之事。

一、他國居住之人々も一統割合之通御借上之事。

一、三ノ一被下置候人々は御借知不被仰付、本知被下候上一統之通御借上被仰付候事。

一、亂心之躰にて御知行等被召放、御扶持被下置候分、御借上不被仰付候事。

一、坊主・小者は御借上無之候事。

一、加州知之分は人々飯米に可致儀に付、加州知に當る半高は遠所米之内にて御借上之事。

一、他國御合力扶持等被下置候人々者、是迄之通御借上之事。

六　月

頭分等役料之内御借上割合書

一、自分知二百石以下　役料百石に付三十八石御借上
一、同　二百十石より三百石まで　同　百石に付四十四石御借上
一、同　三百十石より四百石まで　同　百石に付五十石御借上
一、同　四百十石より五百石まで　同　百石に付五十六石御借上
一、同　五百十石より六百石まで　同　百石に付六十二石御借上
一、同　六百十石より七百九十石まで　同　百石に付六十八石御借上
一、八百石以上　同　百石に付七十四石御借上
一、二百石以下平士　同　百石に付三十二石御借上
一、同二百十石以上平士　同　百石に付三十八石御借上
一、御射手・御異風弓料等も、右同様之割合にて御借上之事。
一、御歩横目等役料并御細工者兼藝料等は一割充御借上之事。
一、役料銀も右割合を以御借上之事。

六　月

六月十二日。銀仲預り銀手形の通用に關し流言することを戒む。

〔御郡典〕

此度御家中半知御借上に付、諸指引方等は追而御詮議可有之段被仰渡候。ヶ様之折柄自然奸曲之者有之、銀仲預り手形故障有之抔与申觸候与も、左様之儀は曾而無之事に候間、是迄之通聊無泥融通いたし可申候。若亦右様之儀申觸候者有之候はゞ、早々可訴出旨、急速夫々可被申渡候、以上。

六月十二日　　　　　　　　御算用場

岡田喜兵衛殿

槻尾甚七郎殿

〔御郡典〕

此節御城下金錢高く賣買いたし候。一旦之事に而頓而下り可申候間、御郡に而は右に迷ひ不申、是迄之通可致賣買候。且亦別紙申渡候類之者御郡中江廻り、彼是下々をだまし、妨げを成候躰之者あらば、廻り藤內見附次第召捕可申候。此段も夫々急度可申渡候、以上。

酉七月十八日　　　　　　　　横尾甚七郎

口郡惣年寄・年寄並中

此節銀仲手形やがてつぶれ候抔与申觸し、金銀抔多く買入候者御郡徘徊いたし候由に候條、內々承合、右樣之者あらば誰々によらず早々可申出。金澤又は出役所、向寄次第於申出には、

路用相渡し、別に褒美可遣候條、此段速可申渡候。

七　月

六月。用米不足するを以て當作の麥一萬石を諸郡に割當し上納せしむ。

〔司農典〕

付札、改作方御郡奉行𛀁

此節御藏米等追々拂底に相成、新穀迄之用米取續之程無覺束に付、他國麥御買入之筈に候得共、着岸迄之處手支候而者不容易儀に候。仍而村々出來麥之內一萬石、當新穀一萬石与切手引替申付候條、諸郡割符方之儀者、各手前において詮議有之、高割等を以急速御藏納之儀可被申渡候。若代銀に而望之分は、爲中勘与石八十目圖を以可被相渡候。

右之趣夫々被申渡、當月六日より追々御藏納いたし候樣可被取計候事。

酉　六　月

六月。貧民に大豆を給し、又大に工事を起す。

〔文化より弘化まで日記〕

六月、御救として農民𛀁大豆被下。越後新潟等より御取寄。

金澤等所々御坊・山伏等に而富突相初む。追而御停止。

下民御救として江堀掘上被仰付、一日に婆々嫣共等迄二千人充出。此御入用銀百貫目餘。

七月六日。町・在及び家中の借財辨濟方法及び質物の請出し方等を令す。

〔成瀬正敦日記〕

七月六日

一、當六日町方等へ被仰渡方等、左之通り。

去年御領國中稀成不作に付、御救方等過分に被仰付、御勝手向別而ひしと御指支、此末々御手當無之に付、此度御家中一統半知御借上有之候。町・在之儀從來多分難澁之上、加樣之年柄、且は半知御借上に付而も、何廉指つまり、輕きもの別而難儀候間、町方一統借財都而無利足にいたし、相對を以年賦に取極可申候。

但、是迄指遣候利足銀之分は、元銀に當て遂指引、殘元銀年賦に相定可申候。寺庵・社家等之分右同事たるべく候。御家中之儀は來年に至、右之趣を以致返辨候樣申渡候。

一、御郡方之儀、百姓共相互に爲助力無利足に而貸置候分、暨𡌛物幷稼之品爲仕入前貸之分、年賦を以相對に而可遂指引候。町方等より致借物候分は、如御定都而可爲無指引候。

一、借財之儀、右之通被仰付候付、質物之儀は無利足十分一之元入を以、來年七月中迄に請出可申候。但是以後布・木綿之外は質に置候儀仕間敷候。

一、御家中給人收納米藏縮、向後指止候樣申渡候。依而無據節は、頭・支配人奥書之證文を以借用之筈に候事。

右之趣被得其意、町中可被申渡候事。

丙　七　月

町・在等借財返辨方之儀に付、別紙寫之通町奉行〻申渡候。御家中之人々は、當年半知御借上之儀候條、來年に至別紙之趣を以返辨可有之候。且又收納米藏縮、向後指止可申候。依而無據節は、頭・支配人〻相達、奥書印章之證文を以借用可有之候。

一、質物之儀、別紙に有之通に候間、可有其心得候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

七　月　六　日　　　　長　　又　三　郎

〔成瀨正敦日記〕

七月八日

一、今日四時過、御勝手方御席へ御用有之旨、昨日例之小紙到來に付、則罷出候所、御勝手方出席、左之覺書內膳殿被相渡、御次內諸役所〻も夫々可申談旨被仰聞候事。

一、今般一統借財返辨方等之儀、御用番より申渡候通に候。依而役所附銀子之內貸附有之分、

是迄之通取立候而は不都合に候條、貸附銀有之候はゞ、取立方之儀、尚更遂僉議可被申聞候事。

酉　七　月

七月八日。前田齊泰、家中の半知を借上ぐるを以てその生母榮操院に節約を主とすべきを告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕

七月八日

一、今度御家中半知御借上被仰付、榮操院樣江申上方別紙之通被仰出候間、指進之申候。角尾孫兵衞呼立可申談旨。

從來御勝手御逼迫至極之所、巳年之違作に而過分之御引高、其已來別而御運方御指支に付、各別之御省略茂被仰出候得共、莫大之御借財高御手繰相成兼、此儘に而は彌御議定難相立旨、御勝手方より段々申上り、重々御詮議之上不被得已、去年三都御借財格別之御仕法被仰付候。然處昨年御領國中古來稀成凶作に而、御用捨米等被仰付、過分之御引高、其上窮民御救方、是亦不容易儀。去秋以來今以日々之御出方、寔莫大至極之儀、如何共被成方無之。しかし新穀出來迄之處、幾重とも御取扱不被仰付而は不相成。當春以來他國米御買入等を以、窮民御

救方等被仰付、最早御勝手方御埋合方之御手段無之。彼是申儀に而は無御座候得共、此上は御家中半知御借上被仰付候より外無御座候旨、年寄中詮議之趣達御聽候。半知御借上被仰付候而は、一統可爲迷惑与深御心痛被爲在、且從御先代樣無御座儀を被仰付候儀は、誠以御心外之御儀被思召候得共、前文之次第是非なく、今度半知御借上被仰付候。就而は相公樣御手元之儀、尙更格別御差略被仰付候筈候。仍而榮操院樣江委細申上、各にも萬端相含罷在、諸事無油斷心付候樣可申談旨被仰出候事。

六　月

七月十日。老臣等、前田齊泰が半知借上に就いて藩內動搖すべきを以て歸藩を出願すべきやとの諮問に應ふ。

〔本多政和覺書〕

七月十日

一、今般御家中半知被仰付候に付、下々騷立可申、外々樣には右樣之節御暇御願御歸國之儀も有之候間、御歸國被遊候而可然哉、城州被召被仰出候に付、御歸國被遊候得ば御格別之儀に候へ共、御國之樣子にも寄可申旨等、段々御請被申上候所、猶更金澤へ尋遣候樣御意有之趣等、前月廿九日早飛脚に申來。右飛脚一昨日着に付、各示談之上、御歸國被爲成候へば御

取治方は御格別之御儀。乍去御參勤者大切之御儀、御暇御願容易有間敷哉。下々樣子差て相替儀も無之候へば、御歸國被遊候樣にと申上候程には無之。併取極申上候儀に而は無之候間、這上は思召次第御治定に仕度趣等、昨日出今日へ延、早飛脚に而月番より被申遣。

七月十一日。百姓の持高質入を禁ずる法令の恪守を命ず。

〔每日帳書拔〕

七月十一日

一、質入高之儀は不相成譯に付、名目を替密々持高質に入候者も有之躰、不埒之至候條、於改作方夫々相糺、名目は替り候共質入高之姿に相成居高方、格に相違之分は、御法通可取揚候。併今般諸借財等仕法方被仰渡候儀候間、今度は右等之分有之候はゞ一先取揚、重而高主へ可相渡候。尤以來之儀は御法通嚴重縮方可有之旨、御算用場奉行へ申渡候事。

七月十二日。藩の財政逼迫するを以て諸向入用の節減手段を講ずべきことを令す。

〔成瀨正敦日記〕

七月十四日

一、一昨日内膳殿被相渡候覺書左之通り。

御勝手向御逼迫至極之上、去年非常之凶作に付、窮民御救方等彼是莫大之御入用打重り、最早此末御運方之手段無之に付、不得止事、今般御家中知行之内半知御借上被仰付候趣等、一統申渡候通に候。就夫諸向御入用之儀、近年度々御省略、當時多分手詰に相成候躰に而、此上格別御省略之儀容易に出來申間敷候へども、非常凶作之年柄等有之節、定成御入用方を打欠御凌被成候より外無之旨、先達而申渡置候趣も有之。今般御家中過分至極之御借知等も被仰付候程之御時節に候得ば、諸向御入用方自然不釣合之儀有之候而は難相成候間、此所何も得与相心得、猶更精誠遂僉議可被申聞候事。

酉 七 月

七月十六日。羽咋郡の寺院に富突札を賣出すものあるを以て百姓の之を買入るゝことを禁ず。

〔御郡典〕

富來組・土田組於寺々等に、富突躰相初め、札賣出候躰粗及承候。右兩組にも不限、所々に有之由。右札何方に有之とも、御郡方之者堅く買受候儀不相成候。若心得違之者有之、買請候儀於有之には、不依誰々に無構召捕役所江可指出、遂吟味急度可申付候條、得其意、此段小

前之者共迄も夫々不相洩様嚴重可申渡置候。尤此書面先々江急々相廻、落着より可相返候、以上。

酉七月十六日　　　　　　　　岡田喜兵衞

口郡惣年寄・年寄並中

七月十七日。百姓の切高したるものは漸次之を回復せしめ、又享和二年以降町人の取高したるものは之を沒收すべきを命ず。

〔每日帳書拔〕

七月十七日

一、諸郡共近年村々次第に難澁深、他村へ之切高多、中には本村之者多分小作に相成居候村方も有之躰。左候而は御救等被仰付候而も、可成立期も無之儀に候條、先達而切高いたし候節取請候高禮米代銀切人より爲指出、切高追々本村へ爲引取、村方難澁立直候樣改作方に而幾重にも遂僉議可申候。享和二年高方仕法後町人へ切高いたし有之分は、尤格之通取揚可申旨御算用場奉行へ申渡。

七月十八日。百姓に他の救恤に依頼することなく獨立して生計を維持す

べきことを諭す。

〔三州治農錄〕

一、七月十八日左之書取御算用場より渡る。

去年非常之凶作にて、末々の者食事乏しく難儀に及び候に付、段々厚き御詮議にて、御救方重々仰付られ、御慈悲により今日迄取續候儀に候。然る處末々の者中に者、御上の御恩にもたれかゝり、手をつかねて御救方をのみ希ひ、又は所方身元の者等より取扱候儀を、其等の事のやうに存込、自分の稼をもて取續可申事をわすれ、手ぶりにて人賴をもて日を送り申くせ付候風俗に移候ては、たとひ豐作たり共町・在共次第におとろへ、御上の御ため其身のためかろからざる儀に候條、いづれもすぎはひにせいを出し、身のはたらきをもて御用を勤め、家內ども養ひ申候樣相はげみ可申候。もし心得違ひの者これあらば、きつと可申付者也。

酉　七　月

七月十八日。御郡方惣年寄以下の役儀を有する者に令し勸農の法を怠ること勿らしむ。

〔三州治農錄〕

一、七月十八日左之書取御用場より渡る。

去年御領國非常之凶作に付、御用捨米且御救方等種々御取扱共莫大之儀、末々に至迄可致承知事に候。尤非常御手當之儀は豫而可被爲設置事に候得共、近年打續き不時成御入用共打重り候故、其儀不被爲行屆、猶又去る巳年之不作、引續凶作之難事に而、御勝手向御運方いかゞ共被成方無之、甚御行迫に被爲至、奉恐入次第に候。就而は此末諸郡かじけ百姓等取立方之手段も無之族に候。併御領國之儀は、改作之御法を以御仕置被仰付候事故、是迄通例之作難等は、時々御償方等を以御取扱に付、下々格別指迫り申程之儀は無之候に付、却而恩惠を深く不存付、夫よりして分限を取失ひ、風俗奢侈僭上に移り、安逸を事といたし、遊惰に流れ、志不埒なる事に候。尤中には心得方等宜き者も有之候得共、其根元は惣年寄を初年寄並之者、聢役儀有之者共之心得方不行屆故に候。當時之躰に而はいか程御恩惠を被施候而も、下々耕作之補ひに可相成とは不被存、段々衰へ申所へ至可申哉に候。依而向後惣年寄心底を相改、是迄之仕來仕癖を離れ、先以其身之行狀を相嗜、少も奢侈僭上之族無之、急度分限を相守、衣食住を初諸事質朴謙讓之風を心懸可申、第一は百姓共農業に不怠樣、日夜心を用ひ致勢子、荒起より皆濟之儀を毛頭油斷不仕、全く御收納仕候樣常々可申付、年寄共等に而も御收納方入念に相心得、米症吟味、俵拵等まで綿密に相心得、皆濟方改作之御法に不相觸樣

相互に勵合、厚心懸可申候。且凶年は何時共難申事に候間、平生凶年之憂を不忘、夫食等に相成候品々を成限蒔植いたさせ、少も無益之品に地元をついやし不申樣、爲心懸可申儀肝要之事に候。農事聊無怠慢相勵み候得ば、かじけたるも寄々力付申所へ至り可申道理に候得ば、急度粉骨碎身致勢子敎諭可致事に候。右之趣を以、百姓手前介抱方盡精誠可申候。併餘り手ゆるく候而は、夫より怠りを生じ申基と可相成候間、是等之斟酌深く心を用ひ取扱可申候。將又長百姓等身元相應之者手弱成同苗共を見繼、深くかじけ不申樣常々申諭、手弱成者は長百姓等之助力にあまへ怠り不申樣、銘々農業に身を抛申樣能々可致敎諭。長百姓幷かじけ百姓共、右敎諭に戻り、貪利無慈悲之心得、且恩を不思放蕩之族於有之は、重々加異見、其上にも不嗜者は速に各迄可申出。扨又年寄共村々廻り方之儀、等閑之者も有之躰、且組取扱方手附任せに致し、又宅々村役人罷越候節、御用方手附取次を以承り候者も有之候旨相聞え、先以役前等之心得不埒至極沙汰之限に候。人別に可相糺儀に候へ共、其段は先令用捨候條、以來は是迄仕來等に不拘、度々致廻村、農事之精不精を吟味致勢子、肝煎等ゟ人別等之儀を初、萬事無油斷取調理爲致、世話少も無手抜樣可申付。尤御用方手附任せに不致、取次等も不申付、自分に取捌、深切に應對仕、彼是可致敎諭候。右年寄共村廻り之節、村々諸雜用過分に相掛申候段相聞候。右等之儀迄も心を付可申儀に候處、其儀無之、下々之難儀を不

思儀、役前之肝要を令忘却候族不埒之事に候間、以後之心得方急度申聞可被置候。惣而百姓共農事精不精、且風俗心得方之善惡は、年寄共之身持心得取扱に有之事に候條、急度心懸相勤候樣、惣年寄初役儀有之者共へ嚴重に可被申渡候。此上右之趣共不心懸之者於有之は、急度可申付候。右之通之儀に候間、向後年寄共等人品撰方、格別僉議心得可有之儀与存候事。

丁酉七月

七月十八日。銀手形と錢との交換比例を公定す。

〔觸留〕

錢拂底与申立、相場引立、不融通之躰相聞に候。依之銀手形百目者十貫、又五十目以下小割札も右に準じ取引いたし、小指者指止可申事。

一、右之通申渡候上は、諸物錢を以賣買之品、銀手形を以相向候者有之候而も、無滯可相渡候。自然銀手形を錢之位より落し取請候歟、又は右手形に而錢相求候節、高く賣候者有之候はゞ、早速買主より最寄に可申出事。

一、右銀手形やがて潰候抔与申觸候者有之躰に付、人々疑惑を生じ、不用之金錢をも買入候姿に相成、其虚に乘じ種々之奸計を以、高利を得候者有之躰に候。右手形聊相泥筋無之處、彼是申立處儀不屆之至に候條、右樣申觸候者有之候はゞ、役人之外たりとも誰々に不依、承

次第早々其最寄へ可申出事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

七月十八日　　　　長　又三郎

本年七月六日の條參照

七月廿一日。重ねて御郡方の質物請出方に就いて告ぐ。

〔加賀藩農政史考〕

今般御改法被仰渡、質物之儀は、無利足十分一之元入を以、來年七月中に請出、尤是以後布・木綿の外質に取候儀不相成旨等、委曲先達て組々主附共迄申渡置候。然る處今以質物指出不申候由粗々承及、如何之譯に候哉、其方共より如何申談候哉。急速十分一之元入を以爲出可申候。若質屋共より彼是申出候者有之候はゞ、早速其段可及斷に、急度御咎被仰付候間、此段質屋共へ不相洩樣嚴重申渡、且先々刻附を以此書面相遞、落着より可相返者也。

酉七月廿一日　　　　諸郡奉行

諸郡質屋有之村々役人一同へ

七月廿二日。村々肝煎の撰定を愼み、その功績ある者は之を上申すべきを命ず。

〔眞館文書〕

今般諸郡共高方を初諸借財等、都而村々成立之儀格別被仰付、委曲夫々申談候通りに候。就而者往々之處、又候難澁に落入、御貸物等有之候而も、借財之方ぇ打込候樣に相成候而は、今度斯被仰付候御主意貫不申、誠に恐入儀に候間、此所厚其許中相心得可申。就夫村々肝煎曁組合頭之儀は、其一村々々を致支配、萬端之儀基を致詮議候役人之儀、誠に大切之勤向に候。肝煎之儀、多分村方一統納得之上願出候得者承屆候格合に候得共、右納得に付而は是迄長百姓之儀に候得者、權威を以印形取揃申者も有之、又者種々奸計を以取揃候儀も有之躰に相聞候。是等沙汰之限に候。已來之儀、若右樣之躰於有之者、急度可申付候間、村方納得印形之上、其許中迄願出候得者、其人品是迄之樣子其上にも內聞等いたし、いかにも盡精實御用立申候者を爲願出可申候。申迄も無之候得共、當時相勤候肝煎等之內不心得之者有之候而は、所詮今般之御主意行屆兼候間、無泥指除可申。尤寄肝煎・兼帶肝煎等當分申付者たり共、得与可致吟味。且去前いかにも親切に遂詮議可申。此等之儀先達も申渡置候得共、尙々各於手年來年柄に付、曁是迄之取扱等萬事行屆、外村々目當にも相成者も可有之候間、左樣之者どもは夫々可申出候。

右之趣譯而申渡候、以上。

本文は足輕の事に係る

酉七月廿二日　　改作方御郡奉行

諸郡惣年寄中・年寄並中

七月廿三日。足輕の遠所に出張する者の旅費を増額す。

〔江戸諸用金澤用向〕

七月廿三日

一、當年格別米高直に付、一日一匁宛之余荷銀請取遠所江罷越候處、一日居留之分一分七厘宛入増、歩行之節は二分七厘、割場幷御席江諸役所より御達有之候得共、御聞届無之。仍而一作御詮議之上、春より七月迄之分一人江一日一分宛御引足銀被下、出役之人々は一分七厘、一日當七厘自分足之事。付而は遠所御用煎飯持參之振に相心得候樣被仰渡。御歩並以上は道程一里に付七分五厘宛之前々御定銀・黑米一升宛之御定に付、格別之儀無之候。仍而一分御引足一作被下。併御當家二百六十年之間振合無之例、初に付記置候事。

七月廿四日。浦々に於いて他國の産物を購入するに錢を以て支拂ふことを嚴禁す。

〔眞舘藏書〕

諸郡於浦々他國賣買之品、此節錢を以買入候躰相聞、不埒之至に候。元來他國より買入候品者、都而正金を以買入可申處、右錢を以買入候而者彌錢拂底に相成、一統可爲難儀儀に候之條、都而正金を以可遂指引。斯申渡候上にも、若密々錢を以品物買入之族於相聞者、嚴重可申付候條、指押置可及屆候。

酉七月廿四日　　御郡奉行

諸郡年寄中・年寄並中

七月廿八日。前田齊泰老臣等に家中諸士の撫育を怠るべからざることを令したる書金澤に達す。

〔本多政和覺書〕

七月廿八日

一、左之御親翰、中村五兵衞等添紙面に而、十九日出に來る。今日各拜見。

本文之趣共、家老共へも可被申聞、將又丹後守江も可被致演述候、以上。

家中半知借上之儀、外に示談も無之に付、無是非任其意に候段、先達而申達候。右に付而取扱方之儀、追々僉議も有之、借財返辨方等之儀、當六日被申渡候由、令承知候。此砌下々生業乏敷、及難儀候者共多可有之哉と無心許事に候。去年以來困窮之者共多き時節、若又上之

申付に仍而、殊更及難儀に候樣に有之候而は、難成事に候之間、此所深く心得有之、此末困窮に逼り候者ども、取扱方之儀油斷有之間敷候。尤家中諸士成立方、能々可被申付候。萬一各を初支配有之人々、少も油斷候而は、士民成立得不申、人氣も散亂可仕事候間、深く思慮候而、撫育方聊怠慢なく、士氣を勵し正路に趣き候樣に引立被申、頭・奉行をも時々相勸め候而、精誠を盡し世話有之樣にと存候。手前儀御暇をも相願致歸國、各へも令示談、夫々申付度候得共、被申越候趣に付不及其儀候間、此段以書面申達候。呉々も油斷無之樣にと存候。暑氣之砌、各無事珍重候。猶萬事可有氣遣候、以上。

七月十九日

本多播磨守殿
前田美作守殿
長　又三郎殿
奧村內膳殿

七月廿八日。銀仲預手形に小割五分札を發行通用せしむべきことを告ぐ。

〔每日帳書拔〕

七月廿八日

一、此度爲辨利、通用銀預り手形高之內を以、小割五分札出來申渡候旨等、夫々相觸候事。

〔成瀨正敦日記〕

八月朔日

一、御勝手方執筆室田喜左衞門を以、左之通諸向へ被申渡候旨に而寫被相渡、御次內金銀取扱候向へ、前々之振に可申談旨被仰聞候事。

此度爲辨理、當時通用之銀預手形高之內、以小割五分札出來、百目札等を以於引替所切替相渡候付、上納を初無滯通用之儀一統ゟ申渡候條、被得其意、上納方不差支樣可被相心得候。

右手形見合は、御算用場より直に相達筈に候事。

丁酉七月

七月廿八日。立毛苅入の季近づきたるを以て盜難に注意せしむ。

〔眞館藏書〕

御郡々村々百姓等畑物作物、頃日出來候處盜取候に付、御斷申上候人も在之、御承知被下候通御座候而、輕き者共難儀迷惑仕候。然處此節追々早稻實入に相成候處、穗切取參候樣之儀も有之。右樣不屆之處此末增長仕候而者、畢竟御收納方へ拘、不輕儀与奉存候に付、番方之儀嚴重申付置候得共、甚だ無心許奉存候。仍而廻藤內共ゟ被仰渡、村々夜分繁々相廻、賊召

捕差出候樣被仰渡可被下候。夜分田畑之中に罷在候者は、胡亂成者に而も召捕指出候樣被仰渡、右躰之者は嚴重御糺被仰付、尤盜取候儀申顯候はゞ、嚴重御手當被仰付可被下候。今年柄に付尙更心得違之者も可有之候間、無用捨村方に而不屆之者見聞次第召捕指出候樣嚴重可申渡与奉存候。御縮方之儀、兼而被仰渡御座候得共、改而他御支配所末々迄も嚴重被仰渡被下候樣仕度奉存候。右小紙を以御達奉申上候間、宜敷御僉議被下候樣奉願上候、以上。

酉七月　　諸郡惣年寄

御郡御奉行所

御改作方御郡御奉行所

〔司農典〕

諸郡共當立毛追々刈入之時節に相成候處、當年別而賊躰之族儘有之旨粗承り候に付、番方之儀藤內共江申渡、晝夜爲相廻、紛敷者は不依誰々に見咎、尤他支配之者たりとも、無泥召捕候樣嚴重申渡置候條、得其意、猶更村々番方末々迄行屆候之樣、嚴重可申渡候。此末立毛等被盜取候樣之儀有之候而者、畢竟勤番方等閑に相聞得、不容易儀に候間、小前之者共相互に令吟味、萬一紛敷者有之候はゞ押置、早速可及斷に候。

右之趣村々末々迄不相洩樣急度可申渡者也。

酉七月廿八日　　　　　　　　御郡奉行

七月。窮民に麥を給す。

〔文化より弘化まで日記〕

七月、窮民に爲御救麥被下。

七月。酒造商賣人の店前に於て飮酒し及び不法の行爲あるを禁ず。

〔雜事日記〕

當町酒造商賣人共方江、御家中家來末々初下々之者罷越呑酒仕、或は少分之價錢を出し、不相應之酒可指越抔申入候儀等有之、甚及迷惑候に付、文化十一年にも委曲御達申上、御家中一統江も被仰渡有之候處、近年又候猥に相成、御家中小者幷御郡方に罷在候役小者類、町方に而者小者・浪人者賣場江立入呑酒いたし、其上價錢全不指出、樽酒等指越候樣申聞候者も御座候而、不法之族有之。種々申諭候得共不致承引、彼是申內手代共等風与纔之申違に而も有之候得者、其儀を申立及口論候而、申分も不聞入、理不盡に過言申聞抔与而及打擲候儀等有之、商妨に相成及迷惑候旨等、當春以來酒造共より願出申候。元來酒造商賣人店において呑酒等不致格合に而、前々店に定書爲張置候處、兎角猥に相成、酒造共難儀仕、御縮方に茂指障申儀に御座候間、御家中一統御觸渡、主人々々より嚴重申渡有之候樣仕度。其上に茂以來

不法之者有之候得者、手先足輕共指向爲召捕、其樣子に寄公事場江引渡可申与奉存候、尤町中曁酒造共江者、猶又又私共より心得方之儀嚴重可申渡置与奉存候、以上。

七　月　　　　中　川　平　膳

　　　　　　　半　田　左　門

長　又　三　郞樣

七月。半知借上に付き主家を追はれ職を失ひたる者の救助を講ぜしむ。

〔三州治農錄〕

今般御家中半知御借上、町・在指引方等之儀就被仰出候者、都而召仕候者之內暇遣、無是非夫々出所之在所江立戾り候而も便り方無之、流浪同樣之姿に相成、產業之手段も無之、おのづから路頭に立候者出來之程無覺束候。左候而者、去年以來格別に御救等被仰付候御趣意にも違候條、各於手前無油斷被相調理、稼方相應に取續方等之儀遂詮議可被取扱候。此段可申談旨、御用番又三郞殿被申聞候條、被得其意、右躰之者有之候はゞ厚世話有之、猶更取扱方等可被申聞、年寄中江可相達候事。

七　月　　　　御　算　用　場

八月二日。竹澤御庭の泉水に鮎簗を設くべきことを命ぜらる。

本文は江戸よりの命なり

〔成瀨正敎日記〕

八月二日

一、竹澤御泉水へ每之通鮎簗爲懸、御獲柄は御廣式ゟ指上候樣被仰出候。時節後可申候間、手早に出來候樣御申渡可被成候。指急候處、今日年寄中席御用に而早便被申渡候故、分而早便は不申渡旨。

八月三日。百姓の直接諸給人に收納延期を請ふ等のことを禁じ、規定の步入に隨ひて納入せしむ。

〔改作方御仕法留〕

御郡方之內百姓共、諸給人ゟ延米相願候者も有之、且給人渡り切手指引方ゟ取請候儀茂儘有之躰。元來給人与百姓与直對之儀は難相成儀に候。以來右之族心得違無之樣御家中ゟ御觸渡有之候條、可得其意、向後右等之儀に付何歟歎聞候之趣有之候共、一圓不取揚候間、不相洩樣可申渡。將亦皆濟狀請取に諸給人ゟ罷越候節、中には無謂右狀渡方及遲滯候向茂有之、引合方茂延引に相成候に付、已後一統速に可渡樣、是又御觸渡有之筈に候。何分皆濟手後無之樣与之御詮議に而、御觸出有之程之儀。然所百姓共、此末等閑之族有之候而は不輕事に候。近年中には步入半紙帳格之通可指出、幾重にも出情爲相進、いかにも預り狀等速に取請、皆

濟狀申請方遲延無之樣主附中において粉骨を盡し可申、惣而改作之御法違亂不仕樣、先頃來被仰渡通に候條、夫々可得其意候、已上。

酉八月三日

御郡所

改作所

諸郡惣年寄・年寄並中等

八月四日。前田齊泰の考案による竹澤御庭の泉水成るを告ぐ。

〔成瀬正敦日記〕

九月朔日

一、竹澤御屋敷御好之御泉水之儀、御尋之趣申進候所、八月四日出來之由三十人頭申聞候旨、同日裏書御返書御申越候。則出來いたし、三十人頭致見分候段、同九日出を以一通り御申越候得共、御好通り出來いたし候哉、委細不被仰越候付、不得申上候。猶更出來候樣子御見分被成、御泉水緣土留之處、其外水懸り淺深之樣、惣恰好被繪圖御取立、委曲御申越可被成候。尤書圖之儀は、至而麁繪圖に而宜御座候、以上。

九月四日

一、竹澤御泉水之儀繪圖被取立之儀、義兵衞方へ一昨日申遣、三十人頭へ申談置、且今日出

席懸に見分之儀申遣置。則今日一足早めに致出席、竹澤御屋敷へ罷出、草履直し輿一召連る。御泉水堀替出來之所致見分候所、則先達而之御好通に致出來居候事。

八月五日。御郡奉行を收納米の代官たらしむる制を廢し御郡年寄等の取扱に復す。

〔改作方御仕法留〕

別紙寫之通御用番年寄中被申聞候條、被得其意、縮方等之儀得与詮議有之、仕法取極可被申聞候、以上。

八月五日　　御算用場

兩役御郡奉行中

御算用場奉行江

諸郡御收納米、侍代官之外前々より十村等に納方被仰付置候處、文政四年御郡方御仕法之砌、無口米に而御郡奉行代官に被仰付、手附に爲納候得共、不正之者有之、煩敷儀共有之に付、去々年より右納手附指除、先づ當分新田裁許等江納方申渡候得共、御收納方等色々相混じ、其內心得違之者も出來いたし候に付、今般御郡奉行代官之儀者御指止、古法之姿を以、御郡年寄共江納方被仰付、前々被下候口米之半口米被下候。殘半口米は是迄之通御郡奉行役所調

用米に可致候。依之に以來御收納方等之儀得与遂詮議、仕法取極可申聞候。且當時之御郡方手附者指止可申候。

右之通御郡奉行江可被申談候事。

丁酉八月

八月十日。半知借上に付き役出銀の提出方に關し告ぐ。

〔每日帳書拔〕

八月十日

一、半知被仰付候付、役出銀は半知高に當分上納、右之外諸上納等一作御用捨被成候。來年より之儀は追而可申渡旨申渡。

八月十九日。本年の酒造高は昨年の如く例年の三分の一を過ぐることなかるべきを命ず。

〔三州治農錄〕

當年御領國中酒造高之儀に付、別紙寫之通御用番年寄中被申聞候條、被得其意、夫々可被申渡候。且是迄酒造高之外決而過造被致間敷儀に候所、中には心得違過造等いたし候者在之躰粗相聞、沙汰之限に候。當年之儀去年酒造高外一圓過造等不致樣、急度可遂僉議旨別段被申

聞候筋も候條、各於手前嚴重詮議有之、猶更縮方之儀可被申聞候。品に寄、指懸り當場役人相廻儀も可有之候條、此段兼而可被申渡候、以上。

八月十九日　　　　　　御算用場

岡田等兩人殿

當年御領國中酒造高之儀、例年之三ノ一、去年酒造高之通酒造可致候。尤右之外増造不致樣、縮方嚴重可遂僉議候。

八月

右之趣被得其意、心得違無之樣急度可申渡旨、所々町奉行等並御郡奉行等江可被申談候事。

八月廿四日。馬士等長綱を以て馬を牽き及び喰はへ煙管を爲すことを禁ず。

〔御郡典〕

牛馬口附綱之儀、御定も有之候處、甚猥に相成、長綱を以不作法之牽方致候者多、第一道脇に植付有之候大豆等に指障、不輕儀に候條、御定之通綱爲相改、尤不作法之牽方不致候樣、嚴重馬士等江可申渡置候。斯申渡候上、心得違之者於有之には、村役人は不及申に、誰々に不寄急度見咎可申候。若こだわり候者有之候はゞ押置、無泥可及斷に候。且亦追々稻等刈入

之時節に付、村中等くはへぎせる一切仕間敷。若右たばこ火抔に而出火有之候而は、何れも可及難儀に候條、相互に令吟味、左樣之族無之樣可相心得候。尤右樣心得違之者於有之には、見咎召捕候樣、手先役人共ゟも申渡置候間、聊心得違無之樣、村々一統不相洩樣、嚴重可申渡置者也。

酉八月廿四日　　御郡奉行

口郡村々役人

九月二日。前田齊泰將軍宣下の式に列する爲束帶して登營す。

〔成瀨正敦日記〕

姫君は前田齊泰夫人

九月十一日

一、去二日將軍宣下・御轉任・御兼任に付、御前御束帶御轅被爲召、曉七時之御供揃に而御登城、御目見御着座首尾能被爲濟、夕七半時過御歸殿被遊候。此段爲御承知申進候。右御祝儀に付、姫君樣ゟ恐悦申上候間、御祝詞御呈書御指出被成候樣存候。追而姫君樣ゟ榮操院樣より之御勤事は、相伺直に角尾彌兵衞まで申越候。此段も爲御心得申進候、以上。

內府樣左大臣御轉任、大納言樣右大將御兼任之旨も申來る。

九月四日。百姓の借銀辨濟方法に關する細則を示す。

〔司農典〕

御郡方百姓相互に致助力、無利足に而貸置候分、年賦相對に而可遂指引候。町方等より借物いたし候分者、如御定都而可爲無指引旨、先達而申渡置候通に候。右に付御郡方に而町立与申ケ所、大小數ケ所有之、其ケ所端に町並に他村之者共家建いたし居、一ケ所之樣に相成居候所も可有之、其差別難相立候間、左樣之分者都而町立之内ゟ結込可申候。且於御郡方都而利息貸与申者無之筈に候得共、萬一是迄之仕來に而、自然心得違いたし利足立に而借貸致置候分有之候はゞ、尤可爲見消候。此段夫々不相洩樣可申渡候、以上。

九月四日　　御郡所

改作所

諸郡惣年寄・年寄並中

〔御改方に付御觸之趣寫〕

一、惣年寄・年寄並奧書物昨今之分者、無利足に而令返濟、村々御收納不足是又昨今之分、無利足に而指引可致事。

但、兩樣共天保六年以前之分は都而見消、役人奧書之分昨今之分たり共都而見消之事。

一、町人より借物いたし候分、如御定之都而無差引たるべく候事。

一、百姓相互に無利足に而貸置候分、年賦相對に而指引可遂事。

但、御郡に而利足貸与申事無之筈。萬一是迄之仕來に而自然心得違、致利足立貸置いたし候分は可爲見消事。

一、屎物之儀は耕作要用之品に而、屎物仕入として仕入、手前是迄借延に相成居分は、都而無利足に而五十ヶ年賦、當年分者無利足指引可遂事。

一、諸品買懸り物、當春より之代料者、夫々爲相排可申、前々之分者可爲無指引事。

酉　九　月

九月八日。非人小屋に收容せられたる窮民を成るべく出所せしむべきことを告ぐ。

〔三州治農錄〕

非人小屋御救人共之內出人之儀、先達而各手前詮議候處、被下銀に不及出人に可相成分、裁許與力於手前相撰、村名等相調指出候へば、村役人指向、彌出人に可相成分は、村方〻召連、罷歸候樣可申渡旨。且倒込人指留方申談候へ共、此儀は難相成段被申聞候に付、委曲年寄中〻茂相達候處、詮議之通可申談旨被申聞候條、裁許與力より出人相撰申達候者、精誠出人有之樣村役人共に兼而可被申渡候。倒込人之儀も、可相成丈無之樣、是又可被申渡置候、以

上。

九月八日　　　　　　　　　　御算用場

御郡奉行中

九月十一日。領內に大風あり。

〔本多政和覺書〕

九月十三日

一、當十一日之大風雨に而、石川郡之內稻吹折れ等痛候處有之、山畑は大きに痛候由。且安原濱之獵船辰巻に而吹上、八田之濱に而落くだけ候旨。潰家又根返り木等有之由年寄書付、改作奉行より昨夕出。今日射水之郡奉行より、彼方海邊等六十年來之大風、稻穗首吹ちぎれ、はさ吹散し、高波等も有之、潰家等も有之由注進書付今日出之。石野右近よりも別席に而、氷見御藏吹まくり潰家も有之由。獵綱餘程流れ候旨等。今石動も潰家有之由。宮腰奉行よりも御舟小屋損所有之。吉久御藏御普請出役之大脇六郎左衛門も罷歸り、屋根吹まくり等之事。右夫々達有之候事。

九月十三日。石川郡笠舞の孝子勘右衛門を褒賞す。

〔溫敬公記史料〕

九月十三日。褒旌石川郡笠舞村孝子勘右衞門。賜物。

九月十四日。野町神明社內に於いて芝居を興行することを許さる。

〔本多政和覺書〕

九月十二日

一、町奉行中川平膳ゟ別席に而逢、頃日町方之樣子相尋候節、此間米價も下り、貸附銀仕法も申渡候故人氣も不惡候。加樣之處に候間、兩橋普請を當冬被仰付候はゞ別而可然、巡見上使も近より、何れ來年は御普請無之とは難計候間、右之通被仰付候樣仕度事。

但丹州ゟ、自分に平膳別席之節、神明社內に而頃日芝居爲仕度、御差間も有之間敷哉之旨等申聞候由之事。

右芝居之儀不差間旨、十四日平膳ゟ申入。

九月十九日。前田齊泰登營して將軍宣下の祝賀能を陪觀す。

〔成瀨正敎日記〕

九月二十八日

一、昨十九日今度之爲御祝儀御能被仰付候間、御見物被成候樣上意之旨、去十六日御老中御連名之御奉書到來、則昨曉七半時之御供揃に而、六時過御登城被遊、暮六時前御歸殿被成候。

御城之御樣子別紙之通。

今日御登城被遊候所、御能御見物上覽之御間出御、御能始り御目見、御懇之被爲蒙上意、御見物之內御老中を以上意有之、御中入之內御料理御頂戴、御能相濟最前之通御目見、於御黑書院大御所樣江茂御目見被仰上、惣而御三家樣御同樣之御取扱に而、御格別之儀、難有被思召候事。

九月十九日

九月廿一日。德川家慶將軍に任ぜられしを以て祝儀の爲物を前田齊泰に贈る。

〔成瀨正敦日記〕

十月二日

一、前月二十一日附之紙面に、今般將軍宣下被爲濟候爲御祝儀今日從公方樣上使を以御拜領、右大將樣・御臺樣より茂上使等を以御拜領物被成候。依而榮操院樣へ御普爲聽被仰進候付、御口上書入御覽差進之候條、御日柄宜敷時分、御使之儀御近習頭江可申談旨。且本文之趣に付、御前迄恐悅之呈書可指出旨申來る。

〔續德川實紀〕

廿一日將軍宣下・御轉任・御兼任濟ませられしによつて、紀伊大納言・尾張大納言・尾張前大納言・德川鶴千代麿・松平加賀守・松平三河守・松平越前守・松平上總介・松平淡路守・松平大藏大輔・松平兵部大輔・松平右京大夫・酒井雅樂頭・松平肥前守・松平因幡守・松平安藝守・松平大隅守・松平阿波守・松平大和守・松平右近將監・松平左兵衞督・松平溪山・松平越後入道・酒井靄山・松平桂翁のもとに、兩御所より御使して、時服・卷物その他おくらせ物あり。

九月廿三日。前田齊泰、借財返辨の新令に對し人心動搖するを以て之が對策を町奉行に命ず。

〔御親翰留〕

從來勝手向逼迫至極之所、昨年已來莫大之引方にて埋合之手段無之、今般家中半知借上、且難澁者爲成立諸借財指引方仕法も可申渡旨、年寄共僉議之趣段々申越、兩條共不容易儀に候得共、此外手段無之旨に付、無是非半知借上之儀申付候。借財指引方之儀者、貧民爲成立申渡候仕法に候得者、不心服も有之間敷所、會得方も不行屆哉不穩。第一府內金錢甚拂底、下々生業乏深令困窮段追々達聽心懸り成事に候。人氣により金錢も潛み候躰にも相聞え候。年寄共よりも無油斷遂僉議可申候得共、其方共盡精實念頃に申諭、人氣相和し、市中靜謐之樣可取計候。金錢拂底、旅人通行之指支に相成候躰も無之哉、是等之所も心付可申候。市中人

氣取治方は、專其方共取計方に有之事に候。やもめ抔纔之貯を町會所へ指出置、少々之足物を請其日を送り候族之者迄も、無利足三十ヶ年賦与申渡、深く及迷惑候躰相聞候。其方共油斷有之間敷候得共、法は平等に申渡候儀勿論之事に候得者、右躰之者共之儀は、公之憐愍をもて聊非道之沙汰無之樣厚致世話、靜謐之取計肝要之事に候、以上。

九月二十三日

町奉行中

九月廿五日。諸士の家政を整理し及び役向の人撰と賞罰を愼むべきことを組頭に令す。

〔成瀨正敦日記〕

九月二十五日

一、此間調替に指出置候三組頭へ被仰渡之覺書寫、調替今日被相渡、御近習頭中へ申談方は、追而指圖有之迄相見合可置旨被仰聞。覺書右之通り。

今般御家中半知御借上に付、上納等御用捨之儀も被仰出、且諸借財返辨方等之儀、先達而申渡候通に候。元來近年一統難澁に指迫り、甚敷ものは勤仕等にも指支候族も有之候躰。尤面々之不心得より如此之所へも至候儀には候得共、一つは又時勢に依而、無據及難澁候ものも

多く有之事に候。夫故只今迄之形に而、借財之艱苦を一統に遁れ候所には、容易に至がたく可有之事に候。然所今度右之通被仰付候段、御上御財用方御不足故に而、於御家中もいづれも可爲難澁儀に候得共、心得方宜候はゞ以後之取續方却而相成易き趣も可有之候。近年世上一統奢侈之風に流れ來り候故、ます〳〵費用打嵩み、難澁深く相成、心ならず職分之勤をも怠り候所江至り候段、無本意次第に候。此所において何茂勝手運び之道も相立、面々之勤を勵み、治亂共に御奉公等存分に出情いたし度段、誰々も別意は有之間敷候。然ば今般加樣に被仰付候御時節、諸士中一統志を急度相立、從來之仕癖を離れ候而、行々財用方之苦勞なく、公私に付而本分之勤を闕不申樣之所江至り不申而不叶事に候間、此所各能々被相心得、組・支配之人々御教養方、萬端行屆候樣差引可有之候。

一、奢侈之儀は種々之品共有之、一端には止り不申事に候間、一々申達候儀も難相成、衣服・飮食・家居之上より、外邊之付合・音信・贈答之品迄、皆分限に超過いたし候躰に候間、萬端に心を被付、儉約を以取續、御奉公等情に入候樣、能々可被申諭候。

一、御家中・町・在ともに、以前は借財いたし候儀を相厭、聊之借財をも心に掛、致返辨候躰に候處、近年は調達方自由に相成候付而、借財いたし候儀を厭不申。夫故漸々以彌不義理も致出來、何か不宜儀共も有之候間、各にも其心得有之、組中儉約を守り、向後容易に借財無之

樣に可被申諭候。但只今迄之仕癖有之事故、是以後には改り兼可申候間、重々示談候而可然候。

一、儉約と申候も、全躰本分之勤を闕不申、文武之學事を勵み、御奉公情に入、臨時之御用をも無滯相勤、親戚・朋友等之交をも踈略にいたす間敷爲に候間、此心得方を不致忘失、諸事相勵候樣に重々可被申談候。

一、右等に付而は、御政事之大要と申候は、御人撰と御賞罰に可有之候。平士役掛之人々は、追々又重き役儀をも被仰付事に候へば、初役之人撰別而大切に被相心得、重々入念に可被撰出候。組之人品被見分候には、とかく平生親敷付合不被申候而は徹底いたしがたく可有之候。是迄尤心得も有之躰に候得共、向後猶又示談有之、今一遍親切に世話有之可然候事。

一、組中勤切・年功等有之もの、及び惣而心得方宜敷人々等之儀、時々被申上候而、或は役儀又は御加恩等被仰付候儀も毎々有之事に候。就夫人は皆得手不得手之有之ものに而、萬能兼備り候ものは先は無之事に候間、其人々之得手之筋を能被相勘、其筋之役儀に撰出有之段勿論に候。其人之得役を被仰付候上は、其役儀久敷相勤候樣に無之而は、役筋之御奉公不全儀に候間、役筋において勤功有之ものは、先は役儀は其儘に而御褒美之御沙汰可有之候。且又右之通之譯に候間、久敷相勤年功有之ものに候とも、不働に而各別御用に相立不申樣之人々、

結構に轉役抔之儀は當り不申候間、向後人品を不論して、只其人々爲に轉役之儀を被相願候儀抔は有之間敷事。

一、組中勤功等により御褒美之儀、又は轉役之事は、每々被相達候得共、心得方不宜人々退役又は御咎等之儀を被願出候儀は、先は稀に有之候。此段心得方少相達之樣に被存候。左樣之儀を被申出候に泥は無之事に候間、退役又は御咎被仰付可然人々之儀は、向後聊無泥可被申聞候。

右之趣可被得其意候。兎角支配有之人々、少も油斷候而は、士中成立得不申、人氣も散亂可仕事に候間、深く被相心得、如何にも士氣を勵、正路に趣き候樣に可被引立候。右に付今般拙者共迄被仰出之趣茂有之に付、譯而此段申談候事。

九　　月

九月。新穀を濫に消耗することを戒め且つ食用に供せらるゝ植物の栽培を奬勵す。

〔司農典〕

去年非常凶作に而一統及難儀に、當年順氣に而新穀出來之所、例年与者格別早く食用いたし、且來年者閏月も有之、旁以食用之所一統可致心得儀に付、別紙之通御算用場より申談有之、

則寫相渡之候條、得其意、夫々小百姓に至迄も、不相洩樣得与申諭置候。麥作之儀者、近年無油斷作增候躰に候得共、猶更精誠を盡し、山畑等者不申及に、土地相應之處者成限り爲蒔廣可申候。尤麥作而已に不拘、都而食用之品聊に而も蒔植等可致候。右之趣不致忘失之樣、爲相心得重念可申諭候。且山入村々之儀者、葛根・じやうぼ其外草根等、食用に相成候品爲取入可申、兎角平年に相成候而者不作之難儀を忘れ、右等之品貯候儀不致儀者人情に候間、何与歟仕法を以成共、貯方爲致度事に候。尙一統詮議之趣承度候、以上。

九　月　　　　　　　　　　　　　　　　　　改作方御郡奉行

諸郡惣年寄・年寄並中

去年非常之凶作に而末々食用乏敷及難儀に候儀、何れも承知之通に候處、當年之順氣に而秋成宜敷一統安堵之事に候。乍併人々手前少々之貯も去年之躰に付食盡し候上之儀、殊更當年者例年与者格別新穀も早く致食用、來年作躰之熟不熟も難計、其上閏月も有之儀旁以心得可有之儀肝要に候。尤右等に付穀類を買しめ候樣之儀者有之間敷候得共、食用之品は不限米穀に人々成限大切にいたし、猥に費し不申樣。麥作も猶更せり込爲植候樣末々ゟ得与申諭可申事。

「三州治農錄」

九月。米穀を用ひて菓子を製造することの禁を解除す。

去年非常之凶作に而米穀拂底に付、輕き者食用に相成品物は格別、干菓子・蒸菓子等取扱候儀指留置候へ共、最早新穀出來之時節に至候に付指解候條、干菓子等取扱候儀可爲勝手次第候。

右之趣被得其意、夫々申渡候樣、所々町奉行幷御郡奉行等ゟ可被申談候。且又近來品々榮耀之菓子類も有之候條、左樣之品々以後取扱不申樣可遂詮議旨も夫々被申談事。

九　月

今度干菓子等取扱候儀、可爲勝手次第候。併近來品々榮耀之菓子類も有之候條、左樣之品々以後取扱不申樣可遂詮議旨申渡候處、榮耀の菓子と申儀は、其品取極候儀致兼候段、金澤町奉行申聞候。依而是迄取扱來候品者、當分商方指解候。以來新規之菓子漫に製候儀不相成樣に申渡、尚更取締方遂詮議候樣、所々町奉行幷に御郡奉行等ゟ可申談候事。

十二月廿六日

十月二日。前田齊泰施政に關し老臣に諭示したる書金澤に達す。

〔本多政和覺書〕

十月二日

一、左之御親翰、前月廿四日城州被召被渡下候由に而、城州より添紙面に而到來、今日何茂

拜戴。

去冬以來、窮民追々飢にも可至躰之處、重々取扱方有之、且各を始救方江加入も有之、先々領國中無異儀新穀出來之時節に取付申儀、彼是心配故与令大慶候。尤油斷有之間敷候得共、猶更町・在靜謐之樣取計、旁遂僉議候樣、播磨守等へ可被申遣候。將又去年來致救方候町・在之者共へ者、此頃假にと歟褒賞之沙汰におよひ可然哉と存候。尙僉議有之樣可被申遣候。

一、金澤表人氣不穩躰相聞、且金錢甚拂底、下々及困窮候之樣子、追々相聞、心懸り成事に候。猶更取扱方重々僉議有之度候。今度金澤表僉議之趣、紙面令披見候。市中人氣者、町奉行所扱方第一之儀に候へば、先づ町奉行申聞通与申儀も尤に存候。併一旦極相場を申渡候とて、强而押通候事に而も有之間敷、時々見計も可有之、兎角人氣に預り候儀与相聞え候。何れ各にも辛勞察し入候。

一、諸士儀は、か樣之折柄下々へ對し、不筋之取扱無之樣、義氣を勵し、筋能取計候之樣可心得儀、是等之趣も一統江申出し可然哉と存候。猶更得与被相考、心付之程委曲に被申聞候樣いたしたく存候事。

〔每日帳書拔〕

十月十日。犀川及び淺野川の橋梁を改架し工匠をして職を得しむ。

十月十日

一、兩川橋相損、不遠內懸替不被仰付而は不相成。然處年柄に付、今年大工職之者等稼方も無之困窮之躰に付、御救旁右兩橋懸替申付候旨等申渡。

〔文化より弘化まで日記〕

當年御家中半知等に而、諸職人甚困難に付、爲御救犀川橋・淺野川大橋・小橋懸替被仰付、當年より取懸。

十月十五日。銀仲預手形裁許升屋次右衛門・酒井宗左衛門その職を止めらる。

〔雜事日記〕

升屋　次右衛門
酒屋　宗左衛門

右之者共銀仲預手形裁許申付置候に付、右手形之表加印いたし來候處、樣子有之兩人共咎申付候。依之此節出來之小割札に者、右兩人印形相省候條、是迄之通用之手形与入交、諸上納を初可致通用候。

十月十五日　　奥村內膳

〔成瀨正敦日記〕

十月十九日

一、銀手形裁許枡屋次右衞門・酒屋宗左衞門儀、樣子有之咎申付有之候に付、當時通用銀手形に兩人之者名印有之候得共、追々出來之新札には右印相省候間、無滯通用可致旨一統被仰渡候。覺書寫、木村彌十郞を以御勝手方より被指越、御近習頭等へ可申談旨也。依而木村茂兵衞幷奧御納戶木村多膳へも申談置候事。

天保九年二月の條參照

十月廿四日。銀札と錢との公定相場を解除す。

〔觸留〕

錢拂底と申立、相場引立不融通之體に付、銀手形百目者十貫文、五十目以下小割札茂右に准じ取引いたし候樣、當七月申渡置候得共、右極相場指解候段、町奉行ゟ申渡候條、一統其心得可有之候。

右之趣被得其意、同役中傳達、但支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十月廿四日　　奧村內膳

十月。米價大に下落す。

〔文化より弘化まで日記〕

米穀甚拂底之所、當年作方景氣宜敷に付、諸方に隱置候米十萬石計所々より出る
九月十日より批屋米一升に付百文賣。
十月米一升代八十九文になる。

十月。奧御納戸方に於いて藩侯等の衣服料節減の方法に關して議す。

〔成瀨正敦日記〕

十一月朔日

一、今度各別御召料等御省略被仰出候付、奧御納戸御仕切銀高之内五百貫目減少之儀等、僉議之趣別紙之通竹下源兵衛より申聞、則申上、紙面之通心得候樣申渡候間、爲承知別紙指進之申候、以上。

今般御書立を以被仰出之趣、誠以奉恐入、夫々精密遂僉議申儀に御座候得共、是迄追々御省略方被仰渡候度に穿鑿仕、成限り御省略之品茂出來之上、猶又午年嚴敷御省略被仰渡候付、精誠遂詮議、都而御買上物等、定直段等引下げ方之儀迄茂互細詮議仕、無油斷御省略之筋相立候樣心懸取計申儀に御座候。當時御仕切銀高之儀は、文政十一年より五・六ヶ年之間、御官服・御指料御修覆等之御入用高相省き、御召料之分迄年中上り方・御入用方、御在國・御在府共打込平均に而、一ヶ年當り銀之内三之一餘り御減少之銀高を以、先一兩年之所、當時之御仕

切渡り銀高に而御辨用之事に相極り、萬一御不足に相成候得ば、臨時御引足銀請取申儀に御達申置候儀に御座候付而は、色々於役所手繰等も仕、右御仕切銀高より相嵩不申樣、御買上物等種々遂詮議御運方取計申儀勿論、御召料上り方員數茂追々御減方被仰付、是迄可也御仕切高に而御辨用之儀に御座候間、今般之被仰出半高に而御辨用之儀は、迚茂被爲成間敷哉与奉存候。尤今一篇御麁服之儀被仰出候事故、此後御入用方茂必相減可申候得共、御召料之御品に寄、出來之時節御貯用之分御買上に仕置候得ば、格別御益之筋も不少儀御座候故、中々半高に被仰付候而は、却而品に寄甚御不益之筋出來可申哉与奉存候。併今般御手元之儀、如何樣にも御差詰御省略被仰付度御趣意に付、何分御入用方等詮議仕、相減申樣仕度御座候得共、前段に相認候通之御仕法に而、指當り減方出來不申候得共、先年より一ヶ年當り御仕切銀高二十五貫目之內、五ヶ一五貫目御減少、御在府・御在國共二ヶ年打込、四十貫目之銀高に而繰合御辨用之儀に被仰付、自然御召料上り方多、御入用茂御不足仕候ば、其時に委曲御達申候而、臨時御不足高請取候事に仕候ば可宜哉与奉存候。尤右五ヶ一御減少之儀に御座候得ば、自ら御貯用之品茂御手薄に相成申儀御座候間、御召料之御品に寄御貯用不仕、御用之節出來指上申儀茂可有御座哉与奉存候。五ヶ一御減少之儀、指當り何々御省略仕候而減候与申譯は聊無御座候得共、後々御召料上り方格別に御減可被仰付与奉存、先加樣被仰付候而

茂、御辨合茂出來可申哉与詮議之趣御達申候事。

酉十月　　奥御納戸

十月。百姓の互に稻縮りを嚴にし租納を完からしむべきを告ぐ。

〔司農典〕

諸郡村々惣百姓・小作之者作高稻縮之儀者、村役人及五人組之者穿鑿嚴重に無之而者不相成、且肝煎・組合頭之縮方者、其村於惣百姓共に夫々可致譯。若無心元儀有之候はゞ、組主附又は廻口惣年寄等之內江可申斷儀に候之處、甚だ縮方等閑に相成居候哉に相聞江、近年諸郡共御收納明之者多、不埒之趣に候。於組主附にも、右縮方之儀者村役人等江每度可申渡儀。畢竟組主附にも村々取扱不親切儀与存候。右縮方之儀村役人於手前に、當年御收納無心元存候者は、先致稻縮、御收納不指支樣詮議之上、稻爲刈取可申。人柄に寄縮致兼候者は、組主附江相屆、役人手前に而稻刈揚、御收納爲相濟、其餘作人江可相渡程に無之而者、御收納縮方不全儀に而、尤右之詮議は御收納分而已之儀に而、餘指引爲めには不相成候。此所得与村々役人江可申渡、惣而村々取扱之儀者、先達而御算用場より申渡有之、其節申談置候得共、尙更前段之趣申渡候條、村々役人等江嚴重申渡、人別御收納縮方、不縮無之樣重々可申渡候、以上。

酉十月　　崎田達之助
　　　　　河合内匠
諸郡惣年寄・年寄並中

十一月四日。村々奉公人の年季は契約の如く勤務すべきことを告ぐ。

〔司農典〕

村々奉公人共、年季を以取極、給銀等相渡置候者、定之年月相滿不申而者、暇相願候儀不相成候處、今般諸借財向等御仕法被仰渡方に依而、彼是心得違之者も有之躰に相聞得候條、都而奉公人共可爲是迄之通、勿論給銀等增餘分に相渡置候分者、其割を以可爲致奉公候。此段申渡、縮方嚴重可相心得、若奉公人共之內心得違之者有之候はゞ、其段可及斷、急度可申付候。尤主人々々心得方等之樣子可申聞候、以上。

酉十一月四日　　井上井之助
　　　　　　　　本橋一之進
惣年寄・年寄並中

十一月八日。去年以來米錢を窮民に施與したる者に賞詞を與ふ。

〔三州治農錄〕

近年米價高貴之所、去年又候不作に而、彌增高直に相成、末々及困窮候者有之に付、米・錢等を以相惠候者共有之段、何れも奇特成志之者共に候。此段右惠候者共江可申聞候。
右之趣遠所町奉行幷御郡奉行等江も可被申談候事。
困窮人共江取救候者共之儀に付、別紙寫之通御用番年寄中被申聞候條、被得其意、去年來救方いたし候者共江可被申渡候、以上。

十一月八日　　御算用場

内藤より關澤迄十三人殿

追而本文致救方候者之內、格別抽奇特之者有之、別段御稱美等被相願度向も候者、其段當場迄可被申聞候。且先々被相廻落着より可被相返候、已上。

十一月十四日。能美郡安宅新村の百姓助三郎孝行を以て賞賜せらる。

〔觸　留〕

能美郡安宅新村百姓　助三郎

一、鳥目　五貫文

右助三郎儀、母に孝心の樣子被聞召、奇特成者に付、爲御褒美如此被下之。
右の通り被申渡候事。

酉十一月

天保八年酉十一月十三日、手先より依御紙面、翌十四日若杉御郡奉行所に被召出、其方儀母に孝心の趣有之、奇特の至りに被爲思召候。依之鳥目五貫文爲御褒美被下之候條、謹而御受可申上事也。

御郡奉行

本年七月十七日の條參照

十一月十六日。享和二年以降町人の取高したるものを沒收する件に關し重ねて告ぐ。

〔每日帳書拔〕

十一月十六日

一、享和二年高方仕法後町人へ切高いたし有之分は、尤格之通取揚候樣改作方へ申渡候。依之町人共中には格別及迷惑候者も可有之哉。左候へば彼是無據趣を以申立候者も可有之候得共、元來町人に而高を持罷在候儀は不相成事候間、此儀に付何廉申立候而も一圓難承屆旨等、原五郞左衞門等へ申渡候事。

〔御觸留〕

付札、町奉行に

諸郡共村々次第に難澁深く、他村江之切高多く、村の者小作に相成居候村方も在之、御救等被仰付候ても、可成立期も無之に付、切高追々本村へ爲引取方之儀申渡候趣有之。就夫享和二年高方仕法後、町人江切高致し在之分は、尤格之通取揚候樣、改作方へ先達て申渡候。依而町人共中には格別及迷惑候者も可在之候得共、元來町人にて高を持罷在候儀は不相成事候間、此儀に付何廉申立候とも、一圓難承屆候之條、各々にも改作方御郡奉行と心を合、右等の分は不相洩爲持出、外產業に在付候樣可被取計候。御國民は一躰之儀、高持町人共可及迷惑候得共、改作方御仕法致違亂候ては不相成に付、不得止事今般右之通被仰付儀に候條、御仕法全く相立候樣被相心得、自然身元取亂及潰、外產業之手段無之樣の者在之候はゞ、左樣の者は分限に應じ御救方可有之候條、遂詮議可被申聞候。後々右樣不筋の趣無之、分限之稼を以取續候樣、不斷世話可有之候事。

天保八年酉十一月廿日　　　長　又三郎

〔每日帳書拔〕

十二月廿四日

一、享和二年高方仕法後取高等不殘取揚之儀、先達而申渡候付、當年作德米も改作方へ可取立筈候得共、差當可爲難澁に付、當年は高持人へ全相渡可申、尤來年よりは綿密に取立、一

廉之仕法相立候樣改作方へ可申談旨、御算奉へ申渡候事。

十一月廿四日。從來の製法以外に係る新奇の菓子類販賣を禁ず。

〔每日帳書拔〕

十一月二十四日

一、榮耀之菓子類、以後取扱不申樣可遂僉議旨、町奉行等へ申渡候處、榮耀之菓子と申儀其品取極候儀致兼候段申聞候付、是迄取扱來候品は、當分商方指解候。以來新奇之菓子漫に製候儀不相成樣申渡、猶更取縮方可遂僉議旨町奉行等へ申渡候事。

〔御郡典〕

卷目、御算用場奉行江

今度干菓子等取扱候儀可爲勝手次第、併近來品々榮耀之菓子類も有之候條、左樣之品可遂詮議旨申渡候處、榮耀之菓子与申儀、其品取極候儀致兼候之段、金澤町奉行申聞候。依之に是迄取扱來候品は當分商方指解候。以來新規菓子漫に製し候儀不相成樣申渡、尙更取縮方遂詮議候樣、所々町奉行幷御郡奉行等江可被申談候事。

酉十二月

十一月廿四日。羽咋郡福浦の孝女きいに賞賜す。

一、羽咋郡福浦村故喜之助娘きい孝心之様子被聞召、奇特之至に付一生一人扶持被下。

十一月廿四日

〔毎日帳書抜〕

十一月。來年以降五ヶ年に亙る藩の借財整理法を計畫す。

〔御借財方御圖帳〕

天保八年十一月調理、來九年より五ヶ年の間圖り方

一、十二萬五千八百十三石餘

右御家中知行高之內三ノ一御借上、小身之分幷御役料知割合有之、不足に相成候付、其分は御切米幷大身之人々手替足輕江割掛可申事。

右之通五ヶ年御借上之事。

但、五ヶ年分合六十二萬九千六十五石餘

右一ヶ年分拂方左之通

一、二萬石　　作難御手當米江除米

但、來年より於改作方新開增減等之僉議方有之に付、多少に不寄御入箇增にて、可相成此分都而凶年御手當之事。

一、一萬五千石　　引替所
一、二萬五千石　　大坂御年賦
一、二萬石　　江戸同斷
一、四千石　　地廻御借財
一、三千二百石　　大坂御廻米運賃
一、七千石　　御用捨米方幷藤右衛門等
一、三百五十石　　藤右衛門・德兵衛ゟ被下米
〆九萬四千五百五十石
殘而三萬千二百六十三石
代千八百七十五貫七百八十目　　石六十目圖り
外二千七十九貫目　　當酉年殘米代
九百九十二貫五百目　　來年御拂米九萬九千二百五十石之出目
三口〆
四千九百四十七貫二百八十目
此分を以御家中借財書上御取扱之御手當。

千貫目　　新御調達

但、此分巡見上使御入用を初、品々不時御手當。

亥　年

一、十二萬五千八百十三石餘　　御借上米

此　拂

九萬四千五百五十石　　戌ノ年之通

殘而三萬千二百六十三石

代千五百六十三貫百五十目　　石五十目圖り

寅年迄五ヶ年之間者

右同斷

右殘米三萬千二百六十三石を四ヶ年合せ

十二萬五千五十二石

代六千二百五十二貫六百目　　石五十目圖り

右之分四ヶ年中除置、寅年に至、引替所銀手形に而も、江戸・大坂御借財打切等之御僉議可然。尚其取扱之委曲、卯年より御借上之高、寅年に至僉議之事。

又重而御家中十五石御借上之僉議に相成候節、左之通り年寄中等半知差上候圖り。

年寄中自分知

一、八萬六千九百七十九石餘　　半知高

御家老中等

一、一萬三千六百七十五石餘　　同斷

御算用場奉行并御勝手

一、三千百八十石　　同斷

〆十萬三千八百五十四石

此現米

四萬六千四百十一石餘

外三萬九千三百八十石餘　　年寄中等半知外之御借上、去々年迄之通御借上之圖り

〆八萬五千七百九十一石計

內

二萬五千石　　大坂御廻米に而彼地御借財方江渡り

二萬石　　江戶御借財方へ御返濟

大坂行運賃米
三千二百石

木谷藤右衛門等、去年松田治右衛門より御調達之分
三千石

御用捨米方切手質之方江當年より年賦渡り之分
五千石計

〆六萬五千石計

殘二萬七百九十一石

年寄中等半知指上中者、如此出目に相成申候。

十一月。奉公口に離れ流浪難澁する者の救濟に關して通牒す。

〔御觸典〕

御算用場奉行江

當季武家・町家共召仕候者之內、致減少候者も有之、輕者流浪仕候者も可有之哉。町・在より出候者は、其支配々々江立歸り候はゞ、支配人譯而致世話、自分之稼方を以渡世いたし候樣申渡、成限り產業に爲在付候樣有之候はゞ、路頭に相立候も有之間敷候。自然當時便り所も無之、病者等に而稼方も不得致、必至与及難澁に候樣之類は、得与聞糺、實に無據分は願出候はゞ、品に寄御救方之儀御詮議も可有之候。且今度奉公口減少に不拘、難澁者之儀も尤同樣可被相心得事。

右之趣被得其意、遠所町奉行幷御郡奉行等江も可被申談事。

十一月

十一月。産物方役附を廢し、物價方役所を建つ。

〔御親翰帳之内書抜〕

十一月

一、近年新に株立運上等被指止候付、彼是取捌共も有之、且は近年諸色直段高直に相成候處、別而去年以來之年柄に付、彌以高貴に相成、諸人及難儀候躰に付、御算用場内に物價方役所相建、右等之御僉議被仰付候はゞ可然と遂示談、鈴木清之丞等右御用被仰付、是迄之産物方役所は御指止に而可有御座旨江戸へ伺、伺之通被仰出。

十一月。東本願寺別院の再建を許す。

〔御觸留帳〕

寺社奉行江

東末寺再建方之儀承届置候通に付、今般別紙寫之通り町方等夫々申渡候條、此段末寺呑坊へ爲承知被申渡、且末派之寺庵へ心得方等之儀も可被申渡置候事。

十一月

東末寺類燒後、未再建無之候得共、年柄に而輕き者困窮候付、爲稼再建方に取懸度旨承梢置候。依之門徒共寄進いたし候とも、時節柄過當之儀無之、身分相應に相心得可申候。勿論材木等寄進いたし候者有之共、夜に入り持運候儀可爲無用候。前々再建等に事寄、遠所等紛敷者致徘徊いたし、米錢等取集候儀相聞候儀も有之候條、此度之儀若紛敷躰之者も有之候はゞ、得与承糺、其所に留置可及斷候。

十二月九日。市儒上田作之丞の門下たる者の素行に就き探索せしむ。

〔御親翰留〕

高山喜一郎
千羽甫左衞門
關澤六左衞門
歸山五左衞門
富田賢六

右之者共之外に茂、上田作之丞とか申者之門人之由に而、毎度行歩裝束品能き衣類を着し、一樣之笠を用ひ、寺院之座敷抔へ打寄、酌女抔を呼寄及酒宴候躰。喜一郎儀難澁之役者を呼、囃子をいたし、又は難澁之盲人を呼寄、三味線をひかせ抔いたし及遊興候躰。五左衞門・賢六

などは從來勝手令難澁所、不相應之救方いたし、却而內輪向暨指引合等は、無味至極之扱有之躰に候。

玉川二源太
小塚與平
人見昌之進
山岸三十郎
久德加兵衞

右等も作之丞門人之樣子、變たる爲躰も無之哉、夫々委曲爲聞糺可申越候、以上。

十二月九日

大小將橫目中

十二月十日。親作たるものは小作の租米を引去りたる後にあらざれば用米を徵すること能はざらしむ。

〔改作方御仕法留〕

諸郡共御收納方之儀、百姓共において大切至極之儀に而、御作仕候者は、先達而御高に相當り候御收納米入濟、全皆濟相仕廻候上作德米引取可申所、其儀猥に相成、當時は右御作之用

米を先きに引取申形ちにも相成候躰。右に付御收納明之者致詮議候所、多分御收納明なから、親作江之斗米は全相濟居、甚以沙汰之限りに候。組主付等においても不行屆故に候。尤大銀・打銀之爲めに、作德米賣拂申儀は可有之候へ共、以來は卸作仕候もの、共高に相當候御收納全入濟不相濟內、用米引取候儀は不相成候條、此段急度可申渡候。卸作斗米之儀は、親作指圖之ヶ所江相斗申儀には候へ共、中には心得違之者は、一方之小作斗米は全御收納米に當て、又一方之小作斗米又は自分手作り之分は、作德米に相當居申者も有之候。此儀は甚不相當儀に候條、以來は都而小作斗米、御收納米与作德米与振分け爲相斗可申。如斯申渡候上に而茂、自然親作之者致心得違、御收納入濟前用米請取候者等有之においては、相糺候上急度手當方茂申付、品に寄持高をも取上可申候條、不相洩早速可申渡候、以上。

十二月十日　　　改作方御郡奉行

諸郡惣年寄・年寄並中

追而本文之趣は、都而高持居候親作人江申渡候儀に而、小作江申渡候筋に而者無之候。尤申迄も無之儀に候得共、自然此末小作共圖に乘、用米相滯等不埒之趣於有之は、尤嚴重咎方茂可申付、此段爲念申渡候、以上。

十二月十日。自今寺社及び町人に百姓の山林を賣却すべからざる等のこ

とを令す。

〔司農典〕

今般高方御仕法被仰渡候に付、山地等も御高に附候品故、追々及裁判に候。然處村方より寺社江致賣山置候分者、町人同様取揚にも可相成儀に候得共、寺社之儀者拜領山も有之儀に候間、寺社江賣切山に致置候分、今般詮議之上共儘指置申候。併年季等に而卸之山之分者取揚申候。町人之分は賣切山たりとも、夫々取揚申候。依而此以後寺社幷町人江、山地林賣渡候儀者勿論、卸し付候儀も一圓不相成、且寺社より是迄之買山、村々江切山・卸し付等之儀者可爲勝手次第候。此段今度村々江申渡候間、寺社御奉行幷諸町御奉行等江被仰渡御座候様仕度候、以上。

酉十二月十日　　矢部順平

辰巳淸太夫

御算用場

別紙寺社幷町人江賣山・卸し山等、以來不相成趣に付、御算用場江夫々相達候に付、寫相達之候條、村々不相洩樣分而可申渡置候、以上。

酉十二月十日　　矢部順平

諸郡惣年寄・年寄並中

十二月十二日。御郡奉行に令し領内の雜穀・薪炭の價格を調査せしむ。

〔御郡典〕

今般物價方役所相建候に付、御領國中百姓共より直に賣出候雜穀類并炭薪等、年々豐凶出來之儀、各手前得与示合之上、直段可遂詮議候條、被得其意、猶更入念可被遂穿鑿候、以上。

酉十二月十二日　　御算用場

兩役御郡奉行中

十二月十二日。近來新に諸商賣の株立運上を許したるものを停止し、自由に營業することを得しむ。

〔御觸留〕

巻目、御算用場奉行へ

近年新に株立運上相願、承屆置候諸商賣、今詮議之上右樣新規株立諸運上、并に冥加銀不殘被指止候。以後上納不及、諸產物銘々相働、御領國中勝手次第に賣買可致候。其內品に寄、

株立指上候而指支の筋も在之向々は、追て可遂詮議候。

但し、他國の品々は是迄の通り運上銀可指出候。

右之趣町・在の者共へ不相洩樣可被申渡候事。

十二月　　前田美作守

別紙之通御用番美作守殿被申渡、寫相達之候條、得其意、支配所之者共へ不相洩可有御申渡候。且又他國出の品運上銀、是迄の通り取立候分上納方等之儀者、當場物價方役所ゟ可被承合候、以上。

十二月十二日　　御算用場

十二月廿三日。質屋を從來の如く株立とし役銀を上納すべきことを命ず。

〔三州治農錄〕

御郡中質屋役銀新役立之儀に候へ共、株立指止候而者御縮方に差障候に付、是迄之通株立に申付置候條、役銀只今迄之通致上納候樣可被申渡候。當年分役銀上納方之儀者、別紙之通に候間可被得其意候、以上。

十二月　　御算用場

諸郡御郡奉行中

正月十二日は天保九年

木下内記は巡見上使の一人

聞番定助はは聞番の補助にして常にその勤務に當る者

神田吉左衞門は馬廻頭

奥村五郎左衞門は小將頭

當年酒造三ノ一造候樣申渡候に付、役銀も一作高三ノ一取立候。質屋役銀之儀も、當年者御仕法被仰渡候に付、一作十分一取立候條、此段可被申渡候。右兩樣共、例年之通相濟候向も有之候はゞ、來春に至り可相返候條、其段物價方役所江及斷候樣、夫々可申渡候、以上。

十二月廿三日　　御算用場

諸郡御郡奉行中

十二月廿五日。巡見上使その出發の時期を定めたることを告ぐ。

［本多政和覺書］

正月十二日

一、木下内記殿等御紙面之趣に而、去二十五日内記殿御宅へ聞番定助玉井舍人罷越候處、内記殿等御列座に而、巡見出立時節之儀、三月中旬致發足候樣伺濟候。其節御領分に而之御取扱、成丈御手輕被成候樣にと存候旨等御申聞、覺書御渡。畢而用人罷出、巡見先に而被相尋候趣、心得に認候旨之書付。且別段途中等へ御使者等堅及御斷之旨等演述書も候由に而、舍人江御使書等以善右衞門被渡下。右に付神田吉左衞門・奥村五郎左衞門儀、表向主付申渡候由内記殿被仰渡候趣、且天明之振に相心得候樣可申渡旨、伺之通被仰出候旨。

十二月廿七日。切高の格合を改め品々帳を整理すべきことを命ず。

〔改作方御仕法留〕

百姓年貢相滯、無據致切高候儀、其許中精誠詮議方、曁切高格合之儀、享和年中遂詮議、諸郡江申渡置候處、當時は御郡々々仕來區々相成居、加州向切高格合別而致違亂、中には品々帳も不全向茂有之候。仍之以來切高諸郡一様に、享和年中申渡置候格合、猶又今般遂修飾改而申渡候條、可得其意、品々帳來春に至り、今度高方之儀夫々申渡候趣を以、諸郡共悉皆相改、印章を請可申候。依而者是迄之品々帳は、一切此以後不取用候間、其趣今度改而致し候品々帳之表に可書出置候。寺社・町人・百姓之分は、品々帳之內に別立に致し、帳冊之初に可調置候。且當七月迄に他村江切出置候懸作高、先達而被仰渡通り、追々元村江可取戾。七月以後之切高之分は、格之通取戾候儀不相成。此末切高之儀、尤成限り居村之中江切高可爲致候。自然其村取人無之、是非他村懸作に不致而難相成分は、廻り口之儀は不及申、打返遂穿鑿可申候。國違・郡違等、都而手遠之懸作高以來不相成候。且切高證文、去暮之分一組宛引統、口張組主付印いたし、正月十六日迄に無間違改作所江相達、措者共見屆之印章請、綿密に相心得可申候。主付代り合候刻夫々申送り方等、無違失嚴重可相心得候、已上。

酉十二月廿七日　　　　　　　　同役連名

諸郡惣年寄・年寄並中

正月十一日。領外の酒を賣ることの禁を解く。

〔御郡典〕

是迄遠所酒、於當町に賣捌候儀、於町會所に指留來候旨に候得共今般詮議之上、指構不申之樣、當町奉行ゟ申渡候條、此段酒造人共ゟ可被申渡候、以上。

御算用場

戌正月十一日

諸郡御郡奉行中

正月十七日。去秋田畠に手上高・手上免を行ふべきことを諭したるを以てその調査を徹底すべきことを令す。

〔郡方御觸〕

天保九年正月十七日御算用場奉行中同役一統ゟ被仰渡。

諸郡地元之詮議方者、農事根元改作御法第一之儀に付、前々詮議有之候處、近來右詮議方等閑に相成居候に付、去秋嚴重被仰渡、則其節夫々申渡、一統承知之事に候得者、申迄も無之候得共、以來常々無油斷可相心得儀に候。元來改作御法御取極之節、定免に被仰付候得共、

作損有之節は御償被仰付候儀に而、下々においては難有御法に候。就而者非常之年柄御貸米等之御手當無之而は不叶所、其砌には御手當も有之哉、當時に而御取極も不相知候。尤年々少之御手當者被設置候得共、引足不申儀に付、是迄凶年に者定式御入用御圖り之内より打欠御貸米等被仰付、別而近年打續過分之御償高に付、中々以不被爲行屆、種々六ケ敷御手繰を以御取扱被仰付候儀故、此末之御手當御手薄に候。依之右非常爲手當、今般都而地元之詮議方被仰付候儀に付、以來諸郡共手上高・手上免於有之は、右御物成年々御手當に御除置、外御入用に者如何樣之儀有之とも一圓御取用無之、且引免立歸り曁新開増免に當御物成も別除米に被成置、都而下々之御手當に被仰付候。然時は右御詮議方全下々御取扱之爲に候條、此所篤与可奉會得候。何にも右樣不被仰付而は、改作御法之御趣意茂立兼候儀に候條、何も此度地元之詮議被仰付候御趣意奉會得、下々に至迄心得違無之樣可申諭、誠以御國家へ之御奉公に候條、粉骨を盡し可致出情候。勿論懈怠之輩は急度可申付候事。

戊正月

二月四日。前田齊泰の子利順着袴の儀を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

二月四日龜丸殿御着袴御祝有之、爲御嘉儀兩御所樣より女使を以て一種一荷宛賜る。右大將

様・兩御御臺様よりも一種宛賜る。此外御内證にて兩御所様・兩御臺様より品々賜る。公よりも女使を以て、兩御所様・兩御臺様江鮮鯛一折宛献ぜらる。
爲嘉儀龜丸殿江も、以女使綿二十把・一種一荷を賜ふなり。大御所様より同斷。右大將様より一種一荷、兩御臺様より卷物三・一種充賜之なり。龜丸殿より御使以老臣兩御所様江被献、卷物五・一種一荷充、右大將様御臺様江卷物三・一種充被献之。

二月四日。巡見上使將に來らんとするを以て家屋道路等修理等の心得を令す。

〔巡見上使御觸寫〕

上使御道筋心得之事。

一、家修理、幷往來道惡敷所々、地盛可致出來候事。

但、地盛之儀は人々了簡切にいたし候而者、高低も致出來、却而歩方惡敷候間、於町會所遂詮議、追而可申渡候事。

一、小路々々喰違垣、前々町内より致出來候ケ所者、此度も共通に相心得可申候。其外町端に至り、角家々腰等見苦箇所者、兩角申談可致出來候事。

但、石浦町之内堂形前見通之小路は、寛政元年之觸合を以、町會所より致出來候事。

一、前通り中塗壁之所ゟ塗白土懸可申事。
但、町端に至り候而者格別之事。
一、家堺袖壁之間木抔見得候所、壁に而茂板に而茂不見苦打可申事。
一、小屋根下より突出候看板懸等取拂可申事。
一、軒下人除垣取拂可申事。
一、上使御通之節、むしこ不殘はづし、屏風立可申候。但しむしこはづし申候而者、閙等も無之指支之分は、見苦簾者打替、內に蔀等おろし置可申心得可有之候。
但、商賣人店餝り幷敷砂、御通筋亭主心得方等之儀、追々可申渡候事。
一、軒下溝耳石並宜敷直し、地盛可致事。
一、銀座・秤座ひし垣、外より見通候樣仕置可申事。
但、銀座は寶暦十一年の觸を以、菱垣之內障子建置可申、蠟燭座者菱垣取拂可申事。
右今般巡見上使御通りに付、御道筋之者共、右箇條書之通相心得、都而不敬之品不殘取拂可申事。
右之通裁許肝煎ゟ可被申渡候、以上。
戌二月四日　　　佐藤丈五郎

吉田丹次郎殿

天保八年十月十五日の條參照

二月。升屋次右衞門・酒屋宗左衞門等非行あるを以て遠所居住を命ぜらる。

〔大鋸文書〕

町奉行ゐ

金澤町人　水野甚藏
升屋次右衞門
酒屋宗左衞門
宮腰屋久右衞門

甚藏等三人は甚藏外三人の意なるべし

右甚藏等三人かね方御用相勤罷在候處、去秋金銀引替所ゐ餘人之名前を借、金銀引替に差出候に付、咎申付置候。此上可及穿鑿筈に候得共、其段は令猶豫、咎方差宥候。全躰常々貪利、僭上に而心得方不宜者共に付、遠所に居住替申付候。ヶ所之儀者追而可申渡候。以來御城下ゐ立入申間敷候。尤甚藏等三人ゐ被下置候御扶持方取揚候。

升屋手代　太助
酒屋手代　清兵衞

右太助等儀、遠所に居住替申付候。以來御城下ゐ立入申間敷候。

右之趣被得其意、夫々可被申渡候事。

戌　二　月

能州鳳至郡劒地ゟ　水野甚藏・宮腰屋久右衛門
越中射水郡伏木ゟ　酒屋宗左衛門
同　新川郡上市ゟ　升屋次右衛門
能州鹿島郡崎山ゟ　升屋次右衛門手代太助
能州鳳至郡鵜川ゟ　酒屋宗左衛門手代清兵衛

右甚藏等遠所ゟ居住替之儀申渡置候通に付、右ヶ所ゟ指遣候條夫々可被申渡候事。

二　月

二月。百姓の田地を廢して家屋を建て及び高を所有するものゝ商業を營むことを禁ず。

〔郡方御觸〕

付札、御算用場ゟ

田地等潰、猥に家建いたし候儀は不相成候處、近來猥に相成候躰不埒之事に候。依而右躰之者家建取拂、本村ゟ引取らせ可申候。町續之儀者、別而百姓風俗にも指障り候條、若難引取者

は人別方者町奉行ゟ引迯、地子米取立可申候。尤高持罷在候者共、人別引迯候上者高切出可申候。町續離候者、是迄聞届請居候者之儀は格別に候。尤以來猥に無之樣可相心得候。

一、高持百姓として商賣いたし候儀は不相成候處、近來猥に相成、百姓共商いたし候儀多有之、不埒之至に候條、改而嚴重申渡、夫々爲指止可申候。しかしヶ處に寄、商賣不致候而者必至与指支候向者、得与詮議之上可相達、其上に而可及指圖候。

一、鍛冶職等村御印に有之稼之品、且又菓物或は煎茶・草鞋等農業之妨に相成不申、町方商賣之障不相成品之儀は、見斗少々爲賣候儀は格別に候。右之趣被得其意、嚴重申渡候樣、御郡奉行ゟ可被申談候。若此後心得違之者有之、他支配之者見聞におよび候者、早速及斷候樣、所々町奉行等へ申渡候條、此段も御郡奉行ゟ可被申聞候事。

戌　二　月

二月。石川郡荒屋の孝子彌三右衞門賞賜せらる。

二月。是月褒旌石川郡荒屋邑孝子彌三右衞門。賜物。

〔溫敬公記史料〕

三月朔日。前田慶寧初めて諱を利住と稱す。

〔犬千代丸樣御用留〕

昨三日御廣式御書院において、拙者共犬千代丸樣御前江被召、當朔日相公樣より御實名被進、且御判も被進候間、拜見被仰付候段御意に付、則奉拜見候。御實名は利住樣与被稱候に付、此段爲御承知申進候。先以恐悅御同意に御座候。右御實名御先例も御用番江相達有之候間、右振を以御達有之候樣に与存候、以上。

三月四日　　山城守

庄兵衛

圖書樣

本年二月の條參照

三月四日。銀仲預手形裁許人を變更せしを以て新手形を發行すべきことを告ぐ。

〔觸留〕

當時通用之銀仲預手形裁許、當町枡屋次右衛門・酒屋宗左衛門江申付置候處、兩人共遠所江居住替申渡候に付、今般當町木屋孫太郎・千代屋久平江右手形裁許申付候。依而是迄通用之銀仲預手形、枡屋次右衛門等名前有之分、追々引替申筈に候條、夫迄之內は當時之手形諸上納等無滯可致通用候。尤引替日限之儀者追而可申渡候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

三月十一日。前田齊泰、江戸城西丸昨日燒失せしを以て老中に廻勤す。

〔見聞袋群斗記〕

三月十日曉七時過ぎ、江戸西丸城大御所様御座所なり。御臺所より出火、御殿閣不殘炎上、わづか二時許に回祿となる。十一日朝五時雨降る。公爲御機嫌伺御出馬、御老中御勤め有り。御先規之通御供人雨具不用笠なしゆゑ、外向之者感服之由なり。

三月十三日。前田齊泰就封の暇を受く。

〔溫敬公記史料〕

三月十三日。將軍遣老中太田備後守。來賜休暇。前將軍及世子遣松平伯耆守・堀田備中守・大夫人及夫人遣山田卯太郎内藤遠江守。來貽物。

三月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔成瀨正敦日記〕

三月二十三日

榮操院様江

當十三日以上使太田備後守殿、御國許江之御暇被仰出、白銀御卷物御拜領。大御所樣よりも上使松平伯耆守殿を以御卷物御拜領、右大將樣よりも上使堀田備中守殿を以御同樣御拜領。將又大御臺樣より御使山田卯太郎殿、御臺樣よりも內藤遠江守殿を以御卷物御拜受被成。同十四日依御老中方御連名之御奉書、翌十五日御登城、御座之間において御暇之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗鮑御頂戴、御鷹・御馬御拜領。且山城守・庄兵衞御目見、拜領物被仰付、重疊難有御仕合思召候。右御普爲聽被仰進候段、御口上宜申述候。

御使

三月　　　　御近習頭

三月十六日。幕府、前田齊泰に江戶城西丸造營の助役を命ず。

〔成瀨正敦日記〕

四月十三日

前月十五日、御老中方御連名之依御奉書、同十六日御登城被遊候所、御老中方御列座、西丸御普請に付御座所向幷大奧向共御手傳被仰付候旨、松平和泉守殿被仰渡、忝思召候旨拙者共迄被仰出候事。

右之趣頭分以上江寄々可被申聞候事。

〔見聞袋群斗記〕

三月十六日、西丸御普請御座所向暨大奥向とも御手傳之台命あり。前日依御奉書御登城之處、御白書院御緣頰執政の面々列座、御月番松平和泉守乘寛上意を演述せらる。御家之御上納高金十五萬三千七百五十兩なり。高一萬石に千五百兩宛之割合なり。尾州家・紀州家・溜詰等同樣に台命有り。當春より此金高上納せられ、同年十一月二十六日迄に皆上納し給ふ。

〔異事隨聞書〕

天保九年三月十日西之御丸御燒失諸國御金上り方之覺

凡金八萬三千二百五十兩	五拾五萬五千石	紀州殿
同九萬七千九百六十四兩	六拾萬九千五百石	尾州殿
同十五萬三千七百五十兩		加賀殿
同四萬五千兩	參拾五萬石	井伊掃部頭殿
同三萬四千五百兩	參拾參萬石	松平備後守殿
同一萬六千五百兩	同所	松平越中守殿
同二萬貳千五百兩	拾壹萬石	酒井雅樂頭樣
同二萬二千五百兩	拾四萬七千石	酒井左衞門尉樣

同 断　　拾五萬石 松平隱岐守様

同 断　　同 断 小笠原大膳大夫様

同四萬八千五百九十二兩　　三拾貳萬三千九百貳拾石 藤堂和泉守様

同壹萬五千兩　　拾萬石 松平下總守様

〆五十八萬三千百五十六兩

三月廿二日。前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。

〔成瀨正敦日記〕

三月二十九日

一、浦和御泊より之御使有之、江戸表二十二日彌御發駕之旨等申來。

三月廿六日。巡見上使通過の際の心得を金澤市中に諭す。

〔觸 留〕

巡見上使衆、當月中旬江戸表御發足、越前路より御領國ゟ御越之筈に候條、金澤御到着之節見物に不罷出樣、組・支配・家來末々迄可被申渡候。若用事等有之、御通り之道筋へ參り懸り候はゞ、不作法無之樣堅く可被申付候。尤火之元之儀嚴重可被申渡候。

一、上使衆金澤町道筋

地黄煎町　六斗林町　泉野寺町　玉泉寺前
野町　才川神明宮前　川南町　片町
石浦町　南町　上堤町　下堤町
袋町　博労町　尾張町　橋場町
卯辰町　森下町　金屋町　高道町
山之上町　春日町　大樋町

右道筋横町侍中居屋敷、見通し程近前長屋等修理候儀、至而見苦敷所は少々加修理可申候。
外廻り窓等有之所は、窓蓋掛掃除可申付候。
一、若御城内御通抜に候得者、尻垂坂より公事場前へ、寺西藏人・津田乙三郎前より美作守・
乙三郎屋敷間を御通り、尾張町ゟ御出之筈に候條、屋敷前掃除等之儀其心得可有之候。
一、上使衆御通り之節、談議所村領等山、春日町邊より程近き所へ、若無用之者共致登山、
御通之節不敬に相成候而者如何敷候間、罷越申間敷候。且又才川・淺野川橋御通之節、川緣等
武士家不敬無之樣相心得可申事。
右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

三月廿六日　　　　　　　　　　　　　　　前田美作守

三月廿九日。幕府、前田齊廣夫人の湯治の爲歸國すべき請を許す。

〔成瀨正敦日記〕

四月八日

一、眞龍院樣爲御湯治御國元へ被爲入候儀、先達而御內意御用御賴松平和泉守殿江御指出置之所、前月二十日聞番御內用主付本保平太夫御呼立、表向御願書御指出之樣御挨拶有之に付、御指出置之所、去る二十九日和泉守殿江平太夫御呼立、御願之通御付札に而御渡に付、早便に而今日本保平太夫より申上候事。

四月三日。河北郡沖村に火災あり。

〔本多政和覺書〕

四月三日

一、出火之樣子之處、大火之躰、其上烈風に付慥ヶ所は知候へ共、堤町邊共沙汰有之に付、九つ時前出馬登城、追付萬之助被出。

一、御橫目津田判太夫以執筆申聞候は、出火に付出馬仕處、半途に而在火之躰承候に付登城仕候。ヶ所は七つ屋より川向半丁許有之沖村と申處出火之躰御座候旨、半途迄差出候御橫目

足輕申聞候旨申聞。重而同人申聞候者、町端迄罷越候御横目足輕罷歸り、右村三十軒許有之内二十軒許燒失、最早下火に相成候旨申聞候由、九半時頃申聞。

四月六日。前田齊泰金澤城に着す。

〔本多政和覺書〕

四月六日

一、八時過大樋付人來候旨に付、丹州・內匠・又三郎・內膳・靫負同道橋爪へ罷出、先橋之此方に見合罷在、樣子見計橋爪へ罷出。八半時前御着城、御馬止り御意有之御樣子に付進出、今日は天氣相も宜、益御機嫌能被遊御着城、恐悅奉存候旨申上。丹州も同樣被申上、然處右申上候內、何歟御意有之御樣子に付平伏。相濟二ノ丸へ罷越、作州は御城方主付に御式臺へ被出、御家老中・若老中・睡鷗も同斷。

四月七日。百姓に東西本願寺の勸化に應じ又は領外の寺院に參詣することなかるべきを告ぐ。

〔郡方御觸〕

一向宗東西本願寺御門主、當年關東御下向に付、兩派之寺庵上京之由。夫に付門徒之者共江、

冥加錢等指出候樣相勸申旨に候。前々申渡候通り、堅く勸化指出候儀不相成候。且又西本願寺御門主越前吉崎御坊江御越之躰に付、末々兩派寺庵より門徒共江、參詣之儀もすゝめ候由風聞に候。尤他國之儀、參詣不相成儀は勿論に候。去年御郡方御仕法有之、當年別而農事方大切之儀、自然心得違之者も有之、參詣いたし、暨勸進に入候儀等不相成趣、嚴重可申渡候。若下々之者、密々右之趣共有之、相顯においては曲事に可申付候間、村々人別不相洩樣嚴重可申渡候、以上。

四月七日　　改作方御郡奉行

諸郡惣年寄・年寄並・新田裁許中等

四月十一日。前田齊泰、居間書院に於いて老臣をして政事を議せしむる定日を定む。

〔御家老方等〕

四月十一日

一、御居間書院御日書今日被仰出有之、左之通。

二日　六日　十日　十四日　十八日

廿二日　廿六日　晦日

右は以來御政事向得与於御前御詮議被仰付に付、年寄中・御家老中入交、御用番共四・五人御左右へ出詮議仕筈之事。且罷出候節は、最初御近習頭伺公有之、御用番等相圖之上引取事に被仰出。

但、御出御刻限四時より九時迄之事。

四月十一日。一昨年の荒政に盡力せし諸士賞賜せらる。

〔御家老方等〕

四月十一日

一、一昨年飢饉以來骨折相勵候當時御免之御算奉、且當時相勤居候者、并右之頃相勤候町奉行、此分は當時相勤候者は近來替候に付不被下。右之人々、人持は御羽織一つ・紗綾二卷、組頭等御羽織一つ・白銀十枚拜領、御用番座に而御目六を相渡。澤田故義門右之頃骨折に付當時之悴に被下候事。

四月十四日。巡見上使近江今津領に着す。

〔本多播磨守覺書〕

四月二十八日

一、江州御知行所巡見上使御用罷越候士方勘太郎、今日罷歸席ゐ罷出、當十四日・十五日上使

首尾能御通行相濟。廿四日彼地發足今日歸着仕候旨申聞。

四月十七日。石川郡末村の孝子吉兵衞に賞賜す。

〔溫敬公記史料〕

四月十七日。褒旌石川郡末村孝子吉兵衞。賜物。

四月十九日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

四月十九日

一、九つ九分學校へ御出、武學校へ初め被爲入、南保虎之助・同茂三郎門弟劍術御覽被遊。其內惣出座名書御覽可被遊旨被仰出、有賀へ申談、且出座之內順に不拘當時出情致、習事も相濟候人々之內、先二組程御覽可被遊旨被仰出、其段申談、其分相濟御褫建之。惣出座は百余有之由に候。夫より文學校へ被爲入、上中等生徒中庸、論語會讀書生孟子會讀二席有之、論語之講釋之席は出座無之、御聽聞被遊。其內馬術稽古宜段申上り、武學校へ被爲入、近藤幸左衞門方馬術稽古御覽被遊。六人充、五組是に而出座不殘濟。無程御戾り、八つ八分御歸殿遊候事。

四月十九日。陸原大次郎に御次講釋を命ず。

〔成瀬正敦日記〕

四月十九日

一、御次講釋渡邊兵太夫罷出候得共、以來陸原大次郎に被仰付候事に遂僉議相伺、其通与被仰出候付、今日兵太夫江は直に以紙面申談、大次郎へは寺社奉行中迄以紙面被申渡候樣申談、坂井奉。

但、兵太夫儀尤是迄御前講も相勤罷在候。此儀は尤是迄之通に候へ共、當春頭並都講被仰付候付而之詮議也。大次郎儀是迄御前講被仰付置候へ共、是迄御次講釋には罷出不申に付、右之通申談候事。

四月廿二日。前田齊泰、士風を改め農工商をして各その業を勵ましむべきことを告ぐ。

〔御親翰留〕

如何之仁政も、士風正しからざれは其澤三民に及びがたきゆゑに、從先代每度被仰出候へ共、兎角改り兼候樣に相聞え候。畢竟舊染之習俗脫し兼候故与存候。去秋頭・支配人江其方中より委曲書取を以被申談、則其刻令披見、行届候僉議方と存候。我等未熟に候得共、幾重共致世話、先代被仰出置趣を以、士風一變之所へも爲至度事に候へ共、一統難澁之上過分之借知をも

申付置、何廉申泥事に候。乍然徒に過ぎ、四民惰弱之風彌增候而は、未熟之我等仕置も彌行屆兼可申与心痛之至に候。仍而は我等何分にも相勵可申、於各にも精誠を不被盡而は、所詮被行がたき事に候條、各油斷無之儀に候へ共、正直を基とし、國政之儀晝夜心に掛、聊も無油斷、組中指引方を初、家中仕置等一統之法則と相成候心得可爲肝要。尤我等之行屆不申儀は、聊無泥被申聞候樣致度。此末年月を經候共、此度申出候趣意不致貫通而は、事務がたく候條、各得与被相心得、下々まで爲得安穩候之樣に取計方可爲肝要事に候。此段申遣候、以上。

四月二十二日

年寄中

〔御親翰留〕

諸士風俗之儀に付而は、先代より每度被仰出、其時々暫は相愼樣にも候得共、人氣輕薄にて無程立歸候樣子。就中金龍院殿、士風御引直被成度思召に而深御世話被成、格別に御敎諭も被成候所、其刻は志氣も可相立體にも相聞候よし之處、不幸にして早御逝去被成、我等幼年未熟ながら不得止事政を聞申事と相成、是迄領國中無異事、且公務之無指支過來候儀は、全く先公代々之御遺德に候。何も普代舊功之者共之事に候得者、聊麁略之心得も有之間敷候へども、金龍院殿段々被仰出置候趣、自然も忘失いたし、士風次第衰敗に至り、農工商も自ら

惰弱之風俗彌增候而は、取治方も益不行届様に相成、我等御奉公之筋も不相立、且先代江對し無申譯、誠に不安事に候。只々士風衰候に從ひ廉恥之心薄、中には士之本分をも取失候場へも至るべき体、なげかはしき事に候。士風一變いたし、追々農工商までも風俗引直、各本分之業を勵、安穏にあらしめたく候。今度年寄中江茂存寄申出候、何も油斷有之間敷候へ共、儉約を以勝手取續、尙忠節を達し候心掛尤に候。是等之趣組・支配へも不相洩爲申聞、何も文武之心懸、且一家之仕置等も身を以先立申心得可爲肝要候。年若之人々は別而文武を勵可申候。

右之趣人持・諸頭へ可被申聞候、以上。

四月二十二日

年寄中

右人持・諸頭江於年寄中席夫々拜戴被申談、追而拜寫被相渡候。

四月廿五日。米穀以外の食用品の出津の禁を解除し運上を納れしむ。

〔郡方御觸〕

去申年非常之凶作に而用米差支、一統難儀之時節に付、都而食用に相成候分、何品不寄、當分他國・他領江指遣間敷旨、一昨年中觸置候得共、當年より右申年以前之通、穀類之外出津被

指解候。併他國・他領江指出候品々者、當年より都而運上銀取立候儀等、先達而申渡置候通に候。右之趣年寄中江も相達申談候條、被得其意、夫々可被申談候、以上。

四月廿五日　　　　御算用場

永原虎一郎殿

山口常三郎殿

四月廿七日。江戸城西丸造營の助役を命ぜられたるを以て家中に半知借上の必要あることを議す。

〔覺書〕

四月廿七日

一、御勝手方御用に付丹州・余・又三郎・八郎右衞門八時前御前へ罷出、右之節成瀨主稅等三人も罷出有之。今般御手傳被蒙仰候に付、今・來年御家中半知御借上無之而は御手繰調不申に付、右之通被仰付候樣、御算用場奉行僉議之帳冊等又三郎より被上之、段々僉議之趣被申上。打續御家中半知に被仰付候に付而は、御次向・御廣式等格別御省略之儀無之而は難相成。當時御前には甚御質素に被爲在、御次向等も格別目立候事は無之候得共、這上猶御仕向方御格別之儀御座候樣仕度趣、丹州・八郎右衞門よりも被申上、主稅等へも段々御詮議之趣申入。是迄

とは格別事替り候被仰付方有之時は、其品よりは先御次向を初風儀御引直方第一に可有之、夫も重立候人々嚴敷御示無之而は難相成趣等、余より小左衞門へ申入。色々申合、畢而何も退去。

四月廿九日。鳳至郡院内村の與之助至孝を以て賞せらる。

〔成瀨正敦日記〕

四月二十九日

一、御預所鳳至郡院内村百姓三四郎せがれ與之助与申者、當年四十八歲罷成、幼年より父母江孝之者之所、母は先年致病死、當時家内六人に而相暮申候所、七十五歲に罷成候父三四郎に孝道を相盡候に付、御賞美願、鳥目五貫文被下候由。

但、御預所には是迄例無之候得共、御預所御取扱御私領同樣に相成居故、右之通被下候由。

四月廿九日。御廣式女中に麁服を着用すべきことを命ず。

〔成瀨正敦日記〕

四月二十九日

一、左之通今日被仰出、御廣式頭呼立、渡邊多宮罷出候に付申談ず。

御廣式女中着服之儀、今般格別之思召被爲在候間、已後佳節等禮服之外、都而紬・木綿之類着用可仕候。此段可申渡旨被仰出候條、夫々致會得、被仰出之趣無違失樣可被申談候事。

四　月

閏四月二日

一、御廣式向着服之儀、一昨日被仰出候趣に候へ共、當時紬・木綿所持之者も無之儀、一時に相改候儀は指支候躰に被聞召候間、當分は絹八丈も入交着用可仕旨、今日渡邊多宮呼立善右衞門申談。尤已來新に着服調候節は、紬・木綿之外は不相成旨も申談置。

一昨日は再昨日なるべし

四月廿九日。藩侯放鷹の際百姓のその業を止むることなかるべきを諭す。

〔近敎日記〕

四月廿九日

一、左之通被仰出、御郡奉行・御鷹匠小頭へ申渡候付、爲承知寫加藤より被指出候事。

御鷹野等御出先、無構致農業候樣、兼而被仰出置候得共、中には農業指止相扣候者も有之候間、跡々被仰出置候通、無泥可致農業候事。

一、御道筋見苦敷儀は、御貪着不被遊候間、御出に付別段掃除等に不及候事。

右之趣改而可申渡旨被仰出候事。

加藤三郎左衞門は側用人

右御郡奉行へ申渡候由。

是月は大盡なり

四月晦日。屎物延賣の仕拂を滞ることなかるべきを令す。

〔司農典〕

屎物延賣代銀、不指引に相成候而者、仕入人共泥に相成、一統屎物仕込之指障に相成候儀に候間、以來者延賣之分者村役人通帳に而相渡、代銀之儀者限月嚴重取立可相渡候。若相滯候者有之、斷出候得者、於役所遂詮議可相渡候條、聊無泥賣渡可申候。勿論直段直賣方は違候得共、右に乘じ猥に高利を取申儀者不相成、成限リ直安に可賣渡候。當年屎物拂底之儀に候之間、右之趣急速申渡、尚更末々迄屎仕込不指支様可致勢子候、以上。

戌四月晦日　　矢部順平

河合内匠

諸郡惣年寄・年寄並中等

閏四月二日。今明年諸士の半知を借上ぐべきことを令す。

〔觸　留〕

閏四月二日

御勝手向連々御難澁至極之上、打續凶作に而多分之御引高に相成、加之窮民御救方等彼是御入用打重り、御調達も被仰付候得ども、其上にも御不足相立、被成方無之に付、去年御家中知行之内半知御借上等被仰付、御用辨に相成候。然處今般西御丸御普請御手傳被爲蒙仰、多く之御上納高故、兼而之御圖り方甚致相違候。依之乍御心外、重而今年・來年御家中知行之内半知御借上、其内二百石以下之人々、幷御切米・御扶持方・隱居料等、都而去年割合之通御借上被仰付候。打續過分之御借上に相成候得共、今般之儀者重き御公役之事故、不被得止事被仰付候。役料等之儀は別紙覺書之通に候。

閏四月　　　　　　　　　　　奥村内膳

右之趣被得其意、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

覺

一、役料等之儀者、都而半知御借上之殘り高を以、去々年迄御借上之割合に御借上之事。

一、頭分手替足輕等、幷平士被下足輕も、去々年迄之通御借上之事。

一、足輕者去年之通御切米之内一割御借上、坊主・小者は御借上無之事。

一、三都町人御扶持方等、幷御手役者御給金等之内、二割御借上之事。

一、御家中役出銀之儀は、去年申渡置候趣に相心得、其外去年七月迄之諸上納等、幷七月以

後役向入用に付拜借銀上納者、今・來年都而御用捨被仰付候。去七月後身分之儀に付拜借銀は、當七月半高上納、殘半高は來る子年七月一時上納之事。

一、御家中借財、去年七月迄之分迄辨方之儀、去年申渡置候趣も有之得共、半知御借上中に指引方相見合可申候。去年七月以後之借財、夫々可遂指引筈に候得ども、重而半知御借上に付難遂差引人々も有之候はゞ、其分者頭に爲書出、當月十二日切御算用場江相達可申候。御取扱之筋可有之候事。

一、小祿に而家內多之人々抔、必至与指支候族は、頭・支配人手前に而精誠遂僉議候筈之事。

閏四月

去年御家中半知御借上、今年閏月も有之別而可爲難澁處、少分之調達も難出來躰に付、御借上之殘高百石に付五十目宛御貸渡候條、相望候人々は可願出候。尤當七月半納賣拂候上、一時返上可致候。御切米之分は、十一月一時返上可致候事。

一、去年頭分役料も夫々割合を以御借上被仰付候處、役向に付失費多之人々抔可爲難澁に付、今般御僉議之上、馬持以上之人々は御借上高之內四ヶ一被返下、夫以下は半高被返下候。平士役料等も右同樣被返下候事。

一、頭分手替足輕等、幷平士被下足輕之儀は、御借上置之事。

閏四月六日。大聖寺侯前田利極歸邑の途金澤城に登る。

〔成瀬正敦日記〕

閏四月五日

一、駿河守樣此表へ御着に付、明日御登城被遊候樣、御近習頭木村を以御旅宿へ被仰進候。右取捌御用所也。

閏四月六日

一、四つ時頃、手筈宜に付御登城御指支無御座旨、主付木村等より阿方御家來迄御案内申上、四ッ半時過駿河守樣御登城、都而御作法書之通。

〔諸事要用雜記〕

閏四月月六日

一、今日駿河守樣御登城に付一統同席罷出る。

一、四つ三分過御旅宿御立之御付人來り、追付御登城被成、夫々御作法通於御居間書院御對顏之上、御持參之御太刀御奏者番披露、引長衛伊藤主馬。夫より御料理山城守御相伴に而出、御盃事有之。其内御刀被進、御家老中川八郎右衞門持參、相濟御入被遊。夫より御奧へ御通り被成

候樣、善右衞門を以被仰進、同人御先立に而、御居間二之間通御見物所前御緣頰より上之御鈴より御入被成候。御前には御通之時分折上ヶ天井之御間に被爲入、御出之節御出向、夫より御奥へ御誘引被遊候。拙者右御鈴手前御屛風圍之邊に御刀配膳役より受取、女中へ渡し候。於御奥御菓子等出候御樣子に而、八つ一分御退出被成候。其節御奥へ御供宜段申上、御出之節初之通御誘引、御鈴外より善右衞門御先立に而御居間書院へ御復座。重而御前御出御對顏、御挨拶之上御戾り被成候。御居間書院御廊下松に蔦之御杉戶際迄御送り被成候。

一、無程御立戾り、段々御挨拶御口上被仰置、御退出被成候事。

閏四月六日。前田齊泰借知を行ふを以て各自益儉約を勵むべきことを諭す。

〔御親翰帳之内書拔〕

勝手向逼迫至極之處、今般西丸御普請手傳蒙仰候に付、無據重而過分に借知申付、別而可爲難儀と察存候。乍去是非もなき儀に候條、彌儉約を以銘々勝手取續候心得、無油斷樣猶又可被申聞候事。

閏四月六日

〔御用留〕

戊戌五月廿一日頭衆宅江呼立、一統江被申談候御書立寫。

各心得方之儀に付、此度以御親翰被仰出候。御趣意無違失相心得可被申候。御國之儀、近來別而不時御物入等有之上、不作茂打續、御用度殊之外御指支之段、何も承知之通に候處、今度西御丸御普請御手傳をも被蒙仰、重々之御物入故、此末御運方甚六ヶ敷、重而半知御借上之儀をも被仰出候。尤御儉約之儀等、種々御詮議も有之事に候得共、ヶ樣之御時節、各を初士中、別而諸事心得方肝要に候。一統難澁とは申候得共、世風にひかれ候而思はず奢侈に移り、遊惰之方へ流れ行候も不少。其内志有之人々も、他之習俗に拘り候而、己れと改候儀難成族も有之体。或は又儉約之筋を心得違、吝嗇之仕形に相成、又は貨殖を事とし、商賣之利を爭候樣成事に相成候に付、彼是以本分之勤は、おのづから等閑に成行候事に候。此御時節に候得者、別而他を見合候にも不及、人々志を急度相立、奢侈之振舞鄙吝之仕形を指止、節儉之筋を勤め、淳朴之古風に立返り候樣に心懸、文武を勵、御奉公向大切に相勤、親族・朋友之交をも厚く仕、子弟之成立をも無油斷世話可仕儀、專要たるべく候。士風淳朴に相成候得者、下三民もおのづから其風に習ひ、各生業を相勵み、公私に付而無益之費も追々相止可申候得者、御國家生財之道に取候而も、各を初士中共に此處根本之務たるべく候。打續半知御借上之儀に候得者、一統可爲難澁儀に候得共、文武之心懸成限無油斷相心得可被申候。此段何

茂能々相心得、組・支配之人々江茂可被申談候。右等に付而者、猶又其品々を擧可申談事に候得共、一旦具に申渡候而も、後來迄之守り無之而者、御趣意にも違候事故、先一々は不申達候。御先代以來被仰出候趣等を以、能々相心得可被申候。猶追々申談候儀共も可有之候事。

戊閏四月

閏四月八日。江戸に於いて御貸小屋に在る者の心得を告ぐ。

〔江戸每日書立書拔〕

閏四月八日

一、御家中家來末々之者心得違之者も有之体に付、左之通一統相觸可申哉之旨、御横目申聞候に付其通と申渡候事。

御貸小屋前通塵芥猥に持出取散候儀に付、是迄申渡候通に候處、今以取散、其上火氣は有之間敷候得共、右等之場所江灰を捨候族も有之、第一火之元氣遣敷相聞え候。且又御貸小屋前往來筋江、畑物抔作り置候處も有之体に相聞候。且御家中家來末々之者夜中無[illegible]之者致往來、其上無提灯に而かむり物抔いたし、或は此節照笠用ひ致往來候者も有之。曁主人之在合不申節、御貸小屋江家來共人集いたし、不作法之躰も相聞え、右等之族一圓有之間敷儀に候。右人集等いたし候ケ處江、御横目足輕見聞次第、主人々々江も不及斷踏込可相糺儀も可有之候

間、以來嚴重可相心得事。

右之趣文政九年にも申渡置候處、中には違失之者も有之躰に付、改申渡候條、猶更嚴重相心得、且火事沙汰之節御貸小屋々根ゟ猥に上候族も有之体に候間、心得違無之様、家來末々迄も嚴重に相心得可申事。

戊閏四月

閏四月九日。能登の幕府御預領巡見の吏金澤に着す。

〔諸事要用雜記〕

閏四月九日

一、御料巡見之御役人中今日當地到着、尾張町に御旅宿有之候由之事。

一、今日御料御巡見之御役人御勘定方御役人之由左之通。

本目兵左衛門殿

中川作左衛門

阿久澤彌平次

一、巡見御役人、今日金澤御到着、三人共尾張町鶴來屋等御止宿。御通行之節者、町方扣能在候迄。店內等少し之見物人等は、其儘指置候由之事。

但、夜前小松泊之由に而、七半時頃金澤御通行、其より能州御預所江御順先之由。右に付御預地方御用篠原六郎左衛門上下十六人、仲間狩谷兵吾上下四人、永井久左衛門上三人、足輕三人、今日發足之由。

右金澤御到着に付、御使者矢部順平罷越候處、尤罷通り候樣申聞、色々咄合等有之、大きに丁寧之由。御預地奉行石野右近殿にも、右旅宿へ被相勤候由之事。

閏四月十一日。幕府の巡見上使金澤に着す。

〔諸事要用雜記〕

閏四月九日

一、巡見上使明後十一日御當地御止宿之由、町々横小路喰違簀垣出來、町家見せ商賣物不見苦餝候由。先達而より往來筋不見苦樣、所々一軒も不殘新木を以修覆有之、路次も見事に成候。御宿者堤町金浦屋・茶屋、石浦町に而石浦屋之由に候。御城内も若御巡見可有之哉と、御掃除等有之候。右御用懸り御馬廻頭神田吉左衛門・御小將頭奥村五郎左衛門に候。出役之御郡奉行等、各立派に餝袋入傘等爲持、皆々當六日に御領境迄に迎發足有之候。御醫師長谷川學方・小瀨貞安も參り候。誠に御丁寧成御仕向之ものに候。明日鶴來御止宿より金澤へ御越之由に候。頃日町々見物に各女童出候躰に而、通筋甚賑はひ候。御上不時御物入莫大、奉恐察候

五郎右衛門は次郎右衛門六右衛門は陸郎兵衛なり

也。

一、上使衆は、當十日鶴來御着。同十一日九半時金澤御着。

御使番　木下内記殿　宿　金浦屋五郎右衛門

御小將組　石尾織部殿　宿　茶屋六右衛門

御書院番　筧新太郎殿　宿　石浦屋文朔

一、着日年寄衆を初玉泉寺前江御出向之事。

一、御前御見舞可被遊處、御痛邪御難儀被成候付、御名代播磨守被罷越候事。

一、上使衆着之節、御使者中川八郎右衛門殿被罷越、翌日も被罷越候由。

一、上使衆着之刻より御發足後迄は上使宿前一人も通行不相成、兩方木戸打申事。

一、金澤中晝夜自身番とて、一町々々程に晝夜屛風相立、役人之内番いたし、夜中は釣提灯相燈居候事。

閏四月十一日

一、巡見上使衆三方とも御着被成候段、御案内有之、九半時過之事。

木下内記殿

石尾織部殿

新三郎は新太郎なるべし

覚　新三郎殿

右御三方江、御名代播磨守殿被仰付、三御所様御伺御機嫌之由。御疝邪氣に付御直勤は不被成由御口上、且御自分之御口上も有之由。御直答之由、播磨守言上。

一、上使衆無御滯御着被成、爲御迎玉泉寺前へ山城守・播磨守・美作守・又三郎・八郎右衛門罷出、直に御宿へ罷出られ候由。今日御使等之御挨拶被仰聞候由。尤何茂登城可仕處、及晩景候に付不罷出、御用番內膳殿迄罷出られ言上之事。

一、上使衆御着之上、御家老御使者本多圖書殿被仰付候事。

一、上使宿堤町金浦屋に付、香林坊高之木戸閉有之候。刻限に寄、不明門等之建通りも往來指支候事。

一、年寄中今日は自分參上等、各先步五人、駕脇六人、對箱・袋入傘等立派之行列に候事。

但、各十間町千代屋久平方宿にて、どなたも御一集に御勤之由之事。

一、上使衆明日五時御出立、御城中御巡見は無之御樣子之由、御步横目並町奉行よりも言上有之候。

一、金澤中町家自身番之由之事。

〔巡見上使之節玉泉寺前江出向等之留〕

閏四月十一日

一、御用番並圖書之外、年寄中・御家老中五半時過追々玉泉寺ゑ罷越候事。

一、中宿ゑ各相揃候上、八時過町奉行兩人罷出申候者、只今上使宿より私共罷越不指支旨案內申越候に付、兩人とも追付罷越可申候。私共罷歸候上、各樣御越被成候樣にと存候旨申聞、追付罷越。七時頃兩人重而中宿へ罷越、取次敷付ゑ出候付致中座、階上疊之上ゑ上り、御使者相勤候趣申述候處、可相達旨申聞。重而同人罷出、追付可懸御目旨申聞、誘引別間ゑ罷通り御逢に付、御口上之趣申述候處、今般爲巡見御領國御當所へ只今致到着候。從太守樣爲御挨拶御使者被下、被入御念候儀忝仕合奉存候。御答之趣宜申上旨御申聞。退候節次之間迄被送、御丁寧之旨及挨拶、取次敷付まで送り居候所に而、中座いたし退出。夫より石尾殿へ罷越候處、大抵右同樣。夫より筧殿ゑ罷越候處、是又右同樣。相すみ香林坊木戶爲明、同所制札前より前田織江前ゑ出、直に御殿ゑ罷出、右御使相勤、御答之趣口上に而、以御近習頭中上候事。

圖書持參之御口上書左之通

彌御堅固當所御到着之旨承り、珍重存候。右之趣爲可申入、以使者申達候。

一、圖書儀、木下殿御使相勤相濟候程之處に而、播磨守儀木下殿ゑ罷越、敷付に取次罷在挨

拶可致處、早く先立仕候付、階上に而加賀守使者相勤申候口上可申述哉之旨申入候處、罷通候樣申聞、誘引に而罷越、內記殿次之間迄被出向、上之間江入、御口上申述候處、被入御念候儀忝奉存候趣被申聞、畢而自分之挨拶等申述、退候節次之間迄被送、取次之者敷付まで罷出。最初內記どの直に被逢候付、御口上手扣者退處に而取次江渡之。且御逢被成忝奉存候旨も申述。其次石尾殿江罷越、敷付江取以取次罷出候に付、御使者之旨申述、使者之間江通候上、口上之趣可申述哉と申入候處、相達可申旨申聞。重而役人村田友之助罷出、御口上可承旨申聞候付、御口上申述、手扣渡之、同人誘引に而通る。織部殿次之間迄被出向、上之間江入挨拶仕、御答之趣內記殿同樣。其外自分挨拶申述退候節、次之間迄被送、取次は敷付まで送る。其次筧殿江罷越、取次等織部殿同樣、取次罷出御通候樣申聞、誘引に而罷通る。新太郎殿二之間迄被出向、御口上之趣御使者播磨守相勤候趣も申述、御答方等同斷。畢而直に二御丸江罷出、御答之趣口上に而牽次郎を以申上候事。

播磨守持參之御口上書左之通り

於江戶表三御所樣益御機嫌能被御座、恐悅之至奉存候。尤御旅宿まで參出相伺御容躰可申處、痛邪氣罷在不能其儀候。右之趣爲可申入、以使者申達候。

閏四月十二日。幕府の巡見上使金澤より出發す。

〔諸事要用雜記〕

閏四月十二日

一、今朝上使衆御發足に付、爲御見舞御家老御使八郎右衞門殿被相勤事。

一、四時前御三方とも御出足被成候。至極御首尾能由之事。

〔巡見上使之節玉泉寺前ゟ出向等之留〕

閏四月十二日

一、播磨守儀、八郎右衞門木下殿旅宿相勤相濟候程にて、中宿より出木下殿ゟ罷越、敷付に而取次ゟ本多播磨守參上仕候旨申入、使者之間ゟ誘引に而通り、爲御見舞總代參上仕候趣申述。重而取次誘引罷通り、內記殿御逢也。昨日之通り退候節、次之間まで被送、取次茂昨日之通り敷付まで送る。夫より石尾殿ゟ罷越、是は取次階下に罷在、使者之間ゟ通り、本多播磨守參上仕候趣等別人ゟ申述、同人誘引に而被逢候節等內記殿之通り。夫より筧殿ゟ罷越候處、取次階下に罷在、誘引に而使者之間ゟ通り、口上別人ゟ申述。此時御使八郎右衞門と一集に相成る。右別人誘引にて、八郎右衞門一緒に通り、御逢之節等大抵內記殿之通り。右相濟と一先づ歸宅之上例刻出席之事。

閏四月十九日。前田齊泰、江戶邸御廣式の費用を節約すべきことを命ぜ

しむ。

〔成瀬正敦日記〕

閏四月十九日

一、左之通被仰出候付、今便永原貢等迄以添紙面申遣。

御勝手御逼迫之内、近年御領國打續違作に付、去年之所御用途必至与御指支、最早御手段茂無之、御家中半知御借上被仰付候族候。然處今般西御丸御普請御手傳被蒙仰、多く之御上納金に付、御調達茂被仰付候得共中々不行屆、又々今・來年御家中一統半知御借上被仰付候。右に付御國方御省略之儀は不及申儀候。於其御地、姫君樣被仰出を以、御住居向格別御省略之御樣子、御尤之御儀候。御本宅御廣式向之儀、勿論油斷も有之間敷候得共、是迄之御仕來に不拘、萬端格別御省略被仰付度候。且又御子樣方御召服などの儀も、成限御麁服被召候樣相心得可申候。御住居向すら右樣之御容子候間、猶更無油斷遂詮議、今般之儀急度御省略之筋相立候樣相心得可申候。尤年寄女中江御趣意之趣得与申談、示合綿密可遂僉議候。此段可申談旨被仰出候事。

閏　四　月

閏四月二十日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

閏四月二十日

一、今日兩學校へ御出可被遊旨昨日被仰出、九つ七分御出、八つ七分過御戻り被遊候。

但、兩學校共朝之分繰下げ御覽被遊候。武は八島龍助・保田庄兵衞等馬術、文は會讀讀師・生徒會讀二席之事。

閏四月廿三日。前田齊泰乘馬により石川郡白山比咩神社に詣づ。

〔諸事要用雜記〕

閏四月廿三日

一、今日御鷹野之振に而昨日被仰出候通御行步御出被遊、泉野六斗林邊より御早乘被遊、額谷にて御小休被遊、重而御早乘に而鶴來へ被爲入、御休被遊。其内御供人も追々來候に付、夫より御步行にて白山邊御巡見、右宮へも御參詣、御手水御小將上、拜殿に緣取御作事より取上候分鶴來御先詰之御近習頭より相渡爲敷、御手水御湯桶は三十人方へ渡置。夫より八幡御藪邊御覽、古城跡へも被爲入。夫より金劍宮御巡見、夫より御休所米屋次郎左衞門酒庫幷車御覽被遊。重而御休所へ被爲入、御膳被召上、餘程御間有之御戻り、又々御早乘被遊、額谷御休。夫より御步行、町端より御馬に而御居間先より御戻り、暮七半時過之事。

一、鶴來御宿にて獻上之うぐひ幷鮎・御酒、桀操院様へ被進候段被仰出、御先詰之有澤より奉札を以角尾孫兵衛へ指遣。返書は御途中に相成候に付席に爲上候事に申談遣候由之事。

〔成瀬正敦日記〕

閏四月二十三日

一、昨日六ッ半時過御出、地黄煎町中程へ被爲入。五ッ時頃か夫に付何れも町端より御供之人々馬上仕、御馬沓も被爲遊、額谷迄御早乘に付、御先へ善右衛門・三郎右衛門御供候も の也。御跡へ主稅・小左衛門・隼人・肴次郎・伴太夫・牛之助・又作馬上に而御供仕候。額谷村六郎兵衛方に而御小休。夫より鶴來迄御早乘、御宿米屋治郎左衛門方へ被爲入。暫御休、御歩行に而白山御參詣、八幡御藪・古城跡・金劍宮御巡見、米屋方水車・酒藏御覽被遊、又治郎左衛門方へ被爲入、御晝休。夫より六郎兵衛方迄御早乘、御休、町端迄御歩行、尤町端迄御供何れも仕候。夫より御馬上に而、七ッ半時過御歸殿被遊候事。

閏四月廿八日。江戸邸の御廣式女中に麁服着用を命ず。

〔成瀬正敦日記〕

閏四月二十八日

一、今便江戸表永原等へ左之通申遣す。

本年四月廿九日の條參照

御廣式女中着服之儀今般――無違失樣可被申談候事。

四　月

右之通被仰出候。尤夏向之儀も右に准じ、禮服之外は成限り麁服着用いたし可申候事。

右之通に候得共、只今指懸相改候而は指支之趣有之、人々迷惑仕候譯も有之旨に付、絹・八丈抔は當分着用御免被成候。追々今般被仰出候通相改候樣被仰出候。且拜領物之儀は、縮緬之外は着用可仕旨も被仰出申談候事。

御勝手御逼迫至極之上、格別御物入相湊候而、御手繰も御指支に付、又候今・來年御家中半知御借上被仰付候事故、今般格別思召被爲在、二御丸御廣式女中着服之儀、別紙之通被仰出、夫々申談候。江戶表之儀は當時御住居江對し候儀も、中には可有之哉に候得共、右等に不拘、成限麁服相用可申、見苦敷儀は不被及御貪着候。此段可申渡旨被仰出候條、年寄女中江被申談、御趣意之趣得与致會得、夫々申渡候樣可被申談候事。

閏四月

閏四月。前田慶寧に附屬する年寄女中岸尾の擧措に就いて議す。

〔控帳〕

犬千代丸樣追々御成長被遊候に隨ひ、何事に不寄御見聞被遊候事次第に御心に茂被爲留、旁

以思召茂段々与可被爲出來候得者、御側向一統心得方茂日々に大切之儀与存候。惣而御成立方之儀者、御身分に付事々之是非を奉申上候より茂、唯御幼年より御平生御見習御聞馴被遊候事者、いつとなく自然に御移り被遊候ものに御座候得者、此所心得方尙以之儀与存候。其上萬事を仕上げ候に者、大勢之力に茂兎角行屆兼、事を敗り候に者一人之手に茂餘りあるものに御座候得者、殊に御側向之者御仕向申上方は不及申、都而御見聞に奉觸候處も綿密に相愼可申儀与存候。然處御附年寄女中岸尾儀心得方不宜、元より御幼少様御側向之儀に候得者、一事に付急度目立候儀も無御座候得共、日頃細事之上において兎角異存を相立、和熟を以示合候様之儀者一圓無之、或者一時之御所作等何れ共可然程之事迄、事々敷我意を申張り、餘人与並居齟齬之申上方抔も有之。且御咄申上候に茂、雜談等善惡之辨も無之妄に申上。ケ様之事共に茂不限、都而御仕向申上方不宜候。斯心得方不宜儀心付候上者、惣様心得方之程譯而心付け會得有之様可申入筈与茂存見申候得共、元來生質偏固に而、其上年來氣隨に立來候氣習も有之候哉、中々私共之心附け等を以可改生質与は被存不申。却而何事も隔意ヶ間敷相成、御爲に不宜与奉存、默し罷在候譯に御座候。且氣向惣躰之所、假令如男子剛に御座候而も、物之筋合素直に聞分け申所御座候得者宜候得共、左様之譯には不參。亦聞分け之處左程に無之共、女らしく物柔に而隨分与人にも從ひ申了簡御座候へば宜候へ共、是又一向に左様

之所無御座候。依之而御仕向申上方茂、女らしく物柔に事こまやか成躰更に無御座、言葉荒に而、男子之様に筋合を詳に申上候事も無御座候故歟、毎茂御納得方も不御宜様に奉伺候。且又御側向において、御守女中等ゟ申談方幷指引方等も躰荒く、言葉遣も卑劣に而、纔之事も居長高に申立、役權を以仕成候様之儀多。ヶ様之事共御平生御見聞に奉觸、豎萬端示合方も和熟不致候而者、前條之趣甚御爲不御宜儀に奉存候。依而奉恐入儀に御座候得共、彼之者御附に被仰付置候而者、何分御成立方之御不爲に相成、大切之儀与奉存候に付、此段御達申候。尚更御引請御座候而可然様被仰達、何与歟被仰付方茂御座候様仕度奉存候、以上。

戊閏四月　　　　同役連名判

同役は前田慶寧御抱守なるべし

閏四月。領外及び領内に販出する產物の口錢取立方を改定す。

〔岡部舊記〕

御領國諸產物他國出之分爲縮方、其所において改役之者相立、口錢取立候條、口錢高被相極候様、先達而申達置候得共、重而詮議之上、左之通相極候條可被得其意候。

一、他國出之品には、附出之ヶ所において改人共時々見屆、口錢取立、口錢濟之指紙可相渡候。右指紙浦方は淵改役、陸持之分上口は今江、下口は泊りに而改候上、相通候筈に候事。

一、右指紙無之、口錢不相濟分は、他國於出口ヶ所に指留候筈に候。左候而は荷主等可及迷

惑候間、不相洩樣夫々可被申渡候。且改役未だ申渡無之ヶ所は、早速申渡名書可被指出候。

一、右口錢一ヶ月切、支配頭手前ゟ取集、品物貫數書共相添、物價方役所ゟ可指出候事。

一、口錢取立高之儀は、都而荷物取銀百目に付壹匁之割合を以て、荷物出高應、取立高相極候事。

但、笠・絈等是迄極居候分在來之通りに候。

一、御領國之內相廻り候品にも、以來他國出同事口錢取立、指紙相添可申事。

但、先達而此度不及口錢、指紙は相添候樣申談置候得共、紛敷に付本文之通相極候。

一、右品積出之節、潤改役より入津所之潤改役ゟ、口錢濟之指紙相添遣し可申事。

一、右入津口錢之儀、是迄自他之差別なく取立候得共、前文地廻差紙在之分、浦口錢以後不及取立候。

右之通相極候條夫々可被申渡候、以上。

閏四月　御算用場

內藤十兵衛殿

廣瀨順九郎殿

高田幸助殿

閏四月。竹澤並びに蓮池御庭の支配を御次に屬せしむ。

〔近敎日記〕

一、竹澤幷蓮池御庭御仕法替に付、今日左之通夫々申渡。

竹澤並蓮池御庭之儀、是迄御露地方手合相成居候處、眞龍院樣御國江被爲入候付、思召被爲在候間、當分御次江御引揚被仰付候旨被仰出候條、得其意、尤御鎮守御用之儀、幷御鎮守邊御掃除等之儀は、只今迄之通可被相心得候事。

戊閏四月

右三十人頭柳惣兵衛呼立相渡す。

遠藤七郎右衛門

竹澤幷蓮池御庭方、當分御次江御引揚に付、右主付被仰付候。江戸表御下屋敷御庭之振を以、御掃除方等夫々可申談、尤心付之儀追々可申聞候事。

閏四月

右七郎右衛門呼立、直に相渡。且寺社奉行江も爲承知申達す。

閏四月。諸郡の垣根及び畦畔に於ける蔭樹伐採を命ず。

〔司農典〕

諸郡共垣根幷畔等之諸木生茂り、田畠蔭に相成、作物之指障りに相成候ヶ所多有之躰に候。右蔭伐之儀者、先年より嚴重申渡置候之所不屆至極に候。仍而其許申致見分、急速爲伐取可申、若彼是申立候之族有之候はゞ、可及斷に候。尤拙者共於出役先々も、見分次第可爲伐取候間、夫々嚴重可申渡候。

戌閏四月

駒井丹之丞

上月四郎左衛門

諸郡惣年寄・年寄並中

閏四月。改作所に於いて山方難澁の百姓を人力不足の耕作地に移さんことを議す。

〔改作方御仕法留〕

諸郡山方村々、近年別而難澁村多、其根元を相考候所、何れ山方に而は田地与申は少く、多く山稼を以渡世仕候儀に御座候處、次第に人數相增、以前与は何れ之村にも家數等相增居申躰に御座候。里方村々与ても同樣には御座候得共、平里に而は多分耕作稼之儀故、人多に相成候而も、作配之田畑步數は減候共、手入世話方に寄作物之取揚も餘分有之物に付、以前与は家數等相增候村々とても、格別稼之支には不成樣に被考申候。山方は前條之通田畑少く、

山稼のみ之儀故、木林与申物は、假令ば當年伐候へば、五年・十年与年を重不申而は稼山に相成不申儀故、人多稼多に相成候得者、右山伐稼之廻り早く、稼に相成候程に成候迄待得不申伐申様に相成、左候へば伐木之員數も少く、次第々々に稼劣りに相成、難澁に陥り申儀与奉存候。尤前段之趣は、一圓右之通共難申儀に御座候へ共、其理合は右之通に御座候。何れ山方難澁村々は、人多に相成り、稼劣り之所根元与奉存候。右に付一作御取扱又御仕法等被仰付候而も、根元地元に不應人數餘計居候而者成立申道理無御座、御仕入等被仰付候而も其利目も無之、且御仕入茂年々に相成候へ者、御仕入に寄懸り、却而不稼に相成一向不為、既に能美郡塩原村等は、數十年御仕入米御渡に御座候得共、未に成立申心得無之様に被考申候。依而は得与詮議仕、右様人多に相成稼不足之村々は、頭振等無稼同様之者は、新開等人不足之所ゟ入百姓に被仰付、稼に為有付申度。尤御仕入も入申儀に候得共、左候へば新開所開發方茂行屆申儀。又右人多之村々も、人高減候へば稼も其村切に餘分出來、此所に而御仕入又は御仕立等被仰付候へば、其僉茂相立可申。其上右様人多之所は、外御郡等人不足之所へ指遣申儀に相成候へば、於人情古郷難忘、先は居村を離申儀は不好儀に付、一統稼之進み、勢子にも相成申道理に御座候。私共第一存付居申候新川郡之儀は、惣而地廣に相見え、其上新開所も多、未開發方不全向茂有之、其他野毛地も多く、且變地立歸勢子場之所々も有之、惣而

人不足御郡与奉存候間、追々遂詮議、諸郡之内人多之村々より入作人申付、耕作方勢子仕度奉存候。前段之通不容易仕業に候へ共、人多人不足之所詮議方行届候得ば、地元之詮議自然与行届、其上難澁村々茂是又自然与成立申場合へ至り可申与奉存候。根元地元之廣狹ゟ相之高下、此所追々引直し、相應に相なれ候へば、作難等之節詮議方致し安く、随而御償等も自然与相減申道理に御座候。且小百姓幷請作之者、近年不勢之者多、御收納明之者不少。此風儀取直し不申而者不相成候間、右様不情不埒者は嚴重詮議之上、古格之通一統爲懲、一旦は追出百姓に申付候者も可有御座。併左候而者路頭に相立申儀に候間、右様追出申付候者は新開所等人不足之所へ里子に入相稼せ、心躰も相改候者は追々成立之詮議可仕候。前段之仕抹、改作方に而は根元之詮議目當与仕候所与奉存候事。

戊閏四月　　　　　　改作所

五月二日。前田齊泰の生母榮操院白山比咩神社に詣づ。

〔寺社方御用番留〕

閏四月廿七日

一、角尾孫兵衛等より、來月二日雨天に候得ば、六日榮操院様鶴來邊江御行歩、白山社江御參詣、四十萬善性寺へも御立寄可被遊被仰出候。依而明日孫兵衛等爲見分罷越候間、夫々不

指支様可申渡旨申來。

五月二日

一、榮操院様今朝六時前御出、白山御參詣被遊、夜五時過御戻り被遊候事。

五月七日。前田齊泰乘馬を試む。

〔諸事要用雜記〕

五月七日

一、今日御馬場へ八半時過御出被遊。三疋御乘馬被遊。相濟、將監等并同席一統嫡子乘馬、追々三人充三組に御覽被遊。相濟、善右衞門・小左衞門持馬并前田主馬持馬、五郎兵衞・九郎太夫・十之助与乘馬被仰付、御覽被遊。相濟、七半時過御戻り被遊候事。

五月十三日。近藤忠之丞、山本孫三郎を討ちて父の仇を報ず。

〔極内密物扣〕

天保九年戊五月十三日

一、御馬廻組山本次太夫弟孫三郎、高岡町に而喧嘩之躰に付言上左之通。

今朝五つ時過、高岡町小堀牛右衞門門前に喧嘩有之由取沙汰仕候處、追々御横目・足輕共も罷越、御馬廻組山本次太夫弟孫三郎之様にも風聞之旨申聞候に付、早速私共彼の場江罷出、未

天保四年十二月廿九日の條參照

追掛者役等茂不罷越、牛右衛門儀茂今朝白山江參詣在合不申候得共、同人家來共幷近邊之者先申談、萱園等爲致有之故、一通死骸見分仕候處、大小を帶候者、右を下に仕、首ハ無御座、刀者側に拔捨、あか付居申候。脇刺も半分計拔有之、尤相手之者も居不申、首茂無之故、猶更右次太夫頭石黑宇兵衛・相頭大田小又助江得与相尋候處、今朝私共不罷越以前、次太夫死骸見分仕候處、着服曁大小拵方等、弟孫三郎に相違無之段申聞候由に御座候。左候へば何者歟首打取迯去候与被存、都而喧嘩共難名付候へ共、先喧嘩之躰に見請候趣、則今朝口達を以奉言上候通りに御座候。猶更見屆方喧嘩之取捌に可仕哉与、御用番又三郎江も相尋候處、其趣に而見屆候樣申聞候に付、判太夫儀直樣罷越、次太夫口書曁牛右衛門家來見付候も呼出相尋候處、別紙口書寫之通相違無御座候に付、右宇兵衛等申談、重而死骸私共見屆申候處、前條之通右を下に、左之肩先三寸計深さ二寸計之疵一ヶ所、同腕に二寸之疵一ヶ所、同腕に二寸計一ヶ所、右之手首に四寸計、同腕に六寸計一ヶ所、深手負居申候。孫三郎儀も拔合候躰に候得共、刀に血付候迄に而、受込疵等は無之、同町伊藤主馬屋敷土塀際に鬢先・耳共そぎ落し候躰に而有之、外相替儀も無御座。右見分已前、追懸者役近藤新左衛門・富永左膳、警固足輕召連追々罷越候に付、御縮方之儀前々之通申談、御歩横目・横目足輕茂同樣御縮方申渡、牛右衛門儀茂晝過白山より罷歸候に付、前條之趣夫々相尋申處相違無御座。右死骸見分之節伊藤主

馬も立會候樣申談候。

一、堀川智覺寺境內墓所に首供有之由風聞仕候に付、若右孫三郎首に而も可有之哉致見分候樣、御用番又三郎申渡候由に而、山本次太夫幷同人頭石黑宇兵衞・大田小又助罷越遂見分候處、孫三郎首に相違無之旨次太夫申聞候段、宇兵衞等より相達候間、私共罷越致見分候樣又三郎申聞候に付、彼方ゟ罷越候處、寺社御奉行篠原織部・品川左門罷越居、縮方夫々申渡有之。且織部等へ申談、住持呼出相尋候處、右織部等へ相達候口書之通相違不仕候に付、相同じ右首遂見分候處、左之鬢先より耳ゟ懸そぎ落疵、幷面部數ヶ所深疵有之、側に木綿二幅計小紋印し無之風呂敷一つ有之、外相替儀無御座。全躰夫々見分仕、疑敷儀も無御座候に付、死骸勝手次第に取仕抹之儀、右宇兵衞等ゟ申談、死骸引取候上は、惣樣警固爲引取候樣夫々申談候。

一、孫三郎儀當年三十六歲に罷成候由、宇兵衞申聞候。

一、細井齋次郎儀晝御番故、右場へ罷出不申、羽田三作儀氣滯役引罷在申候。

一、書附寫等都合三通上之申候。

右奉達御聽候、以上。

五月十三日

津田判

森田判

〔諸事要用雜記〕

五月十三日

一、今朝五時頃高岡町被切倒人有之、堀川智覺寺墓所に生首備有之に付、御供押樣子承り、夫々見分之所相違無之。段々承り合候所、右被切倒候者は御馬廻組山本次太夫弟孫三郎にて可有之哉。右智覺寺へ首持參之者は、足輕近藤忠之丞にて可有之哉風聞に而、右御供押申聞候段御橫目より言上有之。

一、右追々言上有之。右孫三郎は、先年藤田平兵衛家來分蜘田忠太夫銀談にて不法之申分、不得止事忠太夫を右孫三郎及殺害候。其節忠之丞は御部屋住御供押相勤居候所、其後身分之儀に付御供押被指除、當時割場へ出居候由。御先手岡田五郎右衛門組之由に候。親之敵宿念之遺恨、近頃大にねらひ居候由之所、今朝孫三郎學校へ罷出候途中にて右之次第に及、首を風呂敷に包、親之墓所へ持參致候由に候。本望を遂右墓所に而自害、又は夫々頭江も相達御裁判相願候得ば十分之所、右智覺寺より直に淺野川を渉迯去候躰に候。大樋傳燈寺道之社内に垢付候單物片袖・同袴脫捨有之由。右忠之丞之分にて可有之、早速改方よりも召捕に指出候由言上有之候。高岡町小堀牛右衛門前之由に候。其場之始末如何とも相手迯去候事故不相分

蜘田は雲田

候得共、孫三郎も抜合候躰に而、刀に垢も付居候由。依而先喧嘩之御取扱に相成、夜五半時過相濟候由之事。

〔成瀬正敦日記〕

五月十五日

一、一昨十三日朝五つ時頃、高岡町小堀牛右衛門前に、身柄躰之人切合候上、被切殺候躰に而、首無之死骸倒居候付、同町之人々等駈合候所、其内石黒宇兵衛組山本治太夫も駈參り、頭宇兵衛も役引中行歩願中之由。ながら罷出。右は治太夫弟孫三郎死骸躰に而、相手は相知不申候へ共、いづれ喧嘩之躰之由に而、御使番御横目も追々罷出、見分之趣言上等有之。宇兵衛相頭太田小又助も罷出及言上。然る所右死骸之首は、堀川智覺寺地内藤田左衛門家來雲田故忠太夫墓前に有之由。且改方よりも及言上候は、右孫三郎相手は雲田故忠太夫實子割場附足輕近藤忠之丞之躰に風評有之。右は先年忠太夫を孫三郎手に懸候意趣之由。依而智覺寺邊風說聞しらべ候所、忠之丞儀右首を風呂敷に包、墓所へ持參り相手向、夫より川を渡り、淺野町口より大樋村宮に而袴等拔捨、長井谷之方へ逃去候由風說有之に付、夫々手配申付、富山御領迄も罷越相尋候樣申談。若飛州筋等他領へ罷出候由に候はゞ、罷歸受持圖候樣手合役人に申渡遣候旨、前田源五左衛門罷出及言上候事。

一、右之通相手は相知れ不申候得共、何れ喧嘩之躰に付、御横目見屆之儀御用番より被申渡、則遂見分候所、孫三郎手疵後。疵之躰に、小鬢より懸片耳そげ、肩へ深く打込候疵（但脊の方深き故、後疵與との事也。）一ヶ所、其外兩手にも二・三ヶ所疵有之。耳は伊藤主馬土塀際へ飛居候由。孫三郎刀は尤抜合打合候躰に而、死骸より三尺計際に有之、脇指も少し抜懸候躰之由。首有之候知覺寺ゟも、御横目治太夫頭幷治太夫召連罷越、是亦遂見分候所、頭上に一ヶ所深疵有之、其餘何とか言趣有之付候哉、面躰にも數ヶ所疵有之、鬢より懸、片耳有之、死骸之疵と符合いたし、孫三郎首に相違無之に付、頭ゟ引渡候旨等、十四日御用番へ御横目相達候旨等申上る。

但、孫三郎儀治太夫養伯父之續に當時相成居候由之事。

〔近藤忠之丞仇討一件〕

劍術師範垣本佐五右衞門覺書

天保七年秋八月、江戸浪人安藤久作と名乘り、面會致度取次の者へ申聞候に付、應對致し候處、劍術稽古入門の由申聞、承知の上稽古に取掛らんとする時、先づ形仕の儀後に致し、勝負致度段申聞候に付、支度の上取掛り候處、仕合口左に誌す。

一、我片手にて脇上段に構へ、彼青眼に構へ飛込眞甲を討つ。乘境にて我が身を振換り樣に右足を踏込、彼の眞甲を討つ。夫より互に青眼に構へ、彼より右小手を取らんとする。乘境

佐賢は山本佐右衛門賢英

にて高の方へ引上る處、小手下より袂を切拂ふ。其時不隙彼が眞甲を討つ。夫より同じく彼我青眼に構る處、我活刀にと乘込み、横鉢より肩口へ打込む處、彼被打ながらにして飛込組付候處、我左手にて彼が右手を取り、右手にて彼が咽を取り、直に彼は右手の下へ首を入れ、溜り中央の柱根へ仰向けに抛付る處、辟易して相濟む。夫より溜へ引取り種々物語り相歸り申候事。

一、重而罷越、度々致稽古、仕合數度に及ぶと雖も、一々其仕口を不記。其内門弟幾人も相手どり初め、予の門弟に雖不及、終に其人に乘越え上達致し候。或時彼居殘り、竊に一大事を明し、實は近藤忠之丞と申候に付、此に依り予出格稽古致させ候内免許を與ふ。兎角する内三年相過申候。其間に學校歸りを、仙石町にて人無き番小屋へ入り待伏候得共、連れ多くして乍殘念望を不達。又小姓町神田一平方へ罷越候節、□□より爲知候に付尻垂坂下に待伏罷在候得共、劍先辻の方へ二人連にて行き、道を違へ打洩申候。其後天保九年五月十三日早朝、佐賢稽古所に參り拜神の處、自然に扉開き、共に不審に存候。望成就の喜瑞か。夫より高岡町は小堀牛右衛門前にて本望遂候節、佐賢山本相角小幡門前に忍び、孫三郎の後を伺ひ、宗叔町より堀端通り長殿前へ掛りし處、孫三郎立止り佐賢の笠の内を見込む。其時佐賢孫三郎を越え先へ出で、長殿御成御門邊まで行候處、孫三郎有賀前へ止り候に付、引返し後を伺

木源は鈴木信左衛門永固なるが如し

ひ、高岡町篠井屛重門之邊へ行きし處、又々笠の内を見込み、無言にて二尺三寸ばかり。拔付候に付、佐賢俄忽被成問敷と二度聲掛候處、何の返答もなく、拔身を提げながら兩股立を取り進み候處、今枝殿の方より木源餌指躰にて指竿を持ち、孫三郎を見て引込候躰を孫三郎乍見次第に進行き、最早小堀門前六七間計り進處、木源相圖之躰にて、忠之丞二尺六寸の拔身を引提げ、今枝方より罷出で、互に無言にて進寄り、小堀長屋腰にて片手にて兩斷流し、孫三郎諸手冠り上段にて忠之丞の眞甲打込む處を、忠之丞身を振換り樣に片手にて孫三郎右の鬢剝ぎ落し、夫より互に青眼に取結び、細かに數本打合す內、忠之丞右之腕肱の邊を三寸許り切られ候に付、佐賢片手にて水田住國重一尺八寸の刀を引提げ、えいとうの聲を發し、片手にて孫三郎の二の腕かけて切込候處、彼の鍔を切り、大指を切落し、追續け、忠之丞たゝみ重ねて切込む處を孫三郎頭上に刀を斜に諸手にて上げ、請太刀に相成候內、右の肩口へ四寸計り切先下りに切込まれ候處、太刀を落し、其儘左手にて脇指の柄に手を掛け、五六寸許拔掛候儘にて、肩口よりの出血如瀧、七・八尺の間隔てたる伊藤の土塀へ走せ懸りし。其時佐賢も血をかぶりし。前の方へ下向けに倒れし處、忠之丞大聲してやつたりと云ひ直に去らんとする時、佐賢首を取れと二・三聲掛けし處、横へ振向き五・六刀打込み、推切り首を取り、風呂敷に包み、手拭にて腕を卷き、前田殿門前へ去る。佐賢刀を孫三郎袴にてぬぐひ鞘へ收め、夫より孫三郎の身形りを直し、袴を裾へ引下げ、今枝より立去り歸宿

す。忠之丞は夫より藪の內通り圖書橋高へ掛る處、孫三郎兄次太夫並せがれ拔身の鎗を持ち、忠之丞を見掛けながら突掛り不得、見脫し候處臆病の躰に見え申候。忠之丞夫より菊池横藪の內通り、生栖の小路・表具屋小路通り、末寺前より堀川端智覺寺父の墓へ首を備へ、夫より垣を越え淺野川を渡り、田圃通り大樋宮へ參り、叔父竹屋六兵衛兼而手配之通り、指替大小幷に着替を菰に認め待受け、此に而衣服等改め、二又越にて飛驒通り江戸へ行き、先師井上傳兵衛方に便り被抱罷在候。

右瀨尾餘一の聞書といふ。

五月十八日。金銀を用ひたる器具は今年限り賣買すべからざる幕令を傳ふ。

本文は幕令なり

〔御用留〕

大目付江

櫛弁かんざし・きせる、又はたばこ入・紙入かなもの、其外無益の翫之品に金銀用候儀停止之旨、前々相觸候趣も有之候處、近來猥に金銀具相用、幷賣買いたし候者も有之由相聞、如何之事に候。以來百姓・町人右躰之品に金銀用候儀決而不相成、主人或者出入屋敷等より貰請、又者持傳などに候とも、金銀器類一切持申間敷候。右に付而者、武家要用之品は是迄之通、

其外も武家より誂候分者格別、都而金銀具相用候品內證に而拵置、賣買致す間敷候、只今迄商人共仕入候分は、當年限り賣買いたし、來亥ノ年より可爲停止候。

閏　四　月

右之通可被相觸候。

櫛幷かんざし等無益之翫之品に金銀用之儀、御停止之旨等之儀に付、從公儀相渡候御書付寫一通相越之候條、被得其意、組・支配幷與力且又家來末々迄も可被申渡候。組等之內裁許有之面々支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可得其意候、以上。

戊戌五月十八日

奧村丹後守

橫山山城守

五月廿二日。前田齊泰、奧村丹後守に學制修補の事務を總裁すべきことを命ず。

本文は奧村丹後守榮貞の筆記に係る

〔官私隨筆〕

五月十四日

一、御用之間へ被召候付罷出候處、此度學校御仕法向御修補被仰付候付而、右御用主付可被

仰付と被思召候。先達內存被聞召候趣も有之に付、先御内意被仰聞候由御意に付、先以重き御用可被仰付御内意被仰渡難有仕合奉存候。乍去私身分之儀は、先達播磨守迄內々申達置候通に而、被知召候通無調法之儀、御目利を以被仰付候詮も無御座而は奉恐入候。其上とかく虛名高に御座候而、萬事棟取相勤候樣に去々年以來も申ならし候躰。か樣之所へ又々右樣之御用儀被仰付候而は、彌役權歸し申候而御爲不可然樣に奉存候趣段々申上候處、申上候所は左樣に候へども、結句右之通被仰付候方可宜樣被思召候間、押而御請可申上、身分に付而之儀は先達而御意被遊候通に而、金龍院樣御牌前宜被仰上候間、御請可仕旨等御意に付、重々奉恐入儀、其所においてとかく申上得不申候へども、又不束にも卽座に御請難申上奉存候間、猶又相考候上申上度旨申上候處、其儀は如何樣共と御意に付、退座之上播州へ內々及普爲聽。

〔官私隨筆〕

五月二十日

一、御用之間へ被召罷出候處、學校御用被仰付候儀に付、此間播磨守迄申達候趣被聞召、存寄之通尤に被思召候。乍然播磨守等においても、丹後守加り候樣仕度旨申上候事に候へば、丹後守御請不申上候而は、播磨守等迄に而相勤得可申事も却而整がたき樣之儀も可有之候

間、何分にも御請申上候様にと之趣段々御意有之に付、段々わけて御意之趣委曲奉承知奉恐入難有仕合奉存候。愚意之趣被聞召候上、事をわけ又々御意之儀に御座候へは、此上强而御斷申上候段は深く奉恐入候間、此上は御意次第御請奉申上に而可有御座旨申上候處、御請可申上旨申上、御喜悅被思召候旨御意。重而御請申上、退去之上播州へ内々普爲聽申入候。

〔官私隨筆〕

五月廿二日

一、追付御出（御家老中等御左右に伺公。）丹後守儀御用番誘引罷出、御三之間之内中之疊に而御禮仕、御敷居を入六尺計進出候處、近うと御意。三尺進出候處、御手前儀學校方用事主付申付候。播磨守等申談可被相勤候と御意に付、奉畏候。重き御用被仰付難有仕合奉存旨申上、御用番御取合被申上、退去。其次播磨守・内膳被召、畢而御用日に付各罷出如例。

五月廿二日。浪人・百姓・町人等の所有する鐵炮を錄上すべきことを命ず。

〔御郡典〕

御領鐵炮御改之儀は、貞享年中從公儀被仰渡之趣有之、鐵炮所持之浪人幷百姓・町人等手前に有之分、綿密書出、且右持主故障或は讓替等之時々、其委細斷有之、御縮方嚴重に相成居候處、近年甚猥に相成候に付、今般丹後守殿等被仰渡之趣有之、夫々取調理候條、御家人子弟等

之外、厄介或は主人持等に而無之、長屋借等之内若鐵炮所持之者罷在候はゞ、委曲來月廿日迄之內、御自分幷御組・御支配分、別紙草案之通有無共、二ノ御丸私共役所、寄日四つ時より九つ半過迄之內、御書出可被成候。此段御承知被成、御同役・御同席御傳達、御組・御支配御申談、且亦御組等之內裁許有之面々は、其支配も不相洩樣相達、其向々支配人より直に書出候之樣、御申談可被成候。先々御順達、落着より五郎右衞門方迄御返可被成候、以上。

五月廿二日

岡田五郎右衞門

兒嶋忠左衞門

槻尾甚七郞樣

追而御支配百姓等所持之委曲、是又別册之通御書出可被成候、以上。

御郡方之儀、天保六年各樣より御用番御年寄中等江御達之趣有之、其以後鐵炮持主名前等帳面に認、御家老衆江追々御達有之處、右帳面丹後守殿等御手前江御取立、今度私共江御渡、猶更取調理、此末御縮方相弛み不申樣遂詮議可申旨被仰渡候。就而は前段御家老衆江御達以後、鐵炮所持之者死去、或は讓替、又は狩人願等之增減も無之哉、今一篇可被遂穿鑿候。且又今度御郡方復元之御仕法に付、役名等替り申品も有之躰。旁以草案之通、改而帳面貳册宛、別紙日限之通御指出可有之候。尤御指出之上は、猶更御縮方嚴重御申渡、所持人若故障等有

之節は、聊不洩樣私共ゟ御屆可有之候、以上。

五月廿二日　　岡田五郎右衞門

兒嶋忠左衞門

槻尾甚七郎殿

五月廿四日。諸士の遺書を簡易に認むべきことを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

五月廿四日

諸士等遺書、前々は調方簡易に候所、近年は次第に細密に相成、長篇に相成候。元來遺書之儀は、存生中之御禮暨せがれ等へ名跡願之趣さへ調候得ば宜儀に候條、以來は成限簡易に相調可申候。猶人々存寄次第たるべく候。見苦敷儀等は御貪着無之事。

右御用番御渡、左之通御口達有之候事。

遺書之儀は、御禮之趣故自筆に相調可申所、畢竟長篇故か代筆之人々も有之。且末期に至り調替、彼是混雜も有之躰。旁如斯申談候旨、御用番又三郎殿被仰渡候旨高田氏演述之事。

五月廿八日。領國の產物をその地の役人に依賴して購入することを禁ず。

〔郡方御觸〕

御領國之諸產物、賣人之手を離、其所々奉行・支配人幷下々役人共江も賴込相求候人々有之躰相聞え候。右樣之儀役筋において致取持候而者、下方煩茂有之躰、不可然儀に候條、向後右樣之取持致間敷候。此段下々役人共江も、急度可申渡置候事。

五　月

右之趣、所々町奉行・御郡奉行等江可被申渡候事。

御領國諸產物、賣入之手を離取持致間敷旨等之儀に付、別紙之通御用番年寄中被申聞候に付、寫相達之候條、被得其意、下々役人共も不相洩樣可被申渡候、以上。

五月廿八日　　　　御算用場

五月。火災の際手鎌を携ふることを禁ず。

〔御郡典〕

付札、御奉行江

火事之節、於途中幷火事所に、、手鎌を以人を拂候儀抔有之躰に付、以後手鎌持參之儀可爲無用旨、文政四年定火消役等江申渡候。右御領國一統之事に候處、其節譯而不申渡候に付、今般申渡候條、手鎌持候者有之候はゞ、以來爲指止可被申事。

五　月

五月。石川郡鶴來石浦屋茂助調達金の加入を辭したるを以て特に儉約を命ぜらる。

〔大鋸文書〕

一、鶴來石浦屋茂助、今般御調達金四兩被仰付候所、難澁に付差上兼候旨申聞。依而此段御聞屆、左之通ヶ條書を以被仰渡旨。

覺

一、袴・羽織着用無用之事。

一、本結に而髮結申間敷、藁等にて結可申事

一、傘・下駄等相用不申、晴雨共草鞋相用可申事。

但し、雨天之節者ばんとり相用ひ可申事。

右之通當戌年より子年迄三ヶ年之間急度相守可遂節儉、尤家內一統、同樣之儀候。其他之巨細之儀は譯而不申渡候條、萬事右准じ省略可致候。万一心得違於有之者、無是非嚴重可申付者也。

天保九年戌五月　　　　御郡奉行

鶴來村役人中

五月晦日は小盡なり

六月二日。前田齊泰の子純六郎の逝去を公表す。

〔見聞袋群斗記〕

六月二日純六郎殿御卒去。御内實は五月晦日。御年御三つ。同九日御葬式、下谷廣徳寺江御移、同寺境内江御收り、御法號恭信院殿と申なり。

〔成瀨正敦日記〕

六月九日

一、純六郎殿御儀、前月中頃より折々御吐乳被遊、御蟲通之氣味も折々有之由。御便每に御容躰申上り、爲指御樣子に而も無之候所、今便永原貢等より來狀に御容躰書等到來。二十八日夜より御吐乳も數度有之、二十九日漫癇之御症に被爲在、次第御疲勞、衆醫等御詮議色々御藥用御座候へ共、朔日朝之御樣子に而は御急變も難計旨、御醫師中申聞候旨等申上。且朔日夕より猶御疲勞相增、次第被爲及御指重り、御大切候旨申上、御家老中等江も共趣達候旨等言上。同夜不時立早飛脚步申渡候旨等申來候事。

一、晝九つ時頃、當二日不時立早飛脚到來、純六郎殿當二日未の中刻卒去之旨、夫々申來る。夫々申上候事。

〔諸事要用雜記〕

六月十二日
一、純六郎殿御法號江戸表より申來。
恭信院殿敏恵紹寛童子
一、左之通高田氏申談事。
恭信院樣御忌日六月二日之所、思召に而向後五月晦日、小の月廿九日御振替之儀被仰出候事。

六月四日。氣候順を失するを以てこの日以後祈禱を行はしむ。

〔諸事要用雜記〕
六月四日
一、不順之氣候に付、左之ヶ所に而今日より追々御祈禱被仰付候由に候。
白山　倶利加羅　石動山
稲荷眞長寺　一宮　立山二ヶ寺
一、年寄中右御祈禱中今日より齋之事。
一、思召被爲在候に付、明日・明後日朝夕御清め被遊候段被仰出候段、御用部屋中演述有之事。

但、御奥江御料理もの〻ため申入置候。御膳奉行江は尤御用部屋より談有之。

六月五日

一、今日より三日於白山御祈禱有之、御名代前田兵部被仰付候事。

〔文化より弘化まで日記〕

五月廿九日より土用入之處、不順至極にて寒く、綿衣着用、手あぶり入用之位。翌氷室同斷。

六月土用入より餘り不氣候に付、諸寺社にて御祈禱。

氷室は六月朔日

六月廿三日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

六月廿三日

一、今日兩學校へ御出被遊候。

但、文讀師會讀二席・古易斷・算學、武澤田貢居合。

六月。前田齊泰百姓の風俗に關する心得を諭す。

〔郡方御觸〕

今般風俗等心得方之儀被仰出等之趣有之、依之爲心得申渡候。

御治世久しく、何事も自由なるま〻に、おのづから世風にひかれ、一統おごり、おこたりに

長じ、何茂身分に應ぜぬ雜澁せしめ、父母につかへ妻子をはごくみ候ことも茂行とゞかず、中には御收納にもつかへ申ものも有之、皆心得かたあしきゆゑに候。身分相應之昔よりの仕來を失はず、晝夜稼を專に致し候ば、おのづから無益之費も相止、勝手茂取つゞき、風俗もすなほに、實意をもてたがひに助合候やうに相成可申候。殊更年寄之儀は、百姓共一統のめあて手本に致し候事に候間、別に分限相應に、侈がましく又は吝嗇にて無理に利欲に耽り不申樣相心得、常々くらし方聊も身を不失樣心懸可申、其身の心得所行をもて、家内の者を初百姓共一統之手本になり、いづれをも引たて導、下を惠みそだて可申候。是迄段々仰渡され候儀、一統油斷も有之間敷候得共、尙更違失なく急度相心得可申事。

六　月

右御書立を以被仰渡之趣、奉得其意申候。此末被仰渡候通奉會得、急度相守可申候。依而御請上之申候、以上。

天保九年七月

惣年寄より年寄列迄

六月。百姓の田高を多く所有するものゝ心得を諭す。

〔司農典〕

耕作方之儀は、百姓根元之業に候得ば、高嵩持候者に而も、自身鍬を持手懸不申而は、下人

共等勢子方も不行届儀に候處、次第借上に相成、少々高數持候得ば卸し作勝にいたし、適致手作候而も下人任せに致置候様に相成、百姓之本義を取失ひ不埒之至り、第一自分身上之爲を不存儀。殊に長百姓等、前條之通自身鍬を持手懸申様相成候得ば、小百姓等稼之勢子与も相成、兎角不稼に而は難遁取直す道も無之儀に候條、以來此段急度相心得、持高之多少に不拘、其身鍬持可致耕作、又稼有之村々は、稼をも同様に相心得可申。以後若不精之者有之候得者、拙者共廻先に於嚴重致穿鑿、其様子に寄高等を取揚申儀も可有之候條、急度相心得可申候。且下人等も耕作幷稼方等不精之者有之候はゞ可及斷に、嚴重遂詮議可申候。奉公人縮方之儀も、前に申渡置候通、嚴重縮方相立可申候。

一、先達而申渡置候通、高番代は不及申に、高世話人等相立申儀一圓不相成、直卸しにいたし可申候。是亦廻先に而相糺可申候。

一、小作心得違之者有之候はゞ、前段之通廻先ゟ可及斷に候。

一、去年申渡置候通、以來秋に至り御收納入濟不仕、作德米引取申儀一圓不相成、且小百姓等御收納入濟無覺束存候者、役人手前に而先づ稻縮いたし置、御收納手常慥に見屆申上稻爲刈可申、彌無覺束者、其段組主附被相屆、役人手前ゟ稻刈揚御收納入濟いたし、其餘は作人ゟ可相渡候。

一、近年卸し方甚猥に相成、親作共一方之小作は、卸付米は不残御藏又は町藏江自分持高に當る御收納奎く入、一方之小作江卸付米は不殘作德米に當て、或は小作へ卸し米は不殘御收納に相立、手作之分不殘作德米に當て引取、用米を歩に取申割合にいたし卸し居候者多有之候。右に付御收納米米證不宜分も入交り、是等は甚以不屆至極に候。以來は小作一人々々之手前より、御收納米何程作德米何程与振分け可爲相計。右振分け樣は、卸し付米之內其斗代に當る免相を以振分可申。猶別紙乃至書に調置候。尤御收納米は先に相納、御收納入濟候上作德米爲相斗可申候。此趣親作・小作江得与申渡、双方請書取立可指出候。

一、親作共下田を上田之合盛に當て小作江卸し付、其身は上田を手作に致居候者有之躰。是等は卸し揚に相當り不屆至極に候。依而廻先に而相尋候儀も可有之候條、此段可申渡置候。

一、田地割永く不致而者地味善惡出來、且切高多村は地元割合不同に相成候に付、二十年相立候はゝ田地割可願出与先年申渡置候處、いまだ田地割不願出村々は早速願出、當秋稻刈跡より可致割替候。若彼是指構等有之、不願出族於有之には、村役人越度に可申付候條、此段可申聞候。且田地割いたし候村方も、垣內分り居候ヶ所は、垣內々々にて田地割いたし候族も有之、不埒之至に候。尤右樣垣內分り居候處は、垣內々々打込致田地割可申候。

右之趣、夫々得与村々末々迄行屆候樣申渡、其許中においても每度廻村、肝煎等より申渡方

之様子等承、綿密詮議可有之候、以上。

戊　六　月　　　　　　　　　　　安田新兵衛

諸郡惣年寄・年寄並・新田裁許・山廻中　　　　崎田達之助

七月二日。前田齊泰の子利順名を喬松丸と改む。

七月二日龜丸殿御名喬松丸殿と御改被進るなり。

〔見聞袋群斗記〕

八月朔日

龜丸様御名替之儀被仰付、前月十一日に御用人江御使等之儀申談置候所、前月二十二日御使相勤候旨等、二十四日出今日夫々申來候事。

〔成瀬正敦日記〕

今般龜丸殿御名喬松丸殿与御改被成候様被仰進候。此段榮操院様御初江可申上旨被仰出候。

八　月

右書取、御廣式頭兼松呼立相渡す。

龜丸殿御事、今般於大奥御男子様御誕生、御名松平龜五郎様与被稱、御同唱に付喬松丸殿与

御改被成候樣被仰進候。此段被仰聞候事。

八　月

右御用番美作守へ主税相達す。

七月六日。前田齊泰學校に臨む。

〔官私隨筆〕

七月六日

一、今日稽古御覽之儀に付、自分儀は御用儀取込候付、今日御居間書院に而御用伺、罷出候順に候へども美作守被罷出。

一、九時過學校へ罷越。

御覽之次第

學校御玄關より直に武學校へ被爲入、稽古夫々不指支段御達申上、御襖明次第定番御馬廻武藤李兵衛方山岸流居合相始、相濟師範人等爲引取。山崎新五郎儀御番引に付指引人指出、劍術相始、相濟夫々に爲引取。原田又六郎等指出、鎗術相始、相濟吉田權平方弓術指支不申段御達申上、御襖建射場へ被爲入、的御覽被遊、其內ねこだ爲敷。萩原勘太夫儀在遠所に付指引人指出、組打不指支段御達申上、重而御座之間へ被爲入、御襖明次第右稽古相濟、直に

又三郎家來大坪流荒木掛田中久藏方等乘馬御覽被遊、相濟候上學校より御戻り被遊候事。
一、八時過被爲入、夫々御次第書之通相濟也。
但、差定り候外御好に而被仰付候人々も有之、御歸殿は七半時頃歟之事。

七月六日。篠原監物の家來安田與吉の子孫作人を害して己も殺さる。

〔諸事要用雜記〕
七月六日
一、左之通り御横目より言上之事。
昨夜篠原監物家來安田與吉せがれ孫作与申者、前田兵部家來淺野川上鈴見橋邊同人家中之內に居住罷在候羽田權太夫与申者方へ忍入、同人悴少之進を殺害におよび、少之進妹ふさへも手疵爲負、直樣同家中隣家赤尾宗兵衛方へ忍入、右宗兵衛へ手疵を爲負候に付、宗兵衛儀右孫作を同人門前に而討留候旨承り候段、町廻り御横目足輕申聞候段羽田三作言上。
右者先達而孫作赤尾宗兵衛方へ養子に參り居、其節羽田權太夫娘を妻合候由。其後不行跡に付實家へ孫作相返、依而嫁も里方へ返候由。何か遺意も有之哉右之爲躰に候事。

七月十三日。蔭樹伐採の際濫に七木に觸るゝことを禁ず。

〔御郡典〕

今般改作所詮議之上、御田地日蔭に相成候ヶ所、蔭伐之儀申渡候所、此節追々伐木いたし候由。然處中には御縮方等閑に相心得、村方役人共迄見分之上、其筋江無斷伐木いたし候躰に候。七木御縮方之儀は、前々より嚴重申渡置候通、垣根廻りたりとも夫々見分を受根伐、極印不打渡置而は、御縮方相洩候之條、綿密に相心得、猥之儀無之樣可相心得。自然無極印之伐木等取扱致候樣之儀有之候はゞ、兼而申渡置候通、廻先山廻役人江申渡置、見咎御格に可申付候之條、得其意、嚴重可相心得者也。

戌七月十三日　　御郡奉行

羽喰・鹿嶋兩御郡村々役人

七月十八日。川上芝居の興行を禁止し、次いでその建物を毀ちて東本願寺末寺に寄進す。

〔川上芝居一件〕

一、川上芝居御詮議之趣有之、指止候樣、御用番内膳殿被仰聞、其段同心中並に小頭へ申談する。

天保九年六月八日

〔川上芝居一件〕

町奉行江

末々輕き者共、稼方薄難澁之躰に付、芝居狂言・物眞似樣之類、町奉行切承屆可然旨、先年及

指圖、其以來犀川川上に小屋も出來有之候得共、今般及指止可申旨被仰出候條、被得其意、

可被申渡事。

戊　七　月

朱　書

右昨十七日御席へ御呼立に付、十八日登城致候處、別紙之通御覺書、御用番御助又三郎殿

御渡に付、添書を以同日同心中へ申談。留御用帳に載之。

〔御家老方等〕

八月廿七日

一、近頃芝居小屋取毀、末寺大工小屋に寄進致候事に町奉行申渡由。

〔文化より弘化まで日記〕

文政二年犀川の上に而定芝居被仰付候處、此度不相成事に被仰渡、右芝居小屋取拂十七間四

十間計、此木品不殘東末寺へ被遣。但町會所より。右に付町方所々より、作り物等兩末寺江

品々寄進。

〔綿津屋政右衛門自記〕

一、川かみしばる御さしとめにつき、こやのぎは、おまつじさいこんちうにて、大芝居はひがしまつじへくだされ、みぎのざいもく、一向しうのものどもへ御申わたしにて、まひ日なむあみだぶつのひやうしにて、うんそういたし候。まことににぎ〳〵しきことにて候。小しばゐこやは、まちやに相なり候。

七月十八日。前田齊廣夫人の歸國以後に於ける駒込邸の管理に就いて定む。

〔於江府每日書立幷日記之內書拔〕

七月十八日

眞龍院樣御國表江御發輿後、御中屋敷御殿曁御庭向共、同所詰御橫目江引渡之儀伺被仰出候間、永原貢等より引請可申旨被仰渡候付、御發輿後右貢等示合引受可申候。且又御庭向之儀者、當時小左衞門詰合候間、同人示談可仕与奉存候。

一、右御向等引請候上者、都而同處詰私共幷假橫目取㕝可申候。

一、眞龍院樣御發輿後、御殿向之儀は、非常御立退等御用之儀も難計御座候に付、御建物等格別大損じ不仕樣相心得、不叶御修覆之儀御作事奉行中江可申談、猶又心付候儀者、追而御

達可申も可有御座候。

一、眞龍院様御住居以前之通、右御殿風入定日相極、毎月六日之朝五半時より八時迄、御間々々爲明、割場より足輕二人・小者二人受取、御作事處より棟梁壹人・日用一人爲指出、掃除等申付、私共見廻り、爲御縮御歩横目・御横目足輕爲相詰可申候。右掃除御用之品々御作事所より受取可申与奉存候。

一、御庭之内御亭・御物見等、是又御同所様御住居已前之通、割場より毎日小者貳人充受取、草取・掃除等爲致可申候。

一、御殿向幷中御門之内空地にて、御同所様御住居以前之通、割場より毎日小者二人充受取、草取掃除等爲致可申候。

一、右御殿向風入曁空地掃除等之儀、已前之通留書御横目足輕江申渡、都而指引爲相勤可申候。

右御中屋敷御殿向等御引渡に付、眞龍院様御住居以前之振を以、右之通相心得可申哉与奉存候、以上。

戌七月　　　　　　高岡右門

前田圖書様

山崎庄兵衛様

右紙面之通相心得候様、御横目江申渡候事。

七月廿一日。前田齊泰學校に臨む。

〔官私随筆〕

七月廿一日

一、今日於學校出情人等稽古御覽之儀、一昨日被仰出、夫々申談置。今日自分は九時承り退出、學校へ罷越。年寄中等伺公之人々山城守・美作守・内匠・大學・外記、九半時被罷越。

一、八時過御出御次第書之通夫々濟、御次第書等別にあり。

一、御戻り七時前也。

七月廿二日。百歳以上の高齢者に金品を下賜す。

〔國事雑抄〕

一、鳥目七貫文宛

石川郡二つ屋村百姓庄右衛門祖母　さん

同　郡間明村百姓彌三郎祖父　六兵衛

河北郡四王寺村百姓九郎兵衛祖母　より

石川郡別所村百姓　九兵衛

百歳者に錢を賜はることこの年を初とするが如し

右さん等、百歳以上におよび稀成高年之者共に付、如此被下之。子孫彌孝行を加へ可申候。
此段其身幷子孫共江可被申渡候事。
右御算用場奉行江被仰渡。

一、前同断

堀川川除町越中屋與右衛門後家　たよ
才川川上新町越中屋嫁しけ母　まき
堀川淵上町能登屋仁右衛門養母　むめ
木新保竹町高瀬屋清次郎養母　そよ

右たよ等百歳以上におよび候者共に付被下之。
右町奉行江被仰渡。

一、染物二反　能州鳳至郡年寄並　伊藤八左衛門
御内々に而白銀二枚・鳩杖
右百歳餘に相成候に付被下之。
右御郡奉行へ被仰渡。
天保九年七月廿二日
〔成瀬正敦日記〕

三反は二反なるべし

八月三日

一、能州馬場村伊藤八左衞門儀、當年百歳と罷成候に付、拜領物染物三反・鳩杖一本被下候。表方に而被申渡、右鳩枝出來方御次に而申渡候樣先日被申聞、御細工所へ申談置候所、昨日出來出す。白竹に而其人之乳ぎり、上に桑に而鳩之形付る。杉さんふた箱入、木綿袋、さなだ紐、上に鳩杖と調。右御覽に入、今日御用番方執筆呼立引渡遣す。

〔金澤長壽錄〕

金澤町奉行江

一、町方の内百歳以上に及び候者は、各より時々安否を尋、少々宛とらせものも有之可然候。向寄に立寄安否を尋、保養方之儀をも可被申付候事。

戌七月廿二日

〔天保日記〕

御算用場奉行江

一、御郡方等之内百歳以上に及候ものは奉行人等時々安否を尋、少々宛とらせものもいたし可然候。巡見等之節者立寄安否を尋、保養方之儀をも申付候樣、御郡奉行等江可被申渡候事。

七　月

御郡方等之內、御扶持被下置候者之家內は、及九十歲候而者、御扶持方不被下仕來に候得共、向後御扶持方被下置候者之家內に而も可被下候條、致吟味、及九十歲候もの有之候はゞ書出可申事。

七　月

是月は大盡なり

七月晦日。御郡方惣年寄等に對し勸農に關する去年の令を勵行すべきことを命ず。

〔近敎日記〕

七月晦日

一、諸郡總年寄共へ被仰出之趣申渡方治定いたし、年寄中より此間當席に而繕り出置候通に而可宜旨、昨日又三郎殿被相返候に付、今日可申談と遂僉議候付、昨日御算用場奉行前田主馬幸罷出居候付、今日四つ時過、諸郡總年寄共御次へ御用有之候間、當時出府いたし居候分不殘、改作奉行誘引に而罷出候樣被申渡候樣申談置候事。

一、四つ時頃左之人々罷出候旨、改作奉行より及屆候事。

能美郡總年寄　石黑源之丞・太田清左衛門・牧野宗右衛門

石川郡總年寄　廣瀨又八郎・田邊次郎吉・瀨尾吉郎兵衛

河北郡總年寄　渡邊兵右衞門・林孫右衞門・伊藤源次
口郡總年寄　三輪宇八郎・眞館彌左衞門
奥郡總年寄　眞清田三右衞門
射水郡總年寄　折橋善兵衞・寺林瀬一郎
礪波郡總年寄　得能覺兵衞・荒木平助・安藤次左衞門
新川郡總年寄　金山十次郎・伊東次郎左衞門・室田宗兵衞

右波之間御緣側に屛風圍出來、一集に列居爲致置、兩側に改作方御郡奉行安田新兵衞・駒井丹之丞・矢部順平　名越彦右衞門罷出居、上之口より主税罷出、左に記置候覺書之趣申渡候。右人々爲引候而、左之者共一集に出し是又同樣申渡候事。

石川郡年寄並　朽木八郎右衞門
河北郡年寄並　西田藤左衞門
口郡年寄並　當摩太間
礪波郡年寄並　石崎市右衞門

右四人之儀は年寄並に候得共、總年寄へ指加へ、同樣に御用相勤候之旨、譯而改作奉行等より申聞之趣有之候に付右之通同樣に申渡候事。

一、右總年寄等江申渡し被仰出之趣寫、安田新兵衛等江相渡、今日右之通被仰出候間、猶更各よりも御趣意通得と相心得候樣、指引有之樣被仰出候旨申談候。且今日當病等に而不罷出總年寄共等江は、今日罷出候者より演述いたし候樣可被申談旨も申渡候事。

一、今日當病等に而不罷出者共左之通り。

口郡總年寄　石崎彥三郎

奧郡總年寄　北村爲次郎・筒井內記・狩野恒方

年寄並に而總年寄被指加。　伊藤八郎

天保八年七月十八日の條參照

地元之儀者、改作之根元に而、惣年寄共役筋本業に候處、心得方等閑至極、隨而農作勢子方茂不行屆、高方仕法茂違亂に付、去年來御仕法被仰出、改作奉行より追々申渡候儀共有之候處、惣年寄共等之內、心懸宜萬端骨折相勤候者も有之躰に候得共、中には會得方茂不行屆哉、今以心得方も不宜、右仕法茂一旦之事之樣に存者も有之哉。且身元宜者共は不便利之筋も有之躰に而、舊染之弊風改兼候樣子被聞召候。是等は專役筋之本分に實意を不盡故と思召候。向後急度相心得、去年已來被仰渡候御仕法御趣意全行屆候樣心掛、村方取扱等猶又無油斷可相心得候。此段可申聞旨被仰出候事。

七　月

七月。御郡方惣年寄等の遊惰奢侈を戒む。

〔改作方御仕法留〕

御算用場奉行江

御郡惣年寄共等次第遊惰に流れ、僭上奢侈に押移、廻村之節など事重に而村方難儀不少躰。且家柄或申込抔に而役付候儀与相心得、手筋を求侍中に立入、又は權門江立入候。町人共等江も因之賄賂を取扱申様之族も有之躰相聞え、全躰自己之欲得を專にいたし、沙汰之限に候。今般惣年寄共心得方之儀に付、於御次被仰渡之趣も有之候條、急度心得方相改候様、猶更嚴重可申渡旨、御郡奉行江可被申談候事。

戌七月

七月。非人小屋に死者多きを以て恤養せしむ。

〔見聞袋群斗記〕

七月、非人小屋死する者多きを聞召恤養を加へしむ。

八月二日。前田齊泰學校に臨む。

〔官私隨筆〕

八月二日

一、今日學校へ九半時御供揃に而御出之處、主付播磨守氣滯快、今日出席は有之候へども、いまだ十分に無之故、丹後守へ賴に付如例九時學校へ罷越。

一、出情人等御覽御次第等すべて先日之通也。年寄中等山城守・内匠・又三郎・圖書・將監・外記被罷越。

一、御取次は惣而主稅也。

一、御歸殿七つ過、丹後守は七半歸り候也。

八月四日。前田齊廣夫人江戸を發し就國の途に就く。

〔江戸諸用金澤用向〕

八月四日

一、眞龍院樣五時之御供揃に而九時前御發輿被遊、御供人御家老中川八郎右衛門殿、御用部屋坂井小左衛門殿、御附頭衆二人、御横目瀨川久右衛門殿・河野四郎右衛門殿、同廿二日金澤に御着被遊候事。

〔成瀨正敦日記〕

八月十三日

一、眞龍院樣益御機嫌克、當四日九つ時過江戸表御發輿被遊、七ッ半時過蕨御泊へ御着之旨

等、坂井氏・飯尾より申上る。且江戸御廣式頭等よりも申上候事。

八月十二日。百姓の租納皆濟以前に新穀を質入とすることを禁ず。

〔郡方御觸〕

是迄皆濟以前新米致質入に候儀有之躰、不埒之至に候。向後者年之内新米致質入候儀、堅不相成候。若心得違之者有之、右躰之儀有之候得者可取揚旨、御用番年寄中江も相達、改作方御郡奉行江申談候間、右之趣各支配所質屋共江嚴重可被申渡候、以上。

八月十二日　　　　御算用場

八月十七日。租米の上納を二番皆濟する十村組も亦一番皆濟同様に賞賜すべきことを告ぐ。

〔司農典〕

御領國一番皆濟、多分能美郡山上組幷河北郡金津組に而、右兩組者皆品所等に而、村數も少く、皆濟取結仕安く儀。外組はいか程出精候共難越進儀に付、以來進方之爲、右兩組之外二番皆濟之分、一番皆濟同樣に取扱申度旨、今度御算用場江委曲相達置候處、御用番年寄中江も相達、御聞屆被成候段、同場より申談に候條、得其意、猶更無油斷皆濟取結方可致出精候、

以上。

戌八月十七日

安田新兵衞

松田左兵衞

諸郡惣年寄中・年寄並中

尙以本文之趣、兩組之儀も、勿論一番皆濟に候得ば、可爲其取扱候條、爲念此段申渡置候、

以上。

八月二十日。瀧之間の月次經書講釋は自今學校助教をして之に當らしむ。

〔每日帳書抜〕

八月二十日

一、瀧之間月次經書講釋、是迄御儒者へ被仰付候得共、以來は於學校助教本役相勤候者へ可被仰付旨申渡。

御出は前田齊泰

八月廿二日。前田齊廣夫人金澤に着し金谷御屋敷に入る。

〔諸事要用雜記〕

八月廿一日

一、眞龍院樣今日津幡御着に付、五時御供揃に而、同三分五厘御出被遊、津幡御小休所へ四

半時頃御着、御膳被召上、眞龍院様九半時頃津幡御着被遊、無程右御旅宿へ御出御對顔被遊、追付御戻り、無程御供揃に而懸流六つ鎌下御歸殿被遊事。

〔官私隨筆〕

八月廿二日

一、眞龍院様此度御湯治御願御國へ被爲入候付、當四日江戸御發輿、御道中御日圖之通今廿二日金谷御殿へ御着之筈に付、今日例刻上下着用に而二御丸へ罷出。

但、昨日御泊津幡へ相公様被爲入候也。

一、森下御立之附人九半前來候付、松坂通り金谷へ罷越。

一、大橋之附人八つ過來り候上、暫有之御白洲へ罷出、夫より堤町之附人來る。

一、被爲入候節平伏仕、御輿脇より奥村丹後守等罷出居候旨申上候迄に而、御會釋等無之。

一、被爲入候上階上御幕下り、重而しぼり上候上溜りへ罷越。

〔成瀬正敦日記〕

八月二十二日

一、森下御立之御案内に而、金谷御廣式江御前可被爲入旨被仰出置候得共、其儀に無御拘、九ッ餘程前御供廻に御出被遊候事。

一、八ッ三分益御機嫌克御着輿被遊候事。

〔見聞袋群斗記〕

眞龍院様御國許溫泉御湯治御願、八月四日江戸表御發輿、同二十二日金澤江御着、金谷御殿に御住居。其後右御殿松之御殿と唱申旨被仰出なり。

松の御殿と稱したるは誤なり本年八月廿四日の條參照

〔越の山文〕

越の山文は前田齊廣夫人入國の紀行なり

とし頃越路の湯あみむ事をおもへど、公けの御掟とやらむもあれば、とみにもゆるされまじと、空しく月日を送りはべるに、宰相の卿もみづからの心をくみて、何くれと公にねぎ申させたまひけるに、天保九つのとし彌生末つかたにや、漸く暫の御暇を給ひぬとの仰事下りぬ。いともかしこく畏り侍りて、嬉しさいふばかりもあらねど、さすがに年月なれしあづまの空立離れ行かんも心ぼそく、かつうは偕子の君のしたしみふかく、いといたくしやかに物し給ひぬるに、今さら別れ侍らむもほいなく、又むまご達の生末も見まほしきに、矩子・清子のいたうしたひとゞめたまふもいなみがたき物から、とやかく思へど、梓の弓のうらなくもとし月籠めしねぎ事なれば、心强くも引きは返さじとつれなくいひ放ちなどしつるに、いつしか春過夏もたけ、秋來るかぜのそよ吹より、此方かなたと行むかひ名殘思ふまゝに、いとはや葉月四日といふになりぬ。けふや東のわかれとをしまれて、とみにたち出べくもあらず休

偕子は前田齊泰夫人

宰相は前田齊泰

らひあへり。宰相の卿をはじめとして、方々よりうち〳〵見立らるゝおもと人杯もつどひて、いと細やかなる賑はひうれしさに、いとゞ名残もそひて、いひ出べき言の葉もあらねば。

　越路にもいそぐとすれど東なるこなたかなたの名残つきせぬ

今日しも秋の空晴わたり、風しづかなるに、午の鞁の頃巣鴨の舘をたち出る。宰相の卿を始めとして、表立見たてらるゝ使の人あまた勇々敷、又所々おもひ〳〵にとし月の名残をしたひ來て見送る人夥しく、かつうは旅だちの粧ひみるともがら巷につとへり。

　袖はへて旅だつけふの賑はひもこの情とぞおもふうれしさ

いと心強くは立出ぬれど、かへりみがちにて。

　住なれし東のそらを跡に見てたちわかれ行そでぞ露けき

平尾の別莊晝のやすらひなり。爰にも宰相の卿を初め見送らるゝおもと人などもつどひ、心々に見おくる人とり〳〵賑はふ。餉なとたうべて郊園にとそゝのかされ出ぬれど、何くれと跡のなごりのみ思はれて、たぐひなき眺めにも心の移るとはなけれど。

　花もみぢなれし詠を思ひ出のなごりぞとまる宿の庭もせ

　池のなみ松の木立もしづかなるそのゝながめは如何わすれん

こゝより旅のよそほひもことそぎて立出むとす。

しても本のまゝ

中　略

二十二日、今日なむことに隈なく空も晴わたれば、いとゞこゝろもいさみて、卯のなかば遅しと立出る。行々見わたす景色むべもことなり。こゝを横濱・北南中條・太田村・二日市などいふよし。松の並木陰深く、むかひに森の木だち・砂山・うみ面えもいはれず。千町田の稲の穂浪に露を結び、朝日にかゞやくもまた一際の眺めなり。

けさは猶こゝろにかゝる雲もなく稲の穂末のかげつゞくらし

森つゞき野山のみどり　海原もながめへだてぬ　けふの道の邊

松すぎの木のまながらにみ渡せば沖にかずそふあまの釣ぶね

森下に晝の休らひしつ。此宿へも宰相の卿を初めとして方々より使をたぶ。ふるきおもと人しても今日の歡びを賀し、くだものなどたまひて待むかへさせたまひ侍りぬ。さきつ年までいと近う馴親しみにしおとな人なれば、年頃の隔を語ふにも、袖のみぬれて名殘盡せねど、早とく出たちぬべしとそゝのかさるゝまゝ。

はたとせの隔は夢の廻りあひてかはす言葉も現とやおもふ

爰より旅衣よそひつゝ行程に、左右松樹森々たる陰より海上はるかにみえわたり、田面の穂末秋風に靡くなどいとゆたかなり。大樋にしばし休らひたち出るに、此ほとりよりいとゞし

く家居はいふもさらなり、道の邊く〱まで、□となく老若袖をつどへ待迎へ物みむとて賑はへり。

家々に袖をつどひて諸人のけふ待えつゝどよむかしこさ

淺野川を打わたるに、かは上には名高き山々嶺々雲に聳え、影は水にひたしてすさまじく、下は海波につゞきて眺望たぐひなし。

橋柱かゝるちぎりに袖はへてわたりや初めん波ぞ靜けき

高き山ふかき千尋の見渡しにかけてぞおもふ都路のそら

かくなむおもひつゞけ行ほどに城内に入ぬ。かねてより聞しにもまさりておもだたしくおもはるゝ。未のきざみにやあらん金谷なる館に着侍りぬ。宰相の卿をはじめ待むかへ給ふ。對面しつゝ何くれと語りあふに、うれしさいふばかりもあらねば土器とりて。

歡喜の影さしそへて百千度めぐるも盡ぬけふのさかづき

此方かなたもうけなどしたる家居庭のたゝすまゐ、いと珍らかに興あるさまなれば。

瀧津なみ落て流れのするゑ清く千よもすむべき宿のいけ水

八月廿三日。親作の收得する用米を減額する件に關して告ぐ。

〔河合錄〕

用米切之儀は不致樣、先年申渡候儀有之候に付、相對にて見延米と申名目にて、用捨致し候者も有之体に候へども、根本かね合無之、懸り〳〵に切申儀ゆゑ、子作も色々とねだり申儀も有之体。元來御貸米等有之節、用米切り不申儀は、不相當の儀に候間、以來は乃至御貸米之高、御收納に壹割之御用捨に相當候はゞ、作德にも壹割の征にて致用捨、都而御貸米之征を以、用米之內切り申儀に取極申渡候間、親作・子作心得違不致樣、嚴重可申渡候。併御貸米等無之年に而も、子作致難儀、用米切遣候儀は、親作・子作之間柄に可有之處、不取違樣可申渡候。以來若心得違之者有之、御貸米有之年用米不切者、又は無謂ねだり申子作有之候はゞ、嚴重可相糺候間、無泥可及斷候、以上。

戌八月廿三日

八月廿四日。前田齊廣夫人の住する金谷御屋敷を金谷御殿と稱せしむ。

〔成瀨正敦日記〕

八月二十四日

一、眞龍院樣金谷御屋敷御住居之上は、金谷御殿与相唱候樣可被仰出哉。江戶表において壽光院樣御住居御普請被仰付、梅之御殿与相唱候樣被仰出、追而右御殿に法梁院樣も御住居被成、梅之御殿与唱申候間、左之趣奉伺候。

眞龍院様金谷御住居に付、是以後金谷御殿与相唱候様被仰出、此段一統可被申聞旨被仰出候。

八　月

右伺之通被仰出候付、御用番美作守へ相達、御城代江も演述有之様被仰出候旨も申述置候事。

八月。前田齊泰、獄中死者多きを以て居所を修繕し食事の改善を命ず。

〔見聞袋群斗記〕

八月獄中に在る者死人多きと聞召、囹圄を繕理し、飲食の悪しき物を與るなかれと令有り。

九月朔日。前田齊泰、齊廣夫人を招請す。

〔諸事要用雜記〕

九月朔日

一、今日眞龍院様彌御招請に付、六時過御目覺、御楠等相濟次第御縮引受候筈に付、拙者共幷御招請方主付早く罷出候筈。依而六時途中に而罷出候。

一、六半時前御縮夫々宜に付、御用部屋中等例之通相伺事御縮引渡候。

一、五半時前眞龍院様御出被遊、御居間へ御通之上、御雜煮等夫々御祝方相廻り、相濟四時過御能相始り候事。

一、右御能相始り候前四時御縮解、其頃御表宜段申上り、同刻御小書院へ御出被遊、河野四

郎右衞門役儀之御禮被爲受、相濟、御大廣間江御出、當日出仕之面々一統御目見、相濟御入被遊候事。

一、右御入之上無程御能相始り候。

一、御中入に重而立田之御杉戸迄御縮に成、無程二汁五菜御料理、御前幷方々樣御相伴に而被上候事。

但、初め御盃事は御前迄にて、方々樣御盃事は無之事。

一、右御料理相濟、重而御縮菊之御間切に成、追付御能相始り、夜四時過相濟候事。

一、御能相濟、御縮解、其節御奥へ御入被遊、夫より御夜食榮操院樣より被上、御前にも被上候。眞龍院樣御戻り、夜八時過御歸殿被遊候事。

御能御番組左之通。

寢覺　甚次郎　八嶋　忠藏　藤　御

弱法師　權進　融　遊曲　御　祝言養老　甚吉

末廣　木六駄　靫猿

以上

九月八日。先に幕府より贈られたる綿羊を越中屋紋次郎に與へて飼育せ

しむ。

〔成瀬正敎日記〕

九月八日

一、公儀より御拜領之綿羊、是迄御鳥部屋に御飼置候處、先達而より僉議之趣相伺、當町越中屋紋次郎江泉野において地面御渡、右綿羊相渡飼立被仰付候付、右小屋に用意方夫々致出來候旨、一昨々日町會所より及屆候付、今日綿羊牡五疋・牝三疋都合八疋、露路方より紋次郎へ相渡候樣夫々申談置候事。

九月十二日。大聖寺侯前田利極卒す。

〔諸事要用雜記〕

九月十一日

一、駿河守樣御所勞之御樣子に付、萬一不輕御症にてはと御案事被遊。依而丸山了悅被遣、今夕暮頃發足之事。

一、其後あなた樣より申來候由にて、藤井方亭も參り候事。

九月十三日

一、今日七時頃駿河守樣御內御使者御近習頭參り、御用部屋に逢候而、御內實昨晝後御指重

被遊候由申置、罷歸候由之事。

〔成瀨正敦日記〕

九月十三日

一、丸山了悅儀、今朝五ッ時過大聖寺表より罷歸、駿河守樣御容躰委曲於御前申上候旨。御所勞に付御醫者被進、難有思召候。猶御使者に而禮被仰上候得共、先此段被仰上候旨、御近習頭を以被仰出候旨了悅申上。委曲申上置候。御容躰は段々御危篤に被爲至候旨申聞候事。

〔成瀨正敦日記〕

九月十四日

一、藤井方亭儀今朝罷歸、一昨日九ッ時過此表出立仕、昨日曉八ッ時大聖寺表へ參着仕、御館へ罷出候所、實夕御大切に被及候間、伺は不被仰付旨に而、御用無之旨に而、晝九ッ時頃彼地發足、今朝罷歸候旨委曲申聞候付、奥取次を以申上候所、御用無之旨被仰出候付、其段方亭𛀁申談相返す。

昨日は十三日にして夕は十二日なり

九月十四日。前田齊泰、奥村故河內守の編纂に係る袖裏雜記を徵す。

〔本多政和覺書〕

九月十四日

奥村故河内守、貞享頃より寛政之末迄御親翰帳書抜仕候者、袖裏雜記と名付御座候。當時は御燒失後古き御親翰帳も少々ならで無之、多分は右雜記を引しらべ申趣に而、用立候品御座候。先年より右名目不申上置故、書拔等指上候節も、古き帳面之内に有之抔と調上申候得共、右之通世話仕等之儀に付申上候。以後は右之内有之儀は題號を申上、右雜記も一二冊宛御覽も可被遊哉。丹後守よりも、雜記之儀御序に御聽に達候はゞ難有由申聞候趣も御座候旨等申上候處、其通相心得、一兩冊入御覽候樣御意。

九月廿六日。錢相場騰貴したるを以て給金の渡方に就いて馬廻頭より申請す。

〔本多政和覺書〕

九月二十六日

一、錢相場次第引揚り、當時七貫七・八百文相成候由。來月は御家中給金渡り之時節之事、下々甚難儀仕趣に付、御算用場より錢御拂に被仰付候歟、無左者錢手形と交而御家中へ御渡し歟不被仰付候而者相成間敷哉之趣等、御馬廻頭一統僉議之趣、中川平膳より城州へ別席にて相達候旨演述、覺書も被出之。

九月廿九日。救小屋の増設計畫を定む。

〔本多政和覺書〕

九月廿九日

一、救小屋、芝居小屋跡幷田井新町小家買上一ヶ所、淺野町一ヶ所申付候旨申聞。右田井新町は通りを圍候に付繪圖も出之。右之外救小屋へ入候者之外困窮者之爲、金澤七ヶ所に而粥身元之者ゟ申付爲賣候趣申渡候旨申聞。右粥一日分十八文に而、小前之者之爲甚辨理成仕法之趣之樣子に付、十八文之內償を渡可申哉之趣も申聞候事。

〔文化より弘化まで用記〕

十月、覺源寺前芝居小屋跡・田井新町・淺野町中島三ヶ所に困窮人御救小屋被仰付、町同心兩人右專務、御用裁許主附定番御步坪田作兵衛、御算用者園部宅次郎被仰付。

九月。年寄中より諸士の風俗に關する心得の細目を頭役に告ぐ。

〔典制彙纂〕

御家中風俗等之儀に付、先達而被仰出之趣有之、右に付各心附之趣被相達候品共、猶又遂僉議、別紙覺書之通申達候。此趣は組・支配ゟ申談候儀に而者無之、頭々心得に申聞候間、篤と相心得、頭々より時々無怠慢樣可被申聞候。是迄金龍院樣御代以來、種々被仰出之趣有之候處、其砌は相守候樣相見え候得共、無程緩み來り候品々茂多く、等閑成儀に候。とかく是迄

も被仰出候筋ども、一旦のみにて永久に守り遂候儀無之、御趣意通り相立不申候。今度は其所御格別に被思召入、一旦之事に相成不申様に与之御趣意、各にも被奉承知候通に候。尤先年より之被仰出通、聊無違失相守可申段は不及申候得共、餘り窮屈に而者、却而後を遂得不申儀に候間、守り得可申程之所を嚴重に申渡、等閑成心得之者共は、頭・支配人手前において綿密に致穿鑿、重々申諭候上、不致承引者は可及言上候。別紙之趣弛み過候様にも相聞え候得共、ヶ様に有之候はゞ守り易き筋与存候間、此趣を以相心得、無違失相守候様可被申談候。是等之儀急度觸出し候而も、只形のみに相成候而は如何に付、其儀無之如此申談候儀に候。猶口上に申達候通候間、被得其意、諸頭中一統ねも各より寄々可被申談候事。

戌　九　月

參會之事

段々被仰出置候通、彌無益之參會無之様相心得可申、席上馳走振、奢侈之姿今以不相止候躰に相聞候。成限質素に相心得、實意を失ひ不申様可有之事。

但、押立候祝事等之節、親類縁者之外者不相招様、文政三年被仰渡置候得共、師家・至而心易朋友抔者格別之事に候間、相招候而茂苦ヶ間敷候。兎角長じ不申様可相心得候事。

茶會之事

無益之茶具抔に要脚を費し、或は會席等榮耀を專与仕儀、甚無謂事に候。侘を尊び本意を取失不申樣可相心得候。御役人を初勤仕之妨に相成、年若之人々等文武を怠り候而者不相成候間、猶更心得も可有之事。

琴・三味線之事

盲人之外目明之女三味線爲彈候儀、今以有之躰甚心得違之事に候。右目明之女徘徊不致樣穿鑿方之儀、町奉行江申渡候趣有之候。士中江も心得方尙又急度可被申談候。將又祝之節、盲人琴等日之内爲彈候儀不苦旨、先年被仰渡置候。日之內而已と有之候而者、却而守り難き儀に可有之、少夜に入候而も苦間敷哉之事。

殺生之事

文政年中一旦堅く被禁、其後御解被遊、相長じ不申樣被仰出置候御主意、尙更急度相心得可申候。役懸り之人々抔は別而心得も可有之事に候。且又三里四方之內天之綱張候儀等、御停止之品、兎角相止不申體に候。身柄之人々抔に者有之間敷事に候得共、猶更心得可有之事。

着服之事

女向抔次第宜品を用候躰、心得違之事に候。是迄每度被仰出候通、華美に長じ不申樣親・夫等より急度可申談候。猶又衣服之儀に付而者、追而可申渡趣も有之候事。

縁組養子之事

拵方事輕之儀毎度被仰渡置候處、其後時々頭之指圖通にも不行屆躰、或內々に而拵料抔申請候體も相聞え候。甚心得違之事に候。尚更急度相心得候樣、頭々時々深切可申談候。

家作之事

格別不相應之家作等仕者有之候はゞ、頭見分之上爲取毀可申候。時々頭々ゟ及示談候刻、速々被仰渡候通無違失可申談候事。

音信贈答之事

大體文政年中申談候通相心得可然候。乍然平士之內にも、身上之大小も有之候間、猶程能可申談候。餘り窮屈に成居候而は、守り難き儀も可有之哉に候間、可有其心得候事。

附、親類縁者等餞別土產物之儀等、堅不仕樣是迄被仰出置候得共、今以不相止躰相聞得、心得違之事に候。併身近き親類等輕少之品も難贈と有之候而は、却而情實に當り不申儀も可有之候間、至而近き親類等、日用之粗品抔心計少々贈り候儀は可爲其分、尤要用ならざる品等殊更に相贈候儀は、堅有之間敷、是等之處相心得懇に可被申談候事。

九月。村々廻方藤內に稻を支給し又は役田を分かつの慣習を禁ず。

〔司農典〕

御郡方に居住罷在候藤内共江、村々廻方等申付置候者共、時節之作物は不及申に、秋に至り稲刈入之時節、村々軒別に稲相勸候に付、生稲抔に而一軒より何把与歟指遣し、其中不得指遣者之分者、村役人手前江取受け、一村に而者何拾束与取集、前々より嘉例之様に相成候。且亦村に寄役田抔与名附、田地に而指遣置候向も有之躰相聞得候。元來田地之分者不及申に、稲之儀も夫々縮方有之候所、右様田地に而相渡、稲抔も取散候儀者、不埒之致方沙汰之限に候。以來少分たりとも、右様之儀者一圓不相成候條、此段村々役人共不及申に、小百姓等及藤内共江も嚴重可申渡候。如此申渡候上右躰之儀於有之に者、急度相糺可申付候條、此儀も夫々不相洩様可申渡候、以上。

戌　九　月　　　　　　駒井丹之丞

　　　　　　　　　　　堀　鈴太郎

諸郡惣年寄中等

九月。數人の親作を有する場合に於いて小作たるもの、用米算勘の法を定む。

〔上田舊記〕

百姓中卸作之内、假令者子作手前に親作三人罷在、此内一人之親作之分、御田地不納同様之

立毛に相成居、今兩人之親作之分者、用米取請申程之立毛に相成居、是迄之所親作何人御座候而も、此内誰分之上作或者不納同樣之作躰に不拘、何方より請分之御田地出來米に不拘、子作之者御年貢全入濟仕來申候得共、今度被仰渡候趣に而者、親作切御收納・用米之振分被仰渡候所に而者、御田地之立毛出來之善惡者、自然与親作々々之幸与不幸与に有之候間、御作田坪切損徳に可相成与相心得可申哉与、村々之内より申聞候。此儀子作一人手前に親作何人有之候共、作揚候上者親作手前へ、子作一人手前に作揚米に而、平均爲致可申哉否奉伺候間、御指圖可被下候。猶更假令書相添小紙を以奉伺候、以上。

戌九月

得能覺兵衛

善木平助

安藤次左衛門

石崎市右衛門

御改作方御郡御奉行所

本文親作幾人より請居候共、都而子作一人手前作田平均を以算用可致事。

戌九月

改作方御郡奉行

假令

一、一石五斗　親作在所　何右衛門

但此分上作にて皆濟

一、二石　親作何村より懸作　何兵衛

但此分不納

一、一石五斗　親作何村より懸作　何右衛門

但此内七斗不納、八斗出來米

請米合五石　子作何兵衛惣請米

内二石三斗在米、二石七斗不足米

但是迄者ヶ程之分、親作三人平均に而米取請、分散配當仕申候事。

九月。困窮の爲離散流浪する者を本籍に召還して生業に復せしむべきことを命ず。

〔御郡典〕

卷目、御算用場奉行ゟ

諸郡・諸町困窮人之內、產業取失、他支配等ゟ離散致乞食居候者、早々支配所ゟ引取、取扱可申候。且亦當時非人小屋入之者も老人・幼少・病人之外は引取、是亦於支配所に取扱、追々生

業に爲在付候樣、厚可致世話候。今度於當町に、極困窮人取扱方仕法も有之候條、諸郡々々共右取扱方仕法取極、早速御算用場江可相達候事。

右之趣遠所町奉行・御郡奉行江可被申談候、以上。

九　月

〔御郡典〕

諸郡困窮人取扱方等之儀、先頃申談置候通に候。然處調理方混雜之趣も有之候條、村々困窮之小百姓、幷請作いたし耕作方携候頭振ども家內御救方之儀は、改作方に而取調理可被申聞候。町立・宿立・浦方共外都而耕作方に不預者共之儀は、御郡專務に取調理可被申聞候、以上。

十一月廿四日　　御算用場

兩役御郡奉行中

十月三日。當年の作躰佳良ならざるを以て收納米の檢査方法に就いて稟請す。

〔河合錄〕

諸郡とも當年作躰不宜、少出來、殊に甲乙甚敷、併御收納米拵方等之儀は嚴重申渡置候へども、前段之通少出來に而、米無數に付、次米も入交不申而は納米不足仕向も御座候間、諸代

官村柄により納方心得有之様御談御座候様仕度、平年同様之撰方に相成候而は納方指支申候。乍去右に拘り、納方不穿鑿に相成候而は相成不申候間、代官々々手前に而、何分實へ付精誠之撰方有之様致度、此段急速被仰談候様仕度候、已上。

戌十月三日

稲葉助五郎

堀鎗太郎

御算用場

十月四日。大聖寺侯前田利極の喪を發す。

今は四日にして此日發喪せしなり

〔諸事要用雜記〕

十二月三日

一、駿河守樣前月十二日御病氣御指重り之所、追々江戸表之御手續も有之由に而、表向御發無之所、公儀向へ今日御大切、四日御卒去之儀に御屆之御手筈に成候由。仍而今晩御使者可參筈。明日御使番御使可有之筈之御樣子之事。

〔成瀨正敦日記〕

十月五日

一、駿河守樣今巳之刻御卒去之段、御家老より早打御使を以及御注進候旨、夜前九ツ時過御

夜番江被申上候旨。右に付昨四日より三日鳴物等遠慮之儀申渡候旨も申上候由、山崎申聞、

一、駿河守様御法號大聖寺表より申來、今日御用番より御覽に入候事、

恭正院殿仁應道和大居士

十月四日。前田齊泰、大小將橫目に善行ある者を上申すべきことを告ぐ。

〔御親翰留〕

先達而存寄之趣譯而申渡置候へ共、其後とても封物を以申聞候品不多、畢竟其方共手先之者までも、惡事を承出候儀を專らと心掛候躰に相聞え候。善事は彌以聞え兼候ものに候得者、殊更心懸承出可申聞候。惡を懲し候も善に道引候得ば、善行者承出候儀無油斷可心掛候。善行と申も多端之事に候條、荒增を別紙に記候。將又誰々によらず心得違且不愼等之行有之、異見を加へ可然と心得候品見聞候者、以來者人持・組頭を始、都而其頭・支配人江直に可及內達候。申迄も無之候得共、政事之得失を始、我等曁年寄中之噂までも承請候趣無泥可申聞候。兎角其方共身構をいたし居候而者、奉公之筋立兼候條、此後急度相心得、此方耳目之用を可相達心掛肝要之事に候、以上。

十月四日

大小將橫目中

一、常々孝行成者。

一、子弟を能致教育候者。

一、夫婦之間正敷、下々を能召仕、家とゝのひ候者。

一、兄弟の間よき者。

一、忠節成行ある者。

一、役儀等能相勤候者。

一、慈恵深き者。

一、正直成者。

一、頼母しき志有之者。

一、武邊藝能格別心懸宜者。

一、行儀能き者。

一、義理を專に心得候者。

十月十日。作躰不良なるを以て手造酒等の爲濫に米穀を費すを禁ず。

〔御郡典〕

當夏中不順氣に而、作躰不宜付而は、米穀等猥に費し候儀有之候而は、來年に至り給續方如

何可有之哉。依而於村々に手造酒等いたし候儀、堅く令停止候條、此段嚴重申渡可有之候、以上。

戌十月十日　槻尾甚七郎

口郡惣年寄・年寄並中

十月十日。百姓の鍬手米徴集の件に關し令す。

〔岡部舊記〕

諸郡共鍬手米之儀、近年詮議方等閑に相成候躰にて、鍬手高相減申由。且又他村懸作百姓之儀、其懸作村ゟ一人前之鍬役可致之所、諸郡區々に相成、取立不申向も有之旨に候間、以來懸作百姓も綿密遂詮議、調理可申候、以上。

戌十月十日　稻葉助五郎
松田左兵衞

諸郡惣年寄中・年寄並中

十月十三日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

十月十三日。臨學校。

十月十八日。幕府、前田齊泰の參覲期を明年六月とすべきことを命ず。

〔成瀨正敦日記〕

十一月二十四日

一、御參勤御時節御伺之御使者伊藤庄三郎被指出、前月十八日御用番松平和泉守殿𛀁庄三郎御呼立に而御奉書御渡に付、右寫兩通江戶表庄兵衞等より早飛脚を以到來、御用番より入御覽。御參勤御時節御用捨被遊、來六月中御參勤被仰出候御老中方御連名御奉書、且井伊掃部頭殿より之御奉書与兩通寫到來之事。

〔見聞袋群斗記〕

十一月十四日、來年御參府之御時節先達而御伺置候處、來る六月中參府有るべしと台命あり。（十四日は廿四日なるべし）

此儀當春御手傳之台命あるゆゑ御用捨にて如斯なり。

十月十九日。作躰佳良ならざるを以て造酒高を三分の一たらしむ。

〔累年雜記〕

當夏中不順氣に而作躰不宜、近年打續不作に付、凶年之御手當不全。然所今年稀成公邊御普請御手傳方に付、來春之所無據出津米も有之筈。依之當年茂酒造昨年之通三之一造承屆候條、當時隱造等無之候哉、猶更嚴重取しらべ有之、其上に而右之造高可指解候。以來酒造共過酒

は勿論、右之外手造酒等無之候哉、堅令停止候。若心得違之者有之候者、嚴重可遂僉義候。其外に都而米穀を猥に費候而は、來夏中之用米も難計、不容易儀に候條、末々迄急度相心得候樣可申渡候事。

右之趣被得其意、心得違無之樣急度可申渡之旨、早々町奉行等幷御郡奉行等江被申談候處、右之寫之通被仰渡候旨御算用場より申談に付、相越候條可得其意候。聊心得違不可致樣急度可申談候。酒造高之儀は、去年之通三之一造高指解候間、酒造商賣人共江譯而縮方嚴重相守、少分たりとも過作等心得違不致樣入念に可申談候、以上。

戌十月十九日

內藤十兵衛

廣瀨順九郎

石川・河北郡惣年寄・年寄並中

十月廿六日。大聖寺侯世嗣前田利平江戸に赴かんとして金澤を通過す。

〔成瀨正敦日記〕

十月二十六日

鋲七郎樣江戸表江御出府に付、昨二十五日大聖寺表御發途、夜前松任御止宿、今日御城下御通石動御泊。右之通御城下御休無御座候付、昨日松任御旅泊江御供御家老迄、御家老奉札を

以御見廻被仰進候儀、御用人より伺、其通昨日被仰出置候事。

十月廿七日。前田齊泰石川郡宮腰口に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

十月廿七日

一、今日御鷹野御供に付、四時過罷出る。九時前御供廻りに付、御先へ出候而七つ屋口へ參り、夫より御供、暮合前宮腰口より罷歸候事。

一、惣年寄瀨尾吉郎右衞門等兩人罷出居。此度高年之者書出有之者、此筋に居不申哉之旨尋候所、御戻り往還脇二つ屋村に百九歲之女居候由に付、高田氏示談之上御先へ右年寄より手付遣、當時煩にても無之候はゞ村端迄拜みに出し置候樣申付遣、往還脇少御廻り道にて、其內右二つ屋村端へ少左衞門祖母之由にて、介抱致し罷出居、御立留御覽被遊候。御通過之上、隨分痛はり候樣拙者迄御噂も有之候間、爲申聞置候樣惣年寄申入候所、いかう難有がり候事。

一、御獲柄御出前御脇鷹に而鳩二つ・小鷺一、御出之上御拳に而小鷺一御翕、御ゐがら有之候事。

十月廿九日。御橫目足輕金子八太夫御算用場御土藏を破らんとして果さず。

［諸事要用雑記］

十月廿九日

一、今暁御算用場御土藏、屋根まくり破り候音に而、御番人承に付夫々相固め候所、御後御堀へ飛入逃去候躰。御堀向に着類も脱捨有之、刀は御屋根に有之、脇指は人音に而下へ抜身に而投候由。

右之趣御横目より問合之趣言上有之事。

十一月三日

一、御横目足輕金子八太夫朔日に召捕吟味有之所、此間御算用場御土藏破候者之由。豫而似せ銀札も拵候者之由也。依而禁牢致候由之事。

［本多政和覺書］

十一月二日

一、前田源五左衛門別席に而申聞候者、前月廿九日曉御算用場御土藏へ入候賊、昨日召捕相糺候處、御横目足輕金子八太夫と申者に而、廿八日夜宅を出候節、手習之終夜に外に參り、戻り遲り可申趣家内之者江申入罷出候由。右之者平生内職に傘を仕候者故、竹宅に在合候由、さんは豫而拵候哉、右竹を堂形江持行、右之所に而梯子に相立、西町吉田孝之丞横江罷越、

簑笠を脱、夫より西町口御門之横土塀に右梯子を立懸、御算用場御圍内御土藏之内低き御土藏之屋根𛀁上り、屋根板を捲り、こうまいを脇指に而切拂候處、番人之躰に而見廻り候樣子に付、夫より高き御土藏𛀁上り、是又屋根板を捲り、こうまいを切拂、土をうがち、天井之板は鋸を以四尺に二尺許引切候と覺候。然處大勢提灯をともし出候樣子に付、又低き御土藏へ下り、夫より土塀を越可申と仕候處、塀之内𛀁飛下り候に付、大勢追付候故逃出候處、闇夜之事故御堀之內へ落候に付、向岸迄罷越、衣類濡候に付脫捨、藤右衞門丸の內より土塀を越、前段簑笠脫置候處𛀁罷越、夫を着仕宅𛀁罷歸候處、翌日衣類之違候を家內之者咎候に付、寺町之內に而溝𛀁落候に付、實家𛀁罷越着物借着用仕候趣に申入置。其後宅を出、外に隱れ罷在候處被召捕候由申。改方に而糺候前便用に罷越度旨申聞、其節懷中改候處二百目許銀手形有之、右同人拵候贋手形之趣申顯れ、右之外當春犀川下に流れ居候一貫百目許之銀札之儀尋候處、同人所爲之由申顯候。外に三百目許贋手形に而吳服物求候趣等申顯、昨夜より禁牢申付置候。先此段御達申候旨等段々申聞候事。

十月。薩摩芋の口錢を除くべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

薩摩芋之儀、以前は他國產而已に候故、口錢立之品に候得共、近年御領國中追々出來、當時

は多分御國產之儀。殊に米價高貴之時節、小前之者共食用之品に付、旁詮義之上、是以後口錢立指省、他國入之分は浦口錢取立候に付、是又不及口錢に候條、可得其意者也。

戌 十 月　　　　　　御 算 用 場

十月。能登口郡の細民の稼として松前に輸出する筵の製織を命ず。

〔御郡典〕

口郡村々小前者爲稼与、詮議之上、松前江賣捌可申筵爲織立、夫々被申渡、何分永續いたし候之様精誠取調理可被申渡候。右筵船廻等之儀、所口町人四十物屋與四兵衞・玄妙屋喜兵衞兩人江當分申渡候間、出來之筵、向々より右兩人手前江賣渡、代銀受取候樣可被申渡候事。

但、指當り爲御仕入与、先銀十貫目、追々物價方より相渡可申事。

一、右村々取調理方役人之儀は、肝煎等之內人撰を以可被申渡事。

右之通可被得其意候、以上。

戌 十 月　　　　　　御 算 用 場

槻尾甚七郎殿

〔御郡典〕

口郡村々小前之者日用取續爲稼与、松前行目形筵織立方被仰渡、右仕法方御用私共に就被仰

渡候に、別冊仕法書等御達申上候處、則仕法帳通可相心得旨等、御附札を以御返に付、寫仕相廻申候間、御承知之上、夫々村方江御申談御座候様致度奉存候。且右取調理方下役之人々、前段仕法方等に申談儀有之節、私共より直に呼立申度候間、此段御承知置御座候様仕度、先々急速御順達、落着より御返可被成候、以上。

戊十二月廿四日

北村平九郎

三輪喜八郎

三輪・眞舘・當摩・北村・高橋充

天保九年十一月

松前行目形筵仕法帳

口郡

御付札、本文仕法書等遂披見候條、此趣を以可申渡候事。

戊十二月廿四日

一、村々筵織立勢子方之儀、肝煎・組合頭等之内、筵取調理下役与申名目に而、七・八ヶ村に一人、或は是迄織習多織出候村々は一・二ヶ村に一人宛相立、廻口定置、時々爲見廻、第一困窮人小前之人々江爲織立候様勢子を加へ、織立方吟味仕、筵出來數等爲相調理申度奉存候。

尤私共儀も折々相廻勢子可仕事。

一、御仕入筵織立候村々、一村切私共名前印章之通帳仕、運迄問屋へ渡置、織出候筵数幷織人名前問屋方に爲相記置、問屋より織出候人々江共時々請取札爲相渡可申。右受取札を以其村肝煎及下役之者束數帳面に記置、筵代銀上納前、私共等寄合勘定可仕事。

一、御仕入銀御貸付方は、取調理役・其村肝煎等連名に而、誰々江爲織立度旨、私共名宛之願書爲指出、私共奥書仕御達可申上候。右銀子組圭附江御渡、組圭附より其村肝煎江相渡、猶更勢子方申入、銀子御渡に付何村江貸付候旨、組圭附より私共方江申越候事。

附り、御貸付等之趣、下役之者へは私共より申渡度奉存候事。

一、御仕入筵代銀、幷一束に付三文宛之役用錢等、四月朔日より三日迄之內、九月朔日より三日迄之內、兩度に私共指引切手相添、御郡所々問屋より直上納爲致可申、尤私共よりも巨細指引書仕、別に御達申上候事。

一、御仕入銀御利足は、御仕入銀高に當り候程筵問屋へ相渡候上は、問屋より上納月迄之利足上納爲致可申。問屋へ筵相揃相渡不申內は、織人問屋方江利足指引爲致可申。都而一村切之御仕入銀御利足は、問屋引受に而元利共爲致上納可申事。

一、筵之內江中入札之儀、取調理方下役名前、幷筵織人名前相調、兼而織人江右札何程も相

渡置、筵織出候節中入爲致申度奉存候事。

附り、此札拵調筆等は、右下役に爲仕立可申事。

一、春中御仕入之筵は、四月中限追々問屋江爲相渡可申事。

一、夏中御仕入之筵は、八月中限追々問屋へ爲相渡可申事。

一、秋中御仕入之筵は、翌年正月中限追々問屋へ爲相渡可申事。

一、御仕入筵之外、村々常々賣出候分可有之、村々向寄之浦方に、所口町四十物屋與四兵衞等より下問屋爲立置、爲相運申度。尤右下問屋之儀も、私共より縮方指引等致申度奉存候事。

一、筵外賣外買致し候者有之候而は、御縮洩に相成、御仕法被仰付候甲斐も無御座、筵織立方自然与猥に相成、奸曲之手立等仕、畢竟永久取續不申儀与奉存候間、右様洩筵取扱候者有之候はゞ、取調理方下役曁所口町問屋等見咎取揚可申。尤右取揚候筵見咎人江被下之候事。

一、筵取調理方下役、村々爲織習方等、都而筵一件に付私共召仕申度奉存候事。

一、所口運送問屋手前も、不正之儀無之候様、私共より折々穿鑿仕度奉存候事。

右口郡村々小前之者、日用取續爲稼織立方被仰渡候松前行目形筵仕法、有增之處私共詮議仕、御窺申上候間、猶更御詮議被成下、御指圖被仰付被下度、津出方之儀は運送問屋手前も得与承糺、追々御窺可申上候、以上。

戊十一月

御郡御奉行所

北村平九郎
三輪喜八郎

十一月九日。金澤城御用の間に養民堂の額を掲ぐ。

〔成瀬正敦日記〕

十一月九日

一、松雲院様御時分御用之間御額に被仰付候哉、養民堂之三字黄檗悦山之筆唐紙に調候分、南御土藏奉行手合御預に相成居分、今度御額に被仰付、今日御用之間御入口之内に被爲懸候事。

十一月十一日。足輕石田甚之丞孝行を以て賞せらる。

〔毎日帳書拔〕

十一月十一日

一、前田主馬元組足輕石田甚丞、老母へ稀成孝心に付、一作米三俵可被下哉之旨伺、伺之通被仰出。

十一月十二日。町方に浪人躰の者徘徊し合力を强請するを以て取締を命

ず。

〔毎日帳書抜〕

十一月十二日

一、近年町方に浪人躰之者多徘徊、商店へ立懸り押買、或は町家之中戸内へ立入、强而合力を求候儀等有之に付、右様之者於有之は捕置可及屆旨、町奉行より嚴重申渡候。御家中末々奉公人之内、自然心得違之者も有之、右所行に似寄候者有之候はゞ、同様取計可申筈候條、兼而主人々々より嚴重可申渡旨、一統御横目より爲申談。

十一月十九日。金澤城に準備する武具及び歩・足輕の數を調査す。

〔御家老方等〕

十一月十九日

御武器心覺　文化十四年之調理數

一、百三十八領　侍具足

一、五百九十一領　御歩朱塗具足御道中物等

内　貳拾九領　下地三具足物

一、六百四十九領　足輕薄金具　同革具足等

内　六十四領　　　　小頭分

當時之御歩並等人數

一、百五十二人計　　六組御歩、但小頭共

一、三十四人計　　御鷹匠御歩並御鷹役等小頭共

一、五十四人計　　御料理人幷御料理頭共

一、百七十六人計　　御算用者等同小頭共

一、七十四人計　　御細工者小頭共

〆四百九十人計

外　百六十八人計　　定番御歩幷小頭共

足輕人數

一、百九十九人　　大組足輕共

一、百二十一人　　御持弓足輕三組小頭等

一、百十九人　　御持筒足輕三組小頭等

一、四百三十八人　　御先手足輕廿一組小頭等

一、六十六人　　聞番足輕四組小頭等

一、百七十六人　　　　割場御弓足輕八組
一、千四十一人　　　　同御鐵炮足輕四十八組
一、五十人　　　　　　御鐵炮藏附足輕小頭等
〆二千二百十人計

本文の議は行はれざりしなり

十一月廿五日。前田齊泰の明年參覲期を繰上ぐべきことを議す。

〔覺　書〕

十一月廿五日

一、小左衞門別席に而申聞候は、今般御參勤御時節御用捨之儀、昨日被仰出候通、右に付御手傳被蒙仰候に付而は、諸家共右樣之御振故、姫君樣右之處殊之外御案被遊、先達而より横田小一郎殿等へも被仰出、御聞合も有之候へ共、御樣子不相知内、當十日右之御樣子相知れ、小一郎殿より被申上候處、殊之外御迷惑之御樣子。右に付何と歟取計樣も無之哉と被仰出。小一郎殿奧御右筆向被聞合候處、近頃細川越中守殿に御例有之、著御痛之趣を以御定例之通御參勤有之候。右に付田邊九左衞門等より委曲申越候趣、別紙之通御座候。然處昨日小左衞門被召、九左衞門等より何ぞ申越候趣も無之哉と之御尋有之、右之趣申上候處、御本宅老女佐山より委曲言上之趣も有之。右御參勤御時節後れ候儀、姫君樣殊之外御心痛之御樣子に而、

佐山へ御直に被仰入候趣も有之。第一は御待侫被遊、其上犬千代丸様次第御成長被遊、御待被遊候處、右之通に而御待兼可被遊、且は六月中は大暑之時節、御道中之處も御案被遊候に付、如御定例御參勤被遊候樣被成度と之事。此度從公儀被仰出候儀に候へ共、御參勤早く相成候儀、被對兩御所樣御懸念之御筋は無之御首尾合等之處、少しも泥候儀無之趣等をも被仰出候旨等申上候。右に付小左衞門了簡を茂、御尋に付相考御請可申上旨申上候。小左衞門了簡に而は、今般從公儀被仰出候儀、其上少に而も御在國被爲在候へば可然儀に候へ共、迚も六月中御旅行難被遊趣に付、暑御痛之趣を以四月中、五月々初御參府之事に御願出有之可然哉。六月に至り御發駕難被遊時は、御病氣之趣に付御發駕御延引御屆可有之、左樣候而は御住居向之御都合も有之事故、右之通相成可然哉。主税等も同存に御座候。猶更御內々御示談御座候而被仰聞候樣仕度旨等、段々申聞、九左衞門紙面兩通出之。

十一月廿五日。先に領國の繪圖を調製せる郡奉行以下に賞賜す。

〔每日帳書拔〕

十一月廿五日

一、天保五年從公儀被仰渡候、御領國御繪圖しらべ方御用相勤候御郡奉行稻葉助五郎・名越彥右衞門幷御算用者瀧川新平等へ被下物之儀窺被仰出候事。

染物二端　助五郎　綿二把　彦右衞門
白銀三枚　新平等　其外段々有之。

十一月。頭・支配人に諸士の人品才德に關する調査上申を命ず。

〔御親翰帳之内書拔〕

十一月

一、御馬廻頭等へ左之通申渡。

組・支配之人々、人品之樣子才德之長短は人々異同も有之事に候間、人每に何役被仰付可然人物と申儀、頭・支配人見込之樣子、且文武格別入情之者、又は無情之者抔も承り次第其樣子書記、幼少・病氣又は不心懸等に而、御取用難被成人々も、其樣子委曲に相調、來三月中迄に頭々人別に拙者共へ相達可被申候。是以後も年々三月中同樣調可被指出候事。

十一月。田地割の定書を制す。

〔河合錄〕

天保九年田地割定書申渡

一、打立竿六尺三寸の御定に候得共、是迄村方に而用來候竿相用候儀不苦候之間、定帳に竿尺何尺と申儀調置可申事。

一、田地割替之儀、二十ヶ年滿不申共、村中納得之上願出候はゞ、承屆可申事。

一、地割算者之儀、是迄村どし、近村之素人を相雇、地割等致し候向も有之体。是等は不埒之至りに付、以來繩張誓詞人相雇、右定之通り、地元不順無之樣、綿密に割替可申事。

但、所々田地割多、繩張人指閊候ば、惣年寄等手前に而誓詞見屆置候者、算者に相雇可申事。

一、畝田或惣田抔唱へ、地割之節竿除等致し置地元も有之樣子に付、自然与歩當り少く、以來は右樣之地元不殘惣高に打込、其上納得之上右畝田等改而卸付之儀は勝手次第。且地割取懸り以前組主付地割人召連領廻致し、領境村役人呼出境筋紛無之樣、地境曲折杭爲打、夫々地割に取懸り可申事。

一、右組主付領廻り之節、隣村と申合地元隱置、後日誰々に不寄見出候に於而者、其地元見出候者之高に可申付候。若外詮議之筋に而相顯候に於而は取揚、手上高に申付、双方村役人等嚴重に可申付事。

一、引田之儀、是迄色々煩敷致引田候村々も有之体。以來居屋敷之外、苗代田御定之通り百石に六反之割を以、持高に應じ引地可致。其餘引田不相成、不殘鬮田に打出し可申候。且又鬮當り田之內、百姓同士替田之儀勝手次第之事。

一、地割人より相渡候田札並歩帳、聊紛敷無之様致所持、切高致し候節は、高證文と一集に可致取遣候。且又田札無之御郡は、歩帳迄切分け相渡可申事。

一、右ヶ條之外、蔭引等村定之品々、萬歩帳に夫々一打に調可申。且又田畑上中下千石高當り、歩數何程宛と申儀、是亦書分け、其外畦・野毛地共、割當り歩數・合盛米書のせ、草案之通り繩張人名前相記置、組主付並廻り口見届名印致し、村方へ相渡可申事。

一、萬歩帳寫、地割人より組主付へ爲指出可申。古き萬歩帳村方に指置候而は、縮方不行届候間、組主付へ取立、仕抹致し置可申事。

一、先達而申渡置候通り、年久敷不致田地割村々、此節急速取懸り可申事。

但、村方之得手申立、不願出候はゞ、組主付より其段可及斷事。

一、地割相濟候上、鬮田合盛之儀、村中一統得と遂示談、不正無之様取極、諸鉗可致候事。

一、領之內、場所に寄、無據江道立替可申ヶ所も有之候はゞ、組主付見分之上、夫々相極可申事。

一、畔木等之儀は、伐取候様先達而より嚴重申渡置候へども、中には伐殘、格別日蔭に成候分は、地割取懸り以前、村中一統示合、其上猶更夫々伐拂可申事。

附、蔭引には植木一圓不相成。若心得違之者致植木置候はゞ、何時に而も見付次第、こぎ

取可申事。
一、悪水之儀は、田地養に相成候儀に候間、以後新に致家作候者は、領之内まばらに相成候様心得可申。併猥に田地を潰致家作候儀は不相成、屋敷地も成限歩數相減地取可致事。
一、竿先麻木指之儀は、同苗一致示談之上、正直之者相撰、指止可申。不正直者は、時々取替可申。尤鬮親順番相立、毎日一人宛見廻り可申事。
一、鬮組之儀は鬮親相談之上相極可申事。
右是迄諸郡共田地割色々不正之割方等も有之、中には打立之節、竿目不正歩數拔打等致し候向も有之躰。奸曲之致し方不屆至極に付、今般本文之通り申渡候條、以後嚴重に相心得、定書幷萬歩帳組主付手前へ取立仕抹可致置。品に寄可致披見儀も有之候間、其心得可有之。斯申渡候後萬一不正之聞得於有之者、村役人等は不及申、組主付迄も急度申付候條、得其意、夫々可申渡候、已上。

戌十一月　　　　　　　　　　　　安田新兵衛
　　　　　　　　　　　　　　　　松田左兵衛

猶以承知之驗判形に而可相返候、以上。

諸郡惣年寄・年寄並・新田裁許中

十二月十三日。大聖寺侯前田利平の家督相續を命ぜられたる報金澤に達す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月十四日

一、鉦七郎様當月五日御家督御相續被成候旨、御直書を以御普爲聽、夜前御飛脚到來之由。

一、鉦七郎様江之御返書出來、御奏者番本多主水相渡。

一、左之伺通被仰出候付、重便小森源左衞門へ申遣す筈。

一、鮮　鯛　一折　木具　　鉦七郎様

御目六

一、御　肴　一折充　　壽正院様
　　　　　　　　　　　貞壽院様

御目六

一、御悦迄　　峻光院様

右鉦七郎様今月五日御相續に付、表向御祝儀被進物之義、御用人より伺可申候得共、御内證よりも右之通、年寄女中奉文を以、壽正院様江御傳御祝として可被進哉。去年二月故駿河守様御相續之節之振を以奉伺候。

十二月十七日
一、鉦七郎様御相續に付御禮御呈書、御老中方へ御連名、西丸御附同斷、右大將様御老中、井伊殿、都合四通出來。

十二月二十日。御細工奉行淺井源右衞門その家作を美にするを以て役儀を除かる。

〔諸事要用雜記〕
十二月廿一日
一、昨日左之通被仰付候由之事。

御細工奉行
淺井 源右衞門

右源右衞門儀、家作奥向内作事方等甚榮耀之躰被聞召候。家作等之儀に付而者、近年追々被仰出之趣も有之候所、頭役も相勤罷在、別而不心得之儀被思召候。依之役儀被指除候。榮耀之ヶ所相改可申候。
右之通可申渡旨、月番美作守演述仕候に付、源右衞門私宅へ呼寄申渡候所、奉畏迷惑至極之旨申聞候。

是月は大盡なり

十二月廿日　　富田外記

十二月晦日。宮腰の足輕堀内兵次孝行を以て賞せらる。

〔毎日帳書拔〕

十二月晦日

一、宮腰御船手足輕堀内兵次、母へ孝心之樣子被聞召、米三俵被下。

附録年表

天保元年　庚寅　　皇紀二四九〇

正月　○朔日前田齊泰在江戸なるを以て金澤城に於いて出仕の諸士年寄中に謁す。(一)

○十一日幕府、前田齊泰がその夫人の分娩したる後歸國せんとの請を許す。(一)

○十八日皇女降誕するを以て前田齊泰奉祝の爲の使者を命ず。(二)

○廿七日前田齊泰夫人水痘に罹る。(三)

○廿九日大聖寺侯前田利之より銀子助成を申込みたるに付き議す。(三)

○從來年二回舊令を恪守すべしとの觸出を爲しゝを一回に改むべきことを定む。(六)

二月　○八日本郷邸に天滿宮を勸請して鎭守とす。(六)

○十一日德川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。(七)

○十一日金銀貨の公定相場を廢し、銀子上納に金子を混ずることを禁ず。(七)

○十八日前田齊泰夫人着帶の祝儀を行ふ。(八)

○組頭に令し配下の加恩に關し出願催促すること勿らしむ。(八)

三月　○實子を廢嫡し得べき年齡の制限を定む。(九)

○六日前田利常の生母壽福院の二百回忌法會を金澤經王寺に營む。(一〇)

○十一日更に向ふ五ヶ年間增借知を命ず。(一〇)

○廿八日領内町・在に對し用銀の上納を命ず。(一四)

○前田齊泰歸國の際供奉する者の心得を告ぐ。(一七)

閏三月　○十一日家中の人々祝儀に際し盲人ならざる婦女を雇ひて三絃を奏せしむるを禁ず。(一八)

○十一日華麗の衣服を纏ふ婦女を見咎むべきことを改方に命ず。(一八)

○言上紙面等の調方を簡易にすべきことを命ず。(一九)

四月　○四日金澤の僧觀了異法を勸むるを以て捕縛を議す。(一九)

○七日野火を警むべき幕府の令を領内に傳ふ。(二〇)

○十七日加賀の惣年寄、冥加米・用銀の上納方に就き能登の惣年寄に協議す。(二一)

○鳳至郡長順寺の門徒等法義相續に關する請書を觸頭に提出す。(二三)

五月　○四日前田慶寧江戸本郷邸に生まる。(二五)

○四日是日以降本郷邸に幟を建て定府の士の家族等に觀覽することを許す。(二六)

○七日風俗に關して文政十一年の令を恪守すべきことを告ぐ。(二八)

○十一日前田慶寧の幼名を犬千代丸と稱す。(三〇)

○十五日前田齊泰登營して曩に德川家齊等の祝儀を贈れるを謝す。(三一)

○十六日大聖寺侯前田利之就封の途金澤に宿す。(三四)

○十九日藩侯の不在中二之丸御殿にて一般に願屆書類を受附けざる前令を守るべきことを告ぐ。(三四)

○廿八日前田齊泰就封の暇を受く。(三五)

六月

○朔日前田齊泰登營して就封の辭見す。(三五)

○朔日前田慶寧の生誕を祝し城下に盆正月を行ふ。(三五)

○三日老臣等江戸に往來する際馳走人を出す諸藩に對し藩侯より禮狀を送る件を議す。(三九)

○十九日金澤に於いて前田齊泰江戸出發の期を延べたることを通牒す。(四一)

七月

○三日金子を銀子と共に通用することを許し、次いで之を止む。(四一)

○十二日昨今兩日前田齊廣の七回忌法會を天德院に營む。(四二)

○廿八日前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。(四四)

○晦日俗人の法話を爲す爲集合することを禁ず。(四五)

八月

○十一日前田齊泰金澤城に着す。(四六)

○十八日前田齊泰學校に臨む。(四七)

○廿三日猪・鹿・大犬徘徊の諸村に鐵炮筒藥の支給を命ず。(四七)

○鷹司政通その女を前田慶寧に婚約せんことを求む。(四八)

九月

○朔日前田齊泰、德川家齊より拜領したる物を老臣等に頒つ。(四九)

○三日大坂より江戸に送附する仕送銀は自今金子を以てすべきことを告ぐ。(五〇)

○六日前田齊泰郊外千日町口に放鷹す。(五一)

○十五日前田慶寧色直しの祝儀の爲德川家齊等に物を献ず。(五一)

○十五日德川家齊等、前田慶寧の色直を祝して物を贈る。(五五)

○廿一日前田齊泰夫人、産後初めて江戸城の廣式に登る。(五五)

○廿二日見合札を有せずして犀川に漁撈を營むことを禁ず。(五七)

○廿五日前田齊泰、その子慶寧の誕生を祝して能を張行す。(五七)

○廿六日賃馬を使用するものに錢を以て支拂ふべきことを命ず。(五八)

十月

○二日竹澤御殿を毀ちたる古材の利用に就いて議す。(五九)

○五日與力にして人持以上の家來給人との間に婚姻し又は養子を行はんとするものに諭す。(五九)

○八日前田齊泰瀧之間の講書を聽聞す。(六〇)

○十四日三條西實勳の使者來りて合力を求む。(六〇)

十一月

○六日領外の者の漆搔として入國するを禁ず。(六二)

○十一日年寄中以下の夜間不明門を通行することを許す。(六二)

○廿三日前田齊泰夫人江戸城西ノ丸に登る。(六三)

○廿三日前田齊泰、瀧之間に於いて下村宗兵衛に書を講ぜしむ。(六三)

十二月

○朔日寺方當用銀の利子を低下すべきことを告ぐ。(六三)

○三日金澤の町民多數十間町千代屋久平の家に就き救恤を求む。(六四)

○五日越中埴生八幡社の神祭に付き勸化の件を議す。(六七)

○六日前田齊泰、先に金澤分間繪圖成るを以て遠藤數馬等に賞詞を傳へしむ。(六七)

○七日幕府より前田齊泰に與へたる寒氣見舞の奉書金澤に着す。(六八)

○八日金澤城瀧之間に於ける月並講釋に新井周藏孟子を講ず。(六九)

○八日三州地理志稿成るを以て前田齊泰に呈す。(六九)

○十日金澤分間繪圖製作を助けたる人々の賞與に就いて議す。(七〇)

○十一日德川家齊の前田齊泰に贈れる鷹金澤に着す。(七二)

○十一日金子を銀子と共に通用することを許す。(七三)

○十六日幕府の閣老加賀藩の聞番を召して改元の行はれたることを告ぐ。(七三)

○十六日前田齊廣夫人の爲に別殿を營造するを以て主任の役人を命ず。(七四)

○十九日百姓躰の者多數千代屋久平等の家に就いて救恤を求む。(七五)

○廿二日前田齊泰能を演ず。(七六)

○廿四日叙爵の者の着服の制を改む。(七七)

○廿五日造酒石數を例年の三分の二とすべき幕令を傳ふ。(七八)

○廿七日改元の報金澤に達す。(七九)
○廿八日加賀藩、幕府より御文庫金一萬兩の借用を許さる。(八〇)
○廿九日城内腰懸に於いて供待する者の作法に就き令す。(八五)
○晦日藩の非人小屋に收容せらるゝ者の人數を上申す。(八五)
○郡方のものにして金澤に移るが爲轉籍を請ふもの及び難澁者の助小屋入は容易に之を許可せざるべきを告ぐ。(八七)

天保二年　辛卯　皇紀二四九一

正月

○朔日前田齊泰金澤城に於いて年頭の賀を受く。(八八)
○二日例により諸初の儀を行ふ。(八九)
○三日前田齊泰、寶圓寺及び天德院に參詣す。(九一)
○十七日前田慶寧の鷹司政通養女完君と婚すべきことを決定す。(九一)
○十七日江戸邸に於ける御拘鷹之者五人不品行を以て解傭せらる。(九二)
○十九日具足の鏡餅直しを行ふ。(九四)
○二十日江戸邸に於ける疱瘡・痲疹等の者の遠慮に就いて金澤の士に告ぐ。(九四)
○廿三日金澤淺野川下なる隱坊町火を失す。(九五)
○廿四日德川秀忠二百回忌法會を如來寺に執行す。(九六)
○廿六日御算用場奉行堀孫左衛門・山崎頼母及び御勝手御用千羽彦太夫財政整理に功あるを以て知行を加增せらる。(九七)
○廿八日玉藥奉行・藥合奉行等が鹽硝受拂の際その斤量を檢すべきことを議す。(九八)

二月

○十一日本年中に停止すべき銀仲預手形の通用期限を更に五ヶ年間延期せしむ。(一〇〇)
○十七日能登惣持寺開山忌執行の際集來する僧侶の爲道途の夫馬を支障なからしむべきことを稟請す。(一〇一)
○十八日河北郡より越中今石動に賣捌き得べき魚の種類を規定す。(一〇三)
○廿二日家中諸士の居屋敷所付及び間數の屆出を命ず。(一〇四)
○廿四日前田齊泰學校に臨む。(一〇四)
○領内に產する木綿の丈尺を檢し村役人の捺印を施すべきことを命ず。(一〇四)

三月

○二日前田齊泰能を演ず。(一〇六)
○七日前田齊廣の女郁姫の祥月命日を改む。(一〇六)
○九日前田齊廣夫人の居所營造に就き山口清太夫にその主任加入を命ず。(一〇七)

○十日前田齊泰老臣中に銀子を貸附すべきことを告げしむ。(一〇八)
○十一日藤内の火災に町夫が消防に從はざる件に就き調査す。(一一〇)
○十三日前田齊泰金澤を發して參覲の途に上る。(一一二)
○二十日三ヶ年を限り領外の者に漆を搔くことを許す。(一一三)
○廿三日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤に着す。(一一六)
○廿七日前田齊泰江戸に着す。(一一六)
○廿八日德川家齊使を遣はして前田齊泰の參覲を勞す。(一一七)

四月
○朔日前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。(一一九)
○七日幕府、前田慶寧の鷹司政通養女完君と婚約を請ひたることを許す。(一二〇)
○十二日富山城災に罹る。(一二〇)
○十三日前田慶寧の爲江戸邸に幟を立つるを以て定府の男女に觀覽を許可することを令す。(一二三)
○十四日金澤淺野川下隱坊町等災に罹る。(一二四)
○十七日富山城火災の報江戸に達す。(一二五)
○十七日土清水煙硝藏盜賊の侵入する所となる。(一二五)
○十八日藩の財政逼迫するを以て諸向經費の節減を講ぜしむ。(一二七)
○十八日岡屋彌兵衞その女の代牢を請ひたる孝心により假に出牢を許さる。(一二七)
○廿二日前田齊泰、齊廣夫人を招請す。(一二八)
○廿五日前田齊廣の女鈴姬逝去す。(一二八)
○廿九日德川家齊使を遣はして前田齊泰の膝中を慰問せしむ。(一三一)

五月
○十日百姓町人の葬儀墓碑等の費用を緊縮すべき幕令を傳ふ。(一三一)
○廿二日芝居役者の園外に出で兩寺屋町に至ることを許す。(一三二)

六月
○二日前田慶寧の爲本鄕邸内に幟を建つ。(一三三)
○二十日前田齊廣の女寛姬逝去す。(一三三)
○二十日宿々の人馬賃錢を從來の如く四割增に受くべきことを許す。(一三七)
○廿三日德川家齊使者を遣はして前田齊泰の膝中を問はしむ。(一三八)
○廿四日非人小屋に收容せられて九十歲に達したる者に增米を給す。(一三八)
○富山藩の災後に處するが爲石野雅樂助を江戸より派す。(一三八)

七月
○二日前田齊泰、茶屋町を禁止せんとする意見を老

臣に告ぐ。(一三九)
○四日金澤高儀町に火あり。(一四〇)
○十八日前田齊廣夫人の入國に就いて議す。(一四一)
○二十日守隨彦太郎の名代金澤に來り衡器の檢査を開始す。(一四二)
○廿一日前田慶寧の側小將たるべき者を募る。(一四三)

八月
○九日德川家齊、前田齊泰に雲雀を贈る。(一四四)
○十五日前田齊泰能を催す。(一四四)
○十八日金澤に於ける茶屋町を廢止し且つ出合宿を禁ずべきことを告ぐ。(一四四)
○廿一日金澤町奉行兩茶屋町廢止に就きその救濟方法を稟議す。(一四六)
○廿八日兩茶屋町を廢したるを以て營業者を救濟する爲銀千四拾貫目を與ふ。(一四八)
○晦日前田治脩夫人の第十三回忌法會を江戸廣德寺に行ふ。(一五一)

九月
○四日前田齊泰平尾邸に赴く。(一五三)
○六日前田齊泰夫人江戸城西丸に上る。(一五四)
○六日金澤に於いて阿武松綠之助に相撲興行を許す。(一五五)
○十一日前田齊泰、慶寧の將に宮參を行はんとするを以て馬及び鐙を贈る。(一五五)
○十二日前田齊泰能を催す。(一五七)
○十三日前田齊廣の女勇姫金澤を發して江戸に赴く。(一五七)
○十五日野田山なる藩侯の墓地附近にて茸狩をなすことを禁ず。(一五八)
○十五日金澤に於ける茶屋町を廢したるを以てその木戸を撤す。(一五八)
○十六日兩茶屋町を廢せられたるを以て抱女の處分に就き上申す。(一五九)
○廿二日前田慶寧宮參を江戸富士社に行ふ。(一六一)
○金澤城奥御納戸御土藏の金子賊の爲に奪はる。(一六四)

十月
○四日前田齊廣の女勇姫江戸に着す。(一六五)
○四日金澤の途上にて女を傷つくる者あるを以て逮捕せしむ。(一六六)
○五日江戸邸に藩侯一門の來れる時給事人の用ふる上下を龍紋裏付と定む。(一六七)
○六日前田齊泰能を演ず。(一七〇)
○二十日前に茶屋町に在りたる者の新營業に對する租税は今年限り之を免除すべきことを告ぐ。(一七〇)
○廿六日前田齊泰、盛岡侯南部利濟を訪ふ。(一七〇)
○廿九日本鄉邸に大神樂を觀る。(一七二)

十一月
○四日前田齊泰及び齊廣夫人等駒込邸に赴く。(一七三)
○十四日勇姫入輿以後の經費に就いて議す。(一七三)

○十五日古金銀・二朱判・眞字二歩判の引替に關する幕令を傳ふ。(一七五)

○十六日諸士に努めて文武學校に出席すべきことを諭す。(一七七)

十二月

○朔日前田齊泰參議に任ぜらる。(一八一)

○朔日前田齊泰參議に任ぜられたるを以て廣德寺の廟に之を奉告せしむ。(一八三)

○二日前田齊泰を呼ぶに相公と稱せしむ。(一八四)

○十日前田齊泰參議に任ぜられたるも緩怠の擧動なかるべきことを諸士に告ぐ。(一八四)

○十日前田齊泰參議に任ぜられたる報金澤に達す。(一八五)

○十四日與力堀伊太郎先に石坂新地に遊興し十道を失ふを以て流刑を命ぜらる。(一八六)

○十五日前田齊泰登營して參議陞任を謝す。(一八七)

○十五日金澤に於いて諸士に前田齊泰の參議陞任を告ぐ。(一八八)

○十六日前田齊泰登營して家臣一人を叙爵せしむべき命を受く。(一八九)

○十七日前田齊泰、上野東照宮等に參詣しその陞任を謝す。(一九〇)

○十八日今明兩日前田齊泰の陞任を賀して盆正月を行ふ。(一九〇)

○廿四日前田齊泰、參覲往來の際携ふる三品及び供人の武器數を省略以前の舊に復せしむ。(一九〇)

○廿六日賭奕類似の勝負を行ふことを戒む。(一九一)

○前田齊泰陞任せしを以て大赦を行ふ。(一九一)

天保三年　壬辰　皇紀二四九二

正月

○朔日前田齊泰登營して年頭を祝す。(一九二)

○十二日前田齊泰下谷廣德寺に參詣す。(一九二)

○廿二日大聖寺侯世嗣前田利極、前田齊廣の女勇姬に結納を贈る。(一九三)

二月

○朔日前田齊廣の女勇姬、大聖寺侯世嗣前田利極に婚す。(一九四)

○四日前田慶寧髮置の儀を行ふ。(一九四)

○五日德川家齊、前田齊泰に放鷹によりて獲たる鶴を贈る。(一九六)

○六日前田齊廣夫人當分駒込邸に居住することを幕府に屆出づ。(一九七)

○九日御異風飯沼閑四郎の弟金六郎町人を殺害す。(一九七)

○十九日前田齊泰當春定例の通り就封の暇を賜はるべきの報金澤に達す。(一九八)

○廿一日前田齊泰初めて德川家齊直判の內書を受く。(一九九)

○廿三日金澤上堤町より出火す。(一九九)

〇廿五日前田慶寧の教養方法に關して、御附頭に告ぐ。(二〇一)

〇廿五日前田齊泰、勇姫の婚禮終れるを幕府に謝す。(二〇二)

〇廿八日前田齊廣夫人本郷邸より駒込邸に移る。(二〇三)

〇遠所町方及び御郡方に於いて私に錢札を發行することを禁止す。(二〇三)

三月

〇朔日頃日行はるゝ放火に就いて詮議す。(二〇四)

〇六日前田齊泰夫人着帶の祝儀を行ふ。(二〇五)

〇六日當春藩侯の歸國に供奉する者に貸銀を行ふ。(二〇五)

〇十一日金澤に降霰あり。(二〇六)

〇十五日前田齊泰登營して就封の辭見す。(二〇七)

四月

〇朔日前田齊泰、慶寧の教養方法に就いて御附頭に告ぐ。(二〇七)

〇二日前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。(二〇八)

〇四日御算用場奉行金相場高貴なるを以て輸出米を増額して金貨を誘致せんことを稟申す。(二〇八)

〇十五日前田齊泰金澤城に着す。(二〇九)

〇十八日小川群吾郎鳳至郡輪嶋に火矢筒を運搬の爲發足す。(二一〇)

〇廿二日前田齊泰學校に臨む。(二一一)

〇廿三日前田齊泰瀧之間に於いて、陸原大次郎をして、書を講ぜしむ。(二一一)

〇廿九日金澤下堤町より出火す。(二一二)

五月

〇二日前田齊泰石川郡粟ヶ崎に行歩を行ふ。(二一三)

〇六日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。(二一四)

〇十二日前田齊泰學校に臨む。(二一五)

〇十二日前田重教の側室青操院歿す。(二一六)

〇十四日前田齊泰人持組の士の乘馬を觀る。(二一六)

〇十八日町奉行江守要人酒狂の士の取扱を誤りたるを以て役儀を除かる。(二一七)

〇十九日前田齊泰生母榮操院を招請す。(二二〇)

〇廿一日徳川家齊、幕醫小嶋安順を遣はして前田慶寧の病を診せしむべきを告ぐ。(二二一)

〇廿二日前の茶屋業者の借用せる町會所銀を二十ヶ年賦に返納せんとする出願を卻く。(二二二)

六月

〇朔日百姓・町人の着服に就いて監視を嚴にせしむ。(二二三)

〇四日前田齊泰再び人持組の士の乘馬を觀る。(二二四)

〇八日前田齊泰石川郡松任に行歩を行ふ。(二二五)

〇十日前田齊泰學校に臨む。(二二六)

〇十八日藩の財政窮乏するを以て省略を怠るべから

ざるを告ぐ。(二二六)
○廿四日藩侯在府中御次向の費用節減に關して通牒す。(二二七)
○廿四日前田齊泰組頭の乘馬を觀る。(二三〇)
○廿九日前田齊泰學校に臨む。(二三一)

七月

○二日前田齊泰の子鈞次郎江戸に生まる。(二三一)
○二日前田慶寧の病癒えたるを以て床拂を行ふ。(二三二)
○五日前田齊泰頭分の乘馬を觀る。(二三三)
○十一日前田齊泰の子鈞次郎出生に付七夜の祝儀を行ふ。(二三三)
○十三日御次向の足輕以下にその支配頭より被下方を出願するを禁ず。(二三四)
○廿二日石川郡大野村に火災あり。(二三四)
○廿三日前田齊泰瀧之間の講書を聽聞す。(二三五)
○廿七日金澤に於いて前田齊泰の子鈞次郎出生七夜の祝儀を行ふ。(二三六)

八月

○朔日銀仲預り銀手形の發行高三分の一を正金銀と交換し、殘額を向ふ五ヶ年間通用すべきを命ず。(二三六)
○八日前田齊泰學校に臨む。(二三八)
○十日殺生人等の石川・河北兩郡の田地用水川緣を荒廢せしむることを禁ず。(二三八)
○十四日銀仲預り銀手形消却に關し金銀の比率を改む。(二三九)
○十九日兩替商預りの銀手形も亦三分の一を正金銀と引替へんとするの豫定なるを告ぐ。(二三九)
○廿一日石川郡土清水の鹽硝藏出火す。(二四〇)
○廿四日前田齊泰堂形馬場に於いて頭分の士の乘馬を觀る。(二四一)
○廿六日前田齊泰石川郡粟ヶ崎に行歩を行ふ。(二四一)
○羽咋郡壓濱村清兵衛先に外國に漂流したるを以て口書を徵す。(二四二)

九月

○朔日前田齊泰の子延之助將に金谷御屋敷に移らんとするを以て普請の主任を命ず。(二六一)
○五日幕府の飼養する綿羊を交附せらるべきことを告ぐ。(二六二)
○六日前田齊泰河北郡津幡に行歩を行ふ。(二六二)
○十六日前田齊泰學校に臨む。(二六三)
○十七日前田齊泰河北郡春日山に行歩を行ふ。(二六四)
○廿六日前田齊泰郊外千日町口に放鷹を行ふ。(二六四)

十月

○朔日學校に於ける年寄中聽講の席次に就いて告ぐ。(二六五)
○四日老牛馬を領外に賣出すことを禁ず。(二六六)
○八日前田齊泰また頭分の乘馬を觀る。(二六六)
○二十日前田齊泰武學校に於いて陪臣の乘馬を觀

る。(二六七)

○廿六日前田齊泰郊外大豆田口に放鷹す。(二六七)

○廿八日河原山關所足輕鈴木宅左衛門孝行を以て賞せらる。(二六七)

○廿九日二朱金を發行通用せしむるの幕令を傳ふ。(二六八)

○三里四方の內にて天の網を用ひ小鳥を捕ふることを禁ずる前令を嚴守せしむ。(二六九)

十一月

○二日前田齊泰郊外廣岡口に放鷹す。(二六九)

○九日幕府、前田慶寧がその母に對する唱方を指令す。(二七〇)

○十三日琉球人來着の際江戸邸の詰人等が觀覽の爲外出し得べきことを告ぐ。(二七一)

○十四日古金銀二朱判及び眞字二步判の引換と新鑄の二朱金通用期限に關する幕令を傳ふ。(二七三)

○十五日御留場に於いて大鳥を殺生する者の逮捕を盜賊改奉行に命ず。(二七四)

○十五日尾張侯獻納の茶壺に行逢ひたる際の作法に就いて議す。(二七五)

○十六日本日以降兩替商預り銀手形を正金銀と交換す。(二七六)

○廿三日前田齊泰の子鈞次郎の色直を行ふ。(二七六)

○道路の高低及び溝蓋の損所等はその町に於いて修繕すべきことを命す。(二七七)

閏十一月

○朔日江戸詰の人々より遣はしたる年頭賀狀に對する返書に就いて告ぐ。(二七八)

○三日兩學校諸師範にその門弟の身分の異動に關する屆出を命す。(二七八)

○六日金澤に於いて前田齊泰の子鈞次郎の色直の祝儀を行ふ。(二七九)

○七日前田齊泰學校に臨む。(二七九)

○廿二日前田齊泰老臣等に阿蘭陀鏡・管絃時規及びエレキテルを觀覽せしむ。(二八〇)

○廿二日石川郡松任の孝子彌兵衛に賞賜す。(二八〇)

○驛馬等を牽くに長綱を用ふることを禁ず。(二八一)

十二月

○七日當暮通用の銀子缺乏するを以て年寄中に當分不用のものを町會所に貸與せんことを交涉す。(二八一)

○十四日御用部屋の人々に年內に紋服を賜ふ例を今年に限り廢す。(二八三)

○十九日諸士の道中に於いて幕府及び三家の茶壺に出逢ひたる場合の心得を命す。(二八四)

○廿四日明年より三ケ年を限り藩侯の御國向御次入用を半減すべきことを定む。(二八四)

是歲

○金澤附近の百姓城下に出でゝ亂暴す。(二八八)

○御鎮守銀年賦返上の件に關して告ぐ。(二八九)

○鴇羽一枚に付き一文を以て買上ぐべきことを告

ぐ。(二八九)

天保四年　癸巳　　皇紀二四九三

正月

○朔日前田齊泰金澤城に年頭の禮を受く。(二九〇)

○二日謠初の儀を行ふ。(二九一)

○十四日銀仲佐賀野屋平兵衛不正の行爲あるを以てその取調主付を定む。(二九二)

○十七日前田齊泰、老臣等が省略實行中一切の賞賜を廢せんとする稟議を却下す。(二九三)

○十七日定番頭以下の供廻人員を減少すべきことを告ぐ。(二九四)

○二十日石川・河北二郡に蓮田の增加する事情に就き調査せしむ。(二九五)

○廿五日年寄中席に使用する料紙筆墨は私物を以て之に宛てんとすることを議す。(二九七)

○小松城番の定員を減じて一人とす。(二九八)

二月

○五日前田齊泰學校に臨む。(二九九)

○十一日徳川家齊の前田齊泰に贈れる鶴金澤に着す。(二九九)

○十五日諸士の行狀に關する禁令を犯すものあるを以て之を戒む。(三〇〇)

○十七日前田齊泰金谷御屋敷の普請所を巡見す。(三〇一)

○十八日前田齊泰の子利義金澤に生まる。(三〇二)

○廿二日石川門外に於ける警固の位置を改む。(三〇二)

○廿四日前田齊泰の子利義七夜の祝儀を行ふ。(三〇三)

○廿六日前田齊廣の子延之助金谷御居宅に移る。(三〇三)

○廿六日町人越中屋藤藏等が油糟を以て燈油を製造發賣せんことを請ふ。(三〇五)

○廿七日前田齊廣の子延之助の金澤城に登る定日を定む。(三〇七)

○晦日同姓の中本末嫡庶の關係に就いて解釋を定む。(三〇七)

三月

○朔日先に徳川家齊より贈られたる鶴を披露す。(三一六)

○五日陪臣にして講書聽聞の爲學校に出席する者の手續を簡易にす。(三一七)

○十日領内川除又は波除工事に關する御普請會所及び定檢地方の管轄を改定す。(三一七)

○十四日前田齊泰金澤を發して參觀の途に上る。(三一八)

○十五日大聖寺侯前田利之參觀の途金澤に宿す。(三二〇)

○廿四日文政四年の法を改めて御郡奉行專務と改作方專務とに分離せしむ。(三二一)

○廿七日前田齊泰江戸に着す。(三二四)

○廿八日徳川家齊使を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。（三三四）

○他國御使人たるべき諸士に對する貸渡金額を改定す。（三三四）

○猪を捕獲したるものに對する賞與を半減す。（三三五）

四月

○朔日前田齊泰柳營に上りて參覲の禮を行ふ。（三三七）

○九日金澤に地震あり。（三三八）

○十二日能美郡小松に火災あり。（三三九）

○十八日前田慶寧初めて登營して徳川家齊に謁す。（三三三）

○廿五日銀仲預り銀手形及び兩替印紙の引替所を設け、且つ其通用年限を延ぶべきことを告ぐ。（三三七）

○御大工及び御壁塗の子弟等の御作事所に出づる場合に改めて帶刀することを許す。（三三九）

○前田齊泰の子利義の幟拜見人の心得を示す。（三四一）

○旱魃あり。（三四一）

五月

○十日前田齊泰の子鈞次郎歿す。（三四二）

○十三日前田齊泰の子鈞次郎の逝去を發表す。（三四三）

○十七日前田齊泰の子鈞次郎危篤の報金澤に達す。（三四五）

○十九日前田齊泰の子鈞次郎歿するを以て金澤に於いて普請殺生鳴物を停止す。（三四六）

○廿七日前田利家の女豪姫の二百回忌法會を寶圓寺に執行す。（三四六）

○米價高直なるを以て藏宿印紙米所持の商人に之を賣出すべきことを命ず。（三四七）

六月

○窮民救濟の爲武士町・本町等に道路修理の工を起すべきことを告ぐ。（三四八）

○天候不順にして冷氣を感ず。（三四八）

○小松町災後の家屋建築を入念にすべきことを告ぐ。（三四九）

七月

○十日小判及び歩判金の疵あるもの、通用に關する幕令を傳ふ。（三五〇）

○領内製産の木綿に判押人を定め判賃を徴すべきことを告ぐ。（三五一）

八月

○四日前田齊泰凶歉に處する爲蓄穀の法を講ずべきことを命ず。（三五一）

○廿四日一朱銀を發行するを以て一朱金を引換ふべき幕令を傳ふ。（三五三）

○前田齊泰その族人の席次を改定す。（三五四）

○米價大に騰貴す。（三五五）

九月

○十五日前田齊泰の子利義の色直の祝儀を行ふ。（三五六）

○十九日石川郡高尾に於て加持祈禱する僧勇章、妙圓院の位牌を安置するを以てその處分を議す。（三五七）

○廿七日前田齊泰夫人江戸城西の丸に登る。（三五八）

十月　○九日不作なるを以て酒造を三分の一に減ずべきことを告ぐ。(三五九)
○十日米・雜穀等食用品を藩外に輸出することを禁ず。(三六〇)
○廿三日前田齊廣の生母貞琳院十三回忌法會を寶圓寺に執行す。(三六一)
○廿六日鳳至郡輪島海嘯に襲はる。(三六二)
○飢民の金澤に出でゝ食を乞ふ者多し。(三六九)

十一月　○九日前田治脩の廿五回忌法會を寶圓寺に取越執行す。(三七〇)
○十三日一作引免を許したる知行所を有する諸士に藩より償米を支給する時期等を告ぐ。(三七三)
○十九日米穀等の食品を藩外に出すべからざることを告ぐ。(三七六)
○廐祈禱を特許したる越中守山の七右衞門以外の猿牽徘徊するを以て注意せしむ。(三七八)
○米穀缺乏するを以て町人に粥を食ふべきことを令す。(三七九)

十二月　○七日鹿島郡能登部下村にて百姓騷擾す。(三八一)
○十四日御郡方に洩米を行ふの疑あるを以て嚴に之を戒む。(三八二)
○十五日前田齊泰夫人着帶の祝儀を行ふ。(三八二)
○廿八日博奕等の諸勝負を禁ずる前令を嚴守せしむ。(三八三)
○十八日能登口郡の惣年寄等當年收納米の皆濟に付き歎願せんことを謀る。(三八三)
○廿九日山本孫三郎銀子指引の件に關し雲田忠太夫を殺害す。(三八四)
○晦日飢民增加したるを以て之を收容する非人小屋の增築を議す。(三八五)
○窮民の飢死する者多し。(三八六)
○諸郡本年の粮貯藏に代ふるに米を以てせんことを請ふ。(三八六)

是歳　○七木等の伐採に關する取締を組主附の取扱に屬せしむ。(三八九)
○藩の租税收入凡べて左の如し。(三八九)

天保五年　甲午　皇紀二四九四

正月　○廿三日能登口郡の木綿判押役人を任命しその勤方を示す。(三九八)
○米價騰貴す。(四〇二)

二月　○朔日前田慶寧着袴の儀を行ふ。(四〇三)
○九日諸士の先祖由緒一類附帳を年寄中席に提出すべきことを命ず。(四〇五)
○十日老臣本多播磨守領內困窮の狀を在江戶の老臣に告ぐ。(四〇五)
○十一日加賀藩の抱鳶江戶本鄕に於いて町鳶た組と

闘諍す。(四〇七)

○二十日鳳至郡輪島町に火災あり。(四〇九)

○廿八日飢民の急に救助を要するもの、爲粥を施與すべきことを告ぐ。(四一一)

○晦日非人小屋の收容者三千四百餘人を算す。(四一五)

○諸郡惣年寄に命じて本年の耕作を奬勵せしむ。(四一七)

○米價高直にして洩米の疑あるを以て之が發見者は出訴すべきことを告ぐ。(四一七)

○屎物を一切領外に出すべからざることを告ぐ。(四一八)

○乞食をその村限りにて介抱し、浪人・薦僧等を立入らしめざるべきことを命ず。(四一八)

○藤内頭より散乞食等の取捌に關する從來の例を上申す。(四一九)

三月

○十一日本日より金澤神護寺にて米を施行す。(四二二)

○十三日前田齊泰就封の暇を受く。(四二三)

○十五日前田齊泰登營して就封の辭見す。(四二三)

○十五日前田齊泰登營して阿蘭陀人の德川家齊に謁するを觀る。(四二三)

○廿三日前田齊泰の子利順江戸に生まる。(四二四)

○廿八日老臣等窮民救濟の法を議し銀子獻納を請ふ。(四二五)

○晦日非人小屋に收容せらるゝ者四千百餘人を算す。(四二六)

四月

○朔日前田利順出生せしを以て七夜の祝儀を行ふ。(四二七)

○十日河北郡より越中今石動に輸出する魚類の取締方に關して告ぐ。(四二八)

○十三日前田齊泰江戸を發して歸國の途に上る。(四二九)

○十四日盜賊の嫌疑ある者の家宅を搜索する件に關し通牒す。(四三六)

○二十日先に雲田忠太夫を殺害したる山本孫三郎の無罪たるべきを議す。(四三七)

○廿四日前田齊廣の子延之助の病疱瘡と決す。(四三九)

○廿四日郡方に疫疾流行するを以て醫師を派遣するの當否を議せしむ。(四四〇)

○廿五日前田齊泰金澤城に歸着す。(四四二)

○廿九日非人小屋に收容せらるゝもの三千三百餘人を算す。(四四四)

五月

○二日前田齊泰學校に臨む。(四四七)

○能登口郡の窮民を救助せんことを出願す。(四四五)

○四日越前府中の本多內藏助將に領內を通過せんとするを以てその待遇に關し通牒す。(四四七)

○五日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤に宿す。(四四九)

○七日前田齊廣の子延之助歿す。(四五〇)
○前田延之助行狀。(四五三)
○九日疫病流行するを以て諸郡に醫師を派遣すべきことを告ぐ。(四六〇)
○十一日非人小屋に收容せらるゝ者の保護を充分ならしむべきを命ず。(四六四)
○十五日老臣等窮民救濟の爲米・銀を献納すべきことを通牒す。(四六五)
○十五日非人小屋に死體を求むる大犬あるを以て之を銃殺することを命ず。(四六五)
○十七日非人小屋の疫病を拂ふ爲彌彦送をして祈禱せしめんことを議す。(四六七)
○十九日前田齊廣の子延之助の葬儀を行ふ。(四六八)
○廿三日前田齊泰の滕中を問ふ閣老の奉書金澤に達す。(四七一)
○疫病大に行はる。(四七一)
○辰巳用水の清潔を保持すべき件を議す。(四七三)
○藤内等非人小屋に收容せられたる者の死者を茶毗に附するの命を拒絶す。(四七四)

六月

○四日藩の貸米に對しては浦口銭を徴すべからざることを定む。(四七六)
○七日小割銀の通用期限を豫定より延ぶべきことを告ぐ。(四七七)
○十日藩の財政困難なるを以て借上銀を命ずることを告ぐ。(四七八)
○十三日前田齊泰學校に臨む。(四八〇)
○十四日更に省略に就いて議せしむ。(四八〇)
○晦日非人小屋に收容せらるゝ者の員數を調査す。(四八一)
○家中の者金銀調達の爲收納米の藏縮をなす件に關して告ぐ。(四八二)

七月

○七日家中より借上銀を行ふも困窮甚だしき者あらば之を上申せしむ。(四八三)
○廿六日金谷御居宅を再び金谷御屋敷と稱すべきことを告ぐ。(四八四)
○幕府の令に基づき造酒の石高を一昨年の三分の一とすべきことを告ぐ。(四八四)
○米價大に下落す。(四八六)

八月

○八日前田齊泰瀧之間に於いて林周輔をして書を講ぜしむ。(四八六)
○十一日領内に於いて武器を藏置する場所を調査す。(四八七)
○十三日前田齊泰學校に臨む。(四八八)
○廿三日前田齊泰人持組の士の調馬を覽る。(四八八)
○廿三日前田齊廣の女壽々姫の本多播磨守に嫁したる後その居所を廣坂御廣式と稱せしむ。(四八九)

○廿七日前田齊泰石川郡松任に行歩を行ふ。(四八九)

○米穀大に豊穣す。(四九〇)

九月

○朔日前田齊泰石川郡粟ヶ崎に行歩を行ふ。(四九〇)

○朔日奥村丹後守冗員淘汰の審議に關して意見を述ふ。(四九一)

○二日前田齊泰の子利順の色直を行ふ。(四九五)

○三日前田齊泰學校に臨む。(四九五)

○五日前田齊泰人持組の士の乘馬を觀る。(四九六)

○六日前田齊泰郊外千日町口に放鷹す。(四九六)

○六日石川郡本吉町に火災あり。(四九六)

○十八日前田齊泰夫人江戸城西丸に登る。(四九七)

○廿一日御鷹場及び御留場に於ける殺生禁止等のことを告ぐ。(四九七)

○廿六日老臣本多播磨守、前田齊廣の女壽々姫に納采す。(五〇〇)

○廿八日前田齊泰卯辰山に行歩を行ふ。(五〇〇)

○城下に豊年祭行はる。(五〇一)

十月

○八日大坂鹽屋善兵衛を藩の産物問屋に指定したることを告ぐ。(五〇三)

○十九日諸士の百姓地を請地とすることを禁ず。(五〇三)

○廿四日金澤の宮腰屋久右衛門及び石川郡宮腰の錢屋五兵衛二人に船櫂數調理役を命じたることを告ぐ。(五〇四)

○先歳手當の爲二萬石の蓄米を諸郡に命ず。(五〇六)

十一月

○三日與力安武牛之丞、日置知左衛門を殺害す。(五〇八)

○四日是日以後壽々姫將に本多播磨守に入輿せんとするを以て道具を運搬す。(五一四)

○四日家中の者請地地子銀を期月に上納すべきことを告ぐ。(五一五)

○十三日金澤新町より火を失す。(五一六)

○十九日壽々姫、老臣本多播磨守に入輿す。(五一六)

○非人小屋に收容せらるゝ窮民大に減少す。(五一七)

十二月

○六日先に日置知左衛門を殺害したる與力安武牛之丞及びその他關係者處分せらる。(五一八)

○八日小幡豹三、成瀨掃部の門に張文を行ふ。(五二二)

○十日本年の造酒石高を三分の二とすべき幕令を傳ふ。(五二三)

○十九日本年を以て増借知の年限盡きたるも尚當分之を繼續すべきことを告ぐ。(五二五)

○廿四日御郡方に於ける宗門改の手續を改む。(五二六)

○廿六日來年頭より諸郡惣年寄等に通り懸りの目見を許し、且つ年寄並の苗字を稱し得べきことを告ぐ。(五二七)

○廿八日藩の財政窮乏するを以て諸士の役料知に借

上を命ず。(五二七)
○廿八日諸郡惣年寄・年寄並等蓄米に盡力せしを以て賞せらる。(五二九)
○諸郡惣年寄以下の轉役したる場合に於いてはその役料を日割とすべきことを定む。(五三一)

天保六年　乙未　皇紀二四九五・

正月

○朔日前田齊泰金澤城に年頭の禮を受く。(五三一)
○二日謡初の儀を行ふ。(五三三)
○十九日具足の鏡餅直を行ふ。(五三三)
○二十日本年より更に借知を命ずべきを以て儉約を勵行せしむ。(五三四)
○二十日江戸詰中に於ける諸士儉約の心得を諭す。(五三四)
○廿二日前田齊泰の子利順の病疱瘡と治定す。(五三七)
○廿七日東本願寺の遷佛式に身分不相應の喜捨を爲し又は窃に參詣することを禁ず。(五三七)
○能登口郡の惣年寄等難破船の取捌に關する慣習を上申す。(五三九)
○御算用場奉行出納に關する豫算を提出す。(五四一)
○從來御納戸銀を以て下賜したる給銀の一部を御郡打銀に移すの件を議す。(五四九)

二月

○三日前田齊泰學校に臨む。(五五一)
○三日郡方の者等他國他領より金銀を借用することを禁ず。(五五一)
○六日前田齊泰の子利順の疱瘡癒え酒湯を浴す。(五五三)
○十四日前田齊泰、齊廣の女壽々姫を本多播磨守の邸に訪ふ。(五五三)
○十六日人持組頭、その組中に藩の寺方普請入用銀を献納せんことを勸告す。(五五四)
○十七日江戸詰の者の不時拜借願を許さゞるべきを告ぐ。(五五五)
○十九日小松御城番前田織江足輕をして鐵炮を以て捕鳥せしめ、爲に逼塞を命ぜらる。(五五五)
○廿二日越中守山の猿曳七右衞門に鑑札を與へたることを告ぐ。(五五六)
○廿四日前田齊泰の子利義の髪置の祝儀を行ふ。(五五七)
○算用聞役等に命じ諸色の直段を調査しその下落を計らしむ。(五五七)

三月

○十一日金澤横安江町より火を失す。(五六〇)
○十四日前田齊泰金澤を發して參覲の途に就く。(五六三)
○十八日人持組の士の風俗に關して訓諭す。(五六四)
○廿六日前田齊泰江戸に着す。(五六六)
○廿九日徳川家齊使者を遣はして前田齊泰の參覲を

勞せしむ。(五六七)

四月
○朔日前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。(五六七)
○十八日前田齊泰、齊廣夫人等を招請す。(五六八)
○廿五日今枝內記の家臣互に殺傷す。(五六九)
○廿七日大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に宿す。(五六九)
○廿九日金澤中堀川町に火災あり。(五六九)

五月
○十六日無役等の人持に寺社方普請入用方の手傳を命ず。(五七〇)
○十八日江戸に往來するもの越後山の下を通過するに海路を取ることを禁ず。(五七一)
○十九日本年類燒の諸士以下に一期を限り借知を免除す。(五七二)
○廿一日天文學者西村太沖歿す。(五七二)
○廿七日前田齊泰夫人江戸城西丸に登る。(五七四)
○火災に關し流言を放つ者を捕縛す。(五七五)
○東西本願寺別院再建の場合に於いてその規模を縮少すべきことを命ず。(五七五)
○町方の風俗に就いて示諭す。(五七五)

六月
○二日他國者にして賊を働きて捕へられたるときはその本籍に照會したる後入墨を施さしむ。(五七六)
○十二日前田重教の五十回忌法會を江戸廣德寺に執行し、齊泰之に詣づ。(五七七)
○十二日前田重教の五十回忌法會を金澤寶圓寺に執行す。(五七九)
○廿一日前田齊廣の女壽々姫金澤に逝去す。(五七九)
○先の火災に金澤兩本願寺別院燒失したるを以て、百姓等過大の寄進を爲すことを戒む。(五八〇)
○諸郡引免復舊の詮議を今年限り行はざるべきことを告ぐ。(五八三)

七月
○朔日家作を簡易とすべき前令の恪守を命ず。(五八四)
○廿六日前田齊泰の子利行金澤に生まる。(五八四)
○廿六日實從兄弟を末期養子とする件に關して告ぐ。(五八五)
○領內に存する鐵炮の取締方法を議す。(五八六)
○製鹽の公定減損率を示す。(五八九)

閏七月
○四日非常救濟用の圍籾を本年より增額すべきことを告ぐ。(五九二)
○六日前田齊泰の子利行の七夜の祝儀を行ふ。(五九二)
○十八日羽咋郡西性寺等に同郡火打谷村より產する吳須の取扱主附たらしむることを許す。(五九四)
○廿三日德川家齊、前田齊泰に雲雀を贈る。(五九五)
○廿八日越中守山の猿曳七右衞門の鑑札を沒收したることを告ぐ。(五九六)
○町方の風俗に關する心得方を諭し、二日讀を勵行せしむ。(五九七)

八月 ○十一日代官手附の者の納租を取扱ふことを止め、新田裁許・山廻をして之に當らしむ。（六〇三）
○十一日人持組横濱波江知行を召放さる。（六〇四）
○十八日馬士の不埒なる行爲を戒飭す。（六〇五）
○廿九日大聖寺侯前田利之、その世嗣利極と共に本郷邸の馬場に臨む。（六〇六）

九月 ○朔日水戸德川齊昭、前田齊泰と營中に會し所藏の蘭書を見んことを求む。（六〇八）
○朔日富山侯前田利幹隱居を請ふを以て、前田齊泰家老青山將監を遣はし其の病狀を視察せしむ。（六〇九）
○八日前田齊泰、德川家治の五十回忌法會に上野寬永寺に豫參す。（六一二）
○十八日前田齊泰の子利順宮參を江戸富士社に行ふ。（六一三）
○二十日越中境關所に保存する書類の年號を上申す。（六一四）
○廿二日前小松町奉行富田九内・堀平馬不埒を以て減知逼塞を命ぜらる。（六一五）
○廿九日前田治脩夫人十七回忌法會を下谷廣德寺に執行す。（六一七）

十月 ○十五日幕府、富山侯前田利幹の隱居は加賀侯の代願にて可なることを告ぐ。（六一七）
○十八日羽咋郡小山西性寺の製する陶器を藩外に販賣するを禁ず。（六一八）
○十九日富山侯前田利保、家督相續を命ぜられたることを前田齊泰に謝す。（六一九）
○廿六日前田齊泰水戸侯德川齊昭の小梅邸に放鷹す。（六二〇）

十一月 ○二日前田齊泰平尾邸に放鷹す。（六二六）
○八日金澤鶴來屋左平等の外伊勢暦を摘寫して出板することを禁ず。（六二九）
○十四日領内に於ける鐵炮の取締に關し令す。（六三〇）
○廿五日通用の小割札古札引替の期限に關して告ぐ。（六三一）
○能登口郡に産する苧絈買入方に資銀を貸與し且つその製品を精良ならしむべきを告ぐ。（六三二）

十二月 ○十一日德川家齊夫人歳暮の祝儀を前田齊泰等に贈る。（六三三）
○廿二日前田齊泰稽古能を舞ふ。（六三四）
○冬氣候大に順を失ふ。（六三四）

是歲 ○領内に十三ヶ所の備荒倉を築造せしむ。（六三五）

天保七年 丙申　皇紀二四九六

正月 ○朔日前田齊泰登營して年賀の禮を行ふ。（六三六）
○廿三日前田齊泰夫人江戸城西丸に登る。（六三七）
○廿七日両替手形を銀仲手形と交換すべき期限を告示す。（六三八）

二月

○田地の施肥を豊かにすべき方法を講ぜしむ。(六三八)
○六日徳川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。(六三九)
○十六日藩の財政は自今收入のみを以て支出に當つべき方法を講ぜしむ。(六四〇)
○十八日前田齊泰の子利順髮置の儀を行ふ。(六四一)
○廿三日卯辰茶屋町跡の風紀に就いて議す。(六四二)
○廿三日鳳至郡輪島町に火災あり。(六四三)
○諸郡より收納米皆濟賞美に關する從來の慣例を上申す。(六四三)
○收納米上納に關する規定を更改す。(六四四)
○羽咋郡西性寺等樂燒以外の製陶を禁止せられたるを以て請書を呈す。(六四九)

三月

○六日前田齊泰夫人慶寧と共に江戸城大奧に登る。(六五〇)
○九日藩の財政を整理すべきに付き家中に節約を勸む。(六五一)
○十三日前田齊泰就封の暇を受く。(六五二)
○十五日前田齊泰登營して就封の辭見す。(六五二)
○廿三日前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。(六五三)
○廿八日孝子佐々屋建太郎賞せらる。(六五三)
○百姓に衣食住を質素にすべきことを命ず。(六五四)
○虚無僧及び浪人を村々に立入らしめざるべきことを諭す。(六五六)
○七日前田齊泰金澤城に着す。(六五六)

四月

○十二日前田齊泰學校に臨む。(六五七)
○十四日收納米を皆濟したる惣年寄及び年寄並に對する賞賜の規程を告ぐ。(六五七)
○十五日前田齊泰放鷹を行ふ。(六五九)
○廿二日前田齊泰學校に臨む。(六五九)
○廿三日前田齊泰、瀧之間に講書を聽聞す。(六五九)
○廿六日能登一宮寺家に於いて取拔賴母子を賣弘めたるを以て御郡方の者の之を買取るべからざることを告ぐ。(六六〇)
○廿八日衡器取締に關する幕府の令を傳ふ。(六六〇)

五月

○朔日前田齊泰、石川郡御河端筋に放鷹す。(六六二)
○八日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。(六六三)
○十日石川・河北兩郡の松山にて落葉を掻くものは一ヶ月六次以外に於いてすることを禁ず。(六六四)
○十七日犀川に洪水あり。(六六五)
○晦日金澤城外堂形米倉所屬の役所燒失す。(六六六)
○郡方に出づる藩の餌指の取締に就いて告ぐ。(六六六)
○金子と銀子との交換比例を改定す。(六六七)

六月

○三日前田齊泰學校に臨む。(六六八)
○七日羽咋郡西性寺等の製出する繪附樂燒の賣捌を

許す。（六六八）
○十四日前田齊泰、奥村丹後守に月番加判を命ぜんとの意を告げしむ。（六六九）
○十四日婚姻又は養子緣組の際金銀を授受するを禁ず。（六七二）
○廿二日前田齊泰、奥村丹後守が月番加判を受諾し得ざるの意を容れ、日々年寄中席に出勤を命ず。（六七四）
○領內に向五ヶ年間用銀の上納を命ず。（六七五）
○降雨久しきに亙りて晴れず。（六七八）

七月

○七日前田齊泰學校に臨む。（六七九）
○十一日是の日以後窮民等石川郡宮腰錢屋五兵衛の家に集り救助を求む。（六八〇）
○十二日昨今兩日前田齊廣の十三回忌法會を天德院に執行す。（六八一）
○廿四日早稻を苅取りその不熟の狀を訴ふるを禁ず。（六八一）
○廿四日町人等の宮樣方貸附銀を周旋するを禁ず。（六八二）
○廿六日富山侯前田利幹卒去の報金澤に達す。（六八三）
○晦日石川郡本吉に打毀しを行ふ。（六八三）
○米價漸く騰貴す。（六八五）

八月

○朔日能美郡小松町に打毀し行はる。（六八五）
○四日禁を犯して米穀を藩外に輸出する者の監視を嚴にせしむ。（六八八）
○四日食用の米穀缺乏するを以て之が供給の方法を講ずべきことを命ず。（六八九）
○五日前田齊泰、諸般の政務に勵精し、特に本年の米價高貴なるを以て救濟を怠るべからざることを諭す。（六九〇）
○七日前田齊泰學校に臨む。（六九二）
○十三日大風雨あり。（六九二）
○十五日米穀缺乏するを以て一切の食用品を領外に輸出するを禁ず。（六九三）
○廿一日前田齊泰學校に臨む。（六九三）
○廿四日諸郡惣年寄をして各その擔當の組に就いて力を致さしめ苟も他に附和雷同すること勿らしむ。（六九四）
○米價高直なるを以て窮民に補償を與ふ。（六九五）
○氣候寒冷にして降霰を見る。（六九六）
○綿作を一作卸しとする從來の慣習を改めしむ。（六九七）

九月

○三日前田齊泰、陸原大次郎をして書を講ぜしむ。（六九七）
○三日前田齊泰自己の行狀に反省すべき點なきかを諮問す。（六九八）
○六日石川郡宮腰室屋三郎兵衛米穀を買占め密に輸

出するを以て斬せらる。(六九九)
○六日麥作の反別を成るべく増加せしむべきことを命ず。(七〇〇)
○十一日德川家齊將軍職を家慶に讓らんとすることを告げたりとの報金澤に達す。(七〇〇)
○十二日年寄中等、前田齊泰に當分演能を廢すべきことを上申す。(七〇一)
○十二日救窮用の米穀足らざるを以てその方法を議す。(七〇二)
○十九日年寄等、成瀬掃部が寺島藏人と謀る所あるを以て其處分に關し上申す。(七〇三)
○廿二日家老成瀬掃部その職を免ぜらる。(七〇七)
○廿六日前田齊泰、石川郡宮腰に放鷹す。(七〇七)
○前田齊泰領內の凶作を幕府に屆出づ。(七〇八)
○秋收の季多雨なるを以て新穀の乾燥方法を示す。(七〇九)
○町・在に命じ當分造酒に着手すること勿らしむ。(七〇九)

十月

○六日前田齊泰その食膳を節減す。(七一一)
○六日前田齊泰、改作奉行等に救窮の方法を誤るなからしむることを諭さしむ。(七一二)
○十二日前田齊泰の子利順の病痲疹と決定す。(七一三)
○十二日凶年なるを以て收納取扱及び窮民救濟に關する心得を諭す。(七一三)
○十三日石川郡本吉及び能美郡小松の騷擾を鎭靜したる改方與力以下に賞賜す。(七一四)
○十五日前田齊泰郊外千日町に放鷹を行ふ。(七一五)
○十九日此の夜降雪あり。(七一五)
○廿二日前田慶寧の病痲疹と決定す。(七一六)
○廿三日前田齊泰の子利順の痲疹癒え酒湯を浴す。(七一六)
○綿の價騰貴したるを以てその相場を公定す。(七一七)
○本年に限り園籾の量を減ずべきことを告ぐ。(七一七)

十一月

○朔日是日以後寺島藏人の處分に關して議す。(七一八)
○二日本年凶作なるを以て租米の檢査を寛にすべきことを命ず。(七二二)
○四日前田慶寧の痲疹癒え酒湯を浴す。(七二三)
○四日河北郡倶利伽羅權現社及び石川郡白山本宮坊舍災に罹る。(七二四)
○四日寺島藏人能登に配流を命ぜらる。(七二四)
○七日前田齊泰夫人の病痲疹と決定す。(七三〇)
○十一日本年不作なるを以て食物を節し窮民を救助すべきことを諭す。(七三一)
○十一日寺島藏人の養子主馬に祖父の名跡を襲がしむ。(七三三)
○十二日凶作に付諸郡引免代り用捨米及び變地償米

の額を定む。(七三四)
○十六日百姓に引免代り用捨米を命じたるを以て給人の收納不足高を御召米とすべきことを告ぐ。(七三八)
○十八日前田齊泰夫人の痲疹癒え酒湯を浴す。(七四〇)
○廿七日小松の儒湯淺寬米粃の食法を頒つ。(七四一)
○廿八日本年造酒の禁を解き、藩より賣渡す米額を限り之を釀すを得しむ。(七四二)
○晦日頭分以上及び役懸りの平士に封書を以て政事に關する意見を上申せしむ。(七四三)
○米價高直なるを以て下賤の食用となる物以外の菓子製造を禁ず。(七四四)
○諸郡惣年寄以下金澤に在る者の料理屋等にて集會するを戒む。(七四五)
○石川郡粟崎村藤右衞門及び河北郡向粟崎村徳兵衞に扶持米を與へ御郡方年寄列の待遇とす。(七四五)

十二月 ○八日前田齊泰の子純六郎江戸に生まる。(七四六)
○十四日年寄奥村內膳等先に前田齊泰の與へたる諭告に對して答議す。(七四七)
○十五日大聖寺侯前田利之卒去の報金澤に達す。(七五一)
○廿六日御供人の携行する具足認方の制を定む。(七五二)
○近習の士その家族に疱瘡に罹る者ある時は登城を遠慮せしむ。(七五二)
○飢餓の爲死する者多し。(七五三)

天保八年 丁酉 皇紀二四九七

正月 ○朔日前田齊泰金澤城に年頭の賀を受く。(七五三)
○十三日窮民救濟の爲諸士の銀子献納を請ひしを許す。(七五四)
○十八日公子女の名に牴觸する者の改名方に就いて告ぐ。(七五五)
○廿七日前田齊泰、老臣等に窮民救助取締方を懈らざるべきこと等を議せしむ。(七五六)

二月 ○朔日前田齊泰の子利義着袴の儀を行ふ。(七五七)
○三日老臣等學校助教を召して學政修補に關する意見を徵す。(七五八)
○八日米穀等を藩外に密輸出したるものを訴出づるものへ賞賜に關して令す。(七五九)
○十日今年以後上納すべき町・在の用銀を用捨し特に窮民救助の爲に力を致すべきを命ず。(七五九)
○十五日石川郡鶴來に火災あり。(七六一)
○十六日前田齊泰、望遠鏡・顯微鏡を製したる松田東英に賞賜す。(七六一)
○十七日前田齊泰將に參覲せんとするを以て留守中政務の心得を老臣等に諭す。(七六一)
○十七日改作奉行・郡奉行を領内に派遣し荒政を行

はしむ。(七六二)

〇十八日前田齊泰の子利義の麻疹輕快するを以て酒湯に浴す。(七六四)

〇十九日大坂に於いて大鹽平八郎の亂に際し加賀邸の人數を出動せしむ。(七六五)

〇二十日諸郡に夫食の爲貸米を行ふ。(七六六)

〇二十日村方の窮民を保護して城下に出でしむるなかるべきこと等を諭す。(七六九)

〇廿三日前田齊泰學校に臨む。(七七一)

〇廿四日前田齊泰、御目見以上の諸士に藩政の得失に關する封事を上るべきことを命ず。(七七一)

〇廿六日前田齊泰先に政事に關し進言したる諸士を嘉賞す。(七七三)

〇廿七日前田齊泰金澤を發して參覲の途に上る。(七七三)

〇廿七日老臣等の執筆の任に在る者の濫に外間と交際すべからざることを戒む。(七七四)

〇米價大に騰貴す。(七七五)

〇食用に代ふる摺糠・粉糠の取集高屆出の件を告ぐ。(七七五)

三月

〇八日藩の財政整理の爲御勝手方に於いて更に計畫するの必要あることを告ぐ。(七七六)

〇十日前田齊泰江戸に着す。(七七七)

〇十日御家中主人持の外長屋を借りて住居する者の難澁は貸主に於いて救助すべきことを諭す。(七七八)

〇十三日徳川家齊使者を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。(七七九)

〇十五日前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。(七七九)

〇十六日金澤公儀町より火を失す。(七八〇)

〇廿二日財力ある者は他國より米穀を買入れ其の額を屆出づべきことを命ず。(七八一)

〇廿六日麥收穫の期將に近づきたるを以てその取締方法を惣年寄に上申せしむ。(七八二)

〇廿八日京都本願寺より門徒の百姓を徴發せんとする風聞あるを以て之に應ずることなかるべきを命す。(七八三)

〇米作の督勵を嚴重にすべきを令す。(七八三)

四月

〇三日前田齊泰登營して徳川家慶の相續を祝す。(七八四)

〇十一日將軍宣下の際前田齊泰束帶にて登營するを以て韓昇の着用する八德を金澤に於いて製せしむ。(七八四)

〇十三日諸郡百姓にとらせ團子を食用に供すべきことを告ぐ。(七八五)

〇廿五日前將軍徳川家齊退隱せしを以て物を前田齊泰に贈る。(七八六)

五月

○米穀を貯藏する者に賣却を勸め、又之を隱匿する者を告發せしむ。(七八七)

○江戸に出稼せる者送還せらる。(七八八)

○八日御歩並以上の諸士に七月以後の飯米を借上ぐべきことを令す。(七八八)

○十六日前田齊泰諸士の半知借上を實行すべき決意を告ぐ。(七九〇)

○晦日百姓の米穀を貯藏するものあらば急に之を賣出すべきことを命ず。(七九一)

○行倒人を非人小屋に收容する手續を改む。(七九二)

○窮民に食料として令法を與ふ。(七九二)

六月

○九日幕府に提出すべき藩領の繪圖出來方に關して議す。(七九二)

○十一日二百石以上の士は本年の半知を減じ、以下も亦割合を以て減ずべきことを令す。(七九三)

○十二日銀仲預り銀手形の通用に關し流言することを戒む。(七九八)

○用米不足するを以て當作の麥一萬石を諸郡に割當し上納せしむ。(八〇〇)

○貧民に大豆を給し、又大に工事を起す。(八〇〇)

七月

○六日町・在及び家中の借財辨濟方法及び質物の請出し方等を令す。(八〇一)

○八日前田齊泰、家中の半知を借上ぐるを以てその生母榮操院に節約を主とすべきを告ぐ。(八〇三)

○十日老臣等、前田齊泰が半知借上に就いて藩内動搖すべきを以て歸藩を出願すべきやとの諮問に應ふ。(八〇四)

○十一日百姓の持高質入を禁ずる法令の恪守を命ず。(八〇五)

○十二日藩の財政逼迫するを以て諸向入用の節減手段を講ずべきことを令す。(八〇五)

○十六日羽咋郡の寺院に富突札を賣出すものあるを以て百姓の之を買入るゝことを禁ず。(八〇六)

○十七日百姓の切高したるものは漸次之を回復せしめ、又享和二年以降町人の取高したるものは之を沒收すべきを命ず。(八〇七)

○十八日百姓に他の救恤に依賴することなく獨立して生計を維持すべきことを諭す。(八〇七)

○十八日御郡方惣年寄以下の役儀を有する者に令し勸農の法を怠ること勿らしむ。(八〇八)

○十八日銀手形と錢との交換比例を公定す。(八一一)

○廿一日重ねて御郡方の質物請出方に就いて告ぐ。(八一三)

○廿二日村々肝煎の撰定を愼み、その功績ある者は之を上申すべきを命ず。(八一三)

○廿三日足輕の遠所に出張する者の旅費を增額す。

(八一四)

○廿四日浦々に於いて他國の産物を購入するに錢を以て支拂ふことを嚴禁す。(八一四)

○廿八日前田齊泰老臣等に家中諸士の撫育を怠るべからざることを令したる書金澤に達す。(八一五)

○廿八日銀仲預手形に小割五分札を發行通用せしむべきことを告ぐ。(八一六)

○廿八日立毛苅入の季近づきたるを以て盜難に注意せしむ。(八一七)

○窮民に麥を給す。(八一九)

○酒造商賣人の店前に於て飲酒し及び不法の行爲あるを禁ず。(八一九)

○牛知借上に付主家を追はれ職を失ひたる者の救助を講ぜしむ。(八二〇)

八月

○二日竹澤御庭の泉水に鮎簗を設くべきことを命ぜらる。(八二〇)

○三日百姓の直接諸給人に收納延期を請ふ等のことを禁じ、規定の歩入に隨ひて納入せしむ。(八二一)

○四日前田齊泰の考案による竹澤御庭の泉水成るを告ぐ。(八二二)

○五日御郡奉行を收納米の代官たらしむる制を廢し御郡年寄等の取扱に復す。(八二三)

○十日牛知借上に付き役出銀の提出方に關し告ぐ。

(八二四)

○十九日本年の酒造高は昨年の如く例年の三分の一を過ぐることなかるべきを命ず。(八二四)

○廿四日馬士等長綱を以て馬を牽き及び喫はへ煙管を爲すことを禁ず。(八二五)

九月

○二日前田齊泰將軍宣下の式に列する爲束帶して登營す。(八二六)

○四日百姓の借銀辨濟方法に關する細則を示す。(八二六)

○八日非人小屋に收容せられたる窮民を成るべく出所せしむべきことを告ぐ。(八二八)

○十一日領内に大風あり。(八二九)

○十三日石川郡笠舞の孝子勘右衞門を褒賞す。(八二九)

○十四日野町神明社内に於いて芝居を興行することを許さる。(八三〇)

○十九日前田齊泰登營して將軍宣下の祝賀能を陪觀す。(八三〇)

○廿一日德川家慶將軍に任ぜられしを以て祝儀の爲物を前田齊泰に贈る。(八三一)

○廿三日前田齊泰、借財返辨の新令に對し人心動搖するを以て之が對策を町奉行に命ず。(八三二)

○廿五日諸士の家政を整理し及び役向の人撰と賞罰を愼むべきことを組頭に命ず。(八三三)

○新穀を濫に消耗することを戒め且つ食用に供せらるゝ植物の栽培を奬勵す。(八三六)
○米穀を用ひて菓子を製造することの禁を解除す。(八三七)

十月

○二日新田齊泰施政に關し老臣に諭示したる書金澤に達す。(八三八)
○十日犀川及び淺野川の橋梁を改架し工匠をして職を得しむ。(八三九)
○十五日銀仲預手形裁許升屋次右衞門・酒井宗左衞門その職を止めらる。(八四〇)
○廿四日銀札と錢との公定相場を解除す。(八四一)
○米價大に下落す。(八四一)
○奧御納戸方に於いて藩侯等の衣服料節減の方法に關して議す。(八四二)
○百姓の互に稻縮りを嚴にし租納を完からしむべきを告ぐ。(八四四)

十一月

○四日村々奉公人の年季は契約の如く勤務すべきことを告ぐ。(八四五)
○八日去年以來米錢を窮民に施與したる者に賞詞を與ふ。(八四五)
○十四日能美郡安宅新村の百姓助三郎孝行を以て賞賜せらる。(八四六)
○十六日享保二年以降町人の取高したるものを沒收する件に關し重ねて告ぐ。(八四七)
○廿四日從來の製法以外に係る新奇の菓子類販賣を禁ず。(八四九)
○廿四日羽咋郡福浦の孝女きいに賞賜す。(八四九)
○來年以降五ヶ年に亙る藩の借財整理法を計畫す。(八五〇)
○奉公口に離れ流浪難澁する者の救濟に關し通牒す。(八五四)
○產物方役所を廢し物價方役所を建つ。(八五五)
○東本願寺別院の再建を許す。(八五五)

十二月

○九日市儒上田作之丞の門下たる者の素行に就き探索せしむ。(八五六)
○十日親作たるものは小作の租米を引去りたる後にあらざれば用米を徵すること能はざらしむ。(八五七)
○十日自今寺社及び町人に百姓の山林を賣却すべからざる等のことを令す。(八五八)
○十二日御郡奉行に令し領内の雜穀・薪炭の價格を調査せしむ。(八六〇)
○十二日近來新に諸商賣の株立運上を許したるものを停止し、自由に營業するを得しむ。(八六〇)
○廿三日質屋を從來の如く株立とし役銀を上納すべきことを命ず。(八六一)
○廿五日巡見上使その出發の時期を定めたることを

告ぐ。（八六二）

〇廿七日切高の格合を改め品々帳を整理すべきことを命ず。（八六三）

天保九年　戊戌　皇紀二四九八

正月　〇十一日領外の酒を賣ることの禁を解く。（八六四）

〇十七日去秋田畠に手上高・手上免を行ふことを諭したるを以てその調査を徹底すべきことを令す。（八六四）

二月　〇四日前田齊泰の子利順着袴の儀を行ふ。（八六五）

〇四日巡見上使將に來らんとするを以て家屋道路等修理の心得を令す。（八六六）

〇升屋次右衞門・酒屋宗左衞門等非行あるを以て遠所居住を命ぜらる。（八六八）

〇百姓の田地を廢して家屋を建て及び高を所有するものゝ商業を營むを禁ず。（八六九）

〇石川郡荒屋の孝子彌三右衞門賞賜せらる。（八七〇）

三月　〇朔日前田慶寧初めて諱を利住と稱す。（八七〇）

〇四日銀仲預手形裁許人を變更せしを以て新手形を發行すべきことを告ぐ。（八七一）

〇十一日前田齊泰、江戸城西丸昨日燒失せしを以て老中に廻勤す。（八七二）

〇十三日前田齊泰就封の暇を受く。（八七二）

〇十五日前田齊泰登營して就封の辭見す。（八七二）

〇十六日幕府、前田齊泰に江戸城西丸造營の助役を命ず。（八七三）

〇廿二日前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。（八七五）

〇廿六日巡見上使通過の際の心得を金澤市中に諭す。（八七五）

〇廿九日幕府、前田齊廣夫人の湯治の爲歸國すべき請を許す。（八七七）

四月　〇三日河北郡沖村に火災あり。（八七七）

〇六日前田齊泰金澤城に着す。（八七八）

〇七日百姓に東西本願寺の勸化に應じ又は領外の寺院に參詣することなかるべきを告ぐ。（八七八）

〇十一日前田齊泰、居間書院に於いて老臣をして政事を議せしむる定日を定む。（八七九）

〇十一日一昨年の荒政に盡力せし諸士賞賜せらる。（八八〇）

〇十四日巡見上使近江今津領に着す。（八八〇）

〇十七日石川郡末村の孝子吉兵衞に賞賜す。（八八一）

〇十九日前田齊泰學校に臨む。（八八一）

〇十九日陸原大次郎に御次講釋を命ず。（八八一）

〇廿二日前田齊泰、士風を改め農工商をして各その業に勵ましむべきことを告ぐ。（八八二）

〇廿五日米穀以外の食用品の出津の禁を解除し運上

を納れしむ。(八八四)
○廿七日江戸城西丸造營の助役を命ぜられたるを以て家中に半知借上の必要あるを議す。(八八五)
○廿九日鳳至郡院内村の與之助至孝を以て賞せらる。(八八六)
○廿九日御廣式女中に麁服を着用すべきことを命ず。(八八六)
○廿九日藩侯放鷹の際百姓のその業を止むることなかるべきを諭す。(八八七)
○晦日屎物延賣の仕拂を滯ることなかるべきを令す。(八八八)

閏四月

○二日今明年諸士の半知を借上ぐべきことを令す。(八八八)
○六日大聖寺侯前田利極歸邑の途金澤城に登る。(八九一)
○六日前田齊泰借知を行ふを以て各自儉約を勵むべきことを諭す。(八九二)
○八日江戸に於いて御貸小屋に在る者の心得を告ぐ。(八九四)
○九日能登の幕府御預領巡見の使金澤に達す。(八九五)
○十一日幕府の巡見上使金澤に着す。(八九六)
○十二日幕府の巡見上使金澤より出發す。(九〇〇)
○十九日前田齊泰、江戸邸御廣式の費用を節約すべきことを命ぜしむ。(九〇一)
○二十日前田齊泰學校に臨む。(九〇二)
○廿三日前田齊泰乘馬により石川郡白山比咩神社に詣づ。(九〇三)
○廿八日江戸邸の御廣式女中に麁服着用を命ず。(九〇四)
○前田慶寧に附屬する年寄女中岸尾の擧措に就いて議す。(九〇五)
○領外及び領内に搬出する産物の口錢取立方を改定す。(九〇七)
○竹澤並びに蓮池御庭の支配を御次に屬せしむ。(九〇九)
○諸郡の垣根及び畦畔に於ける蔭樹伐採を命ず。(九〇九)
○改作所に於いて山方難澁の百姓を人力不足の耕作地に移さんことを議す。(九一〇)

五月

○二日前田齊泰の生母榮操院白山比咩神社に詣づ。(九一三)
○七日前田齊泰乘馬を試む。(九一三)
○十三日近藤忠之丞、山本孫三郎を討ちて父の仇を報ず。(九一三)
○十八日金銀を用ひたる器具は今年限り賣買すべからざる幕令を傳ふ。(九二一)

○廿二日前田齊泰、奧村丹後守に學制修補の事務を總裁すべきことを命ず。（九二三）
○廿二日浪人・百姓・町人等の所有する鐵炮を鋳上すべきことを命ず。（九二四）
○廿四日諸士の遺書を簡易に認むべきことを告ぐ。（九二六）
○領國の產物をその地の役人に依賴して購入することを禁ず。（九二六）
○火災の際手鎌を携ふることを禁ず。（九二七）
○石川郡鶴來石浦屋茂助調達金の加入を辭したるを以て特に儉約を命ぜらる。（九二八）

六月

○二日前田齊泰の子純六郞の逝去を公表す。（九二九）
○四日氣候順を失するを以てこの日以後祈禱を行はしむ。（九三〇）
○廿三日前田齊泰學校に臨む。（九三一）
○前田齊泰百姓の風俗に關する心得を諭す。（九三二）
○百姓の田高を多く所有するものゝ心得を諭す。（九三三）

七月

○二日前田齊泰の子利順名を喬松丸と改む。（九三五）
○六日前田齊泰學校に臨む。（九三六）
○六日篠原監物の家來安田與吉の子孫作人を害して己も殺さる。（九三七）
○蔭樹伐採の際濫に七木に觸るゝを禁ず。（九三七）
○十八日川上芝居の興行を禁止し、次いでその建物を毀ちて東本願寺末寺に寄進す。（九三八）
○十八日前田齊廣夫人の歸國後に於ける駒込邸の管理に就いて定む。（九四〇）
○廿一日前田齊泰學校に臨む。（九四二）
○廿二日百歲以上の高齡者に金品を下賜す。（九四二）
○晦日御郡方惣年寄等に對し勸農に關する去年の令を勵行すべきことを命ず。（九四五）
○御郡方惣年寄等の遊惰奢侈を戒む。（九四八）
○非人小屋に死者多きを以て恤養せしむ。（九四八）

八月

○二日前田齊泰學校に臨む。（九四八）
○四日前田齊廣夫人江戶を發し歸國の途に就く。（九四九）
○十二日百姓の租納皆濟以前に新穀を買入とすることを禁ず。（九五〇）
○十七日租米の上納を二番皆濟する十村組も亦一番皆濟同樣に賞賜すべきことを告ぐ。（九五〇）
○二十日瀧之間の月次經書講釋は自今學校助教をして之に當らしむ。（九五一）
○廿二日前田齊廣夫人金澤に着し金谷御屋敷に入る。（九五二）
○廿三日親作の收得する用米を減額する件に關して告ぐ。（九五六）

○廿四日前田齊廣夫人の住する金谷御屋敷を金谷御殿と稱せしむ。(九五七)
○前田齊泰、獄中死者多きを以て居所を修繕し食事の改善を命ず。(九五八)

九月

○朔日前田齊泰、齊廣夫人を招請す。(九五八)
○八日先に幕府より贈られたる綿羊を越中屋紋次郎に與へて飼育せしむ。(九五九)
○十二日大聖寺侯前田利極卒す。(九六〇)
○十四日前田齊泰、奥村故河内守の編纂に係る袖裏雜記を徵す。(九六一)
○廿六日錢相場騰貴したるを以て給金の渡方に就いて馬廻頭より申請す。(九六二)
○廿九日救小屋の增設計畫を定む。(九六二)
○年寄中より諸士の風俗に關する心得の細目を頭役に告ぐ。(九六三)
○村々廻方藤内に稻を支給し又は役田を分かつの慣習を禁ず。(九六六)
○數人の親作を有する場合に於いて小作たる者の用米算勘の法を定む。(九六七)
○困窮の爲離散流浪する者を本籍に召還して生業に復せしむべきことを命ず。(九六九)

十月

○三日當年の作躰佳良ならざるを以て收納米の檢査方法に就いて稟請す。(九七〇)
○四日大聖寺侯前田利極の喪を發す。(九七一)
○四日前田齊泰、大小將横目に善行ある者を上申すべきことを告ぐ。(九七二)
○十日作躰不良なるを以て手造酒等の爲濫に米穀を費すを禁ず。(九七三)
○十日百姓の鍬手米徵集の件に關し令す。(九七四)
○十三日前田齊泰學校に臨む。(九七四)
○十八日幕府、前田齊泰の參覲期を明年六月とすべきことを命ず。(九七五)
○十九日作躰佳良ならざるを以て造酒高を三分の一たらしむ。(九七五)
○廿六日大聖寺侯世嗣前田利平江戸に赴かんとして金澤を通過す。(九七六)
○廿七日前田齊泰石川郡宮腰口に放鷹す。(九七七)
○廿九日御横目足輕金子八太夫御算用場御土藏を破らんとして果さず。(九七七)
○薩摩芋の口錢を除くべきことを告ぐ。(九七九)
○能登口郡の細民の稼として松前に輸出する筵の製織を命ず。(九八〇)

十一月

○九日金澤城御用の間に養民堂の額を揭ぐ。(九八四)
○十一日足輕石田甚之丞孝行を以て賞せらる。(九八四)
○十二日町方に浪人躰の者徘徊し合力を强請するを以て取締を命ず。(九八四)

〇十九日金澤城に準備する武具及び歩・足輕の數を調査す。（九八五）

〇廿五日前田齊泰の明年參覲期を繰上ぐべきことを議す。（九八七）

〇廿五日先に領國の繪圖を調整せる郡奉行以下に賞賜す。（九八八）

〇頭・支配人に諸士の人品才德に關する調査上申を命す。（九八九）

〇田地割の定書を制す。（九八九）

十二月

〇十三日大聖寺侯前田利平の家督相續を命ぜられたる報金澤に達す。（九九三）

〇二十日御細工奉行淺井源右衞門その家作を美にするを以て役儀を除かる。（九九四）

〇晦日宮腰の足輕堀内兵次孝行を以て賞せらる。（九九七）

就業　侯爵前田家囑託　日置謙

昭和十六年八月二十一日印刷
昭和十六年八月二十五日發行

（非賣品）

東京市目黒區駒場町八百六十一番地
著作者　侯爵前田家編輯部

東京市淀橋區東大久保町二丁目三百十七番地
發行者　石黒文吉

石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
印刷者　高橋覺吉

石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
印刷所　明治印刷株式會社



